

信州大学審査学位論文

棟持柱構造をもつ建築遺構に関する実証的研究

2013年3月

滝澤 秀人



# 棟持柱構造をもつ建築遺構に関する実証的研究

## 目次

第1章 序論	1
1 研究の目的	3
2 本研究の位置	3
3 研究の対象と方法	8
4 論文の構成	9
第2章 近世社寺建築調査報告書集成にみえる棟持柱をもつ建築遺構の特質	13
1 研究の目的	15
2 研究の対象と方法	16
3 『近世社寺建築調査報告書集成』にみえる棟持柱をもつ建築遺構	17
3-1 門（四脚門、八脚門、切妻造段違、棟門、高麗門、平唐門）	
3-1-1 四脚門	
3-1-2 八脚門	
3-1-3 切妻造段違	
3-1-4 棟門、高麗門、平唐門	
3-2 神社本殿	
3-2-1 神明造	
3-2-2 大社造	
3-3 覆屋	
3-4 拝殿	
3-5 沖縄の信仰に関する建造物	
4 小括	28
第3章 八脚門にみえる棟持柱の建築的意義	37
1 研究の目的	39
2 研究の対象と方法	40
3 棟持柱構造の八脚門	42
3-1 金井加里神社随神門	

3-2	福蔵院山門	
3-3	長谷寺山門	
4	民家にみえる棟持柱の建築的意義	46
4-1	切妻小規模建造物	
4-2	切妻大規模建造物	
4-3	寄棟大規模建造物と入母屋大規模建造物	
5	八脚門にみえる棟持柱の建築的意義	52
5-1	平面にみる棟持柱の建築的意義	
5-2	断面にみる棟持柱の建築的意義	
5-3	社寺と民家の小規模建造物にみる建築技術の差異	
6	小括	55
第4章	笛吹川流域の民家	
	—四建ないしウダツ造に至る掘立棟持柱構造からの展開—	63
1	研究の目的と方法	65
2	笛吹川流域の民家	66
2-1	調査の概要	
2-2	四建とウダツ造	
2-3	棟持柱構造と楣梁構えの双方を併せ持つ架構	
2-4	棟持柱構造から四建ないしウダツ造へ	
2-5	笛吹川流域の民家にみる小規模建造物の形態	
2-6	掘立棟持柱構造からの展開	
3	家格の関係 —笛吹川流域の場合—	78
4	小括	79
第5章	ウダツと大黒柱	
	—切妻民家の中央柱列における棟持柱の建築的差異—	87
1	研究の目的と方法	89
2	用語による考察	91
2-1	ウダツ、ウダチ、八方ウダツ	
2-2	ウダツバシラ、ウダチバシラ	
2-3	ダイコクバシラ	
2-4	ナカバシラ、ミバシラ、テイシュバシラ、ウシモチバシラ	
3	建築遺構にみるウダツと大黒柱	94
3-1	笛吹川流域の民家	



3-2	平面にみるウダツと大黒柱	
3-3	ウダツから大黒柱へ	
3-4	棟持柱構造と軸部・小屋組構造にみる大黒柱	
3-5	ウダツと大黒柱の差異	
4	町屋にみるウダツと大黒柱	101
5	小規模建造物にみるウダツ	102
6	小括	103
第6章	結論	111
	参考文献一覧	119
資料編		127
1.0	論文編	129
1.1	民家の棟持柱と社寺の棟持柱	131
1.2	土台を持つ棟持柱構造の変遷	141
2.0	建造物実測調査編	147
2.1	長野市浅川流域の小規模建造物実測調査（平成15年度）	149
2.2	山梨県笛吹川流域の建造物実測調査 第1期（平成15年度）	151
2.2.1	図面および実測者、作成者一覧	
2.2.2	実測した建造物の分布	
2.2.3	実測図面	
2.2.4	ヒアリング	
2.3	山梨県笛吹川流域の建造物実測調査 第2期 （平成22年度～平成23年度）	241
2.3.1	図面および実測者、作成者一覧	
2.3.2	実測した建造物の分布	
2.3.3	実測図面	
2.3.4	ヒアリング	



# 第 1 章

## 序 論



# 第1章 序論

## 1 研究の目的

一般に、日本の木造建築は、柱と梁によって囲われた軸部と、その上によって屋根を支える小屋組で構成される。また、この軸部と小屋組の関係によって、間に梁などの水平材が入ることによって分離するかたちと、小屋組まで柱がのびて双方が一体となるかたちに分けられる。まず、軸部と小屋組が分離するかたちは、一般に軸部・小屋組構造とされ、その代表例にオダチ組や扱首組といった小屋組をもつ形式がある。他方、軸部と小屋組が分離しないかたちの代表例に棟持柱構造がある。この形式は、地上から立ち上がった柱が途中で梁によって分断されずに棟木までのびている形式で、軸部と小屋組が分離しない。従来の研究は、後者の軸部と小屋組が分離しない棟持柱構造について、日本建築史の少数派であるとみなしてきた。その理由の一つに、そもそも従来の研究が、木造建築を架構全体で捉える視点に欠けていた点あげられる。それゆえ、軸部・小屋組構造との比較において、棟持柱構造は、これまでの建築史研究において積極的に考察されることがなく、その建築的特質がほとんど明らかにされてこなかった。つまり、日本の木造建築のなかで棟持柱構造は、その建築史的な位置づけが不明瞭な状況にある。

以上をふまえ、本研究は、軸部と小屋組の分離・非分離の観点から、棟持柱構造の建築的特質を把握する作業を通じて、その建築史的な位置を明らかにすることを目的とする。

## 2 本研究の位置

軸部と小屋組の分離・非分離の観点から、木造建築の架構を捉えたものに、玉井哲雄の『建築の歴史』におけるつぎの記述がある。すなわち、

日本の木造建築は通常、軸部と小屋組から構成される。(中略) 寺院・神社建築の場合はちょうどこの軸部と小屋組の境である柱上の桁と梁が交差する部分に、斗と肘木で構成される組物という構造的にも装飾としても重要な部材を入れるのに対して、民家建築はもちろん、宮殿のようなものでも住宅系の建築ではほとんど組物を用いないという相違があるが、それでも軸部と小屋組という分離した二つの部分からなる軸部・小屋組構造であるという原則は全く共通である。<sup>注1)</sup>

しかしながら、軸部と小屋組が分離しない棟持柱構造は、日本各地の中規模ないし大規模な民家に確認でき、とりわけ、梁行2間程度の小規模建造物においては、その存在を多数確認できる。したがって、民家を例にとっても、玉井のいう「軸部・小屋組構造であるという原則」という指摘はあてはまらない。こうした知見は、本研究に先行して進められてきた、棟持柱祖形論に関する一連の研究のなかでえられたものである<sup>注2)</sup>。すなわち、棟持柱祖形論に関する代表的既往研究としては、「京都の町屋における軸部と小屋組」

(1998年11月初出)<sup>4)</sup>、「信州の茅葺民家にみる棟束の建築的意義」(2000年6月初出)<sup>5)</sup>、「掘立から礎へ—中世後期から近世にいたる棟持柱構造からの展開—」(2000年8月初出)<sup>6)</sup>、「棟持柱構造から軸部・小屋組構造への転換過程」(2002年6月初出)<sup>7)</sup>、「タテノボセと土台からみた小規模建造物」(2005年5月初出)<sup>8)</sup>、「棟持柱構造と軸部・小屋組構造を併せ持つ切妻小規模建造物」(2006年5月初出)<sup>9)</sup>がある。本研究では、まず、これらの既往研究の成果を整理し、建築史研究における本研究の位置を明確にする。

#### 畑智弥・土本俊和「京都の町屋における軸部と小屋組」(1998年11月初出)

本稿は、棟持柱祖形論に関わる最初期の論考である。京都の町屋の架構を軸部と小屋組の分離・非分離の観点から考察するために、研究史料として、元治の大火以前の史料である「田中吉太郎家文書」と、元治の大火以降の史料である遺構図面を用いた。また、土間側妻面、床上側妻面、土間・床上境の3つの柱筋に着目して考察を行った。その結果、土間側妻面については、近世から明治以降にいたるまで一環して、柱が半間ごとに入り、それらが屋根面の水平材を直接支えている状況がみられた。対して、床上側妻面については、近世の時点では、柱が半間ごとに入っていたものの、明治以降になると、技術力の向上とともに部屋境などの重要な柱以外は柱が省略されていくという傾向がみられた。以上より、本稿では、京都の町屋が、軸部と小屋組が分離しない架構から軸部と小屋組が分離する架構へと変容する際に、柱筋によって大きな変化がある部分と、そうでない部分があることを示した。また、同時に、本稿では、町屋と農家が異なる系譜をもつことを示唆している。

#### 遠藤由樹・土本俊和・吉澤政己・和田勝・西山マルセーロ・笹川明「信州の茅葺民家にみる棟束の建築的意義」(2000年6月初出)

信州の茅葺民家は、一般に、軸部・小屋組構造の扱首組とされる。また、その小屋組のなかには、棟束とよばれる垂直材があり、これが扱首組の交叉部を介して棟木を支えている。扱首組は、梁行方向の梁と2本の斜材によって安定した三角形を形成するため、トラス構造と同様の働きをもつ。したがって、信州の扱首組の茅葺民家にみえる棟束は、構造的には unnecessary な部材といえる。本稿では、既往研究の実測図面から断面図を抽出し、信州の茅葺民家にみえる棟束の建築的意義を複数の観点から考察した。その結果、現在扱首組とされる信州の茅葺民家には、それに先行する構造として棟持柱構造が想定された。すなわち、信州の茅葺民家は、中世から近世にかけて、棟持柱構造から扱首組へと変容した。このとき、かつて棟持柱構造のなかにあった棟持柱は、軸部と小屋組が分離した後も棟束として小屋組の中に残った、と考えられた。

#### 土本俊和・遠藤由樹「掘立から礎へ—中世後期から近世にいたる棟持柱構造からの展開—」

(2000年8月初出)

本稿では、はじめに、永井規男が提示した北山型の民家に関する説明を参照した<sup>註3)</sup>。すなわち、永井は、棟束ないし母屋束をもち、かつ、棟束の中間と母屋束の頭をつなぐ梁で構成された「おだち・とりい」組みの石田家住宅と、これとは異なったややふるい小屋組形式として、母屋の高さまで柱を立ち上げる木戸家住宅を参照し、これよりふるい架構形式として、「中柱が棟持柱となって直接棟木を支承する構造が存在したと推定できる」とした。さらに、「棟持柱を中心にして梁行に対称形に一週間隔で柱をたてるとすれば、二間または四間という梁行間が定まってくる」とし、さらにつづけて、「近世に入って一般に家屋規模が大きくなってくると、それに応じて家のかたちが高くなり、棟持柱構造にすると相当に長い柱が必要になる。これを避けて、できるだけ短い柱で済むように、まず木戸家のような構造が考えられ、ついで「おだち・とりい」組みへと発展したのではないかと推定される」とした。

以上の指摘を受けて、本稿では、この論点が北山型にかぎらず、京都の町屋と茅葺民家にもあてはまるとし、棟持柱構造を祖形とみなす論点として棟持柱祖形論を提唱した。そして、本稿は、棟持柱と棟束の関係を言葉の用例から考察するとともに、建築遺構図面等を用いて、棟木の納まり方や柱の脚部の構法に着目して棟持柱祖形論の妥当性を検証した。とりわけ、掘立と礎という柱の脚部の差異を構造的に検証することで、上部構造である棟持柱構造と軸部・小屋組構造の差異が明確になり、棟持柱構造から軸部・小屋組構造へ変容する過程が建築構造的に明らかにされた。また、本稿では、日本の民家の支配的源流に梁行2間の掘立棟持柱構造を想定するに至った。

内田健一・土本俊和「棟持柱構造から軸部・小屋組構造への転換過程」(2002年6月初出)

本稿では、全国で実施された民家調査の結果をふまえ、棟持柱構造の民家を全国規模で捕捉した。その結果、棟持柱構造の民家は、一部の地域のみにもみられる限定的な形式ではなく、広く全国的にもみられる形式であることが明らかになった。さらに、棟持柱構造の多くが山梨県内に集中しているという傾向もみられた。また、捕捉された民家の構造を一断面ではなく架構全体で捉えた結果、それらの大半が、一つの架構の中で棟持柱構造と軸部・小屋組構造の双方を併せ持っていることが判明した。さらにくわえて、捕捉された民家のなかには、純粋な棟持柱構造ではないものの、柱の上に束を立てて棟木を支える事例や、柱の上部が曲がりながら棟木を支えている事例なども確認された。

こうした棟持柱構造の存在をふまえて、本稿では、棟持柱構造から軸部・小屋組構造へ展開する過程を明らかにした。

早川慶春・土本俊和・鶴飼浩平・梅干野成央「タテノボセと土台からみた小規模建造物」(2005年5月初出)

信州飯山地方は、長野県北部に位置する豪雪地帯で、ここに棟持柱構造の小規模建造物が数多く遺存している。この小規模建造物の多くは、主屋と別棟でたてられた物置小屋であり、本稿では、計 24 棟の建築遺構を捕捉した。また、この地域の小規模建造物には、棟持柱構造のほかに、軸部・小屋組構造のものもみられた。軸部・小屋組構造の場合、小屋組のみが外側に傾いてしまう事例がみられた。これは、信州飯山地方が豪雪地帯であるために、雪の重みに抵抗できずに傾いてしまったものであった。他方、棟持柱構造の小規模建造物においては、棟持柱が軸部と小屋組を一体にしているため、小屋組が傾いてしまうような事例はみられなかった。また、タテノボセをもつ小規模建造物の特徴として、棟持柱の脚部が土台敷きであった。以上を受けて、本稿では、この棟持柱と土台という組み合わせが、軸部と小屋組を一体のパネルのようにする作用があるとし、棟持柱が積雪荷重などの外力に対する構造的有効性をもつことを指摘した。

#### 鳥崎広史・土本俊和「棟持柱構造と軸部・小屋組構造を併せ持つ切妻小規模建造物」（2006年5月初出）

内田・土本「棟持柱構造から軸部・小屋組構造への転換過程」（2002.6）では、棟持柱構造と軸部・小屋組構造を併せ持つ事例を多数捕捉し、それらを棟持柱構造から軸部・小屋組構造へ展開する過程における過渡的な形式と位置づけた。とはいえ、梁行2間程度の小規模建造物は、民家のような大規模建造物とは異なり、容易に棟持柱構造から軸部・小屋組構造へと移行することができることから、本稿では、棟持柱構造と軸部・小屋組構造を併せ持つ姿に、積極的な存在理由を見出し得るのではないかと想定した。また、本稿では、この構造の存在理由を明らかにする上で、棟持柱の構造的に着目して検証を行った。とりわけ、信州と甲州においては、実際に一方の妻壁が棟持柱構造をなし、もう一方の妻壁が軸部・小屋組構造をなす事例も捕捉した。これらについて、棟持柱の建築的意義を構造的観点から検証した結果、切妻小規模建造物の架構が安定をえるためには、少なくとも一本の棟持柱が残されていることが重要である、とした。

以上より、本稿では、棟持柱構造と軸部・小屋組構造を併せ持つ構造について、軸部と小屋組が分離する過程であらわれたものの、もはや過渡的な姿ではない、合理的な姿をなす一つの架構形式として存在するに至った、とした。

以上をまとめると、これまでの棟持柱祖形論に関する既往研究は、主に民家を研究対象に定め、まず棟持柱祖形論を提唱し（掘立から礎へ）、つぎに全国規模で棟持柱構造の民家を捉え（棟持柱構造から軸部・小屋組構造への転換過程）、さらに切妻小規模建造物を対象に、棟持柱構造と軸部・小屋組構造を併せ持つ事例を位置づけた（棟持柱構造と軸部・小屋組構造を併せ持つ切妻小規模建造物）。また、具体的なフィールドとしては、京都（京都の町屋にみる軸部と小屋組）、信州全域（信州の茅葺民家にみる棟束の建築的意義）、信



州飯山地方（タテノボセと土台からみた小規模建造物）を対象に、それぞれ、建築遺構を中心とした研究成果を収めた。

しかしながら、これまでの棟持柱祖形論に関する既往研究に、棟持柱構造が豊富に存在することで著名な山梨県を対象としたものがなかった。この地域は、以前より、棟持柱構造の民家がとくに密集することで全国的にも注目を集めていた。ふるくは、今和次郎のスケッチに棟持柱構造の民家がみられ<sup>注4)</sup>、石原憲治の研究にウダツや八方ウダツなどの名称とともにその特徴が記されていた<sup>注5)</sup>。また、本格的な民家調査としては、関口欣也が、とくに棟持柱構造の民家が集中する牧丘町周辺を実測調査し、「甲府盆地東部の近世民家」(1963)<sup>17)</sup>を発表した。さらに、この研究成果をふまえて、のちに、全県を対象とした『山梨県の民家』(1982)<sup>18)</sup>がまとめられた。くわえて、内田・土本「棟持柱構造から軸部・小屋組構造への転換過程」において、全国規模で棟持柱構造の民家を捕捉した結果、その約半数が山梨県内の民家であることが判明している<sup>注6)</sup>。以上より、棟持柱構造に関する研究を行う上で、山梨県は、まずもって研究対象とされるべき、きわめて重要なフィールドであると考えられる。

一般に、日本の木造建築は、社寺と民家に大別される。これまでの棟持柱祖形論に関する一連の研究は、主に民家を対象としてきた。また、民家における棟持柱構造は、梁行2間の小規模建造物から、梁行4間の堂々とした民家に至るまで幅広く確認された。さらに、民家に至っては、京都の町屋などの屋根が緩勾配のものから山梨県の切妻茅葺民家のような矩勾配のものまで確認された。くわえて、棟持柱構造の茅葺民家のなかには、屋根が切妻をなすものばかりでなく、寄棟や入母屋のものもみられた<sup>注7)</sup>。このように、民家における棟持柱構造は、その規模も形態もきわめて多様である。

他方、社寺建築における棟持柱構造は、神社本殿に、伊勢の神明造および出雲の大社造がある。しかしながら、そのほかの神社本殿や寺院本堂に、棟持柱構造をなす建築遺構が報告された事例は管見のかぎりなく、社寺建築のなかで棟持柱構造は、きわめて限定的な構造形式とされた。このため、社寺建築で棟持柱構造を対象とした研究は、伊勢や出雲を対象とした個別の研究が多く、軸部と小屋組の分離・非分離の観点から棟持柱構造の位置づけを行っている研究は管見のかぎりみられない。

とはいえ、社寺建築においても、四脚門や八脚門といった小規模建造物をみると、棟持柱構造の建築遺構が確認できる。しかしながら、これらの小規模建造物は、神社本殿や寺院本堂との比較において、これまで十分な研究が行われているとは言い難い。したがって、こうした過去にあまり顧みられなかった建築遺構も含めて、軸部と小屋組の分離・非分離の観点から棟持柱構造を位置づける必要がある。

以上をふまえ、棟持柱祖形論に関する一連の研究の延長上にある本研究がなすべき課題は、二つある。一つは、これまでの棟持柱構造に関する研究を発展させ、とくに棟持柱構造の民家が集中する山梨県を対象とした研究を行うことである。もうひとつは、研究対象

を社寺建築にまで拡大させ、社寺建築における棟持柱構造の建築史的な位置づけを行うことである。

### 3 研究の対象と方法

本研究が目指すのは、日本の木造建築全体を見通した上で、軸部と小屋組の分離・非分離の観点から棟持柱構造を位置づけることである。日本の木造建築は、社寺建築と民家建築に大別されることから、本研究は、社寺建築と民家建築の双方を研究対象にする。とりわけ、社寺建築を研究対象に含めるところに、従来の研究にない本研究の特色がある。

そもそも従来の研究は、社寺と民家を別々に論じることが多かった。これは、従来の研究が、社寺建築と民家建築の双方を含めた統一的研究方法をもちあわせていなかった点が大い、と考えられる。この点、これまでの棟持柱祖形論に関する一連の研究が行ってきた研究方法は、木造建築を軸部と小屋組の分離・非分離の関係で捉えるため、社寺と民家にかかわらず同一の視点で木造建築を評価することが可能となってくる。

棟持柱構造を位置づけるために、本研究では、2段階の研究を行う。まず一つは、日本の木造建築のなかで、棟持柱構造の建築遺構が一体どのくらいあるのか、または棟持柱構造の建築遺構に地域的な特質があるのか、ないのか等を把握するために、全国規模で棟持柱構造を捕捉する。これは、全国を対象とした作業であるため、史料として、過去に実施された建築遺構調査の結果をまとめた調査報告書を用いる。本研究では、これを社寺と民家の双方について行っていくが、民家については、すでに、内田・土本「棟持柱構造から軸部・小屋組構造への展開過程」でこの研究を実施済みであるため、本研究では、社寺建築を対象に、棟持柱構造を全国規模で把握する作業を行う。

もうひとつの研究は、全国規模の棟持柱構造の把握をふまえて、より詳細に棟持柱構造の建築的特質を明らかにすることである。この目的を達成するためには、現存する建築遺構にもとづいた実証的研究が有効である。よって、本研究では、棟持柱構造の建築遺構を対象とした実測調査を行う。この方法の利点は、より詳細に棟持柱構造をもつ建築遺構を分析できる点にある。

また、分析には、可能なかぎり多くの建築遺構を実見するとともに、実測調査を行う必要がある。そのため、棟持柱構造の建築遺構が集中して存在する地域を研究対象に定める。民家については、先述のとおり、内田・土本「棟持柱構造から軸部・小屋組構造への展開過程」の研究成果をふまえて山梨県を対象とする。また、山梨県の中でも、とくに棟持柱構造の民家が豊富に残る地域は、山梨県北東部から南西部にかけて流れる笛吹川流域であるため、本研究では、この地域を研究フィールドに定め、棟持柱構造の建築遺構を捕捉する。

他方、社寺建築については、神明造や大社造を別として、四脚門や八脚門に目を向けると、恵林寺四脚門や向嶽寺山門などの四脚門に棟持柱構造をもつものがある。これらは、

一般に、禅宗様四脚門とされ、神奈川県や山梨県などの禅宗建築の拠点にとくに多いとされる。また、八脚門で棟持柱構造をもつ建築遺構は、浅草寺二天門（東京都台東区）、観音寺仁王門（東京都青梅市）、金井加里神社随神門（山梨県甲州市）、神部神社随神門（山梨県甲州市）があり、東京都から山梨県にかけて確認される。つまり、社寺建築においても、棟持柱構造に関わるフィールドとして山梨県が重要である。また、棟持柱構造を木造建築という広く捉えるうえでも、社寺と民家の双方を同じフィールドで検証する方法が有効である。

以上より、本研究では、山梨県を主な研究フィールドに設定し、この地域における社寺と民家の棟持柱構造を捕捉する作業を通じて、棟持柱構造の建築的特質を明らかにする。

#### 4 論文の構成

本論文は、前半部分で社寺建築について論じ、後半部分で民家建築について論じる構成である。

社寺建築に関する論考は、全国規模の建築遺構を対象とする第2章と山梨県笛吹川流域の建築遺構を対象とする第3章で構成される。

まず、第2章「近世社寺建築調査報告書集成にみえる棟持柱をもつ建築遺構の特質」では、社寺建築を対象に棟持柱構造の建築遺構を全国規模で捕捉し、そのなかからみえてくる棟持柱をもつ建築遺構の特質を明らかにする。

また、第3章「八脚門にみえる棟持柱の建築的意義」では、第2章の研究成果をふまえ、山梨県内の八脚門を対象とした棟持柱構造をもつ建築遺構の実測調査を行い、八脚門における棟持柱の建築的意義を検証する。

つづいて、民家に関する論考としては、内田・土本「棟持柱構造から軸部・小屋組構造への転換過程」において、すでに全国規模の民家を対象とした研究を完了しているため、本研究では、山梨県笛吹川流域の民家を対象とした研究を重点的に実施することとし、その建築的特質を第4章と第5章で検証する。

まず、第4章「笛吹川流域の民家—四建ないしウダツ造に至る掘立棟持柱構造からの展開—」では、山梨県笛吹川流域にみられる四建とウダツ造という2つの建築構造に着目し、この地域の民家の変遷を、同じくこの地域に存在する棟持柱構造との関係も含めて検証する。

つぎに、第5章「ウダツと大黒柱—切妻民家の中央柱列における棟持柱の建築的差異—」では、ともに棟持柱との関係が指摘されるウダツと大黒柱について、既往研究および笛吹川流域における建築遺構調査の結果をふまえ、用語と建築部材の対応関係を整理する作業を行い、双方の建築的差異を検証する。

最後に、第6章「結論」では、各章でえられた研究成果を総括する。

## 【初出一覧】

本論文の各章は、つぎの論文を基に改訂増補したものである。そのほかの章は書き下ろしである。

### 第2章 近世社寺建築調査報告書集成にみえる棟持柱をもつ建築遺構の特質

滝澤秀人・土本俊和「近世社寺建築調査報告書集成にみえる棟持柱をもつ建築遺構の特質」『日本建築学会計画系論文集』682、2841-2850頁、2012年12月

### 第4章 笛吹川流域の民家—四建ないしウダツ造に至る掘立棟持柱構造からの展開—

滝澤秀人・島崎広史・土本俊和・遠藤由樹「笛吹川流域の民家—四建ないしウダツ造に至る掘立棟持柱構造からの展開—」（『日本建築学会計画系論文集』604、167-174頁、2006）、初出。のちに、大幅に改訂増補されて、「笛吹川流域の民家—四建ないしウダツ造に至る掘立棟持柱構造からの展開—」（土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、266-283頁、2011）に掲載。本論文は、改訂増補される前の日本建築学会計画系論文集に掲載された当時のものを基本に、誤字脱字の修正や書式を本論文にあわせるなど、最小限の改定にとどめた。なお、研究全体の構成から、補足的な説明を必要とする場合は、注ないし補記に記述することとし、本文の内容は、ほぼそのままのものを掲載した。

### 第5章 ウダツと大黒柱—切妻民家の中央柱列における棟持柱の建築的差異—

滝澤秀人・島崎広史・土本俊和・遠藤由樹「ウダツと大黒柱—切妻民家の中央柱列における棟持柱の建築的差異—」（『日本建築学会計画系論文集』604、151-158頁、2006）、初出。のちに、大幅に改訂増補されて、「ウダツと大黒柱—切妻民家の中央柱列における棟持柱の建築的差異—」（土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、249-265頁、2011）に掲載。本論文は、改訂増補される前の日本建築学会計画系論文集に掲載された当時のものを基本に、誤字脱字の修正や書式を本論文にあわせるなど、最小限の改定にとどめた。なお、研究全体の構成から、補足的な説明を必要とする場合は、注ないし補記に記述することとし、本文の内容は、ほぼそのままのものを掲載した。

## 【注】

注1) 参考文献1) 366-367頁引用

注2) 参考文献2) 参照

注3) 参考文献10) 参照

注4) 今和次郎の代表的著作に、参考文献11)、参考文献12)、参考文献13)、参考文献14)、参考文献15)がある。

注 5) 参考文献 16) 参照

注 6) 参考文献 7) 参照

注 7) 参考文献 3) に掲載されている論考を参照されたい。

## 【参考文献】

- 1) 玉井哲雄「日本建築の構造」(藤井恵介・玉井哲雄『建築の歴史』中央公論社、303-321 頁、1995)
- 2) 土本俊和編『中世後期から近世に至る掘立棟持柱構造からの展開過程に関する形態史的研究 2001～2003 年度 科学研究費補助金 基盤研究 C (2) 研究成果報告書』(研究代表者土本俊和、2005)
- 3) 土本俊和編著『棟持柱祖形論』(中央公論美術出版、2011)
- 4) 畑智弥・土本俊和「京都の町屋における軸部と小屋組」(『日本建築学会計画系論文集』第 513 号、259-266 頁、1998) 初出、のちに、同「各論 A 京都 1 京都のマチャにおける軸部と小屋組」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、118-133 頁、2011)
- 5) 遠藤由樹・土本俊和・吉澤政己・和田勝・西山マルセーロ・笹川明「信州の茅葺民家にみる棟束の建築的意義」(『日本建築学会計画系論文集』第 532 号、215-222 頁、2000) 初出、のちに、同「各論 B 信州 1 信州の茅葺民家にみる棟束の建築的意義」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、195-211 頁、2011)
- 6) 土本俊和・遠藤由樹「掘立から礎へ—中世後期から近世にいたる棟持柱構造からの展開—」(『日本建築学会計画系論文集』第 534 号、263-270 頁、2000) 初出、のちに、同「総論 4 掘立から礎へ—中世後期から近世にいたる棟持柱構造からの展開—」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、46-63 頁、2011)
- 7) 内田健一・土本俊和「棟持柱構造から軸部・小屋組構造への転換過程」(『日本建築学会計画系論文集』第 556 号、313-320 頁、2002) 初出、のちに、同「総論 6 棟持柱構造から軸部・小屋組構造への転換過程」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、72-86 頁、2011)
- 8) 早川慶春・土本俊和・鶴飼浩平・梅干野成央「タテノボセと土台からみた小規模建造物」(『日本建築学会計画系論文集』第 616 号、167-174 頁、2007) 初出、のちに、同「各論 B 信州 5 タテノボセと土台からみた小規模建造物」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、221-236 頁、2011)
- 9) 島崎広史・土本俊和「棟持柱構造と軸部・小屋組構造を併せ持つ切妻小規模建造物」(『日本建築学会計画系論文集』第 603 号、175-182 頁、2006) 初出、のちに、同「総論 7 棟持柱構造と軸部・小屋組構造を併せ持つ切妻小規模建造物」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、87-103 頁、2011)
- 10) 永井規男「北山型」(京都府教育庁文化財保護課編『京都府の民家 調査報告 第七冊—昭和 48 年度京都府民家緊急調査報告—』京都府教育委員会、9-13 頁、1975)



- 11) 今和次郎『日本の民家』（鈴木書店、1922）
- 12) 今和次郎『民家論 今和次郎集 第2巻』（ドメス出版、1971）
- 13) 今和次郎『民家採集 今和次郎集 第3巻』（ドメス出版、1971）
- 14) 今和次郎『住居論 今和次郎集 第4巻』（ドメス出版、1971）
- 15) 今和次郎著・竹内芳太郎編『見聞野帖』（柏書房、1986）
- 16) 石原憲治『日本農民建築 第1輯—第8輯』（南洋堂書店、1972-1973）
- 17) 関口欣也「甲府盆地東部の近世民家」（『日本建築学会論文報告集』第86号、48-59頁、1963）
- 18) 関口欣也執筆・山梨県教育委員会編『山梨県の民家』（第一法規出版、1982）

## 第2章

### 近世社寺建築調査報告書集成にみえる棟持柱をもつ 建築遺構の特質





## 第2章 近世社寺建築調査報告書集成にみえる棟持柱をもつ建築遺構の特質

### 1 研究の目的

日本の建築は、社寺建築<sup>注1)</sup>と民家建築に大別される。これらの建築について、玉井哲雄は、軸部と小屋組の分離・非分離の観点から、軸部と小屋組が分離した「軸部・小屋組構造であるという原則は全く共通である」<sup>注2)</sup>と指摘した。しかし、民家建築については、土本俊和編著『棟持柱祖形論』<sup>注3)</sup>に収録された一連の論考に、現在まで小屋といった梁行2間の小規模なものから梁行4間に及ぶ民家に至るまで、軸部と小屋組が分離しない棟持柱をもつ建築遺構が多数報告されており、軸部・小屋組構造が原則とはいきれない。

他方、社寺建築においても、棟持柱をもつ建築遺構として伊勢や仁科に代表される神明造および出雲に代表される大社造がある。とはいえ、これら神社本殿を特殊な事例として捉えた場合、その他の神社本殿や寺院本堂などの社寺建築は、一般に軸部と小屋組が分離した構造であり、棟持柱をもつ事例はみられない。しかし、「棟持柱の外にある事柄」で土本は、四脚門や八脚門などの小規模建造物に棟持柱をもつ建築遺構があることを指摘した<sup>注4)</sup>。まず、棟持柱をもつ四脚門は、岡田英男<sup>注5)</sup>や濱島正士<sup>注6)</sup>によれば、一般に、軸部と小屋組が分離した構造の四脚門が和様とよばれるのに対し、禅宗様と呼称される。本論も、この用例にならい禅宗様四脚門とする。また、その代表的建築遺構は、雲樹寺四脚門(1322)、建仁寺勅使門(鎌倉後期)、楞嚴寺山門(室町中期)、法華経寺四足門(室町後期)、恵林寺四脚門(1606)など、中世から近世初期にかけて確認できる。さらに、棟持柱をもつ八脚門の建築遺構としては、重要文化財指定の浅草寺二天門(1649頃)がある。この建築遺構については、経年による木部の破損や弛緩が著しかったため、平成19年から21年にかけて保存修理工事が実施され、報告書も刊行されている。これを執筆した丸本英司によれば、棟持柱をもつ八脚門は、「禅宗様四脚門では時々見られるが、八脚門では非常に珍しい架構形式」であり、重要文化財では観音寺仁王門(室町後期)の一棟のみである<sup>注7)</sup>。

このように、社寺建築を軸部と小屋組の分離・非分離の関係で捉えたときに、神社本殿における神明造や大社造にくわえ、四脚門や八脚門などの小規模建造物においても中世から近世初期にかけて棟持柱をもつ事例がみられる。したがって、社寺建築においても軸部と小屋組が分離しているとはいきれない。ここで、社寺建築を、軸部と小屋組が分離しているか否かといった観点から再検証する必要がある、と考えられる。

また、玉井が日本建築の構造について、軸部・小屋組構造が原則であると判断した背景には、過去の社寺建築研究が、本殿や本堂などの大規模建造物を対象とすることが多く、四脚門や八脚門などの小規模建造物を積極的に研究対象としてこなかった点あげられる<sup>注8)</sup>。たとえば、関口欣也『中世禅宗様建築の研究』は、禅宗様建築を対象に、平面、構造、

細部など多方面から考察を行っているが、これは主に仏堂を対象としており、四脚門や八脚門などの小規模建造物を扱っていない<sup>注9)</sup>。さらに、近年の社寺建築研究は、そもそも建築架構を積極的に研究対象としておらず、これまで軸部と小屋組の分離・非分離については、研究が不十分である<sup>注10)</sup>。

他方、過去の社寺建築研究の中でも、門を対象をしぼった個別の研究に、棟持柱をもつ建築遺構を扱ったものがある。まず、国京克巳「永平寺隆芳院廟所の四脚門について」は、棟持柱をもつ四脚門の一例を対象に、由緒や建築年代、細部様式について考察しているが、軸部と小屋組の分離・非分離の観点はなく、「禅宗様切妻四脚門」とあるように、これを特殊な建築様式として捉えている<sup>注11)</sup>。また、櫻井敏雄・中西将「日部神社表門と四脚門」では、重要文化財に指定されている四脚門を全国的な規模で捕捉し、「冠木を使用する和様系四脚門」と「本柱が棟までのびる禅宗様系」四脚門との対比の中で、軸部と小屋組の差異に注目しつつも、棟持柱をもつ四脚門を禅宗様という建築様式で捉えるのみで、その考察は、もっぱら組物や唐居敷など細部に関するものである<sup>注12)</sup>。さらに、岡田英男<sup>注13)</sup>や濱島正士<sup>注14)</sup>も、棟持柱をもつ四脚門を禅宗様という建築様式として捉えるのみであるし、八脚門の説明にいたっては、軸部と小屋組の分離・非分離に関する観点はなく、浅草寺二天門のような棟持柱をもつ事例は紹介されていない。そもそも、過去の研究で棟持柱をもつ建築遺構は、神明造や大社造などの一部の神社本殿や禅宗様の四脚門にみられることはあっても、八脚門も含んだそれ以外の建築遺構においては、ほとんど報告されてこなかった<sup>注15)</sup>。

つまり、棟持柱をもつ門を対象とした過去の研究は、つぎのような難点があった。第一に、和様もしくは禅宗様という建築様式の対比で捉えることが多く、軸部と小屋組の分離・非分離についてほとんど無関心でいた。第二に、研究対象を門などの一部の建築に限定していたことにより、広く社寺建築全体の中で軸部と小屋組が分離しない架構を位置づける視点を欠いていた。しかし、社寺建築の中で棟持柱をもつ建築遺構は、神明造、大社造にくわえ、四脚門や八脚門などの小規模建造物にもあり、個別の建築様式の枠組みをこえて存在していることから、社寺建築全体を見通した上で、棟持柱をもつという共通点において再検証されなければならない。とりわけ、過去の研究でほとんど言及されていない棟持柱をもつ八脚門は、棟持柱をもつ建築遺構としてきわめて重要であり、まずもって軸部と小屋組の分離・非分離の観点から位置づけられる必要がある。

以上をふまえ、本論では、棟持柱をもつ建築遺構を全国規模で捕捉し、そのなかからみえてくる棟持柱をもつ建築遺構の特質を精査することによって、社寺建築における棟持柱をもつ建築遺構についての新たな知見をえることを目的とする。

## 2 研究の対象と方法

社寺建築の建築遺構を豊富に掲載した資料に、近世社寺建築を主な対象とした一連の調

査報告書がある。この報告書は、国庫補助事業として、昭和52年度から平成2年度にかけて、近世社寺建築の保存状況を把握する目的で、各都道府県教育委員会が主体となって実施した緊急調査の結果をまとめたものである。また、この報告書は、当時、行政資料として都道府県ごとに報告書が刊行されていたが、近年、これらの個別の報告書が全20巻の『近世社寺建築調査報告書集成』となって東洋書林より刊行された<sup>注16)</sup>。しかし、この報告書を用いて全国規模で社寺建築を調査した例は他になく、そういった意味でもこの報告書は、社寺建築を全国規模で把握するには最も適切な資料である。過去の研究で『近世社寺建築調査報告書集成』を活用したものをみると、都道府県別に言及したものや、報告書の一部を参照したものはあるものの、北海道から沖縄まですべての報告書を見通したものはない<sup>注17)</sup>。棟持柱をもつ建築遺構を全国規模で把握することを目的とする本論では、資料にこれを用いる<sup>注18)</sup>。報告書に掲載された建築遺構は、個々に所見が述べられているとともに、概ね平面図と写真が添付され、なかには断面図を添付するものもある。本論では、この中の写真資料、建築遺構図面、所見から棟持柱をもつことが判断できるもののみを捕捉する。また、本論で扱う棟持柱をもつ建築遺構は、礎石ないし土台から一本の柱で立ち上がって棟木を直接支えるものにくわえ、直接棟木は支えていないものの、棟木直下にある柱が側柱の高さで止まらずに棟木近くまでのびるものも含める。なぜなら、社寺建築には一般に組物があるため、禅宗様四脚門のように、棟木直下の柱は、組物を介して棟木を支えていることが多い。しかし、柱が梁によって分断されずに棟木近くまでのびていることは何ら棟持柱構造とかわらないため、本論では、これらも含め棟持柱をもつ建築遺構として扱う。

以上をふまえ、『近世社寺建築調査報告書集成』より棟持柱をもつ建築遺構を捕捉する。

### 3 『近世社寺建築調査報告書集成』にみえる棟持柱をもつ建築遺構

表1は、捕捉された計129点の棟持柱をもつ建築遺構の一覧である。まず、棟持柱をもつ建築遺構は、徳山大神宮本殿(北海道)からトゥグルお嶽拝殿(沖縄)まで、神奈川県や山梨県など棟持柱をもつ建築遺構が多数みられる県があるものの、ほぼ全国的に分布していることが表1からわかる。また、建築種別で分類すると、門が83点(64.3%)と最も多く、つづいて、神社本殿が35点(27.1%)、それらを囲う覆屋が4点(3.1%)、拝殿が1点(0.8%)となり、さらに沖縄の信仰に関する建造物が6点(4.7%)であった。以下、建築種別ごとに棟持柱をもつ建築遺構について考察する。

#### 3-1 門(四脚門、八脚門、切妻造段違、棟門、高麗門、平唐門)

捕捉された83点の門を建築様式別に分類すると、四脚門が66点(83点中79.5%)と大半を占めていた。また、他の様式では、棟門7点(同8.4%)、高麗門4点(同4.8%)、八脚門3点(同3.6%)、切妻造段違2点(同2.4%)、平唐門が1点(同1.2%)確認された。

表1 『近世社寺建築調査報告書集成』から抽出した棟持柱をもつ社寺建築一覧

番	名称	建築種別	建築様式	都道府県	建築年代	屋根形式	屋根材料	脚部	桁行長	梁行(間)	梁行長	文献
1	徳山大神宮本殿	神社本殿	神明造	北海道	1882	切妻	銅板	不明	2,455	2間	1,980	北海道
2	神明宮本殿	神社本殿	神明造	青森県	19世紀中期	切妻	銅板	礎	6,690	2間	3,360	青森2
3	陸奥国分寺仁王門	門	八脚門	宮城県	1607	入母屋	茅	礎	7,423	2間	4,242	宮城
4	旧大年寺総門	門	高麗門	宮城県	不明	切妻	棧瓦	礎	3,685	—	—	宮城
5	神明社本殿	神社本殿	神明造	秋田県	1809	切妻	銅板	不明	4,288	2間	1,865	秋田
6	六地藏寺四脚門	門	四脚門	茨城県	室町末期	切妻	茅	不明	3,139	2間	3,199	茨城
7	大山寺山門	門	四脚門	茨城県	室町末期	切妻	瓦	不明	2,969	2間	2,545	茨城
8	吉田神社本殿	神社本殿	神明造	茨城県	1685	切妻	銅板	不明	3,393	2間	1,757	茨城
9	弘経寺山門	門	四脚門	茨城県	1629以降	切妻	瓦	不明	不明	2間	不明	茨城
10	内外大神宮内宮本殿	神社本殿	神明造	茨城県	1679	切妻	鉄板	不明	不明	2間	不明	茨城
11	内外大神宮外宮本殿	神社本殿	神明造	茨城県	1679	切妻	鉄板	不明	不明	2間	不明	茨城
12	平林寺中門	門	四脚門	埼玉県	17世紀中期	切妻	茅	礎	3,035	2間	2,545	埼玉
13	平林寺惣門	門	四脚門	埼玉県	江戸中期	切妻	茅	礎	4,054	2間	3,580	埼玉
14	国済寺黒門	門	四脚門	埼玉県	18世紀初期	切妻	棧瓦(茅)	礎	4,050	2間	3,450	埼玉
15	天照皇大神本殿	神社本殿	神明造	埼玉県	1818	切妻	鉄板	礎	3,723	2間	3,426	埼玉
16	豊受気毘売神社本殿	神社本殿	神明造	埼玉県	1818	切妻	鉄板	礎	3,729	2間	3,436	埼玉
17	増上寺御成門	門	高麗門	東京都	不明	切妻	本瓦	礎	4,493	—	—	東京
18	西教寺表門	門	棟門	東京都	不明	切妻	銅板	礎	2,950	—	—	東京
19	伝法院赤門(葵門)	門	平唐門	東京都	18世紀後期	切妻(唐破風)	棧瓦	礎	2,333	—	—	東京
20	本門寺総門	門	高麗門	東京都	不明	切妻	銅板	礎	5,306	—	—	東京
21	浄真寺総門	門	高麗門	東京都	不明	切妻	銅板	礎	3,420	—	—	東京
22	浄牧院山門	門	四脚門	東京都	18世紀中期	切妻	銅板	礎	3,322	2間	3,056	東京
23	高安寺総門	門	棟門	東京都	不明	切妻	銅板	礎	3,672	—	—	東京
24	円覚寺惣門	門	四脚門	神奈川県	幕末改造	切妻	棧瓦	礎	3,750	2間	3,030	神奈川
25	帰源院山門	門	四脚門	神奈川県	17世紀前期	切妻	茅	礎	2,790	2間	2,260	神奈川
26	続灯庵山門	門	四脚門	神奈川県	1805	切妻	銅板	礎	2,760	2間	2,242	神奈川
27	松嶺院山門	門	四脚門	神奈川県	18世紀初期	切妻	銅板	礎	不明	2間	不明	神奈川
28	雲頂庵山門	門	四脚門	神奈川県	17世紀末	切妻	檜皮	礎	不明	2間	不明	神奈川
29	寿福寺惣門	門	四脚門	神奈川県	17世紀中期	切妻	瓦棒形銅板	礎	3,290	2間	2,657	神奈川
30	海蔵寺山門	門	四脚門	神奈川県	17世紀中期	切妻	棧瓦	礎	2,910	2間	2,363	神奈川
31	成福寺山門	門	四脚門	神奈川県	18世紀前期	切妻	茅	礎	2,830	2間	2,454	神奈川
32	光触寺山門	門	四脚門	神奈川県	18世紀初期	切妻	棧瓦	礎	3,020	2間	2,490	神奈川
33	妙本寺惣門	門	四脚門	神奈川県	18世紀中期	切妻	瓦棒形銅板	礎	4,550	2間	4,242	神奈川
34	光則寺山門	門	四脚門	神奈川県	17世紀中期	切妻	瓦棒形銅板	礎	3,040	2間	2,502	神奈川
35	妙法寺山門	門	四脚門	神奈川県	室町末期	切妻	鉄板	礎	3,050	2間	2,320	神奈川
36	安国論寺山門	門	四脚門	神奈川県	1746	切妻	棧瓦	礎	2,910	2間	2,302	神奈川
37	妙長寺山門	門	四脚門	神奈川県	18世紀前期	切妻	棧瓦	礎	3,010	2間	2,442	神奈川
38	東昌寺山門	門	四脚門	神奈川県	18世紀後期	切妻	棧瓦	礎	3,030	2間	2,654	神奈川
39	海宝院表門	門	四脚門	神奈川県	17世紀前期	切妻	茅	礎	3,140	2間	2,727	神奈川
40	妙光寺山門	門	四脚門	神奈川県	18世紀中期	切妻	棧瓦	礎	2,860	2間	2,378	神奈川
41	新善光寺山門	門	四脚門	神奈川県	17世紀初期	切妻	銅板	礎	2,890	2間	不明	神奈川
42	盛福寺山門	門	四脚門	神奈川県	16世紀末~17世紀初期	切妻	瓦棒形銅板	礎	2,880	2間	2,242	神奈川
43	正禅寺山門	門	四脚門	神奈川県	18世紀後半	切妻	棧瓦(茅)	礎	2,580	2間	1,987	神奈川
44	称名寺総門	門	四脚門	神奈川県	1771	切妻	棧瓦	礎	3,297	2間	2,806	神奈川
45	光明院表門	門	四脚門	神奈川県	1665	切妻	茅	礎	2,740	2間	不明	神奈川
46	光伝寺山門	門	四脚門	神奈川県	1729	切妻	棧瓦	礎	3,151	2間	2,660	神奈川
47	上行寺山門	門	四脚門	神奈川県	17世紀前期	切妻	茅	礎	3,094	2間	2,563	神奈川
48	妙蓮寺山門	門	四脚門	神奈川県	19世紀初期	切妻	棧瓦(茅)	礎	3,030	2間	2,666	神奈川
49	大蓮寺山門	門	四脚門	新潟県	18世紀中期	切妻	銅板	礎	3,036	2間	2,578	新潟
50	西光寺山門	門	四脚門	福井県	17世紀末	切妻	棧瓦	礎	3,630	2間	3,260	福井
51	若狭彦神社神門	門	四脚門	福井県	1830	切妻	桧皮	礎	2,700	2間	2,210	福井
52	神部神社随神門	門	八脚門	山梨県	江戸中期~後期	切妻	鉄板(瓦)	礎	不明	2間	不明	山梨
53	金井加里神社随神門	門	八脚門	山梨県	1668	切妻	鉄板(茅)	礎/土台	不明	2間	不明	山梨
54	清白寺総門	門	四脚門	山梨県	1731	切妻	棧瓦(茅)	礎	不明	2間	不明	山梨
55	永昌院惣門	門	四脚門	山梨県	江戸後期	切妻	鉄板(茅)	礎	不明	2間	不明	山梨
56	定林寺山門	門	四脚門	山梨県	桃山~江戸初期	切妻	銅板(茅)	礎	不明	2間	不明	山梨
57	妙昌寺山門	門	棟門	山梨県	江戸後期	切妻	棧瓦	礎	不明	—	—	山梨
58	本光寺山門	門	四脚門	山梨県	室町末期~桃山	切妻	鉄板(茅)	礎	不明	2間	不明	山梨
59	本照寺山門	門	棟門	山梨県	1754	切妻	棧瓦	礎	不明	—	—	山梨
60	南明寺四脚門	門	四脚門	山梨県	江戸中期前半	切妻	棧瓦	礎	不明	2間	不明	山梨
61	久遠寺総門	門	棟門	山梨県	1665	切妻	棧瓦	礎	不明	—	—	山梨
62	慈照寺惣門	門	四脚門	山梨県	1744-1748	切妻	棧瓦(茅)	礎	不明	2間	不明	山梨
63	刈谷沢神社本殿	神社本殿	神明造	長野県	1717	切妻	茅	礎	3,930	2間	2,440	長野1
64	長田神社本殿	神社本殿	神明造	長野県	1710	切妻	茅	礎	4,900	2間	3,020	長野1
65	矢彦神社勅使殿	門	四脚門	長野県	17世紀後期	切妻	棧瓦(茅)	礎	2,812	2間	2,578	長野2
66	麻績神明宮	神社本殿	神明造	長野県	1684	切妻	銅板(茅)	礎	5,808	2間	4,262	長野2
67	麻績神明宮仮殿	神社本殿	神明造	長野県	1760	切妻	銅板(茅)	礎	3,047	2間	2,740	長野2
68	日置神社本殿	神社本殿	神明造	長野県	1725	切妻	銅板(茅)	不明	4,810	2間	3,030	長野2
69	神明神社本殿	神社本殿	神明造	静岡県	江戸中期頃	切妻	柿	不明	1,280	2間	1,170	静岡
70	浜名総社神明宮本殿	神社本殿	神明造(板倉造)	静岡県	不明	切妻	茅	不明	3,120	2間	2,300	静岡
71	松秀寺山門	門	四脚門	静岡県	1624-44	切妻	不明	礎	3,500	2間	3,000	静岡
72	大石寺二天門	門	四脚門	静岡県	1638	切妻	不明	礎	4,970	2間	4,240	静岡
73	普濟寺山門	門	四脚門	静岡県	17世紀前半頃	切妻	不明	礎	4,200	2間	3,760	静岡



番	名称	建築種別	建築様式	都道府県	建築年代	屋根形式	屋根材料	脚部	桁行長	梁行(間)	梁行長	文献
74	妙立寺総門	門	四脚門	静岡県	1665 移築	切妻	不明	礎	4,050	2間	3,640	静岡
75	定明寺山門	門	四脚門	静岡県	江戸中期	切妻	不明	礎	3,030	2間	2,800	静岡
76	栄林寺山門	門	四脚門	静岡県	1718	切妻	不明	礎	2,970	2間	3,120	静岡
77	瑞泉寺山門	門	切妻造段違	愛知県	18世紀中頃	切妻	本瓦	礎	6,380	2間	3,300	愛知
78	神明社本殿	神社本殿	神明造	愛知県	1610	切妻	檜皮	不明	1,870	2間	1,640	愛知
79	正福寺山門	門	四脚門	愛知県	17世紀後期	切妻	棧瓦	礎	2,870	2間	2,560	愛知
80	実成寺山門	門	四脚門	愛知県	江戸中期	切妻	本瓦	礎	3,650	2間	2,720	愛知
81	祐福寺勅使門	門	棟門	愛知県	1528	切妻	檜皮	礎	3,620	—	—	愛知
82	神明宮本殿	神社本殿	神明造	愛知県	江戸中期	切妻	不明	土台	2,000	2間	1,900	愛知
83	大福田寺山門	門	四脚門	三重県	1662	切妻	本瓦	礎	2,270	2間	2,400	三重
84	観音寺山門	門	四脚門	三重県	1691	切妻	本瓦	礎	3,040	2間	2,610	三重
85	悟真寺総門	門	四脚門	三重県	1746	切妻	本瓦	礎	不明	2間	不明	三重
86	神楽寺山門	門	切妻造段違	三重県	不明	切妻	本瓦	礎	4,760	2間	2,440	三重
87	吉祥院山門	門	四脚門	三重県	1755	切妻	本瓦	礎	3,640	2間	2,940	三重
88	勝楽寺表門	門	四脚門	滋賀県	室町後期	切妻	棧瓦	礎	2,566	2間	2,080	滋賀
89	日向大神宮内宮本殿	神社本殿	神明造	京都府	1729	切妻	茅	不明	2,552	2間	2,225	京都1
90	日向大神宮外宮本殿	神社本殿	神明造	京都府	1729	切妻	茅	不明	2,515	2間	2,133	京都1
91	天授庵四脚門	門	四脚門	京都府	17世紀前期	切妻	本瓦	不明	不明	2間	不明	京都1
92	皇大神社本殿	神社本殿	神明造	京都府	1868	切妻	茅	礎	6,090	2間	4,080	京都2-1
93	豊受大神社本殿	神社本殿	神明造	京都府	1874(1656)	切妻	茅	不明	5,710	2間	3,800	京都2-1
94	籠神社本殿	神社本殿	神明造	京都府	1845	切妻	檜皮	不明	5,760	2間	5,000	京都2-2
95	板列八幡神社本殿	神社本殿	神明造	京都府	1834	切妻	銅版	不明	不明	2間	不明	京都2-2
96	小倉神社本殿覆屋	覆屋	—	京都府	不明	切妻	棧瓦	不明	不明	6間	不明	京都3-2
97	摩気神社本殿覆屋	覆屋	—	京都府	1692	切妻	茅	不明	不明	2間	不明	京都3-2
98	茨木神社摂社皇大宮本殿	神社本殿	神明造	大阪府	1700	切妻	茅	不明	667	2間	515	大阪
99	総持寺裏門	門	四脚門	大阪府	18世紀中期	切妻	本瓦	礎	3,818	2間	3,182	大阪
100	伊居太神社摂社皇大宮本殿	神社本殿	神明造	大阪府	18世紀後期	切妻	こけら	不明	2,012	2間	667	大阪
101	粟鹿神社勅使門	門	四脚門	兵庫県	17世紀末	切妻	檜皮	礎	3,960	2間	3,340	兵庫
102	赤淵神社勅使門	門	四脚門	兵庫県	1694	切妻	棧瓦	不明	不明	2間	不明	兵庫
103	飛鳥坐神社拜殿	拜殿	—	奈良県	18世紀中期	切妻	銅板	不明	10,330	2間	6,270	奈良
104	泉養寺表門	門	四脚門	和歌山県	19世紀前期	切妻	本瓦	礎	2,570	2間	2,443	和歌山
105	印定寺表門	門	四脚門	和歌山県	1772	切妻	本瓦	礎	3,230	2間	2,656	和歌山
106	草堂寺表門	門	棟門	和歌山県	1779	切妻	本瓦	礎	3,350	—	—	和歌山
107	国疗裏神社本殿	神社本殿	大社造	鳥取県	1861	切妻	鉄板(檜皮)	土台	2,640	2間	3,260	鳥取
108	内神社本殿	神社本殿	大社造	鳥取県	1855	切妻	檜皮	不明	4,668	2間	4,314	鳥根
109	真名井神社本殿	神社本殿	大社造	鳥取県	1662	切妻	檜皮	不明	4,848	2間	4,121	鳥根
110	出雲大社御向社	神社本殿	大社造	鳥取県	不明	切妻	檜皮	不明	3,640	2間	3,650	鳥根
111	出雲大社天前社	神社本殿	大社造	鳥取県	不明	切妻	檜皮	不明	3,640	2間	3,650	鳥根
112	出雲大社筑紫社	神社本殿	大社造	鳥取県	不明	切妻	檜皮	不明	3,640	2間	3,650	鳥根
113	白加美神社本殿	神社本殿	神明造	岡山県	1844-1847	切妻	不明	不明	不明	2間	不明	岡山
114	福神社本殿	神社本殿	神明造	岡山県	1701	切妻	不明	不明	1,992	2間	1,878	岡山
115	功山寺惣門	門	四脚門	山口県	15世紀	切妻	本瓦	礎	4,490	2間	3,950	山口
116	本願寺萩別院観徳門	門	四脚門	山口県	1848-53	切妻	瓦棒形銅板	礎	2,500	2間	1,420	山口
117	大覚寺山門	門	四脚門	山口県	1785	切妻	棧瓦	礎	3,044	2間	2,480	山口
118	雨石門別八倉比売神社本殿	神社本殿	神明造	徳島県	19世紀後期	切妻	檜皮	不明	2,420	2間	2,180	徳島
119	皓臺寺山門	門	四脚門	長崎県	1837	切妻	本瓦	礎	4,080	2間	3,498	長崎
120	山田神社本殿鞘堂	覆屋	—	熊本県	不明	切妻	茅	礎	不明	4間	不明	熊本
121	西光寺山門	門	四脚門	大分県	1680	切妻	棧瓦	礎	3,500	2間	3,600	大分
122	高千穂神社本殿覆屋	覆屋	—	鹿児島県	不明	切妻	不明	不明	不明	不明	不明	鹿児島1
123	高千穂神社宮殿	神社本殿	神明造	鹿児島県	1869	切妻	茅	土台	534	2間	173	鹿児島2
124	具志堅の神ハサーギ	沖繩の信仰	神あしあげ	沖繩県	不明	寄棟	ススキ	不明	4,810	2間	4,000	沖繩
125	ウイビヤームトゥウの祭場 クシウイビヤ	沖繩の信仰	拝所	沖繩県	不明	寄棟	茅	不明	6,000	2間	5,300	沖繩
126	ナガイ元御嶽拜殿	沖繩の信仰	御嶽	沖繩県	不明	寄棟	なし	不明	不明	2間	不明	沖繩
127	ヌックお嶽拜殿	沖繩の信仰	御嶽	沖繩県	不明	切妻	赤瓦本瓦	礎	1,200	2間	1,100	沖繩
128	ウラノお嶽拜殿	沖繩の信仰	御嶽	沖繩県	不明	切妻	赤瓦本瓦	礎	1,320	2間	1,420	沖繩
129	トゥグルお嶽拜殿	沖繩の信仰	御嶽	沖繩県	不明	切妻	赤瓦本瓦	礎	1,750	2間	1,220	沖繩

名称は、報告書に記されたものをそのまま用いた。都道府県は、その社寺建築の所在都道府県名を指す。建築年代は報告書の記載をそのまま用いた。脚部は、柱の脚部の構法をさす。桁行および梁行の長さはミリメートルで記す。文献で尺表示のものは1尺=303ミリメートルに換算して記す。梁行に「—」とあるのは、棟門、高麗門、平唐門の場合で、梁行寸法がない場合を示す。控え柱の寸法は記していない。文献は、その社寺建築が掲載されていた文献を指す。なお、本論で採用した文献は、すべて都道府県別に刊行された近世社寺建築の報告書であり、『近世社寺建築調査報告書集成1～20』にくわえ、ここに掲載されなかった三重県および広島県の報告書も用いた。文献には報告書が刊行されている都道府県名を記し、2冊以上報告書のある都道府県は、出版年順に都道府県名の後に数字を記して区別した。なお、京都府の場合は次の通りである。「京都府の近世社寺建築」は京都1、「中丹編」は京都2-1、「与謝・丹後編」は京都2-2、「南山城編」は京都3-1、「乙訓・北桑・南端編」は京都3-2。参考文献中に記載がないことによりわからない場合は不明と記す。

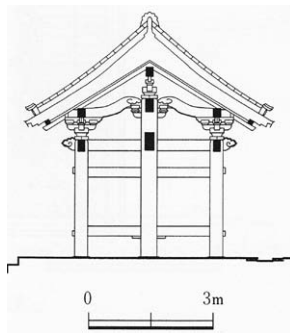


図1 清白寺総門(54番)断面図



写真1 妙本寺惣門

### 3-1-1 四脚門

まず、捕捉された門のなかで大多数をしめている四脚門について考察する。捕捉された66点の四脚門は、棟持柱をもつ四脚門が禅宗様四脚門と呼称されていることからわかるように、神奈川県や山梨県など禅宗の拠点地に多く分布しているものの、東は関東地方の茨城県から西は九州地方の大分県まで確認できることから、かなり広範囲にわたって存在していることがわかる。また、これらの建築年代をみると、功山寺惣門(山口県)が15世紀と最も古く、なかには室町時代に遡るものも数例ある。さらに、最も新しいものでは本願寺萩別院観徳門(1848-53)がある。このことから、捕捉された四脚門は、室町中期から江戸末期までの建築遺構が確認できる。

つぎに、四脚門の架構をみる。捕捉された四脚門は、共通して、切妻、平入、梁行2間、桁行1間、礎構造の特徴をもち、中央の柱が組物を介して棟木を支えている。また、禅宗様四脚門の特徴について、伊藤延男は、「主柱がかなり太く、高くのびて組物(三斗組)を介して直接棟木を受ける。控え柱とのつなぎは、貫または海老虹梁を用いている。また細部手法には禅宗様の諸特徴が見られる」とし、禅宗様の諸特徴にくわえ、主柱と控え柱をつなぐ構法に二通りあることをしるす<sup>注19)</sup>。清白寺総門(図1)は、主柱と控え柱を海老虹梁でつなぐ実例であり、妙本寺惣門(写真1)は、主柱と控え柱を貫でつなぐ実例である。また、梁行2間を共通とするものの、柱間に差異があるため、梁行長さは、最小のもので1,420mm(116番)、最大のもので4,242mm(33番)と幅がある。とはいえ、以上は構造の本質的な部分ではなく、主柱ないし側柱が組物を介して棟木ないし桁を支える構造である点にかわりはない。

以上、禅宗様四脚門は、規模や細部の形状に差異があるものの、棟持柱と禅宗様の諸特徴を併せ持った建築様式として、室町中期以降の日本各地にその遺構を確認することができる。

### 3-1-2 八脚門

ではつぎに、八脚門の事例について考察する。八脚門について、『建築大辞典』には、「4

本の本柱と、その前後に配された8本の控え柱、つまり3間×2間の門<sup>注20)</sup>とある。捕捉された棟持柱をもつ八脚門は、神部神社随神門、金井加里神社随神門、陸奥国分寺仁王門の計3点であった。まず、神部神社随神門については、報告書に、「妻は主柱を棟木まで上げ、側柱と海老虹梁で繋ぐ禅宗様の架構形式を持つ」とあり<sup>注21)</sup>、棟持柱をもつ架構が禅宗様の特徴として捉えられている。金井加里神社随神門も同様で、「妻は主柱が上に伸び、側柱からの海老虹梁を受ける禅宗形式」とある<sup>注22)</sup>。このように、棟持柱をもつ八脚門には、禅宗様四脚門のような特別な呼称はみられないものの、四脚門と同じく、禅宗様との関係が指摘されている。しかし、報告書には、断面図等の垂直方向に関する図面がなかったため、これ以上の詳細な情報をえることができなかつた<sup>注23)</sup>。また、八脚門で棟持柱をもつ事例は、類例が少なく貴重な建築遺構であるものの、過去に建築的な位置づけがほとんどされてこなかつた。以上より、本論では、これらの建築遺構について現地調査を行った。その結果、神部神社随神門については、平成23年8月時点で、保存修理のために全解体工事中で現地調査を行えなかつたものの、金井加里神社随神門については現地調査を行うことができた。さらに、所有者の了解をえて、平面図にくわえ立面図や断面図等の実測調査も行った。図2は、実測した金井加里神社随神門の平面図(図2-1)および立面図(図2-2)である。建築形式は、切妻、平入、平屋、鉄板葺、土台と礎を併せ持った構造であり<sup>注24)</sup>、妻面の中心柱のみならず、棟通りすべての柱が、一本の柱で垂直に立ち上がり、組物を介して棟木を支えている。また、図3は、浅草寺二天門の平面図(図3-1)および立面図(図3-2)である。金井加里神社随神門と浅草寺二天門の立面図を比較すると、柱の脚部や水平材の形状に差異がみられるものの、3本の柱が組物を介して桁および棟木を支え、それらを複数の貫でつなぐ形式はそっくりである。くわえて、丸本は、「このような棟柱の架構形式は中世禅宗様の四脚門に用いられていたことから、これが八脚門にも影響を及ぼしたのではないか」<sup>注25)</sup>とし、立面における類似性から棟持柱をもつ八脚門を禅宗様四脚門からの系譜として捉えた。しかし、『近世社寺建築調査報告書集成』を全国規模で把握したところ、つぎに示すように、禅宗様の影響のみでは説明できない建築遺構があることを、本論では確認した。

図4は、陸奥国分寺仁王門の平面図(図4-1)および断面図(図4-2)である。報告書によると、建築形式は、入母屋、平入、平屋、茅葺の八脚門で、棟通り中央2本の柱が棟木近くまでのびている<sup>注26)</sup>。しかし、図4-2のように、この棟通り2本の柱は、直接棟木までとどかずに接ぎ木された束によって棟木が支えられていることから、これを棟持柱をもつ建築遺構と呼ぶといささか語弊があるかもしれない。とはいえ、この八脚門は、側柱の高さに水平材が入っていないため、棟持柱構造と同様に軸部と小屋組が分離していない。さらに、この棟通りの柱は、柱と束の交叉部をみたときに、水平材を介さないで柱の上に直接束をのせているから、軸部・小屋組構造における水平材の上の一般的な束とは異なり、地上から立ち上がる柱と束が水平材を介することなく、まるで一本の柱のように上に

のびて棟木を支えている。すなわち、この棟通りの柱は、純粋な棟持柱とはいえないものの、途中で水平材を介していないことから棟持柱に準じた柱と位置づけることができる。このように陸奥国分寺仁王門は、他の棟持柱構造と同様に貴重な建築遺構であることから、本論では、陸奥国分寺仁王門も棟持柱をもつ建築遺構に含めて研究の対象とする<sup>注27)</sup>。

また、この八脚門の特徴に、浅草寺二天門にみられるような、細部に禅宗様の特徴がみられない点がある。浅草寺二天門の立面をみると、棟持柱から側柱にかけて海老虹梁が臺股をはさんでわたされているとともに、柱の上下に粽がある。丸本は、これらの諸特徴が

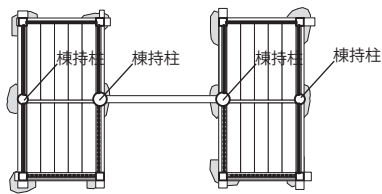


図 2-1 金井加里神社随神門 (53 番)  
平面図 1/150  
(資料編 273 頁)

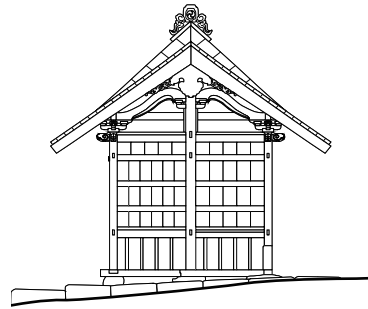


図 2-2 金井加里神社随神門 (53 番)  
立面図 1/150  
(資料編 273 頁)

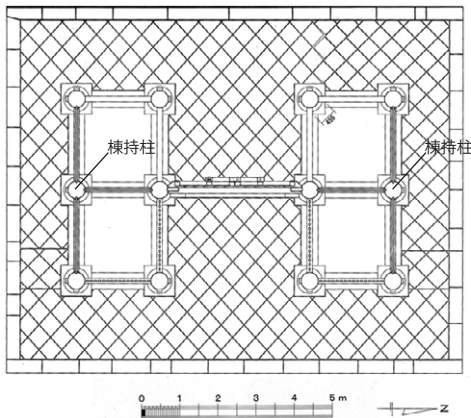


図 3-1 浅草寺二天門 平面図 1/200

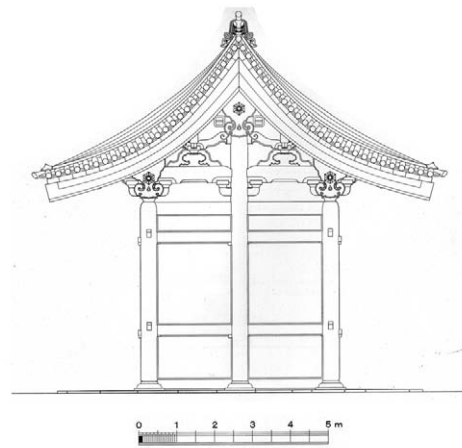


図 3-2 浅草寺二天門 立面図 1/200

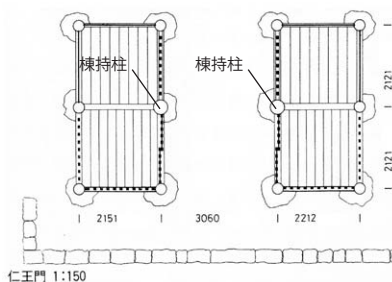


図 4-1 陸奥国分寺仁王門 (3 番) 平面図 1/200



図 4-2 陸奥国分寺仁王門 (3 番) 断面図 1/200



禅宗様四脚門にもみられることから、棟持柱をもつ八脚門が禅宗様四脚門から影響を受けたのではないかと推測した。しかし、陸奥国分寺仁王門には、棟持柱から側柱にかけて海老虹梁はかかっておらず、柱の上下に粽もない。そもそもこの八脚門は、屋根形状が入母屋であるため、棟木近くまでのびる柱は、天井のある棟通り中央の2本の柱であって建物外部からその上部をみることができない。つまり、この建築遺構は、屋根形状が切妻の浅草寺二天門や金井加里神社随神門のように、妻壁にある棟持柱が外部からみることができると根本的に異なっており、禅宗様という建築様式とは別の理由で棟持柱を採用していると考えられる<sup>注28)</sup>。

以上より、棟持柱をもつ八脚門には二通りの系統が想定される。一つは、浅草寺二天門や金井加里神社随神門に代表される屋根形状が切妻の場合で、禅宗様四脚門に類似した妻面に棟持柱をみせるものである。もうひとつは、屋根形状が入母屋や寄棟<sup>注29)</sup>の場合で、禅宗様とは異なり棟持柱上部が外部からみえないものである。

### 3-1-3 切妻造段違

四脚門や八脚門に単純に分類できない特殊な事例として、中央を一段高く突き上げた形式の門に棟持柱をもつ建築遺構がある。岡田編『門』は、この形式をとる門の代表例として東光寺総門(1693)をあげ、「黄檗宗寺院特有の形式」とした<sup>注30)</sup>。また、濱島は、この形式を「切妻造段違」とし、類例として東光寺総門にくわえ、万福寺総門(1693)をあげた<sup>注31)</sup>。本論では、濱島の指摘にならい、この形式の門を「切妻造段違」とする。さらに、この切妻造段違には、平面形状から二通りのタイプがみられた。一つは、東光寺総門にみられる八脚門に類似したタイプであり、もうひとつは、万福寺総門にみられる四脚門に類似したタ



写真2 神楽寺山門(86番)正面



写真3 神楽寺山門(86番)妻面詳細

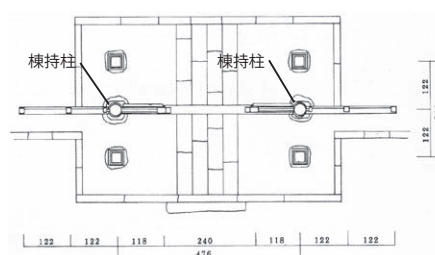


図5 神楽寺山門(86番)平面図

イプである<sup>注32)</sup>。

報告書からは、棟持柱をもつ切妻造段違の門として、瑞泉寺山門と神楽寺山門(写真2・写真3・図5)の2点が捕捉された。平面形状はともに、万福寺総門にみられる四脚門を横長にした形をなしており、両妻面の中央柱が組物を介して棟木を支えている。このような黄檗宗と関係深い切妻造段違の門は、禅宗様四脚門と同じく、棟持柱をもつことが建築様式化した建築遺構であると考えられる。

### 3-1-4 棟門、高麗門、平唐門

ではさらに、棟門(7点)、高麗門(4点)、平唐門(1点)について考察する。まず、棟門について、『日本建築辞彙〔新訂〕』に、「むねかど【棟門】円柱二本ありて、屋根は切妻破風造なる門。図はその側面なり。「むなもん」ともいう」<sup>注33)</sup>とあり、あわせて2本の柱の上に冠木がのり、さらにその上に墓股がのって屋根を支える図が掲載されている。西教寺表門(図6)は、捕捉された棟門の実例で、控え柱がつくものの2本の柱が直接棟木を支える単純な構造である。

つぎに、高麗門について、同じく『日本建築辞彙〔新訂〕』に、「こうらいもん【高麗門】高麗門は本柱、控柱、各二本ずつにて、何れも方柱なり。他門の如く、本柱、控柱を込めて、一屋根にて蔽うことなく、本柱上には妻破風造なる細長き屋根を架し、それと直角にして少し低く別棟の小屋根を控柱上に向って架するなり」<sup>注34)</sup>とあり、2本の本柱で屋根を支える点は棟門とかわらない。また、その特徴として控え柱の上に小屋根がつく。このことは、高麗門の実例である旧大年寺総門(図7)をみてもわかる。つまり、高麗門と棟門の差異は、控え柱の屋根の有無にある。

さらに、平唐門について、『日本建築辞彙〔新訂〕』に、「ひらからもん【平唐門】側面に唐破風のある門をいう」<sup>注35)</sup>とある。伝法院赤門(写真4)は捕捉された平唐門の実例である。これをみると、妻面の形状が唐破風であるものの、高麗門と同様に架構形式は棟門とかわらない。

したがって、棟門および高麗門ならびに平唐門には、細部の形状に差異がみられるものの、2本の主柱によって構成される単純な架構形式は共通で、そのなかに棟持柱をもつ建築遺構がある。

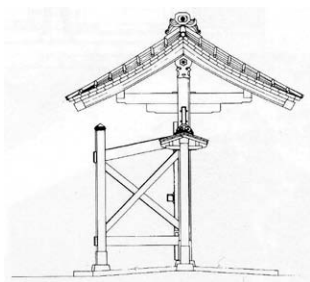


図6 西教寺表門(18番) 立面図

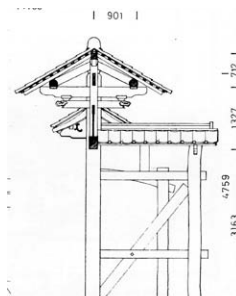


図7 旧大年寺総門(4番) 立面図



写真4 伝法院赤門(19番)



写真5 籠神社本殿 (94 番)

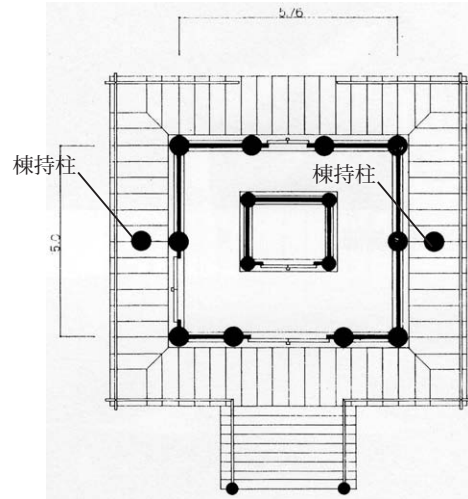


図8 籠神社本殿 (94 番) 平面図 1/200

### 3-2 神社本殿

神社本殿においては、神明造ないし大社造をなす棟持柱をもつ建築遺構が計 35 点捕捉された。

#### 3-2-1 神明造

神明造としては、29 点 (35 点中 82.9%) の建築遺構が捕捉され、その分布も北海道から鹿児島まで全国的に確認された。また、その建築年代をみると、1610 年の神明社本殿 (78 番) から 1882 年の徳山大神宮本殿 (1 番) まであり、江戸初期から明治期までの建築遺構が確認できる。つぎに、梁行に即して建築規模をみると、梁行が 2 間である点はこの建築遺構とかわらないものの、柱間が一定でないため、最小のものは高千穂神社宮殿 (123 番) の 173mm しかないものから、最大のものでは、籠神社本殿 (写真 5・図 8) の 5m に及ぶものまである。このように、神明造は、地域や規模を問わず幅広く存在している。

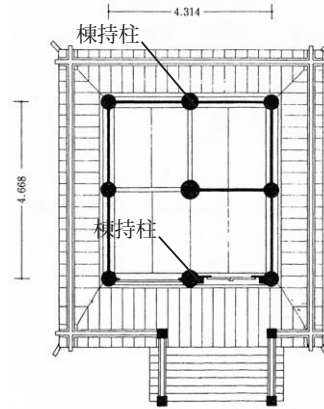
#### 3-2-2 大社造

大社造としては、6 点 (35 点中 17.1%) の建築遺構が捕捉された。神明造が全国的に確認されたのに対し、大社造は、6 点のうち 5 点が島根県にあり、残りの 1 点も隣接する鳥取県にあった。また、3 点が出雲大社に関連する建築遺構でもあった。このことから大社造は、出雲を中心とする限定された地域で採用された建築様式である、と考えられる。つぎに、建物規模を梁行に即して確認すると、梁行が 2 間である点は大社造も同様であり、梁行長さについては、最小のものが国庁裏神社本殿の 3.26m であり、最大のものは内神社本殿 (写真 6・図 9) の 4.314m であった。神明造がかなり小規模なものから大規模なものまで幅広く確認されたのに対し、大社造には、極端に小規模なものはみられず、梁行が 3m から 4m 程度の建築遺構が確認された。





写真6 内神社本殿 (108番)



内神社本殿平面図 (1/150)  
図9 内神社本殿 (108番) 平面図

### 3-3 覆屋

神社本殿を保護する目的でたてられた覆屋にも棟持柱をもつ建築遺構が4点確認された。柱間に差異はあるものの、他の建築遺構が梁行2間であったのに対し、覆屋には、神社本殿を覆うために、梁行が6間に及ぶ大規模なものまであった。しかし、報告書には本殿に関する情報はあるものの、覆屋に関する情報はほとんどなく、棟持柱をもつことが判断できる資料は写真資料のみであった。また、建築遺構図面としては、山田神社本殿鞘堂(写真7・図10)に本殿と同時に作成された平面図があるのみであった。さらに、建築年代が判明しているものは摩気神社本殿覆屋(97番)のみであった。

### 3-4 拝殿

奈良県の飛鳥坐神社拝殿(図11)は、拝殿で唯一捕捉された棟持柱をもつ建築遺構である。この拝殿は、18世紀中期の建築で、切妻、平屋、平入、銅板葺をなす。また、梁行規模は他の建築遺構と同じ2間であるものの、柱間が3mをこえているため、梁行が6mに及ぶ大規模な建築遺構である。報告書には、「建築は拝殿としてもやや異色の、独創的なものである」とあり、さらに、「構造上特色となる点は、他は円柱を用いるが棟通り4本



写真7 山田神社本堂鞘堂 (120番)

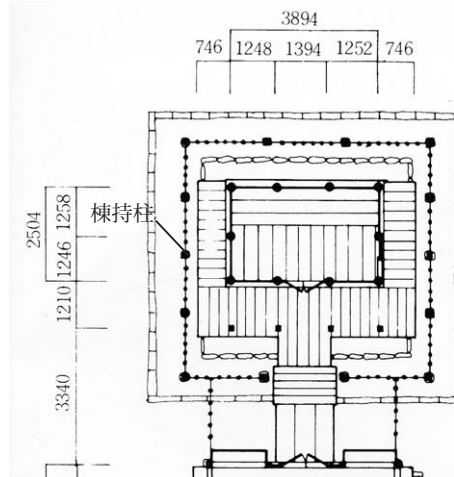


図10 山田神社本堂鞘堂 (120番) 平面図

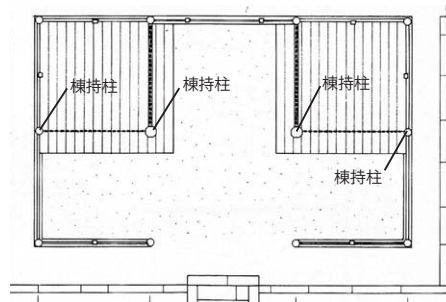


図 11 飛鳥坐神社拝殿(103番) 平面図

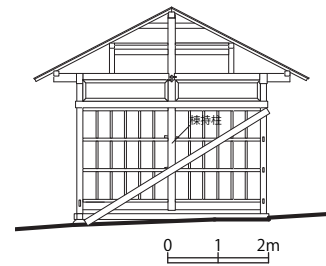


図 12 若宮八幡宮拝殿 立面図 1/150  
(資料編 166 頁)

のみは八角柱として棟まで立ち登らせ、化粧小屋裏として内部を一体の空間としていることであろう」<sup>注 36)</sup>と記され、棟通りすべての柱が棟持柱となっている。

また、棟持柱をもつ拝殿は、平成 15 年度に行われた山梨県山梨市牧丘町周辺の民家調査においても捕捉されている。図 12 は、捕捉された若宮八幡宮拝殿の立面図で、切妻、平屋、平入、梁行 2 間、桁行 3 間の小規模な建築遺構である。さらに、この拝殿には、側柱の頂部から少し低い位置に水平材が入っており、一見すると、軸部・小屋組構造に見間違えそうになるが、この水平材は、梁ではなく外部からかけられた長押であって、棟木下の柱が土台から一本の柱で棟木を直接支えている<sup>注 37)</sup>。くわえて、この拝殿は、組物や装飾等が一切ない、きわめて素朴な建築遺構である。

過去の研究に、拝殿で棟持柱をもつ建築遺構が報告された事例は管見のかぎりなく、貴重な建築遺構であると考えられる。

### 3-5 沖縄の信仰に関する建造物

ここまで考察してきた棟持柱をもつ建築遺構は、日本各地にみられる一般的な社寺建築に関するものであった。沖縄には、これらにくわえ、沖縄特有の信仰に関する建造物があり、『沖縄県の信仰に関する建造物』では、「沖縄の場合特に祖先崇拜信仰との関わりが強く、昔から祭祀空間の中心的な施設であり、地域、地形によって様々な形式をみることができる」<sup>注 38)</sup>とある。捕捉された棟持柱をもつ建築遺構は、報告書の分類によると、御嶽(4 点)、神あしあげ(1 点)、拝所(1 点)の計 6 点であった。

まず、御嶽は、「沖縄でグスク、ウガン、オン等と呼ばれる聖地の総称である。規模、形式は様々であるが、その敷地は拝殿にあたる建物が置かれる領域とその奥にある男子禁

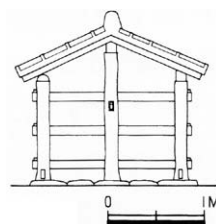


図 13 ウラノお嶽拝殿(128番) 立面図

制のひろぎの空間であるイビの領域に区分されるのが一般的<sup>注39)</sup>とある。図13は御嶽内にある建築遺構の実例であり、切妻、平入、平屋、柱の脚部が礎構造をなし、すべての柱が直接棟木および桁を支えている。また、梁行が1.5m程度しかないきわめて小規模な建築遺構でもある。つぎに、神あしあげ(124番)は、「アサギ、アシャギ等地域によって呼称が異なるが、各部落単位の祭祀を執り行うための建物」<sup>注40)</sup>で、具志堅の神ハサーギをみると、寄棟、ススキ葺、周囲に壁がない開放的な建築遺構で、内部に棟持柱が一つある。また、ウィピャームトゥ祭場のクシウイピャー(125番)は、報告書に拝所とするされた寄棟の建築遺構であり、内部に棟持柱を有している<sup>注41)</sup>。これらはともに梁行が2mに満たない小規模建造物であった。

このように、沖縄には、一般的な社寺建築とは異なった宗教建築に、棟持柱をもつ小規模建造物が存在している。

#### 4 小括

以上、本論では、『近世社寺建築調査報告書集成』を資料に、社寺建築を対象とする棟持柱をもつ建築遺構について考察してきた。その結果、従来、一部の建築様式を除き、もっぱら軸部と小屋組が分離していると了解されていた社寺建築においても、軸部と小屋組が分離しない棟持柱をもつ建築遺構が複数の建築に確認された。さらに、この棟持柱をもつ建築遺構には大きくわけて二通りものが確認された。まず一つは、一部の建築様式にみられた棟持柱をもつことが共通の特質となったものである。これにあてはまるものに、神社本殿の神明造ないし大社造があり、禅宗様四脚門ないし黄檗宗と関係深い切妻造段違の門があった。さらに、類例は少ないものの、禅宗様四脚門に類似した切妻の八脚門もここに含めることができるだろう。これらは、その建築様式の構造的特質が棟持柱をもつことであり、その様式が全国的に広まったものもあれば、一部の地域のみで採用されてきたものもある。これに対し、もうひとつは、必ずしも棟持柱をもつとはかぎらない建築の中に、数の上では少数であるものの棟持柱をもつ建築遺構があった。これにあてはまるものに、屋根形式が入母屋の八脚門や拝殿、さらに沖縄特有の信仰に関する建造物があった。陸奥国分寺仁王門は、禅宗様四脚門に類似した切妻の八脚門とは異なり、細部に禅宗様の特徴がみられないとともに、棟持柱上部が外部からみえない入母屋の八脚門であった。また、飛鳥坐神社拝殿は、棟通りすべての柱が棟持柱となった建築遺構であり、同じく若宮八幡宮拝殿は、組物や彫刻などが一切ない素朴な建築遺構であった。くわえて、沖縄特有の信仰に関する建造物には、多様な形式をなす棟持柱をもつ小規模建造物が確認された。

いうまでもなく、社寺建築の場合、建築遺構の圧倒的多数は、軸部と小屋組が分離している。とはいえ、棟持柱をもつ建築遺構には、建築様式化した神明造や大社造にくわえ、数の上では少数であるものの、そのほかの社寺建築においても確認された。さらに、これらの建築遺構は、神社本殿や寺院本堂といった大規模建造物ではなく、主要建築とともに

境内や伽藍を構成する比較的小規模な門や拝殿であり、沖縄の信仰に関する建造物のような、一般的な社寺建築と異なる小規模な宗教建築であった。くわえて、これらの小規模建造物は、これまで積極的に研究対象となっていない建築遺構であった。

以上、社寺建築における棟持柱をもつ建築遺構は、一部の建築様式のみならず、もっぱら軸部・小屋組構造であると考えられていた建築遺構にも存在していた。とりわけ、後者について本論でえられた知見は、神社本殿ないし寺院本堂をとりまく周囲の建築群のなかに、少数派ではあるものの棟持柱をもつ建築遺構の系譜があることを示唆するものである。

## 【注】

注1) 社寺と寺社の記述順序について、黒田龍二(参考文献1) 303頁)は、江戸時代以前は、「寺社とするのが普通であった」とし、「寺社の順に記述することは、建築史学の立場を示すもの」とする。また、光井渉(参考文献2)15頁)も、近世の時点では「寺社」が用いられていたことから「寺社」という用語を用いている、とある。中世後期から近世を対象としている本論も、本来であれば、「寺社」するところであるが、本論で用いる『近世社寺建築調査報告書集成』がもっぱら「社寺」の記述順序であるため、用語の混乱をさけるために「社寺」を用いる。

注2) 参考文献3) 303-304頁引用

注3) 参考文献4) 参照

注4) 参考文献5) 参照

注5) 参考文献6) 68頁に、「禅宗様四脚門」とある。なお、ここには、先述した禅宗様四脚門の建築遺構にくわえ、神野寺表門(1504-1520)と妙心寺勅使門(1610)が掲載されている。これらは禅宗様の諸特徴をそなえているものの、中心の柱は棟までとどかず軸部と小屋組が分離している。しかし、禅宗様とよばれる四脚門の代表的遺構が棟持柱を有しているので、本論でもこの呼称を用いる。

注6) 参考文献7) 111-116頁参照。「禅宗様の四脚門」とある。

注7) 参考文献8) 88-89頁参照。この他に丸本は、関東地方の類例建物として、山梨県指定文化財の神部神社随神門(1571)、山梨市指定文化財の金井加利神社随神門(1668頃)をあげた。

注8) 参考文献9) 42頁に、民家研究に即して、「小規模な建造物としての小屋を民家の対象として積極的にあつかう視点をうしなっていた」とあるが、小規模建造物を扱わない点は、近年の社寺建築研究も同様といえる。

注9) 参考文献10) 参照

注10) 社寺建築研究の現況をみきわめるために、山岸常人、黒田龍二、富島義幸、藤沢彰、野村俊一らの研究を参照したところ、建築架構を対象とした研究は管見のかぎりみあたらなかった。

注11) 参考文献11) 287頁参照



注 12) 参考文献 12) 参照

注 13) 参考文献 6) 68 頁参照

注 14) 参考文献 7) 111 頁参照

注 15) 棟持柱をもつ八脚門は、浅草寺二天門を除いて個別の報告書は刊行されておらず、自治体別に刊行された報告書に平面図と簡単な所見が記されるのみで、棟持柱をもつ建築遺構についてあまり注目されていない。たとえば、観音寺仁王門について、参考文献 13) 304 頁には、「妻は中央の柱が連れ三斗を介して化粧棟木を支持する」と記すのみである。また、過去の研究で棟持柱をもつ八脚門が言及された事例は管見のかぎりみあたらない。

注 16) 参考文献 14)～参考文献 35) 参照

注 17) 近世社寺建築を対象とした論考に、参考文献 36)～参考文献 40) 以下がある。しかし、これらの中に、日本全域を対象に、軸部と小屋組の観点から棟持柱をもつ建築遺構について考察したものはない。

注 18) 近年、市町村別によっては、近世社寺建築を対象とした調査が行われるようになり、報告書も数多く刊行されている。しかし本論では、全国規模で棟持柱をもつ建築遺構を把握することを目的としているため、これら市町村発行の報告書は研究対象としていない。これら市町村発行の報告書も含めた総合的検討は今後の課題としたい。

注 19) 参考文献 41) 111 頁引用

注 20) 参考文献 42) 1665 頁引用

注 21) 参考文献 20) 95 頁引用

注 22) 参考文献 20) 97 頁引用

注 23) 後に、参考文献 43) において、金井加里神社随神門について調査を行っているが、所見の他は、平面図および写真が添付されているのみで断面図や立面図はない。

注 24) 参考文献 20) 97 頁に、「側柱は土台の上に建っているが、土台と主柱の取合せが姑息であり、元来は、土台がなく、側柱も礎石に直接建っていたであろう」とある。

注 25) 参考文献 8) 89 頁引用

注 26) 参考文献 15) 84 頁参照

注 27) 筆者らは、過去に調査が入っていない建築遺構として、山梨県内に現存する福蔵院仁王門、長谷寺仁王門、武田八幡宮随神門が、内側に棟持柱をもつ建築遺構であることを実見の上、確認している。このうち、長谷寺仁王門と武田八幡宮随神門については、地上から一本で立ち上がる柱が直接棟木を支えており、陸奥国分寺仁王門よりも明確な棟持柱をもっていることが判明している。しかし、これらについて言及するには、現時点において実測図面等の詳細な資料が不足していた。さらに、本論では、棟持柱をもつ建築遺構を全国規模で把握することを目的としているため、このような独自に調査・発見した建築遺構を掲載してしまうと地域的な偏りがでてしまうと考えた。よって、これらについては、別稿にゆずることとした。また、参考文献 44) では、山梨県内の民家である K 氏宅と三井元昭氏宅が、柱の上に束を接



ぎ木して棟木を支える構造であることが指摘されており、このような事例は、民家や社寺にかかわらず存在していることがわかる。

注 28) そもそも四脚門においては、棟持柱をもつ建築遺構が禅宗様と呼称されるものの、円覚寺舍利殿や清白寺仏殿に代表される禅宗様の本堂は、一般に、軸部と小屋組が分離しており、禅宗様建築全体を見通したときに棟持柱をもつことが必ずしも共通の特質として捉えることができない。

注 29) 屋根形状が寄棟の場合も入母屋と同様と考えられる。

注 30) 参考文献 6) 51 頁参照

注 31) 参考文献 7) 111 頁参照

注 32) 参考文献 7) 111 頁参照

注 33) 参考文献 45) 412 頁引用

注 34) 参考文献 45) 141 頁引用

注 35) 参考文献 45) 363 頁引用

注 36) 参考文献 27) 270 頁参照

注 37) 参考文献 46) 153-154 頁参照

注 38) 参考文献 33) 13 頁引用

注 39) 参考文献 33) 14 頁引用

注 40) 参考文献 33) 14 頁引用

注 41) 参考文献 33) 114 頁参照

#### 【参考文献】

- 1) 黒田龍二『中世寺社信仰の場』(思文閣出版、1999)
- 2) 光井渉『近世寺社境内とその建築』(中央公論美術出版、2001)
- 3) 玉井哲雄「日本建築の構造」(藤井恵介・玉井哲雄『建築の歴史』中央公論社、303-321 頁、1995)
- 4) 土本俊和編著『棟持柱祖形論』(中央公論美術出版、2011)
- 5) 土本俊和「棟持柱祖形論の外にある事柄」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、334-335 頁)
- 6) 岡田英男編『日本の美術 第 212 号 門』(至文堂、1984)
- 7) 濱島正士『寺社建築の鑑賞基礎知識』(至文堂、1992)
- 8) 文化財建造物保存技術協会『重要文化財浅草寺二天門修理工事報告書』(宗教法人浅草寺、2010)
- 9) 土本俊和「戦前の棟持柱祖形論」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、42-45 頁、2011)
- 10) 関口欣也『中世禅宗様建築の研究』(中央公論美術出版、2010)
- 11) 国京克巳「永平寺隆芳院廟所の四脚門について —福井藩の霊廟建築に関する研究 その 2 —」(『日本建築学会計画系論文集』第 522 号、287-292 頁、1999)

- 12) 櫻井敏雄・中西将「日部神社表門と四脚門」(『近畿大学理工学部研究報告』第42号、111-120頁、2006)
- 13) 青梅市郷土博物館編『青梅市の社寺建築』(青梅市教育委員会、1988)
- 14) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成1 北海道・東北地方の近世社寺建築1』  
〈北海道教育委員会編『北海道の近世社寺建築 近世社寺建築緊急調査報告書』1989、青森県教育委員会編『青森県の近世社寺 青森県近世社寺建築緊急調査報告書』1979、青森県教育委員会編『青森県の近世社寺建築(Ⅱ) 青森県近世社寺建築緊急調査報告書』1991、秋田県教育委員会編『秋田県の近世社寺建築—近世社寺建築緊急調査報告書—』1989〉(東洋書林、2003)
- 15) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成2 北海道・東北地方の近世社寺建築2』  
〈佐藤巧・西野敏信・阿部和彦編『岩手県の近世社寺建築 岩手県近世社寺建築緊急調査報告書』(岩手県教育委員会、1991)、佐藤巧・田中正三編『山形県の近世社寺建築』(山形県教育委員会、1984)、東北大学工学部建築学科建築史及び意匠研究室編『宮城県の近世社寺建築』(宮城県教育委員会、1983)、東北大学工学部建築学科建築史及び意匠研究室編『福島県の近世社寺建築—(近世社寺建築緊急調査報告書)—』(福島県教育委員会、1981)〉(東洋書林、2003)
- 16) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成3 関東地方の近世社寺建築1』  
〈茨城県教育委員会編『茨城県の近世社寺建築 茨城県近世社寺建築緊急調査報告書』1982、栃木県教育委員会文化課編『近世社寺建築緊急調査報告』1978、群馬県教育委員会事務局管理部文化財保護課編『群馬県近世社寺建築緊急調査報告書』1979〉(東洋書林、2003)
- 17) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成4 関東地方の近世社寺建築2』  
〈埼玉県教育委員会編『埼玉の近世社寺建築』1984、千葉県教育委員会編『千葉県の近世社寺建築』1978、東京都教育庁社会教育部文化課編『東京都の近世社寺建築』1989〉(東洋書林、2003)
- 18) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成5 関東地方の近世社寺建築3』  
〈神奈川県教育庁生涯学習部編『神奈川県近世社寺建築調査報告書(本文編)』(文化財保護課長、1993)〉(東洋書林、2003)
- 19) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成6 中部地方の近世社寺建築1』  
〈新潟県教育庁文化行政課・稲垣栄三・藤井恵介編『新潟県の近世社寺建築』(新潟県教育委員会、1985)、富山県教育委員会文化財課編『富山県の近世社寺建築』1981、石川県教育委員会文化財保護課・石川県近世社寺建築緊急調査委員会編『石川県の近世社寺建築』1979、福井県教育委員会編『近世社寺建築緊急調査報告書』1981)〉(東洋書林、2004)
- 20) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成7 中部地方の近世社寺建築2』  
〈山梨県教育委員会編『山梨県の近世社寺建築』1983、長野県教育委員会編『長野県の近世社寺建築』1982、長野県教育委員会編『長野県の近世社寺建築 第二次調査報告書』1991)〉(東洋書林、2004)
- 21) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成8 中部地方の近世社寺建築3』  
〈岐阜県教育委員会編『岐阜県の近世社寺建築 岐阜県文化財調査報告書』1980、静岡県教育委員会文化

- 課編『静岡県の近世社寺建築—近世社寺建築緊急調査報告書—』1979、愛知県教育委員会文化財課編『愛知県の近世社寺建築 近世社寺建築緊急調査報告書』1980>(東洋書林、2004)
- 22) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 9 近畿地方の近世社寺建築 1』<山岸常人編『滋賀県の近世社寺建築 近世社寺建築緊急調査報告書』(滋賀県教育委員会文化部文化財保護課、1986)>(東洋書林、2003)
- 23) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 10 近畿地方の近世社寺建築 2』<京都府教育庁文化財保護課編『京都府の近世社寺建築 近世社寺建築緊急調査報告書』(京都府教育委員会、1983)>(東洋書林、2002)
- 24) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 11 近畿地方の近世社寺建築 3』<京都府文化財保護基金編『京都の社寺建築 中丹編』1981、京都府文化財保護基金編『京都の社寺建築 与謝・丹後編』1984>(東洋書林、2002)
- 25) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 12 近畿地方の近世社寺建築 4』<京都府文化財保護基金編『京都の社寺建築 南山城編』1979、京都府文化財保護基金編『京都の社寺建築 乙訓・北桑・南丹編』1980>(東洋書林、2002)
- 26) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 13 近畿地方の近世社寺建築 5』<大阪府教育委員会編『大阪府の近世社寺建築 近世社寺建築緊急調査報告書』1987、多淵敏樹編『兵庫県の近世社寺建築 兵庫県近世社寺建築緊急調査報告書』(兵庫県教育委員会、1980)>(東洋書林、2002)
- 27) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 14 近畿地方の近世社寺建築 6』<奈良国立文化財研究所編『奈良県の近世社寺建築』(奈良県教育委員会、1987)>(東洋書林、2002)
- 28) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 15 近畿地方の近世社寺建築 7』<奈良国立文化財研究所編『和歌山県の近世社寺建築 近世社寺建築緊急調査報告書』(和歌山県教育庁文化財課、1991)>(東洋書林、2003)
- 29) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 16 中国地方の近世社寺建築 1』<鳥取県教育委員会編『鳥取県の近世社寺建築』1987、島根県教育委員会編『島根県近世社寺建築 緊急調査報告書』1980、岡山県文化財保護協会『岡山県の近世社寺建築』1979>(東洋書林、2004)
- 30) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 17 中国地方の近世社寺建築 2』<山口県教育委員会編『山口県の近世社寺建築』1980>(東洋書林、2004)
- 31) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 18 四国地方の近世社寺建築』<徳島県教育委員会編『徳島県の近世社寺建築』1990、香川県編『香川県の近世社寺建築』1981、愛媛県教育委員会編『愛媛県の近世社寺建築』1990、奈良国立文化財研究所編『高知県の近世社寺建築 高知県文化財調査報告書 第25集』(高知県教育委員会、1981)>(東洋書林、2004)
- 32) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 19 九州地方の近世社寺建築 1』<福岡県編『福岡県の近世社寺建築』1984、佐賀県教育委員会『佐賀県の近世社寺建築 佐賀県文化財調査報告書 第82集』1985、長崎県教育委員会編『長崎県の近世社寺建築 近世社寺建築緊急調査

- 報告書 長崎県文化財調査報告書 第 79 集』1986、熊本県教育委員会編『熊本県の近世社寺建築』1986) (東洋書林、2003)
- 33) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 20 九州地方の近世社寺建築 2』(大分県教育庁管理部文化課編『大分県の近世社寺建築 近世社寺建築緊急調査報告書』1987、宮崎県教育委員会編『宮崎県の近世社寺建築 近世社寺建築緊急調査報告書』1982、鹿児島県教育委員会編『鹿児島県の近世社寺建築 近世社寺建築緊急調査報告書』1988、鹿児島県教育委員会編『鹿児島県の近世社寺建築(離島編) 近世社寺建築緊急調査報告書』1990、沖縄県教育庁文化課編『沖縄県の信仰に関する建造物 近世社寺建築緊急調査報告書』1991) (東洋書林、2003)
- 34) 広島県教育委員会編『広島県文化財調査報告書(第 13 集) 広島県の近世社寺建築』(広島県文化財協会、1982)
- 35) 三重県教育委員会編『三重の近世社寺建築—近世社寺建築緊急調査の報告—』(三重県教育委員会、1985)
- 35) 仏教芸術学会編『仏教芸術 170 号 特集 近世社寺建築』(毎日新聞社、1987)
- 36) 奈良国立文化財研究所編『近世社寺建築の研究 第 1 号』(奈良国立文化財研究所、1988)
- 37) 奈良国立文化財研究所編『近世社寺建築の研究 第 2 号』(奈良国立文化財研究所、1990)
- 38) 奈良国立文化財研究所編『近世社寺建築の研究』第 3 号』(奈良国立文化財研究所、1992)
- 39) 文化庁歴史的建造物調査研究会編『建物の見方・しらべ方』(ぎょうせい、1994)
- 40) 熊本達哉『日本の美術 第 530 号 近世の寺社建築—庶民信仰とその建築—』(ぎょうせい、2010)
- 41) 伊藤延男『古建築のみかた』(第一法規出版、1967)
- 42) 彰国社編『建築大辞典 第 2 版(普及版)』(彰国社、1993)
- 43) 大河直躬「第 5 章 上条の宗教建築」(財団法人日本ナショナルトラスト編『平成 16 年度観光資源保護調査 上条集落の切妻民家群』財団法人日本ナショナルトラスト、86-89 頁、2005)
- 44) 内田健一・土本俊和「棟持柱構造から軸部・小屋組構造への転換過程」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、72-85 頁、2011)
- 45) 中村達太郎著・太田博太郎・稲垣栄三・内田祥哉・鈴木嘉吉・田中文男・源愛日児・中谷礼仁・西尾清・初田亨・藤井恵介編『日本建築辞彙(新訂)』(中央公論美術出版、2011)
- 46) 土本俊和『中世後期から近世に至る掘立棟持柱構造からの展開過程に関する形態史的研究 2001 年度～2003 年度科学研究費補助金(基盤研究 C(2)) 研究成果報告書』(研究代表者土本俊和、2005)
- 47) 山梨市役所編『山梨市史 文化財・社寺編』(山梨市、2005)

#### 【出典】

- 写真 1) 参考文献 18) 138 頁  
写真 2) 参考文献 35) 407 頁  
写真 3) 参考文献 35) 407 頁

写真4)参考文献17) 105頁  
写真5)参考文献24)口絵1頁  
写真6)参考文献29) 57頁  
写真7)参考文献32) 204頁  
図1) 参考文献47) 9頁  
図2-1)筆者作成(資料編273頁)  
図2-2)筆者作成(資料編273頁)  
図3-1)参考文献8)図面1頁  
図3-2)参考文献8)図面4頁  
図4-1)参考文献15) 85頁  
図4-2)参考文献15) 85頁  
図5)参考文献35) 380頁  
図6) 参考文献17) 80頁  
図7) 参考文献15) 91頁  
図8) 参考文献24) 62頁  
図9) 参考文献29) 57頁  
図10)参考文献32) 203頁  
図11)参考文献27) 270頁  
図12)参考文献46) 154頁  
図13)参考文献33) 149頁

※ 図中の「棟持柱」の表記は筆者による。

## 補記

捕捉した棟持柱構造の全国的な分布傾向をさらに考察すると、禪宗様四脚門がとくに多い神奈川県や山梨県を除外したときに、関東より西の地域に比べ、関東より東の地域において、棟持柱をもつ建築遺構が少ない傾向が読み取れる。実際に、東北地方と北海道においては、全129棟のうちわずか6棟を捕捉するのみであった。このことから、棟持柱をもつ社寺建築は、多雪地域に少ないように読み取れる。しかし、このときに注意しなければならないのは、資料として用いた近世社寺建築調査報告書集成が、そもそも全国的な分布傾向まで分析するにたりえる資料であるか否か、という点である。冒頭でもふれたように、近世社寺建築調査報告書集成は、全国規模で実施された近世社寺建築緊急調査の結果をまとめたもので、本論のように、棟持柱をもつ建築遺構にどのようなものがあるのかを全国規模で把握するには、すこぶる有効な資料である。しかしながら、近世社寺建築緊急調査は、文化庁の指導を受けながら都道府県別に実施され、どの都道府県も、概ね一次調査と二次調査の二段階で調査を行っている点は共通するものの、近世社寺建築の数が膨大



であるために、都道府県によって調査期間や捕捉対象にかなりのばらつきが見受けられる。調査の結果は、調査報告書に如実にあらわれており、都道府県によって、捕捉された建築遺構の数に相当の開きがある。また、二次調査は、写真撮影と平面図の実測までが一般的であるものの、都道府県によっては断面図まで実測しているところもあり、調査の密度も様々である。とりわけ、棟持柱をもつ建築遺構は、本殿や本堂に比べて注目されることの少ない小規模建造物に多くみられる傾向があり、そのような建築は、意匠的に優れた代表的遺構が捕捉されるのみで、調査の対象になっていないことが多い。実際に、筆者らが山梨県笛吹川流域で捕捉した若宮八幡宮拝殿は、梁行2間、桁行3間の小規模建造物で装飾もない簡素なものであるが、近世社寺建築緊急調査の対象となっていない。

とはいえ、本報告書が刊行されるまでは、そもそも近世社寺建築に関する調査自体がほとんど行われていなかったため、それを全国規模で実施し、一連の調査報告書として刊行されるに至ったことは、成果として大きい。また、宮城県の陸奥国分寺仁王門や奈良県の飛鳥坐神社拝殿のように、一部の地域においては、今までに取りあげられることのなかった棟持柱をもつ建築遺構が報告されている例もみられた。

以上から、捕捉した棟持柱をもつ建築遺構からは、社寺建築における棟持柱をもつ建築遺構の全体像までは読み取れないものの、その断片を読み取ることができる。本論が目指すのは、まさにこの断片から、社寺建築における棟持柱をもつ建築遺構のこれまでにない特質を明らかにすることである。したがって、捕捉された棟持柱をもつ建築遺構の種類や数をそのままその地域の傾向と判断するには注意が必要で、棟持柱構造が多雪地域に少ないのか否か、といった地域環境との関係で考察する場合など、棟持柱構造の分布数が考察で必要となる場合には、本報告書の結果だけでなく、過去に調査対象となっていない社寺建築も調査した上で判断する必要がある。いずれにせよ、社寺建築においては、棟持柱構造について不明な部分が多いため、地域を限定して悉皆調査をするなど、過去に調査されていない建築遺構も含めた考察が必要である。この種の調査は、今後の課題としたい。

## 第3章

### 八脚門にみえる棟持柱の建築的意義





### 第3章 八脚門にみえる棟持柱の建築的意義

#### 1 研究の目的

社寺建築<sup>注1)</sup>と民家建築の構造は、軸部と小屋組が分離しない棟持柱構造と、軸部と小屋組が分離する軸部・小屋組構造に大別できる。このうち、本論が研究対象とするのは、社寺建築における棟持柱構造である。

社寺建築と民家建築を棟持柱構造であるか否かといった観点から捉えると、民家建築は、小屋などの小規模建造物から町屋や農家といった大規模建造物に至るまで、棟持柱構造の建築遺構が幅広く確認できる<sup>注2)</sup>。対して、社寺建築は、神明造や大社造といった神社本殿が棟持柱構造として著名であるものの、一般にそのほかの神社本殿や寺院本堂に棟持柱構造の建築遺構はみられない。しかしながら、四脚門や八脚門といった小規模建造物まで含めると、社寺建築においても、棟持柱構造の建築遺構を確認することができる。

まず、四脚門は、一般に、軸部・小屋組構造のものが和様とされるのに対し、棟持柱構造のものは禅宗様とされる。このうち禅宗様四脚門には、重要文化財に指定されているものも多く、雲樹寺四脚門（1322）、建仁寺勅使門（鎌倉後期）など、中世にまで遡る建築遺構もある<sup>注3)</sup>。また、その所在地は、鎌倉や甲州などの禅宗の拠点地に多いものの、そのほかの地域にも幅広く分布し、近世には神社建築にもみられる。したがって、棟持柱構造の四脚門は、当初、一つの建築様式として禅宗建築を中心に採用されていたものの、くだっては、寺院・神社を問わず、幅広く採用されてきた。

他方、八脚門で棟持柱構造をなす建築遺構は、四脚門に比べて数が少なく、特別な名称もない。『浅草寺二天門修理工事報告書』を執筆した丸本英司によれば、重要文化財の建築遺構としては、浅草寺二天門と観音寺仁王門の2例があるのみで、関東地方の指定文化財をみても金井加里神社随神門と神部神社随神門があるのみである。さらに、丸本は、これらの八脚門が棟持柱構造をなす理由について、妻壁の構造が禅宗様四脚門の構造に類似していることから、棟持柱構造の八脚門は、禅宗様四脚門から影響を受けたのではないかと推測する<sup>注4)</sup>。しかし、丸本は、浅草寺二天門以外の八脚門を対象に、妻壁の構造について、断面図を用いた架構全体での検証までは行っておらず、八脚門が棟持柱構造をなす理由については、依然として不明瞭なままである。また、丸本以外に、棟持柱構造の八脚門について、軸部と小屋組の分離・非分離の観点から考察したものは管見のかぎりなく<sup>注5)</sup>、これまで棟持柱構造の八脚門は、軸部と小屋組の分離・非分離の観点から積極的に研究対象とされてこなかった。さらに、棟持柱構造の八脚門は、浅草寺二天門こそ修理工事報告書が刊行されているものの、その他の建築遺構については、大規模な修理工事等が行われていないこともあって、個別の報告書が刊行されていない。実際に、観音寺仁王門は、『青梅市の近世社寺建築』に簡単な所見と写真資料、平面図が掲載されているのみであるし<sup>注6)</sup>、

金井加里神社随神門と神部神社随神門についても、『山梨県の近世社寺建築』に簡単な所見と写真資料、平面図が掲載されているのみで断面図はない<sup>注7)</sup>。つまり、棟持柱構造の八脚門は、これまで、架構全体がわかる資料そのものが十分に整備されていない状況にある。

ここで、棟持柱構造の八脚門について、断面図を用いた厳密な検証を行い、棟持柱構造を採用する意義を建築的に明らかにする必要がある。

丸本が指摘した棟持柱構造の八脚門のうち、金井加里神社随神門と神部神社随神門の2例は、ともに山梨県甲州市にある。また、甲州市にかぎらず山梨県の北東から南西にかけて流れる笛吹川の流域は、棟持柱構造の民家が多数遺存していることで全国的にも著名である。先行研究においても、平成15年度に、山梨市牧丘町を中心とし、複数の民家と付属屋について実測調査を行った。さらに、このときの調査では、神明造や大社造に分類されない棟持柱構造の神社建築として、若宮八幡宮拝殿を発見し実測調査を行った<sup>注8)</sup>。くわえて、この地域の寺院建築に着目しても、恵林寺四脚門<sup>注9)</sup>や向嶽寺山門といった棟持柱構造の四脚門が豊富に確認されるとともに、清白寺庫裏<sup>注10)</sup>や雲峰寺庫裏<sup>注11)</sup>といった庫裏にも棟持柱構造の建築遺構がみられる。このように、笛吹川流域は、民家と社寺の区別なく棟持柱構造の建築遺構が豊富にのこる貴重な地域である。したがって、この地域に所在する金井加里神社随神門や神部神社随神門については、軸部と小屋組の分離・非分離の観点からも、まずもって実測調査を行い、厳密に検証する必要がある。

また、山梨県教育委員会は、昭和56年度に山梨県近世社寺建築緊急調査を二次にわたって実施した。その成果は、昭和58年に『山梨県の近世社寺建築』(1981)として刊行され、金井加里神社随神門と神部神社随神門についても、この報告書に掲載されている<sup>注12)</sup>。しかし、このときの調査は、緊急調査という名称からもわかるように、時間的な制約があつてすべての建物を網羅的に調査したわけではなかった<sup>注13)</sup>。そのため、金井加里神社随神門や神部神社随神門以外にも棟持柱構造の八脚門が存在する可能性が十分に考えられる。

以上をふまえ、本論では、金井加里神社随神門や神部神社随神門のように、すでに棟持柱構造であると判明している建築遺構のみならず、過去に調査されていない建築遺構も含めて研究対象とし、山梨県笛吹川流域を中心に、棟持柱構造をなす八脚門の建築遺構調査を実施する。さらに、捕捉された棟持柱構造の八脚門については、平面図のみならず、架構全体の状況が把握できる断面図等もあわせて実測する。そして、捕捉された建築遺構図面にもとづき、本論では、軸部と小屋組の分離・非分離の観点から、八脚門における棟持柱の建築的意義を明らかにしていく。

## 2 研究の対象と方法

八脚門について、『建築大辞典〔第2版〕』に、「やつあしもん〔八脚門〕大寺院に使われる門形式の一。4本の本柱と、その前後に配された8本の控え柱、つまり3間×2間の

門。屋根は切妻造で、本瓦、桧皮、銅瓦、柿板などで葺く。通常は中央の柱間のみを通路とする」<sup>注14)</sup>とある。金井加里神社随神門および神部神社随神門は、桁行3間、梁行2間、桁行中央1間を通路とした屋根が切妻・鉄板葺（以前は茅葺）の八脚門である。とはいえ、八脚門は屋根が切妻ばかりではない。伊藤延男によれば、「八脚門の屋根はたいてい切妻造であるが、中世には入母屋造のものも造られた」<sup>注15)</sup>とあり、浜島正士も、「八脚門は本来切妻造としたが、中世以降では入母屋造もみられる」<sup>注16)</sup>とし、入母屋造の場合もある。たとえば、重要文化財指定の雲峰寺仁王門（甲州市）は、軸部・小屋組構造の入母屋造である<sup>注17)</sup>。また、ここに寄棟に関する記述はみられないものの、民家において寄棟屋根が豊富にあることをふまえると、八脚門においても寄棟がないとはいきれない。よって、本論では、切妻、入母屋、寄棟といった屋根形式にかかわらず、棟持柱構造の八脚門を研究対象とする。

調査方法としては、まず、『山梨県の近世社寺建築』に掲載されている八脚門について、棟持柱構造であるか否か現地確認を行う。また、金井加里神社随神門や神部神社随神門が甲州市にあることから、現地調査は、甲州市から行っていく。このとき、過去に調査対象となっていない八脚門もあるため、『山梨県道路地図』<sup>19)</sup>を参照しつつ、可能なかぎり多くの社寺を調査する。さらに、外観からは棟持柱構造であるか否か判断できないものもあるため、そのような八脚門については、所有者の了解をえて、小屋裏を確認させてもらうなどして棟持柱構造であるか否か確認していく。くわえて、より広範囲の建築遺構を把握するため、甲州市周辺の自治体についても現地調査を実施する。現地調査は、甲州市から笛吹川流域を徐々に西方に向かって行っていく。現地調査を行った地域は、自治体別にみると、甲州市、山梨市、笛吹市、甲府市、甲斐市、中央市、韮崎市、南アルプス市、昭和

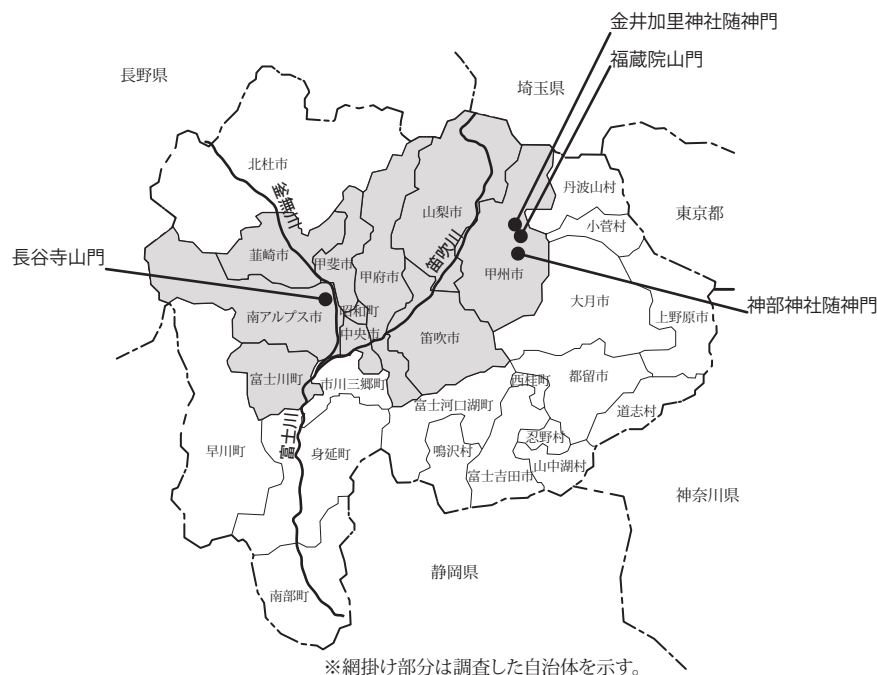


図1 調査範囲と棟持柱構造の八脚門の位置

町、富士川町の計 10 自治体に及んだ（図 1）。

現地調査の結果、金井加里神社随神門、神部神社随神門の 2 例にくわえ、福蔵院山門、長谷寺山門の 2 例も棟持柱構造の八脚門であることが判明した。このうち、神部神社随神門については、現在、保存修理工事中のために全解体されていて実測調査を行えなかったものの、金井加里神社随神門、福蔵院山門、八田山長谷寺山門の計 3 例は、所有者の了解をえて実測調査を行うことができた。つぎに、実測した建築遺構に基づき、各々の建築的特質を検証する。

### 3 棟持柱構造の八脚門

#### 3-1 金井加里神社随神門

金井加里神社は、甲州市東部の上条集落に位置し、本殿が昭和 39 年（1964）に山梨県指定文化財に指定され、随神門が平成 8 年（1996）に塩山市指定文化財（現：甲州市指定文化財）に指定されている。また、上条集落は、平成 16 年度（2004）に、日本ナショナルトラストによって民家調査が行われた地域でもある。このときまとめられた『上条集落の切妻民家群』<sup>20)</sup>には、民家に関する報告にくわえ、大河直躬執筆による社寺建築の調査報告もある。このなかに金井加里神社随神門に関する記述もあり、「妻の中央の柱を棟まで伸ばし、前後の柱の上から曲線状の海老虹梁を、中央の柱の上部に架けるのは、唐様の手法である」とし、建設年代は本殿と同じ頃（1668 年）と推定している<sup>注 18)</sup>。しかし、この報告書には、『山梨県の近世社寺建築』と同様に、写真と簡単な平面図が添付されているのみで断面図や立面図がなく、これ以上の詳細な情報はえられなかった。そこで筆者らは、再度、平面図を実測するとともに、立面図や断面図についても実測調査を行った。

図 2 は、金井加里神社随神門の平面図（図 2-1）、立面図（図 2-2）、梁行断面図（図 2-3）である。まず、立面図をみると、中央の柱が礎石から一本の柱で立ち上がり、組物を介して棟木を支える棟持柱構造であることがわかる。さらに、棟持柱の上部から側柱にかけて海老虹梁が架けられるとともに、棟持柱と側柱が複数の貫や胴差しによってつながれていることがわかる。また、浅草寺二天門の立面図（図 3-2）と比較しても、海老虹梁の形状は異なるものの、棟持柱と 2 本の側柱が組物を介して桁ないし棟木を支える形状はそっくりであり、観音寺仁王門（写真 1）についても、棟持柱上部と側柱をつなぐ部材が海老虹梁ではなく繋ぎ梁であるものの、立面はほとんど同じ姿をなしている。しかしながら、金井加里神社随神門は、つぎのように、浅草寺二天門や観音寺仁王門とは明らかに異なる点が見受けられた。

金井加里神社随神門の棟通りにある 4 本の柱をみると、妻壁の 2 本のみならず、内側の 2 本の柱も棟木まで達していた。このことは、梁行断面図（図 2-3）をみるとさらに明らかで、中央通路両側の梁行は、妻壁とは異なり海老虹梁はないものの、棟持柱と側柱が複数の貫や胴差しで構成される形式であった。対して、浅草寺二天門の断面図（図 3-3）と



観音寺仁王門の現地写真（写真2）を確認したところ、これらの八脚門は、妻壁が棟持柱構造であるものの、中央通路両側の梁行について中央の柱が梁の下でとまった軸部・小屋組構造であった。さらに、金井加里神社随神門の中央2本の棟持柱は、上部に天井が設けられているため、中央通路からは棟持柱構造であるか否か不明で、小屋裏に入ってはじめて棟持柱構造であることが判明した。

このように、金井加里神社随神門、浅草寺二天門、観音寺仁王門は、棟持柱構造という共通の特質をもつものの、4面ある梁行すべてをみたときに、浅草寺二天門および観音寺仁王門は、妻壁のみが棟持柱構造であるのに対し、金井加里神社随神門は、妻壁のみなら

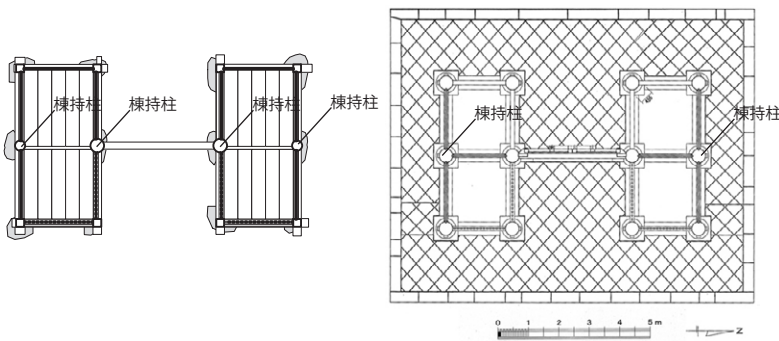


図 2-1 金井加里神社随神門  
平面図 1/150  
(資料編 273 頁)

図 3-1 浅草寺二天門 平面図 1/250

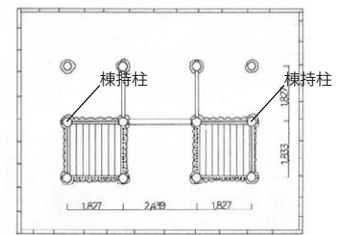


図 4 観音寺仁王門 平面図 1/250

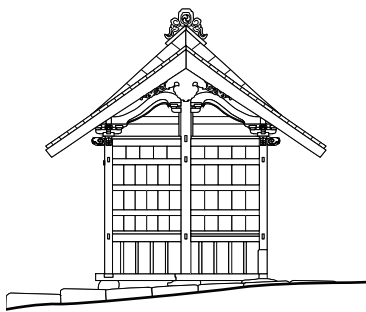


図 2-2 金井加里神社随神門  
立面図 1/150  
(資料編 273 頁)

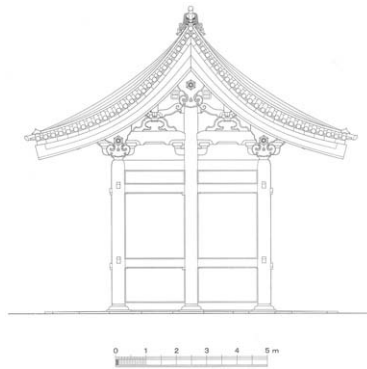


図 3-2 浅草寺二天門 立面図 1/250



写真 1 観音寺仁王門 側面

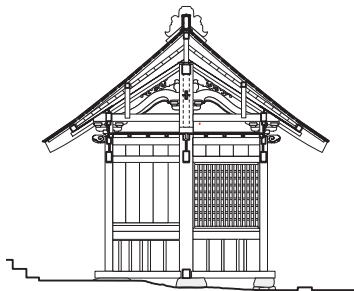


図 2-3 金井加里神社随神門  
梁行断面図 1/150  
(資料編 273 頁)

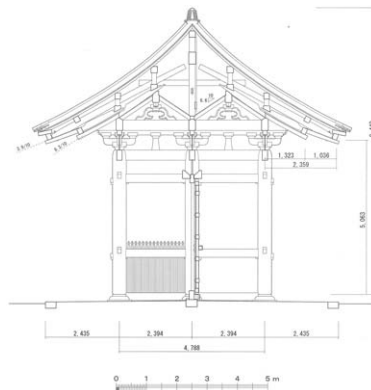


図 3-3 浅草寺二天門 断面図 1/250



写真 2 観音寺仁王門 通路上部

ず内側2面も含めたすべての梁行が棟持柱構造となっており、架構全体を見渡したときに構造的な差異がみられた。

### 3-2 福蔵院山門

福蔵院山門は、金井加里神社にいたる参道沿いに位置している。この八脚門は、平成23年5月20日に金井加里神社随神門を実測調査した際に発見したもので、桁行3間、梁行2間、銅板葺、平入、桁行中央1間を通路とし、上部に天井が設けられている。これらの点は金井加里神社随神門と共通するものの、屋根が切妻でなく入母屋であった<sup>注19)</sup>。そのため、金井加里神社随神門とは異なり、外観からは、一見、軸部・小屋組構造をなしているようであった。しかし、福蔵院山門の棟通り4本の柱のうち、内側2本の柱は、天井とのおさまりが金井加里神社随神門の形状に類似していたため、ご住職の了解をえて小屋裏を確認したところ、棟持柱構造であることが判明した。

図5は、福蔵院山門の平面図(図5-1)、梁行立面図(図5-2)、梁行断面図(図5-3)である。天井が設けられているため、通路から上部をみても棟持柱構造であるか否かわからないが、梁行断面図にあるように、中央2本の柱は、一本の柱で礎石から立ち上がり棟木近くまでのびている。

しかしながら、この柱の先端は、接ぎ木された束によって棟木が支えられているため、直接棟木を支えてはいない。とはいえ、福蔵院山門が、かつて茅葺屋根だったことをふまえると、改修の際に棟木まわりのおさまりは改変されていると考えられるから、以前は棟木を直接支えていた可能性がある。また、かつて茅葺であった姿が、たとえ棟木を直接支

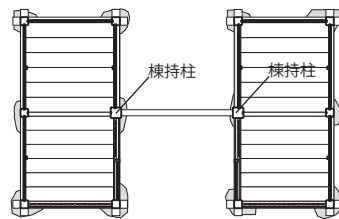


図5-1 福蔵院山門 平面図 1/150  
(資料編 275 頁)

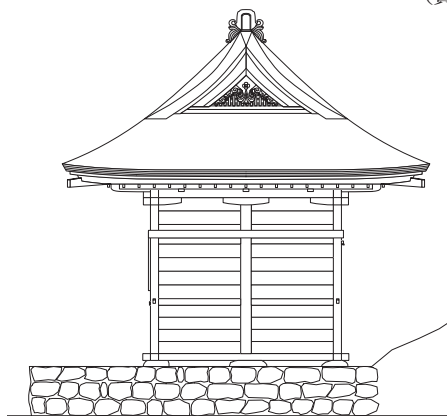


図5-2 福蔵院山門 梁行立面図 1/150  
(資料編 278 頁)

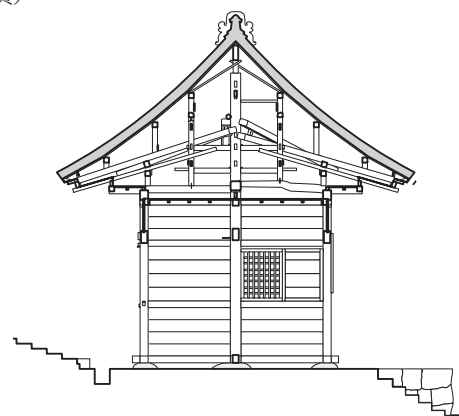


図5-3 福蔵院山門 梁行断面図 1/150  
(資料編 278 頁)

えていなかったとしても、側柱の高さで梁によって分断されずに棟木近くまでのびるこの構造は、途中に水平材が入ることなく軸部と小屋組が一体化していることから、広義の棟持柱構造といえ、棟持柱同様に重要な柱といえる。さらに、福蔵院山門の装飾らしい部材は、角柱上の舟肘木と中央通路上部に架かる虹梁の上ののった本墓股くらいであり、海老虹梁や柱の上下の粽といった一般的な禅宗様建築の諸特徴をもっていなかった。

これまで把握されていた棟持柱構造の八脚門は、立面に棟持柱の意匠をみせる切妻の八脚門であった。他方、福蔵院山門は、立面に棟持柱があらわれることがなく、小屋裏を確認してはじめて棟持柱構造と判断できる入母屋の八脚門であった。さらに、福蔵院山門は、細部意匠に、禅宗様建築の諸特徴がみられないことから、棟持柱構造の八脚門には、禅宗様といった建築様式では説明できないものがある、と考えられる。

### 3-3 長谷寺山門

金井加里神社随神門と同様に、屋根が切妻をなす棟持柱構造の八脚門を、甲府盆地西部の南アルプス市にある長谷寺においても発見した。

長谷寺は、真言宗の寺院で、昭和 25 年（1950）に重要文化財指定を受けた本堂が著名である。今回、棟持柱構造の八脚門として実測調査を行ったのは、本堂の南に位置する山門で、本堂とは対照的に、現在まで重要文化財のみならず県や市による文化財指定も受けていない。そのため、これまで山門は、本堂に比べて建築的な情報がほとんど蓄積されてこなかった。たとえば、『山梨県史 文化財編』のなかで、関口欣也は、本堂について記述するものの山門については何も記していない<sup>注20)</sup>。また、昭和 56 年（1981）に実施された山梨県近世社寺建築緊急調査の際も、長谷寺山門は一次調査の調査対象にすらなっておらず<sup>注21)</sup>、これまで長谷寺山門の架構は、軸部と小屋組の分離・非分離の観点からまったく注目されていなかった。

図 5 は、長谷寺山門の平面図（図 6-1）、梁行立面図（図 6-2）、梁行断面図（図 6-3）である。建築の概要は、桁行 3 間、梁行 2 間、切妻、平入、銅板葺で、金井加里神社随神門とあまり変わりはない。また、その平面は、仁王像が安置されている部分に床板が張られている

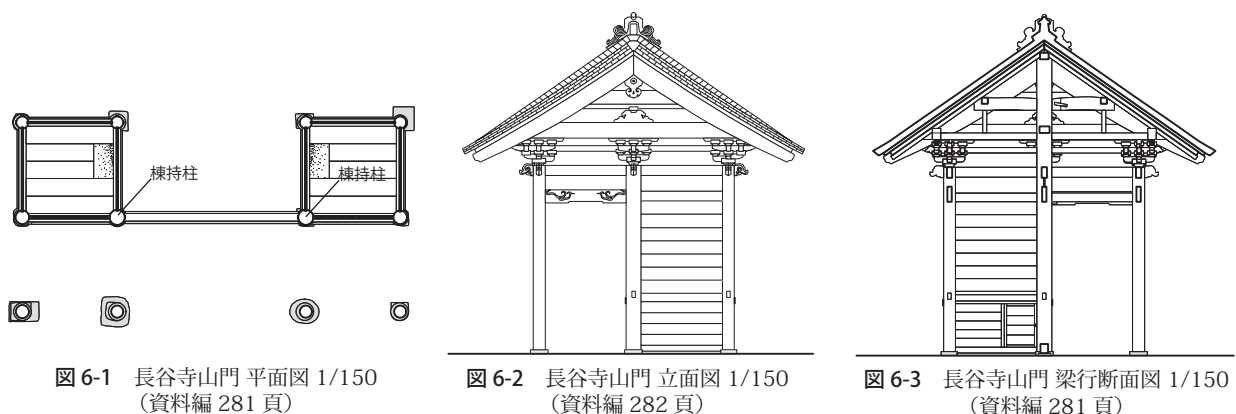


図 6-1 長谷寺山門 平面図 1/150  
(資料編 281 頁)

図 6-2 長谷寺山門 立面図 1/150  
(資料編 282 頁)

図 6-3 長谷寺山門 梁行断面図 1/150  
(資料編 281 頁)

ものの、中央1間の通路と、棟通りを境とした前面1間が、床のない土間空間をなしている。

つぎに、長谷寺山門の立面図をみると、同じ切妻である金井加里神社随神門とは異なり、軸部・小屋組構造をなしていることがわかる。他方、断面図をみると、中央通路両側の梁行は、側柱の高さで途切れることなく棟木まで一本の柱がとおる棟持柱構造であった。また、金井加里神社随神門および福蔵院山門は、中央通路の上部に天井が設けられており、小屋裏を確認しないと棟持柱構造であることがわからなかった。対して、長谷寺山門は、中央通路上部に天井が設けられていないため、山門の内側から頭上を見上げると、2本の棟持柱が礎石から一本の柱で途中で途切れることなく棟木までとおる内部架構をみることができる。

これまでの考察をまとめると、棟持柱構造の八脚門は、金井加里神社随神門のように、切妻で妻壁が棟持柱構造をなす建築遺構のみならず、入母屋や切妻で内側が棟持柱構造をなす建築遺構もあった。とりわけ、今回実測調査した3例の八脚門は、内側2面に棟持柱をもつという共通の特質をみることができた。さらに、この内側2面の棟持柱構造には2通りのものが確認できた。一つは、長谷寺山門のように、上部に天井が設けられていない場合で、棟持柱が内側からみえるものである。もう一つは、金井加里神社随神門や福蔵院山門のように、上部に天井が設けられている場合で、小屋裏に入らないと棟持柱構造であるか否かわからないものである。もしも、棟持柱構造の八脚門が、浅草寺二天門や観音寺仁王門のように、妻壁のみに棟持柱をもっているのなら、丸本のいうように、禅宗様四脚門の影響を受けて、棟持柱が意匠的な理由で採用された、と考えることができるだろう。とはいえ、捕捉した3例の棟持柱構造の八脚門のうち、妻壁に棟持柱をもつものは金井加里神社随神門のみで、むしろ、内側に2本の棟持柱をもつことが共通の特徴として捉えることができた。とりわけ、金井加里神社随神門や福蔵院山門のように上部に天井が設けられているにもかかわらず棟持柱構造としているのは、意匠的な理由で棟持柱構造としてるとは考えにくく、何か別の積極的な存在理由によって棟持柱構造を採用していると想起せざるをえない。

では、内側を棟持柱構造とする積極的な理由とは何か。この問いをとく鍵が、これまで民家に即して検証してきた、一連の棟持柱祖形論のなかにある。つぎに、既往研究で示された民家における棟持柱の建築的意義について外観し、つづいて、その知見をふまえ、八脚門にみえる棟持柱の建築的意義について考察する。

## 4 民家にみえる棟持柱の建築的意義

まず、八脚門と同様に、民家においても過去の研究ではずされがちであった小規模建造物を対象に、過去の研究成果をふまえて、棟持柱の建築的意義について考察する。

### 4-1 切妻小規模建造物



柱の脚部の構法は、一般に、掘立、礎、土台に分類され、このうち掘立は、地面に穴を掘ってうめるだけの最も簡単な構法である。小屋や附属屋といった小規模建造物は、専門の大工でない人々によってたてられるため、特別な加工の必要ない柱の脚部が掘立程度の簡素なものが多い。ここで、柱の脚部が掘立をなす棟持柱構造の実例を列举すると、国見のタキモノゴヤ<sup>注22)</sup>、今和次郎が採取した建物<sup>注23)</sup>、石原憲治のケミヤやウダツ屋<sup>注24)</sup>、宮本常一の木地屋の小屋<sup>注25)</sup>、山梨県のやぎごや等<sup>注26)</sup>と枚挙にいとまがない。これらに共通することは、切妻屋根をなし、梁行2間で内部に柱はなく、妻壁の中心柱が一本の柱で棟木を直接支えている点である。また、掘立柱は固定端とみなされ、そのみで自立することから、回転端とみなされる礎石建てのように、柱の上部をかためる必要はない。実際、国見のタキモノ小屋は、棟持柱の上部が股木になって棟木がのっているだけのきわめて簡素な建造物である。他方、掘立は、柱の脚部が土にうめられているので、耐久性の点で他の構法に比べて難点がある。とはいえ、掘立は、柱の脚部が腐ったりしないかぎり、合理的で安定性の高い構造であることから、切妻小規模建造物の場合、棟持柱は、建物の安定をえる上で構造的に重要な役割を担っている、といえる。

また、棟持柱構造の小規模建造物には、柱の脚部が土台をなしているものもある。長野県飯山市には、タテノボセといわれる棟持柱構造の小規模建造物が数多く存在している。早川慶春・土本俊和ほか「タテノボセと土台からみた小規模建造物」（以下、早川ほか（2007））<sup>27)</sup>では、タテノボセをもつ小規模建造物を23棟捕捉した。捕捉されたタテノボセをもつ小規模建造物は、このうちの大半である22棟が妻壁2面に棟持柱をもつとともに、柱の脚部に土台を敷いている。この構造の特質について、早川ほか（2007）では、「土台にほぞをほった接合部分は、構造力学的には「剛」の固定端として十分でないにしても、固定端に近い「緩い剛」である、と考えられる。「緩い剛」は、「固定端」ではないため、柱一本で自立を十分に維持しえないが、先述したように、棟持柱と管柱を水平材でつないだ「パネル」が架構全体でくまれて安定するので、土台の「緩い剛」接合とのくみあわせによって、十分に建物の架構が成立し得る」<sup>注27)</sup>と指摘した。掘立のように、柱の脚部が「剛」となって完全に自立していなくとも、土台と棟持柱が「緩い剛」によって一体のパネルを形成すれば架構が安定する、という説に本論も同感である。また、早川ほか（2007）によると、飯山地方にも軸部・小屋組構造の小規模建造物があるものの、そのなかには、雪の重みで小屋組が外側に傾いてしまった事例が報告されている<sup>注28)</sup>。このことは、軸部と小屋組が分離しない棟持柱構造の構造的特質を示す好例といえる。さらに、島崎広史・土本俊和「棟持柱構造と軸部・小屋組構造を併せ持つ切妻小規模建造物」（以下、島崎ほか（2006））<sup>28)</sup>では、一方の妻壁が棟持柱構造をなし、もう一方の妻壁が軸部・小屋組構造をなす実例を捕捉し、切妻が安定するためには、タテノボセを持つ小規模建造物のように妻壁2面に棟持柱をもっていなくとも、棟持柱を少なくとも1本残しておけば良いとした<sup>注29)</sup>。早川ほか（2007）および島崎ほか（2006）の研究成果からいえることは、

小規模建造物において棟持柱をもつということは、土台とセットになることで、軸部と小屋組が一体化して一つにパネルのようになる、という構造的側面があるといえる。

以上をふまえると、柱の脚部が掘立と土台という差異はあるものの、切妻小規模建造物において棟持柱は、構造的に重要である、と見通すことができる。しかし、以上にみた切妻小規模建造物は、梁行2間という大きさゆえに、妻壁に棟持柱をもつものの内側に棟持柱を有していなかった。よって、これまでの考察によってえられた棟持柱の構造的特質は、あくまで妻壁に関するものであって、内側に関するものではなかった。しかし、本論が研究対象とする八脚門は、妻壁よりはむしろ内側に棟持柱を有していることが共通であるため、その建築的意義を明らかにするには、内側に棟持柱をもつ建築遺構を対象に検討する必要がある。一般に、民家において内側に棟持柱をもつ建築遺構は、小規模建造物よりはむしろ大規模建造物に多い。以下、先行研究における成果にもとづき、大規模建造物における棟持柱の建築的意義について考察する。

## 4-2 切妻民家

先述のとおり、山梨県笛吹川流域の山梨市や甲州市周辺には、今もなお、屋根が切妻をなす棟持柱構造の民家（以下、笛吹川流域の民家）が数多く遺存している。先行研究では、平成16年度（2004）に18棟の切妻民家を実測調査した<sup>注30)</sup>。これらは、切妻小規模建造物と同じく、妻壁に棟持柱を有しているとともに、建物内部の土間・床土境に、一般に大黒柱と呼ばれる棟持柱を有している。

山梨県笛吹川流域の民家と同じく、屋根が切妻をなす大規模な民家として著名なものに、白川郷の合掌造がある。しかし、合掌造が笛吹川流域の民家と決定的に異なるのは、その構造が扱首を用いた軸部・小屋組構造をなす、という点にある。一般に、軸部・小屋組構造の民家は、柱と梁で軸部をかため、その上に2組の3脚をのせて小屋組の安定をえているため、屋根形が寄棟や入母屋をなす場合が圧倒的に多い。他方、合掌造のように、屋根形が切妻をなす場合は、寄棟や入母屋のように追い扱首を組み込めないため、安定性の高い3脚とならず2脚が複数あるのみで、小屋組の桁行方向が不安定になりやすい<sup>注31)</sup>。しかし、この難点に対し合掌造は、川島宙次によると、「各合掌間に「はがい」と呼ぶ折違を禿型に組みこむことによって合掌の倒壊を防いでいる」<sup>注32)</sup>。つまり、合掌造は、切妻という構造的に不安定になりやすい屋根形であるものの、屋根面にはがいを組み込むことによって構造的な安定をえている。

他方、同じ切妻である笛吹川流域の民家は、屋根面に「はがい」のような斜材を用いていないものの、軸部と小屋組が分離しない棟持柱構造であるため、そもそも軸部と小屋組の接合部の剛性にたよる必要がない。実際に、笛吹川流域の民家の妻壁は、格段に長く太い棟持柱とその両側の上屋柱・側柱が、多数の貫や胴差しでつながれ、妻壁が軸部と小屋組が一体となったパネルを構築している<sup>注33)</sup>。さらに、これと直行する平側についても、柱、

桁、足固めや土台、さらには貫や胴差しなどの水平材によって両側の妻壁が支えられている<sup>注34)</sup>。したがって、妻側と平側の双方が合理的な構造をなしている笛吹川流域の民家は、屋根面にはがいを用いなくても安定となる。このとき、妻壁にある棟持柱は、軸部と小屋組が一体となったパネルを構築するために、欠くことのできない構造的に重要な部材である。

また、軸部・小屋組構造の一般的な近世民家は、大きいもので桁行が10間にまでおよ

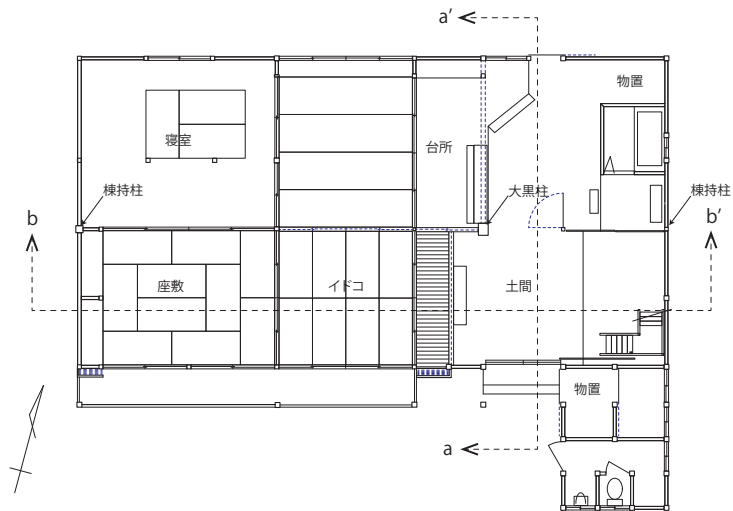


図 7-1 今井秀郎家住宅 1階平面図 1/200  
(資料編 178 頁)

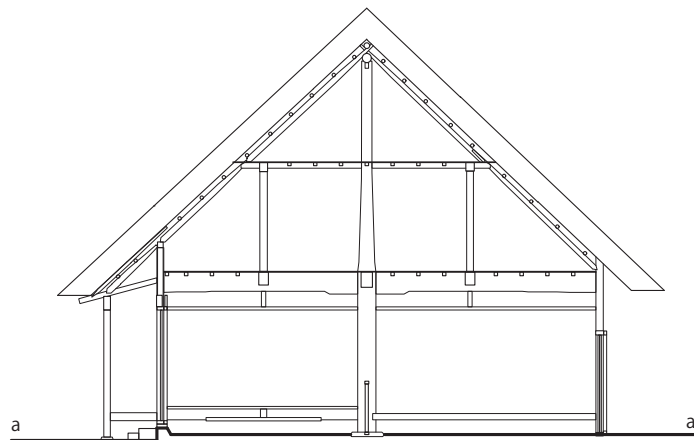


図 7-2 今井秀郎家住宅 梁行断面図 1/150  
(資料編 177 頁)

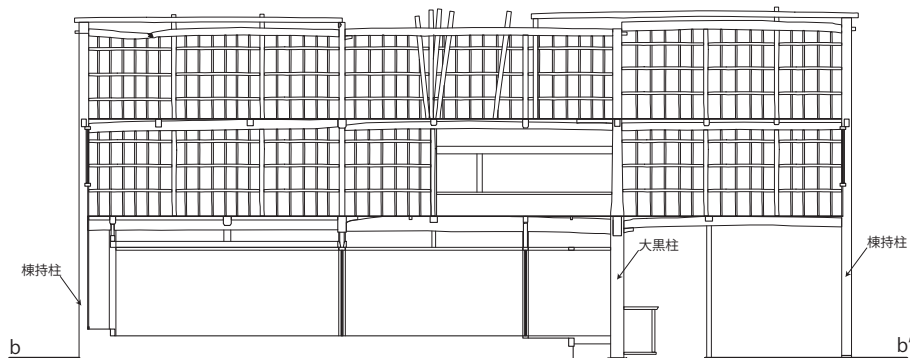


図 7-3 今井秀郎家住宅 桁行断面図 1/150  
(資料編 178 頁)

ぶ大規模建造物になるため、先の小規模建造物とは異なり、建物内部にも多くの柱を立てて柱と梁による軸部を構成し、その上の小屋組を支えている。しかし、同じく桁行が7間から10間におよぶ笛吹川流域の民家の場合、建物内部に多くの柱を立てるものの、その構造は、柱の上に梁をのせる構造ではなく、妻壁同様に地上から一本の柱で棟木を支える棟持柱構造が多い。そのため柱の上に梁といった水平材を組むのではなく、棟持柱に水平材を差し込む構造である。平成16年度に笛吹川流域で実測調査した18棟の民家をみると、このうち11棟は、妻壁2本にくわえ、内部にも1本の棟持柱をもつ。図7は、その実例である。また、18棟のうち1棟は、内部に2本の棟持柱をもっていた。これらの内部の棟持柱は、土間・床上境の位置にたち、一般に大黒柱と呼ばれている。滝澤秀人・島崎広史・土本俊和・遠藤由樹「ウダツと大黒柱—切妻民家の中央柱列における棟持柱の建築的差異—」(2006)<sup>33)</sup>では、この大黒柱とよばれる内部の棟持柱について、「大黒柱に差し込まれている梁をウシと呼び、大地震の時などでは、大黒柱の中心にウシがコウモリを畳んだようになり、大黒柱の傍らにいる人は助かる」<sup>注35)</sup>というヒアリング結果をふまえ、大黒柱と呼称される内部の棟持柱が、民家の構造の要になっていることを指摘した。さらに、笛吹川流域の民家の場合、小屋裏一面に床が張られていることから、この内部の棟持柱は、小屋裏に上がらないかぎり棟持柱であるか否か確認することができない。くわえて、この内部の棟持柱は、図7の今井秀郎家住宅を例にとれば、柱の長さが6.5m、柱の太さが最も太いところで320mm×260mmにもなる大材で、きわめて入手しにくい部材であろうことは想像に難くない。つまり、こういった大材にもかかわらず、棟持柱が内部に用いられていることは、棟持柱が構造的に有効であることをさらに裏付ける理由であろう。

このように、切妻をなす大規模な民家をみたとときに、棟持柱は、妻壁のみならず内部においても構造的に重要である、といえる。

#### 4-3 寄棟民家と入母屋民家

棟持柱構造と強い結びつきを有する切妻であるが、大規模な民家において切妻は、むしろ少数派に位置づけられ、寄棟や入母屋の場合の方が圧倒的に多い。また、その構造は、オダチ組や扱首組などの軸部・小屋組構造をなすことが一般的である。とはいえ、寄棟や入母屋においても、少数派ではあるものの、つぎに示すように棟持柱構造をなす建築遺構がある。内田健一・土本俊和「棟持柱構造から軸部・小屋組構造への転換過程」(以下、内田ほか(2002))では、『日本の民家調査報告書集成』<sup>35)</sup>から計88棟の棟持柱構造の民家を捕捉した<sup>注36)</sup>。これを屋根形式別に分類すると、切妻が56棟(63.6%)と圧倒的であるものの、そのほかに片入母屋6棟(6.8%)、片寄棟2棟(2.3%)、寄棟9棟(10.2%)、入母屋7棟(8.0%)、不明8棟(9.1%)あることが確認できる。ここでは、内田ほか(2002)の捕捉結果をふまえ、屋根形式が寄棟や入母屋等をなす棟持柱構造について棟持柱の建築的意義を確認する。

まず、片入母屋および片寄棟をみる。そのかたちは、一方の屋根が入母屋もしくは寄棟をなし、もう一方の屋根が切妻をなしているもので、この場合、切妻同様に、切妻をなす面に棟持柱を有し、軸部と小屋組が一体となったパネルを構築している。かたや、入母屋や寄棟をなす面は、小屋組が3脚となって安定をえている。さらに、笛吹川流域の民家と同じく、それらの多くが建物内部にも棟持柱をもっている。

つぎに、寄棟および入母屋をみる。この場合、切妻をなす面がないため、外部に棟持柱をもつことはなく、すべて内部に棟持柱をもっている。さらに、これらの屋根形式は、棟持柱を複数もつものもあるが、その多くは棟持柱が1本であり、大黒柱などがある土間・床上境に位置している。図8は、屋根が寄棟をなした棟持柱構造の実例で、静岡県伊豆の国市の上野家住宅である。これをみると、土間・床上境に太い棟持柱をもち、さらにザシキとヒロマの境にも、土間・床上境より細い棟持柱がある。

このように、切妻以外の屋根形式においても、建物内部の土間・床上境を中心に棟持柱をもっていることがわかる。

しかしながら、内田ほか（2002）の捕捉結果からもわかるように、入母屋や寄棟は、切妻に比べて棟持柱構造をなす建築遺構が少数派に位置づけられる。その理由の一つとして、切妻が構造的に安定をえるためには、少なくとも棟持柱を1本もっているか、はがいをもたなければならないのに対し、入母屋や寄棟は、対向する3脚が2組あることで、すでに小屋組が安定しており、必ずしも棟持柱を必要としない<sup>注37)</sup>。とはいえ、入母屋や寄棟の大規模建造物が構造的に安定をえるためには、桁行方向が長大であるために、対向する2組の3脚のみならず、その間に位置する内部構造も構造的に重要な役割を担っている。笛吹川流域の民家は、この内部の安定をえるために、内部構造の要として棟持柱を用いていたが、このことは入母屋や寄棟についてもあてはまる。つまり、切妻、入母屋、寄

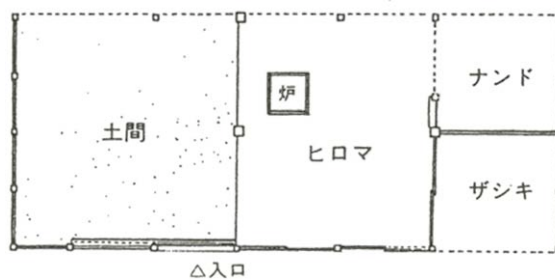


図 8-1 旧上野家住宅 平面図

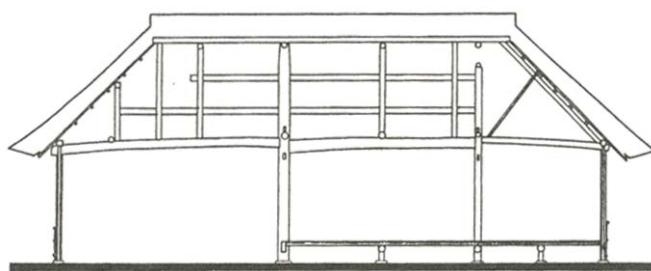


図 8-2 上野家住宅 桁行断面図

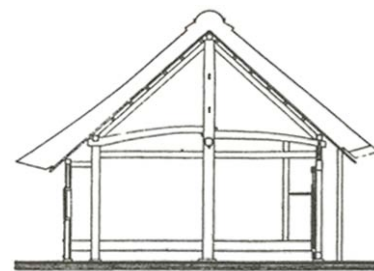


図 8-3 上野家住宅 梁行断面図



棟、片入母屋、片寄棟の棟持柱構造の実例からいえることは、屋根形式をとわず、構造的に有効であるがゆえに内部に棟持柱を採用している点である。

以上、これまでの棟持柱祖形論に関する一連の研究成果からおせば、八脚門についても、構造的な有効性が見出だされたがゆえに内側に棟持柱をもっている、と見通すことができる。ではつぎに、捕捉した八脚門について、より詳細に棟持柱の建築的意義について検証する。

## 5 八脚門にみえる棟持柱の建築的意義

### 5-1 平面にみる棟持柱の建築的意義

これまでの考察から、民家で内部に棟持柱をもつ場合、その多くが一般に土間・床上境に位置する柱で、一般に大黒柱と呼ばれていた。さらに、この大黒柱は、他の柱に比べて格段に太くつくられた民家の架構の要であった。では、八脚門の場合、内側に位置する棟持柱にどのような特質があるのか、この点を考察する。

八脚門は、一般に、正面に向かって左右対称になることから、棟持柱構造にした場合、棟持柱となる柱の数は、2本ないし4本といった偶数になる。捕捉した八脚門をみても、金井加里神社随神門は4本の棟持柱をもち、福蔵院山門および長谷寺山門は内側に2本の棟持柱をもつ。また、浅草寺二天門および観音寺仁王門は、妻壁に2本の棟持柱をもっている。

さらに、各八脚門の柱の太さや形に着目すると、まず、金井加里神社随神門は、計8本の側柱がすべて角柱をなしているのに対し（図2-1）、棟通りに位置する4本の棟持柱は、すべて円柱をなしている。さらに、この4本の棟持柱のうち内側2本の柱については、外側の柱よりも明らかに太くつくられている。つぎに、福蔵院山門の平面図（図5-1）をみると、すべての柱が角柱をなしており、このうち中央2本の棟持柱のみが、他の柱に比べて格段に太くつくられていることがわかる。また、長谷寺山門については、すべての柱が円柱をなしており、これも中央2本の棟持柱のみが他の柱よりも一回り大きくつくられている。

このように、捕捉した八脚門をみると、円柱と角柱の違いはあるものの、共通して内側2本の棟持柱が他の柱に比べて太く強調されたつくりになっている。他方、妻壁のみに棟持柱をもつ浅草寺二天門については、棟持柱であるか否かにかかわらず、すべての柱が同じ太さであった（図3-1）。このことは、観音寺仁王門の場合も同様であった（図4）。構造の要となった民家の大黒柱が、平面的にも他の柱よりも太くつくられている例からおせば、八脚門における内側2本の棟持柱についても、妻壁の棟持柱や他の管柱に比べてとりわけ重要な構造材であったがために、強調されて太くなっている、と考えられる。

### 5-2 断面にみる棟持柱の建築的意義



つぎに、捕捉された断面図に即して、垂直方向の観点から八脚門における棟持柱の建築的意義を考察する。まず、柱の脚部に着目すると、長谷寺山門の脚部はすべて礎をなしていた。対して、金井加里神社随神門と福蔵院山門の脚部は、礎と土台を併せ持っていた。しかし、内側の棟持柱の脚部については、すべての八脚門が共通して礎をなしていた。一般に、礎構造は回転端とみなせるから、それのみでは自立しない。しかし、捕捉された八脚門をみると、柱の脚部が礎であるものの、棟持柱と側柱が、地覆、貫、胴差しといった複数の水平材によって互いにつながれているため、先述の切妻民家のごとく、柱の脚部に土台を用いなくても、安定性の高い構造を構築していると考えられる。とはいえ、回転端とみなせる礎構造については、一断面による考察のみでは、平面骨組上の安定を確認することはできても、必ずしも架構全体の安定をえているとはいいきれない。そのため、架構全体で安定を確認するためには、梁行方向のみならず桁行方向についても、断面図を用いて考察する必要がある。本論では、梁行方向の断面図にくわえ、桁行方向の断面図も捕捉した。捕捉した桁行断面図は、図9（金井加里神社随神門）、図10（福蔵院山門）、図11（長谷寺山門）である。これらをみると、2本の棟持柱を中心に、棟持柱と側柱が、地覆、胴差し、貫、棟木といった複数の水平材によって互いにつながれており、安定した構造をなしている。つまり、棟持柱構造の八脚門は、棟持柱と他の柱が、桁行方向と梁行方向の双方において複数の水平材でつながれているため、柱の脚部が礎であっても架構全体が合

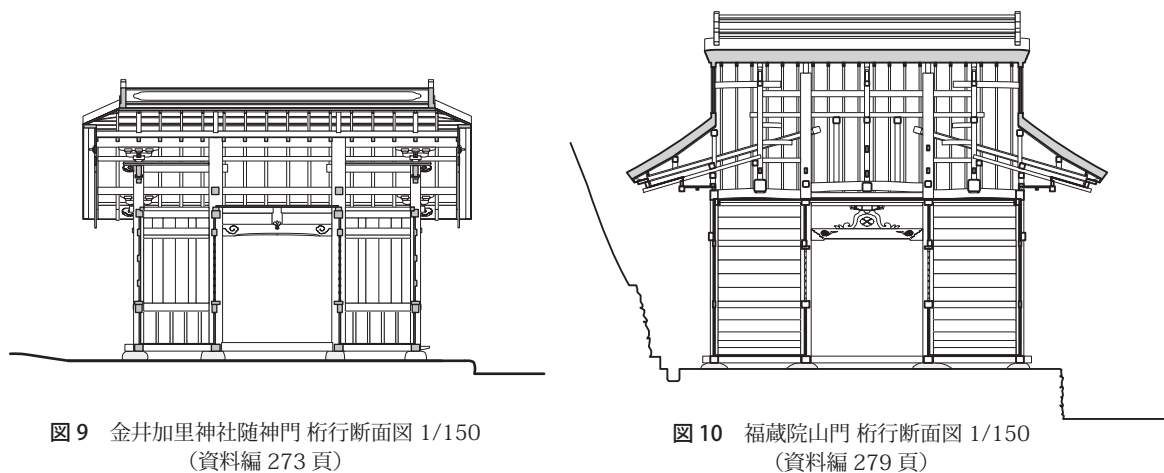


図9 金井加里神社随神門 桁行断面図 1/150  
(資料編 273 頁)

図10 福蔵院山門 桁行断面図 1/150  
(資料編 279 頁)

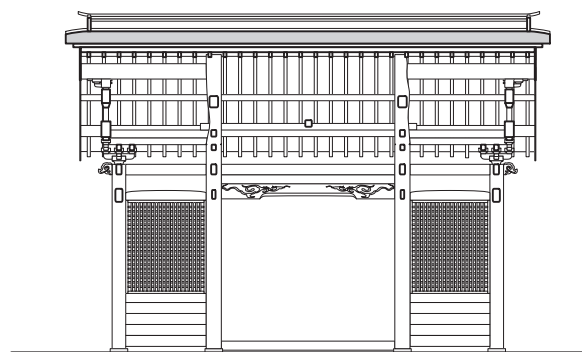


図11 長谷寺山門 桁行断面図 1/150  
(資料編 282 頁)

理的な構造となっている。さらにいえば、これらの内側に棟持柱をもつ八脚門は、2本の棟持柱とその上にのる棟木で構成される部分が構造の要になっている、ともいえる。対して、民家の場合、建物内部に複数の棟持柱があっても、格段に太く強調されているのは土間・床上境に位置する1本の棟持柱である。そして、この棟持柱は、一般に大黒柱と呼ばれ、この1本の大黒柱が構造の要をなしていた。つまり、民家と八脚門では、共通して棟持柱を構造の要として用いるものの、棟持柱が1本ないし2本という差異がみられる。

また、八脚門のように、2本の棟持柱とその上にのる棟木で構成される骨組みは、採用される部位こそ違うものの、京マチヤにみられる平側の出入口に類似している。土本俊和・坂牛卓・早見洋平・梅干野成央「京マチヤの原形・変容・伝播」(2008)では、初期洛中洛外図屏風に描写される京マチヤの平側に、掘立をなす2本の垂直材と、その上にのる楣で構成されている口(Π字型(ラージパイ))があることに着目し、マチヤの平側が自立する理由として、このΠ字型を構成する3本の部材のうち、2本の垂直材の脚部が掘立であることを指摘している<sup>注38)</sup>。つまり、京マチヤにおけるΠ字型の部分は、建物が安定となる上で欠くことのできない構成材といえる。対して、八脚門の場合、Π字型をなす3本の部材のうち、地上に接する部材が掘立ではなく礎であるため、Π字型の部分に、京マチヤのような桁行方向の自立を促し得る構造性はみられない。しかしながら、八脚門における2本の棟持柱と棟木によって構成されるΠ字型の部分が、京マチヤのように単純なΠ字型をなすのではなく、地覆、貫、胴差しといった複数の水平材が組みこまれたΠ字型をなしている。さらに、Π字型をなす部分は、これと直角方向にある各々の梁行において、複数の水平材で互いにつながれているから、京マチヤにみえるΠ字型のように掘立としなくとも、架構全体で安定がえられている。つまり、建物の安定をえる上で、京マチヤと八脚門では、Π字型の部分が担う構造的役割が異なっている、といえる。

また、このように八脚門が、梁行・桁行を問わず多くの柱を複数の水平材によって連結することができる理由としては、一般に、八脚門は、そのなかに人が入ることを主眼とした建造物ではなく、人がくぐるための建造物であるため、寺院本堂や庫裏といった建造物のように大規模な内部空間をもつ必要がないという点がある。つまり、八脚門は、人が居住するようなことがないため、広い内部空間をもつ必要はなく、一間間隔で柱を密にたち並べることができる。そのため、胴差しや貫といった複数の水平材によって柱どおしを連結することが可能となる。対して、寺院本堂や民家は、内部空間を必要とするため、すべての柱筋に柱を置くことはできず、水平材を入れる位置もかぎられてしまう。ゆえに、このような2本の棟持柱を中心とした架構は、人が居住することのない八脚門の特性が影響しているものと考えられる。

### 5-3 社寺と民家の小規模建造物にみえる建築技術の差異

『浅草寺二天門修理工事報告書』の中で、棟持柱構造は、軸部・小屋組構造に比べて「軸

部組立の難易度が増す」ためにたてにくい、と記されている<sup>注39)</sup>。また、「タテノボセ造り」に関するヒアリングによれば、大工の目からみると棟持柱構造は、軸部と小屋組が分離しないために柱の長さが異なり、さらに柱を一本一本立てていかなければならないため、たてにくいとのことであった<sup>注40)</sup>。このことについて、早川ほか（2007）では、柱を一本一本たてていかなければならない棟持柱構造も、柱の脚部に土台を用いることで柱の自立が可能となり、施工が容易になるという側面を指摘した<sup>注41)</sup>。タテノボセをもつ小規模建造物のように、専門の大工でない人々がつくったと想定される小規模建造物の場合、たてやすさという点で土台は、きわめて有益な構法である。しかしながら、八脚門の場合、柱の脚部が礎であるため、土台を用いた場合のたてやすさは期待できない。とはいえ、社寺建築である八脚門は、本堂や本殿に比べて小規模であるものの、組物等の使用をみてもわかるように、その施工は、高度な技術をもった専門の大工による。すなわち、これらの八脚門が、礎であるにもかかわらず、たてにくいとされる棟持柱構造を採用できたのは、社寺建築をあつかう高い技術をもち、かつ、棟持柱が構造的に有効であると認識した専門の大工の存在が大きかったものと考えられる。

## 6 小括

以上のように、本論は、山梨県笛吹川流域を中心に捕捉した棟持柱構造の八脚門を対象に棟通りに位置する棟持柱の建築的意義について検証してきた。

まず、これまで把握されていた棟持柱構造の八脚門は、浅草寺二天門や観音寺仁王門のように、屋根が切妻をなし、妻壁に棟持柱をもつかたちであった。これらは、そのかたちが、棟持柱構造の禅宗様四脚門に類似していることから、なかには、禅宗様四脚門から影響を受けたのではないかと指摘するものもあった。しかしながら、捕捉された八脚門は、金井加里神社随神門や長谷寺山門のように屋根が切妻をなす建築遺構のほか、福蔵院山門のように屋根が入母屋をなす建築遺構があった。また、金井加里神社随神門については、棟通り4本すべての柱が棟持柱であり、長谷寺山門および福蔵院山門については、妻壁に棟持柱はなく内側に2本の棟持柱をもっていた。つまり、これらの3つの八脚門は、内側に2本の棟持柱をもつという共通点をもっていた。

また、これまでの棟持柱構造に関する民家研究でえられた成果から、この内側の棟持柱は、構造的に重要であるゆえに採用されているのではないかと考えられた。上部に天井が設けられていて小屋裏に入らないと棟持柱構造であるか否か判断できない事例（金井加里神社随神門・福蔵院山門）や、内側2本の棟持柱のみが他の柱よりも太くつくられている事例（金井加里神社・福蔵院山門・長谷寺山門）は、棟持柱の構造的性が認識されていたことを示す好例であった。また、民家と八脚門の内部の棟持柱を比較したときに、民家においては、その多くが、土間・床上境に位置する1本の大黒柱が構造の要であったのに対し、八脚門については、内側の2本が構造の要となっていた。すなわち、八脚門は、この

2本の棟持柱を中心に、地覆、貫、胴差し、棟木といった複数の水平材を桁行方向と梁行方向に配して棟持柱と側柱を強固に連結することで、軸部と小屋組が一体となった安定的な架構を形成していた。

最後に、民家と社寺の小規模建造物を建築技術の観点から比較すると、民家の小規模建造物は、小屋などの比較的簡易な建物が多く、専門の大工ではない人々によって建てられた。そのため、この建物の脚部は、掘立ないし土台といった柱の自立を促し得る比較的施工のしやすい構法が用いられた。対して、社寺の小規模建造物である八脚門は、専門の大工によって建てられるため、掘立や土台に比べて建て方の難易度がます礎を採用することが可能であった。

以上、笛吹川流域で捕捉した八脚門について考察してきた本論の結論は、以下のとおりである。すなわち、棟持柱構造の八脚門には、禅宗様建築とは異なる系譜をもつ、棟持柱の有効性を構造的に見出だした建築遺構が存在する。

## 【注】

注1) 社寺と寺社の記述順序について、黒田龍二（参考文献1）303頁）は、江戸時代以前は、「寺社とするのが普通であった」とし、「寺社の順に記述することは、建築史学の立場を示すもの」とする。また、光井渉（参考文献2）15頁）も、近世の時点では「寺社」が用いられていたことから「寺社」という用語を用いている、とある。中世後期から近世を対象としている本研究も、本来であれば、「寺社」するところであるが、第2章「近世社寺建築調査報告書集成にみえる棟持柱をもつ建築遺構の特質」から一貫して「社寺」の記述順序を用いているため、用語の混乱をさけるために「社寺」を用いる。

注2) 参考文献3) 参照

注3) たとえば、参考文献4)～参考文献6)に、禅宗様四脚門の事例が紹介されている。

注4) 参考文献7) 88-89頁参照

注5) 近年の八脚門に関する研究に、参考文献8)～参考文献10)があるが、軸部と小屋組の分離・非分離に関する論考ではない。

注6) 参考文献11) 303-304頁参照

注7) 参考文献12) 95-97頁参照

注8) 参考文献13) 153-154頁参照

注9) 参考文献14) 参照

注10) 参考文献15) 参照

注11) 参考文献16) 参照

注12) 参考文献12) 95-97頁参照

注13) 昭和56年の山梨県近世社寺建築緊急調査は、二次にわたって行われた。参考文献12)を

みると、「第1次調査は県内の各市町村教育委員会に調査票が配布され、県内に残る社寺建築（国指定建造物、明治以降建立の建造物を除く）の抽出と所在地の確認が行われた。」とあり、「第2次調査は、（中略）第1次調査で提出された調査票によって、江戸時代初期以前の建立になるすべての遺構、江戸時代中期の建立では保存状態の良好なものを選択し、遺構数の多くなる江戸時代中期以降のものについては、保存状態が良く、かつ意匠の優れたもの、類例の少ない希少なものの、典型例を有するもの等、貴重と思われる遺構のみを選択した」とつづける。さらに、「この第2次調査で第1次調査の抽出から漏れた建築を調査者の判断で追加した事例もある。また、主要な遺構を第2次の調査対象にしなかった場合も考えられる。しかし今回の調査によって山梨県近世社寺建築の実態や特徴がある程度判明したので、今後の保存事業の判断基準を提示しえたと思う」と記す。

注14) 参考文献17) 1665-1666 頁引用

注15) 参考文献4) 111 頁引用

注16) 参考文献6) 111 頁引用

注17) 参考文献18) 参照。福蔵院から東へ直線距離にして2km くらいの位置に、重要文化財の雲峰寺仁王門がある。この仁王門は、桁行3間、梁行2間、寄棟、平入、平屋で、軸部と小屋組が分離した構造である。また、福蔵院から西へおよそ5km の位置にある放光寺仁王門（資料編291-294 頁）も、軸部と小屋組が分離した構造である。

注18) 参考文献20) 88 頁参照

注19) 参考文献21) には、福蔵院山門についても記されている。大河によれば、福蔵院山門は、かつて福蔵院の近くにあった不動堂の仁王門を移築したもので、元は茅葺、寄棟造、17世紀後期の建設と推定され、写真と平面図が添付されている。しかし、金井加里神社随神門と同様で断面図はなく、福蔵院山門の最大の特徴である棟持柱構造である点はふれられていない。

注20) 参考文献22) 98-99 頁参照

注21) 参考文献12) 3-4 頁に掲載されている「第1次調査市町村別棟数一覧」の南アルプス市（旧八田村）の欄に、そもそも寺院建築の門が全く拾われていない。

注22) 参考文献23) 参照

注23) 参考文献24) 355-360 頁参照

注24) 参考文献25) 176-178 頁、193-196 頁参照

注25) 参考文献26) 92 頁参照

注26) 参考文献13) 187 頁参照

注27) 参考文献27) 231-232 頁引用

注28) 本論における棟持柱構造の「構造」とは、軸部・小屋組構造との対比において、棟木まで一本の柱で通っているという棟持柱そのものが有している特質を指す。したがって、建造物の架構において棟持柱がどのような役割を果たしているのかを、構造計算等によって力学的に証明する構造力学的観点における「構造」を意味しない。実際に、参考文献17) の「構造」



の項（535頁）に、つぎのように記されている。

①建築物を構成する要素のうち、自重、積載物をはじめ風圧力や地震力に抵抗することを主要目的として空間を形成するもの。たとえば柱、梁、壁などを指し、また骨組と同じ意味に用いられることもある。

②建築物の設計に当たって、力学的な安全性の確保を検討しながら空間構成に参加する構造設計の部門。

③建築物の建造、組立て。

④→こうせい（構成）

本論における「構造」とは、まさに上記の①に当てはまり、木造骨組の中の棟持柱そのものを示す。他方、構造計算による力学的検討については、上記の②に当てはまるといえる。

注 29) 参考文献 28) 参照

注 30) 参考文献 13) 参照

注 31) 参考文献 29) 参照

注 32) 参考文献 30) 130 頁引用。なお、このことについては、すでに、参考文献 28) にて言及した。

注 33) 参考文献 31) 310-312 頁参照

注 34) 参考文献 32) 184 頁参照

注 35) 参考文献 13) 216-217 頁引用

注 36) 参考文献 34) 参照

注 37) 参考文献 29) 参照

注 38) 参考文献 32) 参照

注 39) 参考文献 7) 89 頁引用

注 40) 参考文献 13) 300 頁参照。なお、このことについては、すでに、参考文献 27) において指摘した。

注 41) 参考文献 27) 231-232 頁参照

## 【参考文献】

- 1) 黒田龍二『中世寺社信仰の場』（思文閣出版、1999）
- 2) 光井渉『近世寺社境内とその建築』（中央公論美術出版、2001）
- 3) 土本俊和編著『棟持柱祖形論』（中央公論美術出版、2011）
- 4) 伊藤延男『古建築のみかた』（第一法規出版、1969）
- 5) 岡田英男編『門 日本の美術 212』（至文堂、1984）
- 6) 濱島正士『寺社建築の鑑賞基礎知識』（至文堂、1992）
- 7) 文化財建造物保存技術協会『重要文化財浅草寺二天門修理工事報告書』（宗教法人浅草寺、2010）



- 8) 松尾圭三・渡辺洋子「穴切大神社随神門の大工について」(『2002 年度 日本建築学会大会学術講演梗概集(北陸) F-2』(201-202 頁、2002))
- 9) 松田治子・松岡高弘・有富慎也「旧柳河藩域における神社の神門の平面について—旧柳河藩における神社建築に関する研究 その 7—」(『2009 年度 日本建築学会大会学術講演梗概集(東北) F-2』(435-436 頁、2009))
- 10) 松岡高弘・松田治子・有富慎也「旧柳河藩域における神社の神門の通路上部の構成について—旧柳河藩における神社建築に関する研究 その 8—」(『2009 年度 日本建築学会大会学術講演梗概集(東北) F-2』(437-438 頁、2009))
- 11) 青梅市郷土博物館編『青梅市の社寺建築』(青梅市教育委員会、1988)
- 12) 山梨県教育委員会編『山梨県の近世社寺建築』(山梨県教育委員会、1983)
- 13) 土本俊和編『中世後期から近世に至る掘立棟持柱構造からの展開過程に関する形態史的研究 2001 年度～2003 年度 科学研究費補助金(基盤研究 C(2)) 研究成果報告書』(研究代表者土本俊和、2005)
- 14) 重要文化財恵林寺四脚門修理委員会編『重要文化財恵林寺四脚門修理工事報告書』(重要文化財恵林寺四脚門修理委員会、1971)
- 15) 文化財建造物保存技術協会編『山梨県指定有形文化財清白寺庫裏修理工事報告書』(文化財建造物保存技術協会、1989)
- 16) 重要文化財雲峰寺修理委員会編『重要文化財雲峰寺修理工事報告書<第 2 集>重要文化財雲峰寺庫裏修理工事報告書』(重要文化財雲峰寺修理委員会、1957)
- 17) 彰国社編『建築大辞典 第 2 版<普及版>』(彰国社、1993)
- 18) 重要文化財雲峰寺修理委員会編『重要文化財雲峰寺書院、仁王門修理工事報告書』(重要文化財雲峰寺修理委員会、1958)
- 19) 『県別マップル 19 山梨県道路地図<第 3 版>』(昭文社、2010)
- 20) 日本ナショナルトラスト編「平成 16 年度観光資源保護調査 上条集落の切妻民家群」(『日本ナショナルトラスト、2005])
- 21) 大河直躬「上条の宗教建築」(日本ナショナルトラスト編『上条集落の切妻民家群』日本ナショナルトラスト、86-89 頁、2005)
- 22) 山梨県編『山梨県史 文化財編』(山梨県、1999)
- 23) 土本俊和「各論 B 信州 3 国見の掘立棟持柱」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、215-217 頁、2011)
- 24) 今和次郎『今和次郎集 第 4 巻 住居編』(ドメス出版、1971)
- 25) 石原憲治『日本農民建築 第 5 輯(北陸、中部 I)』(南洋堂書店、1973)
- 26) 宮本常一『山に生きる人々 双書・日本民衆史 2』(未来社、1964)
- 27) 早川慶春・土本俊和・鶴飼浩平・梅干野成央「各論 B 信州 5 タテノボセと土台からみた小規模建造物」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、221-236 頁、2011)

- 28) 島崎広史・土本俊和「総論 7 棟持柱構造と軸部・小屋組構造を併せ持つ切妻小規模建造物」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、87-103 頁、2011)
- 29) 土本俊和「総論 8 民家のなかの棟持柱」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、104-116 頁、2011)
- 30) 川島宙次『滅びゆく民家—間取り・内部・構造—』(主婦と生活社、1973)
- 31) 滝澤秀人・土本俊和「考察 7 土台と棟持柱」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、303-314 頁、2011)
- 32) 土本俊和・坂牛卓・早見洋平・梅干野成央「各論 A 京都 4 京マチヤの原形・変容・伝播」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、175-194 頁、2011)
- 33) 滝澤秀人・島崎広史・土本俊和・遠藤由樹「各論 C 甲州 2 ウダツと大黒柱—切妻民家の中央柱列における棟持柱の建築的差異—」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、266-283 頁、2011)
- 34) 内田健一・土本俊和「総論 6 棟持柱構造から軸部・小屋組構造への展開過程」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、72-86 頁、2011)
- 35) 各都道府県教育委員会編『日本の民家調査報告書集成 1～16』(東洋書林、1997-1998)
- 36) 青梅市郷土博物館編『青梅市の社寺建築』(青梅市教育委員会、1988)
- 37) 源愛日児編『指物(指付け技法)の変遷過程と歴史的木造架構の類型化に関する研究 2001 年度～2004 年度 科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書』(研究代表者源愛日児、2005)

## 【出典】

写真 1) 筆者撮影

写真 2) 筆者撮影

図 1) 筆者作成

図 2-1) 筆者作成

図 2-2) 筆者作成

図 2-3) 筆者作成

図 3-1) 参考文献 7) 図面 1 頁

図 3-2) 参考文献 7) 図面 4 頁

図 3-3) 参考文献 7) 図面 5 頁

図 4) 参考文献 36) 305 頁

図 5-1) 筆者作成

図 5-2) 筆者作成

図 5-3) 筆者作成

図 6-1) 筆者作成

図 6-2) 筆者作成

図 6-3) 筆者作成

図 7-1) 筆者作成

図 7-2) 筆者作成

図 7-3) 筆者作成

図 8-1) 参考文献 37) 176 頁

図 8-2) 参考文献 37) 176 頁

図 8-3) 参考文献 37) 176 頁

図 9) 筆者作成

図 10) 筆者作成

図 11) 筆者作成

※ 図中の「棟持柱」の表記は筆者による。



## 第4章

### 笛吹川流域の民家

—四建ないしウダツ造に至る掘立棟持柱構造からの展開—





## 第4章 笛吹川流域の民家 —四建ないしウダツ造に至る掘立棟持柱構造からの展開—

### 1 研究の目的と方法

中世に遡る民家の形態を考える上で、宮澤智士は、「近世民家の地域的特色」(1983)にて貴重な指摘を提示した。すなわち、「甲府盆地の棟持柱をもつ切妻造りの民家について、関口欣也は、その分布が古代中世以来、早くから開けた盆地の東部笛吹川流域にのみ分布し、中世地侍の系譜をひく家に多いことから、その発生は戦国期に遡るであろうと指摘する(山梨県の民家)」<sup>注1)</sup>。

棟持柱構造は、地面から棟木を直接支える棟持柱をもった構造であり、軸部と小屋組が分離しない。つまり、宮澤による『山梨県の民家』の解釈は、甲府盆地東部笛吹川流域において、軸部と小屋組の分離しない棟持柱構造を、中世後期の姿とするものである。宮澤が参照した『山梨県の民家』(1982)は、関口欣也らを中心に実施された民家調査の結果であり、茅葺切妻の棟持柱構造を豊富な図面とともに収めた調査報告書である<sup>注2)</sup>。これがまとめられるまでに、つぎの経緯があった。まず、昭和37年度(1962)文部省科学試験研究費による「中部地方以西における近世民家の研究」の一部として、とりわけ古い民家の残る牧丘町と塩山市を中心に予備調査が実施された。その結果が関口「甲府盆地東部の近世民家」(1963)として発表された<sup>注3)</sup>。

「甲府盆地東部の近世民家」は、四建という「四本の柱をたてて四角な枠をつくり、この枠から四周に梁をだして側をつくる」<sup>注4)</sup>構造がふるい建て方という伝承から、梁の上に束をたてて棟木を支える構造をふるい形式とし、のちに、棟持柱をもった構造であるウダツ造へ移行する、という論点を提示した<sup>注5)</sup>。この論点にしたがえば、この地域の民家は、梁の上に束を立てて棟木を支える構造から軸部と小屋組に分離しない棟持柱構造に移行することになる。また、「甲府盆地東部の近世民家」をもとに、山梨県全域について本格的な民家調査を行った『山梨県の民家』は、「甲府盆地東部の近世民家」の論点を継承した。つまり、「近世民家の地域的特色」(1983)は、「甲府盆地東部の近世民家」(1963)および『山梨県の民家』(1982)と論点が異なる。

また、『上条集落の切妻民家群』(2005)は、切妻の棟持柱構造を特徴とする山梨県塩山市の上条集落を調査した、笛吹川流域に関する最も新しい報告書である。その論点は、四建を古制とし、そこからウダツ造へ移行するという点で、「甲府盆地東部の近世民家」と同様である<sup>注6)</sup>。

以上のような、四建をウダツ造りに先行する架構形式とする論点を、本論では四建先行説<sup>注7)</sup>と命名する。

四建先行説には、その論点や調査方法に、いくつかの難点がある。第一、軸部と小屋組

に対する視点を欠いていた。第二、四建と棟持柱構造が一つの架構の中で混在する形式をひと括りにしていた。第三、小規模建造物を除外していた。第四、掘立構造との関連を示さなかった。以上の四点を克服し、四建先行説を再検討する必要がある。

四建先行説にかぎらず、戦後の民家研究は、土本俊和によれば、戦前との対比で捉えたときに、「軸部と小屋組が分離していない棟持柱構造への関心が弱かった」<sup>注8)</sup>。すなわち、「甲府盆地東部の近世民家」や『山梨県の民家』が、多くの棟持柱構造を採集しながら、棟持柱構造にあまり関心を示さなかったのは、戦後の民家研究の多くにみられた傾向であった。対して、戦前の民家研究は、石原憲治が、『日本農民建築』にて、山梨県のウダツ・ウダチなどと称される棟持柱について豊富に言及していた<sup>注9)</sup>。とりわけ、甲府盆地東部の笛吹川流域は、宮澤が指摘するように、戦国期に遡る系譜が考えられる、中世の民家の形態を明らかにする上できわめて貴重な地域であるため、まずもって厳密に再検討されなければならない。

中世民家の形態に関する考察のなかに、棟持柱祖型論に即した一連の研究がある<sup>注10)</sup>。このうち、土本・遠藤「掘立から礎へ」(2000)は、中世後期の段階に梁行2間の掘立棟持柱構造があまねく存在していた、と推断した<sup>注11)</sup>。先述の宮澤による『山梨県の民家』の解釈はまさに棟持柱祖型論といえる。本論は、これらの先行研究をふまえ、中世の民家の形態を明らかにするために、とくに四建先行説を再検討する。また、本論は、笛吹川流域の建築遺構を、宮澤にならい「笛吹川流域の民家」と定義した上で、実測調査をおこなう。さらに、これによってえられた建築遺構図面にくわえて、文献史料<sup>注12)</sup>、絵画史料、発掘遺構史料、ヒアリングを用いて、四建先行説を再検討し、あらためて中世に遡る民家の姿を明らかにしていく。

## 2 笛吹川流域の民家

### 2-1 調査の概要

山梨県の甲府盆地東部を流れる笛吹川流域に塩山市（現：甲州市）と牧丘町（現：山梨市）がある。塩山市は、棟持柱構造の重要文化財高野家住宅があることで著名である。また、牧丘町は、1963年8月実施の予備調査のなかでとりわけふるい棟持柱構造が多く残っていると関口らが指摘した、「甲府盆地東部の近世民家」の母体となった地域である。

実測に先だち、まず笛吹川流域について棟持柱構造の残存状況を調査した。この予備調査は、2003年3月から7月にかけて計3回、5日間にわたって実施した。その結果、笛吹川流域のなかでも、東山梨郡の牧丘町と塩山市、さらに三富村（現・山梨市）一帯にかけて、多くの棟持柱構造の民家が残存していることを捕捉した。これを受けて、まず可能なかぎり、外観から棟持柱構造と判別できる建物のリストを作成した。このリストをもとに、各家庭に返信用の封筒を同封した実測調査依頼書を送付した。その結果、計24件から調査の了承をえた。日程調整を行った後、2003年8月から9月にかけて、一部は10

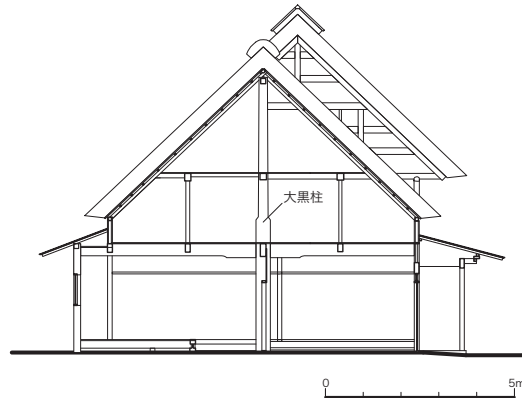


図1 三枝行雄家住宅主屋 断面図  
(資料編 155 頁)

月と11月に、建物の実測調査およびヒアリングによる本調査を実施した。表1は、民家調査によって採集した棟持柱構造のリストである。

表1に示すように、実測調査の結果、計28棟の棟持柱構造の建物を採集した。実測した建物の用途は、民家(18棟)、小屋(7棟)、門(1棟)、蔵(1棟)、堂(1棟)であった。以下、様々な観点より実測調査した笛吹川流域の民家について考察を行う。

まず、民家の構造をみると、ほとんどが図1の三枝行雄家住宅主屋(表1・1番)のようになんかの柱が棟木を直接支える棟持柱構造であり、その棟持柱から側柱へ太い梁を架け

表1 実測した28棟の棟持柱構造  
(資料編 154-201 頁に実測図面を掲載)

No	建物名	所在地	建築年代	種別	梁行(間)	脚部
1	三枝行雄家住宅	牧丘町北原	1800年頃	民家	4.50	礎/土台
2	三枝雪江家オクラ	牧丘町北原	20世紀前期	蔵	2.00	土台
3	三枝貞晴家住宅	牧丘町北原	115年前	民家	4.00	礎/土台
4	淡路栄家住宅	牧丘町北原	明治29年頃	民家	4.50	礎/土台
5	古屋古福家住宅	牧丘町北原	不明	民家	4.00	礎/土台
6	古屋茂富家住宅	牧丘町北原	明治29年以前	民家	4.50	礎/土台
7	若宮八幡宮拝殿	牧丘町北原	不明	神社拝殿	2.00	土台
8	佐藤一郎家住宅	牧丘町牧平	不明	民家	4.50	礎/土台
9	佐藤一郎家便所	同上	不明	小屋	不明	土台
10	佐藤一郎家物置小屋	同上	不明	小屋	不明	不明
11	戸田政守家住宅	牧丘町西保中	1700年頃	民家	4.00	礎/土台
12	奥山朝則家住宅	牧丘町西保中	不明	民家	4.25	礎/土台
13	戸田千恵子家便所	牧丘町西保中	不明	小屋	2.00	土台
14	今井秀郎家住宅	牧丘町西保中	不明	民家	4.00	礎/土台
15	直売処(奥山国良氏)	牧丘町西保中	平成11年	小屋	2.00	掘立
16	小田切幹雄家住宅	牧丘町西保下	150年前頃	民家	4.50	礎/土台
17	高原左門家住宅	牧丘町西保下	100年前頃	民家	4.50	礎/土台
18	山下政英家住宅	牧丘町西保下	不明	民家	5.00	礎/土台
19	山下牧郎家住宅	牧丘町西保下	明治初期	民家	4.00	礎/土台
20	山下牧郎家ヤギゴヤ	同上	5年前頃	小屋	不明	掘立
21	妣田圭子家便所	牧丘町倉科	不明	小屋	2.00	土台
22	藤原達男家住宅	牧丘町倉科	100年前移築	民家	4.00	礎/土台
23	赤池栄人家住宅	牧丘町倉科	不明	民家	4.00	礎/土台
24	赤池栄人家門	同上	不明	門	2.50	礎/土台
25	藤原金雄家住宅	牧丘町倉科	150年前	民家	4.50	礎/土台
26	水上重兵衛家住宅	牧丘町千野々宮	明治以前	民家	4.50	礎/土台
27	宮原久巳家住宅	塩山市小屋敷	文久 or 慶応	民家	4.50	礎/土台
28	キャンプ場スイズバ	三富村広瀬	不明	小屋	2.00	掘立

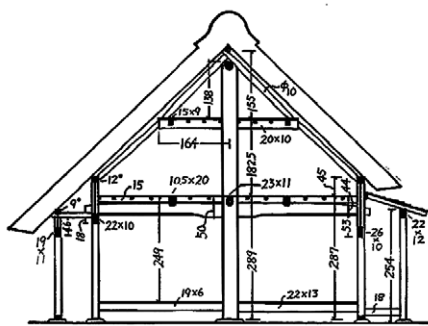


図2 虹梁造（高野正根家住宅）

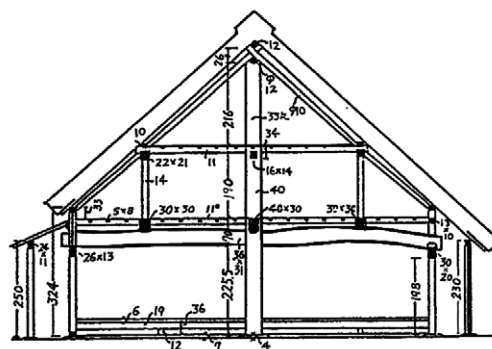


図3 ウダツ造（西川古寿家住宅）

る。この棟持柱構造は、虹梁造（図2）として『山梨県の民家』でも数多くみられ、「梁を野物とせず、ゆるく弓形にそらせた形状に木取るか、丈を大黒柱側で大、側柱上で小にして、下端を弓形に木取り、社寺建築の虹梁に似た角断面の梁が広まってゆく。この種の棟持柱構造を牧丘町の辺では虹梁造と呼び」<sup>注13)</sup>とある。さらに、『山梨県の民家』は、これに先行する構造にウダツ造（図3）をあげている。これは、虹梁造における梁が野物になっているものである。つまり虹梁造は、構造的にウダツ造と変わらないので、広義のウダツ造といえる。したがって、本論は、この虹梁造もウダツ造としてあつかう。四建先行説にしたがえば、このウダツ造に先行して四建がある。しかし、この説には先に述べたいくつかの難点がある。

では、笛吹川流域にみられる民家の架構は、遡れば、どのような姿であったか。まず、四建先行説の難点を確認し、つぎにそれらを克服する見方を提示する。

## 2-2 四建とウダツ造

四建先行説の第一の難点は、「軸部と小屋組に対する視点を欠いていた」点であった。この説は、「四本の柱をたてて四角な枠をつくり、この枠から四周に梁をだして側をつくる」構造がふるい建て方であるという伝承を根拠の一つとし、この四建から発展して、ウダツ造という中柱が棟持柱となった棟持柱構造へ移行したとする。ここで、ウダツ造と四建について、軸部と小屋組の関係でみると、ウダツ造は、一本の柱が棟木を直接支える棟持柱構造であり、軸部と小屋組に分離しない。対して四建は、二本の上屋柱が直接に母屋桁を支えるものの、棟木を支える材は梁の上にいる棟束であるから、中柱筋が軸部と小屋組に分離している。このように、二つの構造は異なる。しかし、「甲府盆地東部の近世民家」は、四建がウダツ造に先行すると推断する際に、四建とウダツ造の構造的な差異をほとんど説明しない。本論は、この難点を克服するために、梁行4間に即して、ウダツ造と四建の差異を構造的な観点から検証する。

建物の変わり方には、二通りある。第一は、建物がたてかえられた場合であり、第二は、部分的な改修による場合である<sup>注14)</sup>。ここで、四建先行説にみるごとく、四建からウダツ

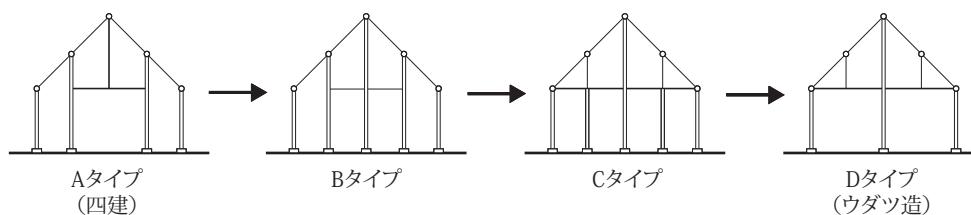


図4 四建先行説にみる四建からウダツ造への変容モデル

造へと移行すると仮定した場合、この二通りの変わり方は、四建からウダツ造に移行する際に、どのような影響を及ぼすのか。

まず、建物がたてかえられて四建からウダツ造へと移行する場合、四建の建物が一度とりこわされ、あらたにウダツ造の建物がたてられるので、なんら構造的な制約はなく、四建からウダツ造へは容易に移行する。しかし、部分的な改修によって四建からウダツ造へと移行する場合、つぎに示すように、その移行は容易でない。

図4は、四建先行説に即して、四建からウダツ造への変容過程を示した模式図である。四建がAタイプ、ウダツ造りがDタイプにあてはまる。建物が、たてかえられるのではなく、部分的な改修によって徐々に四建からウダツ造へ移行するには、まず、四建（Aタイプ）において、梁上で棟木を支える棟束は棟持柱となって、梁は左右に分断される（Bタイプ）。つぎに、母屋桁を直接支えていた柱は、棟持柱と側柱をつなぐ梁が入ることによって、小屋組における母屋束と軸部の柱に分断される（Cタイプ）。最後に、これら2本の柱が取り払われることによってウダツ造（Dタイプ）へ移行する。すなわち、四建（Aタイプ）からウダツ造（Dタイプ）への移行は、建物が部分的な改修による場合、一足飛びにはいかず、BタイプやCタイプの過渡的な形式を経る必要がある。実際、このBタイプについて『山梨県の民家』は、「県下古民家の構造の主流形式である」<sup>注15)</sup>と注目するものの、架構の変遷について論じた際、この構造に言及することなく、四建（Aタイプ）をふるい構造としている。

また、Bタイプの構造は、『山梨県の民家』が数多く掲げることから、その部分だけみれば、AタイプからBタイプとCタイプを経てDタイプへと徐々に移行しているように見える。しかし、Aタイプ（四建）は、BタイプやCタイプやDタイプ（ウダツ造）に先行する架構ではなく、これらはみな、一つの架構の中で混在していた。これは、四建先行説の第二の難点であって、「四建と棟持柱構造が一つの架構の中で混在する形式をひと括りにしていた」。

次節では、一つの建物の中で様々な構造が混在している架構について分析を進めつつ、笛吹川流域において中世に遡る民家の形態を明らかにしていく。

### 2-3 棟持柱構造と楣梁構えの双方を併せ持つ架構

『山梨県の民家』が四建をふるい構造と判断したもうひとつの根拠は、江戸初期の民家



に二本の上屋柱の間に楣梁をかけて棟束をたてた「楣梁構え」が多い点にある<sup>注16)</sup>。この「楣梁構え」が2面あると、「四本の高い柱を結ぶ堅古な杵組」ができて、「まさに四建と呼ぶにふさわしい構造である」とし、この構造が江川家住宅の四天柱構造に通じると指摘した上で、この楣梁構えをもつ民家が近世初期に遡る古民家に多いことをあげ、四建を古い構造形式と判断している<sup>注17)</sup>。

一方、『山梨県の民家』は、棟持柱に関する記述も数多くとりあげ、このうち、数は多くないものの、屋根が緩勾配の板葺民家を載せる。『山梨県の民家』は、「板葺古家では棟持柱が室町末から一七世紀にわたって使われていたようである」<sup>注18)</sup>とし、棟持柱構造が戦国期まで遡ることを指摘する。対して、屋根が矩勾配の茅葺切妻の民家については、「棟通りに柱をたてる必要がない梁行三間のものを除き、ほとんどの場合棟持柱がたつ」<sup>注19)</sup>とする。実際、『山梨県の民家』にある平面図と断面図をみると、最も古式とされる江戸初期の上野正氏宅（17世紀前期）は、「楣梁構え」であるとともに、片側妻面に棟持柱をもつから棟持柱構造でもある。さらに、「他の古例をみても、棟持柱は内部と外部各一本程度のものが多い」<sup>注20)</sup>とも記す。しかし、この記述の後、『山梨県の民家』は、棟持柱をもたない楣梁構えの民家二棟に注目し、「この地域では内部に棟持柱をたてないのが古制であろう」<sup>注21)</sup>と結ぶ。しかしながら、内田・土本「棟持柱構造から軸部・小屋組構造への転換過程」（2002）が、棟持柱構造とそうでない構造を併せ持つ架構を多数報告したように<sup>注22)</sup>、民家は架構一つのなかで梁行によって様々な構造を併せ持つ姿が一般的なのである。

では、この指摘をふまえ、棟持柱構造・楣梁構え・棟持柱構造と楣梁構えの双方を併せ持つ架構は、笛吹川流域にそれぞれどのように分布しているのか。この点を『山梨県の民家』に即して確かめる。

『山梨県の民家』は、楣梁構えの実例として14棟の民家<sup>注23)</sup>をとりあげ、実測調査した民家をプロットした「山梨県民家分布図」<sup>注24)</sup>を巻末に掲載する。これをもとに、棟持柱構造と楣梁構えの分布を示した図5は、以下の分類にしたがって、「山梨県民家分布図」をリライトしたものである。■は棟持柱構造と楣梁構えの双方を併せ持つ架構、●は棟持柱構造をもつ架構で楣梁構えを含まない架構、□は楣梁構えをもつ架構で棟持柱構造を含まない架構、○は棟持柱構造も楣梁構えもない架構である。

図5をみると、宮澤の指摘したように、棟持柱構造をもつ架構■●が笛吹川流域に集中し、そのほとんどが棟持柱構造をもつ架構で楣梁構えを含まない架構●であることがわかる。また、『山梨県の民家』は14棟の民家が楣梁構えと指摘するが、その半数の7棟は棟持柱構造と楣梁構えの双方を併せ持つ架構■であった。さらに、笛吹川流域についてみれば、楣梁構えと指摘された10棟のうち、楣梁構えをもつ架構で棟持柱構造を含まない架構□は3棟のみで、棟持柱構造と楣梁構えの双方を併せ持つ架構■は7棟であった。

もし、建物の梁行すべてについて楣梁構えが確認できるなら、それに先行する架構とし



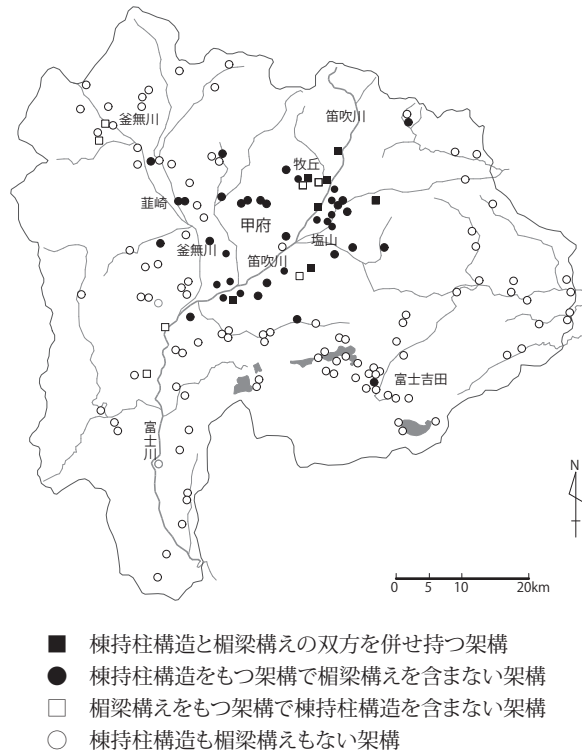


図5 棟持柱構造と楣梁構えの分布図

て四建を想定することは可能であろう。しかし実際は、純粋な楣梁構えは少なく、棟持柱構造を併せ持った架構やそれに分類されない様々な構造が混在する架構が多い。とりわけ、笛吹川流域は、棟持柱構造と楣梁構えの双方を併せ持つ架構が半数以上をしめる。したがって、『山梨県の民家』のように四建がよりふるい架構である、と推断することはできない。

このように、笛吹川流域の民家は、楣梁構えよりも棟持柱構造の方が圧倒的に多く、楣梁構えとされている民家も、その多くが棟持柱構造を併せ持つ架構であった。確かに、楣梁構えは笛吹川流域において特徴的な構造である。とはいえ、笛吹川流域において多数派に位置づけられるのは棟持柱構造の民家である。

また、民家の架構について言及する際、既往研究は、おもに一断面のみに考察をかぎっていた。とりわけ、多くの民家研究は、土間と床上境の断面が、建物の構造が最もよく示されるという判断から、そこに考察を集中させてきた。しかし、笛吹川流域の民家にみられるように、民家の架構は、純粋な棟持柱構造や楣梁構えよりむしろ、様々な構造を併せ持った架構の方が大半を占めていた。そのため、民家の架構について言及する際、一断面のみの考察では、民家の架構の一部分だけを扱うことになってしまうので、論証に偏りがでてしまう。そこで本論は、この難点を克服するために、梁行の断面において、いくつかの面の断面図を参照した、架構全体による考察を行う。この考察を進める上で、架構図が有効である。『山梨県の民家』は、いくつかの民家において断面図だけではなく、架構図も掲げる。本論は、この架構図の中から最もふるい事例を4棟とりあげる。これらは17

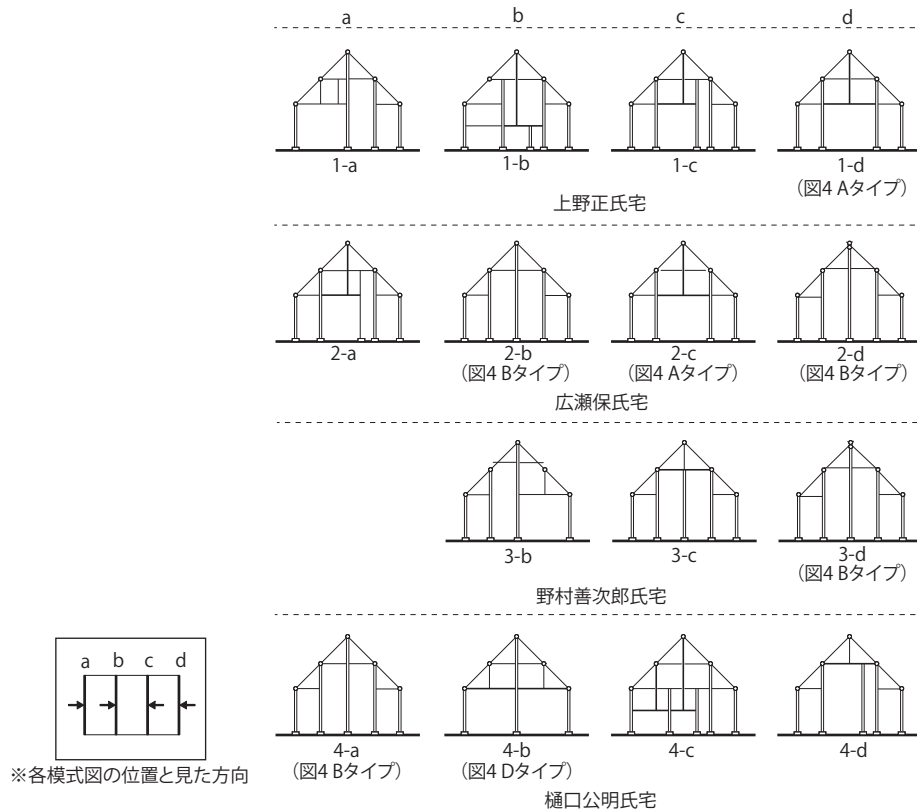


図6 架構図から作成した梁行方向の模式図

世紀のものである。これら4棟の架構図から、梁行4間に即した計4面の模式図を作成する。以下では、これらの模式図をもとに、四建先行説を再検討する。

図6をみると、楣梁構えにあたるものが1-dと2-cである。さらに、ウダツ造は4-bにあたる。くわえて、『山梨県の民家』は、2-bにあたる広瀬保氏宅の断面図を参照しつつ、この構造を「県下古民家の構造の主流形式である」<sup>注25)</sup>としており、楣梁構えやウダツ造とは別に注目する。この棟持柱構造(2-b)を、本論は図4のBタイプとして既に指摘した。これにあたるものは、図6中の2-bのほかに2-dと3-dと4-aがある。また、その他これらに分類されない様々な構造が存在する。このように、楣梁構えやウダツ造ばかりでなく、それらに分類されない様々な構造が、一棟の民家の中で組み合わさって民家の架構を形成している。さらにいえば、その多くに棟持柱構造が含まれている。

以上をふまえ、中世後期に遡る架構として、どのような構造が想定されるのか。この点を考える上で、永井規男の北山型に関する説明を参考にする。永井は、北山型でもっとも古い石田家住宅とこれとはやや異なるふるい小屋組の形式である木戸家住宅を論じながら、以下の仮説を1975年に提示した。すなわち、

近世に入って、一般に家屋規模が大きくなってくると、それに応じて家のかたちが高くなり、棟持柱構造にすると相当に長い柱が必要になる。これを避けて、できるだけ短い柱で済むように、まず木戸家のような構造が考えられ、ついで「おだち・とりい」組みへと発展したのではないかと推定される<sup>注26)</sup>。

以下では、この永井説に賛同しつつ、中世後期に遡る笛吹川流域の民家形態について考察を進める。

## 2-4 棟持柱構造から四建ないしウダツ造へ

永井にしたがえば、石田家住宅に先行する構造として、すべての柱が棟木や母屋を直に支える棟持柱構造が想定される。この構造は、笛吹川流域では、まさに図7に示す広瀬保氏宅であり（図6・2-b）、その他に図6の2-dと3-dと4-aがある。実際、本研究の実測調査では、土間と床上境である建物内部では、そのほとんどがウダツ造であったのに対し、建物の妻壁部分では、図7の広瀬保氏宅のような構造が多数みられた。つまり、石田家住宅に即して永井が推定した架構は、実際に山梨県の民家における近世前期の民家の架構に見出すことができるから、すべての柱が棟木や母屋を直に支える棟持柱構造を中世後期の段階に想定することができる。

では、この梁行4間の棟持柱構造が楣梁構えやウダツ造に先行するならば、その変容過程はどう説明され得るのか。その過程を、内田・土本「棟持柱構造から軸部・小屋組構造への転換過程」（2002）に即して説明する<sup>注27</sup>。すなわち、楣梁構えは、棟持柱構造の中柱である棟持柱が梁によって上下に分離され、その後梁上の棟束としてのみが残った構造である。対してウダツ造は、母屋を直に支える2本の上屋柱が、梁によって上下に分断され、その後梁上の母屋束としてのみが残ったものである（図8）。さらに、楣梁構えやウダツ造に分類されないその他の構造は、棟持柱構造から軸部と小屋組に分離していくなかの過渡的な構造である、と考えられる。

さらに、この変容過程を立体的に考えると、中世後期に、梁行の多くでは棟持柱構造であったが、この架構が中世後期から近世前期にかけて各々の梁行が徐々に軸部と小屋組に分離していった、といえる。その結果、図6のように、梁行によって異なる様々な構造が一つの建物の中にあられる。くだっては、楣梁構えを2面あわせた四建は、その過程で生じた架構であろう。つまり、四建とウダツ造の双方に先行して中世後期に棟持柱構造を想定することができる。また、「甲府盆地東部の近世民家」（1963）が、四建をふるい構造と判断する際に参照した江川家住宅は、近世初期の建築遺構であり、さらに発掘遺構から生柱のほか四本の掘立柱が発見された。掘立柱をもつ前身建物は現在みられる構造とは異なったものである、と考えられる<sup>注28</sup>。

さらに、棟持柱構造から四建ないしウダツ造への移行過程を裏付けるものとして、中世後期に遡る茂木家住宅が注目される。茂木家は、「大永七年（1529）の建築であることがほぼ間違いな」い取葺<sup>注29</sup>の棟持柱構造である。しかし、茂木家住宅は、後世の改造が大きいため、「昭和51年に実施された移築修理のさいに、中世の住宅として復原されず、江戸時代中期の姿に復原され」たので、現在の遺構は当初の姿ではない<sup>注30</sup>。建築当初として注目されるのは、宮澤智士が1993年に提示した推定復原図である（図9）。梁行4間、

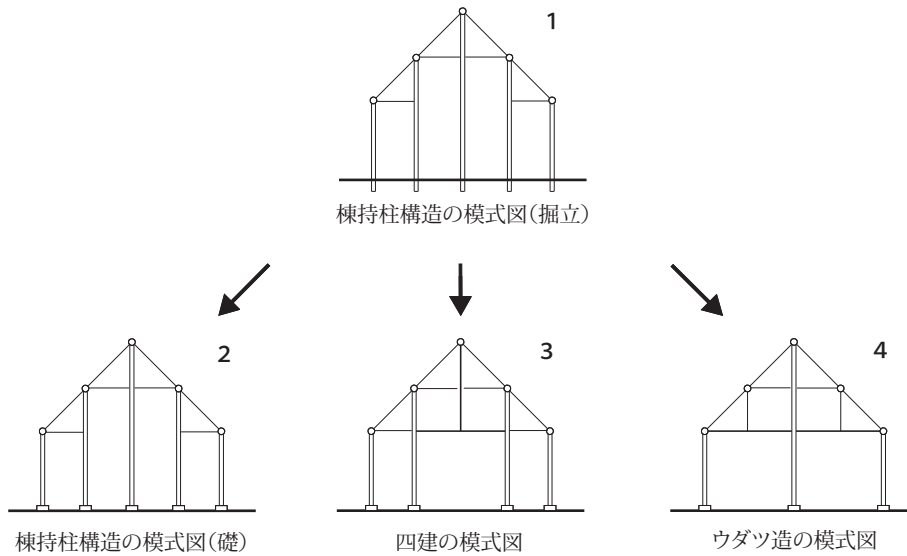


図8 棟持柱構造から四建ないしウダツ造への分岐

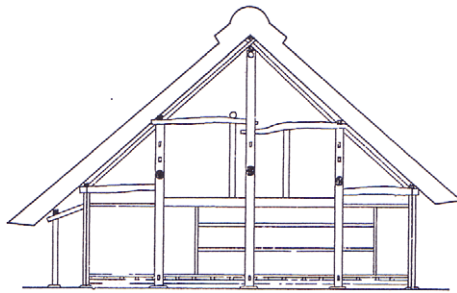


図7 広瀬保氏宅 復原断面図

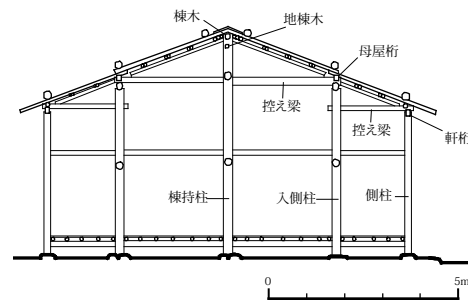


図9 茂木家住宅梁間断面図(推定復原)

取葺、礎であるほか、すべての柱が母屋や棟木を直に支える棟持柱構造であるこの推定復原図は、広瀬保氏宅復原断面図（図7）とそっくりである。つまり、四建もウダツ造ともに、中世後期における梁行4間の棟持柱構造をその母体に想定することができる。

以上、笛吹川流域の民家において、四建がウダツ造に先行したのではなく、双方に先行する構造形式として、すべての柱が棟木や母屋を直に支える棟持柱構造が中世後期にあることを本論は指摘した。この棟持柱構造は、中世後期から近世にかけて、徐々に軸部と小屋組に分離した構造へと移行していく。四建やウダツ造は、すべての柱が棟木や母屋を直接支える棟持柱構造が軸部と小屋組に分離した構造へ移行するに際して、それぞれ異なる方向へ分岐していった結果、成立した姿である、と考えられる。

## 2-5 笛吹川流域の民家にみる小規模建造物の形態

ここまで考察の対象は、茅葺切妻の民家であった。しかし、本研究の実測調査でも明らかのように、棟持柱構造は民家ばかりでなく小規模建造物にも多くみられる。先に参照した『京都府の民家 第七冊』で永井は、棟持柱構造の規模について次のように指摘した。すなわち、「棟持柱を中心にして梁行に对称形に1間間隔で柱をたてるとすれば、2間ま

たは4間という梁行間が定まってくる」<sup>注31)</sup>。

先に示した表1の梁行をみると、民家では、梁行4.5間(9棟)が最も多く、つづいて梁行4間(7棟)が多い。民家全18棟のうち、この2種が大半を占める。これら梁行の平均は4.32間であった。つまり、永井の指摘した梁行4間の棟持柱構造は、笛吹川流域においては主に民家に分類される。つぎに、民家以外では、赤池家門を除きすべて梁行が2間であった。ただ赤池家門も、2間に半間の下屋をだしているから、構造体としては梁行2間に分類される。しかし、「甲府盆地東部の近世民家」(1963)は、調査の対象の中から「小規模民家は精査の対象より除外」<sup>注32)</sup>していた。『山梨県の民家』(1982)も同様に、梁行2間程度の小規模建造物を報告せず、梁行4間以上の民家ばかりを報告した。これは、冒頭で指摘した四建先行説の第三の難点にあった。しかし、棟持柱構造は、梁行2間の小規模建造物においても多数散見できることから、大きい民家のみを扱ってはいは棟持柱構造の全貌を捉えることができず、形態生成の巨視的な潮流を捕捉するに至らない。これら梁行2間の小規模建造物についても、民家と同様に考察を深める必要がある。

では、つづいて、笛吹川流域にみられる梁行2間に分類される小規模建造物について考察を行う。

まず、民家と非常に似通っている小規模建造物として、赤池栄人家門に注目する(図10・表1の24番)。これは、梁行2間、草葺切妻の棟持柱構造であり、梁行が2間か4間かという規模を除いて、図1の三枝行雄家住宅と類似している。なお、門といっても、その脇には部屋があり、ご主人の話によれば、以前は住まいとしても利用されていたとのことである。

三枝行雄家住宅に代表される民家や赤池栄人家門は、屋根が草屋根で矩勾配となる。対して、笛吹川流域の棟持柱構造には、屋根が3寸5分から5寸くらいの緩勾配となるものもある<sup>注33)</sup>。表1では、茅葺となって屋根が矩勾配となるものは、多数派を占めるが、屋根が緩勾配となるものは、戸田千恵子家便所(図11・表1の13番)のように、梁行2間の小規模建造物にかぎられる。屋根が緩勾配となるものは主に町屋に多い。とくに、京都の町屋には、軸部と小屋組が分離しない棟持柱構造となる事例が多い。実際、『山梨県の

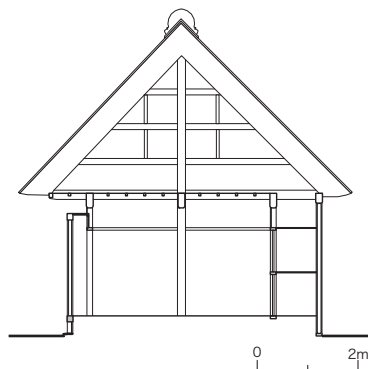


図10 赤池栄人家門 断面図  
(資料編 195 頁)

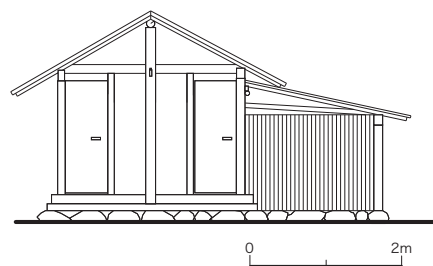


図11 戸田千恵子家便所 南立面図  
(資料編 176 頁)



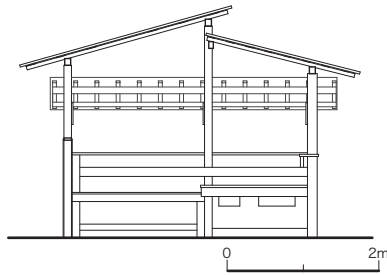


図12 笛吹小屋キャンプ場スズイバ 断面図  
(資料編 201 頁)

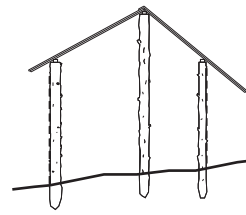


図13 山下牧郎家 ヤギゴヤ  
(資料編 188 頁)

民家』をみると、矢崎徹之介氏宅などは、梁行4間に分類される板葺の棟持柱構造であり、少数派ながら屋根勾配が緩勾配になる棟持柱構造もある<sup>注34)</sup>。

戸田千恵子家便所は、柱の脚部が土台であった。ほかにも柱の脚部が土台となるものは、三枝雪江家オクラ(表1の2番)、妣田圭子家便所(表1の21番)、若宮八幡宮拝殿(表1の7番)がある。これらはいずれも梁行2間の小規模建造物である。また、本研究で実測調査した民家でも、建物内部の大黒柱など柱の太さが1尺にちかいもの以外、土台は外周など一部に使用されていた。『山梨県の民家』も指摘したように、多くは柱の脚部が礎であるが外周などの一部には土台を用いている<sup>注35)</sup>。民家の柱の脚部の構法として、ほかに掘立と礎があるが、土台は一般にこれら2つにくらべ比較的新しいとされてきた。ただ、滝澤秀人「土台を持つ棟持柱構造の変遷」(2003)が指摘したように、戦国期の洛中洛外の描写として知られる町田本をみると、川をまたいだ建物に土台が確認される<sup>注36)</sup>。さらに、東博模本にみるように、地面の上に土台をもつ建物が描写されている例が確認される<sup>注37)</sup>。また、金石健太も、土台の系譜として、別のものがあることを指摘している<sup>注38)</sup>。

とはいえ、戦国期の洛中洛外図屏風をみると、柱の脚部に土台が確認されるのはわずかである。それ以外の多くでは、貴族住宅や武家住宅といった上層住宅に関して柱の脚部に礎が確認されるのに対して、町屋に関しては柱の脚部に礎が確認されない。つまり、戦国期の町屋の柱の脚部は、大半が掘立であり、まれに土台がみられた、と想定される。

戦国期の町屋の柱の脚部は大半が掘立であるとの想定をふまえ、再び笛吹川流域の民家に関する考察にもどる。先に述べたように、『山梨県の民家』にみえる事例は、楣梁構えやウダツ造も含めそのほとんどが礎の建物であり、掘立柱が確認されていない<sup>注39)</sup>。しかし、戦国期の洛中洛外図屏風にみられるように、中世後期には、礎に先行して掘立の柱をもつ建物が数多く描かれていることから、中世に遡る形態を明らかにするには、掘立構造との関連において説明されなければならない。しかし、四建先行説は、掘立構造との関連での説明を欠く。これは、冒頭で指摘した四建先行説に関する第四の難点にあたる。以上をふまえて、掘立柱との関連で、中世後期に遡る笛吹川流域の民家の形態について分析を進める。



## 2-6 掘立棟持柱構造からの展開

平山育男は、掘立構造について次のように記している。

民家が古くから掘立であったことは考古学の発掘成果が明らかにしている。掘立は竪穴住居以来用いられ、関東地方で十八世紀中期頃、沖縄では十九世紀末—二十世紀初頭までみられた技法とされるが、現在は実際に掘立柱をもつ民家は、豊中市の日本民家集落博物館に移築された信濃秋山の民家の山田家住宅主屋など、きわめてわずかな数しかない<sup>注40)</sup>。

本論の対象域である笛吹川流域にて、礎や土台のほかに、掘立の棟持柱構造をもつ2例（笛吹小屋キャンプ場スイジバ、山下牧郎家ヤギゴヤ）を採集し実測することができた。

まず、笛吹川キャンプ場スイジバは、内部と外部に計3本の棟持柱とトタン葺で緩勾配の屋根をもつ掘立棟持柱構造である（図12・表1の28番）。建築年代は定かでないが、建築部材の新しさからみて、ごく最近の建築であろう。さらに、この炊事場は、キャンプ場を管理するご主人が自らたてたものである。このご主人は、ある程度の技術はもっているが、専門の大工ではない。宮澤智士は、このような専門の大工ではない方による技術を、職人の高度な技術に対して中間技術と呼んだ<sup>注41)</sup>。山下牧郎家ヤギゴヤも、牧郎氏によってたてられたもので、現在物置として使用されている掘立棟持柱構造である（図13・表1の20番）。牧郎氏は、たてやすさゆえに、自然とこのような構造になった、と話されていた<sup>注42)</sup>。

このような梁行2間の掘立棟持柱構造は、笛吹川流域の民家ばかりでなく信州においても確認されており、国見のタキモノ小屋（長野県長野市）がその具体例である。これは、柱の上端が股木になった掘立棟持柱構造である<sup>注43)</sup>。また、石原憲治も、梁行2間の掘立棟持柱構造について次のように記す。すなわち、

南安曇郡安曇村の山中鈴蘭小屋附近で畑中に建てて居た掘立小屋に就て調べた所によると土地の人達は是を又小屋と呼んで居る。これは棟柱の上端が股木になつて居るものを建て、是に棟木を支えて居る。此の柱の事を又ウダツとも言ふて居つた<sup>注44)</sup>。

さらに、宮本常一が記す「木地屋の小屋」の建て方もその内容から梁行2間の掘立棟持柱構造である。

山を歩いて木地に適する立木のあるところを見つけると、住居に適当な場所を見つけて小屋掛けする。掘立小屋である。木の柱を二本たて、これに棟木をのせる。つぎに軒まわりの柱をたて庇木をわたし、棟木と庇木の間垂木をわたし、屋根をふく。屋根はカヤをつかうこともあればスギ皮をつかうこともある。板葺の屋根もまれにあったという。壁はカヤで囲うことが多かった。入口にはカヤ菰をたらした。土間の隅にはイロリをつくり、土間にはカヤなどをしきならべ、その上に筵をしいた。これで小屋ができあがる<sup>注45)</sup>。

笛吹川流域にみられたヤギゴヤ、国見のタキモノ小屋、石原の実見した又小屋は、いわ

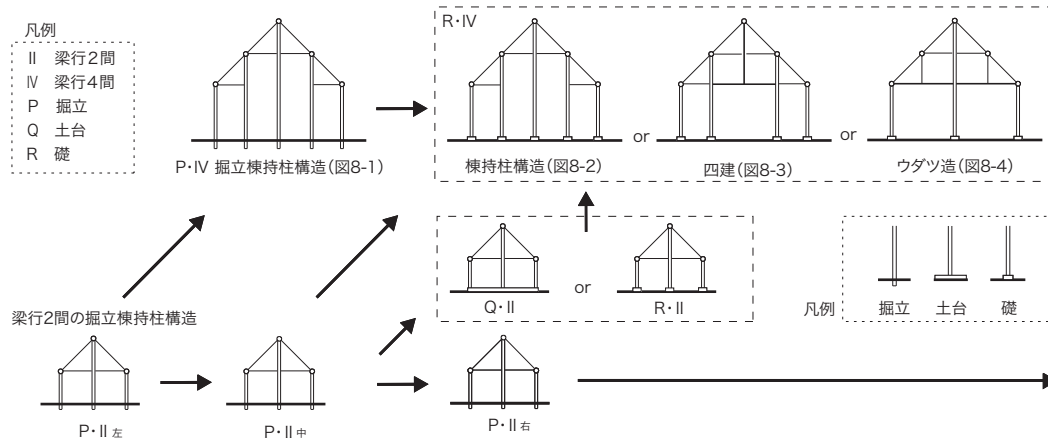


図14 梁行2間の掘立棟持柱構造から四建ないしウダツ造へ分岐する模式図

ば物置のようなものであって、住居ではない。しかし、この「木地屋の小屋」は、人が住むための小屋である。このような、梁行2間の掘立棟持柱構造で住居として利用されているものはほかにも実例がある。住居の具体例は、今和次郎のスケッチ<sup>注46)</sup>のなかの掘立棟持柱構造の小屋がある。武蔵・西多摩郡の山人足の小屋<sup>注47)</sup>は、梁行2間・桁行2間半の小規模な建物で、柱の上端が股木になって棟木を支える掘立棟持柱構造である。平面も単純で土間と板間に二分されるのみで、すこぶる簡素なつくりをしている。

このように、笛吹川流域にみた梁行2間の掘立棟持柱構造は、石原の実見した又小屋、宮本が見聞した木地屋の小屋、今が採集した山人足の小屋から、笛吹川流域ばかりでなく、ある程度広く分布していた、と理解できる。ただ、このような小規模で粗末な建物は、建築遺構としてはきわめて残りにくい。

以上をふまえ、中世に遡る民家に、どのような姿を想定することができるのか。先述の中世後期に遡る茂木家は、かつて名主を勤めた家柄であった。また、近世初期の上野正氏宅は、「戦国末の地侍を出自とし」<sup>注48)</sup>ている家系であった。さらに、『山梨県の民家』は笛吹川流域の民家が中世の名主、地侍層の影響を受けていた、と記す<sup>注49)</sup>。つまり、これら梁行4間に分類される棟持柱構造はふるくは支配者層の建物であった、と想定される。

対して、数の上では多数を占める支配者層でない人々の家はどのような姿であったのか。この点について宮澤は、「大多数の中世の民家は、掘立柱の小屋程度のものであったから、長い年月に耐えうるものではなかった」<sup>注50)</sup>と指摘する。では、「掘立柱の小屋程度の建物」とは具体的にどのような構造が想定されようか。

戦国期の洛中洛外図屏風（町田本・上杉本）は、柱の脚部に礎のない梁行2間の民家、すなわち、梁行2間の掘立棟持柱構造を多数描く。さらに、室町後期を代表とする草戸千軒の場合、梁行2間を示す多数の柱穴が多数発掘されている<sup>注51)</sup>。この梁行2間の柱穴は掘立棟持柱構造を示唆する。

以上の具体例から推して、梁行2間の掘立棟持柱構造は笛吹川流域においてある時期まで幅広く存在していた民家の形態と想定されるとともに、山下牧郎家ヤギゴヤ（図13）

は中世の姿を現在までとどめた形態と想定される。

### 3 家格の関係 — 笛吹川流域の場合 —

『建築大辞典 第2版』(1993)のうだつの項に、「近世の山梨県・長野県の農家において妻側にある棟持柱。主として付属建物、居住用建物ならば社会的地位の低いものとされ、既に1733年諏訪郡福沢村の書上帳にその名が見える。「うだち」ともいう」<sup>注52)</sup>とある。とくに、「主として付属建物、居住用建物ならば社会的地位の低いもの」という指摘は、石原憲治『日本農民建築 第五輯』(1937)<sup>注53)</sup>にみえる。また、「既に1733年諏訪郡福沢村の書上帳にその名が見える」という指摘は、「福沢村家数書上帳」<sup>注54)</sup>にある「うだつや」、「うたつや」、「有立屋」に即したものである<sup>注55)</sup>。

ここで注目すべき点は、「近世の山梨県・長野県の農家において(中略)居住用建物ならば社会的地位の低いものとされ」、という内容である。確かに、長野県において、この点はあてはまるかもしれない。しかし、実測調査で採取した笛吹川流域の棟持柱構造は、その多くが一般の農家である。さらに、予備調査では、かつて地主であったという大規模な棟持柱構造の民家が見られた。それゆえ、「社会的地位の低いもの」という「うだつ」に関する指摘は、「居住用建物」であっても、笛吹川流域の「妻側にある棟持柱」に対して、あてはまらない。

### 4 小括

以上のように、笛吹川流域の民家にみる棟持柱構造は梁行2間と梁行4間に大別される。梁行2間のものは、主として、付属小屋等の簡素な小規模建造物であった。対して、梁行4間のものは、笛吹川流域の場合、大規模な草葺民家であった。遡れば、これら梁行2間と梁行4間の棟持柱構造はともに中世段階に広く存在していた掘立であった(図14、P・II中、P・IV)、と考えられる。

これら二者のうち、梁行2間の掘立棟持柱構造(図14、P・II中)は、中世後期から近世にかけて、山下牧郎家ヤギゴヤ(図13)のような簡素な小規模建造物(図14、P・II右、Q・II、R・II)として残る一方、梁行4間の堂々とした民家(図14、P・IV、R・IV)へ発展した、と考えられる。

他方、梁行4間の掘立棟持柱構造(図8-1、図14、P・IV)は、中世後期から近世にかけて、掘立柱に依存する架構を弱めつつ、四建(図8-3)ないしウダツ造(図8-4)へ分岐するか、あるいは棟持柱構造(図8-2)の姿をとどめた、と考えられる。さらに、この梁行4間の掘立棟持柱構造は、規模が拡大されたものと考えられ、遡れば、梁行2間の掘立棟持柱構造(図14、P・II左)を祖型としていた、と想定することができる。

以上、笛吹川流域の民家について考察してきた本論の結論は以下の通りである。すなわち、笛吹川流域の民家は、梁行2間の掘立棟持柱構造(図14、P・II左)を祖型として展

開していた。

## 【注】

注 1) 参考文献 1) 170 頁引用

注 2) 参考文献 2) 参照

注 3) 参考文献 3) 参照

注 4) 参考文献 3) 49 頁引用

注 5) 参考文献 3) 参照。また、参考文献 2) で関口は、板葺民家と茅葺民家の双方に言及し、板葺民家については、「板葺古家では棟持柱が室町末から十七世紀末にわたって使われていたようである」としている。しかし、茅葺民家が、四建からのちに棟持柱構造であるウダツ造へと移行する中で、板葺古家の棟持柱構造は、この茅葺民家にみるウダツ造の影響をうけて棟持柱構造へ移行したとする。すなわち、関口は、茅葺民家においても板葺民家においても、この地域の民家の源流に四建を想定している。

注 6) 参考文献 4) 参照。その他、山梨県の棟持柱構造をもつ切妻民家に関する研究に、参考文献 5) や参考文献 6) がある。

注 7) ここでいう四建先行説とは笛吹川流域において四建をウダツ造りに先行する架構形式とする関口の論点を指す。本論では関口にならない、「四建」を用いているが、このほか参考文献 7) は、「四建」と同様の構造を「四つ立て」とし、尾張地方北部で古い構造としている。「四つ立て」形式の民家は「鳥居建て」とも呼ばれるが、富山は「四つ立て」が「その住居に居住した生活者が使用していた言葉」であり、「鳥居建て」が「研究者が作成した」用語であるとし、「四つ立て」が適正な用語であるとしている。本論は、結論に記すように笛吹川流域において梁行 2 間の掘立棟持柱構造が祖型であると結論づけている。今後、その他の地域における祖型についても、再検討が求められる。

注 8) 参考文献 8) 参照

注 9) 参考文献 9) 参照。石原は、1931 年 11 月、建築学会大会で「日本農民建築の研究」を発表し、これが翌年学会誌に掲載された。その後、1934 年から 1943 年にかけて、各論ともいべき各都道府県の地方的調査をまとめた『日本農民建築』を第一輯から第十六輯まで発行した。これらは戦後、「日本農民建築の研究」はこれに加筆、修正を加えたものが 1976 年に、また『日本農民建築』は、第一輯から第八輯に改められ、改訂復刻版として 1972 年と 1973 年に、ともに南洋堂出版から発行された。

注 10) 参考文献 10) ～参考文献 14) 参照

注 11) 参考文献 12) 参照

注 12) 主な史料として、参考文献 3) および参考文献 2) を中心に使用する。論点の基礎は参考文献 3) であるが、より詳論され、図版等も豊富な参考文献 2) を、本論では、中心的な文献

史料として使用する。

注 13) 参考文献 2) 97 頁引用

注 14) 参考文献 12) 参照。ここでは、掘立から礎への展開過程として、このような二通りの変わり方について言及している。

注 15) 参考文献 2) 92 頁引用

注 16) 参考文献 2) 94-96 頁参照

注 17) さらに、参考文献 2) 97 頁に、「甲府盆地東部では、棟持柱のような際だった柱があるのに、古民家の構造を四建というのは、梁行前後両端の上屋柱を結ぶ楣梁構えによって一層よく理解することができる。とくに山梨市上野正氏宅 (No.5) や中富町秋山とく子氏宅 (No.68) のように現在のイドコの両面に楣梁構えをもつものを見れば、家の中央部に、四本の高い柱を結ぶ堅古な枠組みがあり、これが構造の中心になっている。まさに四建と呼ぶにふさわしい構造であることが知られる」とある。

注 18) 参考文献 2) 95 頁引用

注 19) 参考文献 2) 95 頁引用

注 20) 参考文献 2) 95 頁引用

注 21) 参考文献 2) 95 頁引用

注 22) 参考文献 13) 参照

注 23) 参考文献 2) 95-96 頁参照

注 24) 参考文献 2) 465 頁参照

注 25) 参考文献 2) 92 頁引用

注 26) 参考文献 15) 11-12 頁引用。これは、参考文献 12) および参考文献 13) ですでに指摘されている。

注 27) 参考文献 13) 参照

注 28) 参考文献 16) 参照。前身建物については、参考文献 17) 96-97 頁参照

注 29) 取葺に関しては、参考文献 18) にて詳論した。

注 30) 参考文献 17) 86 頁参照

注 31) 参考文献 15) 12 頁引用

注 32) 参考文献 3) 48 頁参照。ここに「小規模民家は精査の対象より除外」とある。この姿勢は、後の参考文献 2) にも引き継がれる。

注 33) 棟持柱構造を、緩勾配屋根と矩勾配屋根に大別し、言及したものに、参考文献 14) がある。

注 34) 参考文献 2) 182-184 頁及び 305 頁参照

注 35) 例えば、参考文献 2) 139 頁、三枝聡氏旧宅「構造は、側廻りに土台をまわし」とある。

注 36) 参考文献 19) 参照

注 37) 参考文献 20) 参照

注 38) 参考文献 21) に、土台に関する言及がある。

注 39) 参考文献 2) 参照

注 40) 参考文献 22) 80 頁引用

注 41) 参考文献 23) 43 頁参照。この点は、参考文献 13) にも言及されている。

注 42) 牧郎氏によれば、この小屋は、もともとヤギを飼うためにたてられた。しかし、ヤギの「メェー、メェー」という鳴き声が、あまりにもうるさいだろうという判断から、ヤギを飼うことを断念した。しかし、断念したのは、すでにこの小屋ができあがってしまった後だったため、現在のように物置として使用することになった。また、奥山国良氏の直売処（表 1 の 15 番）は、間伐材や廃材を用いて、地元の大工さんとご主人が共同でたてられた棟持柱構造の建物である。一見、掘立の棟持柱構造に見えるが、実際は、柱の脚部は地中に埋め込まれたコンクリートに連結されている。

注 43) 参考文献 24) および参考文献 13) 参照。なお、先方の事情により実測調査はできなかったが、注笛吹川流域においても、このような柱の先端が股木になった、梁行 2 間の掘立棟持柱構造を調査中に実見した。

注 44) 参考文献 25) 196 頁引用

注 45) 参考文献 26) 92 頁引用

注 46) 参考文献 27)、参考文献 28)、参考文献 29) 等を本論は参照した。その他、今の著作は数多いが、この三点に参照をとどめる。

注 47) 参考文献 29) 356 頁参照

注 48) 参考文献 2) 11 頁引用

注 49) 参考文献 2) 11 頁参照

注 50) 参考文献 17) 84 頁引用

注 51) 参考文献 30) 参照

注 52) 参考文献 31) 128 頁引用

注 53) 参考文献 25) 196 頁引用

注 54) 参考文献 32) 497-498 頁参照

注 55) 以上、ともに参考文献 12) 指摘されている。

## 【参考文献】

- 1) 宮澤智士「近世民家の地域的特色」(永原慶二・山口啓二 代表編集『講座・日本技術の社会史 第七巻建築』日本評論社、151-182 頁、1983)
- 2) 関口欣也執筆・山梨県教育委員会編『山梨県の民家』(第一法規出版、1982)、のちに、各都道府県教育委員会編『日本の民家調査報告書集成 9 中部地方の民家 3』(東洋書林、1998) 所収
- 3) 関口欣也「甲府盆地東部の近世民家」(『日本建築学会論文報告集』第 86 号、48-59 頁、1963)
- 4) 日本ナショナルトラスト編『平成 16 年度観光資源保護調査 上条集落の切妻民家群』(財団法人日本ナショナルトラスト、2005)



- 5) 柏崎亜矢子・佐藤知恵子「山梨県国中における山間集落の民家について—その4 三富村徳和集落の民家形態—」(『日本建築学会大会学術講演梗概集(九州) F-2』(37-38頁、1998))
- 6) 佐藤知恵子・柏崎亜矢子「山梨県国中における山間集落の民家について—その5 四建(ヨツダテ)と大黒柱構造—」(『日本建築学会大会学術講演梗概集(九州) F-2』(39-40頁、1998))
- 7) 富山博「尾張の四つ立て民家」(『民俗建築』第88号、5-10頁、1985)
- 8) 土本俊和「表題解説—戦前の棟持柱祖型論—」(信州大学土本研究室編『棟柱 第7号』信州伝統的建造物保存技術研究会、2-3頁、2004)、のちに、同「総論3 戦前の棟持柱祖形論」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、42-45頁、2011)
- 9) 石原憲治『日本農民建築 第一輯—第八輯』(南洋堂書店、1972-1973)
- 10) 畑智弥・土本俊和「京都の町屋における軸部と小屋組」(『日本建築学会計画系論文集』第513号、259-266頁、1998)、のちに、同「各論A 京都1 京都のマチヤにおける軸部と小屋組」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、118-133頁、2011)
- 11) 遠藤由樹・土本俊和・吉澤政己・和田勝・西山マルセーロ・笹川明「信州の茅葺民家にみる棟束の建築的意義」(『日本建築学会計画系論文集』第532号、215-222頁、2000)、のちに、同「各論B 信州1 信州の茅葺民家にみる棟束の建築的意義」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、195-211頁、2011)
- 12) 土本俊和・遠藤由樹「掘立から礎へ—中世後期から近世にいたる棟持柱構造からの展開—」(『日本建築学会計画系論文集』第534号、263-270頁、2000)、のちに、同「総論4 掘立から礎へ—中世後期から近世にいたる棟持柱構造からの展開—」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、46-63頁、2011)
- 13) 内田健一・土本俊和「棟持柱構造から軸部・小屋組構造への転換過程」(『日本建築学会計画系論文集』第556号、313-320頁、2002)、のちに、同「総論6 棟持柱構造から軸部・小屋組構造への転換過程」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、72-87頁、2011)
- 14) 土本俊和「総論6 掘立棟持柱構造」(土本俊和『中近世都市形態史論』中央公論美術出版、74-87頁、2003)
- 15) 京都府教育委員会編『京都府の民家 調査報告 第七冊—昭和48年度京都府民家緊急調査報告—』(京都府教育委員会、1975)、のちに、各都道府県教育委員会編『日本の民家調査報告書集成 11 近畿地方の民家1』(東洋書林、1997) 所収
- 16) 重要文化財江川家住宅修理委員会編『重要文化財江川家住宅修理報告書』(重要文化財江川家住宅修理委員会、1963)
- 17) 宮澤智士「農家中世から近世へ」(伊藤ていじ他編『日本名建築写真選集 第17巻 民家Ⅱ 農家』新潮社、83-125頁、1993)
- 18) 土屋直人・西山哲雄・早見洋平・土本俊和「取葺と呼ばれた石置板屋根の系譜」(『日本建築学会計画系論文集』第594号、155-162頁、2005)
- 19) 滝澤秀人「土台を持つ棟持柱構造の変遷」(『日本建築学会大会学術講演梗概集(東海) F-2』

- 107-108 頁、2003)
- 20) 土本俊和「発掘遺構からみた京マチヤの原形ならびに形態生成」(西山良平編『平安京における居住形態と住宅建築の学際研究 平成 15～平成 16 年度科学研究費補助金(基盤研究(c)(2)) 研究成果報告書』(127-153 頁、2005)、のちに、同「各論 A 京都 3 京マチヤの原形ならびに形態生成」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、149-174 頁、2011)
  - 21) 金石健太「土台を持つ建物の系譜」(『信州大学大学院社会開発工学専攻 修士論文梗概集』(第 18 号、13-16 頁、2004)
  - 22) 日本民俗建築学会編『図説 民俗建築大事典』(柏書房、2001)
  - 23) 宮澤智士『住まい学体系／022 日本列島民家史』(住まいの図書館出版局、1989)
  - 24) 土本俊和「表題解説—国見の掘立棟持柱—」(『棟柱 第 5 号』信州伝統的建造物保存技術研究会、2-3 頁、2002)、のちに、同「各論 B 信州 3 国見の掘立棟持柱」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、215-217 頁、2011)
  - 25) 石原憲治『日本農民建築 第 5 輯』(南洋堂書店、1973)
  - 26) 宮本常一『山に生きる人びと／双書・日本民衆史 2』(未来社、1964)
  - 27) 今和次郎『日本の民家』(岩波書店、1989)
  - 28) 今和次郎『民家採集 今和次郎集 第 3 巻』(ドメス出版、1971)
  - 29) 今和次郎『住居論 今和次郎集 第 4 巻』(ドメス出版、1971)
  - 30) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編『草戸千軒町遺跡調査報告 V—中世瀬戸内の集落遺跡—』(広島考古学研究会、1996)
  - 31) 彰国社編『建築大辞典 第 2 版<普及版>』(彰国社、1993)
  - 32) 長野県『長野県史 近世資料編 第 3 巻 南信地方』(長野県史刊会、1975)
  - 33) 土本俊和編『中世後期から近世に至る掘立棟持柱構造からの展開過程に関する形態史的研究 2001 年度～2003 年度科学研究費補助金(基盤研究 C(2)) 研究成果報告書』(研究代表者土本俊和、2005)

## 【出典】

- 図 1) 参考文献 33) 138 頁
- 図 2) 参考文献 2) 92 頁
- 図 3) 参考文献 2) 92 頁
- 図 4) 筆者作成
- 図 5) 参考文献 2) 92 頁
- 図 6) 筆者作成
- 図 7) 参考文献 2) 92 頁
- 図 8) 筆者作成
- 図 9) 参考文献 17) 88 頁

図 10) 参考文献 33) 196 頁

図 11) 参考文献 33) 170 頁

図 12) 参考文献 33) 205 頁

図 13) 参考文献 33) 187 頁

#### 補記 1

近世民家には、棟持柱構造のほかに、扱首組やオダチ組といった軸部・小屋組構造をなすものや、これらには分類されない様々な構造がある。さらに、これらの構造は、民家の架構の中で単独で用いられる場合ばかりではなく、複数の構造を併せ持って一つの民家の架構を形成している場合もある。本論が扱う棟持柱構造の民家は、後者にあてはまり、架構全体の中に少なくとも一本の棟持柱を有している民家を指すため、梁行によっては、軸部と小屋組が分離した構造をなしているものがある。

しかしながら、これまでの民家研究は、民家の構造を架構全体で考察するのではなく、主に大黒柱まわりの一断面で考察することがほとんどであった。よって、既往研究で、軸部・小屋組構造と判断された民家であっても、他の梁行が棟持柱構造となっている可能性が十分にあり得る。

本論が研究対象とした民家は、主に事前の外観調査から棟持柱構造であると確認できた建造物のうち、調査の了解がえられたもののみである。したがって、実際に、筆者らが確認した棟持柱構造の民家は、調査の了解がえられなかったものまで含めると、かなりの数にのぼる。また、事前調査では、あくまで外観調査で棟持柱構造の民家を抽出していることから、妻壁がなく、内部のみに棟持柱をもっている建造物を捕捉することができない。本論で扱う棟持柱構造の民家は、架構全体のなかに少なくとも一本の棟持柱を有している民家を指すことから、本来なら、内部のみに棟持柱をもつ建造物も棟持柱構造として捕捉する必要がある。しかしながら、そのためには、すべての民家について内部確認を行わなければならない、所有者の理解や時間的な制限もあるなかで、そこまでの調査を行うことはほとんど不可能に近い。したがって、現時点では、笛吹川流域に残っている民家のうち、棟持柱構造のものが一体どのくらいあるのか、具体的な数値を示すことまではできない。とはいえ、筆者らが笛吹川流域の現地調査を行ったなかで、とりわけ、山梨市や甲州市で確認した切妻茅葺の民家については、外観からすでに棟持柱構造であると判断できるものが圧倒的であった。また、物置や小屋といった小規模建造物についても、実測調査までは至らなかったものの、棟持柱構造のものが多数確認できた。つまり、数値では示せないものの、山梨市ないし甲州市における民家の構造は、現在も、棟持柱構造が多数派を占めていると想定される。

#### 補記 2

棟持柱構造の民家は、全国的にその存在を確認できるものの、集中して存在している地域は、長野県飯山市や山梨県笛吹川流域といったごく少数にかぎられる。山梨県笛吹川流域に、これほど多くの棟持柱構造の民家が遺存している理由を明らかにした研究は、管見のかぎりない。わずかに、関口欣也『山梨県の民家』や、それを参照した宮澤智士の言及に、中世地侍層との関係が指摘されるものの、地侍層と棟持柱構造との関係が具体的に検証されたわけではない。また、山梨県は、近世以降に活躍した大工集団として下山大工が著名で、県内には彼らが手がけた社寺や民家が豊富にある。こういった大工集団が手がけた建築物と棟持柱構造との関係については、まだまだ検討の余地が大いにある。さらに、本研究の特徴として、過去の研究でほとんど顧みられることがなかった小規模建造物についても、数多くの棟持柱構造を捕捉した点があげられる。これらのなかには、農業を営むご主人自らが建てたものもあり、調査時のヒアリングによれば、特別な構造として棟持柱を採用したのではなく、自然と棟持柱構造を採用したという。ヒアリング内容をふまえれば、笛吹川流域において棟持柱構造は、地域の風土に根ざしたごく一般的な構造で、中世地侍層の存在にかかわらず、ふるくからこの地域に根付いた構造である、と想定することもできる。いずれにせよ、現時点において、笛吹川流域に棟持柱構造が集中して遺存する理由は明らかではなく、今後の課題としたい。

## 第5章

### ウダツと大黒柱

— 一切妻民家の中央柱列における棟持柱の建築的差異 —





## 第5章 ウダツと大黒柱 —切妻民家の中央柱列における棟持柱の建築的差異—

### 1 研究の目的と方法

本論の目的は、「ウダツ」と「大黒柱」の双方に着目し、その変遷を通時的に把握する作業を通じて、民家の変容過程の一端を明らかにすることにある。

石原憲治は、『日本農民建築の研究』で、現山梨県塩山市の中村有国氏宅を実見し、「ウダツ」と「大黒柱」について、次の興味深い内容を記す。すなわち、「この家の構造を見ると、中央の大黒柱が地上から一本の柱で棟木まで通っていて、直接にこれを支えていることである。私はこの柱を仮に「棟持柱」と称しておく。この棟持柱のことを八代郡御代咲村で調べた例によると、「ウダツ」または「ウダチ」と称している」<sup>注1)</sup>。つまり、山梨県では棟持柱のことを、「大黒柱」や「ウダツ」という。

まず、「ウダツ」は、石原の実見した棟持柱の意味とは別に、町屋においてみられる妻壁を屋根より高くつきだした小屋根や建物の両側に設けられた小屋根付きの袖壁等が一般的に知られている。そのため、現在、棟持柱のことを「ウダツ」と称している所は、山梨県その他、長野県などの一部の地域にかぎられる<sup>注2)</sup>。しかし、土本俊和は、これら「ウダツ」のいくつかの意味を、太田博太郎(1971)<sup>注3)</sup>・高橋康夫(1993、および1995)<sup>注4)</sup>らの指摘をふまえ、「総論4 ウダツ」(2003)にて明解に説明した。土本によれば、ウダツの原形は「棟木を直接支える垂直材」であり、「壁」であり、「塀」ないし「高塀」であった。そして、「近世にて、この二種類のモノ(棟持柱と高塀)が町屋の妻壁において一体化したとき、棟持柱ばかりでなく、屋境としての高塀をもウダツという言葉で呼ぶに至ったと判断することができる」<sup>注5)</sup>。本論もこの説を継承する。

対して、「大黒柱」は、石原が「わが国の民家の大黒柱は梁で止まって」<sup>注6)</sup>いるように、軸部と小屋組の分離した構造のなかにあるのが一般的であり、棟持柱構造のような軸部と小屋組が分離しない構造のなかにあるのはむしろ少数派である。また「大黒柱」は、「一家の大黒柱」のごとく、その言葉の一般性から、過去の民家研究においても数多く論じられてきた。まず、伊藤鄭爾は、『中世住居史 第二版』(1958)で、「天文以降とくに民間に広がったらしい大黒信仰のなかで、大黒の木像または絵を祭りこんだ柱を大黒柱といったのではないか(中略)そのような習俗が流行している時代に、大黒柱が前述のような構造技術の発達に伴い太くなり、ついには大黒柱といえば太い柱とみなすようになったのではないだろうか」<sup>注7)</sup>としている。つまり、伊藤は、「大黒柱」と「大黒信仰」を区別した上で、「大黒柱」の起源は「大黒信仰」にあり、のちに、構造的な側面が付加されて太い柱になった、と指摘する。伊藤とは対照的に、野村孝文は、その翌年に、「鹿児島県民家の「ナカエ」に就いて」(1959)で、「大黒柱」について次の見解を示す。す

なわち、「先づ民家構造に於て特別な取り扱いを受けている中柱、大黒柱はその取り扱いを受ける十分な理由がなければならぬことは勿論であるが、それには1) 構造柱、2) 伝統又は信仰の対象としての2つがある。1) は最も根本的なものであるが、2) は先づ1) があつて初めて伝統が生じ、信仰的なものがこれに憑るものであり、且つ1) の意味を失えば一般的にそれも亦次第に退化して行くと考える」<sup>注8)</sup>。モノとしての構造的側面を信仰に先行させるこの発生史的観点に本論も同感である。

伝統や信仰が生じるためにも、まず、「大黒柱」と呼ばれるようになった柱に、モノとしての構造的な理由があつたはずである。しかし、後の大黒柱に関する論考にこの観点に言及したものはほとんどない。例えば、川島宙次(1973)は、「本来は大黒を祀った柱のことを指す言葉であつたが、今では家の中のもっともかなめの柱を指している」<sup>注9)</sup>と指摘する。さらに、牧田茂「大黒柱の精神性」(1983)<sup>注10)</sup>や吉田桂二「古いようで意外に新しい大黒柱の歴史」(1987)<sup>注11)</sup>も、もっぱら信仰面に言及するのみで、「大黒柱」をモノとしてはとらえておらず、その太い柱がある理由を説明しない。

しかし、伊藤(1958)以後の「大黒柱」に関する記述とは対照的に、三田克彦「大黒柱の淵源とその変遷」(1942)は、原始住居や農民建築などにおいて、重要な柱が中心軸上に多いことなどをあげ、「大黒柱の類が嘗て構造上重要な役割を為してゐたことを證するものであり、それは嘗てそれが棟持柱であつたことを物語るものであらう」<sup>注12)</sup>としていた。三田は、「大黒柱」の起源に、地上から一本の柱で棟木を直接支える棟持柱を想定していた。「大黒柱」をモノである垂直材として捉えた、この指摘は、すこぶる示唆に富む。また、三田の論考は、棟持柱をもつ建物を民家の支配的源流とする棟持柱祖型論に合致する<sup>注13)</sup>。しかし、伊藤をはじめとした戦後の「大黒柱」に関する言及に、三田の論考は全く参照されていない。そして、戦後の「大黒柱」に関する論考は、一部を除き、「大黒柱」をモノとしてとらえる建築的な視点を失っていた。この点を考える上で、土本「戦前の棟持柱祖型論」が参考になる。すなわち、「今日、戦前の民家研究との対比でとらえたとき、戦後の民家研究は、まず第一に軸部と小屋組に分離していない棟持柱構造への関心が弱かつた」<sup>注14)</sup>。さらに、「戦後日本の民家研究が、戦前日本の民家研究との対比において、再検討されなければならない」。この指摘は、まさに「大黒柱」についても当てはまる。よって、「大黒柱」は、戦前の民家研究も含めた総合的な観点にて、再検討される必要がある。

では、棟持柱が共通点として想定され得る「ウダツ」と「大黒柱」の差異は何か。『建築大辞典』に、「うだつ 近世の山梨県・長野県の農家において妻壁にある棟持柱」<sup>注15)</sup>とある。つまり、「ウダツ」は、棟持柱の中でも、とくに建物妻面の柱を指す可能性がある。対して「大黒柱」は、『建築大辞典』に「だいこくばしら [大黒柱] 民家において平面の中央付近、特に土間と表と勝手関係の境目にある太い柱をいう」<sup>注16)</sup>とあるから、ウダツとは対照的に建物内部の柱を指す。以上から、「ウダツ」は建物外壁の棟持柱を指し、「大

黒柱」は建物内部の棟持柱を指していた、という見通しが成りたつ。

しかし、既往研究において、「ウダツ」と「大黒柱」の差異を具体的に明らかにしたものはない。例えば、石原は、山梨県において、「ウダツ」と「大黒柱」がともに棟持柱であることを指摘するものの、その差異に関心を示していない<sup>注17)</sup>。また、「大黒柱」を中心に論じていた三田も、「方言より考へると大黒柱のことを「オタチ柱」「オダツ柱」とか言ふ地方がある。又棟持柱を有する小屋のことを「ウダツ屋」といふ地方もある。この事は大黒柱が棟持柱であることを更に裏書きするものであらう<sup>注18)</sup>とし、棟持柱としての「ウダツ」に多少ふれるものの、その差異にふれない。さらに、小林昌人『民家と風土』(1985)は、「埼玉県秩父地方から群馬県富岡地方にかけては、大黒柱は棟までの通し柱になっているのが通例である。ところが一般的には大黒柱の高さは二階の床下までのものが多い<sup>注19)</sup>とし、山梨県以外でも「大黒柱」が棟持柱となる例を示し、山梨県の「ウダツ」にもふれる。しかし、既往研究は、「ウダツ」と「大黒柱」の紹介程度にとどまっており、今一步、ふみこんだ考察が行われていない。

つまり、既往研究は、「ウダツ」と「大黒柱」を棟持柱に即して散発的に取り上げる程度で、両者にある共通点と相違点を体系的に論じてはしない。そもそも、「ウダツ」と「大黒柱」に関する既往研究は、両者を別々のものとして論じることが多かったため、棟持柱という共通点にあまりふれず、まして、両者の相違点に無関心であった。しかし、戦後における「大黒柱」の論考が戦前の論考に比べ建築的な考察が少ないことを含め、「ウダツ」と「大黒柱」は、町屋にも農家にも確認されるきわめて幅広い概念であるゆえに、とりわけ両者の差異が厳密に考察されるべきである。

以上をふまえ、本研究は、「ウダツ」と「大黒柱」の共通点と相違点を究明する。この際、まず、建物の「内部」や「外壁」といった平面的な差異を明らかにするために、平面図を用いた水平方向の考察が必要である。また、棟持柱構造か軸部・小屋組構造かを区別するためには、断面図による垂直方向の考察が必要である。さらに、用語による考察も必要である。さらにまた、現在、一般的にみられる、小屋根としての卯建（ウダツ）と梁の下でとまった「大黒柱」が、歴史的に、どのような移行過程をへて、この一般的な姿に至ったのか、という点に関する通時的な考察も必要である。よって、本研究は、建築遺構、文献資料、さらに絵画史料も用いながら、総合的な判断をくわえ、「ウダツ」と「大黒柱」の差異を明らかにしていく。

## 2 用語による考察

それでは、まず、「ウダツ」と「大黒柱」がどのような関係にあるのか、その共通点と相違点を言葉の用例より考察する。

## 2-1 ウダツ、ウダチ、八方ウダツ

まず、「ウダツ」を言葉の上から考察する上で、土本・遠藤「掘立から礎へ」(2000)<sup>注20)</sup>がすでにくつか取り上げた「ウダツ」の用例などの先行研究をふまえつつ、新たに入手した文献史料を付け加える。

- ・うだつ、うだち：『建築大辞典 [第2版]』に、「うだつ [卯立、卯建、椀] ①『倭名抄』(930年代)によれば梁の上の柱を指すとあり、妻側の棟束を指すものと考えられる。『日本書紀』では「うだち」と発音する。②前者に由来して妻壁。③室町時代の民家、特に町屋において妻壁を屋根より高く突き出して小屋根を付けたもの。(中略)④近世民家において建物の両側に設けられた小屋根付きの袖壁。(中略)⑤近世の山梨県・長野県の農家において妻壁にある棟持柱。(中略)⑥(略)」<sup>注21)</sup>とある。また、『民俗建築 第21・22合併号』に、「ウダツ 山梨県。切妻造り、両端にある棟持柱をいう。八方ウダツともいう」<sup>注22)</sup>とある。これらは、「妻壁」や「両端」とあるから、建物外壁の棟持柱を指す。さらに、石原『日本農民建築の研究』は、冒頭で指摘した点の他、次のように記す。「殊に甲斐では、中央の中心柱だけでなく側柱まで全部がウダツ柱となった例を見て、私は驚いたことがある」<sup>注23)</sup>。この場合、石原は、「ウダツ」を建物外壁の棟持柱に限るのではなく、すべての棟持柱を「ウダツ」と理解している。
- ・八方ウダツ：『日本農民建築の研究』に、「この甲州の切破風造りは、本来構造は切妻であって、切妻のところにも棟持柱が両側に二本立つことになるわけである。この中村有国氏の家にも両妻に、現にこのような棟持柱が見えている。このような切妻の棟持柱を「八方」または「八方ウダツ」と呼んでいる」<sup>注24)</sup>とある。つまり、八方ウダツは、妻側の外壁にある棟持柱を指す。

## 2-2 ウダツバシラ、ウダチバシラ

『民俗建築 第21・22合併号』に、「ウダツバシラ 信州、山梨県の切妻の棟持柱をいう」<sup>注25)</sup>とある。また、土橋里木・大森義憲『日本の民俗 山梨』に、「ウダツバシラ 東山梨郡勝沼町上岩崎では、二階や三階まで通る檜や栗材の柱をウダツバシラ(卯建柱)とかウダチバシラと呼んでいる。いわゆる大黒柱に相当するものである。街道に面した家では、棟までとどく柱を残して壁を塗り、この柱をウダツバシラとっている。韮崎市の宿場通りでは、隣り合った家の二階と二階をさえぎるように張り出して作られた部分をウダツとよんでいる」<sup>注26)</sup>とある。つまり、東山梨郡勝沼町において、ウダツバシラは棟持柱であり大黒柱のことでもある。さらに、『総合日本民俗語彙』にも、「ウダツバシラ 普通大黒柱の位置にある柱の別称。(略)」<sup>注27)</sup>とある。しかし、これらの記述から「ウダツ」と「大黒柱」の差異を見出だすことはできない。



## 2-3 ダイコクバシラ

・だいこくばしら、大黒柱：『建築大辞典』に、「①→いみばしら②大社造りの社殿において平面中央にある柱。③民家において平面の中央付近、特に土間と表と勝手関係の境目にある太い柱をいう。その名称については、この柱に大黒を祀ったためと考える人もいる。近世になって柱間を1間以上大きくとるに従い、構造上の必要があつて特に中央付近の柱が太くなったのに始まると考えられる。初めは柱筋の真に納めてあつたが、これでは畳間に出張って畳を欠く必要が生じてくるので、後にはそれを避けるために大黒柱の真を土間側に外すことが行われるようになった。忌柱とされたり家格の象徴とされる場合が多い。「心の柱」、「役柱」、「中柱」、「亭主柱」ともいう。④（中略）四間取りの中心にある柱を指す場合もある。愛知県日間賀島の民家がこの例」<sup>注28)</sup>とある。「中央付近」や「四間取りの中心」とあるから、大黒柱は建物内部の柱である。しかし、以上の説明は、もっぱら平面のみの記述で、垂直材としての構造的特性にふれない。また、『居住習俗語彙』にも、「ダイコクバシラ 大黒柱。家の中で一番太い念入りに磨いた柱で、普通は上り端の中央、土間と表内両間との三合ひに在るものときまつて居るが、土地によつて、別の柱に此名を付けた例もある」<sup>注29)</sup>とある。ここでも垂直方向への記述はない。しかし、『日本民俗事典』をみると、大黒柱の項に、「全国的に土間と床張の部分の境界にある中心柱を大黒柱という。大黒柱は棟をうける大切な柱である」<sup>注30)</sup>とあるように「大黒柱」が建物内部の棟持柱であることを記すものもある。

## 2-4 ナカバシラ、ミバシラ、テイシュバシラ、ウシモチバシラ

また、「大黒柱」は、地方によってその名称も様々である。『居住習俗語彙』をみると、「ナカバシラ 陸前牡鹿の島では中柱は大黒柱のこと」。「ミバシラ 陸前五戸附近で大黒柱、又は之を中にした三つの柱ともいふ。新築の時この三柱が立つと、萱三把をもつて来て是に結はへ付け、又大小三本の幣束を是に立て添へる」。「テイシュバシラ 内庭と勝手と上がり口の間との三合ひに立つ柱、即ち他の地方で大黒柱といふものを、尾張日間賀島では亭主柱といひ、上の四間の四合ひの所の柱を、此島では大黒柱と謂つて居る」。「ウシモチバシラ 東北では仙臺以北、北上川の中流地方などで、臺所土間の中央にある柱。（中略）或は此柱が大黒柱だといふ者もある（登米郡史）」<sup>注31)</sup>とある。さらに、野村孝文は、このように「大黒柱」の名称が様々あることについて次のように述べる。「大黒柱の名称は全国的に用いられて居り、又その類縁の名称も甚だ多く30—40種は下るまいと思う。然しどの様な柱を大黒柱と呼んでいるかに就いて見るとその内容は複雑で一定していない」<sup>注32)</sup>。

以上、言葉の用例より「ウダツ」と「大黒柱」の考察を行った。まず、「ウダツ」は、その用語として、二種類の意味を持つ。一つ目の意味は、棟持柱そのものを「ウダツ」とする場合である。これは、『日本農民建築の研究』における石原の記述でわかるように、

内部も外壁も区別なくすべての棟持柱を「ウダツ」とするものである。対して、二つ目の意味は、『建築大辞典』や『民俗建築』にあるような、本論が問題とする建物外壁の棟持柱である。前者がより広い意味として広義の「ウダツ」であるのに対し、後者は狭義の「ウダツ」であるといえよう。ただ、言葉の用例のみでは、「ウダツ」の意味が二つある理由はわからない。これとは対照的に、「大黒柱」の場合、床と土間の境に立つ、建物内部の柱を「大黒柱」と呼ぶことはあっても、建物外壁の柱を「大黒柱」と呼ぶことはない。また、「大黒柱」は、棟持柱であることを示すものもあるが、一般的に建物内部の柱であることがわかるのみで、言葉の用例からは構造的な内容を知ることができない。さらに「大黒柱」は、野村が指摘するように、その用例があまりにも多岐にわたり、用例からその構造的特性を見出すことはきわめて困難である。よって、「大黒柱」の構造的特性を明らかにするためにも、建築遺構による平面図や断面図を用いて考察する必要がある。以下では、石原が指摘した山梨県が「ウダツ」と「大黒柱」の双方がみられる地域であることから、両者の共通点と相違点を明らかにするために、山梨県の民家に即して考察を進める。

### 3 建築遺構にみるウダツと大黒柱

#### 3-1 笛吹川流域の民家

棟持柱のことを「ウダツ」や「大黒柱」と称していると石原が指摘した山梨県の中央盆地は、切妻茅葺の棟持柱構造が多く分布する地域である。戦後、この地域の民家調査を集行的に行った関口欣也は、その調査結果を『山梨県の民家』にまとめ、数多くの棟持柱構造の民家を豊富な図版とともに掲載し、「甲府盆地東部」にこの形式の民家が多いことを指摘した<sup>注33)</sup>。また、宮澤智士は、『山梨県の民家』を参照し、とくに甲府盆地東部の「笛吹川流域」に、棟持柱構造が多く分布している、と指摘した<sup>注34)</sup>。実際、『山梨県の民家』をみてわかるように、笛吹川流域には棟持柱構造が多く分布している。よって、本論は、宮澤の指摘にならない、茅葺切妻の棟持柱構造を特徴とするこの地域の民家を「笛吹川流域の民家」と定義する。

では、笛吹川流域の民家に即した考察に入る。過去の研究において、笛吹川流域の民家の実測調査をまとめたものとして、先述の石原『日本農民建築の研究』（1976）と関口『山梨県の民家』（1982）がある。まず、『日本農民建築の研究』は、「ウダツ」と「大黒柱」との双方の用語をかかげるものの、「ウダツ」と「大黒柱」の共通点と相違点を考察するだけの資料に欠ける。対して、平面図や断面図を豊富に掲載する『山梨県の民家』は、棟持柱や大黒柱を記述するものの、「ウダツ」を記述しない。そのため、『山梨県の民家』を用いて「ウダツ」と「大黒柱」の差異を考察することはできない。よって、既往研究より両者の差異を考察することはできない。そこで本研究は、この状況を克服するために、「平成15年度科学研究費補助金基盤研究」の一環として笛吹川流域の民家の調査を行った<sup>注35)</sup>。その際、平面図や断面図の採集とともに、ヒアリングによって「ウダツ」と「大黒柱」



に即した柱の名称を確認することができた。そこで本節では、笛吹川流域の民家調査によって採集した実測図面とヒアリングを用いて「ウダツ」と「大黒柱」の共通点と相違点を考察する。

### 3-2 平面にみるウダツと大黒柱

笛吹川流域の民家調査では 31 棟の建造物を実測調査した。そのうち棟持柱構造の民家は 18 棟であり、この 18 棟すべてについて柱の名称を住まい手からのヒアリングを通じて確認することができた。このヒアリングで確認した柱の名称は、ウダツ、大黒柱、小黒柱であった。とりわけ、大黒柱の名称はすべての民家で確認できた。

つぎに、ウダツと大黒柱が建物の平面上でそれぞれどのように配置されているのか、また、棟持柱なのか、そうでないのかを考察する。そのために、以下の分類法によって棟通りの柱を分類したものを表 1 に示す。まず、ヒアリングに即して、ウダツを☆、大黒柱を□、その他の柱を○に分類する。さらに、構造的特性に即して、棟持柱であるものを黒塗りにし、そうでないものは白抜きにする。まず、大黒柱とのヒアリングをえた柱は、17 番の水上重兵衛家住宅を除く 17 例（94%）が棟持柱であり、ほとんどの大黒柱が棟持柱であった。一つの建物のなかにある棟持柱の数は、3 本が 11 例と最も多く、全体の 61% をしめる。つぎに、2 本が 5 例で 28% をしめる。全体で平均は 2.7 本であった。また、棟持

表 1 笛吹川流域の民家にみるウダツと大黒柱  
(資料編 154-201 頁に実測図面を掲載)

番	建物名	所在地	建築年代	桁行(間)	梁行(間)	棟持柱配置
1	三枝行雄家住宅	牧丘町北原	1800 年頃	10.00	4.50	西?○○■○○○東
2	三枝貞晴家住宅	牧丘町北原	115 年前	7.50	4.00	西●■○○○●東
3	淡路栄家住宅	牧丘町北原	明治 29 年頃	8.50	4.50	西●○■○○○東
4	古屋古福家住宅	牧丘町北原	不明	8.00	4.00	西●○○■●東
5	古屋茂富家住宅	牧丘町北原	明治 29 年以前	8.00	4.50	西★○○○■○○★東
6	佐藤一郎家住宅	牧丘町牧平	不明	9.00	4.50	西★○○○■○○★東
7	戸田政守家住宅	牧丘町西保中	1700 年頃	8.00	4.00	西●○○○■●東
8	奥山朝則家住宅	牧丘町西保中	不明	8.50	4.25	西★○○○■○○○★東
9	今井秀郎家住宅	牧丘町西保中	不明	8.50	4.00	西●○○○■●東
10	小田切幹雄家住宅	牧丘町西保下	150 年前頃	8.00	4.50	西●○○●○■○○東
11	高原左門家住宅	牧丘町西保下	100 年前頃	9.00	4.50	西●○■○○○○●東
12	山下政英家住宅	牧丘町西保下	不明	12.00	5.00	西●○○■●東
13	山下牧郎家住宅	牧丘町西保下	明治初期	9.00	4.00	西○○○■○●東
14	藤原達男家住宅	牧丘町倉科	100 年前移築	7.00	4.00	西○○○■●東
15	赤池栄人家住宅	牧丘町倉科	不明	4.00	4.00	北●○○○■ 南
16	藤原金雄家住宅	牧丘町倉科	150 年前	8.50	4.50	西●■●東
17	水上重兵衛家住宅	牧丘町千野々宮	明治以前	9.50	4.50	西★○○○○□○★東
18	宮原久巴家住宅	塩山市小屋敷	不明	9.50	4.50	西●○○○○■●東

■：棟持柱で「大黒柱」と呼ばれるもの

★：棟持柱で「ウダツ」と呼ばれるもの

●：棟持柱であるが特別な名称はないもの

□：棟持柱でないが「大黒柱」と呼ばれているもの ○棟持柱でなく、とくに名称もないもの

\*建築年代は、主に実測調査時に行ったヒアリングからえたものを用いた(資料編 202-239 頁参照)

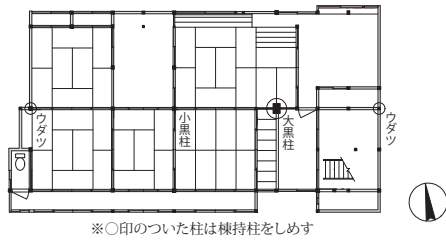


図1 佐藤一郎家住宅1階平面図 1/300  
(資料編 168 頁)

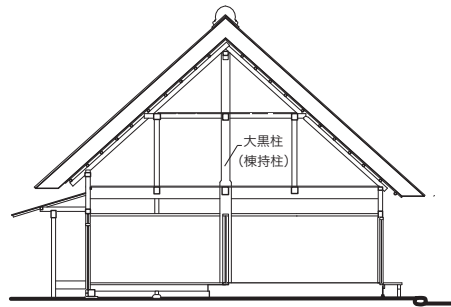


図2 佐藤一郎家住宅 断面図 1/200  
(資料編 167 頁)

柱が3本の建物をみると、そのすべてにおいて大黒柱と両妻面2本の柱が棟持柱になっていた。さらに、棟持柱が2本の建物においても、妻面のどちらか一方の柱と大黒柱が棟持柱になっていることから、棟持柱は妻側の外壁にある柱と大黒柱を中心に配されていることがわかる。ただ、10番の小田切幹雄家住宅は、外壁の柱と大黒柱のほか、小黒柱もふくめ計4本の柱が棟持柱であった。これだけ多くの柱が棟持柱となっているのは他に例がなくきわめて興味深い。次に、ウダツとのヒアリングをえた柱についてであるが、表1にみるように、4例の建物からウダツの名称を確認することができた(5,6,8,17番)。さらに、そのいずれもが、妻壁に位置する2本の柱が棟持柱となり、ともにウダツと呼ばれていることがわかる。以下に、実測調査時のヒアリングで確認した、ウダツと大黒柱に関する三氏からの貴重な証言を示す。

- ・両妻面の「棟を通っている柱」を「俗にウダツと昔の人は言う」といい、同じ棟木を支える柱でも大黒柱と異なる。(佐藤氏談 / 男性 / 70代後半 / 2003.09.12 調査 / 表1・6番)  
注36)
- ・「大黒柱は真ん中」の柱で、「両脇の柱はウダツ」。(奥山氏談 / 男性 / 80代後半 / 2003.09.02 調査 / 表1・8番) 注37)
- ・ウダツは今でこそあまり呼ばれなくなってきた言葉だが、70歳過ぎの人であつたらほとんど知っているくらいよく使われていた言葉。(水上氏談 / 男性 / 70代前半 / 2003.08.06 調査 / 表1・17番) 注38)

では、表1に即した分析とヒアリングをふまえ、笛吹川流域の民家に即してウダツと大黒柱の関係をまとめる。①棟持柱は建物のなかでも、妻壁2本、内部1本の計3本が最も多い。②大黒柱は棟持柱となることが多い。さらに、建物内部の柱のもうひとつの名称である小黒柱も棟持柱になるものもある。③妻壁の棟持柱のことをウダツといっている建物は4例で、妻壁に棟持柱をもつ18例からみれば少数派であった。とはいえ、ヒアリングの内容では、「70過ぎの人であつたらほとんど知っているくらいよく使われた言葉」であるウダツは、棟木まで達した「両脇の柱」を指しており、昔から「大事な柱」とされていた。また、信州にあるような、袖壁をウダツということはこの地域にはない、とされた。以上から推せば、遡ると、多くの家で妻側の外壁にある棟持柱をウダツと称していた、と考え

られる。

以上、笛吹川流域の民家についてウダツと大黒柱を考察した結果、「ウダツ」と「大黒柱」は、棟持柱という共通点をもつとともに、建物内部の棟持柱を「大黒柱」、建物外壁の棟持柱を「ウダツ」というように、平面における差異が明確である、と考えられる。

### 3-3 ウダツから大黒柱へ

すでに、「大黒柱」の用例については言及しているが、用語としての「大黒柱」は、時代としてどのくらいにまで遡るのか。『建築大辞典』の大黒柱の項をみると、「戦国時代（16世紀前半）ごろに始まる名称か」<sup>注39)</sup>とある。また、先に引用した伊藤の指摘によれば、天文年間（1532－1555）以降に広がった大黒信仰が、用語としての「大黒柱」の起源となる<sup>注40)</sup>。さらに、『日本民俗事典』は、天文・永禄（1532-1569）ころの大黒信仰が影響して、「大黒柱が用いられるようになったのは桃山時代から近世初期といわれる」<sup>注41)</sup>とする。さらにくわえて、野村孝文は、大黒柱について「構造柱として発達したものであるが、原始時代又は古代に遡るものでは無く、江戸時代に入ってからではないかと思う。大黒天信仰の点からもまた日本の民間住宅が構造的に進歩したのも江戸期に入ってからである点からもそのように考えられる」<sup>注42)</sup>とする。つまり、これらから推すと、用語としての「大黒柱」があらわれてきたのは早くとも中世末期であり、一般的にこの用語は近世に入ってから徐々に広がってきた、と考えられる。ただ、モノとしての「大黒柱」はこれ以前から存在していた、と考えられる。そして、このモノとしての「大黒柱」を考える上で、つぎに示す宮本常一の指摘がすこぶる興味深い。すなわち、「この寺の柱に見られるような柱は山梨県下の古い農家にも見かけるところであり、この柱をウダチ柱とっている。（中略）この柱が後には大黒柱とよばれるようになるが、大黒柱は棟まで達していなければならないと信じられているところは多い」<sup>注43)</sup>。つまり、宮本はウダチ柱が後に大黒柱と呼ばれるようになったことを述べている。

さらに、宮本の指摘にしたがって、すでに言及した広義の意味での「ウダツ」と狭義の意味での「ウダツ」との関係に照らし合わせると、つぎのように考えることができる。すなわち、そもそも、棟持柱そのものを指していた広義の「ウダツ」や「ウダチ」は、近世以後の「大黒柱」という名称の出現にともない、他の地方と同様、床と土間境という主要な位置である建物内部の「ウダツ」や「ウダチ」のみが、「大黒柱」と称されるようになった。ただこのとき、建物外壁の「ウダツ」や「ウダチ」は、そのような影響が及ばなかったため、今でもわずかながらその名称をとどめるに至った。そして、この建物外壁の「ウダツ」が、先に指摘した狭義の意味での「ウダツ」であり、本研究が実測調査した結果とも合致する。

以上より、遡れば、建物の内部も外壁も区別なく、棟持柱そのものを「ウダツ」と呼んでいた、と考えられる。ただ時代がくだり、「大黒柱」の名称が広がってくると、外壁の棟持柱は「ウダツ」の呼称をそのまま残すものの、内部の棟持柱は「大黒柱」と呼ばれる

ようになった、と考えられる。さらに、次第に「ウダツ」の名称はあまり用いられなくなったため、現在では、「大黒柱」の名称のみが残っている、と考えられる。

### 3-4 棟持柱構造と軸部・小屋組構造にみる大黒柱

大黒柱と呼ばれた柱をもつ 18 例の笛吹川流域の民家は、17 番の 1 例を除いて、その大黒柱が棟まで一本の柱でとどく棟持柱であった（表 1）。しかし、一般に、「わが国の民家の大黒柱は梁で止まって」<sup>注 44)</sup> いて、大黒柱が棟持柱になっている例は少ない。また、大黒柱が棟まで一本の柱でとどく棟持柱構造は、軸部と小屋組の分離しない構造である。対して、梁下で止まった大黒柱の場合、軸部と小屋組が分離した構造である。この軸部と小屋組の分離した構造の一つに、永井規男が言及した「おだち・とりい」組みと呼ばれた北山型の民家がある。永井は、北山型に即して、棟持柱構造と関連してつぎのような仮説を提示した。すなわち、「近世に入って、一般に家屋規模が大きくなってくると、それに応じて家のかたちが高くなり、棟持柱構造にすると相当に長い柱が必要になる。これを避けて、できるだけ短い柱で済むように、まず木戸家のような構造が考えられ、ついで「おだち・とりい」組みへと発展したのではないかと推定される」<sup>注 45)</sup>。さらに、この仮説を推し進めた論考が棟持柱祖型論である。さらにまた、内田・土本「棟持柱構造から軸部・小屋組構造への転換過程」（2002）は、棟持柱構造から軸部・小屋組構造への変容過程に言及した<sup>注 46)</sup>。本論は、以上の説を継承し、文献史料や遺構図面をもとに、とりわけ大黒柱の変容過程を明らかにする。

笛吹川流域の民家で、ウダツは棟持柱のことを指していた。また、『建築大辞典』に、「おだち 卯立（うだつ）の転訛。京都府丹波地方の草葺き民家において棟木を支える小屋束をいう」<sup>注 47)</sup> とあるように、地方によってウダツは、オダチとも呼ばれ、棟束を指すものもある。実際、先に言及した北山型の民家に、小屋束にウダツと註がふられた断面図をみることができるし<sup>注 48)</sup>、「丹波民家調査報告」に、小屋束にオダチと註がふられた断面図をみることができる<sup>注 49)</sup>。くわえて、信州の茅葺民家では、この小屋束のことを棟束といい、遠藤・土本ほか「信州の茅葺民家にみる棟束の建築的意義」（2000）では、この棟束が棟持柱のなごりではないか、と指摘する<sup>注 50)</sup>。

このように、軸部・小屋組構造にも小屋束にウダツやオダチなどの名称を確認することができる。ただ、軸部・小屋組構造において確認できるウダツやオダチは、なにも小屋束などの梁上の材ばかりではない。小林昌人によれば、伊豆半島の南端石廊崎付近にシモオダツと呼ばれる、他の地域で大黒柱の位置に立つ柱があり、「この両柱の上部は天井で止まっており、棟まで伸びてはいない」<sup>注 51)</sup> とある。つまり、このシモオダツは、軸部・小屋組構造の大黒柱を指す。さらに、『総合日本民俗語彙』に、「オダツバシラ 伊豆の南崎村で、下図のごとき場所にある二本の柱をいう（沿海手帖）」<sup>注 52)</sup> とあり、その平面図は笛吹川流域の民家にみる大黒柱の配置とそっくりである。また、『居住習俗語彙』に、「オ

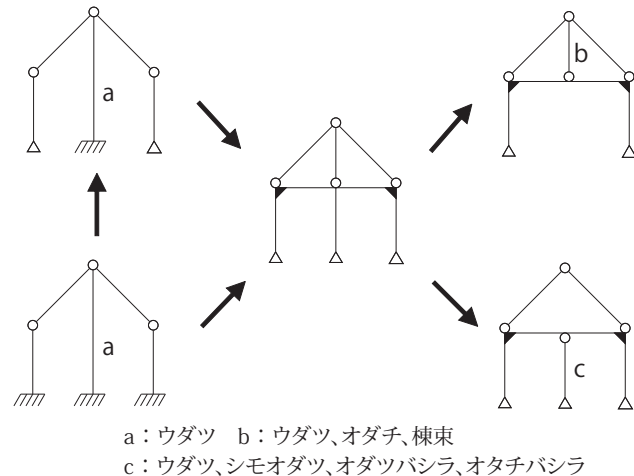


図3 梁行2間の棟持柱構造に即した構造変遷図

タチバシラ 伊豆の南崎村で、上り端の二間とニヤ即ち土間との境に立つ柱、他の土地でいふ大黒柱である」とある<sup>注53)</sup>。くわえて、『尾瀬と檜枝岐』に、「ウダツ 小屋の柱。尖端を股木に取り、梁を受けて居る」<sup>注54)</sup>とある。「梁を受けて居る」この柱は、棟持柱でも小屋束でもなく、伊豆半島にみるシモオダツと同様に、軸部と小屋組に分離した構造における梁下の材である。

このように、伊豆半島にみるシモオダツ・オダツバシラ、さらに<sup>ひのえまた</sup>檜枝岐にみられるウダツの実例から、軸部と小屋組が分離した構造において、梁上の材である小屋束ばかりでなく、梁下の材にもウダツやオダチの名称を確認することができる。そして、これらウダツやオダチの名称は、かつて棟持柱構造であったものが軸部・小屋組構造にそのなごりをとどめたものである、と考えられる。さらに、「他の土地でいふ大黒柱」とあることは、軸部と小屋組に分離した構造にみられる梁で止まった一般の大黒柱も、遡れば、棟持柱であったことを如実に示している。

以上をまとめると、棟持柱構造から軸部・小屋組構造へと分離していく過程で、棟持柱としてのウダツは梁の上下で分断された。このとき、梁上の材は、北山型のウダツや丹波民家にみるオダチ、さらに信州茅葺民家にみられる棟束として残った。対して、梁下の材は、伊豆半島にみられるオダチ柱やオダツ柱に棟持柱のなごりがみられる。くわえては、この梁下のオダツに、後の大黒信仰がくわわって広く一般的にみられる大黒柱となったのだろう。つまり、原初的に、ウダツやオダツと呼ばれた棟持柱が、モノとしての「大黒柱」の原型である、と考えられる(図3)。

ただ、その一方で、笛吹川流域の民家にみられる棟持柱となった大黒柱は、他の地域にみられるような、軸部と小屋組に分離するという過程を経なかった。そのため、大黒柱は、梁の上下で分離することなく、棟持柱のまま現在まで残りつづけた、と考えられよう。つまり、笛吹川流域の民家にみる棟持柱となった大黒柱も、軸部と小屋組に分離した構造における梁の下で止まった大黒柱も、ともに遡れば、ウダツという棟持柱であった、と考え



られる。

### 3-5 ウダツと大黒柱の差異

では、以上をふまえて、再び「ウダツ」と「大黒柱」の差異に関する考察に戻る。ここまでの考察から、「ウダツ」と「大黒柱」の共通点は棟持柱であり、双方の相違点は外壁の棟持柱と内部の棟持柱であった。さらに、外壁の棟持柱も内部の棟持柱も、遡れば、双方とも区別なくウダツなどと呼ばれていた可能性がある。では、現在の笛吹川流域の民家にみられるように、「ウダツ」と「大黒柱」の差異が内部と外壁の棟持柱にあるのはなぜか。そもそも、なぜ内部の棟持柱のみが「大黒柱」と呼ばれるようになったのか。この疑問を解決するために、以下に示す佐藤一郎氏(表1の6番)の証言が非常に興味深い。すなわち、

そう、ウシ(大黒柱に差し込まれている縦梁、横梁)といいますね。俗に言うウシ。それだら、もし大地震がきても、もしこうゆう木造の場合じゃ、ここ(大黒柱)の辺にいればね、命に影響ねえぞと、つぶされんぞと、(中略)よく昔の人は言ったですね。これが、よくしてあるようですよ、折り込んでね。これもみんな元で締めてね。だから、ボシンと倒れることのないようにはしてあるようだね。ほんで向こうとこっちで通っているからね、ここが2間半、こっちが2間1尺と。だから、この大黒柱の方に立ってれば、これがコウモリを畳んだように、こうなるような原理らしいやね。<sup>注55)</sup>

また、今和次郎も、「山梨県の富士五湖沿いの足和田村が、えらい鉄砲水の災難で、一村全滅したことがあった。被災した一軒の農家のおばあさんが「大黒柱の下にいればだいじょうぶだというので、大黒柱の根元のところにすわっていて、くずれた家のなかにいたのに助かった」ということだった」<sup>注56)</sup>と記しており、佐藤一郎氏の証言と同様な内容を記録している。これら、佐藤氏の証言と今和次郎の記録から理解できることは、大黒柱が構造の要になっている、ということである。では、なぜこれほどまでに、大黒柱中心の構造にしなければならないのか。

江川家住宅に、生柱という掘立柱がある。報告書によると、「玄関背後土間境にたつ生柱は掘立柱であり、これは前身建物のものであって、現建物の建築にあたって、記念としてのこされたものである。発掘調査の結果、生柱のほか四本の掘立柱の柱根を発見している」<sup>注57)</sup>。江川家住宅は、現況では軸部と小屋組が分離している。前身建物がどういう建物かわからないが、発掘調査から少なくとも掘立柱を含んでいた、と考えられる。この柱が棟持柱かどうかは不明であるものの、現況ではこの生柱は構造的役割を一切になっておらず、象徴的意味合いのみをもつ<sup>注58)</sup>。このように、生柱は家の継続性を記念として残された、と理解される。さらに推せば、この掘立柱は前身建物における、大黒柱のような内部の柱であって、脚部の劣化が比較的遅かったために残った、と考えられる。これを笛吹川流域の民家に即して考えれば、狭義のウダツのような外壁にある棟持柱は、雨水に年中さらされているので、柱の脚部が劣化しやすい。対して、大黒柱のような内部の棟持柱



は、雨水にさらされることはないので、外壁の棟持柱に比べ脚部の劣化は明らかに遅くなる。すなわち、笛吹川流域の民家における棟持柱は、もともと外部も内部も区別なく重要な構造材であったが、このような、建物内部と外壁における柱脚部の劣化の差異から、外壁の棟持柱に比べ脚部が劣化しにくい内部の棟持柱に対して次第に構造的な要求が高まっていき、結果として、ヒアリングでえたような、大黒柱を中心とした構造が生まれてきたのではないかと考えられる。

以上をまとめると、笛吹川流域において、原初的には、内部も外壁も区別なく棟持柱のことをウダツと呼んでいた。しかし、「外壁のウダツ」と対照的に、「内部のウダツ」は、雨水にさらされないなどの理由によって柱の脚部の劣化が遅かった。そこに構造的により長い耐久年数が保たれていき、「内部のウダツ」に大きく依存するような構造になっていった。そして、建物の荷重を一手に受けることになった「内部のウダツ」は、より太い材の独立柱として内部空間を象徴した。そこに、伊藤が述べたような天文以降の大黒信仰が付着して「内部のウダツ」は「大黒柱」と呼ばれるようになった、と考えられる。と同時に、「内部のウダツ」に比べて構造的な要求が弱くなった「外壁のウダツ」は、その名称を次第に失っていった、と考えられる。

また、ヒアリングのように大黒柱を中心として「コウモリを畳んだように」なるためには、柱が自立していなければならない。つまり、大黒柱の脚部が固定端である必要性から掘立柱でなければならない。しかし、今回の調査では、民家の柱の脚部は礎石か土台で掘立は確認できなかった。さらに、大黒柱の脚部がすべて礎になっていた。ただ、江川家住宅の前身建物が掘立柱をもつように、掘立が礎よりもふるい形式であることから推せば、遡れば、大黒柱の祖型はその脚部が掘立であろう。つまり、ヒアリングの内容は、大黒柱がかつて掘立の棟持柱であったことを示している、と考えられる<sup>注59)</sup>。以上より、大黒柱の原初的形態に、建物内部の掘立棟持柱が想定される。

#### 4 町屋にみるウダツと大黒柱

笛吹川流域の民家は、茅葺切妻の農家で、屋根勾配が矩勾配となる棟持柱構造である。対して、町屋のように、屋根勾配が3寸5分から5寸までとなる緩勾配の建物においても大黒柱が棟持柱になっているものが確認される。例えば、京都の町屋について軸部と小屋組の関係から論じた、畑・土本「京都の町屋における軸部と小屋組」(1998)は、近世史料である「田中吉太郎家文書」<sup>注60)</sup>を用いて、軸部と小屋組に分離しない構造について豊富に言及する。この論考の中で、「大黒柱が棟木を直接支えているものは25軒中8軒(32%)であった」<sup>注61)</sup>とあるように、大黒柱のおよそ3分の1が棟持柱であることがわかる。また、『京都府の民家』も、大黒柱が棟持柱になるものを載せる<sup>注62)</sup>。さらに、中村昌生は、『京都の町家』で、京都の町屋の大黒柱が棟木や母屋までのびていることを指摘する<sup>注63)</sup>。さらにくわえて、京都から離れた越前大野の町屋にも、「中柱」と呼ばれる大黒柱が棟持柱に

なっている例が紹介されている<sup>注64)</sup>。

以上より、笛吹川流域の民家のような、屋根勾配が矩勾配になる草葺の農家ばかりでなく、京都の町屋のような、屋根勾配が緩勾配となる建物にも、大黒柱が棟持柱になるものが多数存在している、と理解できる。しかし、笛吹川流域に分布する、建物外壁の柱がウダツと呼ばれる棟持柱をもつ民家は、これまでのところ、他の地域にて確認できなかった。ただ、町屋のような緩勾配の建物の場合、つぎに示すように、「ウダツ」は棟持柱でなく、屋根境に卯建（ウダツ）として散見される。「京都府の民家」で報告されている亀井重幸氏宅は、丹後半島にある漁家で、「上大黒、下大黒の2本の柱は直接棟木を支承している」という<sup>注65)</sup>。さらに、ここで注目すべきことは、「平入の切妻造りで両端に卯建を上げ棧瓦葺とする」<sup>注66)</sup>という点である。このような屋根境に小屋根をつけたウダツは、近世の洛中洛外図屏風にも多数散見できる<sup>注67)</sup>。そして、この卯建は、「総論4 ウダツ」（2003）にて土本が説明したように、「塀」ないし「高塀」が妻面の棟持柱、つまり建物外壁のウダツと一体化した後の姿であることから、京都の町屋にみられる屋境としてのウダツも、原初的に棟持柱のことを指していた<sup>注68)</sup>、と考えられる。事実、土本が指摘するように、戦国期の洛中洛外図屏風（町田本・上杉本）をみると、梁行2間、掘立、取葺の棟持柱構造の建物を多数散見できる<sup>注69)</sup>。したがって、町屋においても、遡れば、笛吹川流域の民家と同じように、「ウダツ」と「大黒柱」の共通点は棟持柱にあり、さらに両者の差異は外壁の棟持柱と内部の棟持柱にあった、と考えられる。ただ、笛吹川流域の民家の場合、ウダツは建物外壁の棟持柱であったが、京都の町屋の場合、棟持柱と高塀が妻壁において一体化したために屋境の小屋根をもウダツと混同されるようになった、と考えられる。

## 5 小規模建造物にみるウダツ

永井規男によれば、棟持柱構造は梁行2間と4間に大別される<sup>注70)</sup>。笛吹川流域の農家や京都の町屋に代表される町屋は、梁行4間に分類される棟持柱構造である。対して、梁行2間の棟持柱構造は、以下のように、山小屋や付属屋等の小規模建造物に散見される。

・樵小屋：石原『日本農民建築の研究』に、奥日光の山中、塩谷郡川俣村の樵小屋の図がある。これをみると、ウダツと呼ばれる先端が股木になった2本の棟持柱で棟木を支えている<sup>注71)</sup>。

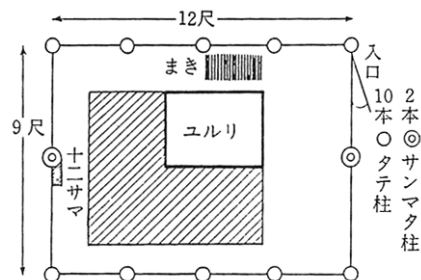


図4 オタツゴヤ平面図

・ウダツゴヤ、オダツゴヤ：『民俗建築 第21・22合併号』に、「ウダツ小屋 遠田郡篋岳地方、粗末な小屋という意である。（宮城県）」<sup>注72)</sup>とある。『総合日本民俗語彙』に、「ウダツゴヤ 掘立小屋をウダツまたはウタという例は東海の諸縣の他、千葉縣にも宮城縣にもあるが、極めて粗末な家をそういうのは戯れの誇張らしく、本物の構造は確め難い。（中略）新潟縣北魚沼郡で、オダツゴヤという山中の掛小屋も、センダツ、オダツという二種の柱があつて、前者に棟木を載せ後者へ桁を渡すといい、いずれも小屋の周邊に立てた柱と見えるから（熊狩雑記）、或は中柱のないのがウダツの特徴だつたかも知れぬ」<sup>注73)</sup>とある。『熊狩雑記』は土本「総論4 ウダツ」<sup>注74)</sup>で指摘済みである。ここで、「熊狩り小舎」と「山小屋の構造」の棟持柱構造の小屋が紹介されている。「熊狩り小舎」は、センダツという2本の棟持柱があり、ヲダツ小屋ともいう。対して、「山小屋の構造」は、ウダツという2本の棟持柱がある<sup>注75)</sup>。また、『民俗資料選集6』に、「オタツゴヤ 小赤坂のオタツゴヤは山小屋で、上図のようなものである。間口九尺（二・七メートル）、奥行二間（三・六メートル）、高さ中央で八尺（二・四メートル）ぐらいで、柱はいずれも地べたにつきさすオッタテ柱である。まず、サンマタという長さ二間ぐらいの丸太を、間口の中央に一本ずつたてる。この柱の先が二またになっており、その上に十四、五尺（四・五メートル）のムナギをわたす。この高さが八尺ぐらいである。次に奥行のほうは、三尺（九〇センチ）おきぐらいに、タテ柱と称する木をムナギにたてかける。根もととは土にうめる。このタテ柱に、ヨコトと称して、細い木を横に何段にも結びつける。その上を木の皮や笹でふいて、屋根ができる。間口のほうも同様にふくが、いっぽうに三尺ほどの入り口をつける。なおこの入り口を北に向けると、災難ごとがあるといってくる」<sup>注76)</sup>とある（図4）。

・ウダツヤ：信州福沢村家数書上帳に、「うだつ家」・「うたつ家」・「有立家」が記載され、「拾九軒 うだつ屋」とある<sup>注77)</sup>。また、『建築大辞典』に、「うだつや 静岡・山梨・長野・千葉・宮城各県地方の農家において梁がなく、棟を支える柱が地面にまで通っているもの。主として小住宅または付属小屋の構造として使われた。『鼠の夜嘶』にウダツ小屋の文字が現れているのを見ると、近世初期の近畿地方の町家では小住宅に使われていた例も知られる」とある<sup>注78)</sup>。

しかし、以上にみた小規模建造物において、「大黒柱」に関する記述は確認できなかった。ただ、これらの建物は、梁行2間という大きさゆえに、桁行方向も2本の棟持柱で棟木を支えるきわめて単純な構造で、図4のようにそもそも建物内部に柱がない。つまり、「大黒柱」の原形となるような内部空間を象徴するような独立柱がない。そのため、「大黒柱」という言葉そのものがこれらの小規模建造物に確認できなかった、と考えられる。

## 6 小括

以上、本論は、「ウダツ」と「大黒柱」の共通点と相違点を論証してきた。まず、棟持

柱構造が豊富に確認される笛吹川流域の民家は、建物外壁の棟持柱が「ウダツ」と呼ばれ、建物内部の棟持柱が「大黒柱」と呼ばれていた。さらに遡れば、内部も外壁も区別なく、棟持柱そのものを「ウダツ」としていた、と考えられた。そして、雨水にさらされやすい「外壁のウダツ」よりも柱の脚部が劣化しにくい「内部のウダツ」が「大黒柱」として構造の要になった。また、現在、一般的にみられる棟持柱でない梁下で止まっている「大黒柱」も、ウダツやオダツといった名称が残存していることから、その祖型に棟持柱が想定された。

また、京都の町屋では、「大黒柱」は建物内部の棟持柱となっているが、建物の外壁では、高塀と妻壁にあるウダツが一体化したために「屋境のウダツ」となった。このように、笛吹川流域の民家やその他草葺民家とは異なる移行過程が想定された。とはいえ、遡れば、笛吹川流域の民家と同様に、建物外壁の棟持柱をウダツとしていた、と考えられる。かたや、「熊狩小屋」、「山小屋の構造」、「ウダツヤ」など梁行2間の棟持柱構造は、小規模ゆえに、建物内部に棟持柱がなかった。そのため、この種の小規模な建物に、「ウダツ」は確認されるが、「大黒柱」は確認されなかった。

大黒柱の祖型は、三田が戦前に指摘したように、棟持柱であろう。そもそもは棟持柱という太い構造材があり、とりわけ力強く建物を支える内部の独立柱に対して、後になって象徴的な意味合いが付加されて、建物の中心的な存在である「大黒柱」が生まれてきた、と考えられる。

以上、ウダツと大黒柱は、農家にも町屋にも存在し、遡ればともに棟持柱であったが、妻側の外壁に位置するか、内部に位置するか、という点に根本的な差異があった。

## 【注】

注1) 参考文献1) 52頁引用。石原は、1931年11月、建築学会大会で「日本農民建築の研究」を発表し、これが翌年学会誌に掲載された。その後、1934年から1943年にかけて、各論ともいべき各都道府県の地方的調査をまとめた『日本農民建築』を第一輯から第十六輯まで発行している。これらは戦後、「日本農民建築の研究」はこれに加筆、修正を加えたものが1976年に、また『日本農民建築』は、第一輯から第八輯に改められ、改訂復刻版として1972年と1973年に、ともに南洋堂出版から発行されている。

注2) 参考文献2) 128頁参照

注3) 参考文献3) 参照

注4) 参考文献4) および参考文献5) 参照

注5) 参考文献6) 52-53頁参照

注6) 参考文献1) 56頁引用

注7) 参考文献7) 243頁引用

注8) 参考文献8) 126頁引用

- 注 9) 参考文献 9) 104 頁参照
- 注 10) 参考文献 10) 63 頁参照
- 注 11) 参考文献 11) 126 頁参照
- 注 12) 参考文献 12) 58 頁引用。すでに、参考文献 13) で言及された。
- 注 13) 参考文献 14) ～参考文献 17) 参照
- 注 14) 参考文献 13) 参照。戦後の民家研究でも、参考文献 18) や参考文献 8) などに棟持柱祖型論といえる論点が提示されている。
- 注 15) 参考文献 2) 128 頁引用
- 注 16) 参考文献 2) 968 頁引用
- 注 17) 参考文献 1) 参照
- 注 18) 参考文献 12) 参照。また、三田は、1938 年に「卯建の起源とその変遷に就て」を発表しているが、そこでは、もっぱら小屋根としての卯建（ウダツ）について述べられているのみで、棟持柱としての「ウダツ」については言及されていない。
- 注 19) 参考文献 19) 362 頁引用
- 注 20) 参考文献 16) 参照
- 注 21) 参考文献 2) 128 頁引用
- 注 22) 参考文献 20) 467 頁引用
- 注 23) 参考文献 1) 52 頁引用
- 注 24) 参考文献 1) 54 頁引用
- 注 25) 参考文献 20) 467 頁引用
- 注 26) 参考文献 21) 40-41 頁引用
- 注 27) 参考文献 22) 150 頁引用
- 注 28) 参考文献 2) 968-969 頁引用
- 注 29) 参考文献 23) 81-82 頁引用
- 注 30) 参考文献 24) 413 頁引用
- 注 31) 参考文献 23) 80-84 頁引用
- 注 32) 参考文献 8) 125 頁引用
- 注 33) 参考文献 25) 参照
- 注 34) 参考文献 26) 170 頁参照
- 注 35) 参考文献 27) 参照。なお、このとき捕捉した建築遺構については、実測図と所有者へのヒアリング結果を資料編 151-239 頁に掲載した。
- 注 36) 資料編 213 頁参照
- 注 37) 資料編 218-219 頁参照
- 注 38) 資料編 238 頁参照。水上氏のヒアリングによれば、「ウダツ」は妻壁にある棟持柱を指す。
- 注 39) 参考文献 2) 968-969 頁引用



- 注 40) 参考文献 7) 243 頁参照
- 注 41) 参考文献 24) 413 頁引用
- 注 42) 参考文献 8) 126 頁引用
- 注 43) 参考文献 28) 66-67 頁引用
- 注 44) 参考文献 1) 56 頁引用
- 注 45) 参考文献 18) 11-12 頁引用
- 注 46) 参考文献 17) 参照
- 注 47) 参考文献 2) 207 頁引用
- 注 48) 参考文献 29) 18 頁参照
- 注 49) 参考文献 30) 2 頁参照
- 注 50) 参考文献 15) 参照
- 注 51) 参考文献 31) 196 頁引用
- 注 52) 参考文献 22) 253 頁引用
- 注 53) 参考文献 23) 86 頁引用
- 注 54) 参考文献 32) 431 頁引用
- 注 55) 資料編 213 頁右段引用。この証言は、大地震時における具体的事例を示したものではなく、また、この証言にもとづいて具体的な検証を行っているわけではない。しかしながら、筆者らがえた証言と同様な内容を今和次郎も聞き取っていることから、棟持柱となった大黒柱の構造的性質を示す重要な証言であると考えられる。さらに、この証言においてとくに重要な点は、大黒柱の長さを一般的な側柱高さにとどめて軸部・小屋組構造にするよりも、地上から一本の柱で棟木までのばして棟持柱にした方が、構造的に有利である、と信じられ、それが現在まで伝えられていることにある。
- 注 56) 参考文献 33) 418 頁引用
- 注 57) 参考文献 34) 180-183 頁、参考文献 35) 参照
- 注 58) 現況の民家の構造は、軸部と小屋組が分離した形式が大半であり、その脚部は礎となる。掘立である大黒柱は、柱自体が自立し、構造的な要となり得る。しかし、礎の上ののる大断面の大黒柱は、むしろ水平材によって垂直を保つ。また、構造技術の発展、すなわち継手・仕口技術の発達などによって、柱は細くすることが可能となるから、軸部と小屋組の分離した架構における大黒柱（礎）の大断面は、構造的というより、むしろ象徴性によってその姿を保っている、と考えられる。
- 注 59) 掘立柱は、柱の脚部を土に埋めるだけで自立することができる単純な構造であるものの、耐久性といった時に難点がある。そのため、現在みられる民家は、小屋などの小規模建造物を除き、柱の脚部が礎もしくは土台をなしているのが一般的であり、掘立のものは、文化財指定を受けているものでも、ここで言及した江川家住宅や大阪の民家園にある山田家住宅くらいである。とはいえ、礎構造は、柱の脚部が石にのっているだけなので、民家の



構造が安定となるためには、柱と柱の頂部を梁などの水平材でつなぎとめ、しっかりと固定する必要がある。このような技術は、一般に、中世後期から近世にかけて民家に導入されるようになったため、それ以前の民家の柱の脚部は主に掘立柱であり、中世後期から近世にかけて掘立から礎に移行した。したがって、現在、棟持柱となった大黒柱の脚部が礎であっても、それ以前に掘立であったと想定することは、ごく自然なことであろう。また、笛吹川流域ではないものの、内田・土本「棟持柱構造から軸部・小屋組構造への転換過程（参考文献 17）」が日本の民家調査報告書から捕捉した木地師の家や浅沼文太郎出造小屋は、建物内部に掘立の棟持柱を有した建築遺構であることから、笛吹川流域の民家においても同様に、大黒柱が掘立柱であったことが想定される。さらに、先の証言をふまえると、この内部で掘立柱となった棟持柱は、建物の中心部に位置し、他の柱よりも格段に太くつくられ、さらにそこから四方に水平材を渡して民家の架構を支えていることから、民家の架構においてもとくに重要な構造材である。このことの表現として、本論では、棟持柱となった大黒柱を、民家の構造の要と呼ぶ。

注 60) 「田中吉太郎家文書」は、元治の大火以前

注 61) 参考文献 14) 264 頁引用

注 62) 参考文献 18) 参照

注 63) 参考文献 36) 参照。後に図版を除いたものとして、参考文献 37) がある。

注 64) 参考文献 38) 参照

注 65) 参考文献 18) 70 頁引用

注 66) 参考文献 18) 68 頁引用

注 67) 参考文献 39) 参照

注 68) 参考文献 6) 参照

注 69) 参考文献 39) 参照

注 70) 参考文献 18) 12 頁参照

注 71) 参考文献 1)、石原憲治『日本農民建築 第 5 輯』（南洋堂書店、1973）参照

注 72) 参考文献 20) 465 頁引用

注 73) 参考文献 22) 150 頁引用

注 74) 参考文献 6) 参照

注 75) 参考文献 40) 8 頁引用

注 76) 参考文献 41) 235 頁引用

注 77) 参考文献 42) 497-498 頁参照

注 78) 参考文献 2) 121 頁引用

## 【参考文献】

1) 石原憲治『日本農民建築の研究』（南洋堂書店、1976）

- 2) 彰国社編『建築大辞典 第2版<普及版>』（彰国社、1993）
- 3) 太田博太郎「「うだち」について」（一志茂樹先生喜寿記念会編『一志茂樹博士喜寿記念論集』一志茂樹先生喜寿記念会、519-530頁、1971）、のちに、太田博太郎「「うだち」について」（太田博太郎『日本建築の特質 日本建築史論集Ⅰ』岩波書店、461-472頁、1983）所収
- 4) 高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明・伊藤毅編『図集 日本都市史』（東京大学出版会、1993）
- 5) 高橋康夫「京都の町と住まいの歴史」（京都新聞社編『京の町家考』京都新聞社、14-39頁、1995）
- 6) 土本俊和「総論4 ウダツ」（土本俊和『中近世都市形態史論』中央公論美術出版、45-59頁、2003）
- 7) 伊藤鄭爾『中世住居史〔第二版〕』（東京大学出版会、1958）
- 8) 野村孝文「鹿児島県民家の「ナカエ」に就いて」（『日本建築学会論文報告集』第61号、120-126頁、1959）
- 9) 川島宙次『滅びゆく民家—間取り・構造・内部—』（主婦と生活社、1973）
- 10) 牧田茂「大黒柱の精神性」（ミサワホーム総合研究所出版制作室編『日本人 住まいの文化誌』ミサワホーム総合研究所、62-63頁、1983）
- 11) 吉田桂二『民家ウォッチング事典』（東京堂出版、1987）
- 12) 三田克彦「大黒柱の淵源とその変遷」（住宅改良會『住宅』第27号、57-59頁、1942）
- 13) 土本俊和「表題解説—戦前の棟持柱祖型論—」（信州大学工学部土本研究室編『棟柱 第7号』信州伝統的建造物保存技術研究会、2-3頁、2004）、のちに、同「総論3 戦前の棟持柱祖形論」（土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、42-45頁、2011）
- 14) 畑智弥・土本俊和「京都の町屋における軸部と小屋組」（『日本建築学会計画系論文集』第513号、259-266頁、1998）、のちに、同「各論A 京都1 京都のマチヤにおける軸部と小屋組」（土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、118-133頁、2011）
- 15) 遠藤由樹・土本俊和・吉澤政己・和田勝・西山マルセーロ・笹川明「信州の茅葺民家にみる棟束の建築的意義」（『日本建築学会計画系論文集』第532号、215-222頁、2000）、のちに、同「各論B 信州1 信州の茅葺民家にみる棟束の建築的意義」（土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、195-211頁、2011）
- 16) 土本俊和・遠藤由樹「掘立から礎へ—中世後期から近世にいたる棟持柱構造からの展開—」（『日本建築学会計画系論文集』第534号、263-270頁、2000）、のちに、同「総論4 掘立から礎へ—中世後期から近世にいたる棟持柱構造からの展開—」（土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、46-63頁、2011）
- 17) 内田健一・土本俊和「棟持柱構造から軸部・小屋組構造への転換過程」（『日本建築学会計画系論文集』第556号、313-320頁、2002）、のちに、同「総論6 棟持柱構造から軸部・小屋組構造への転換過程」（土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、72-86頁、2011）
- 18) 京都府教育庁文化財保護課編『京都府の民家 調査報告書第七冊—昭和48年度京都府民家緊急

- 調査報告一』（京都府教育委員会、1975）、のちに、各都道府県教育委員会編『日本の民家調査報告書集成 11 近畿地方の民家 1 京都』（東洋書林、1997）再録
- 19) 小林昌人『民家と風土』（岩崎美術社、1985）
  - 20) 民俗建築学会編「民俗建築 第 21・22 合併号 日本民俗建築語彙集」（日本民俗建築学会編『民俗建築 第 2 巻』柏書房、441-524 頁、1986）
  - 21) 土橋里木・大森義憲『日本の民俗 山梨』（第一法規出版、1974）
  - 22) 民俗学研究所編『改訂 総合日本民俗語彙 第 1 巻』（平凡社、1970）
  - 23) 柳田國男・山口貞夫共編『居住習俗語彙』（国書刊行会、1939）
  - 24) 大塚民俗学会編『日本民俗事典』（弘文堂、1972）
  - 25) 関口欣也執筆・山梨県教育委員会編『山梨県の民家』（山梨県教育委員会、1982）
  - 26) 宮澤智士「近世民家の地域的特色」（永原慶二・山口啓二編『講座・日本技術の社会史 第 7 巻 建築』日本評論社、151-182 頁、1983）
  - 27) 土本俊和編『中世後期から近世に至る掘立棟持構造からの展開過程に関する形態史的研究 2001 年度～2003 年度科学研究費補助金（基盤研究 C（2））研究成果報告書』（研究代表者土本俊和、2005）
  - 28) 宮本常一『山に生きるひとびと 双書 日本民衆史 6』（未来社、1964）
  - 29) 京都府教育庁文化財保護課編『京都府の民家 調査報告書第四編—北桑田郡美山町の民家調査報告一』（京都府教育委員会、1968）
  - 30) 「丹波民家調査報告 昭和 35 年度実施」（各都道府県教育委員会編『日本の民家調査報告書集成 11 近畿地方の民家 1』東洋書林、1997）
  - 31) 小林昌人「南伊豆のオダツ柱」（『民俗建築』第 68 号、84 頁、1974）、のちに、日本民俗建築学会編『民俗建築 第 5 巻』（柏書房、1986）所収
  - 32) 川崎隆章編『尾瀬と檜枝岐<覆刻版>』（木耳社、1978）
  - 33) 今和次郎『民家採集 今和次郎集 第 3 巻』（ドメス出版、1971）
  - 34) 宮澤智士編『日本の民家 第 2 巻 農家Ⅱ』（学習研究社、1980）
  - 35) 重要文化財江川家住宅修理委員会編『重要文化財江川家住宅修理工事報告書』（重要文化財江川家住宅修理委員会、1963）
  - 36) 中村昌生『京の町家』（鬚々堂出版、1971）
  - 37) 中村昌生『京の町家』（河原書店、1994）
  - 38) 松井郁夫「日本列島伝統構法の旅 第 4 回 越前大野の町家」（『建築知識 1998 年 4 月号』エクスナレッジ、240-243 頁、1998）
  - 39) 京都国立博物館編『洛中洛外図 都の形象—洛中洛外の世界—』（淡交社、1997）
  - 40) 金子總平『アチックミュージアムノート 第 13 南會津北魚沼地方に於ける熊狩雑記』（アチックミュージアム、1937）、のちに、谷川健一編『サンカとマタギ 日本民俗文化資料集成 第 1 巻』三一書房、347-400 頁、1989）所収

41) 文化庁文化財保護部編『民俗資料選集 6 狩猟習俗Ⅱ』(財団法人国土地理協会、1978)

42) 長野県『長野県史 近世資料編 第3巻 南信地方』(長野県史刊会、1975)

### 【出典】

図1) 参考文献 27) 156 頁

図2) 参考文献 27) 157 頁

図3) 筆者作成

図4) 参考文献 41) 235 頁

### 補記

大黒柱に関する直近の研究に、堀江亨・安藤邦廣・後藤治・藤川昌樹・黒坂貴裕・中野茂夫「つくば市の農家における軸組架構の変遷—オカマ柱架構の成立と大黒柱架構への転換—」(『日本建築学会計画系論文集』第594号、39-46頁、2005)があるが、オカマ柱の独自の系譜を論じるものの、大黒柱の系譜にはふれていない。

## 第 6 章

### 結 論





## 第6章 結論

本研究は、日本の木造建築を対象に、棟持柱構造をもつ建築遺構を捕捉する作業を通じて、棟持柱構造の建築的特質を把握してきた。棟持柱構造とは、木造建築を軸部と小屋組の分離・非分離で捉えたときの、軸部と小屋組が分離しない構造にあたり、地上から一本の柱で棟木を支える棟持柱をもつ。日本の木造建築は、社寺建築と民家建築に大別されることから、本研究では、社寺建築と民家建築の双方を対象に研究を行ってきた。とりわけ、棟持柱構造の建築遺構を民家建築ばかりでなく社寺建築も捕捉する点に、従来の研究にない本研究の特徴があった。以下に、この目的に即して論じてきたこれまでの章をまとめる。

### 第2章「近世社寺建築調査報告書集成にみえる棟持柱をもつ建築遺構の特質」

全国規模で実施された近世社寺建築緊急調査の結果をまとめた『近世社寺建築調査報告書集成』を用いて、棟持柱をもつ建築遺構を全国規模で捕捉し、そのなかからみえてくる棟持柱をもつ建築遺構の特質を精査した。その結果、従来、一部の建築様式をのぞき、もっぱら軸部と小屋組が分離していると了解されていた社寺建築においても、軸部と小屋組が分離しない棟持柱をもつ建築遺構が複数の建築に確認された。さらに、この棟持柱をもつ建築遺構には大きくわけて二通りものが確認された。

まず一つは、一部の建築様式にみられた棟持柱をもつことが共通の特質となった建築遺構があった。これにあてはまるものに、神社本殿の神明造ないし大社造があり、禅宗様四脚門ないし黄檗宗と関係深い切妻造段違の門があった。さらに、類例は少ないものの、禅宗様四脚門に類似した切妻の八脚門もここに含めることができるだろう。これらは、その建築様式の構造的特質が棟持柱をもつことであり、その様式が全国的に広まったものもあれば、一部の地域のみで採用されてきたものもある。

これに対し、もうひとつは、軸部・小屋組構造が一般的とされた建造物のなかに、数の上では少数であるものの棟持柱をもつ建築遺構があった。これにあてはまるものに、屋根形式が入母屋の八脚門や拝殿、さらに沖縄特有の信仰に関する建造物があった。陸奥国分寺仁王門は、禅宗様四脚門に類似した切妻の八脚門とは異なり、細部に禅宗様の特徴がみられないとともに、棟持柱上部が外部からみえない入母屋の八脚門であった。また、飛鳥坐神社拝殿は、棟通りすべての柱が棟持柱となった建築遺構であり、同じく若宮八幡宮拝殿は、組物や彫刻などが一切ない素朴な建築遺構であった。くわえて、沖縄特有の信仰に関する建造物には、多用な形式をなす棟持柱をもつ小規模建造物が確認された。

いうまでもなく、社寺建築の場合、建築遺構の圧倒的多数は、軸部と小屋組が分離している。とはいえ、棟持柱をもつ建築遺構には、建築様式化した神明造や大社造ばかりでなく、数の上では少数であるものの、その他の社寺建築においても確認された。さらに、これらの建築遺構は、神社本殿や寺院本堂といった大規模建造物ではなく、主要建築とともに

に境内や伽藍を構成する比較的小規模な門や拝殿であり、沖縄の信仰に関する建造物のような、一般的な社寺建築と異なる小規模な宗教建築であった。くわえて、これらの小規模建造物は、これまで積極的に研究対象となっていない建築遺構であった。

以上、社寺建築における棟持柱をもつ建築遺構は、一部の建築様式のみならず、もっぱら軸部・小屋組構造であると考えられていた建築遺構にも存在していた。とりわけ、後者について本論でえられた知見は、神社本殿ないし寺院本堂をとりまく周囲の建築群のなかに、数の上では少数派ではあるものの、棟持柱をもつ建築遺構の系譜があることを示唆するものである。

### 第3章「八脚門にみえる棟持柱の建築的意義」

山梨県笛吹川流域で捕捉した棟持柱構造の八脚門を対象に、棟通りに位置する棟持柱の建築的意義について検証した。その結果、以下の知見をえた。

まず、これまで把握されていた棟持柱構造の八脚門は、浅草寺二天門や観音寺仁王門のように、屋根が切妻をなし、妻壁に棟持柱をもつものであった。これらは、そのかたちが、棟持柱構造の禅宗様四脚門に類似していることから、なかには、禅宗様四脚門から影響を受けたのではないかと指摘するものもあった。しかしながら、笛吹川流域で捕捉した八脚門は、金井加里神社随神門や長谷寺山門のように屋根が切妻をなす建築遺構のほか、福蔵院山門のように屋根が入母屋をなす建築遺構があった。また、金井加里神社随神門については、棟通り4本すべての柱が棟持柱であり、長谷寺山門および福蔵院山門については、妻壁に棟持柱はなく内側に2本の棟持柱があった。つまり、これらの3つの八脚門は、内側に2本の棟持柱をもつという共通点があった。

つづいて、これまでの棟持柱構造に関する民家研究でえられた知見から、この内側の棟持柱は、構造的に重要であるゆえに採用されているのではないかと考えられた。上部に天井が設けられていて小屋裏に入らないと棟持柱構造であるか否か判断できない事例（金井加里神社随神門・福蔵院山門）や、内側2本の棟持柱のみが他の柱よりも太くつくられている事例（金井加里神社随神門・福蔵院山門・長谷寺山門）は、棟持柱の構造性が認識されていたことを示す好例であった。また、民家と八脚門の内部の棟持柱を比較したときに、民家においては、その多くが、土間・床上境に位置する1本の大黒柱が構造の要であったのに対し、八脚門については、内側の2本が構造の要となっていた。さらに、八脚門の場合、この2本の棟持柱を中心に、地覆、貫、胴差し、棟木といった複数の水平材を桁行方向と梁行方向に配することで、棟持柱と側柱を強固に連結し、架構全体の安定をえていた。

最後に、民家と寺社の小規模建造物を建築技術の観点から比較すると、民家の小規模建造物は、小屋などの比較的簡易な建物が多く、専門の大工ではない人々によって建てられたため、その柱の脚部は、掘立ないし土台といった、柱の自立を促し得る比較的施工が容

易な構法が用いられた。対して、社寺の小規模建造物である八脚門は、専門の大工によって建てられるために、柱が自立しない礎構法を用いることが可能であった。

以上、笛吹川流域で捕捉した八脚門について考察してきた本論の結論は、以下のとおりである。すなわち、棟持柱構造の八脚門には、禅宗様建築とは異なる系譜をもつ、棟持柱の有効性を構造的に見出した建築遺構が存在する。

#### 第4章「笛吹川流域の民家—四建ないしウダツ造に至る棟持柱構造からの展開—」

山梨県笛吹川流域の民家を対象とした実測調査結果にもとづき、この地域の中世に遡る民家の形態について検証した。その結果、以下の知見をえた。

笛吹川流域の民家にみえる棟持柱構造は、梁行2間と梁行4間に大別される。梁行2間のものは、主として、付属小屋等の簡素な小規模建造物であった。対して、梁行4間のものは、笛吹川流域の場合、大規模な草葺民家であった。遡れば、これらの梁行2間と梁行4間の棟持柱構造は、ともに中世段階に広く存在していた掘立であった、と考えられる。

このうち、前者の梁行2間の掘立棟持柱構造は、中世後期から近世にかけて、山下牧郎家ヤギゴヤのような簡素な小規模建造物として残る一方、梁行4間の堂々とした民家へ発展した、と考えられる。

他方、後者の梁行4間の掘立棟持柱構造は、中世後期から近世にかけて、掘立柱に依存する架構を弱めつつ、四建ないしウダツ造へ分岐するか、あるいは棟持柱構造の姿をとどめた、と考えられる。さらに、この梁行4間の掘立棟持柱構造は、梁行2間の規模が拡大されたものと考えられ、遡れば、梁行2間の掘立棟持柱構造を祖型としていた、と想定することができる。

以上、笛吹川流域の民家について考察してきた本論の結論は以下の通りである。すなわち、笛吹川流域の民家は、梁行2間の掘立棟持柱構造を祖型として展開していた。

#### 第5章「ウダツと大黒柱—切妻民家の中央柱列における棟持柱の建築的差異—」

文献史料調査と笛吹川流域における建築遺構調査にもとづき、ともに、棟持柱との関係性が指摘できる「ウダツ」と「大黒柱」の共通点と相違点を検証した。

まず、棟持柱構造が豊富に確認される笛吹川流域には、民家において建物外壁の棟持柱が「ウダツ」と呼ばれ、建物内部の棟持柱が「大黒柱」と呼ばれていた。さらに遡れば、内部も外壁も区別なく、棟持柱そのものを「ウダツ」としていた、と考えられた。そして、雨水にさらされやすい「外壁のウダツ」よりも柱の脚部が劣化しにくい「内部のウダツ」が「大黒柱」として構造の要になった。また、現在、一般的にみられる棟持柱でない梁下で止まっている「大黒柱」も、ウダツやオダツといった名称が残存していることから、その祖型に棟持柱が想定された。

また、京都の町屋では、「大黒柱」は建物内部の棟持柱となっているが、建物の外壁では、

高塀と妻壁にあるウダツが一体化したために「屋境のウダツ」となった。このように、笛吹川流域の民家やその他草葺民家とは異なる移行過程が想定された。とはいえ、遡れば、笛吹川流域の民家と同様に、建物外壁の棟持柱をウダツとしていた、と考えられる。かたや、「熊狩小屋」、「山小屋の構造」、「ウダツヤ」など梁行2間の棟持柱構造は、小規模ゆえに、建物内部に棟持柱がなかった。そのため、この種の小規模な建造物に、「ウダツ」は確認されるが、「大黒柱」は確認されなかった。

大黒柱の祖型は、三田が戦前に指摘したように、棟持柱であろう。そもそもは棟持柱という太い構造材があり、とりわけ力強く建物を支える内部の独立柱に対して、後になって象徴的な意味合いが付加されて、建物の中心的な存在である「大黒柱」が生まれてきた、と考えられる。

以上より、ウダツと大黒柱は、農家にも町屋にも存在し、遡ればともに棟持柱であったが、妻側の外壁に位置するか、内部に位置するか、という点に根本的な差異があった。

最後に、各章を総括し、本研究でえた知見をまとめる。

まず、社寺建築の建築遺構を全国規模で捕捉した結果、神明造、大社造、四脚門、八脚門、切妻造段違、棟門、拝殿、沖繩の信仰に関する建造物、を捕捉するに至った。注目すべき点は、門や拝殿、沖繩の信仰に関する建造物のように、従来、あまり注目されることのなかった小規模建造物にも棟持柱構造が複数存在する、ということであった。さらに、八脚門については、これまで禅宗様四脚門に類似した切妻の建築遺構が確認されるのみであったが、禅宗様の諸特徴がみられない入母屋の陸奥国分寺仁王門が捕捉されたことにより、棟持柱構造をもつ八脚門について再検証する必要性が見出だされた。

つぎに、山梨県笛吹川流域を対象に、棟持柱構造をもつ八脚門の建築遺構調査を実施した。その結果、金井加里神社随神門、福蔵院山門、長谷寺山門の3例を捕捉するに至った。このうち福蔵院山門は、陸奥国分寺仁王門と同様な入母屋の八脚門で、外部からみえない内側に2本の棟持柱をもっていた。また、内側に2本の棟持柱をもつ点は、他の建築遺構にも共通する内容であり、これらの建築遺構を徹底的に分析したところ、棟持柱が採用された理由に、構造的な有効性が見出だされた。

他方、民家建築については、内田健一・土本俊和「棟持柱構造から軸部・小屋組構造への転換過程」において、すでに全国規模の建築遺構を捕捉する作業を行っており、これによると、民家建築における棟持柱構造は、社寺建築以上にその形態（規模、屋根形、柱の脚部）が多様である。また、棟持柱構造の建築遺構は、全国的にみられるものの、その半数以上が山梨県笛吹川流域にあるという傾向もみられた。これを受け、本研究では、社寺建築を対象とした第3章と同様に、笛吹川流域における棟持柱構造の建築遺構調査を実施した。



最初に、笛吹川流域の民家の構造を架構全体で捉えた結果、笛吹川流域の民家は、棟持柱構造、ウダツ造、四建、さらにこれらに分類されない様々な構造を併せ持っていることが明らかとなった。しかし、従来の研究は、このうちの棟持柱構造について無関心であるとともに、断面による考察を主に床・土間境にかぎっていた。また、小規模建造物を研究対象から除外していた。その結果、笛吹川流域における民家の祖形として導き出されたのは四建であった。これに対し、本研究では、従来の研究の難点を克服し、棟持柱構造から四建ないしウダツ造へと移行する過程を明快に説明した。あわせて、中世に遡る民家の形態として、梁行2間の掘立棟持柱構造について言及した。

つづいて、笛吹川流域の民家にみえるウダツと大黒柱の名称について、その共通点と相異点を検証した結果、ともに棟持柱を指すという共通点が見出だされるとともに、建物外壁の棟持柱がウダツと呼ばれ、建物内部の棟持柱が大黒柱と呼ばれているという差異を明らかにするに至った。とりわけ、内部の棟持柱である大黒柱には、民家の架構の要となる棟持柱構造の構造的特質が見出だされた。

従来の建築史研究では、日本の木造架構について、軸部と小屋組が分離した構造が一般的とみなしてきた。そのため、軸部と小屋組が分離しない棟持柱構造は、積極的に研究対象としてとりあげられることがなかった。このことは、とくに社寺建築研究において顕著であった。しかし、本研究が社寺建築と民家建築の双方を対象に棟持柱構造の建築遺構を捕捉した結果、棟持柱構造には、これまでとりあげられることのなかった多様な形式があることが判明した。とりわけ、本研究では、従来あまり着目されることのなかった小規模建造物まで研究対象を拡大させたことで、社寺建築と民家建築の双方でより多くの棟持柱構造の建築遺構を捕捉することができた。また、本研究は、複数断面を実測するなど、一貫して棟持柱構造の建築遺構を架構全体で捉えてきたことで、棟持柱構造が、その特質から妻壁に採用されるものと内部に採用されるものの2つに大別されることを明らかにした。とりわけ、このうちの後者である内部に採用される棟持柱構造に、木造建築の架構の要となる棟持柱構造の構造的特質を強く見出だすに至った。





## 参考文献一覧

- 1) 青梅市郷土博物館編『青梅市の社寺建築』（青梅市教育委員会、1988）
- 2) 石原憲治『日本農民建築 第1輯－第8輯』（南洋堂書店、1972-1973）
- 3) 石原憲治『日本農民建築 第五輯』（南洋堂書店、1973）
- 4) 石原憲治『日本農民建築の研究』（南洋堂書店、1976）
- 5) 伊藤鄭爾『中世住居史〔第2版〕』（東京大学出版会、1958）
- 6) 伊藤延男『古建築のみかた』（第一法規出版、1967）
- 7) 内田健一・土本俊和「棟持柱構造から軸部・小屋組構造への転換過程」（『日本建築学会計画系論文集』556、313-320頁、2002）、のちに、同「総論6 棟持柱構造から軸部・小屋組構造への転換過程」（土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、72-86頁、2011）
- 8) 遠藤由樹・土本俊和・吉澤政己・和田勝・西山マルセーロ・笹川明「信州の茅葺民家にみる棟束の建築的意義」（『日本建築学会計画系論文集』532、215-222頁、2000）、のちに、同「各論B 信州2 信州の茅葺民家にみる棟束の建築的意義」（土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、195-211頁、2011）
- 9) 大河直躬「上条の宗教建築」（日本ナショナルトラスト編「上条集落の切妻民家群」日本ナショナルトラスト、86-89頁、2005）
- 10) 太田博太郎「「うだち」について」（一志茂樹先生喜寿記念会編『一志茂樹博士喜寿記念論集』一志茂樹先生喜寿記念会、519-530頁、1971）
- 11) 太田博太郎「「うだち」について」（同『日本建築の特質 日本建築史論集Ⅰ』岩波書店、461-472頁、1983）
- 12) 大塚民俗学会編『日本民俗事典』（弘文堂、1972）
- 13) 岡田英男編『日本の美術 第212号 門』（至文堂、1984）
- 14) 各都道府県教育委員会編『日本の民家調査報告書集成1～16』（東洋書林、1997-1998）
- 15) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成1 北海道・東北地方の近世社寺建築  
1 <北海道教育委員会編『北海道の近世社寺建築 近世社寺建築緊急調査報告書』（1989）、青森県教育委員会編『青森県の近世社寺建築 青森県近世社寺建築緊急調査報告書』（1979）、青森県教育委員会編『青森県の近世社寺建築（Ⅱ）青森県近世社寺建築緊急調査報告書』（1991）、秋田県教育委員会編『秋田県の近世社寺建築—近世社寺建築緊急調査報告書—』（1989）>』（東洋書林、2003）
- 16) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成2 北海道・東北地方の近世社寺建築  
2 <佐藤巧・西野敏信・阿部和彦編『岩手県の近世社寺建築 岩手県近世社寺建築緊急調査報告書』（岩手県教育委員会、1991）、佐藤巧・田中正三編『山形県の近世社寺建築』（山形県教育委員会、1984）、東北大学工学部建築学科建築史及び意匠研究室編『宮城県の近世社寺建築』（宮城県教育委員会、1983）、東北大学工学部建築学科建築史及び意匠研究室編『福島県の近

- 世社寺建築—（近世社寺建築緊急調査報告書）—』（福島県教育委員会、1981）』（東洋書林、2003）
- 17) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 3 関東地方の近世社寺建築 1 <茨城県教育委員会編『茨城県の近世社寺建築 茨城県近世社寺建築緊急調査報告書』（1982）、栃木県教育委員会文化課編『近世社寺建築緊急調査報告』（1978）、群馬県教育委員会事務局管理部文化財保護課編『群馬県近世社寺建築緊急調査報告書』（1979）』』（東洋書林、2003）
  - 18) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 4 関東地方の近世社寺建築 2 <埼玉県教育委員会編『埼玉の近世社寺建築』（1984）、千葉県教育委員会編『千葉県の近世社寺建築』（1978）、東京都教育庁社会教育部文化課編『東京都の近世社寺建築』（1989）』』（東洋書林、2003）
  - 19) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 5 関東地方の近世社寺建築 3 <神奈川県教育庁生涯学習部編『神奈川県近世社寺建築調査報告書（本文編）』（文化財保護課長、1993）』』（東洋書林、2003）
  - 20) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 6 中部地方の近世社寺建築 1 <新潟県教育庁文化行政課・稲垣栄三・藤井恵介編『新潟県の近世社寺建築』（新潟県教育委員会、1985）、富山県教育委員会文化財課編『富山県の近世社寺建築』（1981）、石川県教育委員会文化財保護課・石川県近世社寺建築緊急調査委員会編『石川県の近世社寺建築』（1979）、福井県教育委員会編『近世社寺建築緊急調査報告書』（1981）』』（東洋書林、2004）
  - 21) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 7 中部地方の近世社寺建築 2 <山梨県教育委員会編『山梨県の近世社寺建築』（1983）、長野県教育委員会編『長野県の近世社寺建築』（1982）、長野県教育委員会編『長野県の近世社寺建築 第二次調査報告書』（1991）』』（東洋書林、2004）
  - 22) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 8 中部地方の近世社寺建築 3 <岐阜県教育委員会編『岐阜県の近世社寺建築 岐阜県文化財調査報告書』（1980）、静岡県教育委員会文化課編『静岡県の近世社寺建築—近世社寺建築緊急調査報告書—』（1979）、愛知県教育委員会文化財課編『愛知県の近世社寺建築 近世社寺建築緊急調査報告書』（1980）』』（東洋書林、2004）
  - 23) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 9 近畿地方の近世社寺建築 1 <山岸常人編『滋賀県の近世社寺建築 近世社寺建築緊急調査報告書』（滋賀県教育委員会文化部文化財保護課、1986）』』（東洋書林、2003）
  - 24) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 10 近畿地方の近世社寺建築 2 <京都府教育庁文化財保護課編『京都府の近世社寺建築 近世社寺建築緊急調査報告書』（京都府教育委員会、1983）』』（東洋書林、2002）
  - 25) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 11 近畿地方の近世社寺建築 3 <京都府文化財保護基金編『京都の社寺建築 中丹編』（1981）、京都府文化財保護基金編『京都の社

- 寺建築 与謝・丹後編』(1984)>』(東洋書林、2002)
- 26) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 12 近畿地方の近世社寺建築 4 <京都府文化財保護基金編『京都の社寺建築 南山城編』(1979)、京都府文化財保護基金編『京都の社寺建築 乙訓・北桑・南丹編』(1980)>』(東洋書林、2002)
- 27) 『近世社寺建築調査報告書集成 13 近畿地方の近世社寺建築 5 <大阪府教育委員会編『大阪府の近世社寺建築 近世社寺建築緊急調査報告書』(1987)、多淵敏樹編『兵庫県の近世社寺建築 兵庫県近世社寺建築緊急調査報告書』(兵庫県教育委員会、1980)>』(東洋書林、2002)
- 28) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 14 近畿地方の近世社寺建築 6 <奈良国立文化財研究所編『奈良県の近世社寺建築』(奈良県教育委員会、1987)>』(東洋書林、2002)
- 29) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 15 近畿地方の近世社寺建築 7 <奈良国立文化財研究所編『和歌山県の近世社寺建築 近世社寺建築緊急調査報告書』(和歌山県教育庁文化財課、1991)>』(東洋書林、2003)
- 30) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 16 中国地方の近世社寺建築 1 <鳥取県教育委員会編『鳥取県の近世社寺建築』(1987)、島根県教育委員会編『島根県近世社寺建築 緊急調査報告書』(1980)、岡山県文化財保護協会『岡山県の近世社寺建築』(1979)>』(東洋書林、2004)
- 31) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 17 中国地方の近世社寺建築 2 <山口県教育委員会編『山口県の近世社寺建築』(1980)>』(東洋書林、2004)
- 32) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 18 四国地方の近世社寺建築 <徳島県教育委員会編『徳島県の近世社寺建築』(1990)、香川県編『香川県の近世社寺建築』(1981)、愛媛県教育委員会編『愛媛県の近世社寺建築』(1990)、奈良国立文化財研究所編『高知県の近世社寺建築 高知県文化財調査報告書第 25 集』(高知県教育委員会、1981)>』(東洋書林、2004)
- 33) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 19 九州地方の近世社寺建築 1 <福岡県編『福岡県の近世社寺建築』(1984)、佐賀県教育委員会『佐賀県の近世社寺建築 佐賀県文化財調査報告書第 82 集』(1985)、長崎県教育委員会編『長崎県の近世社寺建築 近世社寺建築緊急調査報告書 長崎県文化財調査報告書 第 79 集』(1986)、熊本県教育委員会編『熊本県の近世社寺建築』(1986)>』(東洋書林、2003)
- 34) 各都道府県教育委員会編『近世社寺建築調査報告書集成 20 九州地方の近世社寺建築 2 <大分県教育庁管理部文化課編『大分県の近世社寺建築 近世社寺建築緊急調査報告書』(1987)、宮崎県教育委員会編『宮崎県の近世社寺建築 近世社寺建築緊急調査報告書』(1982)、鹿児島県教育委員会編『鹿児島県の近世社寺建築 近世社寺建築緊急調査報告書』(1988)、鹿児島県教育委員会編『鹿児島県の近世社寺建築 (離島編) 近世社寺建築緊急調査報告書』(1990)、沖縄県教育庁文化課編『沖縄県の信仰に関する建造物 近世社寺建築緊急調査報告書』(1991)>』

- (東洋書林、2003)
- 35) 柏崎亜矢子・佐藤知恵子「山梨県国中における山間集落の民家について—その4 三富村徳和集落の民家形態—」(『日本建築学会大会学術講演梗概集(九州) F-2 建築歴史・意匠』37-38頁、1998)
  - 36) 金子總平『アチックミュージアムノート 第13 南會津北魚沼地方に於ける熊狩雑記』(アチックミュージアム、1937)
  - 37) 金石健太「土台を持つ建物の系譜」(『信州大学大学院社会開発工学専攻 修士論文梗概集』第18号、13-16頁、2004)
  - 38) 川崎隆章編『尾瀬と檜枝岐<覆刻版>』(木耳社、1978)
  - 39) 川島宙次『滅びゆく民家—間取り・構造・内部—』(主婦と生活社、1973)
  - 40) 京都府教育委員会編『京都府の民家 調査報告 第七冊—昭和48年度京都府民家緊急調査報告—』(京都府教育委員会、1975)
  - 41) 京都府教育庁文化財保護課編『京都府の民家 調査報告書第七冊—昭和48年度京都府民家緊急調査報告—』(京都府教育委員会、1975)
  - 42) 京都府教育委員会編『日本の民家調査報告書集成 11 近畿地方の民家 1 京都』(東洋書林、1997)
  - 43) 京都府教育庁文化財保護課編『京都府の民家 調査報告書第四編—北桑田郡美山町の民家調査報告—』(京都府教育委員会、1968)
  - 44) 京都国立博物館編『洛中洛外図 都の形象—洛中洛外の世界—』(淡交社、1997)
  - 45) 国京克巳「永平寺隆芳院廟所の四脚門について: 福井藩の霊廟建築に関する研究 その2」(『日本建築学会計画系論文集』522、287-292頁、1999)
  - 46) 熊本達哉『日本の美術 第530号 近世の寺社建築—庶民信仰とその建築—』(ぎょうせい、2010)
  - 47) 黒田龍二『中世寺社信仰の場』(思文閣出版、1999)
  - 48) 『県別マップル 19 山梨県道路地図 <第3版>』(昭文社、2010)
  - 49) 小林昌人『民家と風土』(岩崎美術社、1985)
  - 50) 小林昌人「南伊豆のオダツ柱」(『民俗建築』第68号、84頁、1974)
  - 51) 今和次郎『日本の民家』(岩波書店、1989)
  - 52) 今和次郎『民家採集 今和次郎集 第3巻』(ドメス出版、1971)
  - 53) 今和次郎『住居論 今和次郎集 第4巻』(ドメス出版、1971)
  - 54) 櫻井敏雄・中西将「日部神社表門と四脚門」(『近畿大学理工学部研究報告』第42号、111-120頁、2006)
  - 55) 佐藤知恵子・柏崎亜矢子「山梨県国中における山間集落の民家について—その5 四建(ヨツダテ)と大黒柱構造—」(『日本建築学会大会学術講演梗概集(九州) F-2 建築歴史・意匠』39-40頁、1998)

- 56) 島崎広史・土本俊和「棟持柱構造と軸部・小屋組構造を併せ持つ切妻小規模建造物」(『日本建築学会計画系論文集』第 603 号、175-182 頁、2006)、のちに、同「総論 7 棟持柱構造と軸部・小屋組構造を併せ持つ切妻小規模建造物」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』、中央公論美術出版、87-103 頁、2011)
- 57) 重要文化財江川家住宅修理委員会編『重要文化財江川家住宅修理工事報告書』(重要文化財江川家住宅修理委員会、1963)
- 58) 重要文化財雲峰寺修理委員会編『重要文化財雲峰寺修理工事報告書〈第 2 集〉重要文化財雲峰寺庫裡修理工事報告書』(重要文化財雲峰寺修理委員会、1957)
- 59) 重要文化財雲峰寺修理委員会編『重要文化財雲峰寺書院、仁王門修理工事報告書』(重要文化財雲峰寺修理委員会、1958)
- 60) 重要文化財恵林寺四脚門修理委員会編『重要文化財恵林寺四脚門修理工事報告書』(重要文化財恵林寺四脚門修理委員会、1971)
- 61) 彰国社編『建築大辞典 第 2 版<普及版>』(彰国社、1993)
- 62) 関口欣也執筆・山梨県教育委員会編『山梨県の民家』(山梨県教育委員会、1982)、のちに『日本の民家調査報告書集成 9 中部地方の民家 3』(東洋書林、1998) 所収
- 63) 関口欣也「甲府盆地東部の近世民家」(『日本建築学会論文報告集』第 86 号、48-59 頁、1963)
- 64) 関口欣也『中世禅宗様建築の研究』(中央公論美術出版、2010)
- 65) 高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明・伊藤毅編『図集 日本都市史』(東京大学出版会、1993)
- 66) 高橋康夫「京都の町と住まいの歴史」(京都新聞社編『京の町家考』京都新聞社、14-39 頁、1995)
- 67) 滝澤秀人「土台を持つ棟持柱構造の変遷」(『日本建築学会大会学術講演梗概集(東海) F-2 建築歴史・意匠』107-108 頁、2003)
- 68) 滝澤秀人・島崎広史・土本俊和・遠藤由樹「ウダツと大黒柱—切妻民家の中央柱列における棟持柱の建築的差異—」(『日本建築学会計画系論文集』、第 604 号、151-158 頁、2006)、のちに、同「各論 C 甲州 2 ウダツと大黒柱—切妻民家の中央柱列における棟持柱の建築的差異—」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、266-283 頁、2011)
- 69) 滝澤秀人・土本俊和「考察 7 土台と棟持柱」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』、中央公論美術出版、303-314 頁、2011)
- 70) 谷川健一編『サンカとマタギ 日本民俗文化資料集成 第一巻』(三一書房、347-400 頁、1989)
- 71) 玉井哲雄「日本建築の構造」(藤井恵介・玉井哲雄『建築の歴史』中央公論社、303-321 頁、1995)
- 72) 土本俊和・遠藤由樹「掘立から礎へ—中世後期から近世にいたる棟持柱構造からの展開—」(『日本建築学会計画系論文集』第 534 号、263-270 頁、2000)、のちに、同「総論 4 掘立から礎へ—中世後期から近世にいたる棟持柱構造からの展開—」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中



- 央公論美術出版、46-63 頁、2011)
- 73) 土本俊和「総論 4 ウダツ」(同『中近世都市形態史論』45-59 頁、中央公論美術出版、2003)
  - 74) 土本俊和「総論 6 掘立棟持柱構造」(同『中近世都市形態史論』中央公論美術出版、74-87 頁、2003)
  - 75) 土本俊和「表題解説—戦前の棟持柱祖型論—」(信州大学土本研究室編『棟柱第 7 号』信州伝統的建造物保存技術研究会、2-3 頁、2004)、のちに、同「総論 3 戦前の棟持柱祖形論」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、42-45 頁、2011)
  - 76) 土本俊和「表題解説—国見の掘立棟持柱—」(『棟柱 第五号』信州伝統的建造物保存技術研究会、2-3 頁、2002)、のちに、同「国見の掘立棟持柱」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、215-217 頁、2011)
  - 77) 土本俊和「発掘遺構からみた京マチヤの原形ならびに形態生成」(西山良平編『平安京における居住形態と住宅建築の学際研究』平成 15～平成 16 年度科学研究費補助金(基盤研究(c)(2))研究成果報告書、127-153 頁、2005)、のちに、同「各論 A 京都 3 京マチヤの原形ならびに形態生成」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、149-174 頁、2011)
  - 78) 土本俊和「民家史研究の総括と展望」(民家小委員会編『民家研究 50 年の軌跡と民家再生の課題 主題解説(1) 民家史研究の総括と展望—棟持柱祖型論に即して—』日本建築学会、5-37 頁、2005)、のちに、同「総論 1 民家史研究の総括と展望—棟持柱祖型論に即して—」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、8-38 頁、2011)
  - 79) 土本俊和編『中世後期から近世に至る掘立棟持柱構造からの展開過程に関する形態史的研究 2001 年度～2003 年度 科学研究費補助金(基盤研究 C(2)) 研究成果報告書』(研究代表者土本俊和、2005)
  - 80) 土本俊和「民家のなかの棟持柱」(『民俗建築』第 131 号、102-112 頁、2007)、のちに、同「総論 8 民家のなかの棟持柱」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、104-116 頁、2011)
  - 81) 土本俊和・坂牛卓・早見洋平・梅干野成央「京マチヤの原形・変容・伝播に関する研究—建物先行型論と棟持柱祖形論にもとづく建築コラージュ形態史論—」(『住宅総合研究財団研究論文集』、第 34 号、161-172 頁、2008)、のちに、同「各論 A 京都 4 京マチヤの原形・変容・伝播」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、175-194 頁、2011)
  - 82) 土本俊和編著『棟持柱祖形論』(中央公論美術出版、2011)
  - 83) 土屋直人・西山哲雄・早見洋平・土本俊和「取葺と呼ばれた石置板屋根の系譜」(『日本建築学会計画系論文集』第 594 号、155-162 頁、2005)
  - 84) 土橋里木・大森義憲『日本の民俗 山梨』(第一法規出版、1974)
  - 85) 富山博「尾張の四つ立て民家」(『民俗建築』第 88 号、5-10 頁、1985)
  - 86) 永井規男「北山型」(『京都府教育庁文化財保護課編『京都府の民家調査報告第七冊—昭和 48 年度京都府民家緊急調査報告—』京都府教育委員会、1975)、のちに、各都道府県教育委員会



- 編『日本の民家調査報告書集成 11 近畿地方の民家 1』（東洋書林、1997）所収
- 87) 長野県『長野県史 近世資料編 第三巻 南信地方』（長野県史刊会、1975）
- 88) 中村達太郎著・太田博太郎・稲垣栄三・内田祥哉・鈴木嘉吉・田中文男・源愛日児・中谷礼仁・西尾清・初田亨・藤井恵介編『日本建築辞彙〔新訂〕』（中央公論美術出版、2011）
- 89) 中村昌生『京の町家』（駸々堂出版、1971）
- 90) 中村昌生『京の町家』（河原書店、1994）
- 91) 奈良国立文化財研究所編『近世社寺建築の研究 第 1 号』（奈良国立文化財研究所、1988）
- 92) 奈良国立文化財研究所編『近世社寺建築の研究 第 2 号』（奈良国立文化財研究所、1990）
- 93) 奈良国立文化財研究所編『近世社寺建築の研究 第 3 号』（奈良国立文化財研究所、1992）
- 94) 日本ナショナルトラスト編『平成 16 年度観光資源保護調査 上条集落の切妻民家群』財団法人日本ナショナルトラスト、2005）
- 95) 日本民俗建築学会編『図説 民俗建築大事典』（柏書房、2001）
- 96) 野村孝文「鹿児島県民家の「ナカエ」に就いて」（『日本建築学会論文報告集』第 61 号、120-126 頁、1959）
- 97) 畑智弥・土本俊和「京都町屋における軸部と小屋組」（『日本建築学会計画系論文集』第 513 号、259-266 頁、1998）、のちに、同「各論 A 京都 1 京都のマチャにおける軸部と小屋組」（土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、118-133 頁、2011）
- 98) 濱島正士『寺社建築の鑑賞基礎知識』（至文堂、1992）
- 99) 早川慶春・土本俊和・鶴飼浩平・梅干野成央「タテノボセと土台からみた小規模建造物」（『日本建築学会計画系論文集』、第 616 号、167-174 頁、2007）、のちに、同「各論 B 信州 5 タテノボセと土台からみた小規模建造物」（土本俊和編著『棟持柱祖形論』（中央公論美術出版、221-236 頁、2011）
- 100) 広島県教育委員会編『広島県文化財調査報告書〈第 13 集〉広島県の近世社寺建築』（広島県文化財協会、1982）
- 101) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編『草戸千軒町遺跡調査報告 V—中世瀬戸内の集落遺跡—』（広島考古学研究会、1996）
- 102) 仏教芸術学会編『仏教芸術 170 号 特集 近世社寺建築』（毎日新聞社、1987）
- 103) 文化財建造物保存技術協会『重要文化財浅草寺二天門修理工事報告書』（宗教法人浅草寺、2010）
- 104) 文化財建造物保存技術協会編『山梨県指定有形文化財清白寺庫裏修理工事報告書』（文化財建造物保存技術協会、1989）
- 105) 文化庁歴史的建造物調査研究会編『建物の見方・しらべ方』（ぎょうせい、1994）
- 106) 文化庁文化財保護部編『民俗資料選集 6 狩猟習俗 II』（財団法人国土地理協会、1978）
- 107) 堀江亨・安藤邦廣・後藤治・藤川昌樹・黒坂貴裕・中野茂夫「つくば市の農家における軸組架構の変遷—オカマ柱架構の成立と大黒柱架構への転換—」（『日本建築学会計画系論文集』

- 第 594 号、39-46 頁、2005)
- 108) 牧田茂「大黒柱の精神性」(ミサワホーム総合研究所出版制作室編『日本人住まいの文化誌』ミサワホーム総合研究所、62-63 頁、1983)
- 109) 松井郁夫「日本列島伝統構法の旅 第 4 回 越前大野の町家」(『建築知識 1998 年 4 月号』エクスナレッジ、240-243 頁、1998)
- 110) 松尾圭三・渡辺洋子「穴切大神社随神門の大工について」(『2002 年度 日本建築学会大会学術講演梗概集 (北陸) F-2』201-202 頁、2002)
- 111) 松岡高弘・松田治子・有富慎也「旧柳河藩域における神社の神門の通路上部の構成について—旧柳河藩における神社建築に関する研究 その 8—」(『2009 年度 日本建築学会大会学術講演梗概集 (東北) F-2』437-438 頁、2009)
- 112) 松田治子・松岡高弘・有富慎也「旧柳河藩域における神社の神門の平面について—旧柳河藩における神社建築に関する研究 その 7—」(『2009 年度 日本建築学会大会学術講演梗概集 (東北) F-2』435-436 頁、2009)
- 113) 三重県教育委員会編『三重の近世社寺建築—近世社寺建築緊急調査の報告—』(三重県教育委員会、1985)
- 114) 三田克彦「大黒柱の淵源とその変遷」(住宅改良會『住宅』第 27 号、57-59 頁、1942)
- 115) 光井渉『近世寺社境内とその建築』(中央公論美術出版、2001)
- 116) 源愛日兄編『指物(指付け技法)の変遷過程と歴史的木造架構の類型化に関する研究 2001 年度～2004 年度 科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書』(研究代表者源愛日兄、2005)
- 117) 宮澤智士「近世民家の地域的特色」(永原慶二・山口啓二編『講座・日本技術の社会史 第 7 卷 建築』日本評論社、151-182 頁、1983)
- 118) 宮澤智士「農家中世から近世へ」(伊藤ていじ他編『日本名建築写真選集 第 17 卷 民家Ⅱ 農家』新潮社、83-125 頁、1993)
- 119) 宮澤智士『住まい学体系 / 022 日本列島民家史』(住まいの図書館出版局、1989)
- 120) 宮澤智士編『日本の民家 第 2 卷 農家Ⅱ』(学習研究社、1980)
- 121) 宮本常一『山に生きるひとびと 双書 日本民衆史 6』(未来社、1964)
- 122) 民俗建築学会編「民俗建築 第 21・22 合併号 日本民俗建築語彙集」(日本民俗建築学会編『民俗建築 第 2 卷』柏書房、441-524 頁、1986)
- 123) 民俗学研究所編『改訂 総合日本民俗語彙 第 1 卷』(平凡社、1970)
- 124) 柳田國男・山口貞夫共編『居住習俗語彙』(国書刊行会、1939)
- 125) 山梨市役所編『山梨市史 文化財・社寺編』(山梨市、2005)
- 126) 山梨県教育委員会編『山梨県の近世社寺建築』(山梨県教育委員会、1983)
- 127) 山梨県編『山梨県史 文化財編』(山梨県、1999)
- 128) 吉田桂二『民家ウォッチング事典』(東京堂出版、1987)

## 資料編



## 1.0 論文編





## 1.1 民家の棟持柱と社寺の棟持柱

### 1 はじめに

棟持柱とは、一般に、梁を用いずに棟木を直接支える柱と理解され、ふるくは『邦訳日葡辞書』（1603年編纂）に「棟柱」の用語がみえる。また、石原憲治によれば、山梨県の切妻茅葺民家において棟持柱は、ウダツないし八方ウダツと呼ばれる。先行研究において、2004年に山梨県山梨市牧丘町の民家を実測調査した際も、棟持柱のことをウダツと呼ぶ証言を複数えた。この棟持柱をもつ建築を対象とした研究に、棟持柱祖形論に関する一連の研究がある。このうち、「掘立から礎へ」(2000初出)<sup>注2)</sup>、「民家のなかの棟持柱」(2000初出)<sup>注3)</sup>、「日本民家の架構法」(2000初出)<sup>注4)</sup>においては、主に民家を対象とした考察のなかで、一口に棟持柱といっても、棟持柱による棟木の支え方には3通りあることが指摘されている。その後、棟持柱構造に関する研究は、民家を対象とした研究蓄積をふまえて社寺建築にまで対象を拡大した。これにより、棟持柱の建築遺構は、これまで以上に豊富に存在していることが確認された。さらに、社寺建築で棟持柱をもつ建築遺構のなかには、民家建築とは異なった社寺建築特有の建築遺構も確認された。そのなかには、棟木下の柱が、棟持柱と同様に小屋裏までのびているものの、棟木を直接支えていない事例もあった。本研究第2章および第3章では、このような構造も棟持柱構造に含めて考察を行っているが、今後も、棟持柱構造に関する研究が蓄積されていくことを考えると、ここで、本研究が扱う棟持柱の定義を明確にしておく必要がある、と考えられる。そこで、本論では、民家建築と社寺建築の双方を含めた日本の木造建築全体を見通した上で、棟持柱とはいかなる柱を指すのか、その定義を明らかにする。

### 2 民家の棟持柱

まず、民家を主な研究対象としたこれまでの研究成果のなかから、棟持柱の定義にふれた部分について抽出し、その意味を確認する。

「掘立から礎へ」では、棟木とそれを支える柱との接合部に着目し、棟持柱の支える方には次の3通りあることを指摘した。

第一は、図1-1のように、「棟持柱の上に棟木がのり、その棟木の上に垂木がのる形」<sup>注5)</sup>である。これは、文字通り棟木を柱が直接支えており、最も純粋な棟持柱のかたちといえる。

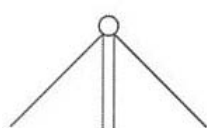


図 1-1

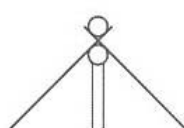


図 1-2

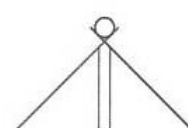


図 1-3

図1 棟木の支え方

第二は、図 1-2 のように、「棟持柱の上に棟木がのり、その上に左右一組の扱首がのり、さらにそのくまれた扱首の谷に棟木がのり、その棟木の上に垂木がのる形」<sup>注6)</sup>で、これは棟木が2本あるかたちである。

第三は、図 1-3 のように、「棟持柱の上に左右一組の扱首がのり、そのくまれた扱首の谷に棟木がのり、その棟木の上に垂木がのる形」<sup>注7)</sup>で、棟持柱が間接的に棟木を支えるかたちである。

ここで重要なのは、図 1-1 のように直接棟木を支える柱のほか、図 1-3 のように間接的に棟木を支えるかたちも棟持柱に含めていることである。棟持柱という名称からして、棟持柱を「棟木を直接支える柱」と限定的に定義することも考えられよう。しかし、木造架構のなかで棟持柱は、図 1-1、図 1-2、図 1-3 のどれをとっても小屋組の大きな秩序に変化がないことから、単に棟木まわりの建築的おさまりのみで棟持柱を評価するのではなく、地上から一本の柱で棟木までのびているという架構全体のかたちそのものを評価することが適格であろう。よって、本論も、これらの既往研究における棟持柱の定義に賛同し、図 1-1、図 1-2、図 1-3 のかたちすべてを棟持柱と定義する。

つぎに、架構全体の中で棟持柱を捉えるために、軸部と小屋組の分離・非分離の観点から、棟持柱の定義について確認する。まず、軸部と小屋組が分離した構造は、一般に軸部・小屋組構造（図 2）とよばれ、側柱の高さに梁などの水平材が入るために、軸部と小屋組が明確に分離した構造をなしている。他方、本論が研究対象とする棟持柱をもつ構造は、地上から立ち上がった柱が、梁などの水平材によって分断されることなく小屋組までのびているもので、軸部と小屋組が分離しない。この構造は、一般に棟持柱構造とよばれ、代表例に旧広瀬家住宅（図 3）がある。

また、軸部と小屋組が分離しない構造のなかには、棟持柱をもたない構造もある。たとえば、「掘立から礎へ」<sup>注8)</sup>で指摘された木戸家（図 4）の場合、棟通りと上屋柱筋における計 3 本の柱は、軸部の中におさまる一般的な管柱ではなく、小屋組内の母屋の高さまでのびているために、軸部と小屋組が明確に分離していない。さらに、『山梨県の民家』<sup>注9)</sup>のなかには、楣梁構え（図 5）と呼称される、2 本の上屋柱が母屋の高さまで立ち上がる構造の民家がいくつか報告されている。この構造は、2 本の上屋柱が側柱高さで切れるこ

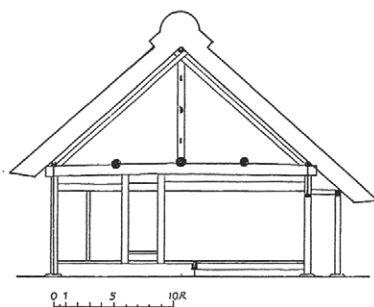


図2 軸部・小屋組構造の例

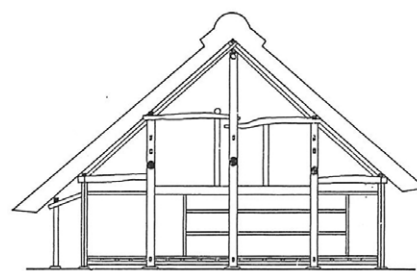


図3 旧広瀬家住宅

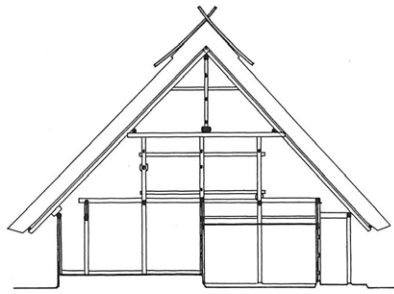


図4 木戸家住宅

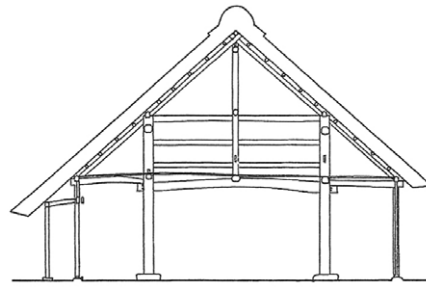


図5 楣梁構えの例

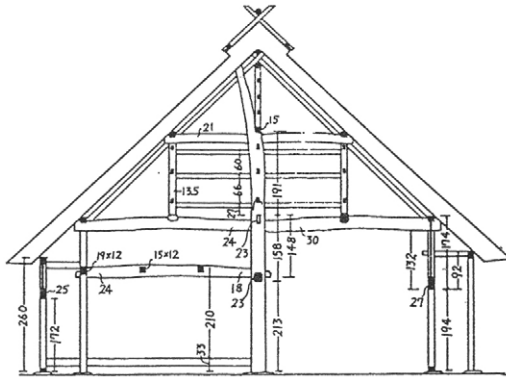


図6 K氏宅

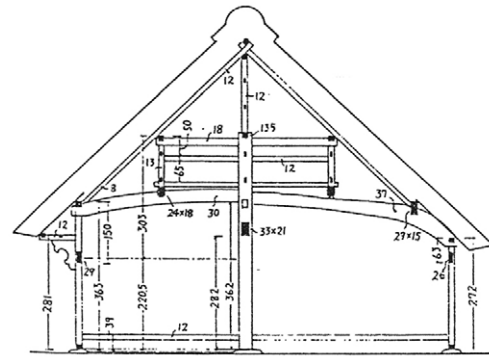


図7 三井元昭氏宅

となく、地上から一本の柱で母屋を直接支えているため、軸部と小屋組が分離しない。とはいえ、棟通りについては、2本の上屋柱を繋結する水平材から立ち上がった束が棟木を支えている。つまり、楣梁構えは、軸部と小屋組が明確に分離しない構造であるものの、棟持柱構造ではない。

さらにくわえて、「棟持柱構造から軸部・小屋組構造への転換過程」<sup>注10)</sup>では、全国規模で棟持柱構造の民家を捕捉し、そのなかの興味深い事例として、K氏宅(図6)と三井元昭氏宅(図7)を取りあげている。

まず、K氏宅をみると、棟通りの柱は、地上から立ち上がって側柱の高さで止まらずに上方へのびるものの、棟木近くで柱が曲がっているために棟木を直接支えていない。そのかわりに、柱の途中から立てられた束によって棟木が支えられている。

つぎに、三井元昭氏宅をみると、棟通りの柱は、K氏宅と同じく地上から立ち上がって小屋裏までのびているものの、直接棟木を支えずにその上にある束が棟木を支えている。

ここで、先ほどの木戸家(図4)と三井元昭氏宅(図7)における棟通りの柱を見比べると、木戸家は、柱の上に梁をのせ、さらにその上に束をのせて棟木を支えているのに対し、三井元昭氏宅は、柱の上に梁をのせずに直接束をたてて棟木を支えている。さらに、三井元昭氏宅における棟通りの柱と束は、見方をかえれば、梁を介さないゆえに、柱と束が継手によってつながれた一本の柱、すなわち、棟持柱とみなすこともできる。他方、木戸家における棟通りの柱は、柱の上に梁を介して束をのせているために、柱と束は一体ではなく完全に縁を切られており、三井元昭氏宅のように一本の柱とみなすことはできない

と考えられる。

このように、同じく母屋の高さまで柱を立ち上げる木戸家と三井元昭氏宅であるが、双方には、柱が梁などの水平材を介するか否かといった点で根本的な差異がみられる。そして、三井元昭氏宅の場合、棟通りの柱が直接棟木を支えていなくても、柱と束の関係が一本の柱のようにみなし得るから、純粋な棟持柱ではないものの、棟持柱に準じた柱と位置づけられる、と考えられる。

以上をまとめると、棟持柱とは、地上から一本の柱で棟木を支える垂直材を基本とするものの、棟木まわりのおさまりについては、棟木を間接的に支えるかたちも棟持柱に含めることができる。さらに、柱の上に束をのせて棟木を支えるかたちについても、純粋な棟持柱ではないものの、小屋組の秩序から判断して棟持柱同様の働きをもつと考えられることから、棟持柱に準じた柱として棟持柱に含めることができる、と本論では判断する。このとき、棟持柱に含めることができるか否かといった判断の境目は、棟通りの柱、束、水平材の関係が重要となってくる。すなわち、棟通りの柱の上に直接束をのせている場合は、棟持柱に含めて考えることができるものの、棟通りの柱の上に水平材を介して束をのせている場合は、棟持柱に含めることができない。このように、棟持柱を最大限に広く定義づける場合、水平材を介するか否かといった観点が、判断の境目になるといえる。

### 3 社寺建築の棟持柱

ここまで、民家を対象に棟持柱の定義について確認してきた。一般に、日本の木造建築は、社寺と民家に大別されることから、民家と同様に社寺についても棟持柱の定義を確認する必要がある。ではつぎに、これまでの民家における棟持柱の定義をふまえ、社寺建築における棟持柱構造の具体例を参照しつつ、棟持柱の定義を確認する。

社寺建築は、さらに神社建築と寺院建築に分類される。このうち、神社建築の棟持柱をもつ例として、伊勢の神明造と出雲の大社造がある。神明造における棟持柱は、柱の脚部が地中に埋められた掘立柱で、地面に掘られた穴から一本で棟木を直接支えている。対して、大社造は、地面に据えられた礎石の上から真っ直ぐに立ち上がり棟木を支えている。これらはともに、棟持柱としては最も著名なかたちといえる。他方、寺院建築において棟持柱をもつ建築は、現在のところ、本堂などの大規模建造物で報告されておらず、四脚門や八脚門といった比較的小規模な建築のなかに確認される。さらに、これらの棟持柱構造の四脚門や八脚門は、寺院建築ゆえに、民家建築には一般に用いられない組物があるため、地上から立ち上がった棟通りの柱は、組物を介して棟木を支えているものが多い。恵林寺四脚門は、山梨県甲州市にある棟持柱構造をなす四脚門の代表例である。その側面図（図8）をみると、棟通りの柱およびその両側に立つ2本の側柱は、組物を介して棟木ないし桁を支えていることがわかる。しかし、組物は、あくまで屋根を支える棟木ないし桁から受ける荷重を柱に伝えるための補助的な部材であり、組物とそれを受ける柱は一体的な建

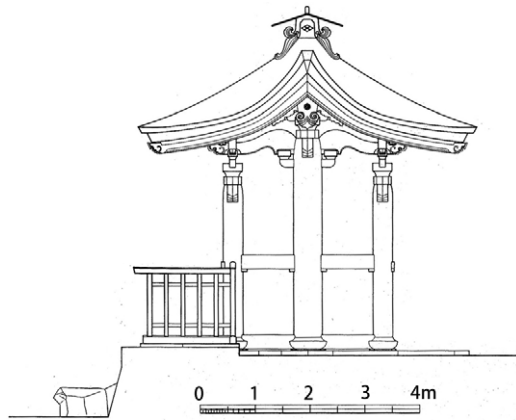


図8 恵林寺四脚門側面図

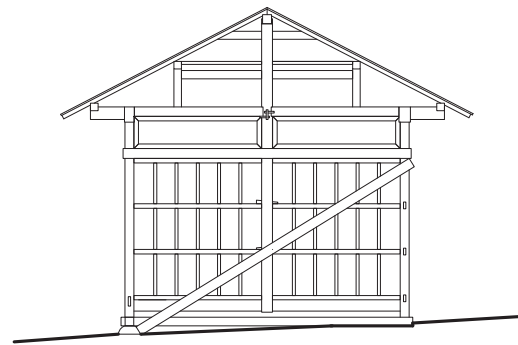


図9 若宮八幡宮拝殿側面図  
(資料編 166 頁)

築部材と考えられる。さらに、恵林寺四脚門における軸部と小屋組が分離しない建築架構は、組物を介しているのみでまさに棟持柱構造そのものであるといえるから、十分に棟持柱構造に含めることができる、と考えられる。

また、社寺建築において棟持柱構造をなす建築は、必ず組物を持っているかというところとも限らない。若宮八幡宮拝殿（図9）は、2004年に実施した山梨県山梨市牧丘町を主なフィールドとした民家調査の際に発見したもので、土台から立ち上がった柱が棟木を直接支える棟持柱構造である。立面図をみると、軸部と小屋組の間に水平材が入っているために、一見、軸部・小屋組構造に見間違えそうになるが、この水平材は、棟持柱の外側から取り付けられた長押であって梁ではない。また、この拝殿には、多くの社寺建築にみられるような組物や細部の彫刻がみられないことも特徴としてあげられる。

さらに、社寺建築においても、民家を対象とする考察の中で取りあげた三井元昭氏宅（図7）と同様に、柱の上に束を立てて棟木を支える事例がある。宮城県仙台市にある陸奥国分寺仁王門（図10）は、入母屋茅葺の八脚門で、外観からは、棟持柱構造であるか否か判断できないものの、その断面図をみると、棟通りの柱が水平材を介することなく礎石の上から真っ直ぐに小屋裏までのびている。さらに、棟通りの柱は、棟木を直接支えているのではなく、梁を介さずに直接その上に束をのせていることがわかる。このかたちは、ま

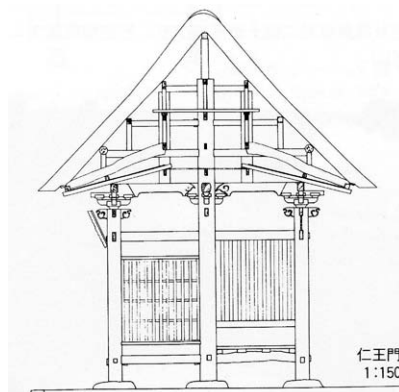


図10 陸奥国分寺仁王門断面図



さに図7に示す三井元昭氏宅とそっくりであるといえ、三井元昭氏宅と同様に、棟持柱に準じた柱と位置づけることができよう。

このように、社寺建築において棟持柱は、棟木を直接支えるかたちのほかに、組物を介して棟木を支えるかたちや束を介して棟木を支えるかたちがあり、これらはどれも、民家における棟持柱の事例とほぼ同様なものといえる。さらに、社寺建築においては、つぎに示すように、棟通りの柱が男梁・女梁の上まで立ち上がり、臺股を介して棟木を支える事例がある。

京都市東山区の東福寺には、国宝の三門をはじめ、数多くの文化財指定を受けた建造物がある。このうち重要文化財指定を受けた六波羅門は、修理工事報告書に掲載されている側面図(図11)<sup>注11)</sup>をみると、ひときわ太い主柱の上に欠き込みが設けられていて、ここに、まず側柱間に渡された水平材が落とし込まれ、その上に臺股が落とし込まれて棟木を支える構造である。これまでの考察をふまえると、東福寺六波羅門の構造は、主柱の上に水平材を介しているの、棟持柱とはみなせないようにみえる。とはいえ、この水平材は、単に主柱の上に架けられた水平材ではなく、頭貫のように主柱の上から落とし込まれた水平材である。また、一般的な頭貫は、貫の上端と柱頭が平らにおさめられており、東福寺六波羅門のように柱頭が頭貫よりも上に出ることはない。対して、東福寺六波羅門の主柱は、柱頭が側柱よりも上にのびて臺股を受けていることから、一般的な梁などの水平材と考えるよりはむしろ、柱を貫通する貫と同様な水平材と考えられる。つまり、東福寺六波羅門における主柱は、水平材を介さずに臺股をのせて棟木を支えていると考えられ、束と臺股という差異はあるものの、間に水平材を介さないという点において、陸奥国分寺仁王門と同様といえる。すなわち、東福寺六波羅門は、純粋な棟持柱構造ではないものの、軸部と小屋組が分離しない棟持柱構造に準じた構造であると考えられる。

ではさらに、東福寺六波羅門における臺股が、陸奥国分寺仁王門における棟束と同様にみなし得るか否かについて、模式図を用いて検討する。まず、先述の図1-1から図1-3は、棟持柱と棟木のおさまりを、小屋組部分を抜き出して模式図化したものである。このうち、

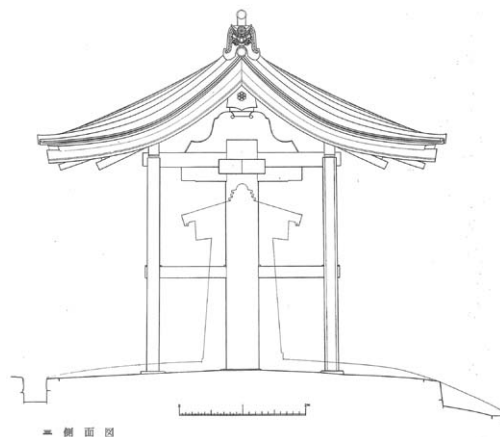


図11 東福寺六波羅門側面図



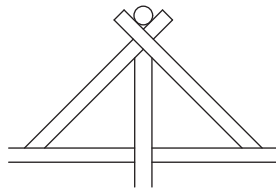


図12-1 模式図1

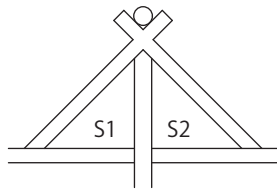


図12-2 模式図2

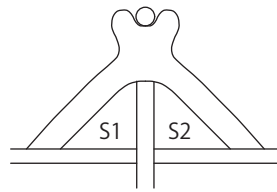


図12-3 模式図3

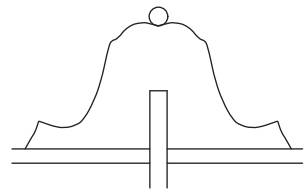


図12-4 模式図4

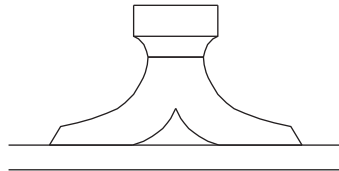


図13 法隆寺金堂人字束



写真1 鑿阿寺西門 全景



写真2 鑿阿寺西門 詳細

図1-3は間接的に棟木を支えるかたちで、これをより軸部と小屋組の関係がわかる図に書き換えた場合、図12-1（模式図1）のようにあらわすことができる。この図における中央の柱は棟持柱である。さらに、図12-1の扱首にあたる2本の部材が仮に一体の部材となった場合、図12-2（模式図2）のようにあらわすことができる。このような部材を実際に確認したことはないものの、法隆寺金堂にみえる人字束（図13）は、これによく似たかたちといえる。つづいて、仮に図12-2にみえるS1、S2の空間を徐々に狭めていくと、図12-3（模式図3）の状態をへて、最終的にS1およびS2の空間が0になった場合は、図12-4（模式図4）のようになると考えられる。そして、この図12-4のかたちは、まさに東福寺六波羅門の側面にみえる主柱と墓股の関係にそっくりであるといえる。このように、2本の扱首と墓股は、それぞれ異なった部材であるものの、模式図化して考えた場合、広義的には同じ役割をもつ部材とみなせる、と考えられる。すなわち、図1-3のように2本の扱首を介して棟木を支える柱が棟持柱とみなせるのであれば、東福寺六波羅門のように墓股を介して棟木を支える柱も棟持柱の一つとしてみなせると考えられる。

さらに、筆者らが現地確認したところによれば、東福寺六波羅門と同様な構造は、東福寺境内の北大門、中大門、勅使門、南大門といった他の門にもみられ、栃木県足利市にある鑿阿寺においても、切妻、本瓦葺の四脚門である西門（足利市指定文化財：永享4年

(1432) が、東福寺六波羅門のような構造をなしていることを確認している（写真1・写真2）。くわえて、国外に目を向けてみると、中国大陸や朝鮮半島においても同様な構造の門がみられる。このように、東福寺六波羅門のように墓股の途中まで柱を立ち上げる事例は、国内外の各地に散見される重要な建築遺構であると考えられる。

以上、棟持柱とは、純粹に、地上から一本の柱で立ち上がって棟木を支えているものを指すことはもちろんであるが、棟持柱の軸部と小屋組が分離しないかたちそのものを評価したときに、組物を介して棟木を支えるかたちや、柱の上に束をたてて棟木を支えるかたち、さらには、東福寺六波羅門のように墓股を介して棟木を支えるかたちも棟持柱に含めることができる。このとき、棟持柱であるか否かの判断の境目は、地上から立ち上がって小屋裏までのびた柱が、途中で水平材を受けていないことが条件となる。したがって、棟木を直接支える柱はもちろんであるが、組物、束、さらには墓股を介していても、途中で水平材を介していなければ棟持柱に含めることができる。

#### 【注および参考文献】

- 1) 各都道府県教育委員会編『近世社寺報告7 中部地方の近世社寺建築2〈山梨県教育委員会編『山梨県の近世社寺建築』(1983)〉参照
- 2) 土本俊和・遠藤由樹「総論4 掘立から礎へ—中世後期から近世にいたる棟持柱構造からの展開—」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、46-63頁、2011)参照
- 3) 土本俊和「総論8 民家のなかの棟持柱」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、104-116頁、2011)参照
- 4) 土本俊和「総論5 日本民家の架構法」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、64-71頁、2011)参照
- 5) 注4前掲・土本「総論5 日本民家の架構法」66頁引用
- 6) 注4前掲・土本「総論5 日本民家の架構法」66頁引用
- 7) 注4前掲・土本「総論5 日本民家の架構法」66頁引用
- 8) 注2前掲・土本・遠藤「総論4 掘立から礎へ」46頁参照
- 9) 関口欣也『山梨県の民家』(山梨県教育委員会、1982)94-97頁参照
- 10) 内田健一・土本俊和「総論6 棟持柱構造から軸部・小屋組構造への転換過程」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、72-86頁、2011)80頁参照
- 11) 京都府教育庁指導部文化財保護課編『重要文化財東福寺六波羅門並びに東司修理工事報告書』(京都府教育委員会、1978)参照

#### 【出典】

図1-1) 注4前掲・土本「日本民家の架構法」66頁、図3-1転写

- 図 1-2) 注 4 前掲・土本「日本民家の架構法」66 頁、図 3-3 転写
- 図 1-3) 注 4 前掲・土本「日本民家の架構法」66 頁、図 3-2 転写
- 図 2) 注 9 前掲・関口『山梨県の民家』92 頁、No.53 転写
- 図 3) 注 9 前掲・関口『山梨県の民家』92 頁、No.20 転写
- 図 4) 注 11 前掲『京都府の民家 調査報告第七冊—昭和 48 年度京都府民家緊急調査報告—』12 頁、  
第 10 図転写
- 図 5) 注 9 前掲・関口『山梨県の民家』103 頁、No.20 転写
- 図 6) 注 9 前掲・関口『山梨県の民家』312 頁、No.92 転写
- 図 7) 注 9 前掲・関口『山梨県の民家』308 頁、No.82 転写
- 図 8) 本論図 4-2 転写
- 図 9) 注 11 前掲『重要文化財東福寺六波羅門並びに東司修理工事報告書』転写
- 図 10) 筆者作成
- 図 11) 筆者作成
- 図 12) 筆者作成
- 図 13) 筆者作成

初出 棟持柱構造をもつ建築遺構に関する実証的研究



## 1.2 土台を持つ棟持柱構造の変遷

### 1 研究の目的と方法

建物の脚部を支える構法の一つである土台敷きは、一般に、掘立や礎にくらべて歴史は浅いものと考えられてきた。とりわけ、民家における土台敷きは、礎につづく構法と考えられ、その歴史は近世末期以前に遡ることがなかった。しかし、土本俊和が指摘するように、戦国期の洛中洛外図屏風をみると、「川を跨いだ土台の上にたつ切妻・平入の建物」<sup>注1)</sup>が描かれており、中世末期において既に土台が使用されていたと想定される。ここで、土台敷きについて再検証する必要性が見出される。

他方、土台敷きの変遷過程を明らかにするには、土台という柱の脚部のみを扱うのではなく、土台を含めた架構全体を考察する必要がある。日本建築の架構は、軸部と小屋組が分離しない棟持柱構造と、軸部と小屋組が分離した軸部・小屋組構造に大別される。本論の先行研究としては、棟持柱構造を日本の民家の支配的源流とした土本らの棟持柱祖形論に関する一連の研究<sup>注2)</sup>がある。このうち、「棟持柱構造から軸部・小屋組構造への転換過程」<sup>注3)</sup>では、『建築の歴史』<sup>注4)</sup>に、棟持柱を持つ民家を「現在では普通見られない単純な構造形式であったことはたしかであろう」とあるのに対し、「近世初頭以降の軸部と小屋組が分離していない構造を持つ民家がここではあまり考慮されていない」と指摘し、一例として、20世紀中期以降の棟持柱構造である「国見のタキモノ小屋」をあげた。

そこで、土台を持つ棟持柱構造の変遷を目的としている本論は、中世後期から近世の土台敷きに関する史料として、川の上にたつ家がみられた「洛中洛外図屏風」を用いるとともに、近世初頭以降の史料としては、建築遺構図面などにみられる棟持柱構造の実例を捕捉し、それらを総合的に考察することで、土台を持つ棟持柱構造の建築的位置を明らかに

表1 洛中洛外図屏風にみる土台を持つ棟持柱

番	資料名	景観年代	資料の位置	階数	梁行	備考
1	町田本・歴博甲本	1525-1536	右隻4扇中	平屋	2間	川の上にたつ建物
2	東博模本	1539-	右隻5扇下	平屋	2間	川の上にたつ建物
3	東博模本	1539-	左隻1扇下	平屋	2間	
4	上杉本	1532-1555	右隻3扇中	平屋	2間	川の上にたつ建物
5	池田本・林原美術館本	1615-1623	右隻5扇中	平屋	2間	
6	池田本・林原美術館本	1615-1623	左隻3扇中	平屋	2間	
7	萬野A本	1625-	左隻1扇下	2階建	2間	川の上にたつ建物
8	サントリー美術館本	1626	左隻3扇中	平屋	2間	
9	個人本		右隻4扇中	平屋	4間	
10	個人本		左隻2扇中	2階建	4間	
11	個人本		左隻2扇下	2階建	4間	
12	個人本		左隻6扇上	不明	4間	川の上にたつ建物
13	歴博D本	-1640	左隻2扇下	2階建	2間	
14	京都国立博物館本	17世紀	左隻1扇中	平屋	2間	
15	京都国立博物館本	17世紀	左隻1扇下	平屋	2間	
16	京都国立博物館本	17世紀	左隻2扇下	平屋	2間	
17	京都国立博物館本	17世紀	左隻4扇中	平屋	2間	
18	個人本	17世紀末期	左隻3扇下	平屋	2間	

する。

## 2 洛中洛外図屏風にみる土台を持つ棟持柱

本論では、洛中洛外図屏風 10 本から土台を持つ棟持柱構造の建物 18 点を分析対象として抽出した。分析にあたり、伊藤鄭爾の「天正～慶長期を境として住居はその様相を急速に変える」<sup>注5)</sup> という、「転換期」に留意しつつ戦国期から近世の変化について考察を行う。

まず、棟持柱と梁との関係について考察すると、(a)「棟持柱に対して梁が分断されているもの」、(b)「梁が棟持柱のうしろに交叉して通っているもの」、(c)「梁が分断されているか交叉して通っているか判断できないもの」があげられる。(a)については、明らかに棟持柱に対して梁が左右で分断されている。また、(b)の梁が棟持柱のうしろに交叉して入っているのは、しっかりと構造の違いについて区別して描いているものと考えられる。さらに(c)は、梁が切れているのか棟持柱のうしろに梁が交叉しているのか、といったことはわかりにくい、棟持柱はしっかりと描かれ土台も入っているので土台を持つ棟持柱構造であることは判断できる。

次に個々の建物について述べると、中世の洛中洛外図にみる土台を持つ棟持柱構造の建物は、川の上につた家が3点(75%) (図1)で、唯一、東博模本にみられる1点のみが土地の上につた家であった(図2)。一方、近世の洛中洛外図では、川の上につた家にくらべて土地につた土台を持つ棟持柱構造の建物が12点(86%)と多く、さらに、町屋のみでなく、小規模な社寺建築(図3)や小屋においても、土台を持つ棟持柱構造の建物が

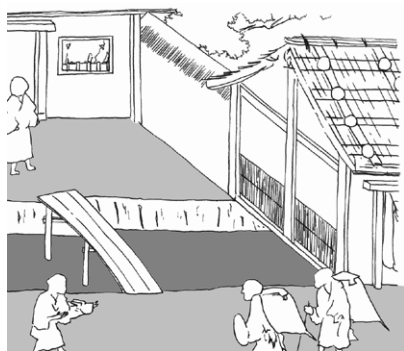


図1 町田本・歴博甲本 右隻4扇中(1番)



図2 東博模本 左隻1扇下(3番)

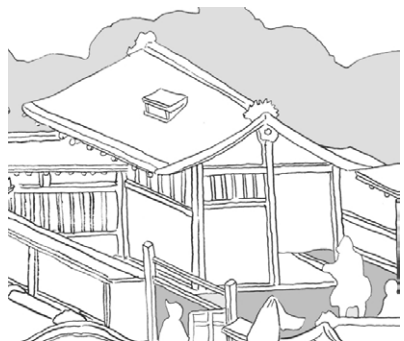


図3 池田本 左隻3扇中(6番)



図4 個人本 左隻2扇中(10番)



みられた。また、中世においてその建物の規模は、平屋で梁行が2間（100%）の小規模建造物であるのに対し、近世の洛中洛外図には2階屋の出現がみてとれる（図4）。これに伴い、梁行4間が4点（29%）と規模が拡大した。

以上にみたように、洛中洛外図にみる土台を持つ棟持柱構造の建物は、川の上にたつ家をはじめ、土地の上にたつ家にもみられた。とりわけ、中世の洛中洛外図において、川の上にたつ家のほかに、東博模本に土地の上にたつ家がみられたことは注目に値する。さらに、近世の洛中洛外図になると、土地の上にたつ土台を持つ棟持柱構造の建物が増え、建物の形態も社寺建築や小屋といったものにもあらわれる。

確かに、中世末期において当時の民家の大半が掘立柱である。しかし一方で、洛中洛外図屏風にみるように、川の上にたつ家や、東博模本にみられる土地の上にたつ土台を持つ棟持柱構造の建物は、少数派ながらもしっかりと描かれている。

以上より、洛中洛外図屏風にみえる土台を持つ棟持柱構造の存在から、中世末期において土台は、ある程度存在していたもの、と考えられる。

### 3 川原町

洛中洛外図の土台を持つ棟持柱構造に類似した建物として、川原町の組立式の住居がある（図5）。そのシステムは、間口3間、奥行2間、切妻石置屋根（後に鉄板）、平入、平家の典型的パターンとする土台をもつ棟持柱構造の建物である。本多昭一<sup>注6)</sup>・矢熊敏男<sup>注7)</sup>によると、その存在は少なくとも近世初頭まで遡ることができ、最盛期に達したといわれる明治の終わりから大正の始めにかけては、210軒はあった。また本多は、川原町の建築物に類似した形態が「紀伊国名所図絵下巻」にもみられることを示唆していることから、土台を持つ棟持柱構造は、「町家山村を問わず」存在していたと考えられる。つまり、こういった川原町の仮設建築物や、山村の類似建築物から推しても、土台をもつ棟持柱構造の建物は幅広く存在していたことが窺える。

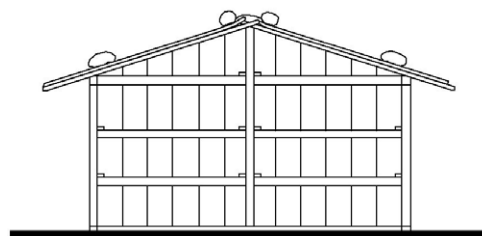


図5 川原町の仮設建物 立面図

### 4 遺構図面にみる土台を持つ棟持柱

表2にみるように、遺構図面からも土台を持つ棟持柱構造の建物は確認される。断面図をみると、1番～4番は、梁行2間の小規模なものだった。とりわけ、長野県飯山地方に

は、「タテノボセ」と呼ばれる、土台を持つ棟持柱構造の建築遺構が今も数棟存在している。2002年の調査では、飯山市蓮地区に3軒あることが確認された。そして今回は、そのうちの一軒である高橋芳枝氏に実測図面を取らせていただいた（図6）。

つぎに、5番～6番は、規模の大きい茅葺の民家である。永井規男<sup>注8)</sup>が述べたように、近世に入って、一般に家屋規模が大きくなってくると、棟持柱では相当に長い柱が必要になるので、「おだち・とりい」組へと発展したと考えられるが、5番～6番のように、茅葺の民家でも、両妻面の柱が棟木を直接支える、土台を持つ棟持柱構造の建物はある。

一方、7番～8番は、茅葺民家のような矩勾配の屋根ではなく、板葺などの緩勾配屋根の建物である。このような緩勾配の建物の場合、棟持柱がそれほど長くないために、近世になり建物の規模が大きくなって、棟持柱構造の姿をとどめたと考えられる。このうち、藤原一穂氏宅（図7）は、建築年代が江戸時代末期と考えられる建物で、建物規模も間口6間・奥行5間と大きい。屋根勾配は板葺であるため3寸勾配と緩く、棟持柱が9尺くらいの長さですみ棟高も低い。

以上にみたように、近世の遺構図面からみる土台を持つ棟持柱構造は、その形態において、町家・農家・作業場など、小規模なものから規模の大きいものまで幅広く存在している構造といえる。

表2 建築遺構図面にみる土台を持つ棟持柱

番	建物名	建築年代	梁行	屋根	都道府県
1	今井武敏氏土蔵	不明	2間	不明	長野
2	高橋芳枝氏宅	明治初期以前	2間	草葺	長野
3	原重治氏西側のケミヤ	不明	2間	茅葺	長野
4	神津善兵衛氏宅土蔵	不明	2間	茅葺	山梨
5	小池久寿氏宅	18世紀中期	5間半	茅葺	山梨
6	三枝聡氏宅	明治前期	6間半	茅葺	山梨
7	藤原一穂氏宅	江戸末期	5間半	不明	長野
8	藤原久七氏宅	18世紀後半	5間半	板葺	長野
9	船頭小屋	20世紀前期	不明	杉皮葺	神奈川

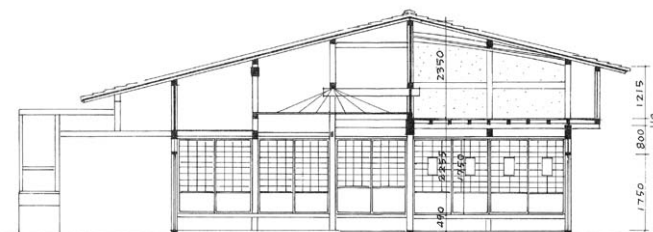
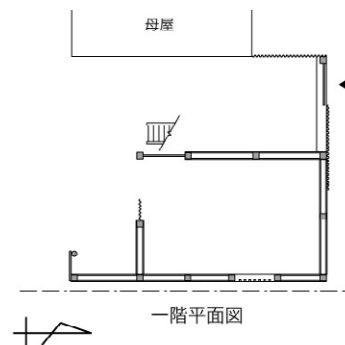
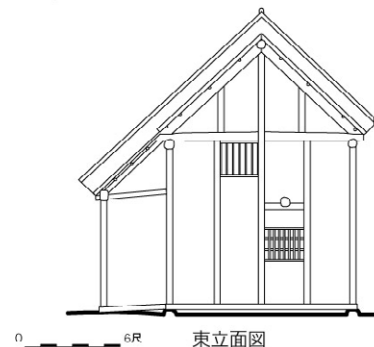


図7 藤原一穂氏宅 断面図



一階平面図



東立面図

図6 高橋芳枝氏宅 一階平面図・立面図

## 5 小活

土台敷きと棟持柱構造について統一的に扱ってきた本論は、絵画史料および遺構図面をもとに、土台を持つ棟持柱構造の建物を取り上げ、中世末期から現在に至るその変遷を検

証した。中世末期の洛中洛外図屏風には、川の上にたつ家とともに、土地の上にたつ土台を持つ棟持柱構造の建物もみられた。さらに、近世初頭になると、その多くは土地の上にたつ家であった。くわえて、洛中洛外図にみえる建物に類似した建築遺構として川原家の存在がある。文献資料から、少なくとも17世紀にその存在が確認される川原町は、組立式構法の土台を持つ棟持柱構造の住居群で、かつて川原にたくさん建ち並んでいた。また、近世の遺構図面や飯山の「タテノボセ」構造の存在から、今日も土台を持つ棟持柱構造の建築遺構は幅広く存在していることがわかる。

以上、土台は、少なくとも中世末期の時点で既に存在しているとともに、その上部構造である棟持柱構造も、梁行2間の小規模なものから、一部はその形を変え規模を拡大しつつも、今日まで途絶えることなく遺存し続けていることが確認できた。すなわち、土台を持つ棟持柱構造は、少なくとも中世末期から現在まで存在し続けているといえる。

#### 【註】

注1) 参考文献1) 参照

注2) 参考文献2) ~参考文献5) 参照

注3) 参考文献5) 313頁参照

注4) 参考文献6) 参照

注5) 参考文献7) 250頁引用

注6) 参考文献8) 参照

注7) 参考文献9) 参照

注8) 参考文献10) 参照

#### 【参考文献】

- 1) 土本俊和「家から家屋敷へ」(『日本建築学会計画系論文集』第502号、211-218頁、1997)
- 2) 畑智弥・土本俊和「京都町屋における軸部と小屋組」(『日本建築学会計画系論文集』第513号、259-266頁、1998)、のちに、同「京都のマチャにおける軸部と小屋組」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、118-133頁、2011)
- 3) 遠藤由樹・土本俊和・吉澤政己・和田勝・西山マルセーロ・笹川明「信州茅葺民家にみる棟束の建築的意義」(『日本建築学会計画系論文集』第532号、215-222頁、2000)、のちに、同「信州の茅葺民家にみる棟束の建築的意義」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、195-211頁、2011)
- 4) 土本俊和・遠藤由樹「掘立から礎へ—中世後期から近世にいたる棟持柱構造からの展開—」(『日本建築学会計画系論文集』第534号、263-270頁、2000)、のちに、同「掘立から礎へ—中世後期から近世にいたる棟持柱構造からの展開—」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、

46-63 頁、2011)

- 5) 内田健一・土本俊和「棟持柱構造から軸部・小屋組構造への転換過程」(『日本建築学会計画系論文集』第 556 号、313-320 頁、2002)、のちに、同「棟持柱構造から軸部・小屋組構造への転換過程」(土本俊和編著『棟持柱祖形論』中央公論美術出版、72-86 頁、2011)
- 6) 玉井哲雄「日本建築の構造」(藤井恵介・玉井哲雄『建築の歴史』中央公論社、303-308 頁、1995)
- 7) 伊藤鄭爾『中世住居史 [第 2 版]』(東京大学出版会、1958)
- 8) 本多昭一「組立構法による幻の集落—川原町」(『GLASS & ARCHITECTURE』第 215 号、1-15 頁、1977)
- 9) 矢熊敏男「熊野の折り畳み集落」(『SOLAR CAT』第 33 号、59-64 頁、1998)
- 10) 京都府教育庁文化財保護課編『京都府の民家 調査報告第 7 冊—昭和 48 年度京都府民家緊急調査報告—』(京都府教育委員会、1975)
- 11) 『近世風俗図譜 3 洛中洛外 1 [第二版]』(小学館、1989)
- 12) 太田博太郎・小寺武久執筆・南木曾町編『妻籠宿 保存・再生のあゆみ』(彰国社、1984)

## 【出典】

- 図 1) 町田本・歴博甲本 右隻 4 扇中 参考文献 11) 掲載のものをリライト
- 図 2) 東博模本 左隻 1 扇下 参考文献 11) 掲載のものをリライト
- 図 3) 個人本 左隻 2 扇下 参考文献 11) 掲載のものをリライト
- 図 4) 池田本 左隻 3 扇中 参考文献 11) 掲載のものをリライト
- 図 5) 参考文献 8) 掲載のものをリライト
- 図 6) 筆者作成
- 図 7) 参考文献 12) 128 頁

初出 滝澤秀人「土台を持つ棟持柱構造の変遷」(『日本建築学会大会学術講演梗概集 (東海) F-2』107-108 頁、2003)

## 2.0 建造物実測調査編





## 2.1 長野市浅川流域の小規模建造物実測調査（平成15年度）

### As01 浅川の小屋

調査年月日：2003年11月26日

○特記事項

住所：長野市浅川中曽根

築年：不明

桁行（間）：1.5

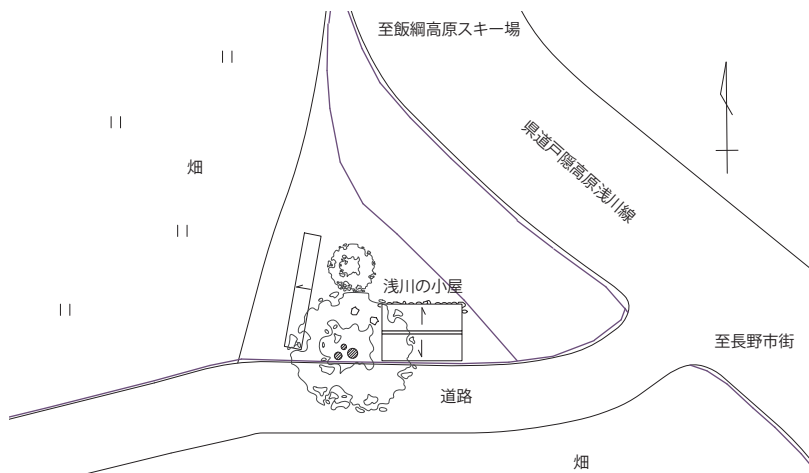
梁行（間）：1.0

屋根材料：トタン葺き

屋根形式：切妻

棟持柱配置：西●○東

資料：特になし



As01 浅川の小屋 配置図 (S=1/400)

○建築物の概要

この小屋は、長野市街地から飯綱高原スキー場へ向かう山道の途中の、一面に田畑が広がる地域に位置している。きわめて簡素な外観の農作業道具置き場で、その構造は、棟持柱構造と軸部・小屋組構造を併せ持つ構造である。周囲のいくつかの小屋を確認したところ、このような構造の小屋はなく、たいへん貴重な建築遺構と考えられる。



As01 浅川の小屋を東側から見た外観



As01 棟持柱と棟木の納まり



As01 浅川の小屋を南側から見た遠景



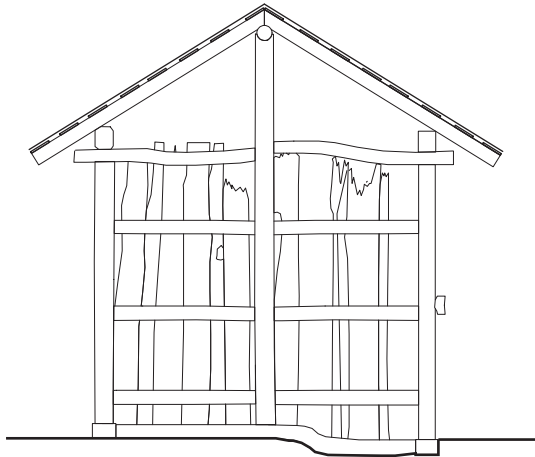
As01 棟持柱と土台の納まり



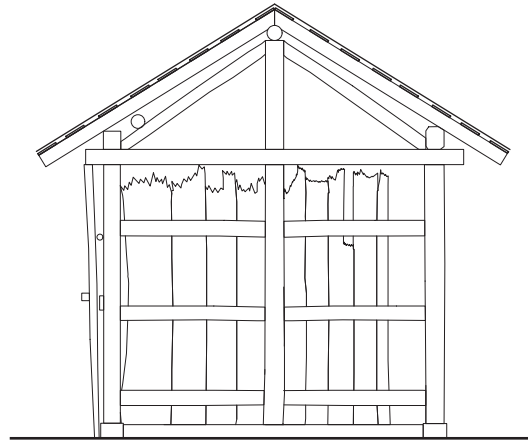
As01 浅川の小屋の内部

番	調査日	住宅等名	建物名称	実測 / 作成	配置	1階平面	2階平面	3階平面	断面1	断面2	立面	ヒヤリング (タイプ)	写真
As01	11.26	浅川小屋	物置	実測 / 作成	—	SH / TH	—	—	TH / TH	—	TH / TH	—	TH / —

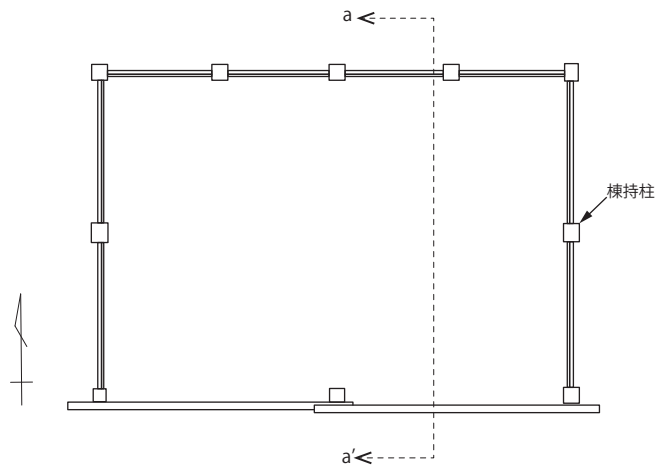
凡例：滝澤秀人 (TH)、 島崎広史 (SH)



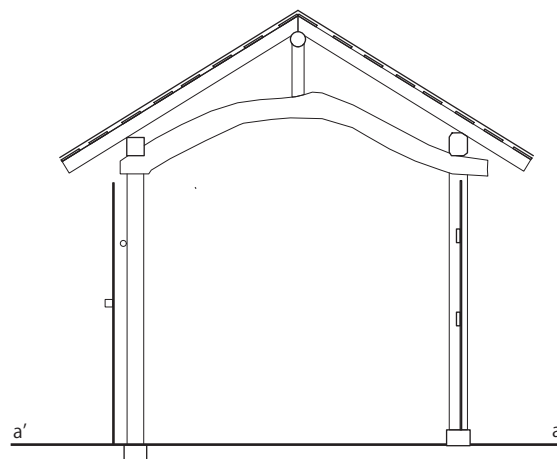
As01 浅川的小屋 東立面図 (S=1/50)



As01 浅川的小屋 西立面図 (S=1/50)



As01 浅川的小屋 平面図 (S=1/50)



As01 浅川的小屋 a-a' 断面図 (S=1/50)

## 2.2 山梨県笛吹川流域の建造物実測調査 第1期（平成15年度）

2.2.1 図面および実測者、作成者一覧	152
2.2.2 実測した建造物の分布	153
2.2.3 実測図面	154
2.2.4 ヒアリング	202

※ 平面図内に○で囲った部分は、棟持柱を示す。

## 2.2.1 図面および実測者、作成者一覧

番	調査日	住宅等名	建物名称	実測/作成	配置	1階平面	2階平面	3階平面	断面1	断面2	立面	ヒヤリング (タイプ)	写真
Fu01a	8.7	三枝行雄家住宅	主屋	実測	SK	TA	TA	—	SH	—	—	TH	TH
				作成	SK	TA	TA	—	SH	—	—	—	—
Fu02	9.12	三枝雪江家住宅	オクラ	実測	SK	MS	TH	—	SH	—	TN	—	TH
				作成	SK	TH	TH	—	TH	—	TH	—	—
Fu03	8.8	三枝貞晴家住宅	主屋	実測	SK	SH	HS/MS	HS	TA	—	—	SK	TH/MS
				作成	SK	SH	SH	SH	TA	—	—	—	—
Fu04	8.4	淡路栄家住宅	主屋	実測	SK	TA	SK	—	SH	—	—	TH	TH
				作成	SK	TA	TA	—	SH	—	—	—	—
Fu05	8.5	古屋古福家住宅	主屋	実測	NT	TA	SK	SK	SH	TH	—	TA	TH/TK
				作成	NT	TA	TA	TA	SH	TH	—	—	—
Fu06	9.19	古屋茂富家住宅	主屋	実測	SK	SH	SK	—	TA	TH	—	—	TH
				作成	SK	SH	SH	—	TA	TH	—	—	—
Fu07	9.19	若宮八幡宮	拝殿	実測	SK	TA	—	—	SH	TA	TH	—	TH
				作成	SK	TA	—	—	SH	TA	TH	—	—
Fu08a	9.12	佐藤一郎家住宅	便所	実測	M	SK	M	M	TN	SH	—	TH	TH
				作成	SK	SH	SH	SH	SH	SH	—	—	—
Fu09	10.25	戸田眞二家住宅	主屋	実測	—	TH	—	—	TH	—	—	—	TH
				作成	—	TH	—	—	TH	—	—	—	—
Fu10	8.19	戸田政守家住宅	主屋	実測	—	TH	—	—	TH	—	—	—	TH
				作成	—	TH	—	—	TH	—	—	—	—
Fu11	9.2	奥山朝則家住宅	主屋	実測	—	TH	—	—	TH	—	—	—	TH
				作成	—	TH	—	—	TH	—	—	—	—
Fu12	10.25	戸田千恵子家住宅	便所1	実測	HH	ST	ST	ST	SH	—	—	—	TH
				作成	SK	TH	SH	SH	SH	—	—	—	—
Fu13	9.20	今井秀郎家住宅	主屋	実測	SK	TA	SK	—	SH	TH	—	TA	TH
				作成	SK	TA	TA	—	TH	TH	—	—	—
Fu14	8.7	直売所	主屋	実測	SK	SH	—	—	TA	—	—	—	TH
				作成	SK	SH	—	—	TA	—	—	—	—
Fu15	8.5	小田切幹雄家住宅	主屋	実測	SK	TA	SK	SK	SH	—	—	—	TH
				作成	SK	TA	TA	TA	SH	—	—	—	—
Fu16	9.2	高原左門家住宅	主屋	実測	SK	SH	TH	TH	TA	—	—	TA	TH
				作成	SK	SH	SH	SH	TA	—	—	—	—
Fu17	8.6	山下政英家住宅	主屋	実測	SK	TH	TA	TA	SH	—	—	—	TA
				作成	SK	TH	TH	TH	SH	—	—	—	—
Fu18	8.4	山下牧郎家住宅	主屋	実測	NT	SH	SK	SK	TA	—	—	—	TH
				作成	NT	SH	SH	SH	TA	—	—	—	—
Fu19	11.19	妣田圭子家住宅	ヤギゴヤ	実測	—	NT	—	—	NT	—	—	—	TH
				作成	—	SH	—	—	SH	—	—	—	—
Fu20	8.5	藤原達男家住宅	主屋	実測	SK	TH	ST	ST	TA	—	—	—	TT
				作成	SK	TH	—	—	TA	—	—	—	—
Fu21	9.20	赤池栄人家住宅	便所	実測	—	SH	—	—	SH	—	SH	—	TT
				作成	—	SH	—	—	SH	—	SH	—	—
Fu22	10.25	藤原金雄家住宅	主屋	実測	NT	TA	SK	SK	SH	—	—	—	TH
				作成	NT	TA	TA	TA	SH	—	—	—	—
Fu23	8.6	水上重兵衛家住宅	主屋	実測	SK	SH	SH	—	TA	—	—	—	TH
				作成	SK	SH	SH	—	TA	—	—	—	—
Fu24	8.19	宮原久已家住宅	主屋	実測	SK	SH	SH	—	TA	—	—	—	TH
				作成	SK	SH	SH	—	TA	—	—	—	—
Fu25	8.8	笛吹小屋 キャンプ場	炊事場	実測	HH	ST	ST	ST	SH	—	—	—	TH
				作成	SK	TH	TH	TH	SH	—	—	—	—
Fu25	8.8	笛吹小屋 キャンプ場	炊事場	実測	TH	TH	—	—	TA	—	—	—	TH
				作成	TH	TH	—	—	TA	—	—	—	—

凡例

土本俊和 (TT)、早見洋平 (HY)、新川竜悠 (ST)、芝景子 (SK)、滝澤秀人 (TH)、土屋直人 (TN)、西山哲雄 (NT)  
藤ヶ谷さやこ (FS)、島崎広史 (SH)、武長晃弘 (TA)、古川晴之 (FH)、松田真一 (MS)、遠藤由樹 (EY)

## 2.2.2 実測した建造物の分布

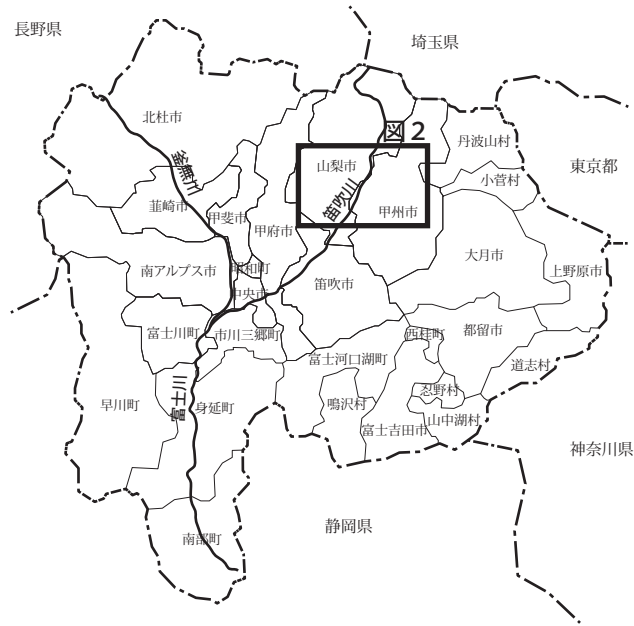


図1 山梨市および甲州市の位置

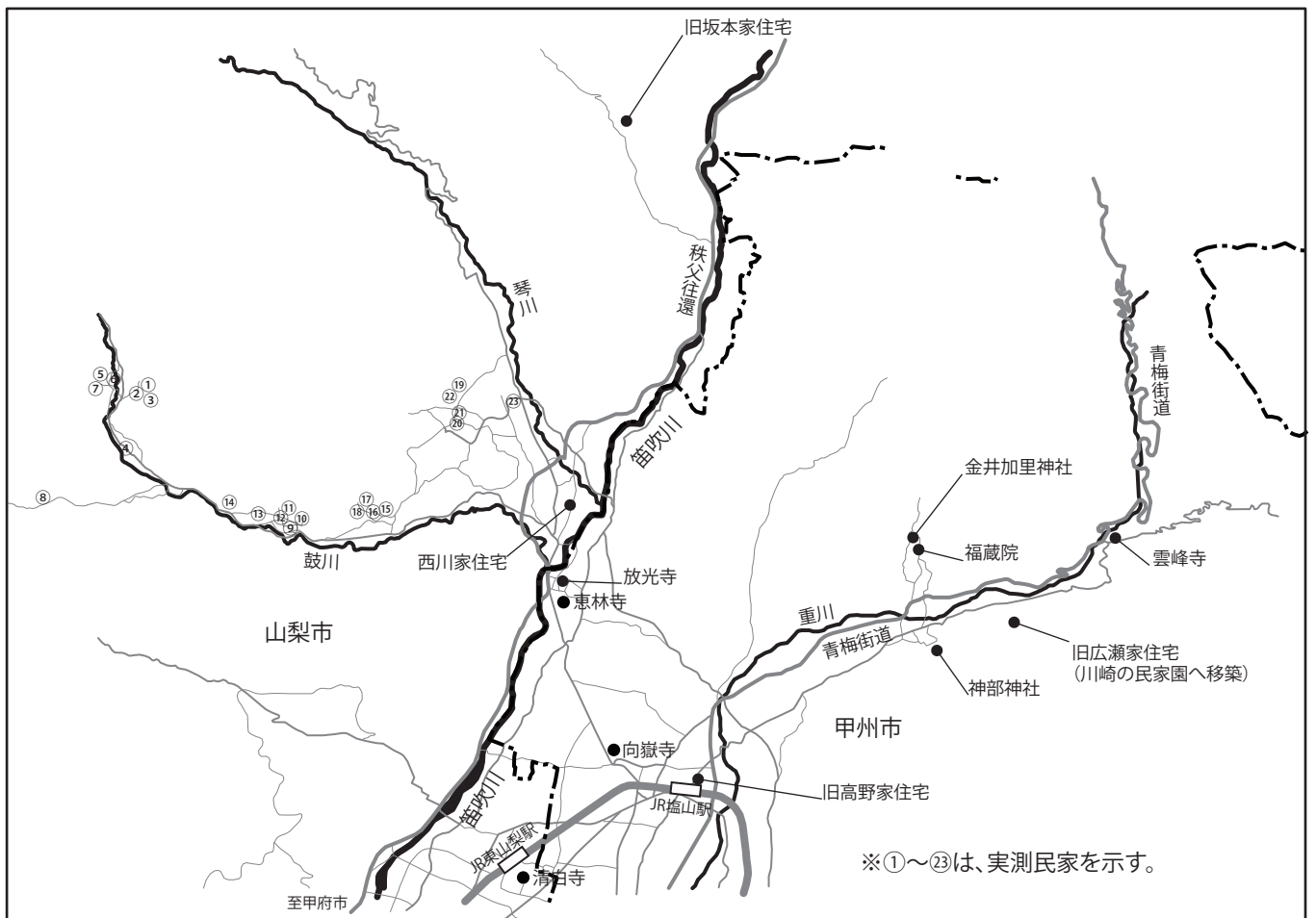


図2 山梨市および甲州市周辺の実測した建築遺構の位置

### 2.2.3 実測図面

#### 【実測図面目次】

Fu01a	三枝行雄家住宅	155
Fu02	三枝雪江家住宅	157
Fu03	三枝貞晴家住宅	158
Fu04	淡路栄家住宅	160
Fu05	古屋古福家住宅	162
Fu06	古屋茂富家住宅	164
Fu07	若宮八幡宮	166
Fu08a	佐藤一郎家住宅	167
Fu09	戸田真二家住宅	170
Fu10	戸田政守家住宅	172
Fu11	奥山朝則家住宅	174
Fu12	戸田千恵子家住宅	176
Fu13	今井秀郎家住宅	177
Fu14	直売所	179
Fu15	小田切幹雄家住宅	180
Fu16	高原左門家住宅	182
Fu17	山下政英家住宅	184
Fu18	山下牧男家住宅	186
Fu19	妣田圭子家住宅	189
Fu20	藤原達男家住宅	192
Fu21	赤池栄人家住宅	194
Fu22	藤原金雄家住宅	196
Fu23	水上重兵衛家住宅	198
Fu24	宮原民雄家住宅	200
Fu25	笛吹小屋キャンプ場	201



## Fu01a 三枝行雄家住宅

調査年月日：2003年8月7日

### ○特記事項

住所：牧丘町北原

築年：1800年頃

桁行（間）：10

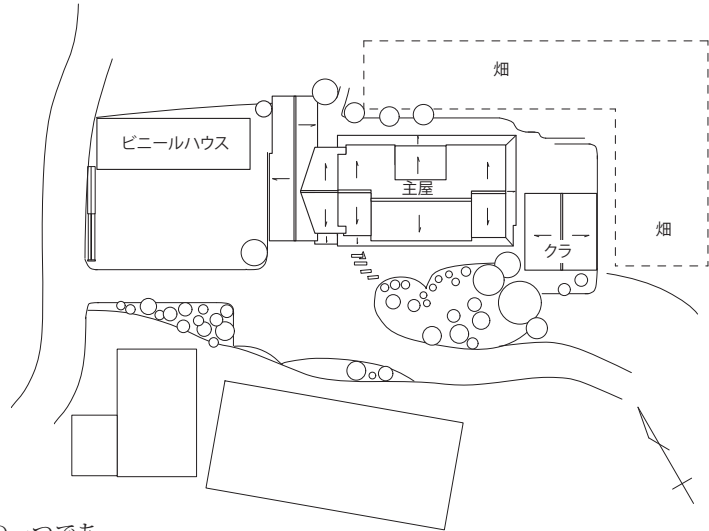
梁行（間）：4.5

屋根材料：茅葺

屋根形式：切妻

棟持柱配置：西●○○●-----東

資料：特になし



Fu01 三枝行雄家住宅 配置図 (S=1/800)

### ○建築物の概要

今も茅葺屋根を維持している数少ない建物の一つである。ご主人が所有する裏山から、毎年少しずつ茅を刈ってきては家の2階に保管し、ある程度の量になると少しずつ屋根を葺き替えている。一昨年の平成13年に一通りの葺き替えを終えた。建築年代は、およそ200年ほど前ということだが詳しいことは定かではない。中央の大黒柱西妻壁の柱が棟持柱になっている。東側妻面の柱は1階と2階の間で切れている。平面は、いわゆる六間取り構成だが、大黒柱の位置が部屋境にあるのではなく1.5尺ほどずれている。東側にある蔵は、以前カンバ葺きという白樺の皮で葺かれていた。全体的に保存状態も良く、ご主人は、可能な限り今後も茅葺屋根を維持していきたいという。



Fu01 三枝行雄家主屋を南西からみた外観



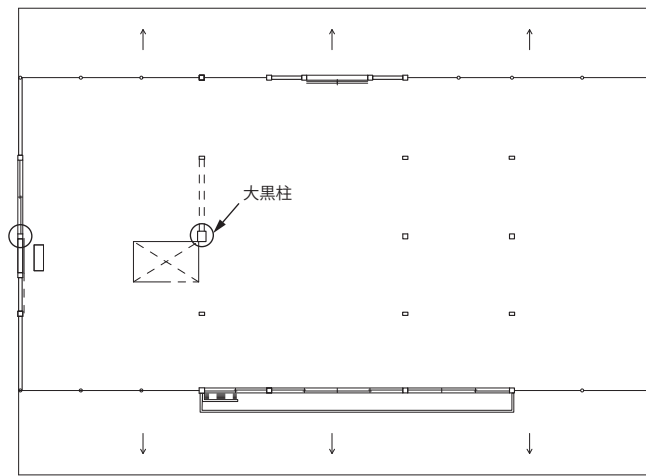
Fu01 三枝行雄家主屋 a-a' 断面図 (S=1/100)



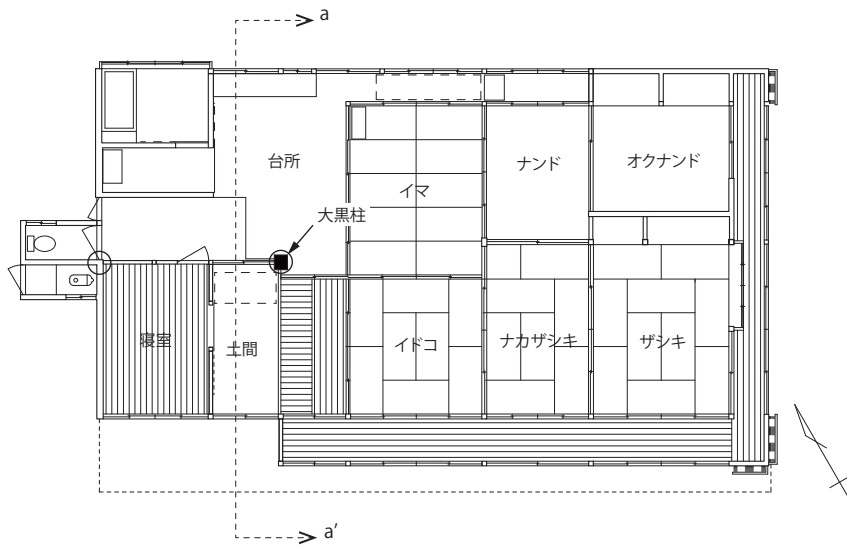
Fu01 三枝行雄家主屋を東からみた外観



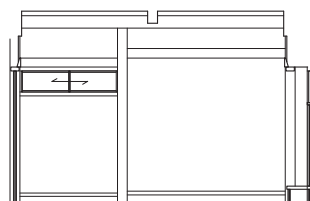
Fu01 三枝行雄家主屋を南からみた外観



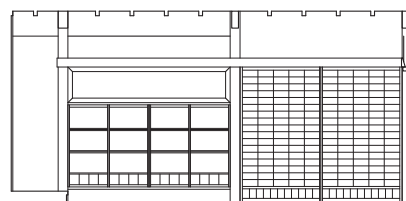
Fu01 三枝行雄家主屋 2階平面図 (S=1/200)



Fu01 三枝行雄家主屋 1階平面図 (S=1/200)



Fu01 ザシキ北面展開図 (S=1/100)



Fu01 ザシキ東面展開図 (S=1/100)

## Fu02 三枝雪江家住宅

調査年月日：2003年9月12日

○特記事項

場所：牧丘町北原

築年：20世紀前期

桁行（間）：1.5

梁行（間）：2

屋根材料：トタン葺

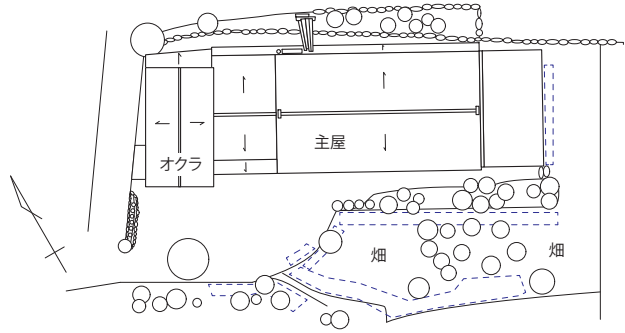
屋根形式：切妻

棟持柱の配置：北○●南

資料：特になし

○建築物の概要

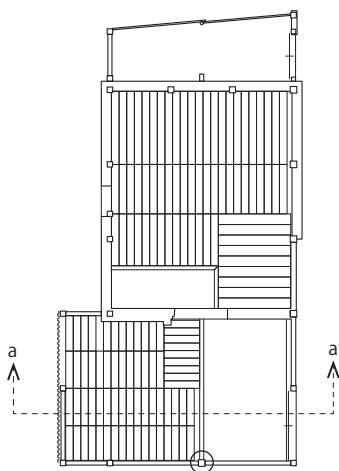
主屋の西側にある蔵が棟持柱構造をなしている。土台から柱を立ち上げて貫で連結するという非常に明快なつくりである。土蔵がまず建てられ、その後、土蔵の前にはり付くようにオクラが建てられている。建築年代は不明だが、それほど古いものではないらしく、第二次大戦の頃、疎開してきた人のために増築したようだ。壁は、もともとは土壁だったが、今では、モルタルで補修されている。



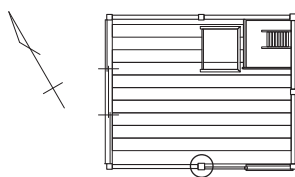
Fu02 三枝雪江家住宅 配置図 (S=1/800)



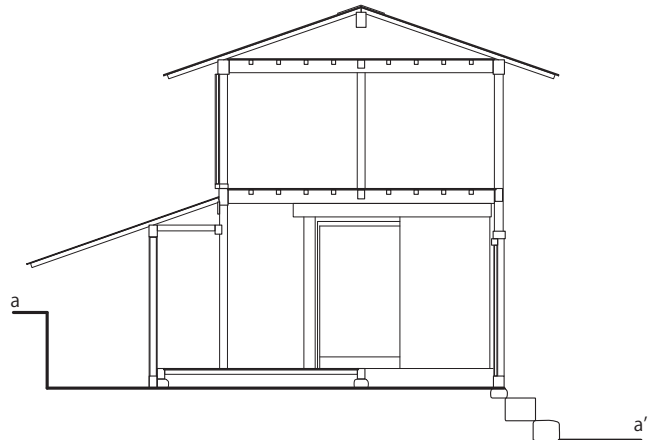
Fu02 三枝雪江家オクラを南西からみた外観



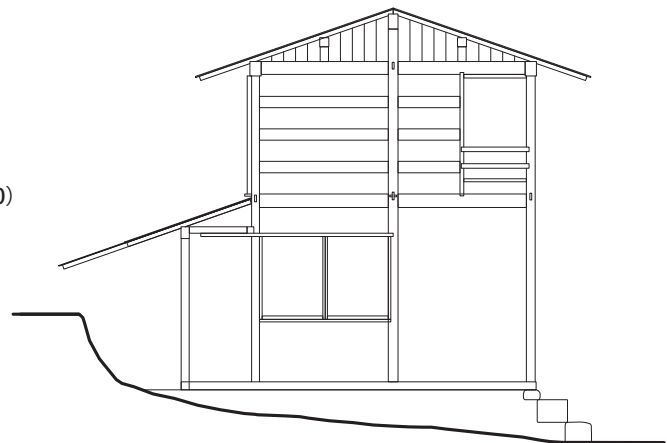
Fu02 三枝雪江家オクラ 1階平面図 (S=1/150)



Fu02 三枝雪江家オクラ 2階平面図 (S=1/150)



Fu02 三枝雪江家オクラ a-a'断面図 (S=1/100)



Fu02 三枝雪江家オクラ 南立面図 (S=1/100)

### Fu03 三枝貞晴家住宅

調査年月日：2003年8月8日

○特記事項

住所：牧丘町北原

築年：不明

桁行（間）：7.5

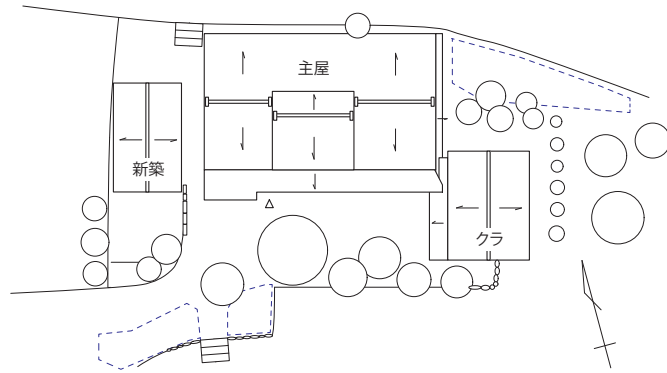
梁行（間）：4

屋根材料：茅葺、トタン

屋根形式：切妻

棟持柱配置：西●—●—○●東

資料：特になし



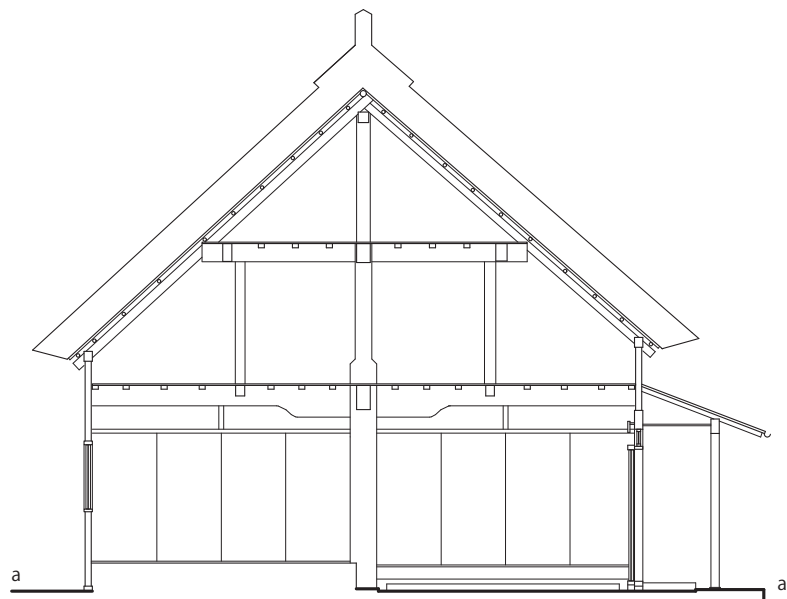
Fu03 三枝貞晴家住宅 配置図 (S=1/500)

○建築物の概要

現在は空き家になっている。以前この建物に住んでいた方は、1970年頃東京へ移り住んでいった。今は、隣の三枝貞晴さんが日常の維持管理を行っている。構造は、妻面の柱と大黒柱が棟木を直接支える棟持柱構造である。土間も建築当時のままで、2階には蚕の繭や養蚕の時の道具があり、養蚕を営んでいた当時の面影が今も残されている。この家の持ち主は現在東京に移り住んでいるが、維持管理の関係から近々取り壊す予定になっている。



Fu03 三枝貞晴家主屋を北からみた外観



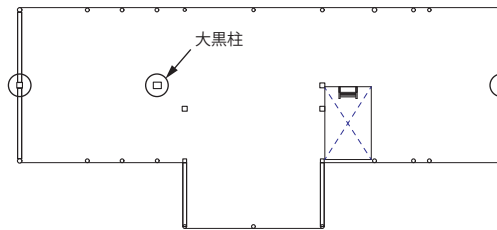
Fu03 三枝貞晴家主屋 a-a' 断面図 (S=1/100)



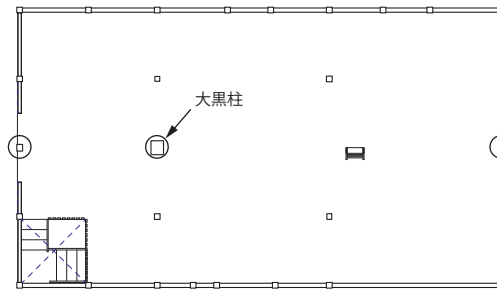
Fu03 三枝貞晴家主屋を東からみた外観



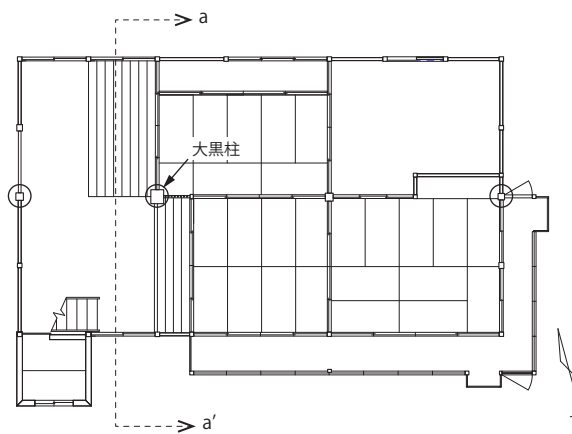
Fu03 三枝貞晴家主屋の2階からみた大黒柱



Fu03 三枝貞晴家主屋 3階平面図 (S=1/200)



Fu03 三枝貞晴家主屋 2階平面図 (S=1/200)



Fu03 三枝貞晴家主屋 1階平面図 (S=1/200)



## Fu04 淡路栄家住宅

調査年月日：2003年8月4日

### ○特記事項

住所：牧丘町北原

築年：明治29年頃

桁行（間）：8.5

梁行（間）：4.5

屋根材料：茅葺、トタン

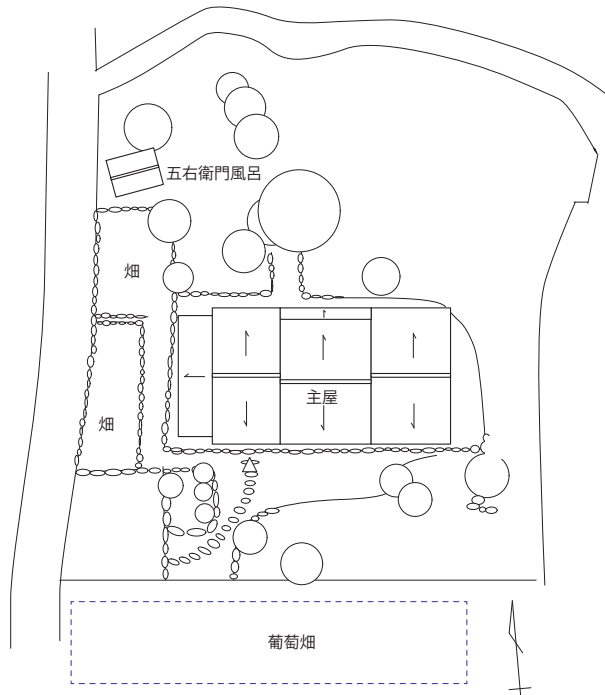
屋根形式：切妻

棟持柱配置：西●○○●○○○東

資料：家相図

### ○建築物の概要

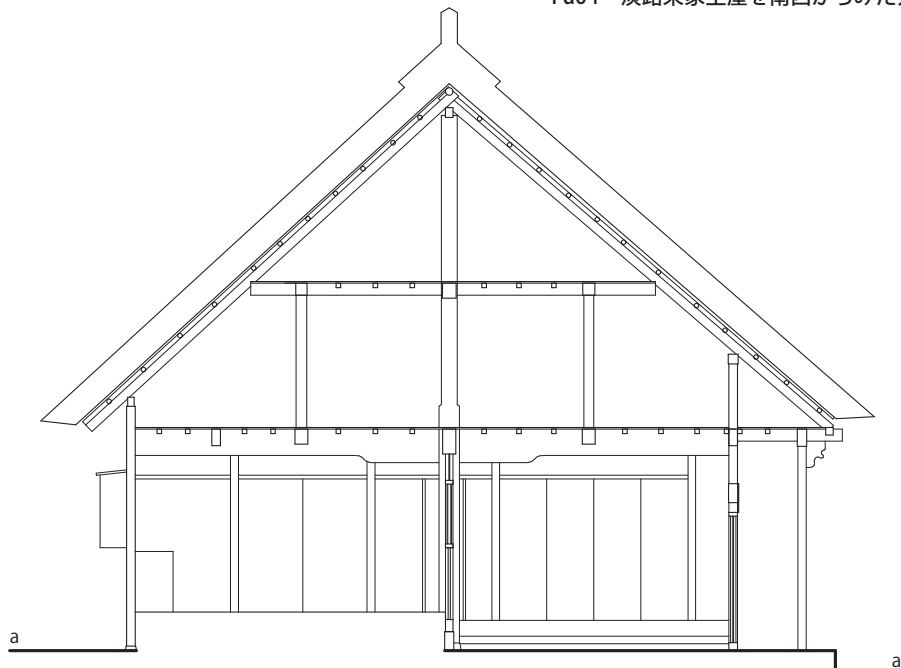
築年は、当時の図面の記述より明治29年である。以前まで住んでいた方が亡くなり、7年間空き家の後、数年前に淡路さんが購入された。すべてご自身で修理されている。構造は、大黒柱と西側妻面の柱が棟持柱構造になっている。ただ、荷重のためか大黒柱は2階のところで少し折れ曲がっている。間取りは六間取り構成で、柱筋が中心から北に3尺ずれている。北東には、他の部屋に比べ開口が少なく、閉鎖的なオサンベヤと呼ばれる部屋がある。ご主人の改修は、素人とは思えないほど手の込んだもので、柿渋を使うなど天然素材にもこだわりを持っている。現在の建物状態はかなり良好である。



Fu04 淡路栄家住宅 配置図 (S=1/600)



Fu04 淡路栄家主屋を南西からみた外観



Fu04 淡路栄家主屋 a-a' 断面図 (S=1/100)

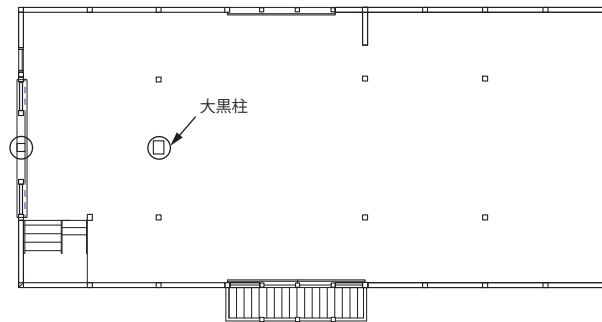




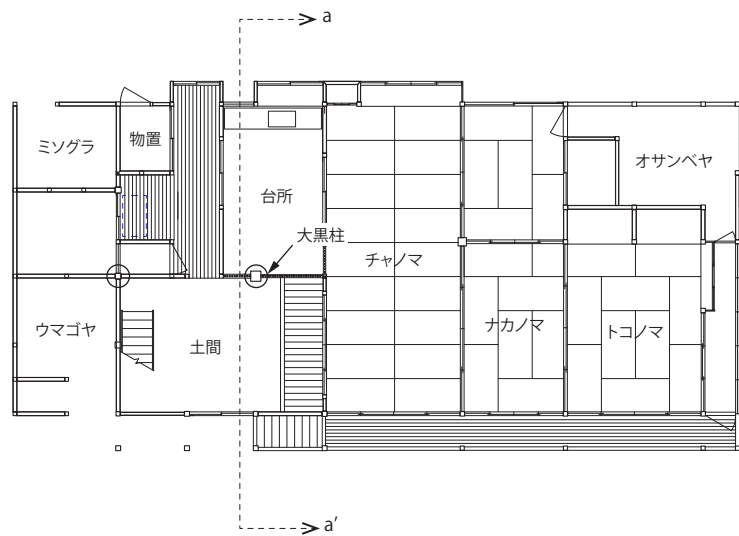
Fu04 淡路栄家主屋を南東からみた外観



Fu04 淡路栄家主屋の2階からみた大黒柱



Fu04 淡路栄家主屋 2階平面図 (S=1/200)



Fu04 淡路栄家主屋 1階平面図 (S=1/200)

## Fu05 古屋古福家住宅

調査年月日：2003年8月5日

### ○特記事項

住所：牧丘町北原

築年：不明

桁行（間）：8

梁行（間）：4

屋根材料：トタン葺

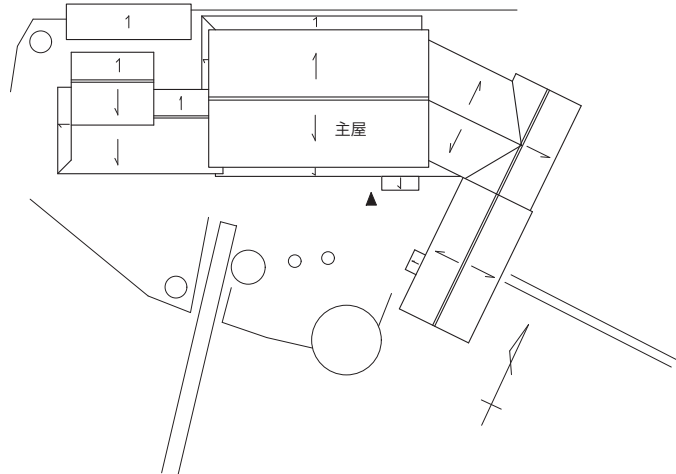
屋根形式：切妻

棟持柱配置：西●○○●●東

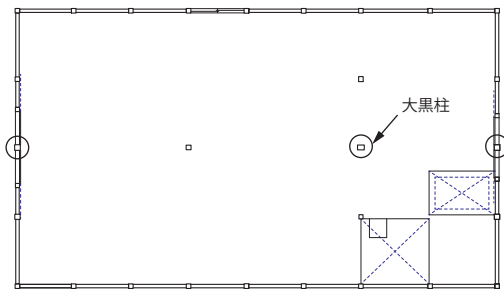
資料：特になし

### ○建築物の概要

昔のおじさんが建てたということだが、建築年代は定かではない。屋根の上に避雷針がついた、特徴ある民家である。両妻壁と大黒柱が棟持柱をなしている。おばあさんは通し柱と呼んでいた。しかし、この三本の柱はどれも、柱の上部が1尺ほど継いで棟木を支えていた。おばあさんの話によると、以前は麦殻屋根だったことから、屋根の改造の際に継いだものと考えられる。平面は、四間取りの田の字型平面で、総2階建てで屋根裏があるつくりになっている。



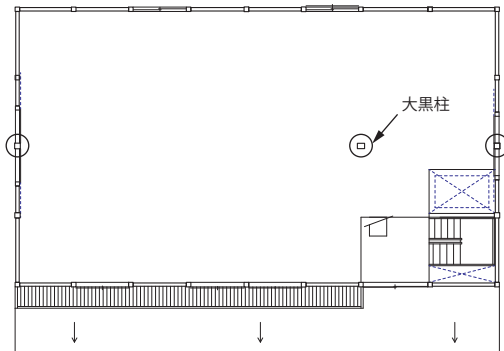
Fu05 古屋古福家住宅 配置図 (S=1/500)



Fu05 古屋古福家主屋 3階平面図 (S=1/200)



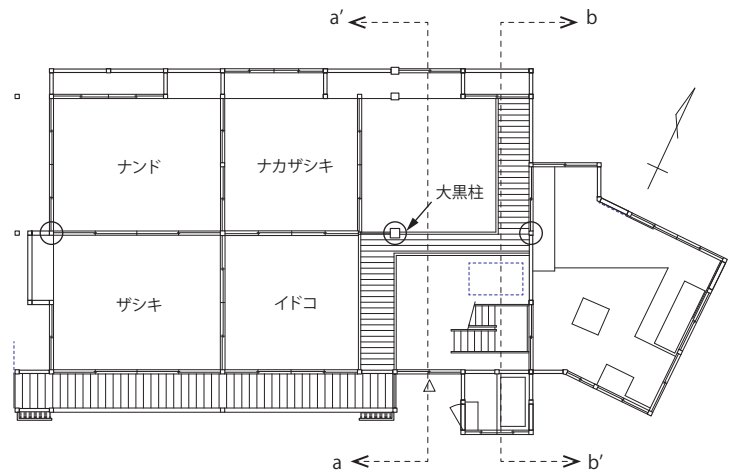
Fu05 古屋古福家主屋を東からみた外観



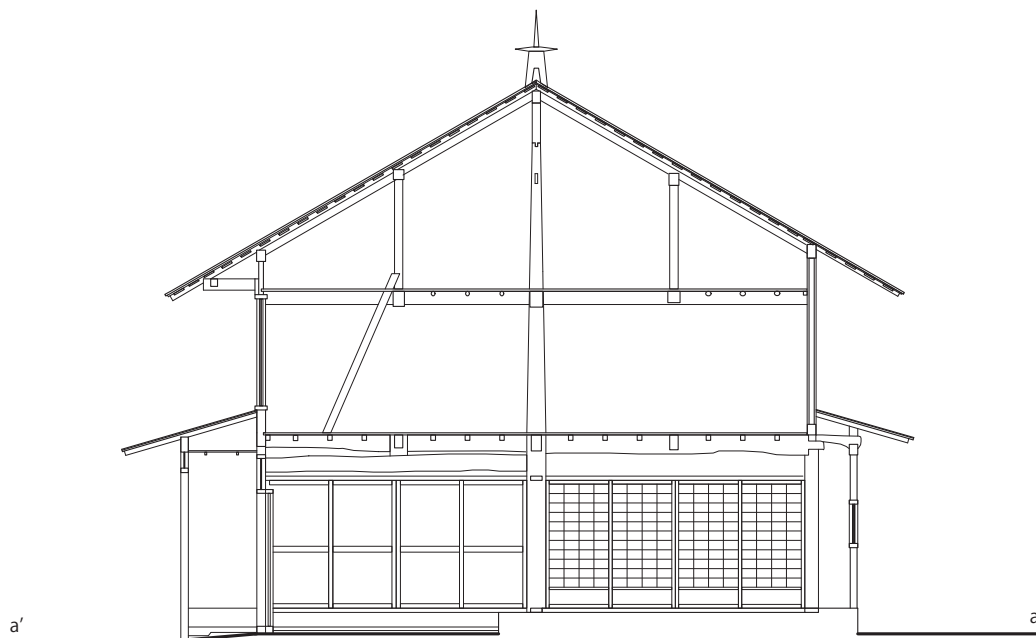
Fu05 古屋古福家主屋 2階平面図 (S=1/200)



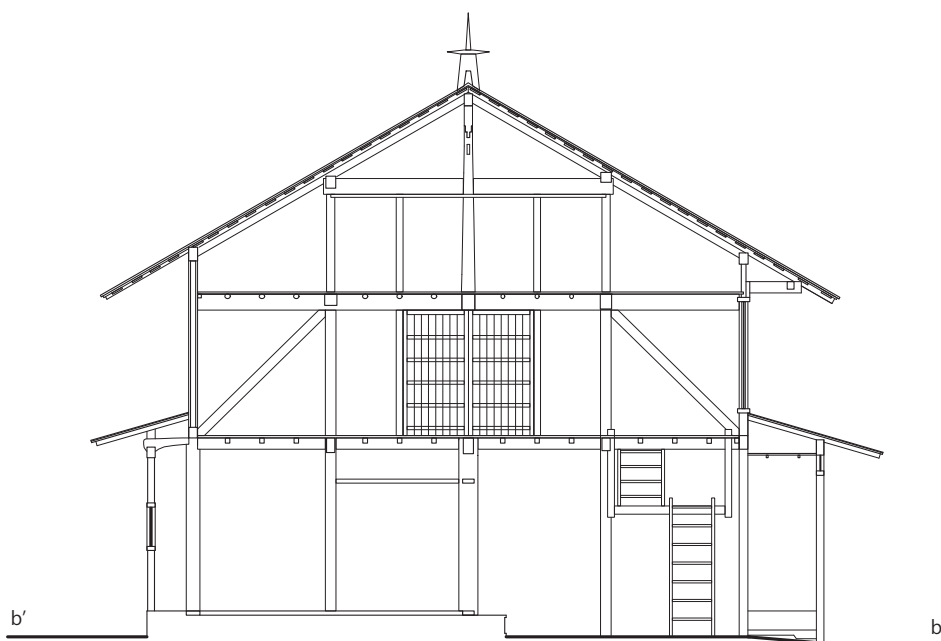
Fu05 古屋古福家主屋を南からみた外観



Fu05 古屋古福家主屋 1階平面図 (S=1/200)



Fu05 古屋古福家主屋 a-a' 断面图 (S=1/100)



Fu05 古屋古福家主屋 b-b' 断面图 (S=1/100)

## Fu06 古屋茂富家住宅

調査年月日：2003年9月19日

### ○特記事項

住所：牧丘町北原

築年：明治20年以前

桁行（間）：8

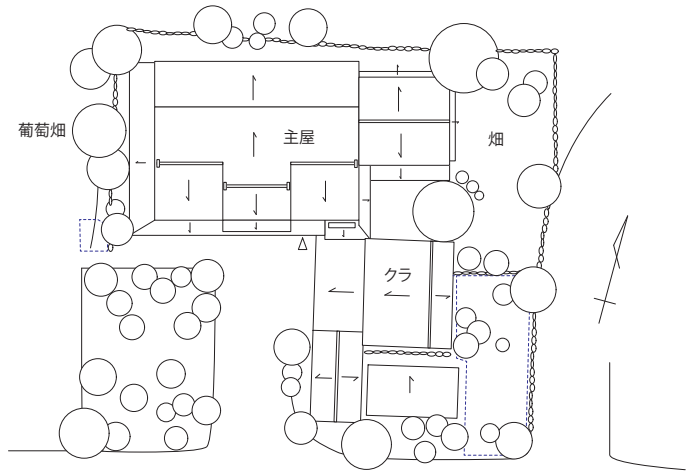
梁行（間）：4.5

屋根材料：茅葺

屋根形式：切妻

棟持柱配置：西●○○○●○○●東

資料：家相図（昭和2年、昭和28年）



### ○建築物の概要

建築年代は、明治20年以前という以外はわからない。構造は、両妻壁と大黒柱が棟持柱になっている。とくにご主人は、両妻壁の柱をウダツと呼んでいた。さらに、土間境の柱を大黒柱と呼び、イドコ・ザシキ境の柱を小黒柱と呼んで明確に区別していた。また、玄関には大戸が現在も残されている。屋根は、茅葺の上にトタンが覆われている。

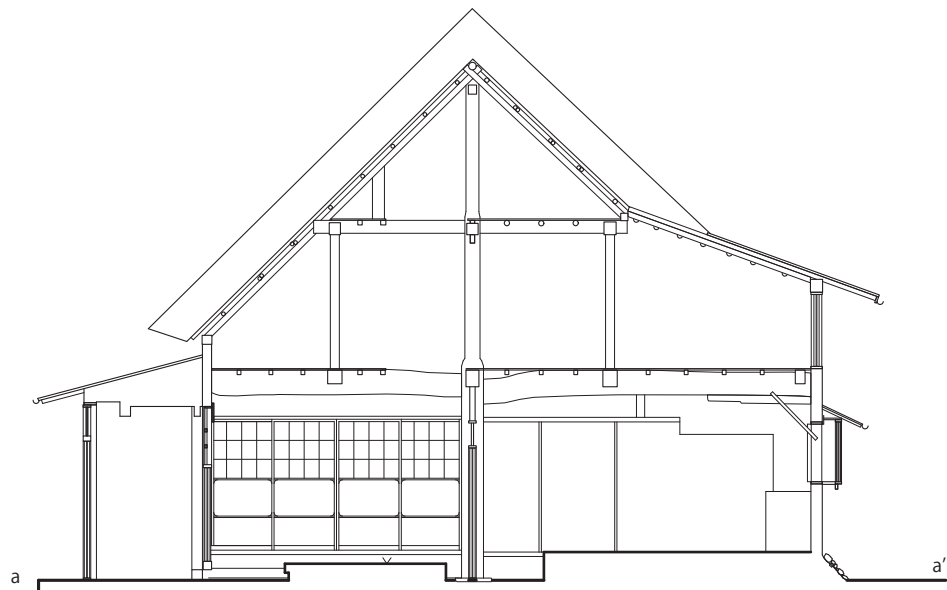
Fu06 古屋茂富家住宅 配置図 (S=1/600)



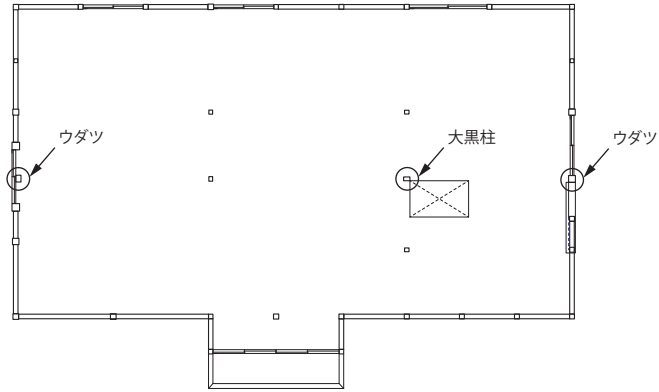
Fu06 古屋茂富家主屋の2階からみた大黒柱



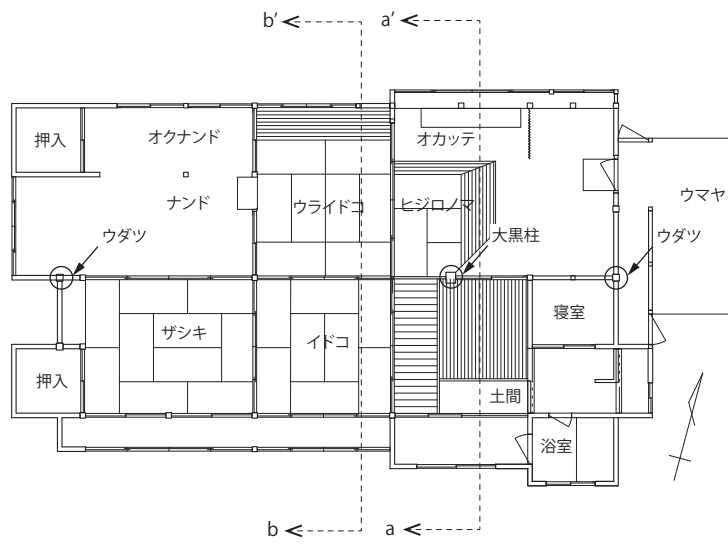
Fu06 古屋茂富家主屋を南からみた外観



Fu06 古屋茂富家主屋 a-a' 断面図 (S=1/100)



Fu06 古屋茂富家主屋 2階平面図 (S=1/200)



Fu06 古屋茂富家主屋 1階平面図 (S=1/200)



Fu06 古屋茂富家主屋 b-b'断面図 (S=1/100)

## Fu07 若宮八幡宮

調査年月日：2003年9月19日

### ○特記事項

住所：牧丘町北原

築年：不明

桁行（間）：3

梁行（間）：2

屋根材料：トタン葺

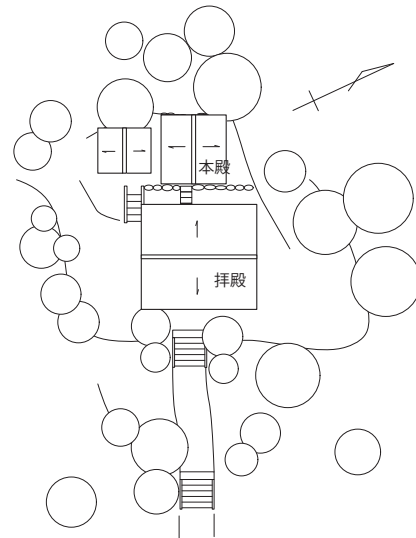
屋根形式：切妻

棟持柱配置：南●●北

資料：特になし

### ○建築物の概要

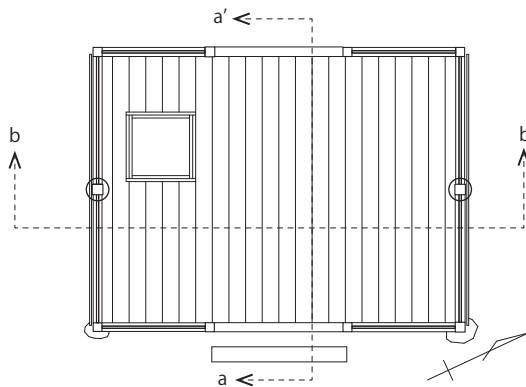
長い石段を登った小高い山の上の、とても神秘的な雰囲気の中にこの神社は位置している。石段の先に、拝殿、本殿が位置し、このうち拝殿が、妻壁に棟持柱をもつ棟持柱構造になっている。一見、柱の真ん中あたりで梁によって分離しているように見えるが、これは梁ではなく長押であり、棟持柱の上から長押がうたれている。平面は、2間×3間の空間があるのみの単純な構成であり、一方の角にはいりりのようなものがある。こういった棟持柱構造の拝殿は非常に珍しく、きわめて貴重な建築遺構と考えられる。



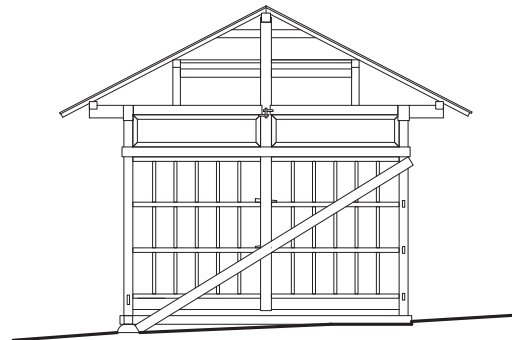
Fu07 若宮八幡宮 配置図 (S=1/400)



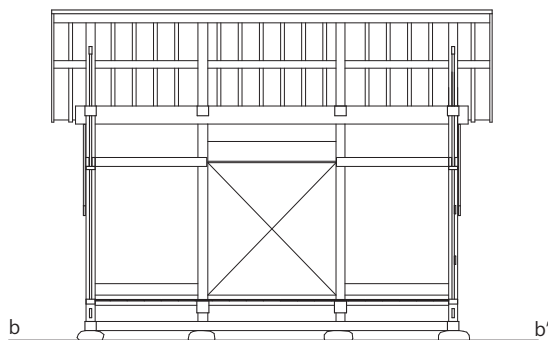
Fu07 若宮八幡宮拝殿を東からみた外観



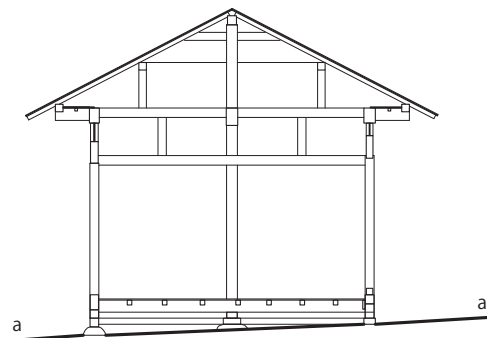
Fu07 若宮八幡宮拝殿 平面図 (S=1/100)



Fu07 若宮八幡宮拝殿 北立面図 (S=1/100)



Fu07 若宮八幡宮拝殿 b-b' 断面図 (S=1/100)



Fu07 若宮八幡宮拝殿 a-a' 断面図 (S=1/100)



## Fu08a 佐藤一郎家住宅

調査年月日：2003年9月12日

### ○特記事項

住所：牧丘町牧平

築年：不明

桁行（間）：9

梁行（間）：4.5

屋根材料：茅葺、トタン

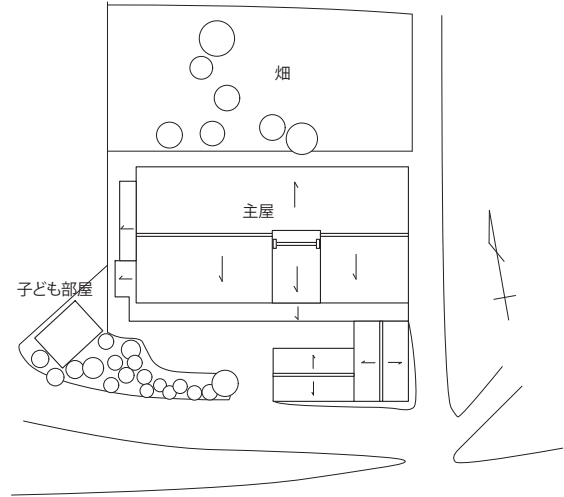
屋根形式：切妻

棟持柱配置：西●○○○●○○○●東

資料：特になし

### ○建築物の概要

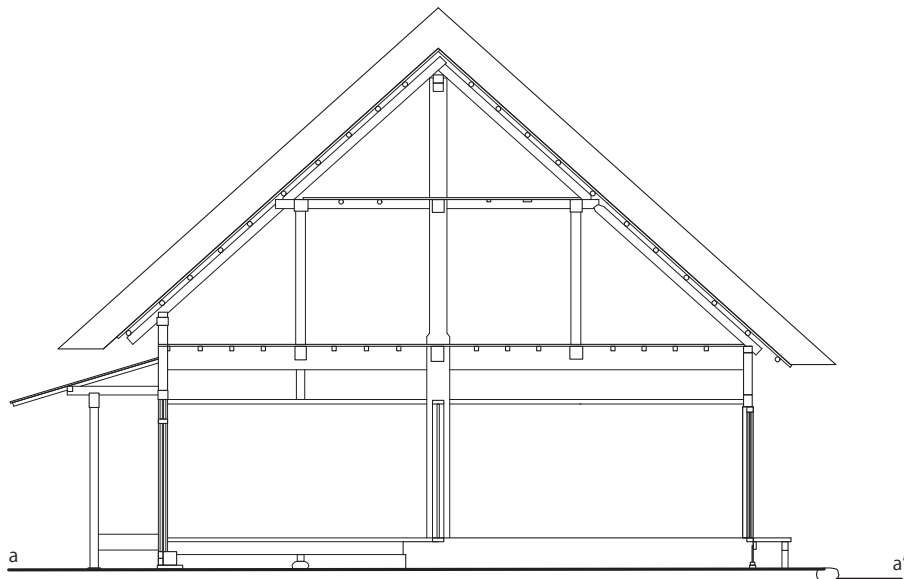
建築年代は不明。三本の棟持柱がこの家を支える。ヒアリングでご主人は、両側の柱をウダツ、中心の棟持柱を大黒柱と呼んでいた。特に、大黒柱がこの家を支える中心的な存在であったことを強調されていた。また、大黒柱に差し込まれている梁をウシと呼び、大地震の時などでは、大黒柱を中心にウシがコウモリを畳んだようになり、大黒柱の傍にいる人は助かるという。このヒアリングはすこぶる興味深い。この辺りでは、大黒柱はケヤキを使うようだが、この家では栗を使用している。平面は、棟通りを境に明確に区分された構成である。



Fu08 佐藤一郎家住宅 配置図 (S=1/500)



Fu08 佐藤一郎主屋を南からみた外観



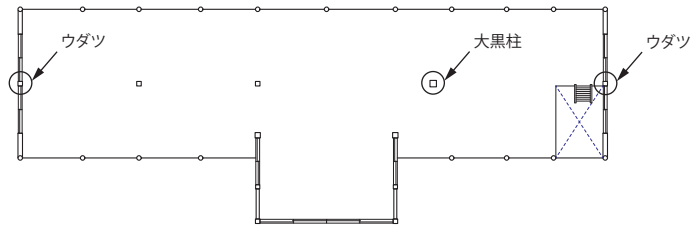
Fu08 佐藤一郎家主屋 a-a' 断面図 (S=1/100)



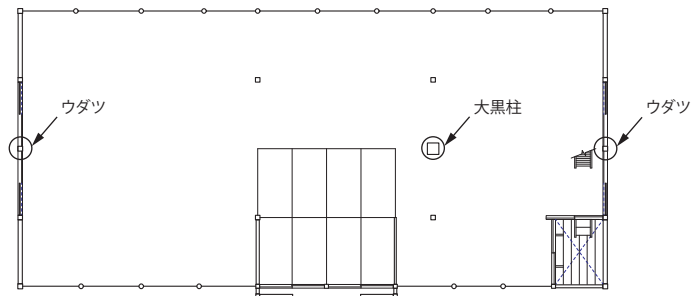
Fu08 佐藤一郎家主屋イドコから西をみた内観



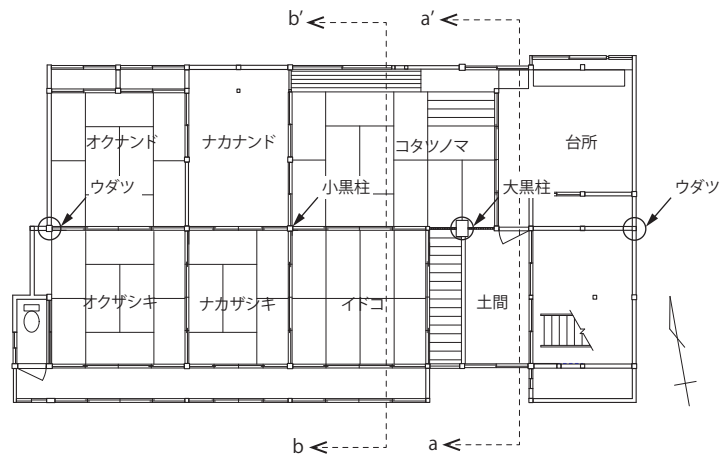
Fu08 佐藤一郎家主屋を東からみた外観



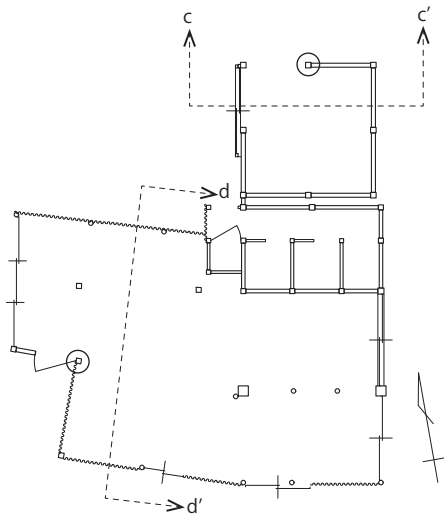
Fu08 佐藤一郎家主屋 3階平面図 (S=1/200)



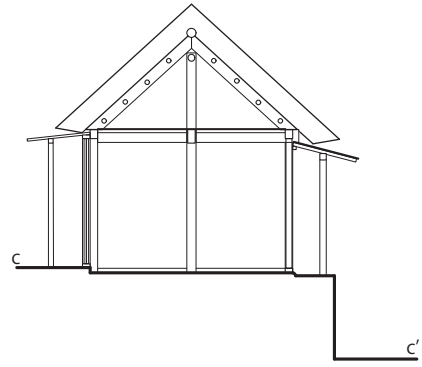
Fu08 佐藤一郎家主屋 2階平面図 (S=1/200)



Fu08 佐藤一郎家主屋 1階平面図 (S=1/200)



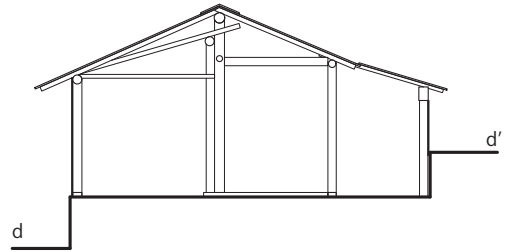
Fu08 佐藤一郎家便所・物置小屋 平面図 (S=1/150)



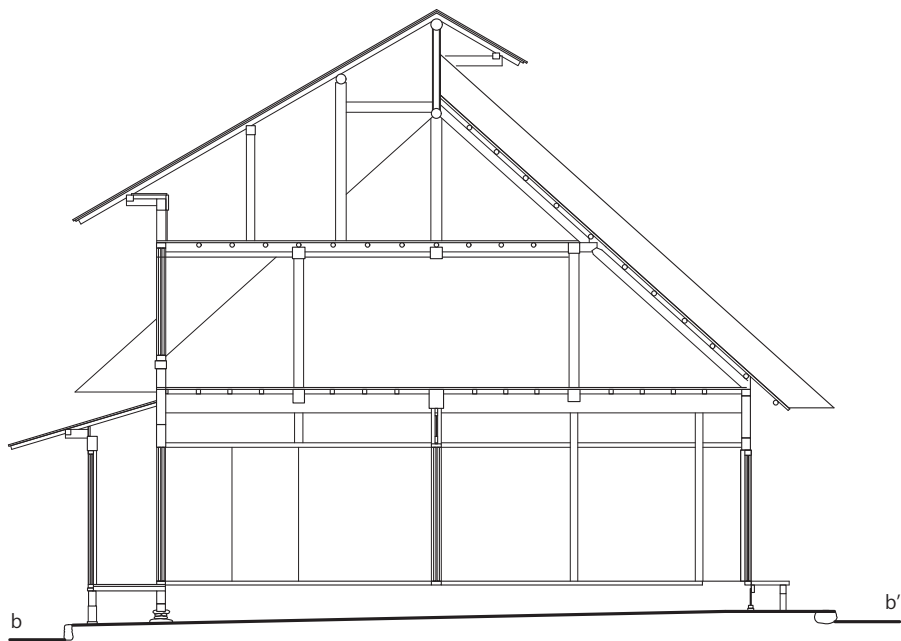
Fu08 佐藤一郎家便所 c-c' 断面図 (S=1/100)



Fu08 佐藤一郎家物置を西からみた外観



Fu08 佐藤一郎家物置小屋 d-d' 断面図 (S=1/100)



Fu08 佐藤一郎家主屋 b-b' 断面図 (S=1/100)

## Fu09 戸田真二家住宅

調査年月日：2003年10月25日

### ○特記事項

住所：牧丘町西保中

築年：不明

桁行（間）：8

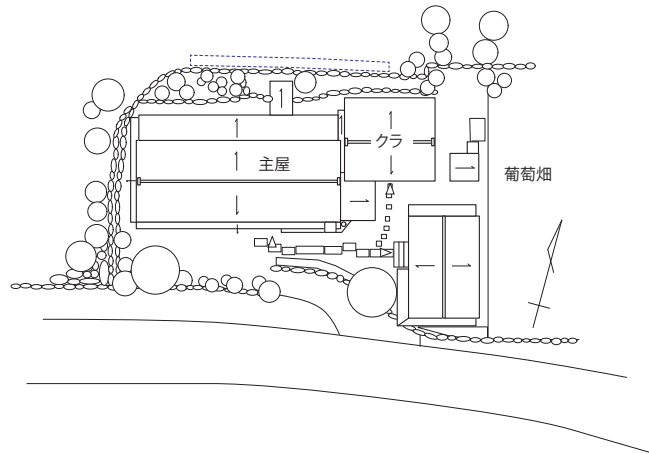
梁行（間）：4

屋根材料：茅葺、トタン

屋根形式：切妻

棟持柱配置：西○○○○○○○○東

資料：特になし



Fu09 戸田真二家住宅 配置図 (S=1/600)

### ○建築物の概要

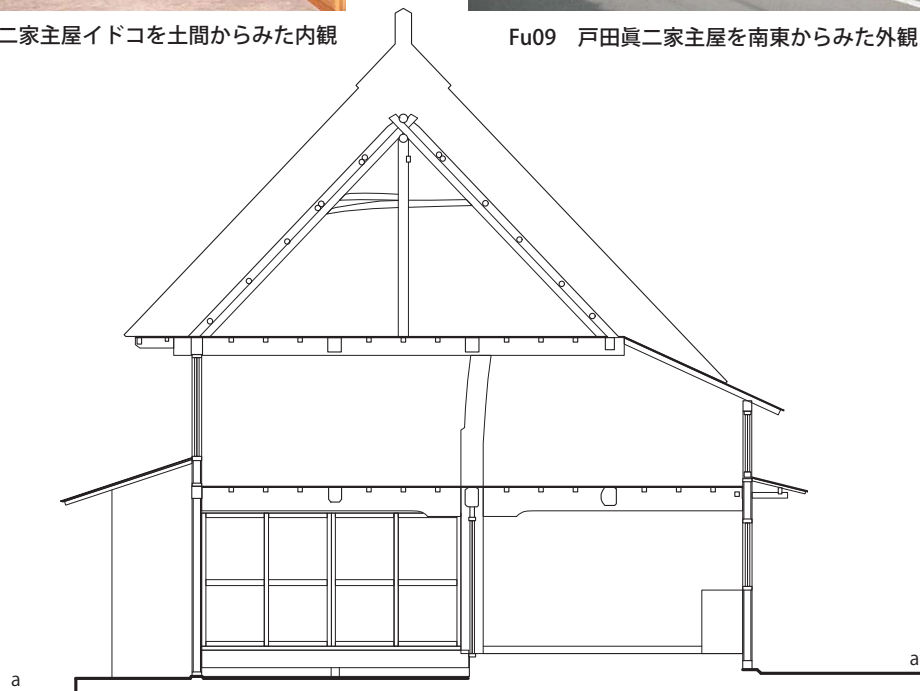
建築年代は不明。棟通りを境とした、明確な六間取り構成の建物である。しかし、現在この建物は棟持柱構造ではない。ただ、北側の面積を大きく拡張するなど、何回か改修がされていることから、改築の際上部を切断された可能性も考えられるが、年代等も含め具体的なことは明らかでない。



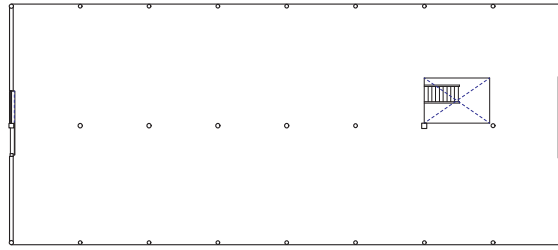
Fu09 戸田真二家主屋イドコを土間からみた内観



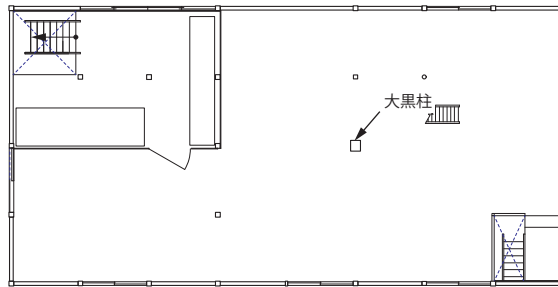
Fu09 戸田真二家主屋を南東からみた外観



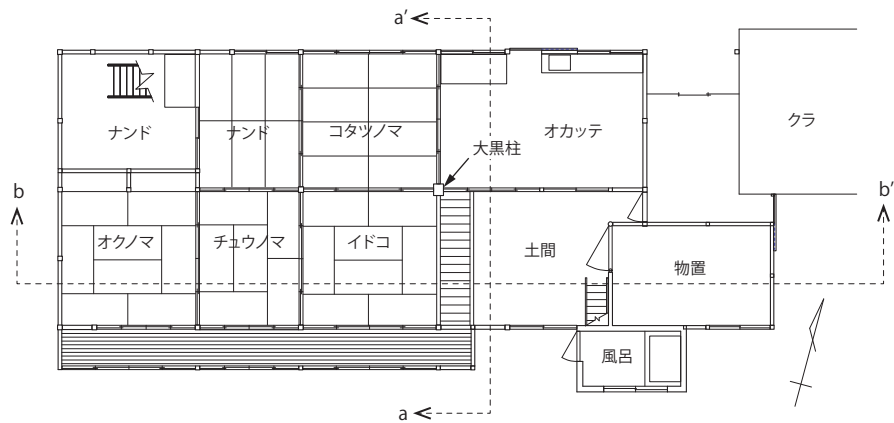
Fu09 戸田真二家主屋 a-a'断面図 (S=1/100)



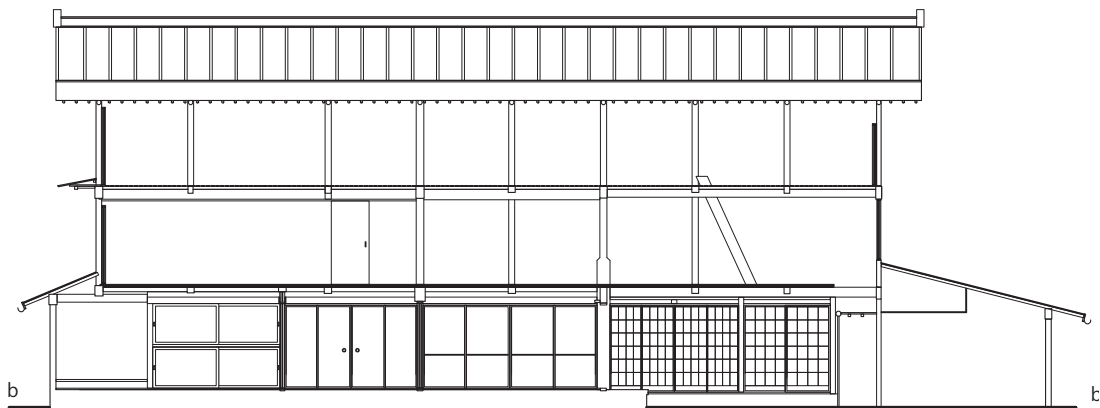
Fu09 戸田真二家主屋 3階平面図 (S=1/200)



Fu09 戸田真二家主屋 2階平面図 (S=1/200)



Fu09 戸田真二家主屋 1階平面図 (S=1/200)



Fu09 戸田真二家主屋 b-b'断面図 (S=1/150)

## Fu10 戸田政守家住宅

調査年月日：2003年8月19日

### ○特記事項

住所：牧丘町西保中

築年：1700年頃

桁行（間）：8

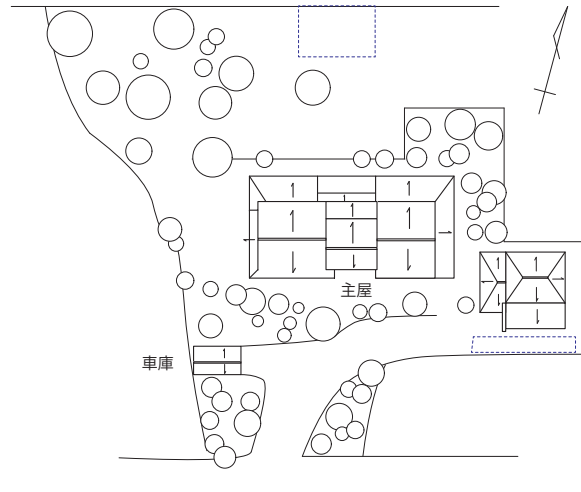
梁行（間）：4

屋根材料：茅葺、トタン

屋根形式：切妻

棟持柱配置：西●○○○●●東

資料：特になし



Fu10 戸田政守家住宅 配置図 (S=1/800)

### ○建築物の概要

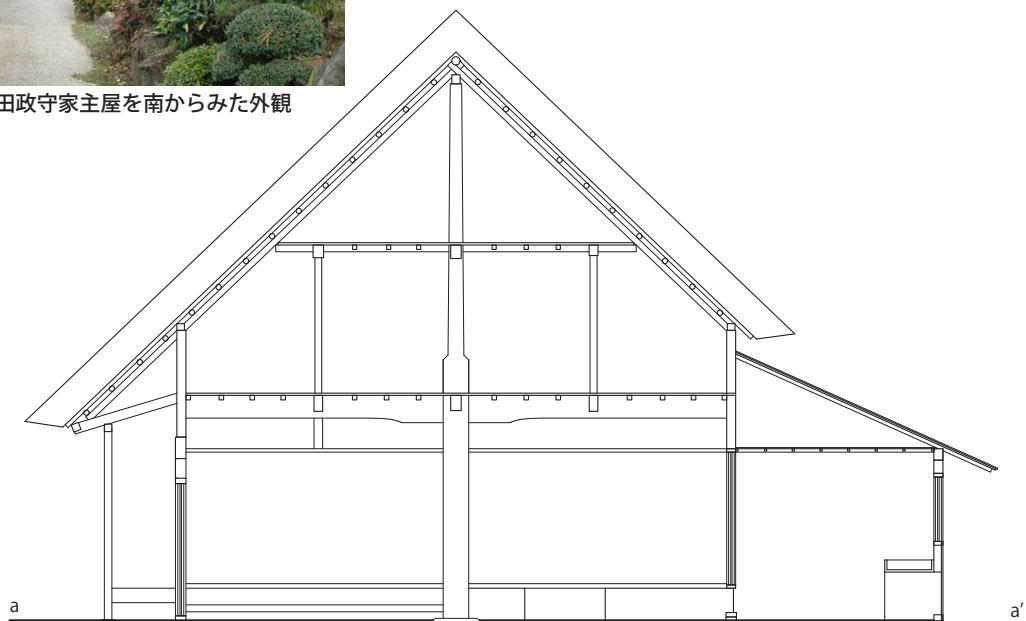
今から300年ほど前の建築である。昔、この辺では3軒くらいしか家がなく、この家は当初からあった3軒のうちの1軒とされる。昔から農家ではあったが、分役所という地域の中心的な役割もはたしており、ナカノマの前にある一段下がった縁側が、当時そこから役人たちが出入りした名残だという。構造は、3本の棟持柱がこの家を支える六間取り構成の民家で、分役所をやっていたことから、ザシキ、チュウノマ、オクザシキと全体的に客間が多い。現在では、物置としてあるだけで住んではいなく、昔ながらの姿を今もとどめている。



Fu10 戸田政守家主屋を南からみた外観

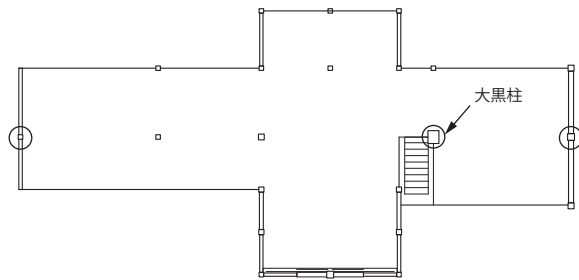


Fu10 戸田政守家主屋を南東からみた外観

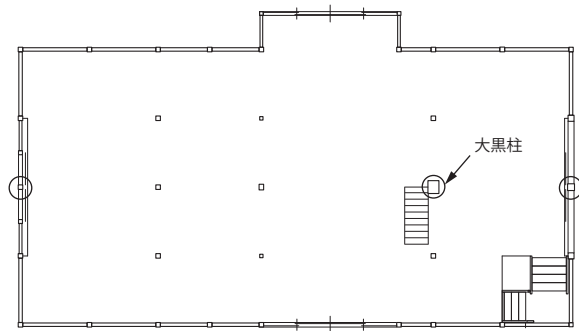


Fu10 戸田政守家主屋 a-a' 断面図 (S=1/100)

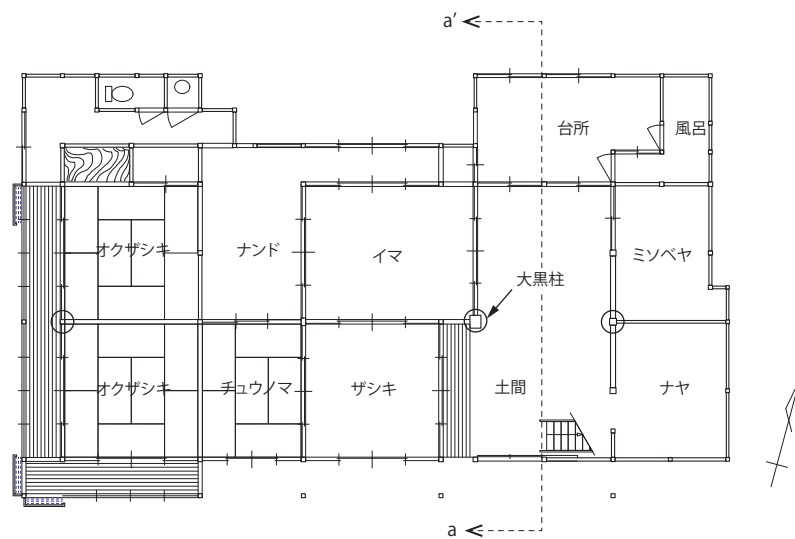




Fu10 戸田政守家主屋 3階平面図 (S=1/200)



Fu10 戸田政守家主屋 2階平面図 (S=1/200)



Fu10 戸田政守家主屋 1階平面図 (S=1/200)

## Fu11 奥山朝則家住宅

調査年月日：2003年9月2日

### ○特記事項

住所：牧丘町西保中

築年：不明

桁行（間）：8.5

梁行（間）：4.25

屋根材料：茅葺、トタン

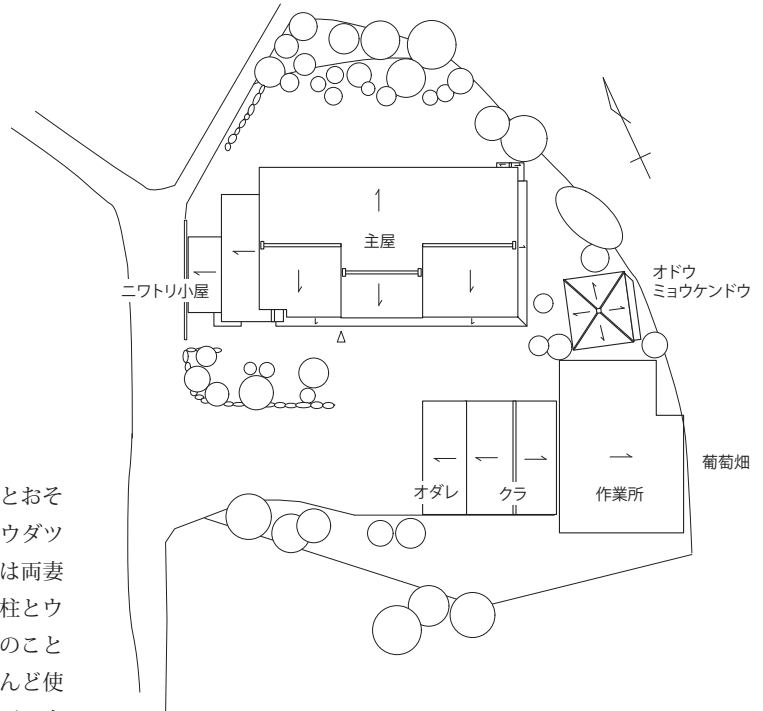
屋根形式：切妻

棟持柱配置：西●○○○●○○○●東

資料：特になし

### ○建築物の概要

建築年代はよく分からないが、ヒアリングによるとおそらく150年以上前だという。そして、ここでもまたウダツに関する証言をえた。ご主人の話によると、ウダツは両妻壁の棟持柱を指していて、内部の棟持柱である大黒柱とウダツをしっかりと区別している。他の地方でいう壁のことではなく、柱のことだという。ただ、現在ではほとんど使われていないし、ご主人は何かある時は使うらしいが、奥さんは全然知らなかった。屋根は、以前藁葺だったという。何回かの改造はあるが、家の構成を大きく変えるような改造はない。



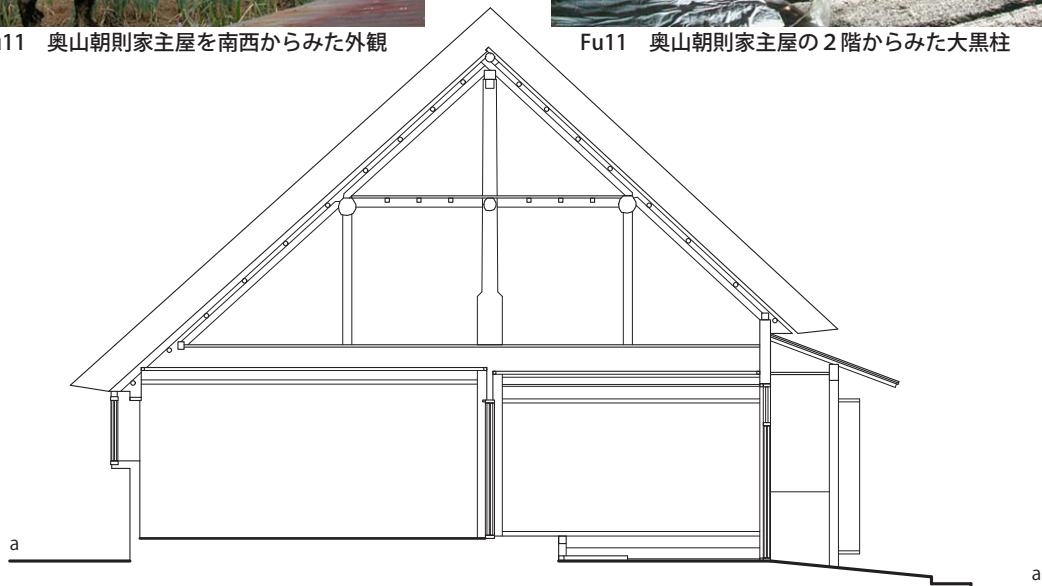
Fu11 奥山朝則家住宅 配置図 (S=1/500)



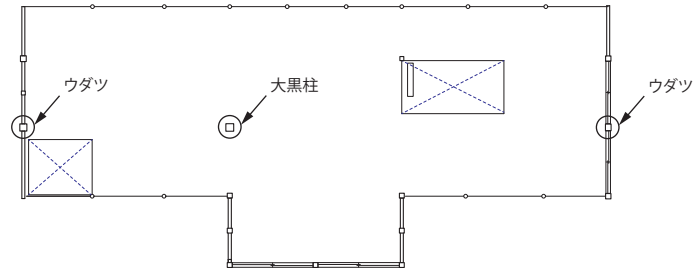
Fu11 奥山朝則家主屋を南西からみた外観



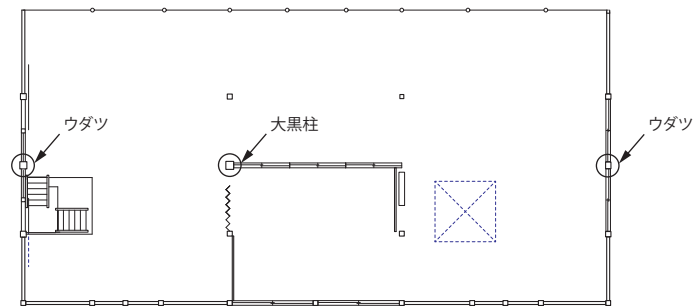
Fu11 奥山朝則家主屋の2階からみた大黒柱



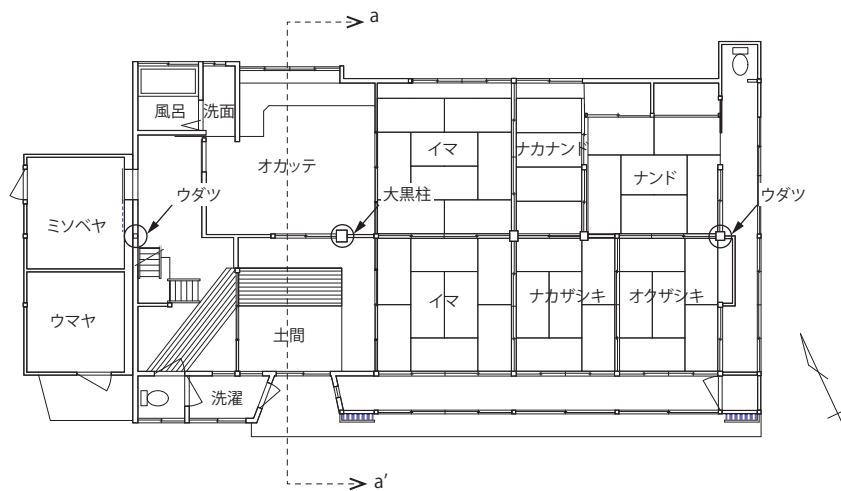
Fu11 奥山朝則家主屋 a-a' 断面図 (S=1/100)



Fu11 奥山朝則家主屋 3階平面図 (S=1/200)



Fu11 奥山朝則家主屋 2階平面図 (S=1/200)



Fu11 奥山朝則家主屋 1階平面図 (S=1/200)

## Fu12 戸田千恵子家住宅

調査年月日：2003年10月25日

### ○特記事項

住所：牧丘町西保中

築年：不明

桁行（間）：2

梁行（間）：2

屋根材料：トタン葺

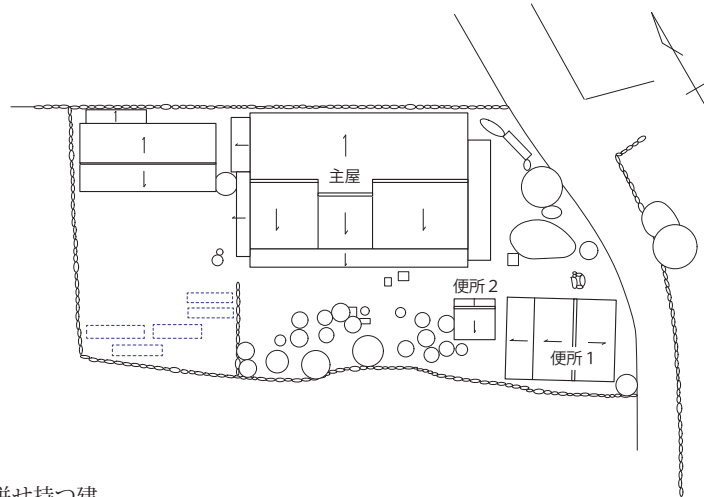
屋根形式：切妻

棟持柱配置：南○●北

資料：特になし

### ○建築物の概要

建築年代は不明。便所1は、物置きの機能を併せ持つ建物である。屋根は切妻をなし、一方の妻壁が棟持柱構造の土台敷きで、もう一方の妻壁が軸部と小屋組が分離した構造で礎石建てとなっている。便所2は、ほぼ片流れに近い建造物である。便所1・便所2ともに現在も使用されているものである。



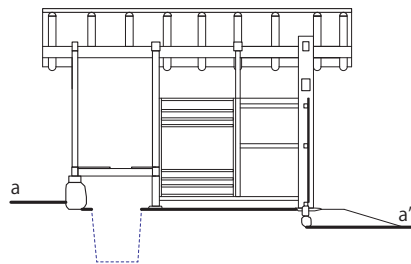
Fu12 戸田千恵子家住宅 配置図 (S=1/500)



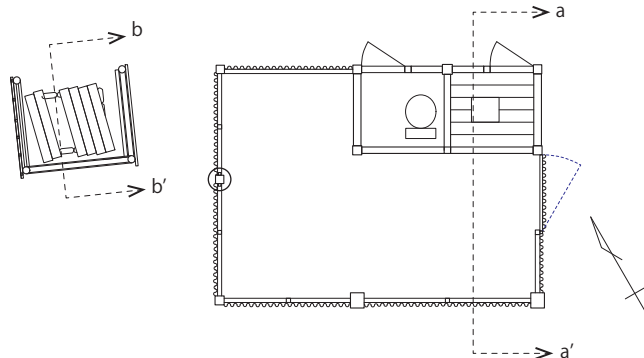
Fu12 戸田千恵子家便所を東からみた外観



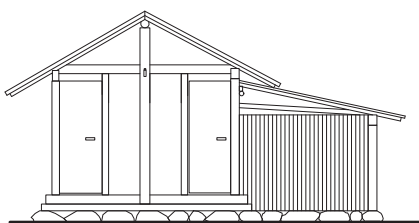
Fu12 戸田千恵子家便所を南からみた外観



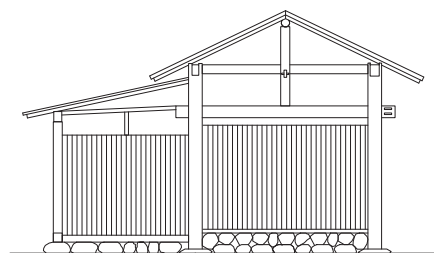
Fu12 戸田千恵子家便所1 a-a'断面図 (S=1/100)



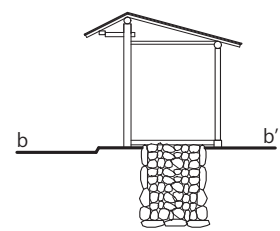
Fu12 戸田千恵子家便所 平面図 (S=1/100)



Fu12 戸田千恵子家便所1  
北面図 (S=1/100)



Fu12 戸田千恵子家便所1  
南面図 (S=1/100)



Fu12 戸田千恵子家便所2  
b-b'断面図 (S=1/100)

## Fu13 今井秀郎家住宅

調査年月日：2003年9月20日

### ○特記事項

住所：牧丘町西保中

築年：不明

桁行（間）：8.5

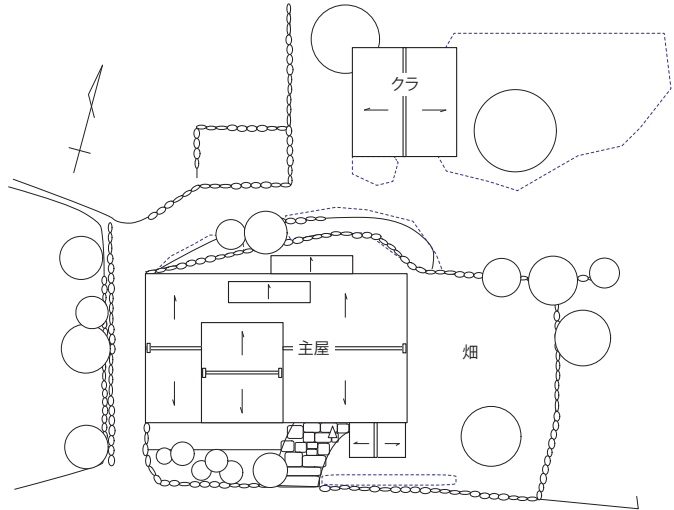
梁行（間）：4

屋根材料：茅葺、トタン

屋根形式：切妻

棟持柱配置：西●○○○●●●東

資料：特になし



### ○建築物の概要

現在お住まいになっているのは、今井さんであるが、黒沢さんという方からの借家である。また、黒沢さん自身もこの家を借りており、現在この持ち主は、もともとの持ち主からこの家を購入された、川崎に住んでいる方だという。そんな複雑な経緯もあって、建築年代は不明である。その一方で、建物そのものは、あまり大きな改修の跡もなく、建築当初の趣を今に伝えている。なお、両妻壁の柱と大黒柱が棟持柱になっている。

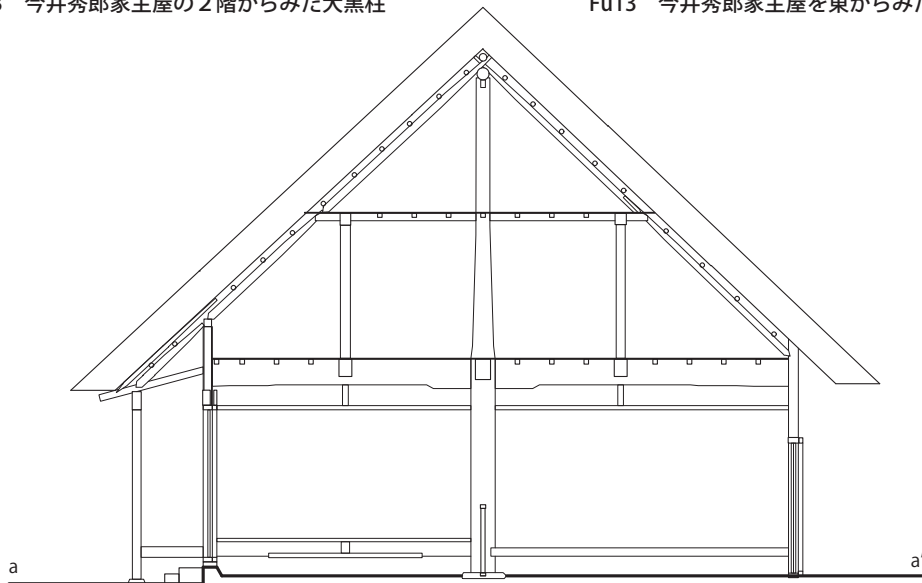
Fu13 今井秀郎家主屋 配置図 (S=1/500)



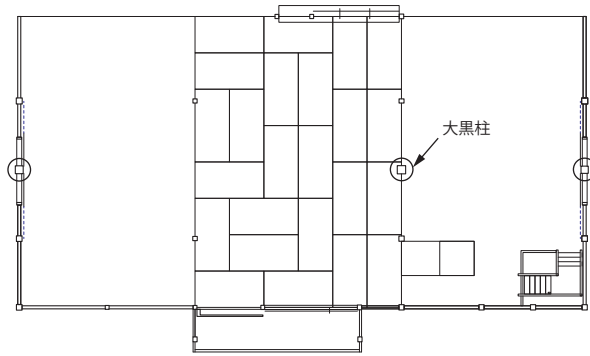
Fu13 今井秀郎家主屋の2階からみた大黒柱



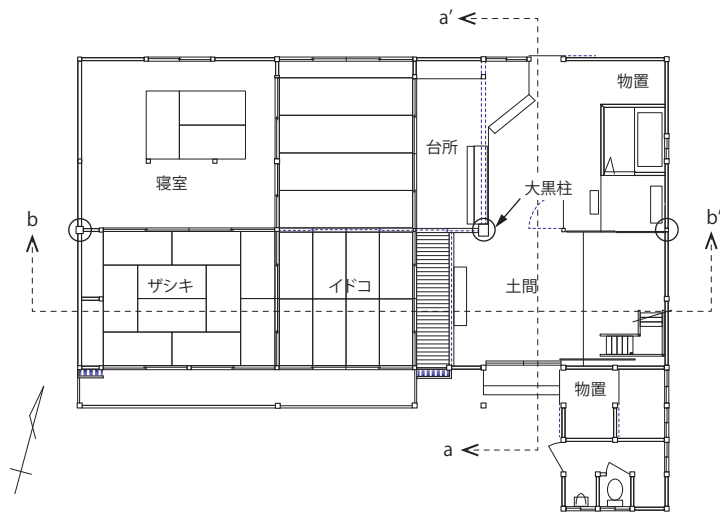
Fu13 今井秀郎家主屋を東からみた外観



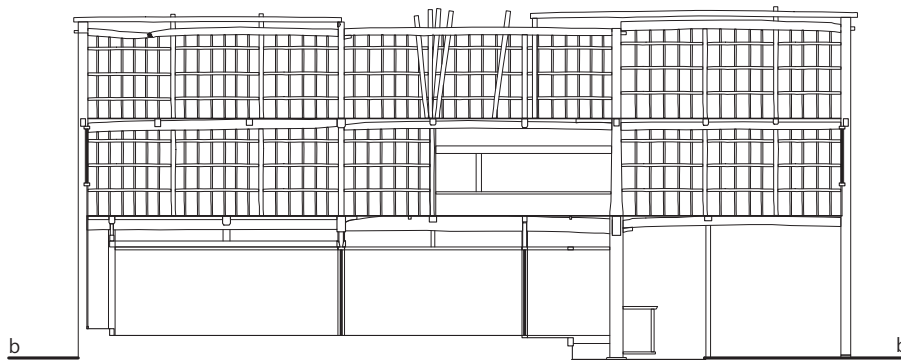
Fu13 今井秀郎家主屋 a-a' 面図 (S=1/100)



Fu13 今井秀郎家主屋 2階平面図 (S=1/200)



Fu13 今井秀郎家主屋 1階平面図 (S=1/200)



Fu13 今井秀郎家主屋 b-b'面図 (S=1/150)



## Fu14 直売所

調査年月日：2003年8月7日

### ○特記事項

住所：牧丘町西保中

築年：平成11年頃

桁行（間）：3

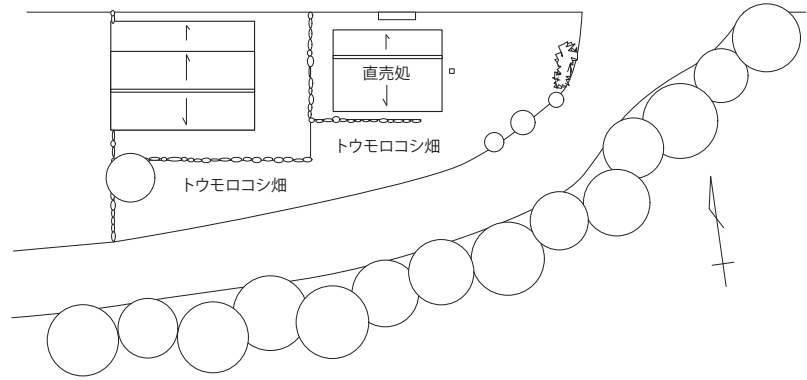
梁行（間）：2

屋根材料：トタン葺

屋根形式：切妻

棟持柱配置：西●●●東

資料：特になし



Fu14 直売所 配置図 (S=1/500)

### ○建築物の概要

奥山国良氏所有の建築物である。平成11年頃に、ご主人と大工さんが建てた。材料は、薪用に部落の山から持ってきた丸柱や、近くの牧丘第三小学校が廃校になった際にもらってきた廃材などを用いている。棟通りの柱3本すべてが棟持柱となった建物である。柱の脚部は、掘立のようにみえるが、地中に埋められたコンクリートに緊結されており、見た目以上に手の込んだ作りとなっている。



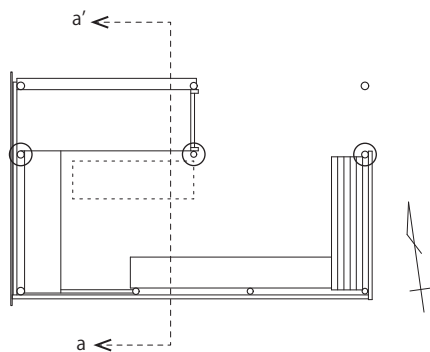
Fu14 直売所を西からみた外観



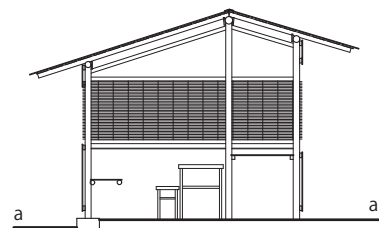
Fu14 直売所 棟持柱と棟木の接合部



Fu14 直売所を北東からみた外観



Fu14 直売所 平面図 (S=1/100)



Fu14 直売所 a-a' 断面図 (S=1/100)

## Fu15 小田切幹雄家住宅

調査年月日：2003年8月5日

### ○特記事項

住所：牧丘町西保下小田野

築年：不明

桁行（間）：8

梁行（間）：4.5

屋根材料：茅葺、トタン

屋根形式：切妻

棟持柱配置：西●○○●○○●東

資料：特になし

### ○建築物の概要

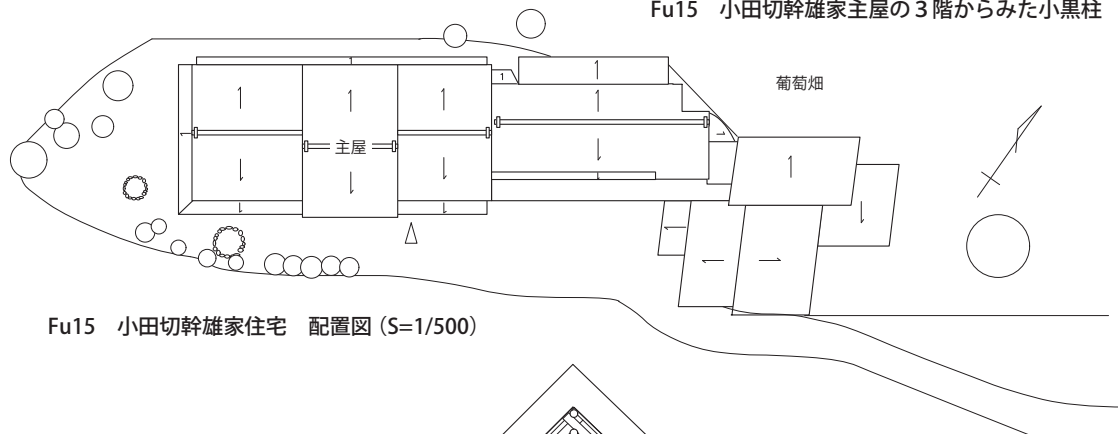
小田切氏宅は、地区内で本家にあたる旧家である。建築年代は、今から約150年ほど前であるが、100年ほど前に一度火事にあい、そのとき、現在地へ移築してきたとされる。棟通りの柱のうち、大黒柱、中黒柱、両妻壁の柱の計4本が棟持柱になっている。現在、主屋に隣接して、息子夫婦の住宅が建てられている。漆喰のような真っ白な外壁は、漆喰ではなく、土壁の上に白いトタンをかぶせたものである。



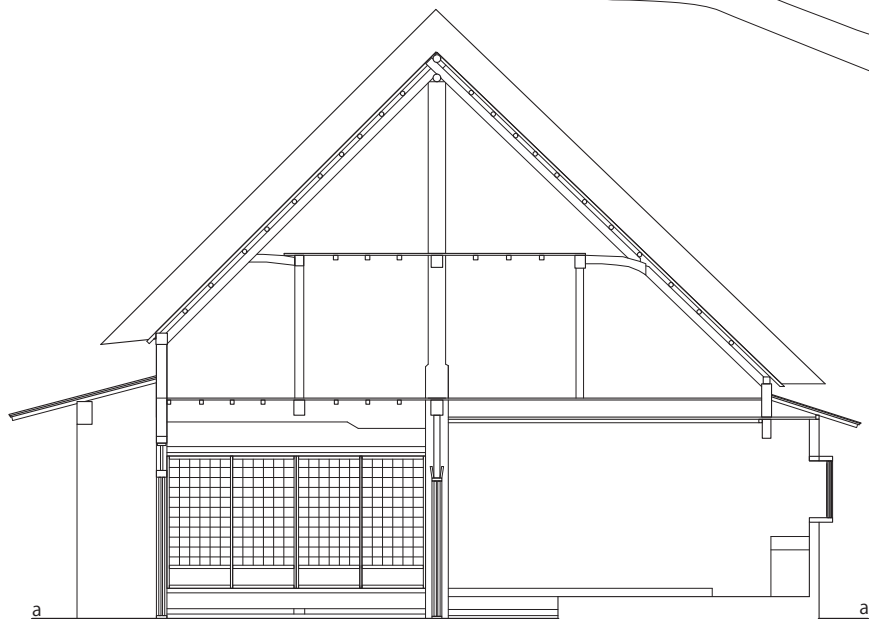
Fu15 小田切幹雄家主屋を東からみた外観



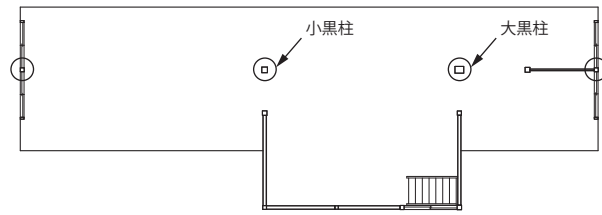
Fu15 小田切幹雄家主屋の3階からみた小黒柱



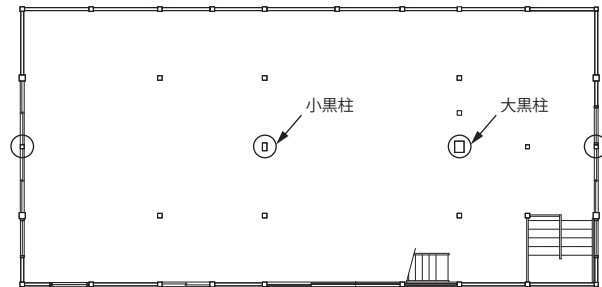
Fu15 小田切幹雄家住宅 配置図 (S=1/500)



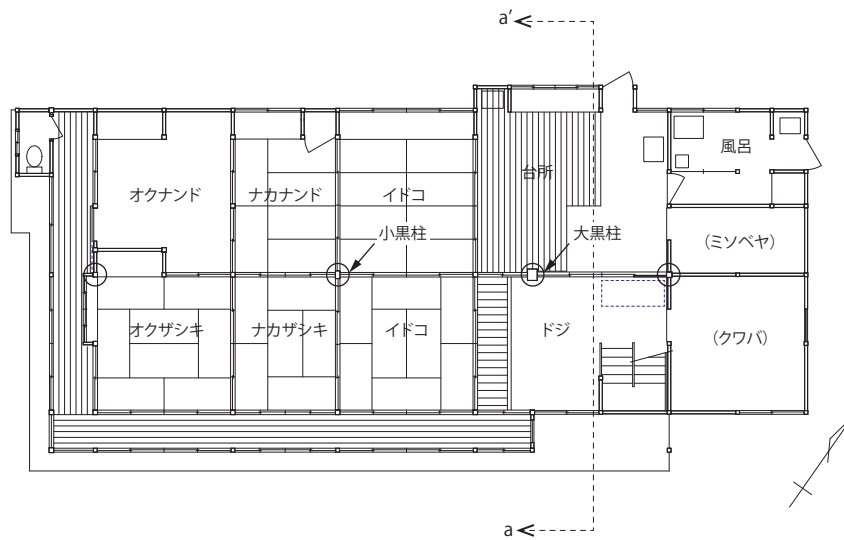
Fu15 小田切幹雄家主屋 a-a' 面図 (S=1/100)



Fu15 小田切幹雄家主屋 3階平面図 (S=1/200)



Fu15 小田切幹雄家主屋 2階平面図 (S=1/200)



Fu15 小田切幹雄家主屋 1階平面図 (S=1/200)

## Fu16 高原左門家住宅

調査年月日：2003年9月2日

### ○特記事項

住所：牧丘町西保下小田野

築年：不明

桁行（間）：9

梁行（間）：4.5

屋根材料：茅葺、トタン

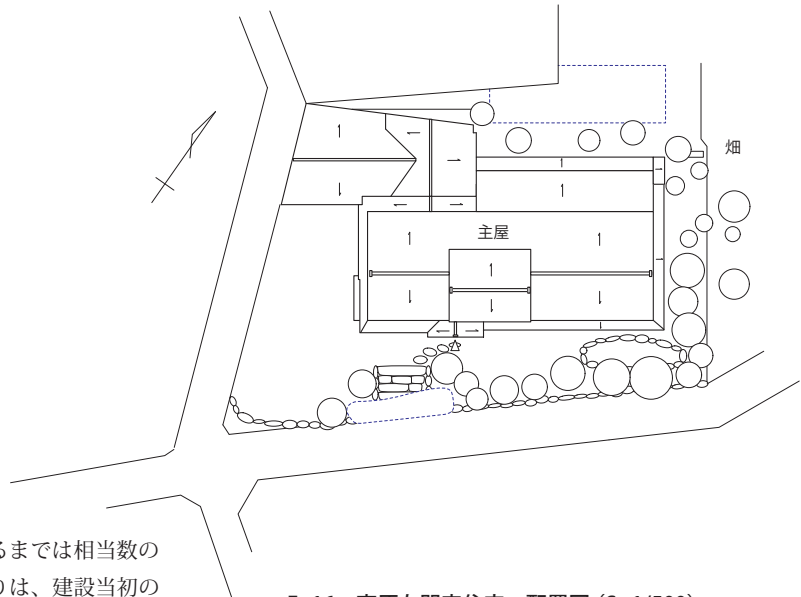
屋根形式：切妻

棟持柱配置：西●○●○○○○○●東

資料：特になし

### ○建築物の概要

代々地主の家系で、農地解放が行われるまでは相当数の土地を所有していたとされる。座敷まわりは、建設当初の姿を見せるものの、一階のかつて土間であった部分については、大きな改造が行われて部屋が設けられている。両妻壁および大黒柱が棟持柱をなす構造である。ケブダシと呼ばれる突き上げ部分は、養蚕のための明かり取りという目的以外に、お盆や節分などの行事においても積極的に利用されていたという。屋根は、一見瓦葺きのように見えるが、瓦の形を模したトタン葺きである。



Fu16 高原左門家住宅 配置図 (S=1/500)



Fu16 高原左門家主屋を南からみた外観



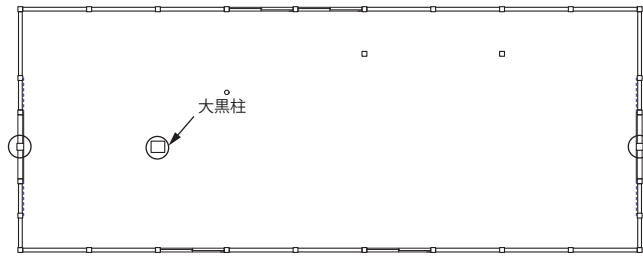
Fu16 高原左門家主屋 a-a' 断面図 (S=1/100)



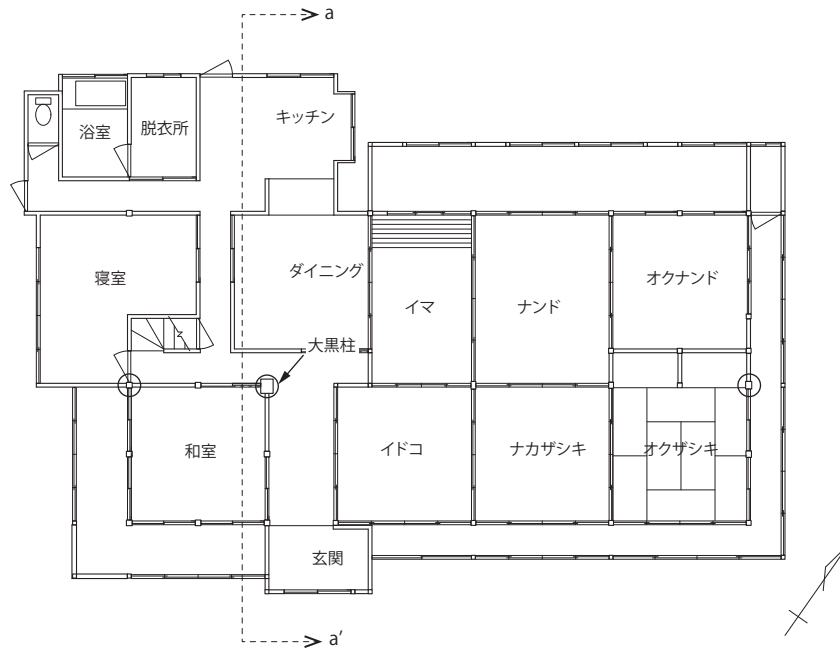
Fu16 高原左門家主屋の2階からみた大黒柱



Fu16 高原左門家主屋を西からみた外観



Fu16 高原左門家主屋 1階平面図 (S=1/200)



Fu16 高原左門家主屋 1階平面図 (S=1/200)



## Fu17 山下政英家住宅

調査年月日：2003年9月12日

### ○特記事項

住所：牧丘町牧平

築年：不明

桁行（間）：9

梁行（間）：4.5

屋根材料：茅葺、トタン

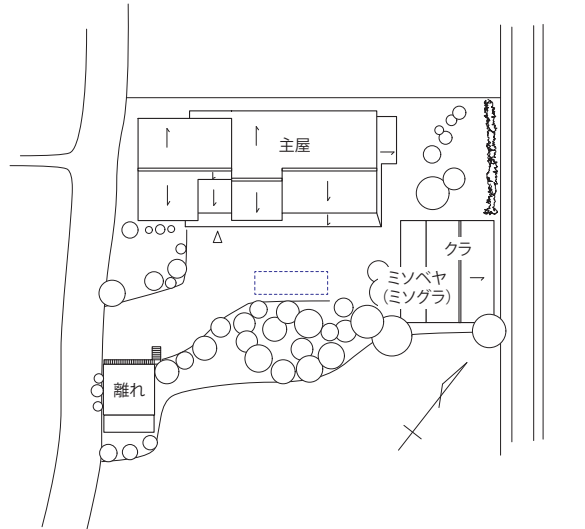
屋根形式：切妻

棟持柱配置：西●○○○●○○○●東

資料：特になし

### ○建築物の概要

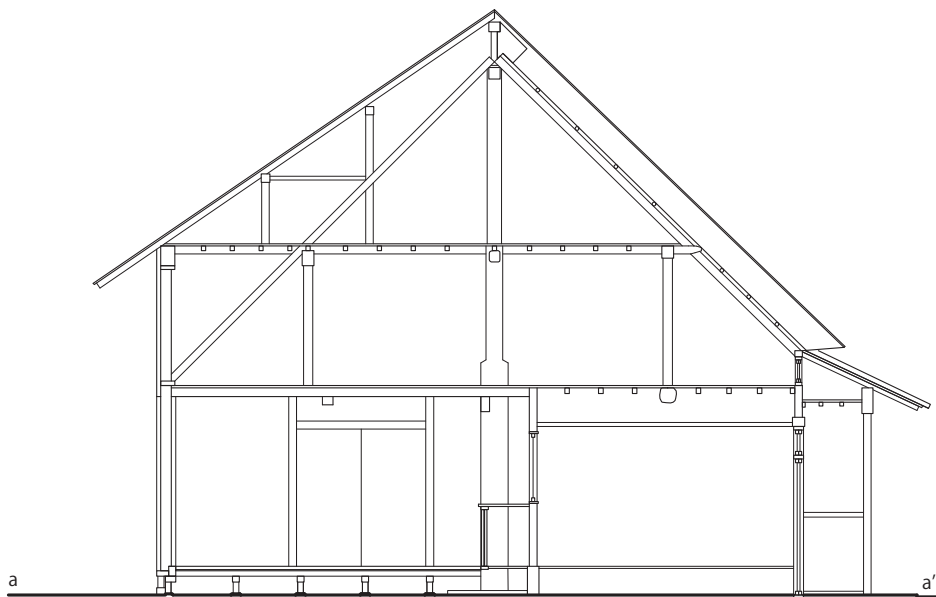
建築当初から梁行5間半・桁行12間半の大規模な民家で、途中で大きな増築も行われていないという。あまりに大きすぎて、奥さんが一度も入ったことのない部屋があるほどである。大黒柱と両妻壁の柱が棟持柱になっており、部材は主にクリが用いられている。かつては、近くを流れる小川から水を引いてきて、簡単なろ過装置をつくり、飲み水としていた。現在は、水道水があるものの、その水源もわき水で、塩素などほとんど使われていないほどのきれいな水という。



Fu17 山下政英家住宅 配置図 (S=1/800)



Fu17 山下政英家主屋を南からみた外観



Fu17 山下政英家主屋 a-a' 断面図 (S=1/100)

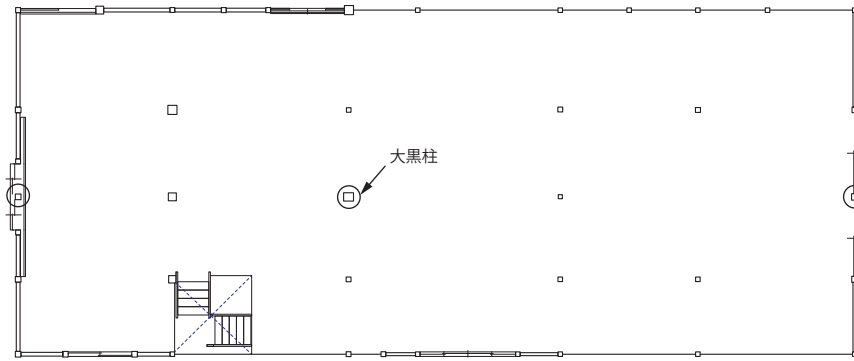




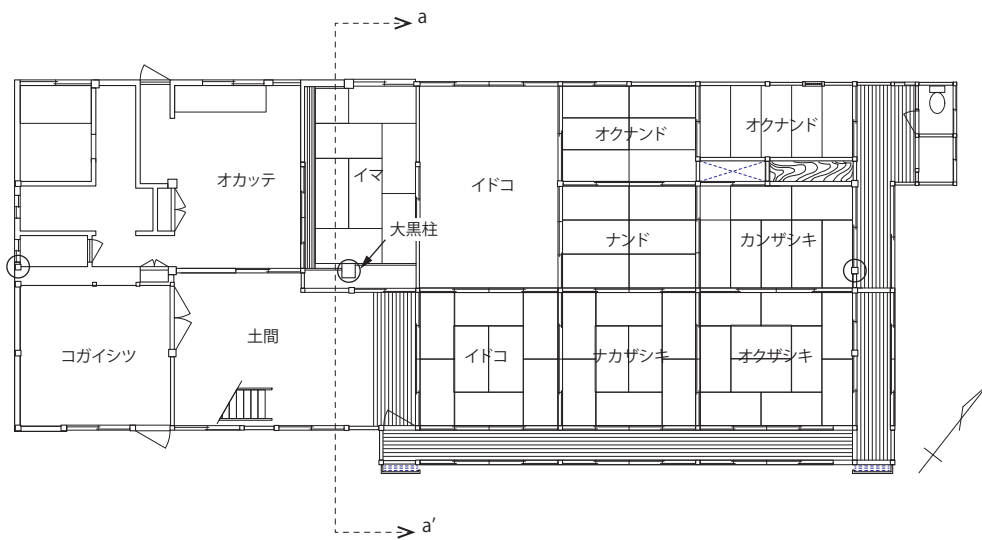
Fu17 山下政英家主屋 大黒柱上部詳細



Fu17 山下政英家主屋の2階からみた大黒柱



Fu17 山下政英家主屋 2階平面図 (S=1/200)



Fu17 山下政英家主屋 1階平面図 (S=1/200)

## Fu18 山下牧郎家住宅

調査年月日：2003年8月4日

### ○特記事項

住所：牧丘町西保下小田野

築年：不明

桁行（間）：9

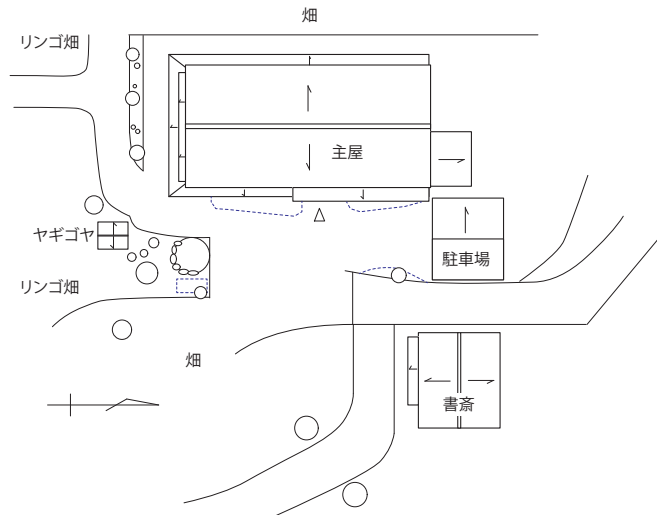
梁行（間）：4

屋根材料：トタン葺

屋根形式：切妻

棟持柱配置：西○○○●●●東

資料：特になし



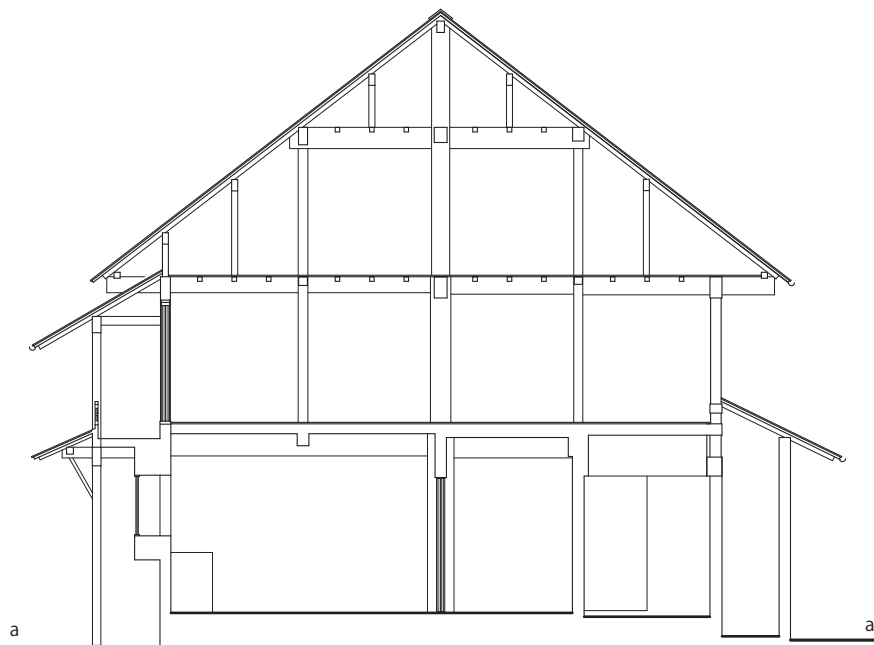
Fu18 山下牧郎家住宅 配置図 (S=1/500)

### ○建築物の概要

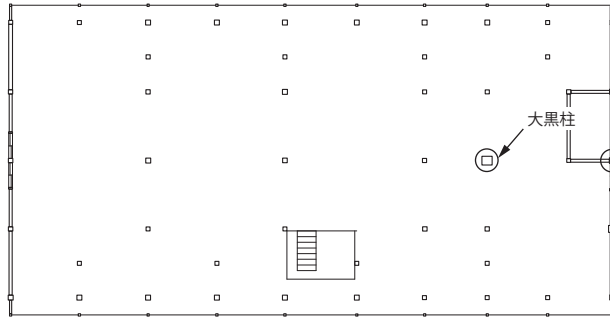
建物の規模は、間口9間、奥行4間であるが、建設当初からこの大きさではなく、養蚕で面積が必要になったために増築して現在の規模になったとされる。外観からの古風な印象とは逆に、内部はかなり改修されていて近代的な印象である。主屋の外観の特徴としては、ごく単純な切妻屋根で、この地域特有の突き上げ屋根を持たない点があげられる。とはいえ、構造は、他の民家と同じく、大黒柱と東側妻壁の柱が棟持柱になっている。ご主人は退職後、山の手入れを行っており、そこで間伐した木材を使用して敷地内に小屋を建てていた。その構造は、掘立棟持柱構造をなして、ご主人によれば、ごく自然にこの構造を採用して小屋をつくったという。この地域の建築物は、下山大工と呼ばれる大工集団が手がけていることが多く、「下山大工は腕がいい、仕事が確か、まじめだ」という言葉もあるほどである。



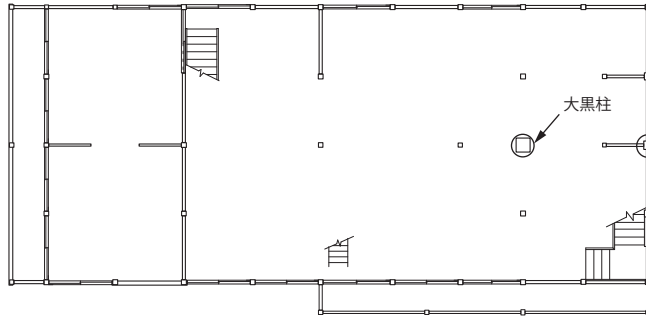
Fu18 山下牧郎家主屋を北東からみた外観



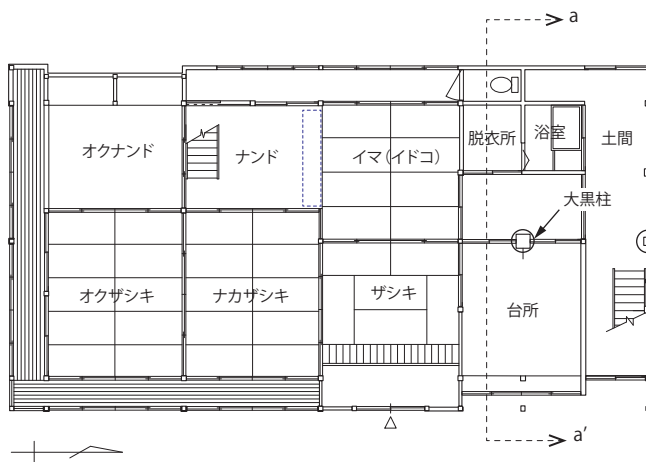
Fu18 山下牧郎家主屋 a-a' 断面図 (S=1/100)



Fu18 山下牧郎家主屋 3階平面図 (S=1/200)



Fu18 山下牧郎家主屋 2階平面図 (S=1/200)



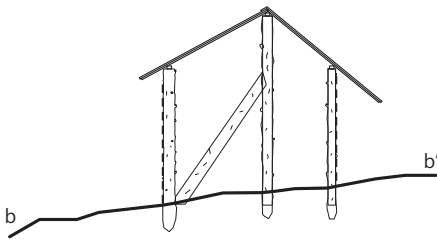
Fu18 山下牧郎家主屋 1階平面図 (S=1/200)



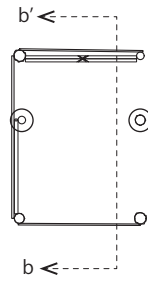
Fu18 山下牧郎家主屋 大黒柱上部



Fu18 山下牧郎家主屋を西からみた外観



Fu18 山下牧郎家ヤギゴヤ b-b' 断面図 (S=1/100)



Fu18 山下牧郎家ヤギゴヤ 平面図 (S=1/100)



Fu18 山下牧郎家ヤギゴヤ 外観

## Fu19 妣田圭子家住宅

調査年月日：2003年11月19日

### ○特記事項

住所：牧丘町倉科

築年：不明

桁行（間）：9.5

梁行（間）：4.5

屋根材料：トタン葺

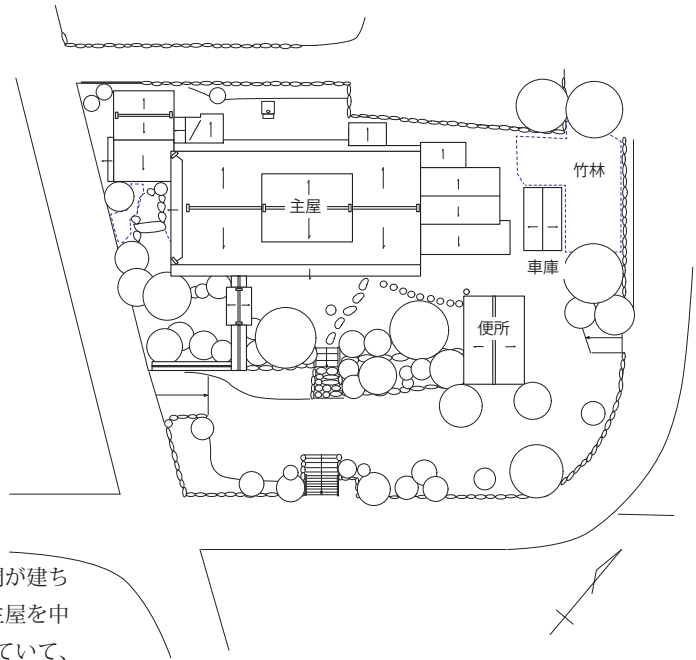
屋根形式：切妻

棟持柱配置：西○○○○○○東

資料：特になし

### ○建築物の概要

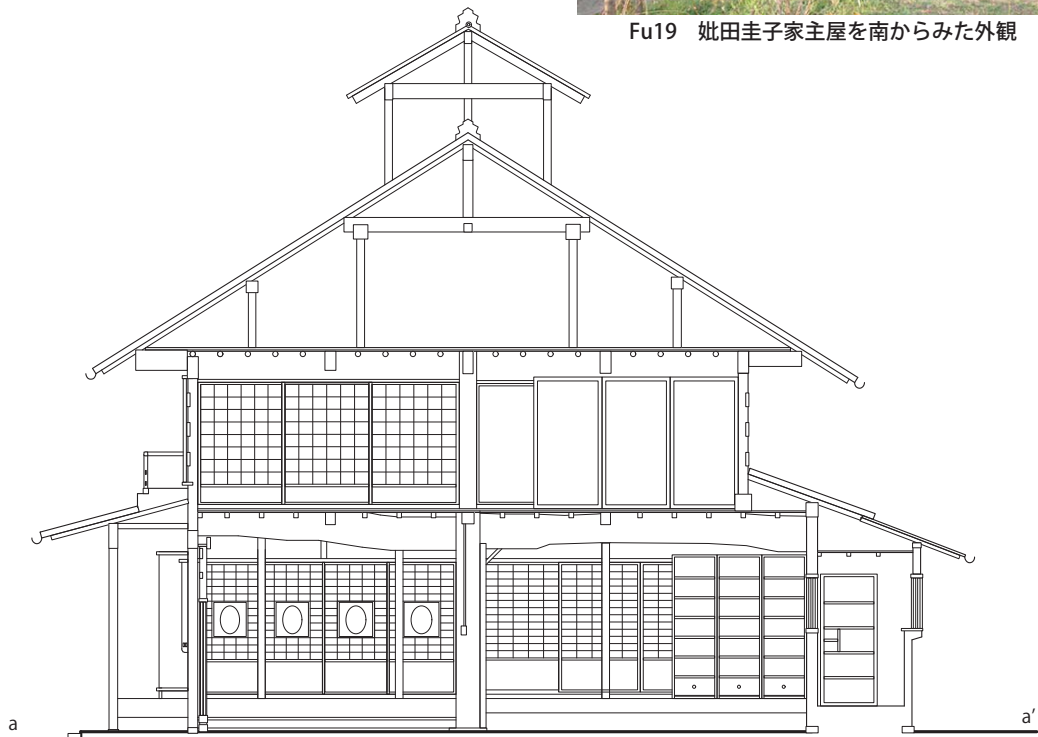
かつてこの屋敷の敷地内には、複数の蔵や長屋門が建ち並ぶ大邸宅であった。現在も、4階建ての大きな主屋を中心に、敷地の周囲には漆喰塗りの土塀がまわされていて、かつてのおもむきを窺い知ることができる。ヒアリングによれば、建築年代は今からおよそ300年ほど前で、武田信玄に兵法を教えた人によって建てられたという。棟持柱はないが、4階建ての堂々とした構えをした民家である。現在は、1階が生活の場となっており、2階と3階が物置に利用され、4階が茶室になっている。しかし、養蚕を行っていた頃は、その大部分が養蚕のために使われていたようである。敷地内の建物として注目すべきは、主屋の東側に別棟で建てられている便所で、一方の妻壁が棟持柱構造をなし、もう一方の妻壁が軸部・小屋組構造をなすきわめてめずらしい架構形式である。



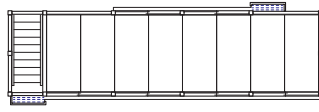
Fu19 妣田圭子家住宅 配置図 (S=1/600)



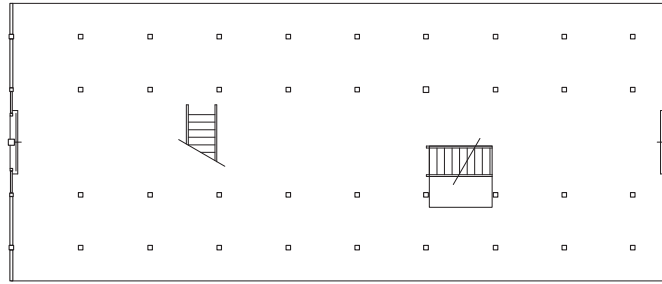
Fu19 妣田圭子家主屋を南からみた外観



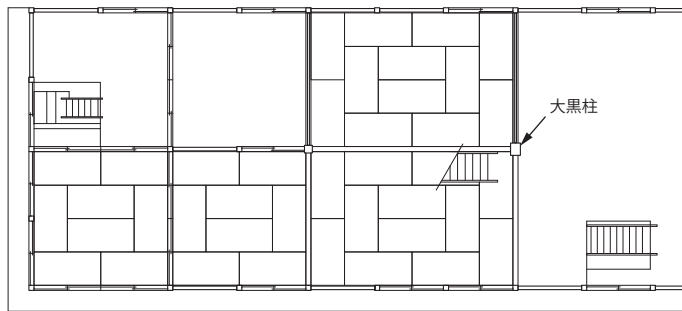
Fu19 妣田圭子家主屋 a-a' 断面図 (S=1/100)



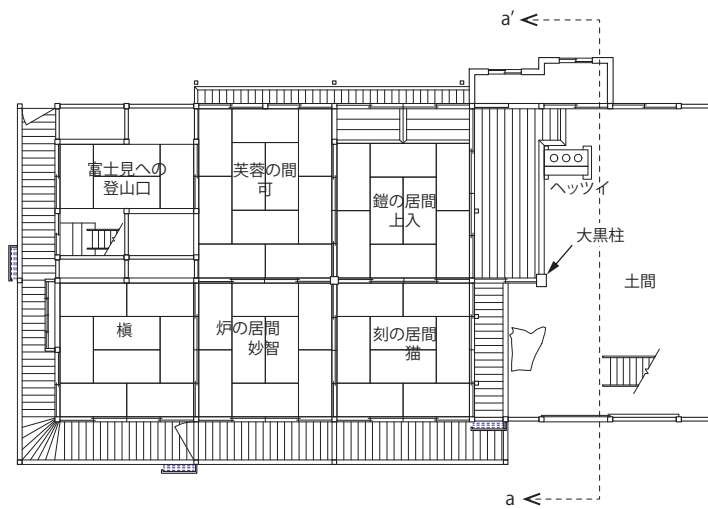
Fu19 妣田圭子家主屋 4階平面図 (S=1/200)



Fu19 妣田圭子家主屋 3階平面図 (S=1/200)



Fu19 妣田圭子家主屋 2階平面図 (S=1/200)



Fu19 妣田圭子家主屋 1階平面図 (S=1/200)





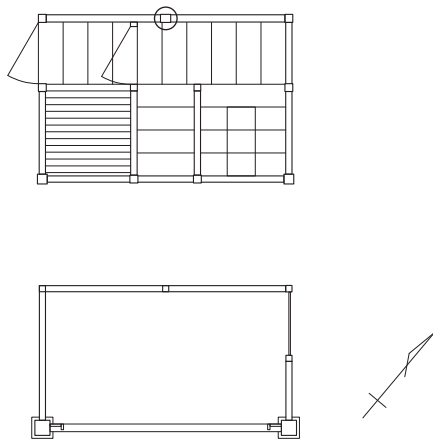
Fu19 妣田圭子家主屋内観



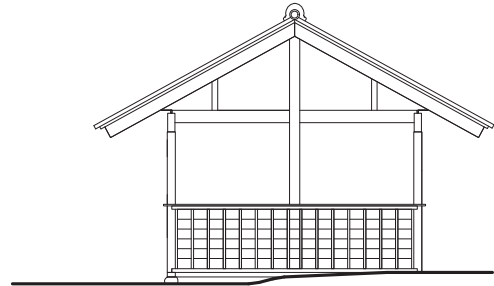
Fu19 妣田圭子家主屋を北東からみた外観



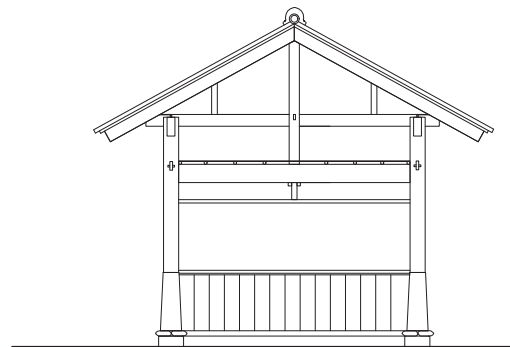
Fu19 妣田圭子家便所を北西からみた外観



Fu19 妣田圭子家便所 平面図 (S=1/100)



Fu19 妣田圭子家便所 北立面図 (S=1/100)



Fu19 妣田圭子家便所 南立面図 (S=1/100)

## Fu20 藤原達男家住宅

調査年月日：2003年8月5日

### ○特記事項

住所：牧丘町倉科

築年：不明

桁行（間）：7

梁行（間）：4

屋根材料：茅葺、トタン

屋根形式：切妻

棟持柱配置：西○○○○●●東

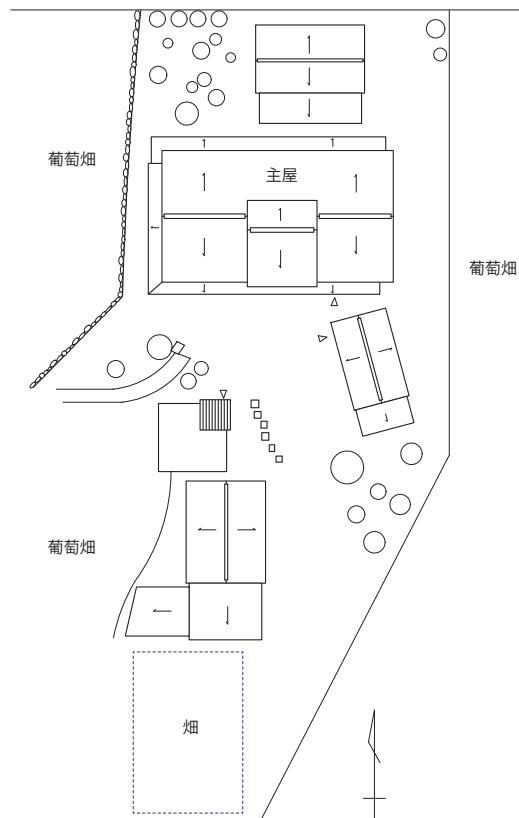
資料：特になし

### ○建築物の概要

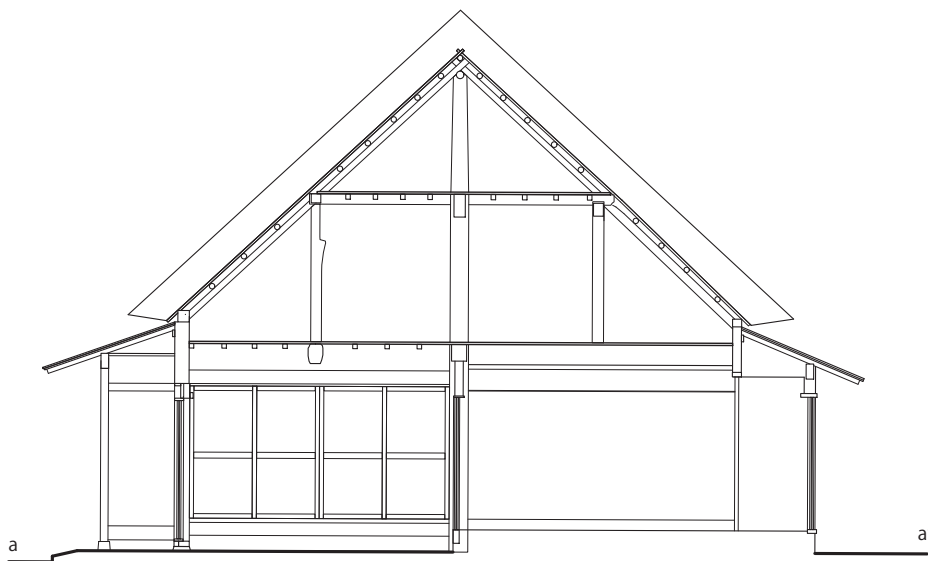
この主屋は、以前、旧諏訪町の柚口という集落にあったものを今から約100年ほど前に現在地へ移築してきたとされる。移築前は現在の四間取り平面ではなく、中座敷を加えた六間取り平面であったそうだ。大黒柱および東側表面の柱が棟持柱になっていて、小黒柱は棟までは通っていない。大黒柱にはクリが用いられている。



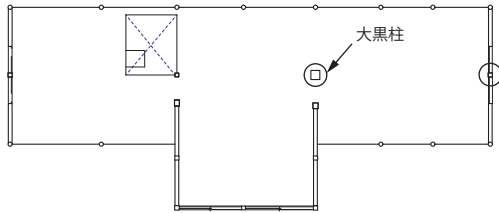
Fu20 藤原達男家主屋を南からみた外観



Fu20 藤原達男家住宅 配置図 (S=1/500)



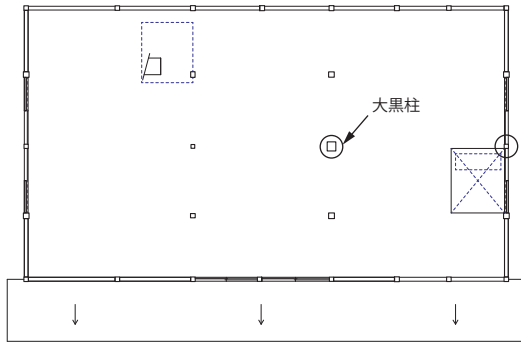
Fu20 藤原達男家主屋 a-a' 断面図 (S=1/100)



Fu20 藤原達男家主屋 3階平面図 (S=1/200)



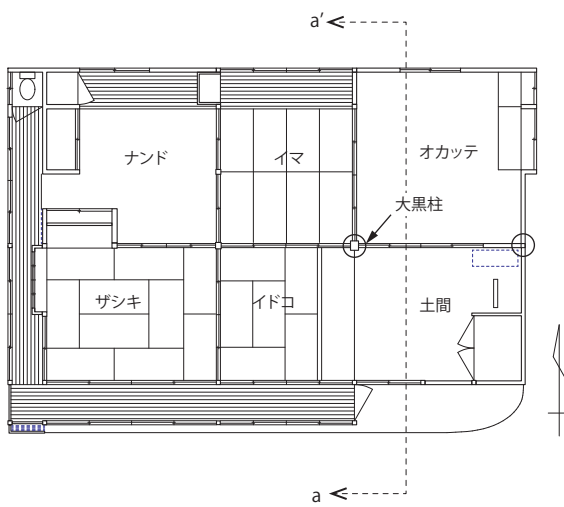
Fu20 藤原達男家主屋を西からみた外観



Fu20 藤原達男家主屋 2階平面図 (S=1/200)



Fu20 藤原達男家主屋 大黒柱と棟木の接合部



Fu20 藤原達男家主屋 1階平面図 (S=1/200)



Fu20 藤原達男家主屋の3階からみた大黒柱

## Fu21 赤池栄人家住宅

調査年月日：2003年9月20日

### ○特記事項

住所：牧丘町倉科

築年：不明

桁行（間）：不明

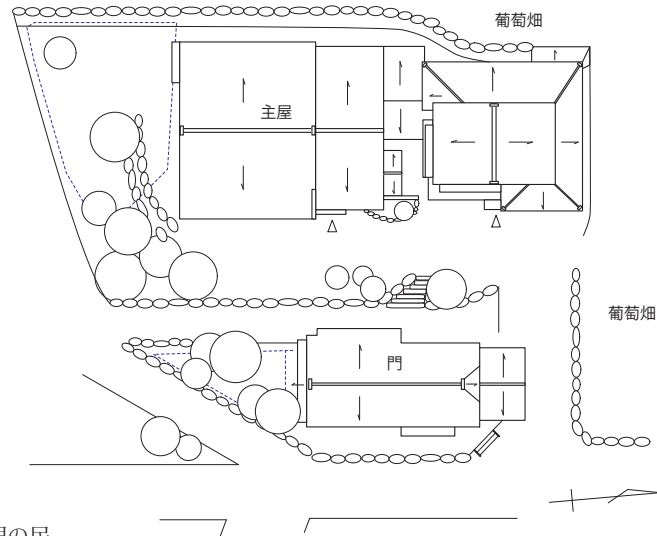
梁行（間）：4

屋根材料：茅葺、トタン

屋根形式：切妻

棟持柱配置：北○○○○●南

資料：特になし



Fu21 赤池栄人家住宅 配置図 (S=1/500)

### ○建築物の概要

主屋は、この地域で一般的に見られる突き上げ屋根の民家を、土間を境に座敷側のみを残して、土間側を新しく建て替えたものである。ただ、建て替えた部分も建築からかなりの年数が経過しているため、この建物に隣接して2階建ての住宅を建設し、そこを主な居住スペースとしている。主屋の建て替えられていない座敷側については、妻壁が棟持柱構造になっている。また、敷地の入口には、民家をそのまま小さくしたような長屋門があり、妻壁が棟持柱構造になっている。今となっては、周辺に見られない珍しい長屋門であるが、以前は、このような棟持柱構造の門が他にもあったとされる。



Fu21 赤池栄人家住宅を東からみた外観



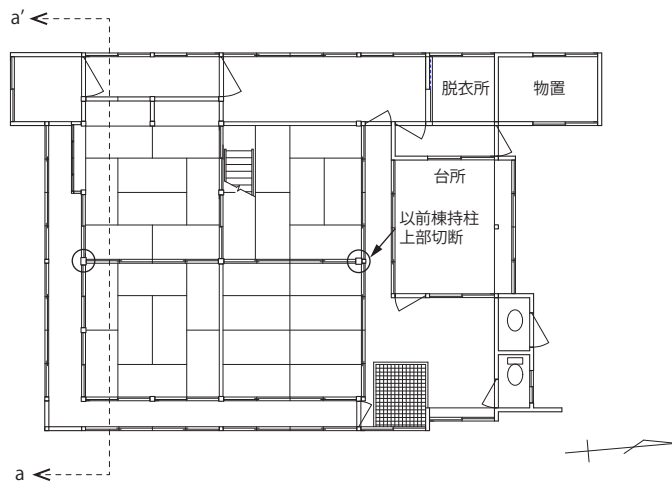
Fu21 赤池栄人家主屋 a-a' 断面図 (S=1/100)



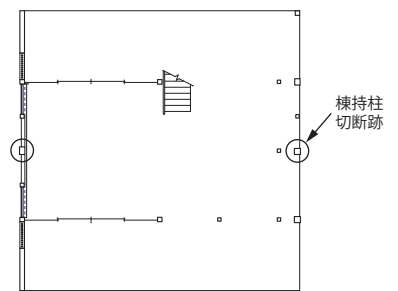
Fu21 赤池栄人家門を東からみた外観



Fu21 赤池栄人家門を南からみた外観



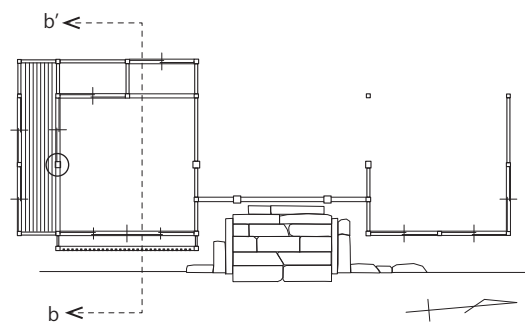
Fu21 赤池栄人家主屋 1階平面図 (S=1/200)



Fu21 赤池栄人家主屋 2階平面図 (S=1/200)



Fu21 赤池栄人家門 b-b'断面図 (S=1/100)



Fu21 赤池栄人家門 平面図 (S=1/200)



## Fu22 藤原金雄家住宅

調査年月日：2003年10月25日

### ○特記事項

住所：牧丘町倉科

築年：不明

桁行（間）：8.5

梁行（間）：4.5

屋根材料：茅葺、トタン

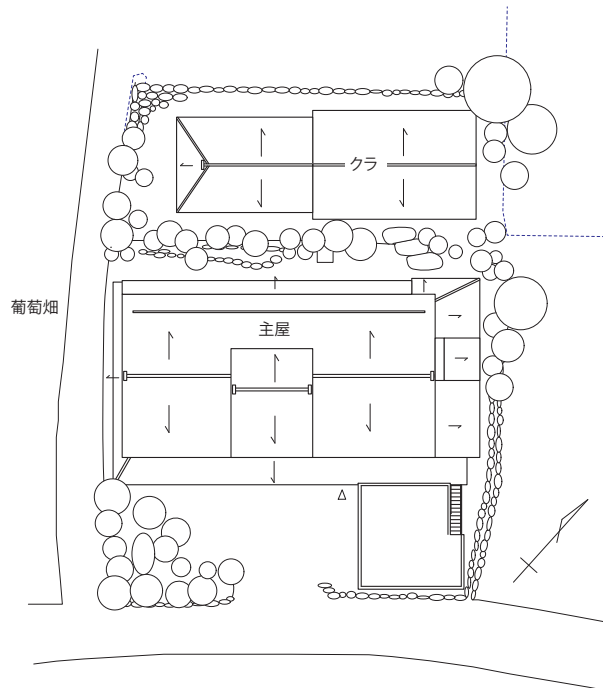
屋根形式：切妻

棟持柱配置：西●●●東

資料：特になし

### ○建築物の概要

この地域は真知と呼ばれ、落ち武者が逃げ込んできて、この地に住むようになったとされる。このあたりには藤原姓が多く、ある時期にはハラフジというように名前を逆さに呼んでいた時期もあったとされ、落ち武者が隠れ住んだということもある程度うなずける。お寺の過去帳によれば、天保5年にはすでにこの地に人が住んでいたことが確認される。棟通りの柱のうち、大黒柱と両妻壁の柱が棟持柱でチョウナ削り仕上げが施されている。基礎は礎である。裏には深さ20mほどの井戸があり、つい最近まで使用されていた。どこの家でも井戸を掘っていたらしいが、深さ5m程度でしばしば枯れることがあったとされる。一方で、この井戸は枯れることがなかったという。



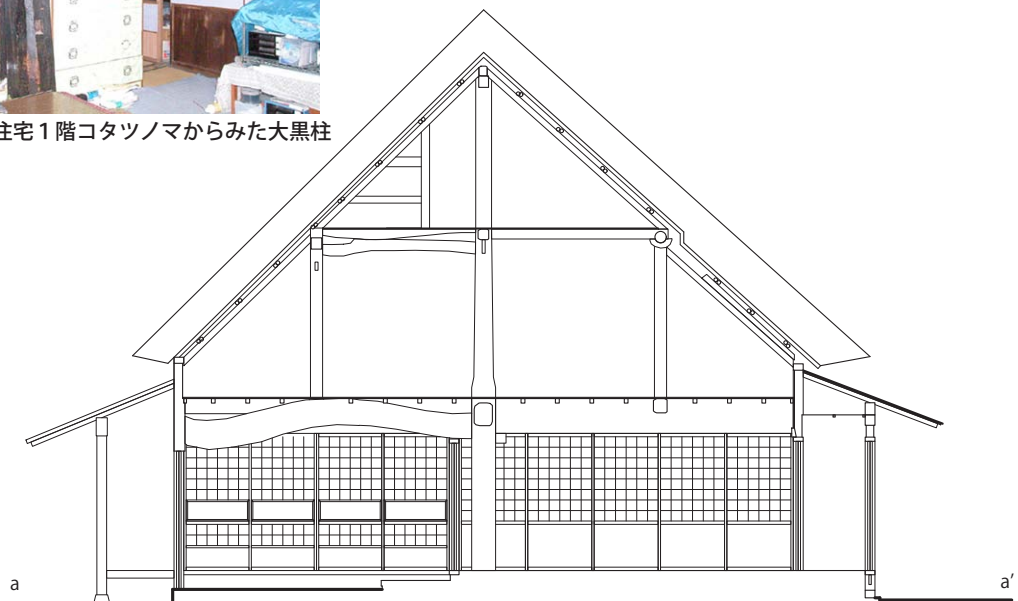
Fu22 藤原金雄家住宅 配置図 (S=1/500)



Fu22 藤原金雄家住宅を南からみた外観

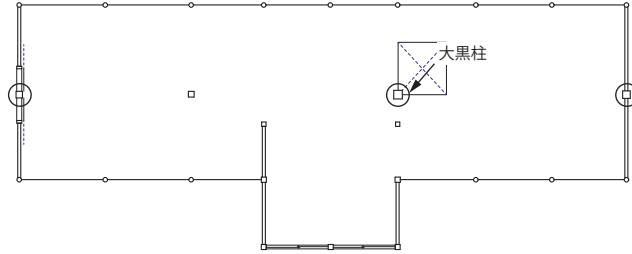


Fu22 藤原金雄家住宅1階コタツノマからみた大黒柱

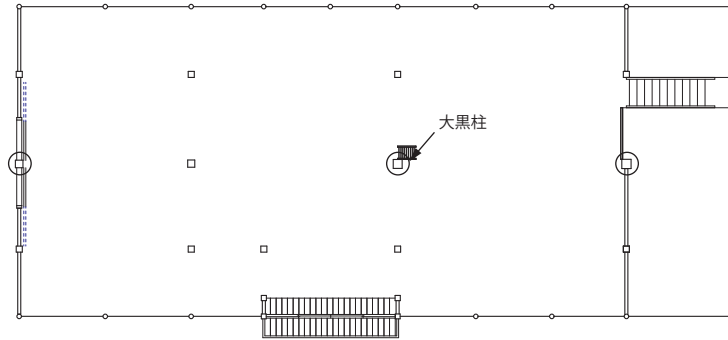


Fu22 藤原金雄家主屋 a-a' 断面図 (S=1/100)

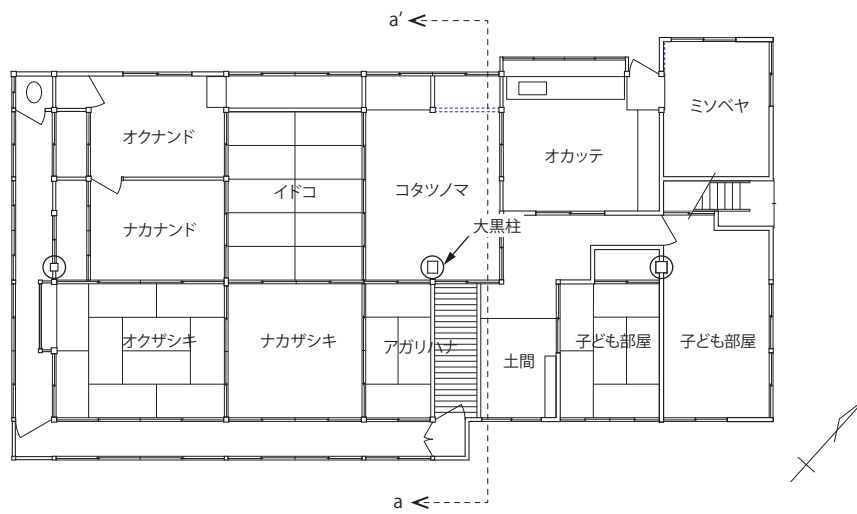




Fu22 藤原金雄家主屋 3階平面図 (S=1/200)



Fu22 藤原金雄家主屋 2階平面図 (S=1/200)



Fu22 藤原金雄家主屋 1階平面図 (S=1/200)

## Fu23 水上重兵衛家住宅

調査年月日：2003年8月6日

### ○特記事項

住所：牧丘町千野々宮

築年：不明

桁行（間）：9.5

梁行（間）：4.5

屋根材料：茅葺、トタン

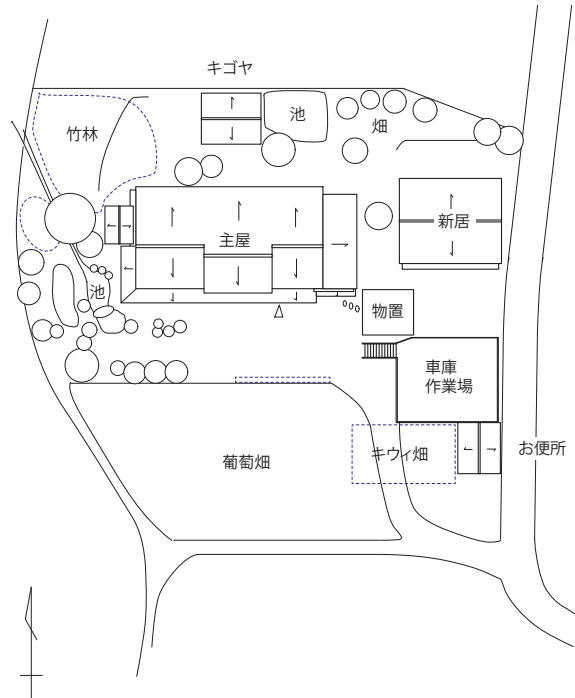
屋根形式：切妻

棟持柱配置：西●○○○○○○●東

資料：特になし

### ○建築物の概要

以前の主屋は、4間半×9間半であったが、明治より前に現在の大きさになった。移築した訳ではなく、2階の天井が低かったのを高くするために、元々この場所にあった家を小さくしたという。両妻壁の柱は棟持柱になっているものの、大黒柱は2階の梁下で止まっている。御主人によれば、両妻壁の棟持柱のことをウダツといい、おそらく70歳を超えた方であれば、ウダツという名称は知っているだろうということであった。また、ウダツが棟まで通っている方が家が強いという証言も得た。



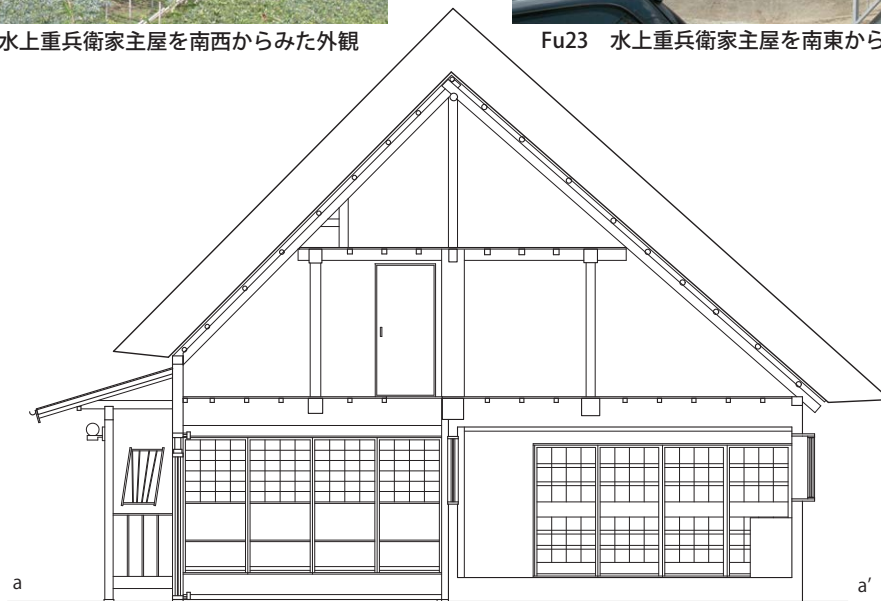
Fu23 水上重兵衛家住宅 配置図 (S=1/800)



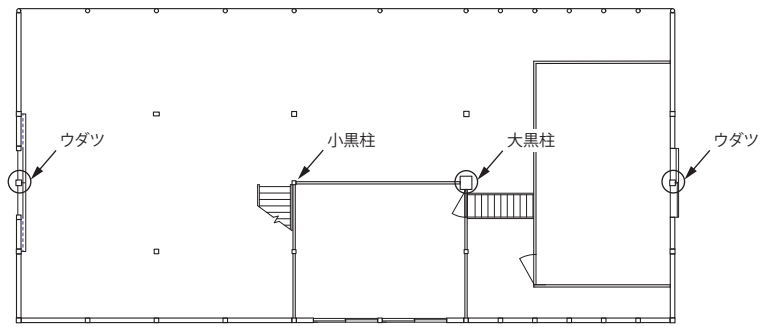
Fu23 水上重兵衛家主屋を南西からみた外観



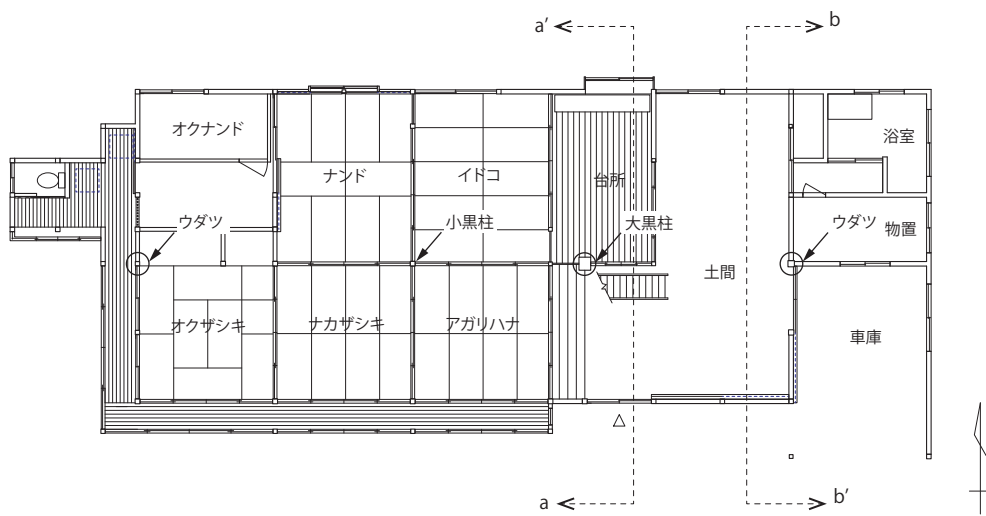
Fu23 水上重兵衛家主屋を南東からみた外観



Fu23 水上重兵衛家主屋 a-a'断面図 (S=1/100)



Fu23 水上重兵衛家主屋 2階平面図 (S=1/200)



Fu23 水上重兵衛家主屋 1階平面図 (S=1/200)



Fu23 水上重兵衛家主屋 b-b' 断面図 (S=1/100)

## Fu24 宮原久巳家住宅

調査年月日：2003年8月19日

### ○特記事項

住所：塩山市小屋敷

築年：不明

桁行（間）：9.5

梁行（間）：4.5

屋根材料：茅葺、トタン

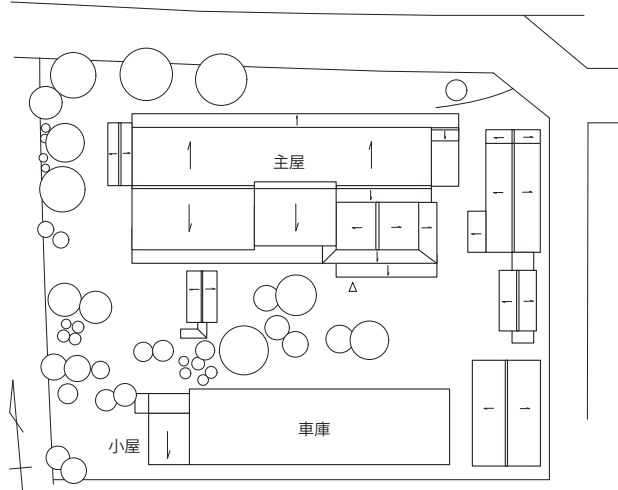
屋根形式：切妻

棟持柱配置：西●○○○○●○○●東

資料：特になし

### ○建築物の概要

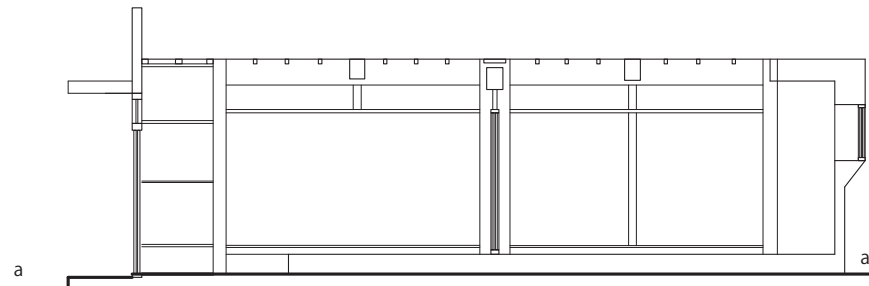
かつては小島という姓であったが、名字帯刀を許された明治初期に宮原という姓に変わった。文久3年の棟札がオクラの天井にあったことから、主屋、門もそのころの時代のものであると考えられる。ご主人のおじいさんの話によると、かつては6尺ごとに間柱が入っていたが、明治20年頃に何本か抜いた。この地域では昔ヨツダテという言葉が使われていた。このお宅の門もヨツダテ門と呼ばれてる。



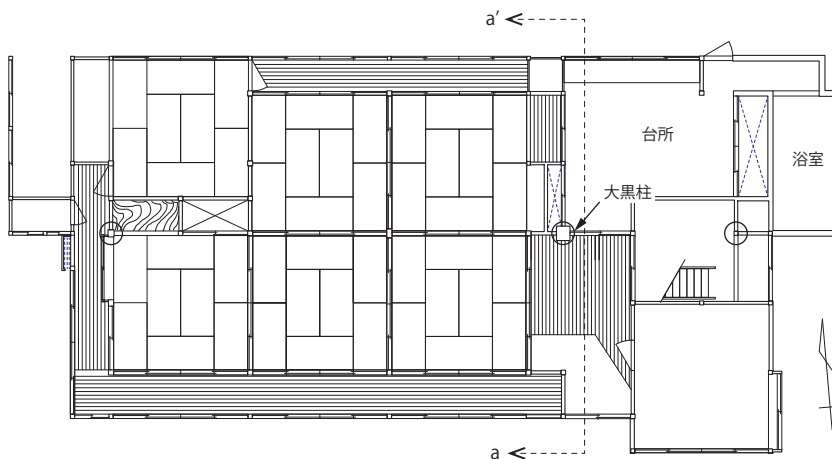
Fu24 宮原久巳家住宅 配置図 (S=1/500)



Fu24 宮原久巳家住宅を南東からみた外観



Fu24 宮原久巳家主屋 a-a' 断面図 (S=1/100)



Fu24 宮原久巳家主屋 1階平面図 (S=1/200)

## Fu25 笛吹小屋キャンプ場

調査年月日：2003年8月8日

### ○特記事項

住所：三富村広瀬

築年：不明

桁行（間）：2

梁行（間）：2

屋根材料：トタン葺

屋根形式：切妻

棟持柱配置：西●●●東

資料：特になし

### ○建築物の概要

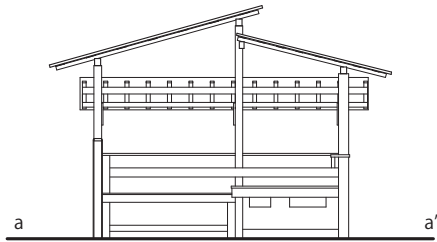
この建物は、白樺の林に囲まれたキャンプ場内の炊事場である。棟持柱が3本あり、すべて掘立柱である。また、屋根が単純な切妻ではなく、一方が少し下がった位置から架けられており、トタン葺きである。すぐ近くには笛吹川が流れていて、この川には昔から大きな石がたくさんあり、水の音はその石にむせんで、笛の音のように聞こえるので笛吹川と呼ばれるようになったとされる。



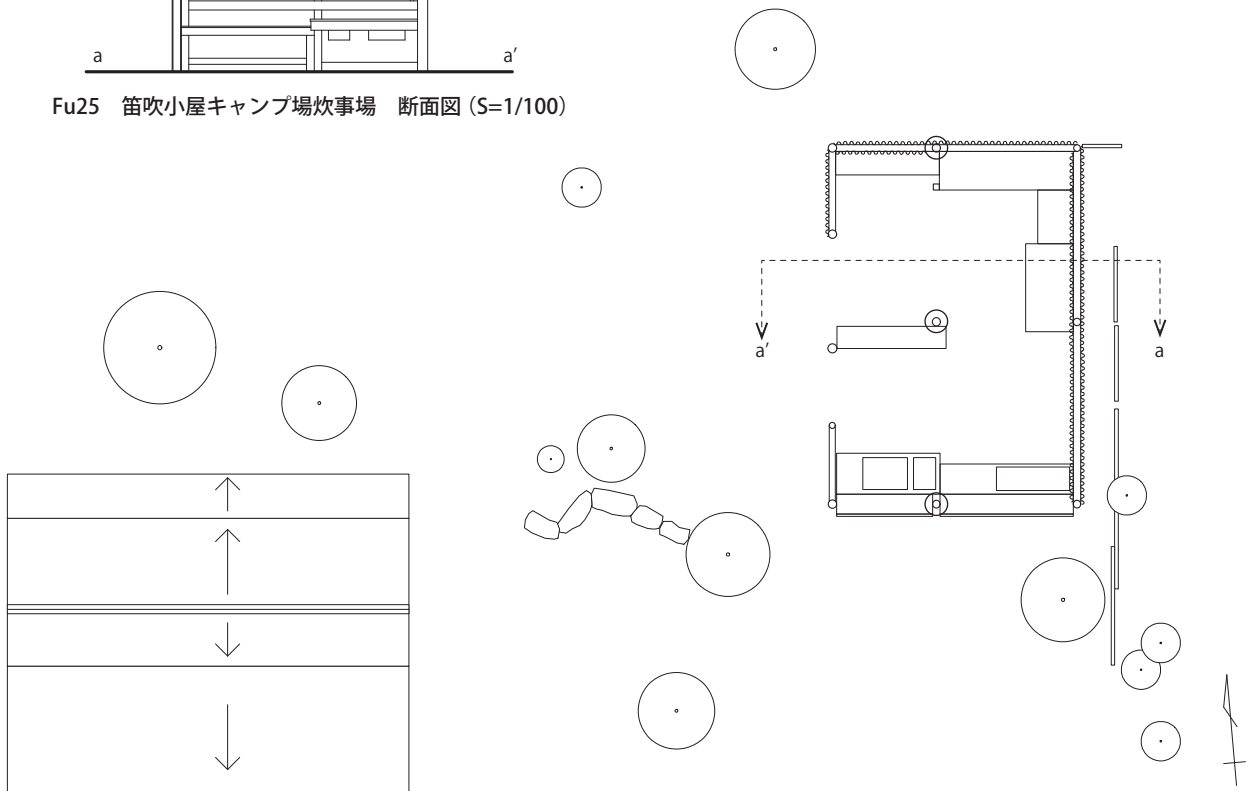
Fu25 笛吹小屋キャンプ場炊事場を北からみた外観



Fu25 笛吹小屋キャンプ場炊事場 内観



Fu25 笛吹小屋キャンプ場炊事場 断面図 (S=1/100)



Fu25 笛吹小屋キャンプ場炊事場 配置兼平面図 (S=1/100)

## 2.2.4 ヒアリング

### 【ヒアリング目次】

Fu01a	三枝行雄氏	.....	203
Fu03	三枝貞晴氏	.....	205
Fu04	淡路栄氏	.....	208
Fu05	古屋古福氏	.....	209
Fu06	古屋茂富氏	.....	212
Fu08a	佐藤一郎氏	.....	213
Fu09	戸田眞二氏	.....	216
Fu10	戸田政守氏	.....	217
Fu11	奥山朝則氏	.....	218
Fu13	今井秀郎氏	.....	219
Fu15	小田切幹雄氏	.....	220
Fu16	高原左門氏	.....	224
Fu17	山下政英氏	.....	226
Fu18	山下牧男氏	.....	229
Fu20	藤原達男氏	.....	233
Fu22	藤原金雄氏	.....	233
Fu23	水上重兵衛氏	.....	236
Fu24	宮原民雄氏	.....	238



三枝行雄氏

日時：平成15年8月8日

場所：三枝行雄氏宅、イドコにて

—三枝家の歴史—

答・・明治になって、その前はよくわからんけど、それがわしの曾祖父さんのシロウザエモンの碑があるだけんどね。碑が立って、昭和30年、31年ぐらいかや、わし自身は、定かじゃねえや、明治時代から碑があるんだから。当時は甲州も、こないだも話したように、江戸へ天皇が入るまでは天領でね、政治の要だったけども、わしらの三枝の姓よりも、この奥の塩平の宮原・藤原の姓の方が京都の流れのようだねえ。そっちの方が割合早かったかもしれない。

問・・こちらの三枝さんの姓は武田の？

答・・24将だね。24将の一人に三枝カゲユウなんとかちゅう、誰だったかな、の、家来の一人の末裔ちゅうかね、落ち武者みていの、そっちが同じ昔牧丘でも下の方の20何戸三枝があるだよ。サエグサという呼び名の方があるけど、我々はサイグサだよ。サエグサじゃないサイグサだ。だから表紋が三階、真ん中が違い松だなあ、三階松だね。裏紋がねえ、やっぱり武士の流れちゅうのは、表紋と裏紋ちゅうのがあるだよ。今は着物なんか着んけど、紋付き羽織、袴って言ってね。こう祝儀にはね、女性も男性も紋を見ればどここの誰々ちゅうのがわかってね。

(中略)

問・・建物自体は、いつ建てられたかわかりますか？

答・・おそらく、200年どうだかでしょうな。だから、代をして11、12代にしても、以前の人は早死にしたからね、早死に。

—共有林・恩賜林について—

答・・まあどこの集落でも、長野にもあると思うんだけど、どこの都道府県にもあるんだけど、共有林？明治政府のお達しでね、共有林の設定に関わる、あのう、文書ちゅうか、その努力をしておいたらしいよ、わしのその四代前のね、三枝シロウザエモンちゅうのがね。

問・・共有林の設定と言いますと？

答・・当時はほら、幕府から、お上の山から各個人もだけんど、集落の共同山？へのお達しが、どこでもちゅうわけじゃねえけど、お達しが何個あるの？何百町歩欲しいの？と出て、明治政府からお達しが出て、それを私の方にした人があるらしいんだけど、日本至る所にね。あれは俺の山だちゅう、この沢は俺のもんだちゅうね、そういうことがあったらしいけど、わしのころは全部、塩平は除いて、向こうの沢のヒ

ラカタあがりの部落は除いてね、北原120戸って当時、120戸あったらしい。その共同持ち山を、あのうお達しによって払い下げ？してもらったちゅうことでね、その功績でこの碑を建ててくれたちゅう。

問・・そうなんですか。

答・・ただ山梨県の場合はね、山の場合あの32万町歩かな、36万町歩、32万町歩だったかな、全部でね。国有林ちゅうのは、富士山麓一带に少々、あとはね、私有林と県有林ちゅうのが多い。長野あたりは国有林が多いんだよね、長野県。ということはね、明治44年だか、その大災害だかがあったらしいんだよね、そんであっちこっち山梨県の場合は災害が起きて、もちろん死人も出たらしいんだけどね。そんなときに、明治政府から山梨県の県林、恩賜、恩賜林ってね、約16万町歩かな、大部分の山が、この間言っとう、秩父多摩甲斐国立公園、その甲斐の全体は恩賜林。山梨県庁で県有林買っちゃ。他の都道府県はね、おそらく国有林は営林署だと思よ、名前が。山梨県だけだね、県有林ちゅうあるの。こん時のお達しが出たときに、天皇から、ということだよ。 (中略) だから、わしらのこの共有林が、庭でみる戸谷山、それからもう少し行って甲府境の、なんちゅうかな、甲府の奥の境のと。それからわしのこの奥が一方所、三方所が共有山でね。400、400町歩くらいあるかな。もっと先代は欲しかったらしいけどね。反対者がいたらしいんだよね。 (中略) だから、約2千町歩くらい共有山になったん。塩平の部落も勢力関係でなくなっちゃったん。やたら許可がなくて、薪に切ったりするにはでるけど、協力しなかなだらしい。だから塩平の部落なんか一町歩もない、ないない。だから権利ちゅうのはね、尊いものよ。

(中略)

問・・その建築年代っていうのも、棟札なんかがあるわけじゃないんですよね、ずっと聞いてきた話で。

答・・普通の家だとどっかにね棟木かなんかにねこのようにへってるのがあるんだけどね、そうゆうあれは無いね。前をこの昭和48年、49年か、解体工事をサッシを入れてね。あのね、年号は入っちゃいんだけど、山梨県じゃない、郡内になんてって言ったかな、大工の名。名だけ貼りつけてあんね、年号は入っちゃいねえ。

—家を葺く茅—

問・・上の方にも、茅がありましたよね、ちょっと見させていただきましたけど。

答・・このススキをね、わしは200トンも300トンも、

親方におさってすぐって、3階・2階へ積んでおきてえんだけど、あのう女房あたりも、こちらあたりもう芸もないからよせて（笑）。よせと言ったって俺が生きてるうちは、100歳になって俺がまた職人を頼んでやる（笑）。ね、だって材料はあるから、材料は毎年、50把か100把すぐって2階へね。400や500は…。結局裏が一番弱いからね、茅屋根。何かそういう、こっちはパーでもほら、あいつはよくやったなど言われてみてえじゃんね。それだってね、2回目だ。せんだって、一昨年、真ん中の屋根を葺きあげて二回目。それで結局職人の方も材料もなく、それで真ん中が残して。それでも楽しいことよ。自分でこの家を建てるなんていえば本当にこれね、とつてもじゃないけどね。今潰す家が多いからね。

（中略）

問・・そうですね。普通のお宅で、こうやって茅葺きのまま残っているお宅なんてそうはないじゃないですか。

答・・あの、できんじゃなくてやる気がない。ほんで、景気やマネーがね、今の経済えらいやられちまう。銭が入っていくちゅこん。だから400万、500万かなりね、1000万。金がなけりゃ自然にね、修復したくてもでんもん。ねっ1000万。こう束でさ。昔なんかそうさ、そんなんでなかったから。（中略）下の道でみんな一軒なしでみんな草屋根だったね。それで縄も、わしらも前、諸君は経験がないかもしれんけど、今、藁をあれしてトントンたたいて縄なえって言えば、なえる。やったんだから、親方におさってね。藁草履も作れる。それもって俺らこっから学校へ通ったんだ。靴がねえんだ、ゴムが戦争で。小学校三年の時に終戦だから、だから、こっから第三小学校へ通ったんだもん。だから脚が強い（笑）。それから親方にてんだっちゃやったり、ショイコでしょ、薪を背負いに行くんだから。木の葉とかこれが堆肥。農家だからしなきゃ。ほいで、馬や牛を飼ってたから、沢から上がって、今でもわしの若えの、28と30だから、二人あればできるからね。

—カンバ葺き屋根—

答・・裏を土台をね、栗の土台にしたらよね。五寸の六寸つうね。今は馬はねえけど、塩平の馬方がいて、その人に頼んでね、半分は銭がなかったから売っちゃった。それで残してこの下に継いであるじゃん。今牧丘でも世帯中に一軒、二軒。当時はね、十軒くらいあったね。で女房と一緒になってすぐ、土蔵の屋根が当時はこの辺、もうないけども、白樺の屋根でね、石屋

根だったん。でオクセンジョウへ行って、そっちの、あのう北オクセンジョウへ親父と、わしも一人前にいったようね、盗んでね、白樺の皮をね（笑）。それで親方におさって伸してね、そんでついこの間まで、44年に廃業にしただよね。セメント瓦にね。そいで、おっとしか？本瓦に。やっぱしセメント瓦はこう、中がこう割れてるだよ、あれ20何年、30何年経つとね。家のはね、土蔵がね、周りが去年かおっとしか、去年か、去年わしの友達に左官屋さんがいてね、塗ってくれただけけど、漆喰を塗る左官屋は最近、左官屋はないだよ。中が家のはね、蒸籠倉とってね、あのう、中が壁じゃないん。コメかいて、コメってこういうクロスのやってね、縄じとか土器の不揃いのやって、ほんでそれ粗壁って言って外からやって、中から中塗りやってね、やる壁じゃねえん、うちの。真四角の角寸だかなん、うちは全然ねえん。見てごらん。そんでその上に棟木〇尺一寸ぐれいかな。棟木がだあってやってあるん。この辺でね、蒸籠倉ちゅう、やっぱりね、屋根が漏ってみんな壊しちゃったね。

問・・白樺って結構いっぱいあったんですか？

答・・だいたい千メートル以上になれば結構あってね、円周のね、3.14ね、3倍以上広がる。そんでそれをこうなめして。結構もったけど、雨・雪にね。昔は、ついこの間までそういう白樺の屋根ってあったけど。古い歴史だ。女房と一緒にあって、その明くる年に、もう白樺もないちゅこんでセメント瓦。当時はこう平らな屋根でね。いや我が家だけじゃねえんだよ、さっきの話聞いた連中、やろうとわしはこういう遊休農場買ったりいろいろして、そんで山の話、山にも植林してきたりと、その木はもう売れるんだから、今は材木が安いといってもね。当時はね、このくれないの木通しと言って二尺。メートルにして六メートルかな、日当われわれ青年のころはね、一万五千元くれないしたんだよ。だから二万円くれない、一本。今じゃ逆じゃん。安くて。七千円か、七千円も無理じゃないかな五千円くれないじゃないかな。

—下肥のはなし—

問・・隣の建物は、下の土台の部分を修理しているんですか？

答・・今の工事？あれがほら、わしがまだ生きてるうちはね、下肥を担ぎたかった。そいで女房が、寒いし、いいかげん水洗にしてくださいよって、それで、あなたが財布もっているんだからいいんじゃないって言って、それからほれ、役場へ行って、役場のああいう役所のように

に、北から、水源の方からきれいな水を流すうちゅうこともわかるんだけど、今までそんなことねえもんね。我々、ただ洗剤あたり流すのはね。うん、それがどうもきれいになるかどうかね。で、やる気であれば、本業の話じゃなくて申し訳ねえけど、ついこの間までは、下肥っていうものは、我々の排泄物はみんな肥やしにしたもんだ。それをさ、ただ流してるんでしょ（笑）。糞尿さんの研究しなさいよ（笑）。いろいろ学問になっていいじゃん。それで今日いいかな。

問・・ありがとうございました。

### 三枝貞晴氏

日時：平成15年8月8日

場所：三枝貞晴氏宅、畑のビニールハウスにて

—白樺の屋根について—

問・・そういった白樺の皮で葺いてるおうちっていうのは？

答・・もう、ちょっとなくなっちゃったね。

問・・でも、あったんですか？

答・・全部、ほとんど。今、もう材料がなくなってきたから、瓦とかそういう形になってきた。で、言ったと思うけど、今も麦殻屋根のおうちね、寄ってきたでしょ？

問・・はい。

答・・あのうちは現在、維持してるけれども材料がもうなくなってきた。材料は見つけられないことはないけど、今度は職人さんがおらん。今かろうじて、一昨年かな。あのうちも、これだけするのに一年もかかるんですよ、材料集めるのに。ここの平のどこね。ここの平のどこも、2回くらいにくらいに分けなきゃ材料確保できない。これ全部葺いてくりゃね、5年～6年かかる。一度にはできない。で、あのうち去年でやっと一回りやっちゃった。話聞いたと思うけど。

問・・話は明日の午後なんですよ。

—大黒柱について—

答・・詳しく話してくれると思うけど、材料はね、この周辺にあるけど、職人さんがね。今は下部の方まで来てもらってるけども。うちはそういうことで、今年の春壊しちゃったんだよね。時代とともに、昔のうちってのは住みずらいというか…。快適は快適ですよ。夏はどんなに暑くたってね。電気の力を借りることは何も無い。こういううちってのは涼しいですね。夏は快適。ただ冬はね…。中の写真も撮ってあるから持ってくればよかったけれど。大黒柱があるでしょ。あれ1本しかいってない。3階まで。あとはもうみんな、だいたい12センチ角の柱。たいがい

のうちがね、大黒は3階までいってる。

問・・大黒柱って呼んでました？

答・・大黒柱ね。

問・・他に何か呼び方なんてのは？

答・・大黒柱と小黒柱。大黒から2間くらい離れたところにある。それも重要な柱だけど、まあ大黒柱でしょう。この辺もう、明治の時代から養蚕が長い産業として。だけど、だんだん20年から25年くらい前からね、生糸の暴落。中国あたりから製品で入ってくるんでね。着物とか何でもそうだけど。この辺でも養蚕がとてもお金にならない。果物とか野菜・果樹に転換をして、今になる。だから、こういう大きいおうちが今度はいらなくなる。もったいない。住み心地は満点ですよ。もう、打ち壊しちゃったけどね、ご先祖様が、ちょうど明治のころの図面だけだね。こうなってたな。うちのね、今から4代前。おじいちゃんだけだね。

問・・4代前の方が造られたんですか？

答・・造った。造った。このうちをね。

—家の歴史について—

答・・昔は家畜を大事にしてたもんだから、ここに馬小屋ってのがあるんですよ。ここに家畜を飼って、うちの中から餌をやる。間取りはこうなんだね。7畳半ここに部屋があった。ここが10畳。ここが8畳。ここが居間。昔はいろいろってのがあってね。知ってるでしょ？あと、養蚕するまでは、冬の暖房っていったらほとんど薪。うちの中がね、自然にもし火で黒くなる。うちは強いですよ。燃してるほうが。今のうちなんてのは弱い。火をたいて、その煙が廻るってのがね、材木としてはうんと強くなる。だから100何年も経ってもなんともない。住み心地が時代に沿わないからってのも建て替えをするようにしたけども。夏は快適だ。冬がちょっとこの辺厳しいからね。寒さがね。

問・・4代前の方っていうと、だいたい何年くらい前ですか？

答・・おじいちゃんはね、明治の前だ。江戸になるんですか？江戸末期っっちゃうことですか。このおじいちゃん生まれたの。明治25年で45歳だから。この息子が明治17年に生まれてる。昔のものっていうのはこういう和紙で、ボールペンだなんてものはないからみんな筆。今はもうこんなことできないでしょ？

問・・残らないですね。きつと。

答・・残んですよ。明治のころなんて、筆っていうのはすごいね。ちゃんと残ってる。今なんて、おうちを建てるときこんななんてしませんよ。だいたい大工さんに見てもらって。

問・このお宅は大工さんが建てられたんですね。

答・そうそう。このおうちはね。うちと、この向こうの部落へは行きました？岸本区長さんとこへは？

問・はい。

答・向こうの部落に2軒ある。そんでうちと3軒。同じ大工さんが造ったっていうのがわかってる。だんだん歴史を調べていくと、今の前の前の山梨県知事の望月コウメイさんってのがいるんだけど、今から3代くらい前の知事さんだけでも、その先代が大工さんで、その先代の大工さんに造ってもらったってのがわかってる。最近になってわかった。

問・それは何でわかったんですか？

答・それはね、向こうの部落にもう80歳くらいのおじさんがいて、その方からそういう歴史の中に、うちにも書き物があってね、望月コウメイさんの先代の大工さんが造ったというのがあった。だから、うちと向こうの部落とで2軒ある。同じのがね。

問・向こうの方のお名前わかりますか？

答・岸本左内さんっていう、区長さんのすぐ前の。

問・ああ、左内さん。

答・岸本区長さんの親戚だから、すぐ前のおうちだから見せてもらえばね。もう一軒は100メートルくらい上のおうちね。今、真部さんて人が住んでるけども、そこのおうちが同じ大工さんが造ってくれたという話です。昔のおうちってのはどこのうちもこういう風にね。で、今そこに空き家になってるうちは、座敷が一つしかないからね。ここから向こうないよ。8畳間とここで終わりですね。うちはちょっと大きかったから。だいたいこんくらいのおうちはあるけども、場合によっては座敷が一つしかないね。だからここに床の間と押入のような物置がある。たいがいのおうちはここにある。うちは座敷が二つある。客間と。たいがいのうちはもう少し小さい。

問・これは何で動くような感じに？（家相図の中心にある円形のことを指して）

答・それは結局、おうちを建てるときには、方角っちゅうもんがあるんです。鬼門だとか。で、ここでいうと北はこんな風になるんだよね。

問・北はあっちですか？

答・向こう側だね。たとえば、おトイレなんてのはここにあるでしょ？これが今はちょっと壊して車庫にしてあるけどもね。昔はうちの中におトイレ造るなんてことは絶対ないですね。外に必ず。どんなに寒い夜でも外に出て行くんだよ。

（中略）

問・この辺の部落の中で、一番古いお宅っていうのは？

答・一度、火事になっとなって話ですよ。先代の話によると。だからちょうど110何年経ってるっちゅうことだから、その前に、この家が焼けちゃったって話ですよ。その後は火災がないから。だから、飛び抜けて古いうちっちゅうのはないですね。みんなもう、同じような年代に造られたうち。だから、100年以上は経ってる。まあ、あとそこのうちもちょっとごたごたしてるけれども、概略はわかると思う。

問・中に入ってもいいんですか？

答・おうちっていうのはすごいもんです。柱、今この家の柱なんてのは何本もないですよ。みんな太い。こんな大きいものばかり使ってるから、3間くらい向こうまでいったってね。今はちょこちょこありますから、柱。ここに大黒があつてね、あと、こういうとこに柱があるだけです。

問・昔って結構こういうところに（柱が）あるお宅もあるんですね。

答・そうそう。で、ものが太いもんだから、3間くらい向こう行つたって柱いらんわけだ。太いものだから。今の建築なんて柱で持つてるようなもの。柱をその中間にしてやらんともものが細いから2階へいろんなものを造るなんて。だから梁が昔のはすごいね。（中略）それは屋敷神さんだね。今そこにあるけれども。もしあれだったら見てもらえば…屋敷神さん。

問・それは北に？

答・北側のこの位置にあるんですよ。入口が例えばこっちだったら、こっちの奥だとかにね。

問・別に方角が北って訳ではなくて？

—土蔵について—

答・そうそう、北の裏のほうにあるんですよ。だいたい裏。納屋の裏側。入口と逆のほうに。うちなんか、現状オクラがここにある。で、ないうちもあるんですよ。昔、土蔵があるうちってのは、この辺でも向こうとこっちで40軒ほどあるけれども、土蔵があるってのは何軒もないですよ。この部落でも土蔵があるうちってのは午後から行くおうちと、サダシさん？今はおばちゃん一人だけども。と、うちと、今空き家になってるのと、そこにあるだけだよ。

問・家の力みたいなものですか？

答・家の力みたいな関係があつたんじゃないですかね。昔はもちろん食べるものも自給自足でいってね、自分たちが一年中食べるものをみんな確保してたから、土蔵っていうものがあつたですよ。けども、この部落でも12軒もあるのに4



軒しかない。うちも土蔵だけは残してるけど。  
向こうの部落だってそうだよ。

問・あんまりなかったですね。

答・見ればわかるけども、数えても何軒もない。

問・この小屋みたいなのは？

答・それは物置。土蔵とは違う。こっちのはどれも柱が建ってあって、食べるものを貯蔵しとくところだから、あんまり一年中で温度差があると、食べ物食われちゃう。一定の温度で保つために土壁でくるんでた。屋根は俺たちが青年のころは白樺。白樺の皮でね、薄っぺらな石を白樺の上に乗せて。白樺が飛ばないように。つい最近、俺たちになってからですよ、こういうトタンにしたの。

—屋根について—

問・こちらの屋根は麦殻屋根ですか？

答・そう、麦殻。ちょうど40年経つ。トタンにして。うちの親父が健在のころ、ちょうど俺たちが青年のころだ。そのころ葺き替えをした。そのころ、茅だとか、麦とか作ってた。麦っていうのは3年か、もって5年くらい。麦藁の材料は持ちが悪い。茅だと、20年も30年ももつけど、そのころこの部落全部がそうだったんだけど、材料がなくなってきたから。なんとか雨漏りを防ぐためには、こういう方法しかないわね。屋根やさんも材料がないもんだからこういったトタンの技術を、職人さん覚えて。昔、屋根を葺いてた屋根屋さんが、自分たちが食べていけないってことで、この技術を覚えてんだね。昔、茅屋根の職人さんが、今度はトタン屋根を造るようになったちゅうね。ちょうど40年前、昭和38年くらい。

問・葺き替えとかには参加されたことありますか？

答・あるある。昭和40年の記帳したのがあるんですよ。いつ・何人手伝ってくれたってのがね。

問・そういう資料もあるんですか？

答・資料もある。今ちょっとごたごたしてるから。で、この当時ね、総額で50万くらいかかってる。40年前の50万でいったらね。すごいですよ。この辺なんか養蚕だけだったから収入がね。その当時で150万もありゃあ、1年中ですよ。その3分の1ですよ。親父よくやったなって感じですよ。今は150万や何百万たいしたことない。当時、40年前にこれだけのことをするってたいしたもんだ。でも、午後から行くうちは、維持管理してるからたいしたもんだ。

問・この辺で2軒あるんですよね？1軒が三枝さんのお宅で…。

答・そう、もう1軒がコマイさんね。柚口ってとこ。貴重ですよ。残したいと思ったんだけどね、ど

このうちも雨漏りがするから壊れちゃうでね。うちなんかでもこうゆううちを残したかったけど、やっぱり子供たち。時代と共にね。俺たちは親の身分でね、昔のうちはいいと思うけども、やっぱり子供たちはね。

—茅場について—

問・屋根の材料はどこから取ってきてたんですか？

答・屋根の材料はこの周辺ですよ。麦殻ってのは。この周辺、今は農地がいっぱい荒れちゃってるじゃない。で、茅がいっぱいできたの。屋根葺くには茅が一番いいから。材料には今困らないね、あのうち。ただ、秋になると茅を刈って春まで確保しとかないと。この辺、農家をやってる人たちが少なくなってきちゃってるから、畑が荒れてきてね。我々だけじゃとても管理できないから茅がどんどん出てきてね。ただね、昔は春・3月くらいに茅場を焼くちゅうことをしたんですね。火入れ。今でもやってると思うけども、害虫いるじゃない。それを退治するために。ここから1時間か1時間半ばかり行ったところに茅場ちゅうのがある。そこへいい茅がある。そしたら村総出で茅かき。茅場の火入れをやるの。必ず3月くらい。茅葺きのちよつと前ね。この辺だったらちよつと遅いくらい。4月のはじめくらいか。害虫を退治して新しい茅をだす。交代で茅取りだからね、茅場っていうのは。オユイと言ってね。昔はうちを一軒やったら来年は隣のうちだよって順繰りに部落総出で屋根を葺く。この平だけで1年かかった。材料を集めるのも大変なもんですよ。

問・そのユイはどの家を誰が手伝うみたいなのは決まってたんですか？

答・それはこの部落だったら部落の人たちが、次はお宅の番だよ、次はこっちだよってこの時代から決めていた。昔だったら材料いっぱいあったわけだから。ただ、車のない時代だから1時間半もかけて集めてくるだけでも大変なもんですよ。その茅場に行けばいっぱいあるけれども。やっぱり、茅っていうのは火を入れたほうがもちがいいらしいのね。いっぱいこう生えているけども、火も何も入れてないからもちはやっぱ悪いみたいね、害虫が入ったり。茅ってのは太いじゃない。だからその中に虫が入ったりするからもちが悪い。だから昔、火を入れたところはいい茅がでるですよ。長持ちする。

問・今はその茅場も？

答・今はもう植林をしてしまったから。全部木が大きくなってるけどもね。

—山の奥から平地へ—

問・この辺で本家とか分家ってのは？

答・・ありますよ。だから、昔はうちの大家さんってのがこの家です。うちは分家みたいな形です。

問・・このあたり、三枝さんっていうお名前が多いじゃないですか？

答・・おじいちゃんたちに聞いてね。昔は山の奥から住んでったらしいの。平地へ。高いところから下に。三枝っていうのは牧丘町でもここの部落と、向こうの柚口ってところにモロフシってのがあるの。そこに姓がある。三枝っていうたくさんさんの姓がね。武田信玄の24将の中に三枝〇〇ザエモンっていう武将が1人いる。

問・・その方の子孫？

答・・その方の系統になる。だから三枝ってのは三の枝と書いて三枝でしょ？名古屋あたり、日本全国にあるけど読み方が違う。ミエダとかミエとか。だけどこの辺はサイグサと読む。で、武田24将の中にひとり武将がいるです。三枝〇〇ザエモンっていうね。やっぱりこの一族の流れのようですね。で、やっぱり昔は山の奥から住んで平地へ。だから甲府盆地あたりは海だったって話ですよ。海ってことはないな。沼みたいな。だから高台から下に人間が下りていったと。先代の話はね。だから三枝ってのはね、他にはないです。牧丘町には。この部落と柚口のモロフシ。ここは今5軒かな。三枝っていう姓は。あとはスガノとキシモトさんって方。

問・・これはどこかに保存してあったんですか？

答・・この大家さんの家壊すときに、うちに全部任されて、ある程度古いものは俺が管理してたから。そのうちも見ます？

問・・寸法も測れるとこだけいいですか？

答・・いいですよ。

### 淡路栄氏

日時：平成15年8月4日

場所：淡路栄氏宅、チャノマにて

問・・それではよろしくお願ひいたします。

問・・まず、ここがいつごろ建てられたかわかりますか？

答・・明治19年か29年。それがわからないんですよ。その、図面を作ったのには29って書いてある。近くの方はもっと前だって言うんだけど、田舎の方は、家を建てたからってすぐに登記しないじゃないですか。だから、十年後くらいに登記しているんじゃないかと。でも、ここら辺が一番古くからあるっていう話なんですよ。

問・・そうなんですか。

答・・だから、この近くで20何年ころ建てたって家があるんですよ。その方が、うちよりもっと早くからあったって言うから、もっと早いかも知れ

ない。

問・・はい。

答・・まあ、本人から聞いた話じゃないから、本人っていうのはいけませんから。ここにいた方ももう亡くなられてわからない。

問・・亡くなって全く空き家になったところを淡路さんがお買いになったんですよね。

答・・空き家が7年。

問・・7年放置のままだったんですか。

答・・放置して、これを取り壊すってことで、もったいない、もったいないっていうかなんて言うの、何とかしたいなあって思って。まず最初にこの梁に惚れたんですよ。何とか活かせないかと。ずぶの素人なんですけど。できるかなあ、できないかなあと自信安危で、半年くらいかかった、ここに決めるのに。よし直してやろうと。人間って一度決めちゃうと、後戻りできないんですよ。

問・・そうですね。

—民家を修理する中で—

答・・こういう原形残している家って、今、ほとんどないですよ。あの、あちらに見える屋根の家があるじゃないですか。あれも昔はこういう家。昭和になってから造り直したと。ああゆう風に二階を、瓦上げて、2階も造って、日が当たるように。だから原形残している家ってほとんどないの。この前の家ぐらい。何故かという、後継ぐ人がいない。それから、おまけにおばあちゃん一人。だから造り直そうなんて考えはなかったんですね。周りほとんどの家がそうですよ。昭和になってから2階を、こいう原形はそのまま。ずっと窓があるじゃないですか、これはそのまま残そうと。

問・・ここは昔の趣をずいぶん残してますもんね。何か他に直していて、ここがっていう気づいた所はありますか？

答・・ないですよ。壁なんか家の家内と塗ったから、梁なんかみると素晴らしいですよ。原形みたいな、ほんとに未開とおんなじ。

—通し柱について—

問・・この家の特色として、この柱が上まで通ってますよね。それで、2階のところ削って細くなってますよね。

答・・あれですね、周りを少なくするためにしたんですけど。

(中略)

問・・あれも上の方少し開いていて。

答・・ええ、あれも力がどっちからかかって、こいう曲がっているんですね。だから、通し柱っていうのは本来は真っ直ぐにいていないといけな



んですけど、2階から細くして、細くしたが故に割れたのか、割れてますでしょ？

問・はい、割れてますね。

答・だから、あの曲がりをごの中柱でもっているのか、とにかく、こうゆう古いものをね、今は、なんていうの、壊すっていうじゃないですか。燃やしちゃう。あのミンチっていうの？あれなんかもうもったいないから、で、ここのねえ、遠い親戚の方がいるんですけど、ご先祖様にありがとうございますって言いますって言ってました。残すから。

問・一つ一つのをみても本当にしっかりとよくできていますよね。

答・昔は、手で引いたって言いますよね。今は機械で引きますけど。

問・機械とは明らかに全然違いますものね。この建具はもともとあったんですか？

答・ええ、建具はそのまんま。

問・これは新しく入れたんですか？

答・ええ、これは自分で造ったやつで、ここ何もなかったんですよ。素通しで、だからこれじゃまずいなあと思って敷居も柱も全部たてて、これなんかみんな柿渋なんですよ。

問・本当にこだわっていますよね。

#### 古屋古福氏

日時：平成15年8月5日

場所：古屋古福氏宅

問・このお宅の概要がわかる範囲でお訊きしたいんですけど。この建物がいつごろ建ったのかわかりますか？

答・わかんないですねえ。ここから向こうの方（増築部分）は今から40～50年前かな。詳しいことはよくわかんない。

問・改造とかは何回もされてます？

答・うーん、してないねえ。

問・昔のおじいさんか誰かが建てられた？

答・うーん、前のおじいさんも同じで婿さんで来られたからねえ。

問・避雷針でしたっけ？屋根についてるのは？それで今も雷が？

答・そうだねえ。夕立がちょっと。

問・あそこの隣の大きな建物は何に使ってらっしゃったんですか？

答・ああ、あれはオクラ。

問・そっち側にも何か。

答・ええ、こっちは台所ですよ。そこはお風呂場で。

—大黒柱について—

問・これは大黒柱ですか？

答・ええ、大黒柱。それだけ昔の年季だからガタが来

てしまっ。

問・一番上の棟まで通っている柱とかがってありますか？何ておっしゃってますか？

答・通し柱。

問・通し柱2つありますか？これも通し柱？

答・これと？あとあれも。

問・通し柱っておっしゃってます？

答・うーん。大黒柱？

問・通し柱は大黒柱と？

答・大黒柱だねえ。

問・一番上まで通っている柱が長野にはないんですよ。それでこの辺はすごく多いんでそれで実測させてもらおうかと。

—屋根について—

問・もともとの屋根は？今、屋根はトタンですか？

答・塗装。

問・塗装ですか。昔は何だったんですか？

答・昔は麦殻屋根っていうか草屋根そういうのだったんです。だから今のこれは、草屋根の上にトタンをのせてる。

問・そのトタンを葺いたのはいつごろかわかります？

答・トタンはいつごろだったかねえ。60？今はそういうのはみんなお金がかかるからどうしても塗装にしちゃうんですよ。でも塗装だとやっぱ何年か経つとね屋根のトタンが傷んでくるから。

問・昔の絵図だとか文書だとか、そういうのは残ったりしてます？

答・うーん、無いかなあ。

答・あそこに昔はみんな牛を使ってね、馬を使ったりして田んぼをしたけどね。あそこにあるけどね。あの物を置けるあれがうちの…。

問・たまにこの近くでも家相図とって、鬼門と裏鬼門が書いたものがあるお宅があったりしてですね。もしかしてあるかなと思ひまして。

(中略)

答・イヌ、クラ？とか言ってね、牛を入れて田を耕したんだけどね。

問・牛で？

答・牛でね。今は機械で田んぼもしちゃうけどね。昔は人間の手でね。

問・後ろは牛小屋みたいなものだったんですか？

答・うん。

問・ありがとうございます。

#### 古屋茂富氏

日時：平成15年9月19日

場所：古屋茂富氏、イドコにて

—この家の歴史について—

問・このお宅はいつごろ建てられたかっていうのはわ

かりますか？

答・・わからんねえ。わからんけど、俺が知ってる範囲だと、俺が物心ついたところおばさんがいたけど、そのおばさんが明治何年生まれだけど、その人が嫁に来たのがおそらく明治20年ごろだと思うけどね。だけど、その人も聞いてないってことだから、明治元年から勘定しても130年くらいだからね。

問・・それから大きな改造はしてますか？

答・・1回ね、どのくらいの改造かはわからんけど途中で改造はしてるね。

問・・建て替えとかではないですか？

答・・下はそのままかな。2階行くとね、2階にほぞの穴とかなんとながが柱にあるから、だからおそらく1回はしてるね。それと、今になると昔のチョウナで削ったやつね。あれがどのくらい前までやったかはわからんけど、今んなんと、チョウナの跡がついてる柱はたいしたもんだってことになるけど、だけど家なんかはチョウナの跡が全然ないからね。だからチョウナがないから、途中で全部建て直してるかもしれんね。下から。建て直したとしても、昔のことだから、その昔の材料をカンナかけてそれを使って建て直したんでしょうね。

問・・建具なんかも昔のうまくずっと使ってるらしいですね。結構しっかりと残ってますよね。

答・・そうだね。

—大黒柱・ウダツについて—

問・・あれは大黒柱ですか？

答・・大黒柱。

問・・大黒柱以外でなんか呼ばれてますか？

答・・いや大黒柱だよ。

問・・他に名前を呼ばれてる柱ってのはありますか？

答・・ウダツってのがあるじゃない。ウダツが上がるとか、上がらないとか。

問・・ウダツともいいますか？

答・・いやいや、ウダツは違うよ。

問・・両側の柱ですか？

答・・そうそう、ウダツってのはね。

問・・こちら辺でもそういう風には呼ばれてますか？

答・・そうだよ。

問・・昔から？

答・・そうそう昔っから。

問・・そうなんですか。それは一番上まで通ってる柱なんですか？

答・・そうそうそう。だからウダツ上がらねば、屋根にならんってことだと思うよ。

問・・ウダツがちゃんと上まで通ってないと、屋根もちゃんとなりませんよと。

答・・そうそうそう。

問・・ウダツっていうんですね。それで、ちょっと中の一番重要な所が大黒柱。あと中黒とか小黒っていうのはあるんですか？

答・・小黒ってのはこれだね。

問・・じゃ、上の棟木まで通ってる柱ってのは大黒柱は通ってるんですよ。

答・・そう、大黒は通ってる。

問・・小黒は？

答・・小黒も通ってる。

問・・じゃあ、結構上まで通ってる柱は多いんですね。

答・・そうそうそう。大黒と小黒とウダツと。

問・・こっちのウダツも通ってるんですか？

答・・そうそうそう。

問・・今だとそれだけの長い木とかって採れないから、長野の方だとだいたい途中で止まってるんですよ。

答・・あ、そう。

問・・それで、こっちのほうにそういう一番上まで通ってる柱がいっぱいあるから、で今回の調査でそういうのがいっぱいある山梨県に来たんですけど。そこの隣のお宅も取っちゃったから余計柱が真ん中に建ってるのがわかりますけどね。

—移築されてきた旧家—

答・・そうそうそう。この辺でもすごい家を見たことあるんだけど、大黒柱が4本建ってるって家があるだね。

問・・それはどういうことなんですか？真ん中にいっぱい柱が？

答・・真ん中でなくてね、ここに1本あって、それでそっちの真ん中に1本あって、それでここに1本あって、あそこに1本あって、4本。大黒柱が4本あるの。だからすごいじゃない。ど真ん中にこんなすごい大黒柱がドンと立ってる。そのど真ん中にまたドンドンって建ってる。

問・・あ、4つの正方形みたいになってるんだ。

答・・そうそうそう。

問・・それは大黒柱なんですか？

答・・そう、大黒柱。大黒柱が4本立ってる。

問・・どういう柱なんですかね？

答・・そういう家があるだよ。

問・・普通だと使わずらそうですよ。

答・・あれ1回見せてもらった方がいいと思うよ。前に牧丘の町長やった人の家。見たことある？

問・・はい。

答・・その人が、宮城県かどっかのすごい旧家で、おそらく何百年と歴史がある家だと思うけど、その家をそっくりそのまま持ってきて建てたわけだね。ここの通りだよ。ただ屋根は草屋根になってただと思うけど、草屋根にするわけにはいかんから、屋根は銅板で葺いたけどね。

－9尺の梁について－

答・・なにしろね、梁ってのは普通4寸の8寸が常識とされるわけ。それがその家のはね、3尺ある。

問・・それじゃ、たたみ半畳あるってことですか？

答・・そう、90センチある。

問・・へえー。

答・・梁が、全部ここに通ってる梁が90センチある。

問・・大黒柱とかはどれくらいあるんですか？

答・・大黒柱はたしか2本はあったかな。とにかくすごい家だよ。どっかね、座敷のそこら辺の柱に刀傷があるんだよ。そういう家。

問・・あそこは今どういう風な状況なんですか？見れるんですか？

答・・いや、前町長が住んでるから。行って見せてくれって言えばねたいがい見せてくれるよ。

問・・見てみたいですね。

答・・あれはね見ておく必要があるよ。あんな家ちょっと見れないよ。すごい家だから。

問・・梁が90…。それじゃ幅もすごいあるんですね。

答・・そうだよ。

問・・天井からその鴨居くらいまでってことですよ？

答・・そうだよ。

問・・（笑）。

答・・天井から鴨居なんて3尺なんてないよ。

問・・じゃ、もっとですか？

答・・70センチくらいしかないよ。まだあと20センチくらいだよ。

問・・（笑）。

答・・すごい家だよなにしろ。

問・・それがいろんな所に入ってるんですか？

答・・そうそうそう。この真ん中に入ってるのが3尺だよ。

問・・柱がどんなになってるか気になりますね。

答・・それで、屋根裏が見えるようになってんの。だけど、1カ所だけ、子供部屋を造るってんで、付けたいけど、それ以外は全然手が入ってないの。それで仏壇が幅が9尺あるの。それで段が7段か8段くらいあるね。段がこういう風になって、それで9尺のところ位牌がずっと並ぶようになって、おそろかね。それで、段と段の間が全部戸になって開くようになってんの。そこに仏具やなんかを入れるようになってんね。それをそのまま持ってきてここに造ってあんの。

問・・じゃあ、新しいものをなんかやっちゃうんじゃないかと、移築してそれをきれいにした感じですか？

答・・そうそうそう。すごい家だよ、とにかく。あんな家どこに行ったらないよ、ちょっと。おそらく日本全国でもそんなに指を折るほどはないと

思うよ、あんな家は。

問・・大きな家ですもんね。しかも、山梨県のこういう形が多いの中に寄棟の建物があると目立ちますもんね。

答・・あの家はすごいよ、とにかく。おそらく何百年経ってる建物だよ。でも、チョウナではないからやっぱり途中であれなのかな。手を入れてるってことかな。

問・・以前はそこもずっと土間だったんですよ、このお宅も。

答・・そうだよ。

問・・大戸も残ってるっていうのは珍しいんじゃないですか？

答・・珍しいでしょ。

－屋根について－

問・・屋根は昔は茅ですか？麦藁ですか？

答・・茅。

問・・麦藁は使ってないですか？

答・・麦藁は使ってない。

問・・じゃあ、この近くに茅場があって？

答・・茅場があって、部落に必ず茅場ってのがあって、部落全員で春先火入れをして、それで茅を刈るときも部落全員で行って刈るの。それで1軒の屋根を、1年で1軒の屋根を仕上げるの。だから50軒あると50年かかるの。

問・・順に回って。

答・・そう順に回って。だからものすごい人手がかかってんの。それもね、ここの茅場はね、こっから歩いて1時間じゃ行かないな。かなり早足で歩いて1時間じゃ行けないよ。

問・・今はそこってどうなってるんですか？

答・・今はもう木が植わってる。

問・・あ、植林したんですか？

答・・そうそう。

問・・いつごろまでそういったことはやってました？

答・・それはね、戦後はやってないからね、戦前だな。昭和15年ごろまでかな、戦争が激しくなっからはやってないから。

問・・それまではそういう風にやってたんですね。それ以後は茅の屋根を新しく葺き替えることはなく？

答・・そうそうそう。これを1回やるっていったら、茅の量だけでもものすごいもんだからね。だいたいね、茅場の面積が約10ヘクタール。そこにびっしり出ている茅を刈ってきて、その10ヘクタールの1年分の茅を全部1軒の家に使ってるわけだから、すごい量だよ、とにかく。

問・・100メートルかける1000メートル…。すごい。

答・・すごいことをやったもんだよ、昔に人はとにかく。

問・・じゃあ、だんだん茅が採れなくなったらトタンに？

答・・そうそうそう。この向こうに一軒、まだ今現在も茅で置いておく家があるんだけど。

問・・行きました。三枝行雄さんですよ。

答・・そう、三枝行雄さん。彼はね、すごい努力だよ、あれね。まあ、養蚕やらなくなったからそれも出来ただけけど、養蚕をやっているときだと、2階で養蚕をやるわけだから、2階だけじゃ間に合わなくてこちらにもお蚕さんを並べただけだから。だから、物を置くて訳にもいかないから。よその家の茅をもらって、それで人を頼んだりなんかして、毎年毎年茅を刈って、2階にぎっしり詰めて、物置に詰めて、それでいっぱいになったら今度は屋根を葺くだよ。だから何回くらいで葺いたのかな。4・5回くらいで葺いたのかな。でも、昔のような厚みじゃないよね。厚みがないよね。だから、おそらくあの屋根も葺いてからそんなに経ってないけど、去年あたり最後の仕上げをやったところだけど、おそらく30年くらいしか保たないじゃないかと思うけどね。

問・・火入れをした茅じゃないですもんね。

答・・そうじゃない、そうじゃない。

答・・そうするとやっぱり。火入れした茅となるとやっぱりちゃんとした茅場がないと。

答・・だからどこの村でも茅場があったのを俺は知っているから、記憶にあるだけでもかなり毎年毎年部落の人たちが春先火入れをしてね。

問・・ありがとうございます。

## 古屋茂富氏

日時：平成16年1月15日

場所：古屋茂富氏宅、イドコにて

—水車のはなし—

問・・オクナンドも寝るためですかね？

答・・オクナンドは…、そこへは寝なかったね。狭いから。

問・・そうですね、狭いから。

答・・まあ言うならば物置みたいなもんだね。今あのほら、食料を保管してた。水車っていうのがそこにあって、それで水車で粉をひいてくるとか、精米してくるとかってあるでしょ？そういうものをね、保管しといたわけ。あそこから出てきて、それで昔は良く、今じゃそんなことやらないけどドブロクなんてのを作ってね。

問・・ドブロクってお酒？

答・・そうそう。あれは正確に言うと違法行為、脱税行為ちゅうのかな。と思うんだけど、でもね、この辺じゃ一軒なしにドブロクを作って。

問・・ここに水車があって、近いからあれですよ？水車から近いっていうことですよ？

答・・水車？そんなのないよ。ここはハタヤだよ。

問・・粉をひいてたってさっき。

答・・ああ、粉をひいたのは水車だ。向こうに水車があって、向こうに共同のね。オオカワバタに。水量がたくさんないと回らないということだから。オオカワバタに水車があって、そこに交代にね、バンチョウイタっていうのがあって、このくらいの板にね、連名の名前が書いてあるわけ。で、その名前の順番に使うわけだよ。最後までいくとまた元へ返って。十何人かの名前があって。それでその十何名で米をつくとか、麦をつくとか。それで麦をひくとか、あれだよ。あの昔はほらモロコシがほとんど主食って言っていいほどモロコシを作ってたからね。

問・・自分たちで食べる分を？

答・・そうそう。そのモロコシを粉にしてね。

—便所のはなし—

問・・そうなんですか。それじゃあ平成7年～8年にトイレを造られる前はトイレはどちらにあったんですか？

答・・トイレはそこだよ。あれが昔のトイレだよ。今も使ってるだよ。

問・・今も現役で？

答・・今も現役で使ってる。

問・・農作業のときはそこへ？

答・・ただね、かたちは変わってるけどね。

問・・水洗になったりということですか？

答・・いや、水洗じゃなくてね、あの言うならば化学処理っていうのかな。化学分解みたいなのでにおいを出さないように。においを完全に消しまうような。あの、木の製材でもって木をひくじゃん？そのかすが出るじゃん？

問・・おがくずですか？

答・・あれとっしょにこう、攪拌することによってあれがすごいその消臭とか、殺菌とかそういう効果があるだそうだよ。それでね、それが入るタンクがあって、その中へその製材のひきかすを入れて置くわけ。それで上でもってスイッチを押すと、木のかすがこっちの筒の中にそのときだけ。まあ20秒か30秒くらいの時間入るようになって。それで今度はまたぴたっと止まっちゃうわけ。すると今度はこっちの方に螺旋のこういう回るやつが付いてて、二つ使えるようになって、結構長いだよ。この螺旋のこういうやつが。それでパイプが、あれが何インチくらいかな？7インチくらいあるのかな。7インチか8インチくらいあるこのくらいのパイプがこう通ってる。その中に螺旋のこういうやつ



が入ってるわけ。それがこうやって回ってくるじゃん？回ってくると自然に混ぜながらこう引き出してくるわけだよ。出てくると一番端に落ちるところがあって、で、下に落ちると下にためるタンクがあって、そこに落ちるわけだよ。

問・・においがしないんですか？

答・・においがしないの。そういう方式があって。

—馬喰の話—

問・・じゃあウマヤは昭和25、26年から何年ころまでいたんですか？

答・・その馬はね、45年ごろまでじゃないかな。

問・・結構最近までいたんですね。

答・・あの、馬がいたのはね、馬がいたのは30年代までだよ。その後は牛になっただよ。

問・・30年代は馬で、そのあとは牛。じゃあ40年代は牛ですね？

答・・40年代は牛。

問・・何で変わったんですか？

答・・あれはね、俺は別に牛にするつもりはなかったんだけどね、世間一般が牛を飼うようなあれになってきたわけ。それである日突然ね、馬喰（ばくろう）っていうのがいてね、あの、馬をおそらく、字は馬を喰らうと書くだけんど。

問・・馬喰、って何なんですか？

答・・馬喰ってね、それはね、あっちこっちにいたけど、その人たちがどっからか…

（解説：家を回って、連れてきた馬と交換して手数料をとりながら回る。炭をたくさん付けられる馬が重宝された。交換できないような馬は屠殺場へ持って行ってお金にした。牧丘には5・6人くらいいた。馬喰がいることによって、馬を飼ってる人は自然に広く馬の事情を知ることができたので、うんと助かった。）

佐藤一郎氏

日時：平成15年9月12日

場所：佐藤一郎氏宅

—ウダツについて—

問・・この大きな柱が何ていいますか？

答・・普通はね、わしらのほうじゃ大黒柱っていつてどこの家も、今は、ケヤキを使って、新しい場合はね、ケヤキをほとんど使うようにしてるけど。それは栗のようですね。

問・・妻面の東と西の柱が？

答・・そう、向こうとね。あれは上まで通ってる。

問・・その柱の名前が、ウダツというんですか？

答・・そう、俗に言うウダツと昔の人いうじゃんね。うん、ウダツ、ウダツというけんどもね。この棟通っている柱ね。よく考えたものだと思うよ。それで、これウシだとかなんとかね。（大黒柱

に差し込んである太い梁を指して）

問・・この水平材、ウシですか？

答・・そう、ウシというですね。

問・・こっちは何ていいますか？

答・・これは別にないけど、普通はほら、こういうのはもう梁というですけんどもね。縦梁、横梁ね。それをこう梁というですね。それこうやってこっちは横梁を入れてあとは垂木転ばしって言うね。

問・・特に、この大黒に向かって両側に伸びているのがウシ？

答・・そう、ウシといいますね。俗に言うウシ。それだから、もし大地震がきても、もしこうゆう木造の場合じゃ、ここの辺にいればね、命に影響ねえぞと、つぶされんぞと、家の周りみんなおっても、このウシの下はね、これは最後まで残ってこうゆう風につぶれるという、そうゆうことで、でかい大地震の時でもこの側にいれば、これが（ウシを指して）ピシャンと落ちてしまうときにゃ、周り中がね、みんな畳んだようになるけど、ここにいれば助かると、よく昔の人は言ったですね。これが、よくしてあるようですよ。折り込んでね。これもみんな元でしめてね。だから、ボシんと倒れることのないようにはしてあるようだね。だから昔の人は、ほんで向こうとこっちで通っているからね。ここが2間半、こっちが2間1尺寸と、だからこれが、この大黒柱のほうに立ってれば、これがコウモリを畳んだように、こうなるような原理らしいやね。

問・・へえ。

答・・だから、つぶれた時にはね。これはつぶれん、落ちんじやい最後までね、柱は。周りは落ちるらしいやね。ほら、持ち出しはね。だから、今までの建築で順に足してったものはね。どんどん端から壊れていくけんどもね。

問・・そうなんですか。

答・・だから、この根っこにいればね。地震が来たときでも助かるぞと昔の人は言ってたね。今のほら、釘付けなんかのもんじゃピシャンといっちゃまうけんね。これは、これはこう縦横通ってるからね。こうゆう梁もね、みんなこう向こうまで通ってる。ここで繋いでねえからね。ここで繋いであれば、いつピシャンと落ちるかわかんけんどもね。そこまでは、2間半から2間半はみんな梁も繋がっているから、落ちる場合にはそのはじっこから落ちるからね。そういう理屈らしいよ。

—土台・テコについて—

問・・柱の根本はどうなってますかね？

答・・根本はこれいらにね。わしもこりゃあ、古い家だったからね。1回あのおう、職人も入れてね。全部下動かしたで、あのおう、土台が囲う家じゃないだでね。土台をこう裏表いれるようにね、この大黒柱の下にちょうどこのくらいの石がね、自然石。丸いだけんどね、その上にこう。

問・・角を取ったのが？

答・・そうだよ。そんでおら、その石もちょっと直したでね。下の方へちょっとよじけてたから。建物も、昔はなんか車力屋なんてね。今じゃなんなおかしいと思うだけんど。昔は、重量のものを動かすものがなかったから、みんなロープはって、昔のテコの応用でね、はれば櫓くんで、こっちゃ上げる、てこで上げる。キリンとかジャッキとかねーころだけど、こっちあげれば、こっち重みをかければ櫓へこう、それで、石をいっぱいつけて、そんで、重りをつねにかかるような仕掛けをしておいて、そして、逆の方からテコで持ち上げる。ほんだからね、楽に上がるわけだよ。家の方も一通り全部やった。土台もこう楽にね。

問・・土台は、後から入れたのですか？

答・・そう、後から入れたの。周りは全部。そうだよ、いわゆるクツイシの上にみんな柱があったやね。そうだよ、クツイシでばっかりでね、うん。

問・・しかし、この大きさの石すごいね。

答・・石はね。ほんとにいい石をよっぽど探したもんだよね。こう真っ平らのね、しかもこう厚いの、まあ20センチくらいありますかね、もっとあるかな。

(中略)

問・・土台とかの修理はいつごろなされました？

答・・長いね。40年くらい前かね。

問・・その時は、ジャッキがない？

答・・そりゃあなかったね。50年近いけど、そういうものは。

問・・それでは建物？

答・・そりゃ全部テコじゃ。みんなおなしこんだよ。テコの方が割合こう仕事が早いっていうか、上へ動かすのにここにかっというて、ここにかっというて、ほいで、この長さによって今のキリンより長く、この重りも長ければ長いほど力らくなるでね。人間一人でも10人くらいのことは、ちょっと頭でやればあがっちゃうだよ。ここ、こんだけ持ち上げるのは10人くらいかかるかもしれんけどね、5メートルでも7メートルでも、こっこの枕を近くへいくか遠くへいくかで一番近くへいけばうんと楽になるだ。この原理でやればね、人なんか、わしもい

ろいろと仕事してるけど、上がりそうかなんて考えて、そういうことを考えればね、ああこんなもん重いから3人くらい頼まねえばなんていうけど、そんなもんはいらんていうことで(笑)。

(中略)

答・・場所がよくて、そこへテコをかって、そこで重い物で薄くて強いものがあれば、5メートルくらいのね竿があれば、50センチくらいのところに枕やれば、一人でも。そういう理屈だと思うよ。5メートルくらい離れればかなり重いものが動くよ、やってみろし試して。(中略) わしらのころはあれもやったよ。今十文字のこうなってるやつ、あれは4人か8人くらいかかっちゃね、こういう風に十文字になってるやつを。木で丸太が。そいでこう差しちゃって、これ1人なしがかかって、そいで2人ずつもかかって、木を下から大きい木で上げにゃあならんから、例えば谷から上げるようにして。それをこのシンボウでこう巻いてくよね、こう力で。グルグルグルグルグルー。ほいでかなりこうゆう所もね、とても今のレッカーでもやらんような木でも上げちもうで。でそのころ事故も、ほら、力が当分にそろってればいいけど、例えば1人でも、脱落者がでて駄目だっということになる、途中まで木が上がってきたやつが、こう逃げ場がねえから、一遍にこう逆回りをするから、それでこう死んだなんてことはわしらのころあったね。そうだよ。かんげえてみろし、今よりおもしろ時代だで(笑)。

—車力屋について—

答・・この下のお宮のその鳥居が下りを見ればわかるけど、桜の木のところ。その鳥居が途中で建ってるわね。石段の真ん中あたり真ん中よりちょっとしたくらい。あれ元下にあったん。道の側に。それをわしらもてんだっただけんど、車力がね、車力屋っちゅう俺あれはわしらは知らんだけんども、こうね、木の歯車がね、いくつかあるだよ。そんなに大きいもんじゃないけどね。こうゆう。それにこう太いロープがね、その歯車の上にね、上がじりじり動くだけんどね。あれは研究、俺も見ておけば良かったと思うだけんどね、力いらんだよ。これをね、ギリギリギリギリね、あのいわゆる歯車がどのくらいあるかね。だからその、力がかかんようにねできてると思うだけんど。木だよ、全部歯車も木だよ。ほんであれを。

問・・何をやってるんですか？

答・・あのおう、そのころは車力屋なんて言っただけんどね、その人も死んじゃっただけんどね、この下



の村にいただけんど、その人が家もね、こう動かしたけど。まあ、あれが…、どっかあの辺にあるはねどっかね。あのほら（げや・みや）下の。なんしろよそから技術は持ってきたもんだと思うよ。とても百姓にはわからんし、どっかね、技術よそから持ってきたはずだけんど。今のレッカーの仕事あのロープでやっても。そんで持ち上げて、ただ上げるだけじゃねえよ、そんでちゃんとあれを建てるやつを、今見ればわかるよ。そんであの石道路をね、俺あんなことを、どう、誰もできっこねえと言った時代だよ、そのころ。持ち上げて、ずりあげて、10メートルくらい上へ石段をこう、その中段のころへ。あの人はえらい金でもなかつただけんど、えらい技術はあったもんだ。

佐藤一郎氏

日時：平成15年12月12日

場所：佐藤一郎氏、イドコにて

一屋根の改造と棟木、大黒のはなし一

問・・例えばどういったかたちで改造するんですか？

答・・2階なんかの場合のはうちはこうなってるよね。その改造はなぜそういうことをするかってね。こういうようになってるわね。建物が。だからこれを改造するっていうと、瓦屋やトタン屋根にしたっていうのは、この柱を7尺なら7尺上げると、両方。するとこういう状態になるわね。屋根がこうなるから。隅から隅まで人間が歩けるわけだ。

問・・じゃあ屋根をこう上げるっていうことですね。

答・・そう。ここの柱を上げてね。こういうふうに。そうすると上ももっと上げるから、屋根だけ変えるから。勾配になるからここもまたね、若干上がるだよ。そうすると、この上もまあ歩けんけども、三角のこの辺までもね、今はだめだけんど、うんと使いよくなるだよ。

問・・だから屋根ごとう上げると？

答・・そう。上げるというこっちゃ。そして屋根の勾配を緩くするからね。これがまあ1尺ある場合じゃね。勾配が5寸勾配とかね、緩くなる。

問・・じゃあ棟の位置はそのままで。

答・・そう、棟の位置はそのまんまだね。それでも棟は上げんけど、草屋の棟じゃ今度は瓦の家の場合、棟木が持たんからね。あんなもんじゃ折れちまうからね。棟木もちゃんと大きいものを入れて。そして、勾配が緩くなるから、棟にかかる力も多くなるだよ。だからそうやって棟を造って。改造っていうと一番先にそれがね。このお蚕が一番いい時期にはみんながやっただよ。うんとこれはえらいだよ。こうなってる

とこでやるのは。ここからこっちは頭を下げないと入れん。

(中略)

問・・総2階にした家っていうのも今よくありますけども、だいたい昔は平屋で？

答・・そうそう。だから下から全部ね、建築している家は少ないだよ。みんな、その2階を上げてきたから。まあまだトタンの場合じゃまだいいけど、無理をして瓦を載つけて重みをつけた家は、ここがどう出ているか、その大工さんによってわからんけど、地震には今度は弱いよね。通し柱って行って、ここから上まで柱が通ってればいいけど、もし足してあればね。

問・・そうすると、当然真ん中の大黒柱とかも足されてるんですよね。

答・・いや、これはほとんどね、3階までいってるだよ。ふつうの家はね。大黒は。

問・・じゃあ増築してもここは変わらない？

答・・柱は変わらんだよ。ただ棟木の横へいくやつはね、入るけんども。そうすればこうなって。これはほとんどね変えない。

問・・真ん中を上げないでこっち（上屋柱）を上げたら勾配が変わって…。

答・・そうそう。

(中略)

問・・そのころは改造が盛んだったですか？

答・・そう、昭和34年の台風でつまらん家はみんなあっちこっちよじけちゃっただよ。蚕だけじゃなくて改造には台風の影響もあるだよ。だから、ちゃんとの家はねえくらいだよ。

問・・30年代は台風が良くきたんですか？

答・・来ただよ。それはすごいもんでね。

一方位のはなし一

問・・方角でカミ、シモとか、オモテ、ウラとかは言いますか？

答・・言うじゃんね。

問・・上雪隠もそういうカミ？

答・・そう、そういうことだね。座敷の方がカミになるからね。それでこっちがシモで。こっちがウラで、前、南がオモテになるね。ただ家によっては座敷が反対の家もあるからね、屋敷の関係で。だから、普通は西が本棟っていうだけんど、東が本棟っていう右の奥が座敷の家もあるね。屋敷の関係で、取り付ける関係で。それはあるだよ。

問・・東が本棟っていうのはどういうことなんですか？

答・・だから座敷がある方が本棟になるから。普通は西が本棟で。

問・・佐藤さんのお宅も西が本棟で？

答・・そう、本棟で。

問・西が本棟の方が多いんですか？  
答・そうだね。ほとんどそうだね。  
問・取り付けの関係で東本棟のお宅があったということですか？  
答・玄関から入って左側が座敷だね。入口の道路の関係で東本棟の家があるね。

戸田真二氏

日時：平成15年10月25日

場所：戸田真二氏宅

問・2階がありますよね。  
答・2階とあと3階、3階はもう屋根裏みたいになっちゃったから、2階はね、ちょっと倉庫があれだったから、そこぶちぬいて、2階の方へ上られるようにしちゃったんだけど、ほんとは全部ふさがっちゃってたから、上がるのはそこだけですが。3階はもう屋根裏で昔はお蚕をやったから。  
問・いつごろまでやっていたのですか？  
答・23年くらい前かな。そっからもう葡萄に切り替えて。  
問・葡萄に替わってからは、葡萄置く場所とかは？  
答・置くって、葡萄はもう切って畑でそのまま出しちゃうから。  
問・いつごろの建物かわかりますか？  
答・それが問題だね。わからんね。  
問・この柱は何か名前は？  
答・それは大黒柱。  
問・両脇は通し柱ですかね。壁の。  
答・うん、通しかな、確か。  
問・何か名前ありますかね。  
答・それあまりいわねえなこの辺じゃ。大工さん等は何かあると思うけど。  
問・改造なんかもされてますか。  
答・うん、結局ね、少しずつ少しずつ。  
問・この太い材（梁）は何か名前ありますかね？  
答・わかんないね。ただ梁しか。

(中略)

答・ここね、ここからこっちね、オダレってあのう、こっからこっちが外なの。それをこんだけ広げて。  
問・片方が、縁側がぬれ縁、  
答・そうそうそう、そうですね。  
問・あそこの穴は蚕用ですかね？  
答・あの穴なんだろう。  
答・なんだかね。おべちゃいねえ。しらねえ。  
問・あのう、外側の通し柱なんか名前聞いたことないですかね？  
答・外の壁にある通し？  
祖母・知らねえ。

問・あのう、昨日お伺いしたところでは、ウダツって呼んでたんですけども、聞いたことないですかね？  
答・聞かんですね。わからんですね。  
問・昨日、僕がお伺いした家の方は77歳とっておられました。  
答・それは、うちの親父と同じくらいだね。そのくらいの人だったらやっぱしわかったかもしれない。

—養蚕から巨峰へ—

答・餌くれねばあいつら死んじゃうし。  
祖母・だから、お蚕は偉かったですよ。  
答・すごい量だからね。  
問・なんか、昔、蚕の技術とかを教えに来るって方が来てたっていう？  
祖母・ええ、この西保の方にも2人はいたんですよ。  
問・ここにお住まいになっていたんですか？  
祖母・いいえ、塩山の方か、あっちの方にね、住んでてね。  
問・昨日行ったお宅だと、松本から来られた方がいたっていう？  
祖母・ええ。  
答・どっか向こうも結構盛んじゃなかった？  
問・そうですね、そこが15年ほど前までやってたって言ってました。  
答・ああ、そんなにやってましたか。  
祖母・だから、中牧だってお蚕だったんだよ。だから、中牧の方がそれより10年くらい前に葡萄に替わって、それが結局この巨峰のメインにね。  
問・なんかこう、葡萄とか栽培するようになると農業の関係で養蚕できなくなるって。  
答・逆だもんね。葡萄には、あのう、虫ついちゃ困るから殺すでしょ。それがこんだもし、隣に桑畑があったら、これついたやつ喰ったら、一発でいっちゃうね。  
問・へえ。  
祖母・そのへんぎりぎりの時やっぱはお蚕がね、亡くなったりね、騒ぎだったですよ。やっぱし、あっちでもこっちでもってね。  
答・あっちじゃ殺す、こっちじゃ生きててほしいって、それがもう餌に付いちゃうから全然逆になつて。  
祖母・だからその、それを食べたのはお蚕がね、もう生きてくるけんどもね、繭にならんで、みんなぼたぼたぼた下に落ちちゃうんですよ、こうゆう回転するからね。落ちちゃうんですよ。こんな太くなってね、みんな落ちちゃうの。  
答・一方じゃ殺す、一方じゃ生かすってそれがそっくり逆だから、殺虫剤だから。  
問・そういったことは、だいたいどれくらい前からで

すかね？23年前に？

祖母・ええ、23年前だね。22年ごろからちょうどそのような騒ぎになってね。

答・・うちはこの辺で遅いほうだった。だから、3年くらいかな、それよりまださらに3年くらい前から葡萄がでてきて。お蚕が減って逆転してきて。

(中略)

問・・そうゆう風に土間を板敷きにされたってことは、特に養蚕とは関係ないんですか？

祖母・いえ、養蚕には別に。

答・・そりゃあ、昔っからかな。

祖母・それはね、40幾年ごろ…と思ったね。オカッテをね。42年か43年ごろだったかな、確か。

答・・だからその前は、そうゆうかっこだったってこと？

祖母・うん。

問・・あのう、例えばなんですけど、よくこの辺のお宅で、2階が一部だけ出ているってお宅あるじゃないですか、ああゆう突き出ている部分というのはどうゆう風な名前と呼ばれるんですか？

祖母・しらんですね。

答・・どれ？

祖母・上の家のほら、そこの2階が突き出ているやつ、窓が、窓があって、開けてごらん。ほら、ああゆうふうに2階がね、なんちゅうあれだかね。そうゆう家が、昔はみんなお蚕する家はこうゆうあれがあったですよ？

問・・はい。

(中略)

問・・養蚕の先生ってのは、具体的にどういった？どうゆう風に飼うのがいいとか。

祖母・そうですね、やっぱり一応、蚕養のうちはね、みんなしらんからね、先生に聞いて教えてもらってね。ほいでね、公民館とかゆう、あっちの方の、上の方の公民館に寄ってお話を聞いたりね、したですよ。

## 戸田政守氏

日時：平成15年8月19日

場所：戸田政守氏宅、縁側にて

問・・この建物はいつ建てられたんですか？

答・・僕はあんまりよくわからないんだよね。話によると300年くらい前じゃないかってことは言われていますけどね。

問・・前からこちらに住まわれているんですか？

答・・はい、そうです。

問・・こちら辺のお宅ではよく、どこからか移築してきて建てられたお宅っていうのが結構あったりして。

答・・はいはい。隣なんかは移築だね。

問・・古い材木を利用したりして、昔の材木をいろいろ再利用ってわけじゃないですけど、うまく利用しているお宅が多いみたいなんですけど。

答・・昔からですから、今みたいなリフォームみたいな形で移築したようなことはないですね。ですから、ここに建てられたままだと思いますけどね。

問・・建てられてからほとんどなにもいじってないんですか？

答・・ええ、全然いじってないですね。当時のままですね。

問・・こちらの住まわれるところ(別棟)を建てられたのはいつごろなんですか？

答・・こちらを新築したのが28年前ですね。

問・・それまではあちらに住んでいたんですか？

答・・ええ、あちらで生活してましたね。

問・・じゃあ、以前はこちらはもともと…。

答・・ここは農地だったですね。

(中略)

答・・私も、向こうにオクラっていうのがあったんだけど、あんまり中に入れるものがないもんでいいやなんて潰しちゃったんだけど、そしたら周りの人に言われたけども、オクラなんて潰すもんじゃない。実際昔は備蓄というか、食料を保存しておくためにお蔵が必要だったんでしょうね。今は冷蔵庫はあるし、ショッピングセンターに行けばすぐに入手できるから。

—屋根について—

問・・屋根にトタンをかぶせるようになったのはいつごろなんですか？

答・・そうですねえ、わたしもその年代が記憶が定かじゃないんですが。私が15歳の時だから、40年前っていうことになりますかね。

問・・その前は茅だったんですか？

答・・そうですね。茅とか藁とかだったんじゃないでしょうかね。子供のころのことだったんでちょっとよくはわかりませんが。

—大黒柱について—

問・・お電話の時に柱の話で、棟まで通ってるって。

答・・ええ。大黒柱ね。棟まで通ってるかは私もよくは見ただけじゃないんであれだけども、みなさんに見ただければわかると思いますんで。

問・・柱のことについてなにか聞いたことがありますか？大黒柱の他に柱について。

答・・だから大黒柱だとか、小黒柱ってのがあつたわね。

問・・言いますね。たまにウダツとか言ったりするのは聞いたことないですか？

答・・ちょっとわたしそういうのは知らないんですよ。

(中略)

問・・特色みたいなどころはありますか？

答・・特色的なところは、ナカノマというところがあるんですが、そのナカノマのところ有一段下がった縁側があるわけなんですけど、そこから昔は偉い人が上り下りをしたというようなことは聞いてますけどね。ここには昔は3軒くらいしか家がなかったんですよ。もともとはですね。で、その中でここは分役所というかそういうふうなことをやっていたんじゃないかと言われてますね。ですから御触書みたいなものがありまして、その御触書を読んでいただければ。私もそこらへんはちょっと調べてないんで、興味がないからあんまり見てないんですが、そういうものがありますね。

問・・昔は農家だったんですか？

答・・農家ですね。農家で、甲府城ってありますね。そのホエイコウ駆り出されていったんじゃないですかね。徴兵じゃないけども。で、わたしの先々代のおじいさんが花火師だったんですね。花火小屋が川の向こうにあってそこで作ってたらしいんですが。

問・・その小屋は今もあるんですか？

答・・今はないね。

問・・3軒っていうのはどのお宅があったんですか？

答・・どの家がどういふ風にあったかはわからないけども、そういう風に聞いてはいますね。

問・・あと、建物の一番上の方にたまに棟札っていう、いつごろ建てられたかっていうのが書いてある板みたいのが貼ってあったりするんですけど、そういうのは見たことないですか？

答・・そういうのは見たことはないですね。

問・・茅はどこから取ってきたんですか？

答・・昔は茅みたいなもんも山に作ったっていうかね。または生えてたものを取って来たっちゃうことだね。

問・・ありがとうございました。

#### 奥山氏ご夫妻

日時：平成15年9月2日

場所：奥山朝則氏宅

問・・まず、このお宅がいつごろ建てられたかわかりますか？

答・・わからないね。先代か、先々代、まあきつと150年の上でしょう？だから、私たちが来てからだって50年くらいになるもん。

問・・そうですか。

答・・だからもうね、その前のおばあさんだって、70くらいまで生きていたからね。先代も、もう私たちがすることないほどいじくってあるから、いいぞってくらいいいじったわけよ。トイレ造ったりして、それで、私たちは私たちがまた、古

いから、この床板？床板からなにまで全部直して、それがもう15年くらい前かな？17年くらい前くらいに直して、それで順にこれまで直したんだけどね。そうやって手を加えるから、ね？こうやって、120年、150年～160年ですか。

—ウダツについて—

答・・あれも中央の柱も太いでしょ。もとはずっと普通の3寸だかなんだか、普通の柱。そんで、真ん中のここの入口の後ろの大黒柱は上までずーんといつてね、それは手をつけないけどね。だから、大黒柱は違うでしょ。

問・・その柱も、大黒だけ手をつけてないんですね。

答・・うん。

問・・他に何か、この辺の柱なんか小黒とか言ったりしませんか？

答・・そう。

問・・柱って言うと、よくこちら辺だと、大黒、小黒ってのが重要で、何かどのお宅でもそういう話か。

答・・うん、それあるでしょ。だけど、ほとんど大黒柱のことはね、これは途中だけど、大黒柱はぐーんと上までいってるから、ほんとにこの家を支えて。

夫・・一番上高いところまで、2階があって、その上の上2階っていうのがあるんですよ。上の2階がね。その屋根までいってるんだけど、大黒柱はね。

問・・他には、上までいっている柱はないんですか？

夫・・うーん、上までいっているのはないね。中2階だね。中2階で終わりだねこれは。

答・・もう上はね、一番上の柱は、もうこうなっちゃってるの。

夫・・あれね。周りの柱はほとんどあれだよ、中2階まで。2階の上までね。

答・・ほら、もう外から見ればわかったでしょうけど、家のはこうゆう屋根じゃん。普通の家のは二階屋で、3階まであれば3階まで平らでしょうけど、そうすれば柱はこうなるけど、家のは、2階までこうであとはこうゆうような感じでしょう。だから、一本で…。

夫・・いわゆる、ウダツってね、両脇の柱はウダツ。

問・・両脇の柱はウダツっていうんですか？

夫・・ウダツ。

問・・両脇の柱をウダツっていうんですね。

夫・・まあ、うちじゃそういつてるけどね。どうゆうもんかね、あれね。こうゆうところの柱もウダツっていう家があるよ。いわゆる、正面のね、2階へ抜けている柱ね。いわゆるその、あの、なんちゅうのか、ウダツがあがらんというか、昔っからね。それは大事な柱には柱だね。



問・・なにか、上までいっている柱の方が、ウダツが上がるって感じなんですかね。

夫・・うん。

問・・大黒柱のことはウダツとは言わないんですかね。

夫・・うん、言わないね。大黒柱は大黒柱だね。大黒柱は真ん中だからね。大黒と小黒はね。

問・・じゃあ、やっぱりウダツっていうのは、周り？

夫・・周りっちゅうより、んん。

答・・私たちはウダツなんてあまり言わなかったけど。信州で、あのウダツがあるのをウダツよって私たちね、観光で言われたけど。

問・・それって壁のことじゃないですか？

答・・壁だかなんだか、信州のほら、信州の方じゃ平屋の家でその上に柱が両側にたつ、それをウダツ、ウダツっていうのは、そうでしょう？

問・・えっ。

答・・あれが、ウダツのウダツが上がらないって言うのを、なんて私たち説明を受けたけど。

問・・柱のこと言っていました？

夫・・柱のことだな、ウダツは。

答・・だから、自分の家のウダツなんちゅうことは私いままで聞かなかったじゃん。

夫・・聞かなかったことと聞かんことじゃ、ウダツ

答・・ああそう、この辺の人はあまり言わないじゃんね。

夫・・なんかの時には使うさよ。

答・・ああそう、男の人はきつとね、そういうことはね。いくらか若いころちょっとね、お手伝いなんかしたことあるの。子育ての真っ最中。だからちゃんとした字もあるんだろうけど、ウダツっていう。

問・・字はわかります？漢字は？

夫・・ええっ！何がですか？

答・・ウダツっていう字があるんでしょうねってこと。もうね、頭がちょっと弱くなっちゃったからね。

夫・・ウダツはあるけどどんな字を書いたっけな。

#### －屋根について－

問・・屋根は何葺きですか？

答・・昔は、藁、藁葺屋根ね。それそのまんまの形態少ないの、みんなきれいになっちゃってね。2階を上げて2階屋にして瓦屋根にするとか、そうでなければ、金がかかるから潰しちゃうって新しくするとかね。

問・・藁葺きをやめたのはいつごろですか？

答・・そうね、藁葺きをやめたのは、うーん、45年くらい前だね。45年くらい前にトタンに直したね。

夫・・トタンっていっても下はあれだよ、藁入っているよ。その上にかぶせてあるの。

#### －養蚕について－

問・・いつまで養蚕はなさっていたんですか？

答・・そうそう、もう果樹になる前はほとんどこの辺は養蚕、こんにゃくが盛んでね。それで果樹に転換すれば、片っ方は殺虫剤やるのにお蚕は虫でしょ、だから両立できないようになって、仕方ないって転換したんだけどね。

問・・へえ。

答・・そうそう殺虫剤をやるから、その周りがある桑をあげられなくなって。でも、今でこそ値段は悪いけど、当時は、変えたばっかのころはよかったわよ、果樹もね。

問・・養蚕から果樹に変わってきたのはいつごろからなんですかね？

答・・そうだね、24年～25年くらいちゅうことだね。若い人は早くから果樹に転換したけど、うちはいつからだったか覚えてる？

夫・・いつだったかな、忘れちゃったな。

#### 今井秀郎氏

日時：平成15年9月20日

場所：今井秀郎氏宅

問・・ここに移り住んでらっしゃるんですか？

答・・ええ、そうですね。住民登録はここじゃないんですけど、一応仕事場として形態はそういうかたちになっています。実際はほとんど暮らしているようなものですが。

#### －黒平地区とのつながり－

答・・甲府の昇仙峡の上の方に黒平（クロベラ）っていう地域があります。昇仙峡をどんどん上がって行くとね、“黒い平ら”って書いてね、クロベラって読むんだそうですけど、去年か、たまたま山を越えてそっちへ抜けたことがあるんですけどね、ここと同じような家があったんですよ。ああ、こんなに遠くにも同じような家があるんだと思ったら、やっぱり昔はつながりがあったみたいですね。山を越えて。このあたりは藤原っていう姓が多いんですけど、黒平のほうにも藤原姓が多くて、行き来とか人の交流があったみたいですよ。建築の建て方もきつと何かもともとこういうやり方の家っていうのを育てた棟梁や職人さんが広がっていったのかなっていうのを感じたことがあったんだよね。こんなに離れたところにそっくりの家があるってびっくりしたことがあった。やっぱり人の交流があったんですね。

#### －この家を借りることになったいきさつ－

答・・意外とね、そのまんまなんですよ。比較的傷んだままです。よろんでるっていう山梨の言い方があるんだけど、北側がもう下がってますよ

ね。なんとなくこういう傾斜を感じませんか？北側が沈んでるんです。

問・こちらの方にはいつごろ来られたんですか？

答・ええと仕事場を探してふらふらと何故かここまで来ちゃった。最初は青梅のほうとか探してたんですけど、奥多摩とか。だんだん知らぬ間にいい家に出会えないでここに来て、何も知らない地だったんですけど、たまたま小さな廃屋を借りることができて、ここに10年近く。

(中略)

問・お仕事でこういうふうには全部作られたんですか？

答・一応作ったものを置く場所として、場がほしかったっていうのがきっかけでね。仕事場だけではもう作った物が置けなくて。

妻・なんか向こうがいっぱいいっぱいになっちゃって、探してたんですよ。たまたま老夫婦が息子さんと同居するというときに、声をかけてくれて、とてもすてきだと思ってたから、一度中を見てみたいと思って、約束をしてたんです。いつか見せて下さいって、そしたらそういうことになって、どうぞどうぞって、そのときからここに住んだらどうっていうことになって、引っ越しも手伝って、全部色々な物を置いてってくださいったんですよ。

答・これもそうね。もともとここにあったものじゃないんです、この千本格子は。あの、この裏手にこの辺で一番財があった家なのかな。油屋さんっていう屋号で呼ばれていて、財力があって、油を取り扱うお店をやってて。当時は油屋さんがお医者さんで、取り壊すときに、立派な家だったんです。でも屋根の雨漏りがひどくてね。僕も借り切れなくて、あまりに傷みがひどくて。もう屋根に上がれないから、立派なうちだったんですけど。それで取り壊すときにこれをもらってきて、ここに入れた。だから、僕が借りた当時とは少し変わっている。でも基本的にはあまりいじらないようにしようってしてるから、だから床もブカブカですよ。

(中略)

答・いわゆる本家と言われている家は、もう1間、2間か向こうにありますよね。で、床の間の向きがこう南面になってて、付け書院がだいたい付いてますよね。

問・そうですね。ここは分家なんですか？

答・そう。

問・だから3間取りくらいになってますよね。

妻・造りは田の字で。いちばん最低限ですよ。

問・そうですね本当に。言われてみれば。じゃあここもどこかの分家だったんですか。

答・だと思えます。

妻・老夫婦がね、黒澤さんっていう方だったんです。外に名前が残ってるんですけど。で、その方の持ち家かなって思ってたなら、その方も借りてたのね。で、その持ち主はもともと住んでいた人から買って、今は川崎に住んでらっしゃる方がこの持ち主で。まあ別荘代わりに買ったんでしょうけど、あんまり使わないで。それで私たちが住めたっていう。こういうのは(小さな筆筒)みんな拾ってきたんですけど。今解体されるとこういうのっていらなくなるじゃないですか？

問・はい。

妻・これ(千本格子)が入ってたって言うお医者さんの家はすばらしかった。いわゆる豪邸でしたよね。4階くらいある家で。

答・養蚕ができるようにとにかく床面積を増やすっていうことで、2階、3階は低かったですよ。

妻・それで階段筆筒があって、とてもすてきな。

答・蔵が3つも4つもあって。

妻・それでチャンスはあったんですよ。でもそこを直して工房とするにはあまりにも大きくて私たちはその当時は手が出なかったんですよ。そこで小さな廃屋をちょっと建て直して、工房にしたんですよ。でも今思うと残念なことをしたって。それからすぐ解体されちゃって。門がすごく立派だったんです。

答・総ケヤキで。

妻・今、塩山の、骨董生活館だけ。信玄館の裏に。あそこの入口の門がそこにあったのが移築されている。

答・総ケヤキで、すごく立派だった。家そのものもね。

妻・壊されると聞きつけてきたときに助け出したのがこれ(千本格子)だった。階段筆筒なんかはどこかの骨董屋さんを買われてなかったし。

問・ありがとうございました。

小田切幹雄氏

日時：平成15年8月5日

場所：小田切幹雄氏宅、イドコにて

問・小田切さんのお宅は、いつごろ建てられたんですか？

答・おばあさんがね、92歳ですから。で、旦那さんが、同じくらいの年ですから、私の父の話ですけども140年～150年位前じゃないかと思えます。150年くらい前なことは間違いありません。その前はわからん。

問・150年くらい前ですか。江戸？

答・それぐらいちゅうことはわかっただけだね。途中で100年くらい前に火事にあっるとですよ。



それで、移築されてきてるんですよ、この家は。だから、この家の元の家っていうのはお寺みたいでこういう家でね、ここにもあるけどもそういう家だったんですよ。それをこの辺に移築したんです、100年前に。で、親の言う話では、150年くらいは経ってると、当然。100年だか200年だかそれはわかりませんが150年以前は間違いない。

問・それはみんなおじいさん、おばあさんの古いお話で？

答・そうそう、そういうことですよ。

問・で、棟札みたいのがあったりとかそういうのは？

答・それはないと思いますよ。

問・じゃあ、移築の前は、火事にあって…隣村っていうと？

答・今の…ほとんどわかる人はいないですけどね。そういう家らしいですわ。

問・代々、お蚕さんで？

答・そうそう。昭和44年～45年くらいまでは養蚕でした。昭和45年くらいね。養蚕とこんにやくとね。それがだんだんと果樹にね、転換されていった。それで、今は私のところは巨峰が中心で。

問・巨峰の他にもいろいろ作ってらっしゃる？

答・うん。リンゴ。あと、桃ですね。今は桃の最盛期だからね。

—しっくいのような白いトタン—

問・他に改造みたいなことは？

答・改造はこの周りだけ。サッシで。昔は引き戸でね、ずーっと長いから。そこに〇〇ちゅうのがありますね、ガラガラガラっと朝起きて全部あれして、また夕方しめる。大変だからね、朝は。それで、玄関のとこだけは改造しちゃった。今そういう家はないもんね。困るもんね。

問・そうですね。まず、入ってくるとき、この白い壁がすごいきれいじゃないですか。あれもまた塗り直したんですか？

答・それはね、ドカベなんですよ。けども、節だとか雨風があるもんで、白いトタンになってます。

問・トタンなんですか？

答・トタン。それね。漆喰じゃないですよ。

問・すごいきれいですよね。

答・遠くからみるとね、あの辺が…白いトタンですよ。台風の時雨がかかるでしょ。土じゃ困るから。

—柱について—

問・漆喰に見えましたね。きれいで。大黒柱は？

答・それ、それが大黒柱。3階まで通ってますよ。そんな大きいもんじゃないけど。

問・これ大黒柱って呼んでました？

答・それ、大黒ね。それで、中黒がこれになる。古い家はね、大黒・中黒があるわけ。この2本でこういう家はもってる。ほとんどね。

問・中黒柱は上までは通ってないんですか？

答・通ってます。

問・2本通してあるんですか？

答・だいたい昔の家はそうですよ。

問・そうですか。長野から来れば、全部が特別なように思えるんです。

答・いや、そうでもないでしょ。長野も古いのあるでしょう。

問・でもこういう風に、上まで通ってる柱ってないんですよ。何階まで？

答・一応、平屋ってことになってます。登記上はね。3階まで使えるけど。

問・養蚕でめいっぱい3階まで使ってたんですか？

答・まあそうだね。たくさん養蚕やって、畳あげちゃってね。それでね、どうしてもね、火を使う。蚕の時に、昔では燻すといった。だから、どうしてもこんなに黒くなっちゃってね。煙が。

問・大黒とか小黒っていうのは、木は何の木ですか？

答・なんなのかね？ちょっと知らない。専門のものはわからんけども。

問・じゃあ、ほんとに周りだけ（直したんですね）。

答・そう、周りとかあいうとこね。昔は土間がこうつながってた訳よ。そういう間仕切りをしちゃった。

問・そこは土間だったところを変えちゃって？

答・そう。そうだね。あとはみんな古いですね。

—草屋根について—

問・屋根は？

答・屋根は草屋根なんですよ。草屋根に、亜鉛鉄板をのっけてる。今の灰色のね。勾配に焼き付けをしたのかな？勾配に、ビニル塗料を焼き付けた。温度が非常に高くなるもんだから、溶けるんですよ。山梨のあたり、去年なんて37度～38度までいくから。鋼板と、ビニルとの接着がね。大阪のね、タカタ屋根？この屋根を塗装してくれたの。山梨県じゃ、かなりトップだったんじゃないかな。

(中略)

答・草屋根ね、全部で3億？この時代で。そうしてるうちに日本ステンレス。だから、この家の屋根の方とすれば、この工法はかなり古いと思えますけど。

問・草屋根って言うのは何の？

答・茅と麦殻。昔は茅だったけども、茅ないから。どうにもこれが不可能でね。ものすごい茅と、人

が。茅だと、夏、刈らなきゃいけないでしょ。人がない訳よ。茅場がないっちゅうのも。この辺は、米の裏作で麦を作っていましたから。それで麦穀。

問・垂鉛鉄板やったのはいつ？

答・そうだね、昭和50年くらいか？まだ、25年も経っちゃいないのかな。それまでは屋根は草屋根。

問・そのころ周りはどうだったんですか？

答・周りも草屋根のおうちがかなりありましたよ。この部落、草屋根が多い。それが、若い人がある家ほど、新しくなっちゃってね。

問・今から20年～30年くらい前までは全然そういった姿だったんですね。茅場ってのはこの上に？

答・山の裾がね、原野みたいなんです。植林がしてなくてね。そこを交互に刈った。それで、茅場を失ったってのは、植林をしなければ経済的にってのもでてきたわけよ。で、茅場がなくなってきちゃって、草屋根を維持することすら難しくなってきた。

問・茅場はこの辺にはもうない？

答・もうないね。で、その必要性がもうないんだろうね。この牧丘町でもね、もう1軒か2軒くらいじゃないかな。

問・確か、そのような話もお聞きして、三枝行雄さんところとか。

答・ああ、行雄さん。あの家も古かったでしょ？

問・そうですね。

答・コマイススムさんのところへは行った？そのうちがね、まだかけてありませんよ。元、農協の組合長さんでね。

問・三枝さんのお宅はこれから少しずつためって、葺き直すんだって言っていましたよ。

答・そう。だから、大変なんだよね。維持することが大変。

問・茅の葺き替えは、この町の人たちでやったんですか？

答・昔はそうらしい。一代でね、交互に手伝ってもらったりして。1年のうち、1つの部落で1個の家なんてことはできなかったですから。2年に1回くらい。一生に1回くらいじゃないですか。それくらい茅ってのは強かった。私は覚えはないですよ。父の代にやってみたいですよ。父が93歳、その父が子供のころに覚えがあるとかないとかで。

問・小田切さんのお宅は、家の建て替えからずっとここに住んでらっしゃるんですか？

答・そうです。ここの部落ではお寺さんが〇〇。お墓へ行けばわかるけどもね。この家が一番古いですよ。

問・ここの村では一番？

答・ええ、ここの部落ではね。お寺さん行けば、過去帳？っての見ればわかるんだけども、お寺さんが焼けちゃったんですよ。でも、石の墓石の古さ。お寺さんがそう言うってくれるから古いんでしょう。

問・お寺さんて何？

答・普門寺。曹洞宗のね。

問・そのころって言うのは何やってらっしゃったんですか？

答・農業でしょう。結局、蚕ってのが長かったらしいですよ。養蚕のできないときは、ここのおじいさん炭を焼いてた。1週間くらい泊まり込みで。それを、当時、車といっても小さいでしょう。2時間くらいかけて行った。で、だして、換金してたらしいですね。そういう話は親父から聞いてますよ。ちょっとした農家だったら、そういうことをやってたんでしょう。昔は今と違って、お金がそれほど必要ではないけど。

問・1週間くらい泊まって？

答・そう。食事をもってってね。簡単な小屋があったんでしょう。

問・そういった小屋はどういったものだったかわかりますか？

答・それは…。おじいさんの代のことだからね。かまどは山へ行くとあるんですよ。石を積んでね。昔はね、材木のあるところに釜を造っちゃうんですよ。で、なくなれば次の山へね。そういう方式らしいね。

問・原生林のとこやってって、焼いては植林して？

答・そうそうそう。

#### —牧丘町の歴史—

問・この村が、もともとどういうところから始まったかご存じですか？

答・これは歴史の分野になるんだけど、牧丘っていう名前はね、中牧・西保・諏訪町の3つが合併しましてね、こないだでちょうど50年になる。牧丘って町は歴史がありましてね。武田信玄の軍馬を飼育したり訓練したりする馬場だったっちゅう話。隣山っていう山があるんですよ。オーチャードビレッジ新地っていうあたりの上の方。ずっと鼓川っていう川があってなだらかな丘だった訳ですよ。だからこれを牧の庄と言った。いわゆる馬場。馬を飼育する場所ね。それにちなんで牧の丘ということで牧丘となった。だから信玄の時代から、馬を飼う場所だった。それで、今の地区というやつね。この川の向こうは馬場。バンバといひます。馬の場所。それが信玄の時代だね。もう少し、歴史があっ

て、行基って知ってる？その人がね、修行したと言われるお寺がその普門寺ですよ。それで、その時代から人が住んでたのは事実であって、この行基が庵をともして、いろいろとあれしたっていうことで。ホオリアン？すぐそこに行基おいさかとかね。そういう歴史がずっとあるんですよ。この部落に対してね。

問・中世の末期の方じゃなくて？

答・そう。そうです。武田の系統になるのかな？安田義定。この人が、築城の途中で落城しちゃったの。城跡があるんですよ。で、その人が、切腹したと言うね、腹切り地藏っていうのがある。こっからはない下だけのお地藏さんが。その時代、古い時代からここには人が住んでいたっていうね。

問・みなさん農業？

答・ほとんどはね。でもその当時、戦争が起こればみんなかり出されちゃうから。狭いところだけでもね、歴史はうんと古いですよ。

—本家と分家—

問・この部落で、本家と分家で別れていますよね？そういう制度とかはあったんですか？

答・ありました。分家と本家。私んところも分家を出しています。あとは隠居とかね。

問・そういったのはやはり、本家の近くに造るんですか？

答・そうそう。だいたい近くだね、その部落内。昔は31軒あったんですよ。でもね、本家は残るけども分家はね。2代か3代のうちにしまってしまう。

問・家の形って似てるじゃないですか。そういったのは地元の大工さんが？

答・そう。大工さん。

問・職人さんの村が近くにあったとかは？

答・いや、そんなことはない。こういう狭いところだから、分家とか、そういう人が技術をあれして…。本家からは職人は出ない。農業の片手間でやって、その片手間が本業になっちゃう。

問・本家を造るときは別の職人さんが？

答・ええ。自分の好きな方をお願いします。で、造っていただいて…。

(中略)

問・移築ってというのは建ってたままを？

答・この家焼けちゃったでしょ。焼けたから、この辺に合うような部材を、先祖が買ってきたんだね。そっくりその家を。で、つぶして、もう1回組み立てた。だから古い跡があるでしょ？どうしたってそっくりちゅうわけにはいかん。

問・ありがとうございます。

—歩きながら—

答・これがね、大黒の2階の部分ですよ。

問・だんだん細くなってますね。あれが中黒？

答・まだつながってるでしょ。

答・これだけでもってるんですよ。縦のあれには強いですよ。これとそれでもってるんですよ。このうちを。大黒と中黒。

(中略)

答・屋根は、こうやって竹を使ってるんですよ。針金も使ってありますけど、縄なんですよ。

問・竹が多いんですね。

答・5間半もあるからもっとしっかりしたものがあるだろうと思って上って見てみたけども、やっぱりこれで〇〇なんです。長年下から燃しつづけるから、かえってすすけることが強くしてるのかもですね。

問・今の縄とか使うと切れちゃうんですよ。

答・そうでしょうね。昔はこれ、手でやったんだろからね。角の柱も下からきてるね。いずれにしてもあの真ん中2本が、こういう建築の主要な部分ですから。今、3階まで通ってるのがあんまりないから。

小田切幹雄氏

日時：平成15年12月11日

場所：小田切幹雄氏宅、イドコにて

—ケブダシについて—

問・ここら辺のお宅でよくケムダシっていう突き上げた部分があるじゃないですか？あそこは特に使い道みたいなのは？

答・使い道っていうのはね、結局屋根裏の部屋でそういうふうにお蚕が大きくなってから飼うでしょ？だから、換気。

問・換気ですか。

答・一番のあれは換気です。空気の換気をよくするということですね。それで下で火を燃すでしょ？それが外へうまく流れなきゃ困りますね。だから、そういうこと。煙を出す。それが主たる仕事だね。この辺はほとんど、ああいう風なね、煙窓があるわけですね。

—マイシンについて—

問・そうですか。昔はここに炉があったんですか？

祖母・この部屋にあるですよ。

問・イドコに昔あった？

祖母・マイシンちゅうがね。

問・マイシンですか？

祖母・その畳を上げてね、見ればそのマイシンちゅうがね、木をいけて、こういけてそれに火を付けてね、それで温度をかけてたから。

問・マイシンっていうのは囲炉裏とは違うんですか？

祖母・そう、大きい。

—切妻屋根と牧丘町の気候—

問・気候で、山梨の気候はあまり雪は積もらなくて、風もそんなに強くはないと調べてわかったんですけども。

答・風はね、山梨県の場合はね、甲府盆地の場合は、盆地から西の方は強いです。

問・西が強いですか。

答・北巨摩、それから中巨摩、甲府盆地の以西、西側は強い。甲府盆地の東側から西八代、東八代、東山梨、塩山、山梨（市）ね、こちらの方は風は比較的弱い。この地域はとにかく風は少ないです。特にこの牧丘なんていうところは少ないです。

問・何かこういう切妻の屋根が多いじゃないですか？

答・ええ。

問・切妻で茅葺きっていうのは、風にはそんなに強くはないと。

答・ええ、そうですね。

問・やっぱり弱いところだからこそできたのかなと。

答・昔っからね。それは言えるでしょうね。

問・特に台風が来てだとか、たまに雪が積もって損傷を受けたとかはないですか？

答・雪は最近はないね。大雪ちゅうのはほとんどないね。

問・台風も昭和30年代は比較的？

答・そうだね、7号台風が一番あれだね、あれは昭和34年だったかな？7号台風。あれが一番記憶に残る大きな台風だね。

## 高原左門氏

日時：平成15年9月2日

場所：高原左門氏宅

問・建築年代みたいなものはわかりますか？

答・そうだねえ、以前住んでた人が何年いたかはわからんけど、父親が住んで結婚して間もなくだから、ちょうど70年。その前の代が何年だったかなあ。どっちにしても約100年かそれよりちょっと前？

問・何かそれは記録か何かあったりしますか？

答・記録は特にないなあ。口づたいで。別に文化財ほどのものじゃないから。まあしかし造りは釘は使ってないらしい。だから、梁なんか後ろまで一本で。原木も昔の手斧を使ったりしてるからこう曲がったりして、通してあるんだと、まあそんなようなことです。だから100年か、せいぜい100ちょっとじゃないですか。

—大黒柱について—

問・そうですね。特にこの一番上の棟木まで通っている柱を大黒柱と？

答・ああ大黒柱はそこにあるけど、あの上2階までね。今屋根は切れてるけど、当時父親が明るくするために切ったけども、ずっと下まで上から軒まで1枚だった。だけど2階が暗いから今2段になってるけど。

問・普通より奥行きが結構ありますよね。

答・そうだね、4間半から5間近いかな。

妻・そっからそっちは後から付けたんですよ（家の裏の方を指さして）。

問・後からですか。

答・それでもまあ4間半くらいはあるのかな。

妻・あとはほとんどそのまま、そこが、この辺が土間だったんですよ。昔はね、玄関のところが。お蚕さんしたから。

—かつて地主だったころ—

問・昔の地主さんっていうのは土地を持ってないと思うね。うちあたりはかなりの土地を持ってたんだけど、父親が兵隊へずっと行ってたからね。もう軍人一家だから、その間に農地解放があって、みんないいところを貸してた人たちが買い取ったっていうか、ほんとわずかだけね。株分けしたらしいよ。昔のお大臣は逆転されたね。もう戦争にね。

問・昔から地主さんの家系だったんですか？

答・まあ小作米で裕福だったんだね。もう百何俵くらいもらってたらしいよ。だから「きそたんぼ」ってあそこにあるだけでも、そこに赤い屋根の神社がある。あれもまあ僕がやってる神社なんだけど。その辺が「きそたんぼ」っていうんだけど、あのだ真ん中相当持ってたらしい。今一枚しかないけど。ど真ん中に（笑）。今はもう貸してるけどね。そのくらい田んぼとか畑を持ってたんだよ。やっぱり戦争はよくないね。いい人もいたけどね。よかったっていう人も。

—屋根について—

問・屋根はいつごろやられたんですか？

答・屋根はそうだね、僕が帰ってくるときはまだ茅葺きだったからね。茅葺きで、そのあとトタンをかけて、もう茅を手に入れるのが大変で。トタンをかけたのは昭和40年過ぎだね。昭和43年ころまでにかけてのかな。それで今のこの屋根にしたのは、15年ばっか前かな。16年～17年前かな。なかなか壊れにくくて瓦に似てるなんて言ってね。この辺をモデルにしたっていうことだよ、この屋根はね。それで調子に乗りやすいから、はいはいなんて言ってね（笑）かけた。でもね割合安くやってもらったから。そのかわりに。

妻・瓦より地震の時は大丈夫みたいだけど。

問・トタンみたいに何か塗らなくていいみたいで



し。

妻・・そうですね。それで楽かなって思ってね。

答・・でも雨降ると音が大きいね。固いトタンだからね。あれはちょっと考え物だな。

妻・・2階があるからまだよくなって、こっちなんかぜんぜんわかんなくて、裏のほうだけはちょっとね。その部分がないとわかる。

答・・茅葺きができればね、ああいうのはやっぱり住みいいね。

問・・やっぱりトタンとかになってきたのは、やっぱり茅がなくなってきちゃったからですか？

答・・そうだね、僕がまあ帰ってきて川崎重工っていう会社に籍を置いたときにはもうお客さんももう、吉田のほうにね茅を用意するから葺いたらどうだなんて言われたんだけどね。親に相談したら、大変だからいいよ、なんて言ってね。そのころやっておけば今ごろ茅葺きだった。惜しいことしたな。

問・・この柱のさっきの大黒柱の話みたいに、他にも名前の付いた柱っていうのは？そちらは小黒っていいですか？

答・・特にそんなに興味をもってなかったけど。今言う梁がね、通しだということと。あと釘があんまり使っていないらしいということと。そのくらいかな。あとまあケブダシがある造りっちゅうのかな全体には。まだ2階の周りは土壁だからね。

問・・そろそろちょっと図面を取らせていただきます。よろしくお願いします。

高原左門氏

日時：平成16年1月14日

場所：高原左門氏宅

—ケブダシについて—

問・・まず養蚕のことについてなんです。突き上げた部分っていうのがあると思うんですが。

答・・あ、一番高いところ？

問・・はい。

答・・この辺じゃよくケブダシと言ってるけども。煙をだすところかな。煙のことをケブなんて言うから。

問・・他に何か特別な呼び方っていうのはないですか？

答・・この辺じゃシンゲンヅクリというような…。

問・・それは武田信玄の信玄ですか？

答・・そう。シンゲンヅクリなんてのも聞いているんだけど、独特の煙出しのような建物がだいたいそう言われてるのかな。

問・・そのシンゲンヅクリっていうのは全体の造りのことですか？

答・・そういう上に煙がでるように造られてるのがだい

たいそう言われてるけどね。

(中略)

答・・昔はあの辺に行事の、なんていうか習慣でもって、年寄りなんかの場合、入り口に鯛を焼いたりしてなんかして飾るじゃん？

問・・はい。

答・・ああいうものをね、あるいはそこへ飾った時もあったと思うんだ。

問・・鯛を焼いたり？

答・・節分の時にその行事の窓口みたいな。

問・・じゃ、行事の時に。

答・・というのはお盆の時にあそこに提灯を吊すんだよね、新盆の時に。仏さんを迎えるのに。

問・・迎え盆の時に？

答・・うん。今はみんな2階に行かないからこういう軒に吊すでしょ？あの、最初のお盆の時に。ここで不幸があって、最初の盆の時にここに提灯を吊すわけだよ。それは迎え火みたいなもんで一つの目標だよ。

問・・あ、帰ってくるための？

答・・うん、霊のね。その提灯そこへ吊した覚えがあるね昔は。

問・・あ、その2階の所に？

答・・うん。そんなところかな我々が知ってるのは。

問・・じゃ、なにかそういう行事の時に窓口として使うんですね。

答・・そう、使うし。まあ大きな目的は養蚕とか換気とかそういうことだね。だから大事なことだ。家の中心あたりだし、だからそこへそういうものを飾って行事をするっていうこともあったらしい。

—サン葺きのはなし—

問・・例えばこの近くの部落で屋根が台風で飛んじやったりとかそういうことはないですか？

答・・そうさね、あんまりないぞな。1軒くらいはあったかもしれない。古い建物でなくてね。

問・・古い建物でなくて？

答・・そう。古い建物じゃないほうがそういうことがあったの。

問・・比較的新しい方が？

答・・そう、比較的新しい方が。サン葺きっていうようなね、屋根が。

問・・サン葺き？それはどういうものですか？

答・・トタンをこの2倍くらいづつやってくのをサン葺きというだけでも、3尺くらいづつに。

問・・じゃ、大っきなまつまりじゃなくてこう小さなまつまりでベタベタ貼っていく感じですか？

答・・こう3尺ごとに垂木みたいのが入って、あれがサン葺きというだね。

問・・サン葺き…、サン葺きの屋根が持ってたんで

すね。

答・・そうさね、そういう簡単な屋根かな。それ以外は記憶にないな。

山下政英氏

日時：平成15年8月6日

場所：山下政英氏宅、イマにて

問・・まず、このお宅が建てられた年代はわかりますか？

答・・とりあえず、5代目だから、その前は移築したからわからないけど。

問・・移築してから5代目ということですか？

答・・ここに家が建って5代目だから。僕で。

問・・ずいぶん古い建物なんですね。でも、この辺で何軒かお聞きしたんですけど、移築して建てたお宅が結構あって。

答・・最初から新しい材でここに建った訳じゃないから、どっかからもってきてあれかわかんないけどね。

問・・この辺のお宅、山下さんてお宅が結構多いんですけども。親類関係でも？

答・・親類ってことはないんだけどね。家の場合、もういっこ下に家がある小田切幹雄さんという家がある、すぐこっちにあるのはうちの分家。向こうはシンヤってとこにある。

問・・一応、本家・分家ってこと？

答・・そうそう、だから向こうのうち行っても大黒柱ありますよ。まだ、向こうのほうが建って40年ぐらいの。ケヤキの大黒柱。

問・・これもやっぱりケヤキの？

答・・いや、これはクリです。

問・・クリですか。昨日聞いたお宅でもクリってことだったんです。あと、ケヤキも聞いたことある。

答・・クリってやはり堅いから。

問・・昔は家業というか、養蚕とかここでやられてたんですか？

答・・そうだね。養蚕だね。で、主に農業で養蚕。米も作った。米とか麦とかね。

問・・結構いろいろ作られてたんですね。

答・・その後、養蚕になってきて、そしてその後果樹に切り替わって、すももをやったり、今は巨峰。途中、こんにゃくが入ってきたんだ。

問・・牛とかも飼ってました？

答・・牛飼ってましたよ。

問・・牛馬耕ってことで？

答・・だから、今でいうとトラクターの代わりをしてたんでしょうね。昔は。

問・・こういう風に、きれいにやられたのはいつなんですか？

答・・この辺は3年前。

問・・一回に全部やられたんですか？

答・・いやいや、この見える範囲。このあたり。

問・・それが一番最近のやつですか？

答・・うん。そうそう。

問・・他にもやられたんですよ？向こう側とか。

答・・それは、20年も前かな。その板張ったりするのは。

—大黒柱について—

問・・これを大黒柱と？

答・・そうそう。この大黒柱が一番上まで通ってる。

問・・他にもなんか通ってるのとかありますか？

答・・どうかな。2階行ってみりゃわかるよ。

—屋根について—

問・・屋根は？

答・・屋根は去年の11月に。前は、一番最初は麦殻屋根。それを40年から45年前にこういうトタンの通称ナマコというんだけど、こういう山のやつね。それで全部整えて、それで去年かな。11月に今のやつにまたやり直した。

問・・麦殻屋根だったのはいつぐらい？

答・・だから、40年から45年くらい前かな。

問・・茅は使ってなかったんですか？

答・・茅は使ってないね。

問・・この建物全体で呼び名みたいなものありますか？突き上げ屋根とかそういう形で。

答・・別にそういうことはない。

問・・他に呼び名のあったりする柱ってありますか？

答・・大黒柱に中柱とかなんかそんな。昔のおじいさんたちは呼んでたけど。

問・・位置的にはその辺の？

答・・そうそう。その辺の。今はかぶしちゃってるから。

—水系について—

問・・何軒かありましたけど、水がそういうところから湧いてまわしてたり、昔はそういう形で使ってたんですか？

答・・昔はね、そっちに小さい川があって、川の水を竹を割ったのでひいて、そのますみたいのに沈殿するようにして、こすようにして使ったんだよ。水道になる前は。竹でますに入れて、置き石とか砂利とか入れてなんかこすように。下から出るように。

問・・結構湧き水とか？

答・・この水道もずっと上の岩から湧いている水を引いてる。塩素とかあんまり入れてないから。今の時代だから設備はしてあるけど、なるべく落とさないようにはしてる。においがつく。くさいから。

(中略)



問・このお宅で、この材はってのは？大黒柱の他になんか別なものとかって。

答・そっちいきゃわかるけど、梁かな。

問・昔の家族構成ってどうか、昔は主に農業やられて、何か庄屋さんみたいなことは？

答・もうずっと前。年間通して2人ぐらい、寝泊まりして。仕事やって手伝ってくれる人はいた。

問・年間通して？

答・通して。

問・それは農業のほうで？

答・農業のほう。いろんなことをする。

問・じゃあ、使用人さんみたいな。

答・そうだよな。

問・家畜なんかは家の中でいっしょに？

答・今はあれになっちゃってるけど、花があるでしょ？あの辺に小屋っていうか別に建物があった。

問・棟とは別棟に？

答・何年か前につぶしちゃったけど。

(中略)

問・この辺で一番古いお宅っていうのは？

答・だいたいみんな同じくらい。あと、下の方行くと、分家っちゃうかてっかい家が何軒かある。やっぱり上の方が古い。

問・そうなんですか。その分家にでたお宅も棟持柱なんですか？

答・大黒柱ありますよ。

問・それはやはり、ここに似せて造ったんですか？

答・似せたってことはないですけど、大工さんが、そういう建築だと。向こうのほうはケヤキだけど。

問・造った大工さんもこころ辺の人なんですか？

答・そうだね。この家は誰が建てたかわかんないけどね。

問・だいぶ前ですもんね。古いですから。じゃあ、下の部分も一回、土台っていうか足場の部分もやられたんですか？

答・いったん家が多少傾いてるから、その傾きを直した。何年か前、40年か50年くらい前に。で、あと直してって話は聞くけど。

問・こうやれば全然もちますよね。

答・だから、お墓行ってみれば、一番先代の人のことはなんとか。もしあれだったら後で行ってみても。

問・今はね、30年とか40年とかでつぶしてる家も多いですから。下の部分はこれと同じの、梁と同じのが？

答・一番下？うん。

問・それはここにも通ってるんですか？

答・うん。通ってる。裏からのぞいてみれば見える

よ。柱なんて前はね、向こうから入って見えたんだけど。囲っちゃったの。いろいろやる都合上、ほんとは見えないようにしちゃうまくないなと思ったんだけど。

—10間を越える間口—

答・建物自体が5間半の12間半。

問・12間！最大だ。建てられたときからこの12間半のを建てられたんですか？

答・だと思ふよ。あとから継ぎ足したとこないから。2階上がったも。2軒くらいのうちの材を持ってきて1軒にしたと思うんだよ。

問・そうすると、いったいこの材自体は何年っていうくらいですよな。

答・もうわかんないんだけど、昔の釘が打ってあって、バールのこんな大きいのも抜けないの。堅くなって。昔のこんな長い釘が打ってあって、とれない。切ってわかんないようにしちゃったけどさ。抜けないんだ。

問・それと比べて今のこんなくらいの柱とか柔らかいようなもんですよな。

答・こんなの大工さんいやがる。ここもちょっと削ろうと。でも削れないでやめちゃった。平らにしようかと思ったんだけど。できないんだ。削れないんだ堅すぎて。

問・じゃあこれはほとんど何も手をつけずに？

答・そうそう。磨いただけ。でも、ちょこっと色を付けた。

問・この材木も昔はこの辺の山の木を切ってきたんでしょうね。

答・そう。ほとんどクリが多いんだよ。使ってるの。クリ、檜、そのくらい。ケヤキも一部入ってるかな。

問・クリってけっこう下の土台の腐りにくいような部分に使いますけど。

答・この辺全部クリだ。

問・じゃあ、堅いですよね。

答・うん。堅い。

問・じゃあ、クリはこの辺結構あった？

答・あったんじゃないかな。

答・じゃあ、そろそろ測らせてもらいますか。お願いします。

山下政英氏

日時：平成16年1月14日

場所：山下政英氏宅、

—ケブダシについて—

問・まず養蚕のほうについてなんですけど、山下さんのお宅も屋根が一部突き上げているんですがあそこは何か特別な呼び名っていうのはありますか？

答・ケブダシとかって言ったかな。煙をためてあそこから出すっていう。

問・ケブダシ以外になにかありますか？他のお宅でこういう造りをシンゲンヅクリとおっしゃってたお宅があったんですが、そういうのは？

答・ちょっとわからないな。

問・それは一般的に言われてるみたいですね。

答・そうだね。お蚕を飼うのに中で火を燃すから、その煙が外へ抜けるように。

問・あと、養蚕をする時のケブダシの使い方で、さっき言ったみたいな換気、通風、採光の目的以外で、あそこから桑のゴミを捨てたとかそういうのは？

答・家の場合はそこからは捨てられなくて、2階の窓から外へ。表、西、東から。

問・あ、西東の窓から。南のは使えなくて？

答・いや、南も使えましたけどね。

問・あその窓から捨てたと。

答・そうそう。

問・その窓とケブダシっていうのはまた別ですか？

答・ええ、それは別ですよ。ケブを出す所は3階の所からだから。3階の両サイドにこのくらいの欄間みたいなから。

問・あ、両サイドのやつがケブダシ。じゃあ、2階の窓の部分は？

答・窓の部分は2階だから光を入れるとか、養蚕の桑の残飯とかを下の庭に落とす。

問・楽ですもんね、そっから落としちゃえば。そこに農機具を置いたりそこから農機具を出し入れしたりとかいうのはありますか？

答・農機具はないな。

問・じゃあ、そこですることといったら、桑を捨てることぐらいですかね？

答・そう。あとは養蚕に使う回転まぶしを使わない時にそれを置いておく。

問・あ、2階の窓の所に？

答・いや、3階のケブを出すところに。どのくらいあったかな。7畳か8畳くらいあるかな。そこを資材を置いておく場所に。

問・3階は図面をとってないんですよね。

答・取ってないね。これが3階にあったんですよ。

問・これは断面図なんですけど、ここが2階で、ここが3階になってるんですよ。3階の両サイド部分だから…。

答・真ん中高いところあるでしょ？あそこの両サイドとか、あそこに8畳かそこらの。

問・ああ、これは違うお宅の図面なんですけど、こういう風にでるとここに置いてるっていうことですよ？

答・そうそうそう。使わない回転まぶしとか養蚕の道

具を。

問・で、さっき言ったケブダシっていうのは…。

答・この両サイドに。

問・それは引き違いの窓みたいになってるんですか？

答・窓だね。そこへ換気扇を取り付けたこともあるけどね、今ははずしちゃったけどね。

問・じゃあ、3階がこういう形であって、ここここがケブダシ。

答・それで、やってる時にその両サイドに換気扇を取り付けたこともありましたが、一時期。

問・で、桑を捨てるのは2階からですよ？

答・そう、3階は窓がないから。

問・あ、ここは窓がないんですね。

答・3階は西東の両サイドにしか窓がないから。

問・ここに回転まぶしを保管して置いたってことですよ。あと、養蚕以外でケブダシの利点っていうのはありますか？例えば家屋の居住性を向上させるとかそういうことは？

答・夏はかなり、茅葺きの上にトタンをかぶせてあるから、夏はかなり3階は暑くなるんですよ。それから空気がちゃんと抜けるように。

問・じゃあ、空気の循環ですね。

答・そうそう。

—土間の池について—

問・ここが全部土間だった時、かまどっていうのはどこにあったんですか？

答・一番昔のかまどはこの辺にあったんだな。それでこの部分は池になってたんだ。土台の下は水を張ってきて、中まで来て洗い物ができるようにしてたの。

問・他にそこで鯉とか金魚とかかかってたんですか？

答・うん、金魚とか鯉と入ってましたよ。

問・食用とかで飼ってたっていうことはないですか？

答・そういうことはないけど。

問・こういう風に壁があって土台の下を水が張ってるっていうことですよ。

答・それで、ご飯を炊いた釜を洗ってやるとそれがご飯になるから。

問・じゃ、ここの目的っていうのは水汲みっていうか。洗濯はしなかったですか？

答・洗濯はしなかったね。

問・飲料用ってことですよ。お風呂とかには使わなかったですか？

答・お風呂は別棟だったから。それで飲料用はそっちがちょっと高くて昔はきれいな水が流れてきたから、そっから竹でとって、この辺へ来て、一回砂とかでろ過してそれから出た水を使ってたの。

問・じゃあ、ここは飲料用じゃなくて。

答・ここはほとんど洗い物用だったの。飲料用は別に

水道がない時はそうだったの。

問・今で言うと川みたいのはここを流れてたんですかね？

答・この道路の西側を流れてたの。現在も流れてるけどね。

問・じゃあ、ここの川からこちらへ竹で引いてきてここで一回ろ過させてその水を使ってたんですかね。そこは池みたいになってたんですか？

答・だからそこはコンクリートでねマスみたいのをこしらえて。

問・じゃあ、そこに貯まるわけですよ。

答・うん、そこに貯めてね。簡単なろ過装置みたいなのを造って飲料水には使ってたね、水道がないところは。

## 山下牧男氏

日時：平成15年8月4日

場所：山下牧男氏宅、ザシキにて

—職人について—

問・屋根を葺くのに職人さんはいなかったんですかね？

答・そのころは職人さんがいたんですよ。

問・職人がいて、あとは自分たちで？

答・そうそう。山梨県の南のほうね、三の房の近くに、いま中富町っていうけどね、その辺は当時河内地方って言ったんだよ。そちらは職人が非常に多くて、大工さんとか屋根屋さんとかね、そういう人たちが圧倒的に多かったですよ。先祖代々職業とする人がね。そのうちの一人なんか、家の蚕室とって、お蚕をする家が前にあったんだけどね、そこを貸してくれてそこに住み着いて、麦殻屋根をやる大工さんがそこに住み着いてしまったっていうこともあるんですよ。大工さんが住み着くとかね。でもそういう人がいるとその地域はすごくありがたいんですよ。他へ頼まなくても近場にそういう人がいるわけだから。だから今でもそういう人が大工さんとして、屋根屋さんとして、職業として成り立たなくなりましたよ。だから建築も大手が機械とか技術でやっちゃうわけ。

問・じゃ、今はこの辺には大工さんとかあんまりいないんですか？

答・そう。いても職業にならないんですよ。まあ一つは不景気ってこともあるかもしれないんですけどね、だいたい家なんてもんはさ、1代造ればさ、2代3代もつじやない。だいたい20年か30年ごとに造り替えたりはしないよね。

問・そうですね。

答・だからそんなにあれするもんじゃないし。今言ったようにやっぱり大手の建築会社がね、いろん

なカタログ持って来て、値引きのあれするでしょ。いろんな安い新建材が出てしまうから。安く、早く、かっこいいほうに移っちゃうですよ、どうしても。だからまあ相対的に古民家というか、伝統的なものが確実にどんどん減っていくわけですよ。

問・そうですよね。

—トイレについて—

答・トイレはこの前にあったんですよ。この植木が植えてあるところにね。トイレはやっぱり芳しい臭いがするから、住む家と離れたところがあったんですよ。で、同時に人糞っていうのは大事な肥料なんですよ。天然の肥料なんですよ。だから便層は2つないし3つあって、男女混用ですよ。もちろんドアなんてないからね、今の中国みたいな感じですよ、簡素なね。で、下に大きな便層があってそこにドボドボね。そこに蚕の糞を入れるんですよ、小糞っていうんだけどね。そして練って熟成させると、有機肥料になる訳なんです。だから人糞ってもんは非常に貴重なもんだったんですよ。それを樽に入れて、それを背負子とって背中に結わえ付けるもんに結わえ付けて山坂の畑を上って野菜を作る時にまいたり、そういう道具がついこの間まで残ってたんだけどね。それ以上に大切なのは耐久肥だね。耐久肥ってのは、馬とか牛とか羊とか山羊とか、小さいものだと鶏とかウサギとかね。ほとんどあらゆる家畜を飼ってたね。もう家畜と共存ですよ。それは貴重なタンパク源であるとともに、最高級のたい肥なんですよ。

問・何から何まで使うわけですよ。

答・そう。自給自足というかね。最近そういうのが見直されてきて、都会から来た人が自給自足とか、天然自然のもの、そういう生活に理想を求めてさ。現代人が自分たちの開発した文明に飽きたらず、そうやって入ってくるひともずいぶんいますよ。

問・そうですね。それでホント今はブームに近いような感じですよ。

—大黒柱について—

問・この大黒柱はなんて呼びますか？大黒柱ですか？

答・そう。この辺では大黒柱っていうね。これが大黒柱なんですよ。これこれ。まあ、1尺30センチだね。

問・今、上にちょっと貼ってあるんですか？

答・そう、これは貼ってあるの。

問・これが棟の所まで通ってるんですか？

答・そうそう、棟のところまでね。

問・棟の所まで通ってる柱のことを大黒柱っていうんですか？

答・・そうそうそう。そういうこと。

問・・もう上のところは曲がってるけどね。じゃあ3階のほうへ。こちらからやりますか？それとも平面図みたいなもんから？

答・・あ、もういろいろとわかれて。平面図やるものも、断面図やるものも一緒っていう形になるんですけど。

問・・ここは間口9間ね。奥行き4間。4かける9で36坪ね。外から見てもらえればわかると思うけど、ほんとに昔は1間っていうと柱と柱の間ね。見れば一目瞭然。

—恩賜林について—

問・・あとさっき、自分の家の山から木を切り出してきて、造るっておっしゃってましたけど。なんか入会地みたいな共同の山みたいのはなかったんですか。

答・・そういうのはありますよ、もちろん。もちろん共同の山ってのが圧倒的に多いです。

問・・それは、そこの木材っていうのは何に使ってたんですか？

答・・うーん、まずね、地図があれば良いんだけど秩父多摩甲斐国立公園てのがあって、その国立公園はいま環境省が管理してるのかな。あれはもう国有財産なんです。その手前の所は入会地になっていて、言い方はね、恩賜林組合っていう非常にクラシックな呼び方なだけだね。オンシってのはつまり天皇が恩を賜るというそういう古風な名前なだけだね。これは明治40何年かに歴史的な大洪水があったんですよ。そのときに天皇の領地であったものを払い下げて、みなさんが大災害を防ぐために共同でこの山を管理してやりなさいってね。全国的には法改正でやったんだらしいですよ。そういうのがあって、そのまたさらに下の方、標高の低い方は個々人の民有林なんです。ま、ざっと3種類ね。この辺に見えるのはみんな個々人の民有地。民有林ね。もうちょっと入るとこれが共同の。ここは牧丘町っていうんだけど、統合前は中牧村とかいってたんですよ。そういうところの入会地になるわけですよ、共同のね。で、それが明治44年より前は天皇の領地だったんです。天皇の領地の前は、明治維新の前は幕府のものだったじゃないかと思うんですよ。ここはその、甲斐の国は直轄地でね、幕府の直轄地ですから、幕府が支配してたと思うんですよ。このすぐ裏の山は小田の山っていうんですけど、それは共同の山なんです。それは今でも共同の、入会地として共同で管理してるんですよ。

問・・今でも？

答・・今でも。

問・・今のあれだと、町有地みたいになってるんですかね？

答・・町有地とはちょっと違うんだけどね。

問・・それは個々の家の建築部材には使わないんですか？

答・・使わない。そういう入会地と個々人の家とはかなり複雑に入り組んでるんですよ、実際は。だから、なかなか図面を見ないとわからない所もあるんですよ。建築材料重要視されてた、外材が入る前は。山は財産ですから、みんな必死になって管理してたんですよ。冬は間伐したり、キノコとったり、薪をとったり。だけども、燃料はガスになったでしょ。それで外材がどんどん入ってくるようになると、山はさ、ホントに持てあましてるの。植えることはヒノキとかを植えてるけどその後の管理をまったくしないからさ、ぐず葉とかツル性のものが巻き付いちゃって木なんかこんななってるの。そうすると、ぐず葉の根っていうのがイノシシの好物なんです。ぐず葉が非常に良質のタンパク質を含んでるからね。でも、イノシシが我が物顔でさばっちゃってさ、すごい。それが人家まできて葡萄、リンゴ、トウモロコシ何でも食べちゃうの。その被害がすごい。だから今電気柵を仕掛けたり、檻を仕掛けたり、イノシシ対策やってるんですよ。

—家の規模について—

答・・そしてこの家は最初からこんな大きく造ったんじゃないんですよ。ちょっと外へ。付け足しをしたんですよ。ここで付け足しをしたんですよ。

問・・はいはい。

答・・違うでしょ？こっちが古くてこっちがずれるんですよ。私が生まれたときはもう付いてましたけど。先代から聞いたら、こう2回に分けて造ったと。

問・・それも養蚕でどんどん面積が必要になってきて。

答・・そうそう、そういうことだね。それで柱と柱の間が1間だからね。1.8メートル。ちょうど9間なんです。で、奥行きが4間。

問・・そうなんですか。

答・・で、ここにお風呂場があったの。その中でも風呂を造ったから、取り壊して駐車場にね。さらに、ここに蚕室というのがあったの。2階建てで瓦屋根のね。3間の4間ぐらいだったかな。2階建てのね。それも養蚕しないから取り壊して、今は書斎があるけど。で、このところにトイレがあったんですよ。トイレ兼物置の2階建てのね。2階に藁とか麦藁とか詰めてね。家畜小屋とかね。付属建物が主屋の周りをぐ



るっと取り囲ってね。それを全部潰して。外側も全部最近になってセメントにやったの。前はみんな泥壁ですよ。

問・この下はみんな土壁だったりするんですか？

答・そうそう。

(中略)

問・これ昔の壁が残ってますね。

答・こう壁まで真っ黒けになっちゃうんですよ。土もかなり厚く塗ってあるんですよ。で、この藁がね、藁がいっぱい。竹なんかもね、丸い竹が組み合わせてあるんですよ。

問・丸い竹なんですか？割ってないんですか？

答・うん、そう。壁もうんと厚くできてるのね。結局さ、こういうのを後で取り付けてさ、蚕を、養蚕をやる時さ、桑をここに。これがない時はね、桑の束をいちいち持って、これだと五羽一辺にね。

(中略)

問・家を造る時は大工の方が来られるんですよ？

答・うん、そうそう。

問・それは牧丘の方ですか？

答・牧丘にいた場合はね。いない場合は外からね。大工さんは大工さんどうしてチーム作ってやるからさ、上棟式とかさ大勢必要なときは。

問・じゃあ、やっぱり家の形が似てくるっていうのは同じ大工さんが造ってるということですか？

答・うん、そうでしょうね。それとも養蚕の場合はああいうパターンですよ。屋根が高い2重のね。あれから煙を出すんですよ。で、うちの方はそれとはちょっと違うからさ。隣のあのうちなんかは私の家と似てるわね。普通はこういう家が圧倒的に多いんですよ。私もどうしてかなと思ったら、やっぱり養蚕でどどん煙を出すから、それが籠もらないように煙出しとしてああいうふうにするんだってのを聞きましたけどね。今はああいう家がどどん取り壊されてね、消えていってしまうですよ。

—大黒柱が上まで通っている理由—

問・なんで大黒柱だけ一番上まで通ってるんでしょうね？

答・やっぱりあれじゃないですか。これが力関係で、一番の中心になるんじゃない。だからこれが揺らいでくるとさ、他の倒れて来ちゃう。

問・土間境にあるんですね。

答・そう。大黒柱がしっかりしてないとね。

—土壁について—

答・こういう土壁なんかは100年そのままなんです。ここは一部あれなんですけどね。ここは平らな植わった竹がね。丸い竹がその中にね。竹なんかも9月とか秋に切った竹が長持ちするん

ですよ。そうでないと、虫が付いちゃうんですよ。でそういうのをワラでしっかり結わえてね、このコネ方なんかも、ワラをたっぷり加えて1ヶ月くらい寝かしておくんですよ。で、藁が半分腐りかけて独特の臭いがしてくる。そのころにもう一度練り直しをしてこういう風にやるんですよ。左官屋さんのがいてね、壁は壁の専門家がいてね。だから、こんな電気なんかは後のことでね。こういう桁のつなぎ方なんかも独特の工夫がしてあると思いますよ。いろいろ複雑に切り込んでね、こういうので止めてね。だいたいあのこういう大きな家の場合には必ず庇というのがあるわけね。これももっと高いところに屋根があるけど、こちらから向こうまでずっとね、庇がついてたんですよ。

(中略)

答・人間の知恵とかそういうものの総結集みたいなもんが住宅だったんじゃないでしょうかね。今は住宅ってものは非常に生産とか経済活動と切り離して、ほんとにくつろぐ場所、休む場所になってるよね。機能的に分化されたような感じがするけどね。だから、住宅の歴史は私は文化の歴史じゃないかと思うですよ。

—飲み水について—

答・飲み水は、あそこに花が咲いてる辺りに小さな池があって、川の水をみんなこう竹で引いてきて、台所がそこにあったから使ってたの。今みたいに3点セットなんてないんだから。それで、あの使った水をずっと引いてその池へ。その池は今の3倍くらいあったかな。池の水はさらにね、この下がお寺なんですけど、お寺の方へ竹定規で引いて、その家でも利用できる。だから水ってのは大事に使わなきゃいけないんですよ。実際はその辺まで。

問・すごいきれいですね。

答・うん。3メートルの4メートルくらいあったかな。

問・結構でかいんですね。

答・子供のころはここで泳いでたんだよ。

—ご主人自らが建てられた小屋—

問・あれは？

答・あれは最近私が造ったんですよ。山羊を飼おうと思ってね。山羊を飼ってね、乳を自給自足する傍ら堆肥を作ろうと思ったけど、山羊は居着かなくてね。鳴いて鳴いて近所迷惑になるから。こうやっているんな薪をね。

問・自分で造られたんですか？

答・そう。私はね、退職後山をやっているんですよ。それで間伐した木をね全部ずうっと小屋にね。そういうものを使って庭で薪の火を使って煮炊き

をするの。

問・これは掘って建ててるんですか？

答・そう、掘って建ててるの。

問・なんでこういう形にされたんですか？

答・自分で考えたの。

問・すごいですね。

答・こういうのいくつも造ったの。向こうにもあるでしょ。

問・あ、ありますね。

答・あの大きい。あれは農機具を置くの。

問・す、すごい。自分で全部？

答・そう、自分で全部。設計図なんて書かないでね、頭で全部。それで最初は大型台風で屋根がバーンってね（笑）。朝来たら屋根がないの。こんどはいろんな鉄パイプとか、大きな石とか重みを。でも、おもしろかったよ。家を造るっていう建築をあなたがたが選んだ理由がよくわかるよ。ものを造るってのはすごくおもしろいよね。夢があつてさ。

問・でも、これも家の構造と一緒にすよね？この一番上のところが。

答・そう（笑）。

問・そこからこういうふうには？

答・でしょうね。小さい時から大工さんの真似したり、いつも見たり。私はうんとこういうのが好きでね。日本の百姓ってのはね、最近の歴史学者の説によると、百姓ってのは百の職業って意味なんだそうですよ。つまり農閑期にはどんなことでもやる。

（中略）

答・こういう僻地というか、山間の所に縄文や弥生の遺跡がいっぱいあるんですよ。

問・へえ。

答・これにはびっくりしましたよ。街でね、いろんな新しい建物を造るでしょ。そういう時に土地の造成なんかすると土器が出てくるの。地元の大学の先生たちが学生を連れて調査に入って、縄文後期だとかね。一番びっくりしたのがね、ヤジリってのは普通は黒曜石ですよ。黒曜石ってのはこら辺じゃ塩尻峠でしか採れないの。ところがね、水晶のヤジリが発見されたの。そうすると、この向こうに水晶の原石が採れる乙女鉱山っていう鉱山があるんですよ。あの辺に天然にあつてそれをうち砕いて作ったみたい。他にこの辺で水晶が採れる所はないんですよ。もういいかな？

問・じゃ、図面を取らせていただきます。ありがとうございます。

山下牧男氏

日時：平成15年12月11日

場所：山下牧男氏宅

—下山大工について—

問・なんか屋根屋さんが住み着いていたっていう…。

答・そう、屋根屋さん。望月さんね。

問・あれ？望月さん。望月建築？

答・それとは違うね。

問・違いますか。

答・まあ飛騨高山に大工さんのような人が多いように、山梨県の南のほう、身延町の手前の中富町っていうところは江戸時代から大工さんが多かったの。

答・屋根屋さんとかね。麦殻屋根葺く人ね。

答・そういう人が全県を泊まりがけでまわったの。その課程でこういうところに住み着いたの。

問・あ、そうなんですか。

答・だから、望月。その望月っていう大工さんもそうだと思いますよ。だってほかに望月っていう名字ないんですもん。

問・ちょうど明日、下山大工の件で、石川工務店さんがそこかなりつながりがあるというのでお話を聞きに行くんですよ。

答・石川工務店へ？

問・はい。

答・あ、そう。ああいう人が本場だから、ああいう人に聞いたほうがいいね。全県下に散らばってるんじゃない。他県まで行ってるかもしれない。高山なんかもそうじゃないかな、国宝級の匠がそろってて。

問・じゃあ、そういうところ、身延町とかから来られてこういうところに住み着いて、この辺り一帯の家を直したり建て替えたりしたってことですよ？

答・そうでしょうね。昔は旅館とかそういうのなしね。それで宿泊したんじゃ儲けにならないから。結局、離れとか、座敷とか空いてるところに寝泊まりして、1軒の家を造るのにも何年もかけて造ったもんだと思うんですよ。木を切って、引き出してきて、こんな大きな木こりといって木を木を切る専門の人が。それで削るのはチョウナというのでやってね。結局寝泊まりしているうちに空き家があればそこを借りて家族みんなで住み着いちゃうわけですよ。

問・じゃあ、特別その望月さんがされた仕事っていうのはご存じないですか？

答・うん、うちの屋根なんかずっと葺いてたと思うよ。

問・それは代々ですか？

答・そう、代々ね。下の部落の大工さんも、うちの改築なんかの時は、そこしか大工さんがなくて



すから。その人が専門で。そうですね、下山大工という言葉がありましたよ。下山大工は腕がいいと。仕事が確かだと。まじめだと。

**藤原達男氏**

**日時：平成15年8月5日**

**場所：藤原達男氏宅、イドコにて**

問・藤原さんのお宅がいつごろ建てられたかわかりますか？

答・昔は旧諏訪町の柚口という部落がある。も一つ真ん中に6畳か8畳の中座敷があったんをここへ移築してきて、小さくして現在のようにして。これが築約100年。だから、以前は150年なのかなのか知らんよ。

問・移築してきたっていうのは？ももとはどこに建っていたんですか？

答・牧丘町大字柚口。

問・今は農業のほうを？

答・じいさんばあさんのささいなね。

問・このお宅が築100年ってことは、移築してきたときは養蚕の蚕を？

答・ええ。いつまでやってたっていう記憶はあれだけど…。昭和30年ごろまでかな。

問・じゃあ、養蚕のための造りで？

答・そうそう。だから竹を割ってすのこみたいにしてむしろ敷いてあった。なぜかっていうと、養蚕のために暖をとるからね、この辺にあった。煙を上げて…。そういう養蚕のための造り。

問・3階くらいまではあるんですか？

答・今あんまり使えないけどね。

問・改造みたいなことは？

答・昔の屋根はこういう屋根だった。中は今言ったように、小さくして…。草葺きだったからもう材料がないからトタンにしちゃって。ほとんどの家が。どこの家もそうだよ。

問・草葺きっていうのは茅かそういうので？

答・そうですね。茅もあんまりないから茅の中になんか混ぜて。

問・それはどのくらいのペースでやられるんですか？

答・屋根葺き？茅の場合だったら30年くらいもったけどね。この場合だったら半分くらい。15年くらいじゃないかな。

問・この柱が大黒柱ですか？

答・そう。

問・これが一番上の棟木まで通ってる？

答・さあ、それはね。

問・こっち側の柱は何か呼び名があるんですか？

答・小黒っていう。

問・他に柱で呼び名があるものは？

答・柱はないですね。

問・オクラのようなものはなにか？

答・これ？これはかつては養蚕のためにカイテンゾクっていうね、蚕をやってたからここへも蚕をやるから、カイテンゾクあらかじめ作っておかないといけないから。

問・どのお宅でもよく見かける形なんですけれども、どのお宅でも？

答・ええ。こういうのないと困るから。

問・家相図とか、昔からの絵図とか文書とかってのは？

答・ないね。

問・昔は土間とかってもうちょっとありました？

答・広さはこんだけだ。

問・この大黒柱が何の木かわかりますか？

答・これはクリです。

問・屋根をトタンにしたのはいつぐらいなんですか？

答・オリンピックの年。

問・そのころこの辺でもけっこうトタンに切り替えてたんですか？

答・そうそう。その2年～3年前後でほとんどのうちがね。

問・この辺で一番古いお宅っていうのは？

答・改造しちゃったけど、こっから500メートルばかり行ったところで、今山梨市で歯医者やってるうちがあるんだけど、そのうちが一番古くて、その次にうちが…。で、200～300メートル行ったところにもあってその3軒くらい。

問・僕らもみんな信州の方なんですけども、信州の方とはまた造りが全然違うんですよ。こういった造りの特色とかってなんかありますか？

答・…。

問・長野だともうちょっと屋根の形が違うのが多いんですけどね。こういった切妻のが普通ですよ？

答・そうですね。この辺は。

問・近くに大工さんとかって？

答・これ造るの？それはちょっと。

問・たまに似たような大工さんが造られたとかって。

答・それはね、一軒だっけってわけにもいから。そんで養蚕ってことだから、このような…、この辺じゃこれが普通かもしれんけど。

問・ありがとうございました。少しずつ測らせてもらいます。

**藤原金雄氏**

**日時：平成15年10月25日**

**場所：藤原金雄氏宅、ナカザシキにて**

答・ここから全部もうチョウナ削りと言って、カンナをかけていない。そのまんまだから。このへんの桁だけは入れ替えたらしいけど、あとは前の

まんま。それとそこの柱を小黒柱と言って。

問・小黒柱？

答・うん。で、大黒っていうのはそこにある。

(中略)

答・もう建物自体はそのままになってるけど、中はいろいろ変えたりしてるけどね、柱とかそういうものはほとんど変えてないですよ。

問・柱もしっかりと残ってますよね。

答・ええ。

問・他のお宅は玄関をはいったところに、四角い大黒柱が見えるんですけども、ここは違うなと思って、すごく太いなと思ったんですけども。裏側にグワッと太い柱が。

答・前はそこがね、今は子供部屋を造ったけど、全部そこが土間だったんですよ。お勝手の方までずっと。

問・大黒柱のところからですか。

答・そこにちょっと囲炉裏みたいなかたちで、今はコタツになってるところが囲炉裏になってたんですよ。そこを残して向こう側は全部。付け足した棟は別だけけどその間は全部土間で、昔はその向こうへ馬とかを飼った時代もあったけど。

—養蚕について—

問・養蚕はやられてたんですか？

答・もうだから養蚕を作るのを主にこの家が造られているんじゃないのかな。前にケムダシっていうのがありますけどね、2階に。そういう形でやって、いろいろ黒くなっているのは全部養蚕をするために燻したり燃やしたりしたために黒くなったんですよ。

問・養蚕はもういつごろまで？

答・そうですね、葡萄に切り替えて40年くらいになるから、その前が…もう50年くらい前かな。主にはそうだったけども、完全にやめたのは30年くらい前かな。

妻・そんなもんだね。

答・まあ全部じゃなかったけどね。養蚕はそのくらいまではやってた。26年～27年くらい前まで。

—柱について—

問・建物の両側の柱は？

答・上まで通し柱。

問・何か名前とかありますか？

答・まあおそろくほとんど栗だと思えますけども。もうほとんど栗が主で造ってあると思えますけどね。

問・その材はウダツとか呼んでませんか？

答・うーん、ちょっと(笑)。

問・昨日もちょっと別のお宅でそう伺ったんですけども。

問・大黒と中黒は？

答・小黒。

問・小黒で？

答・そうですね。そこはちょっと位置がずれてるもので、そちらは通し柱のところには入ってないと思う。それは途中で変えたと思いますね、その柱を。削り方が違うから。

問・ここって芯通ってますよね？

答・ええ、要するにそこが中心。そういう建て方なんです。大黒柱を中心において、それから桁を通して。部屋の中の仕切り方がそこを中心にしてなってますよね。骨組みだけを造って、あとはこうやったんじゃないのかな(笑)。よくわかんない。だから大黒柱にもいくつか穴が開いてるけど、それは仕切りをしたところの跡で、そこに仕切りがあったんだろうね。

—屋根について—

問・屋根は以前は茅ですか？

答・ええ、茅。トタンにしたのは…だからあのトタンの下には茅がある。茅と麦藁がね。一番下は茅が入ってますけどね。麦藁をつかって、茅がとりきれなかったときに。

問・大黒柱の下は石ありますか？

答・ええ、石の上に乗っかっていると思いますね。もうこの家は全部が石の上に乗っかっているだけなんです。そこに留めてあるとかそういうことはない。全部石の上に。まわりは土台が回してあるけども、本当は土台も石の上に柱を立ててた。もう家はだいぶ南に傾いてますよ。こういうところはもう相当南に傾いてる。

妻・ここで見るとよくわかるんですけど。ここね。(帯戸と柱が平行でないために、間に材を挟んでいる)

—家畜について—

問・馬とかは使わなかったんですか？

答・馬も使ったりしたんでしょうね。僕が小学生くらいのときまで馬を飼ってた記憶があるんです。だから50年くらい前かな。そのくらい前はうちでも馬を飼ってたけど。あとはないですよ。で、田んぼの代かき作業なんかは馬に乗ってする。小さいときに乗せられたことありましたから(笑)。

妻・馬じゃなくて牛じゃなかった？

答・牛は家では飼ってなかった。馬なんだよね。

問・やっぱり馬に乗るとお金取られちゃう。

答・そうですね(笑)。それで馬に変わって今度は耕耘機という、テラーという手で押すあれになって、それで次にトラクターになった。でもこの辺ではあまりトラクターというのはなかったかな。水田をするほどそんなに水田も広くはないし、少ないし。だからそういうふうに変

わってきたと。

問・馬は競馬の馬じゃなくて？

答・うん。もう農作業用の普通の馬ですね。足が特別太いとかそういう馬でもなかったですね。

問・名前は付いてたんですか？

答・特別なあれはなかったですね。

問・馬小屋とかは別棟ですか？

答・自分にある記憶の中ではもう、こういうとこ（家の中）ではなくて、いまあそこに見える鉄骨の建物のところに元は木造で馬小屋があったんですけどね。牛を飼ったり豚を飼ったりということもあったんですね。

—いつごろから住んでいるのか—

問・なんか、この間赤池さんのお宅で、藤原さんのお宅がこのあたりで一番古いっていうふうに聞いたんですけど。

答・うん。まあお寺の過去帳で調べるとうちと、もう一軒うちと同じくらい古いうちがあるようなんですけどね。そういうことの昔の歴史についてはちょっとわからないんですけど。この家が、跡を取るのが二番目なんです。この家から出てくる人が結構多いんですよ。そのときにそういう資料が持ち出されてるかなど。残ってないんですよ。この家にはね。

妻・だけど、お墓がね。

答・お墓にね、菊の紋章のついたお墓が一つあるんですよ。その人は女性ですけどね。それはこの地域にはうちにしかないし、どこにうちにもないんですけど。それらのいわれなどについてもどこかにはあるんだろうけど、この家にはないんですよ（笑）。その石塔が一つあるんですけど。

妻・見てくださればわかりますよ。（過去帳を見て）天保5年ですね。17世紀。1600年代。

答・その前はわかんないね。

問・なくなった年ですか？

答・ええ。この人のお墓が菊の紋章がついてるんですよ。

問・そうですか。

問・お墓はすぐ近くですか？

答・ええ、近くですね。もしそんな歴史がわかれば。

妻・わたしたちもすごい興味があるんですよ。すごい興味があるんですけどもね。なぜなぜっていう感じで（笑）。

問・不思議ですよ。

答・そのへんがね、ちょっとね。

問・だから、とられたんでしょうね。

問・とりあえず過去帳の一番古いのが、男性の方が天保5年（1834）。女性の方が寛文9年（文政の誤りか）。だから、5年、6年くらいしか変わらない。

問・17世紀後半にはこちら辺に住んで活動されていたということが確かだということ。330年くらい前。その先はちょっとまだわからないんですけど。なかなか難しいところがありますよね。こういうところは。そういうのが好きらしくて、片っぱしから調べて、歴史が大好きって言うか、その人も資料館にこもってやりますけど。

（中略）

答・ただ藤原を名乗るっていうのはどうも落ち武者のあった時代らしいから、隠れるようなかたちで伸びてきたと。こういう奥に藤原の名字が多いんですよ。この人たちが、ある時期には逆に名前を呼んだことがあるんです。ハラフジと読むか、ハラトウと呼んだかわからないけど、そういうふうにした時代があった。

妻・真知（しんち）っていう部落もね。

答・最初は真知っていうのも新しい地球の地と書いてたらしいけど。

妻・え、違うよ。

答・ああ、途中でそう変えた時期があるらしいんですけど。今は真の、知る、書いてもとに戻したと。言うことがあるらしいですけどもね。まあそういう逃げるための手段としてそういうことをやった時代があったらしいですね。その辺のところにあまり詳しくなくて、赤池さんのところの前のおじいさんが生きていれば、そういうことを話してくれたんですけど、その人は亡くなっちゃったんですよ。ものすごく詳しい人で（笑）。

妻・昔はこの辺はあれですよ、その前に人が住んでいたときの土器が出土したりして、ですからその前にいたんでしょうね。

問・結局こういったかたちで住むようになったのは、そのときのところ、藤原さんが来られたからということなんでしょうか。

妻・うーん。そうなんですかね。そのころから。

答・地名が、ちょっと他にないもので真知とか、この辺がほんとの真知っていうんですけど。真知っていう地域はほんのわずかしかなんですよ。ちょうどこの前の道からその横に上がる道を登ったところだけなんです。地名として残っているのはね。そこが真知なんです。その下はもう新地前とか後で付けた名前ですよ、おそらく。この向こうに行くと丸山という地名になるし、真知と言われていた地域はほんのわずかしかなんですよ。ここ10軒くらいのところかな。

—飲料水について—

問・飲料水はどんなかたちだったんですか？

答・飲料水？あのね、この裏に今は使っていないんですけど井戸があって、深さが20メートルくらいあるんですよ。でね、その井戸を掘るのに全く石が出なかったらしいんですよ。で、もうまわりの人たちみんなに手伝ってもらって、部落中で井戸を掘ったらしいんだけど、どんなに雨が降っても濁ることは全くなくて、で、つい最近までは使ってたんだけど、まあ水道が入るようになってからは使わなくなった。でもそういう水道が入らない時期はね、このまわりの人たちがいつでも水汲みに来てたんですよ。

問・そうなんですか。

答・その井戸水と、あとはその向こうに川が流れてるんですけども、その川の流れ水を使ってたっていうことですよ。水はね、この辺はそんなに多くないですね。少ないと思いますね。だから田用水なんていう水田をやるころはよく水の喧嘩をしたですよ。で、こちらの田んぼの水は全部、今、琴川ダム造ってるんですよ。あのダムの本流が琴川なんですけど、その琴川を、柚口という地域がこの向こうにあるんですが、そこで鳥の口セギというセギへ水をひきとって、鳥の口っていうのは要するにずっといくと鳥の口みたいに細くなってるんですが、それから水をとってくる水を全部こちらにとって使うんですよ。だから田んぼの時期になるとね、すごいですよ、もう水の取る騒ぎが。で、末端の人がいつまで経っても田植えができないんですよ。だからもう水を外したりとかそういうふうな喧嘩が昔は絶えなかったらしいですね。

問・見えないところでぱっと外すとか？

答・そうですね（笑）、そうやって外したりして。まあみんな早くやりたいんだけど、結局順番じゃないですか。だからそういうふうなかたちで。川の水を使ってたその川はこの山からくる水なんですけど、それはもうほんとに量的にはわずかなもので田用水とかそういうものには使われなかったですね。だからその鳥の口セギというところから水をとって。これから窪平という町の方まで全部ほとんどその水を使ってたんですよ。そういう大きな水がない。鼓川が向こうになるんで、琴川がこっちで、そのちょうど中間がこの巨峰の産地なんですよ。で、葡萄を作るようになってからいい葡萄ができるようになったんですよ、逆に。乾燥したりしてるから。その水の面ではやはり昔は大変だった。ここはね、本来この道に沿って今の公会堂側のこの土手をまわして、タジマヤシキというのがこの向こうに昔はあったらしいですね。そこへ引くための水路を造った時代があるんですよ。水

は実際には通らなかったらしいけども、そのためこう造った。まだその跡がそこに残ってますよ。その土手にね。この道がちょうどそのくらいの標高差でこう流れてくるかたちらしいですよ、そちらから。今、鳥の口セギからもってきてる水と、その水をこっちまでずっともってこようという、そういうことをやろうとした時代があったそうですよ。

妻・いやおもしろい場所ですよ。私もよく知らなかったんですけど。あのいつもいつも信玄が健勝祈願にきていたという、すぐ下のところは信玄の弓をとる、間瀬（ませ）屋敷があるんですけどね。竹をとる。

答・今はその竹をだいぶ切ってしまったけども。昔は竹藪から竹をとって弓を作っていたと。

問・もうその竹藪は？

答・不動尊でね、早くに切ったんですよ。その人は今役場やめたから、屋敷がそういうことになってからだいぶ切ってしまったですね。

問・不動尊ですか？

答・ええ、大滝山不動尊。さんずいの。

問・井戸はこの裏の一つ？

答・いや、だからその後はみんなこの家でも井戸を掘るんですけどね、湧き水っていうかその浅い雨水でも出してしまうくらいの力で、5メートルから6メートルくらいの井戸が掘れる。そのかわり枯れてしまうことも多いです。そういうふうなかたちでみんな井戸を掘るんだけど、うちの井戸はいつでも水が出てたんで、他がなくなったときも。雨がうんと降ってしまうと他のうちなんか。

#### 水上重兵衛氏

日時：平成15年8月6日

場所：水上重兵衛氏宅、アガリハナにて

—大きな家を縮小した—

問・ではよろしくお願ひいたします。

問・この建物の建築年代は、いつごろ建てられたかわかりますか？

答・現在のこの形になったのが、明治の前。多少こうゆうことはね、あとう、建具なんかはまた、最近のもあるけどね。全体的な大きさが、これができたのは明治の前ですね。

問・それは、移築とか？

答・移築でなくて、ここにあったものを小さくしたの。

問・では、現在の建物よりは大きく。

答・そうそう、まあ、現在の建物っていうのは大黒柱っていうものはほとんどないけど、そこに現在あるけどね大黒柱がね、そのおっきいや



つね。それが前、そこにおっきい石があるでしょ。あそこが、その大黒柱の位置だったそうです。現在は、これが、4間半の9間半だけんど、それが6間の13間あったそうです。

問・これだけでも大きかったのだけど、すごいですね。

(中略)

答・ちょっと失礼

問・では、それを小さくした理由は？

答・あのう、その昔からこの地帯ほとんど養蚕だったでしょ。ほんで、同じ養蚕の中でもタネ屋さんをはじめて、その2階の天井がうんと低かったでしょ。それを一つは高くしたいが為にやったそうですよ。

問・それじゃあ、一回壊して。

答・そうね、どの程度の壊しかはわからんけどね。その上のあたりの梁に穴があるでしょ。そういうのが以前使っていた穴ですよ。材料はほとんど前の建物のものですよ。

問・じゃあ、今の形になる前はほんとに古いですよ。

答・まあ、材料的には、200年くらいは経っているんじゃないですか。木材そのものはね。だから、現在よりは全体的に少し前にでていたそうです。

—大黒柱について—

問・そこの大黒柱は、棟まで通っているのですか？

答・2階の天井まで、そっから上は足してある。継いであります。でも、そのだけ経っていても感心するのは、その大きな梁があるでしょ。そこんところ、温暖化なんていわれているけど、夏の気温が高いわけ、そうするとね、木の脂がね、まず、去年も一昨年も、現在も落ちてくるの。

問・木が生きているって感じですね。

答・木は生きてるね。実際そう思った。

問・ここの梁だけですか？

答・そう、どういふ木だかなんだかわからないけど、そうゆう脂気をもった木なんだよね。だから、例えば、松とか杉とか。

(中略)

問・麦は作っていらっしやったのですか？

答・その稲の裏作ね。だから、現金収入としては養蚕だね。それが、家が養蚕をやめたのが昭和25年。地域的に終わりになってきたのが昭和40年ごろ。そのころから、この地帯田んぼになってきたね。

問・では、現金収入が蚕から巨峰へ。

答・そうそう。

—屋根について—

問・屋根は、トタンを張る前は麦藁か何かだったんですよね。

答・昔は茅だったんだけど、だんだん麦藁だね。家でとったのやら近所でもらったりして。よく麦藁だと腐りが早いからね。このくらいのおっきさの屋根だと、毎年、屋根屋さんが入っていました。

問・屋根屋さんという人がいたんですか？

答・そうそう。

問・他の人も手伝いながら？

答・ええ、家の人が手伝いに入りながらね。そうゆう、専門じゃないけど、その人達だって夏はね、今の下部町に多かった。まあ、ちょっとした修理くらいだと自分たちでやったけどね。

問・昔は、皆さん、何でもやられたんですもんね。

答・まあ、僕だって何でもやるけどね。大工さんに頼んだり、その入口のサッシだって自分で入れただよ(笑)。これは違うけどね、こっちは本職にやってもらったけどね、ちゃんとした大工さんに。

—家畜について—

問・家畜か何かは？

答・ずっと昔はやっぱり馬を飼っていたけどね。俺達が覚えてるころはもう。その後は豚を肉食用に飼ったね。それが終戦後まで続いたね。畑使うように機械がなってきたからはね、現在、この地帯農家の人は、鶏は多少いるけどね。

問・家畜とかは、別の建物なんですか？

答・そうだね、今、物置になっているあそこが、前は草葺きだったんだけど、まあ、そこはオダレ、オダレっていうんだけど、そこへ馬を昔は飼ってたね。

問・馬は何の目的で使われるんですか？

答・畑で、今の農機具と同じ。

問・牛じゃないんですね。

答・馬。

(中略)

問・この大黒柱の木はなんでしょう？

答・松だと思いますね。

問・他に名前のついた柱はありますか？

答・他には、そこの大黒に対してここのを小黑っていうけどね。

問・この2つくらいですか？

答・そうだね。ほんで、その大黒柱の削り面を見てごらん。わかるかな。チョウナツパツリっていう。チョウナって知ってる？

問・はい。

答・こゆう感じのね。それでやってあるから。その後はカンナだけど。そうゆうことをやっていけば実際、古いかんかがわかるけどね。ほんで

いろいろと工事してもらおう中で、例えば板なんか、やっぱりショウナのものがかなりでてきたけどね。

問・この地帯で一番古くから住んでおられる家は？

答・うちだと言われているけど。庭にちょっとした看板が、今、洗濯物で少し見にくいけど。それから見ると、そんな気はするけど、証拠はないわね（笑）。わしが40歳ごろ、梨大の先生がきて…。

問・では、そろそろ図面を測らせていただいて、また何かありましたらお聞きするかもしれませんが、よろしく願いいたします。それでは、ありがとうございました。

—寝る前に言う言い伝えについて—

答・「ねるぞねだ、たのむぞたるき、はりもきけ、まさかのときは、おこせこうよう」と言うと安心して寝れると聞いてます。

—ウダツについて—

答・そういえば何で見たかな。壁の外でも出ている壁のことを、隣の仕切みたいな感じでね、ウダツっていうことを聞いた気がするね。最近のテレビかなにかで。隣の、一つは防火のためだとかね。でも、僕たちの知っているウダツってというのはこの柱。

問・妻壁の柱なんですよ。

答・そうだね

問・その柱は棟まで通っているのですか？

答・うん、通っている。

問・この周りの方でもそういった話はしているんですか？

答・ある程度歳の人には知っていると思うよ。まあ、70歳過ぎの人くらいしか知らんだけだね。

問・大黒柱のほうは、やはり大黒柱ですか？

答・そうそう、大黒は大黒だね。

—「ウダツがあがる」について—

答・だから、家を建てるってことが成功したってことじゃないのかなあ？

答・例えば建前の時なんか、「このうちのウダツは通っちゃいな」って年寄り同士のあいだじゃ言うよ。

問・妻壁の柱のことですよ？

答・そうそう

問・通っている方が？

答・強いてことだよ、家がね。年寄りを暴露しているようだ（笑）。

宮原民雄氏

日時：平成15年8月19日

場所：宮原民雄氏宅

問・このお宅の歴史というかそういうのからお願いし

ます。

答・それがね、やっぱりあんまりはっきりしてないんだけどね。まあ、前は宮原じゃなかったらしい。名字帯刀を許された時代があるわけだね。名字帯刀っていうのは明治初期にあったんでしょね。で、その時に小島から宮原に変わった。確かにね。宮原の姓を名乗ったのは名字帯刀を許された時に名乗ったんだよね。

問・その前は小島さんだったんですか？

答・その前は小島だったらしいね。小島の印鑑もあるしね。

問・ああ、そうなんですか。

答・それでね、いろいろな書類がほとんど無くなっちゃったよね、この家の。

問・それは以前焼けちゃったとかですか？

答・以前焼けたでもないし、破産したときにバタバタしちゃってね。

問・じゃ、この家の建築年代なんかはわからないですか？

答・家を建てたのはきっとその前ですよ。文久か慶応の時代でしょうね。

問・この主屋が建てられたのが？

答・主屋がね。それでね、ここにオクラと門があって、その門の両脇が、両方とも造り替えちゃったけどね、そこにオクラが2つあったんですよ。土蔵って言うんだけどね。それで、車が入りにくいから、そっちは門を潰すでもないし、そっちに寄せちゃったっていうわけですよ。車が入りやすいように。だから、前は門にくっついてたんだけどね。

問・移動したんですか？

答・だから、向こうに新しく造り替えたんですよ。

問・門がずいぶん。

答・門に続けてお蔵が2つ並んでたんですよ、土蔵がね。それで片方が物置かなんかになってて、もう片方は穀物を貯蔵したんだね。そういう形成だっただよ。

問・前、お願いに来たときに確か門が古いとか立派って。

答・うん、この門も家と同じころのもんじゃないかと思うしね。それで、オクラは文久の時代のあれがあるんですよ。あの、ちょっと待ってな。（棟札を取りに）

答・もう一枚どっかにあるんだけどね、これは文久3年でね。これがオクラの天井にくっついてたんだよね。

問・棟札ですね。

答・それとね、これとね、どっかやったかな。珍しいもので、神奈川県寒川神社の永代護摩札というのがこれと一緒にあっただよ。



問・一緒にここに？

答・一緒にね。

問・それはどういった札なんですか？

答・永代護摩というのは納め金をして、祈祷してもらってことだよ。

問・ああ。じゃあ、昔そっちのほうに？

答・だから昔、神奈川県寒川神社、そのころ電車もないし、歩いて行ったら3日か、3日じゃ行かないか、それくらい遠いで。そのころ何を商売してたかが問題だけだね。

—大黒柱・ヨツダテについて—

問・あそこに見えるのが大黒柱ですか？

答・そう、大黒柱ね。それでその向こうが小黒柱と言うだね。

問・なんか他の名前では呼ばれてますか？

答・他の名前ではないね。それでね、おじいさんというには、この家は途中で改造したんだって。それで、よくわからんけどね、間柱と言って6尺ごとに柱が入ってた家らしいだね。これもいろいろ研究をしていけば出てくると思うけどね。その柱何本か抜いたとかいう、途中でね。ヨツダテという建物の形式があったらしいよ。

問・それはおじいさんが言ってらしたんですか？

答・それはね、おじいさん、親父のその前のおじいさんが抜いたみたいなんだね。だから、明治の20年のころじゃないですかね。

問・ヨツダテという言葉は、こころ辺で言われてるんですか？

答・こころ辺で言われてたらしいね。それも研究すればある程度出てくるかもしらんね。

問・出てはくるんですよ。他になにかいわれますか？

答・これもヨツダテ門って言うんだよね、門が。

問・ヨツダテ門？

答・うん、ヨツダテ門。四方がその。

問・じゃあ、こころ辺ではヨツダテっていうのは結構言われてるんですね。

答・うん、そうだね。

問・2階とかも以前、お蚕さんってやられてたんですか？

答・養蚕が何年ごろから盛んになったか知らんけど、その後は養蚕に、作ってからはずっと使用したってことだよ。問題はね。

問・最近まで養蚕をやられてたんですか？

答・うん、俺の時代までかなり養蚕をやってたけど、生糸が安いということと、果樹でもって、消毒でもって、養蚕がやりにくくなった。それよりも収入が少ないから止めたわけだ。

—屋根について—

問・屋根は…？

答・屋根は茅だったね。茅葺屋根。

問・麦藁ではないんですよね？

答・途中から麦藁になった。茅が採れなくなってから、その昔はみんな茅でやとったけどね。

問・その茅はどちらから？

答・茅はその辺の山で。みんな、朝早く出かけて、茅刈り茅刈りって行ったらしいんだけどね。かなり遠くまで行ったらしいね。風が吹くと茅ってのは大きいから馬ごと、馬車ごと止まっちゃうの。

問・へえ。

答・だから風が吹いたときは、茅は運んでこられんから途中で降ろしてくるの。そんな話がね。だから茅を使った時代もあった。おれもかなり麦藁を運んであれしたんだけどね。トタンをかけたのが、昭和27年～28年だろうな。それまでは麦藁屋根だったんだよ。

問・そのトタンを変えたのは周りもトタンに切り替わっていく時期だったんですか？

答・そうだね。かなりね。オクラの建物が文久3年ごろかその前かっちゃうことだね。

問・ありがとうございます。



## 2.3 山梨県笛吹川流域の建造物実測調査 第2期 (平成22年度～平成23年度)

2.3.1	図面および実測者、作成者一覧	242
2.3.2	実測した建造物の分布	243
2.3.3	実測図面	245
2.3.4	ヒアリング	295

### 2.3.1 図面および実測者、作成者一覧

No	調査日	建物名称	種別	配置	1階平面	2階平面	小屋伏	断面①	断面②	断面③	立面	
Fu01b	'10/10/23	三枝行雄家住宅 (再調査)	民家	実測	—	江藤	江藤	—	井本	長濱	—	—
				作成	—	江藤	江藤	—	井本	長濱	—	—
Fu08b	'10/10/02	佐藤一郎家住宅 (再調査)	民家	実測	—	美作	美作	—	井本	井本	美作	—
				作成	—	奥野	奥野	—	奥野	奥野	奥野	—
Fu26	'10/10/03	旧小林笑子家住宅	民家	実測	—	美作	美作	滝澤	井本	美作	榎本	—
				作成	—	井本	井本	井本	井本	井本	佐々木 <sub>子</sub>	—
Fu27	'11/10/25	土屋正雄家住宅	民家	実測	佐々木 <sub>理</sub>	井本	井本	—	奥野	—	—	—
				作成	佐々木 <sub>理</sub>	井本	井本	—	奥野	—	—	—
Fu28	'11/10/25-26	中村太丸家住宅	民家	実測	佐々木 <sub>理</sub>	香川	香川	香川	田村	滝澤	井本	—
				作成	佐々木 <sub>理</sub>	香川	香川	香川	田村	井本	井本	—
Fu29	'11/11/29-30	西川家住宅	民家	実測	鍋田	堀田	堀田	—	新井	新井	新井	—
				作成	鍋田	堀田	堀田	—	新井	井本	井本	—
Fu30	'11/11/29-30	旧坂本家住宅	民家	実測	鍋田	中島	中島	—	井本	長濱	香川	香川
				作成	鍋田	中島	中島	—	井本	長濱	香川	香川
Fu31	'11/05/20	金井加里神社	随神門	実測	長濱	井本	—	—	滝澤	—	—	長濱
				作成	長濱	井本	—	—	井本	—	—	長濱
Fu32	'11/10/08	福蔵院	庫裏	実測	小室	香川	丸岡	丸岡	井本	奥野	—	奥野
				作成	小室	香川	井本	井本	井本	奥野	—	奥野
	'11/07/09	山門	実測	小室	小室	—	—	奥野	井本	—	滝澤	
			作成	小室	井本	—	—	奥野	井本	—	井本	
Fu33	'11/05/21	長谷寺	山門	実測	奥野	奥野	—	—	長濱	遠藤	—	井本
				作成	奥野	奥野	—	—	長濱	井本	—	井本
Fu34	'11/07/08	武田八幡神社	随神門	実測	井本	小室	小室	滝澤	奥野	滝澤	—	小室
				作成	井本	井本	—	奥野	奥野	奥野	—	小室
Fu35	'11/10/14	圓照寺	庫裏	実測	高橋	堀田	堀田	—	井本	長濱	—	井本
				作成	高橋	堀田	堀田	—	井本	長濱	—	井本
	総門	実測	小室	北野	—	—	—	—	—	滝澤		
		作成	奥野	奥野	—	—	—	—	—	奥野		
Fu36	'11/09/30	放光寺	仁王門	実測	小室	北野	—	—	奥野	井本	—	—
				作成	奥野	奥野	—	—	奥野	奥野	—	—
	阿字門	実測	小室	北野	—	—	—	—	—	—		
		作成	奥野	奥野	—	—	—	—	—	—		

### 2.3.2 実測した建造物の分布

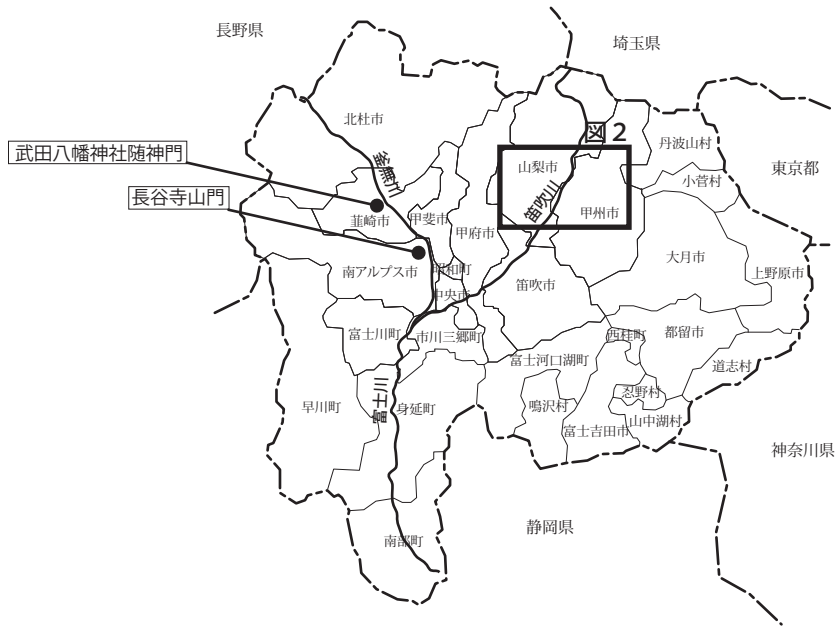


図1 山梨市および甲州市の位置

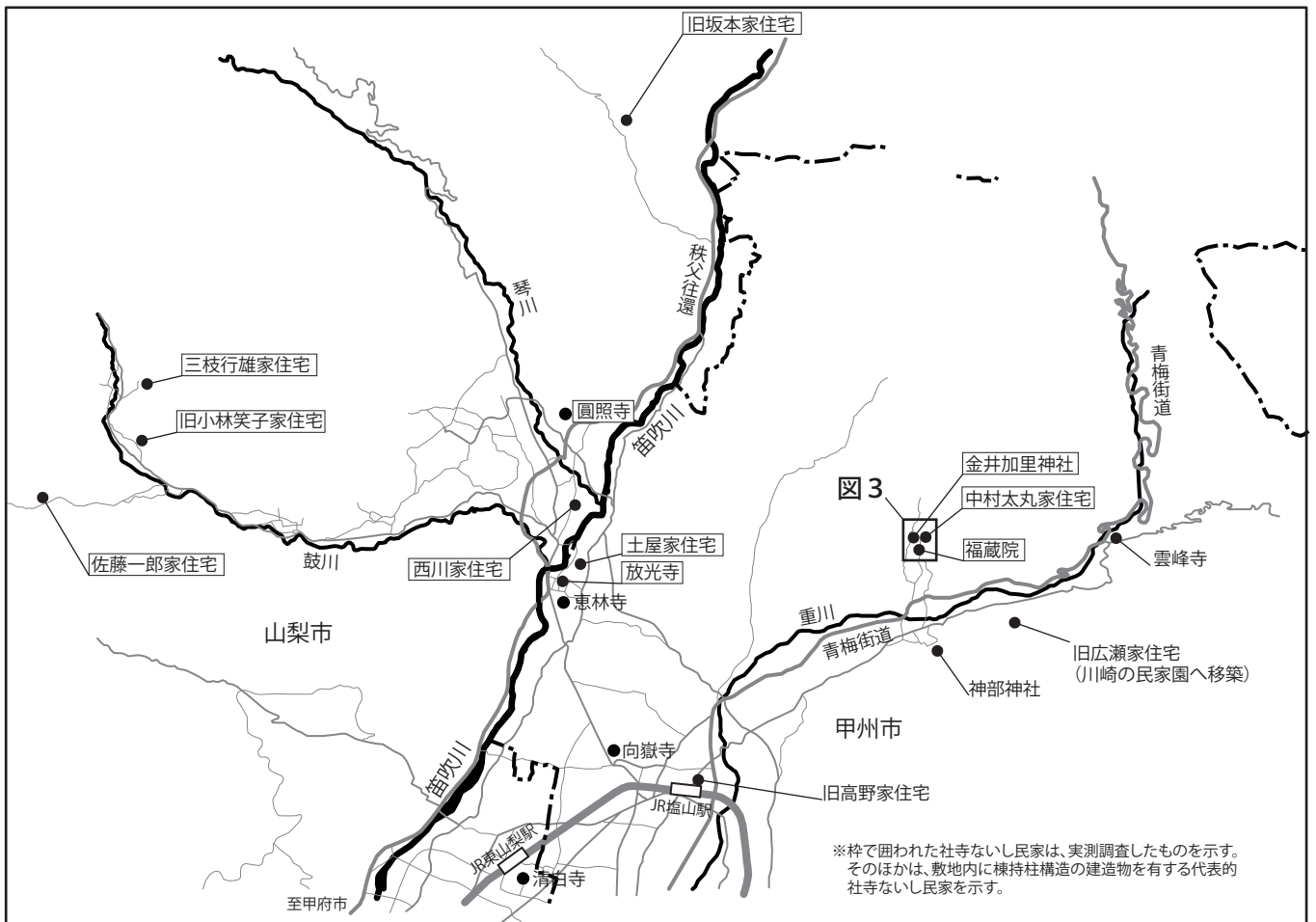


図2 山梨市および甲州市周辺の実測した建築遺構の位置

※枠で囲われた社寺ないし民家は、実測調査したものを示す。  
そのほか、敷地内に棟持柱構造の建造物を有する代表的社寺ないし民家を示す。

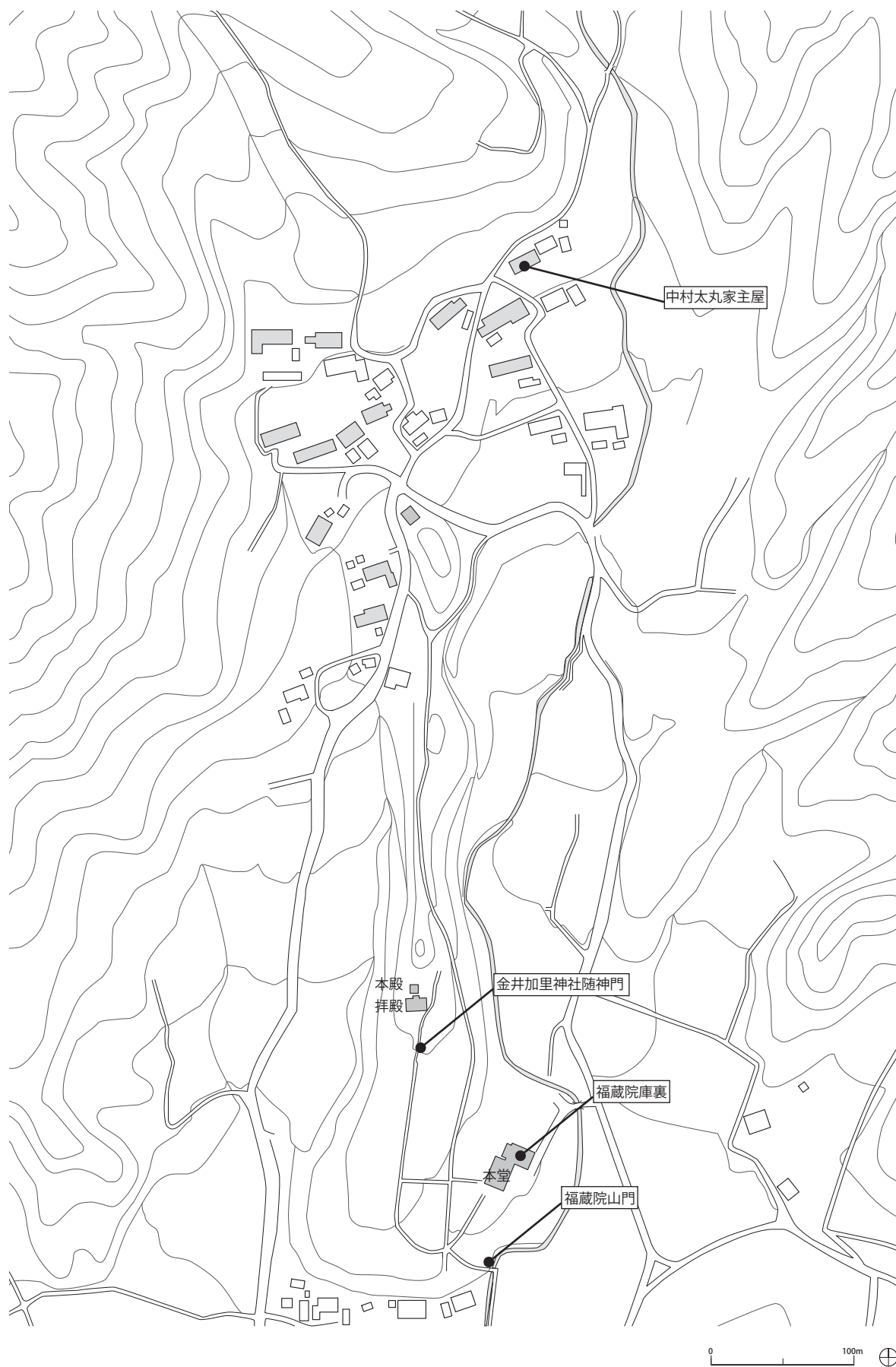


图3 上条集落 周边地图



### 2.3.3 実測図面

#### 【実測図面目次】

##### 【民家】

Fu01b	三枝行雄家住宅（再調査）	246
Fu08b	佐藤一郎家住宅（再調査）	248
Fu26	旧小林笑子家住宅	251
Fu27	土屋正雄家住宅	252
Fu28	中村太丸家住宅	255
Fu29	西川家住宅	261
Fu30	旧坂本家住宅	266

##### 【社寺】

Fu31	金井加里神社 随神門	272
Fu32	福蔵院 庫裏・山門	274
Fu33	長谷寺 山門	280
Fu34	武田八幡神社 随神門	283
Fu35	圓照寺 庫裏	287
Fu36	放光寺 総門・仁王門・阿字門	291

**Fu01b 三枝行雄家住宅（再調査）**

建築年代：1800年頃

住所：山梨市牧丘町北原

梁行（間）：4.50

桁行（間）：10.00

屋根材料：茅葺

屋根形式：切妻

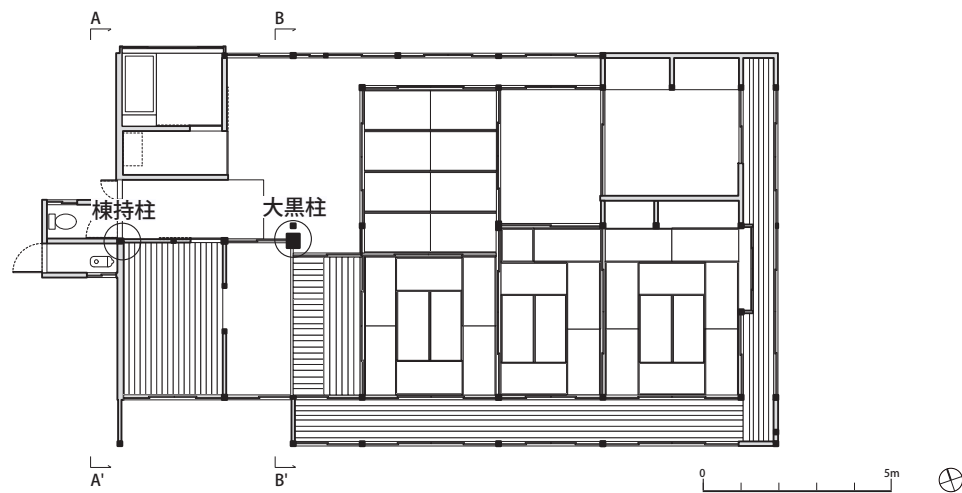
棟持柱配置：西？○○■○○○○東

資料：不明

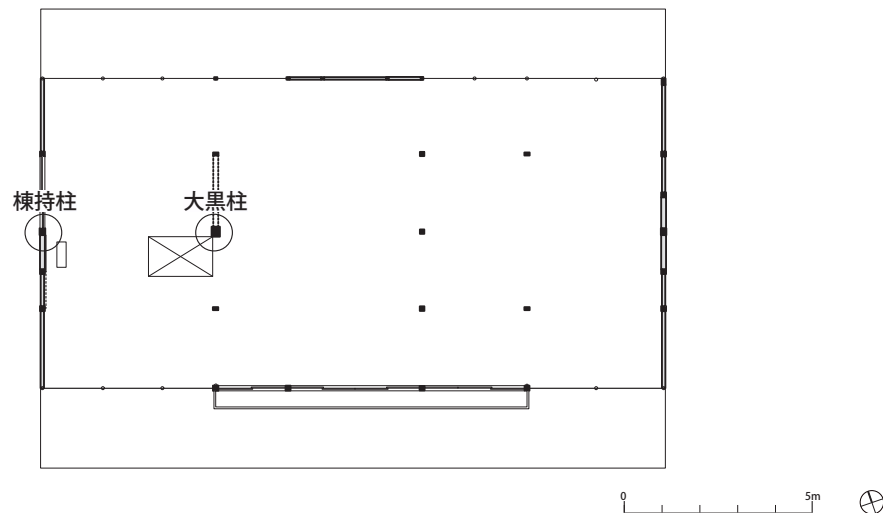
調査年月日：2010年10月23日



外観写真



三枝行雄家住宅 1階平面図 S=1/200



三枝行雄家住宅 2階平面図 S=1/200



三枝行雄家住宅 A-A' 断面図 S=1/100



三枝行雄家住宅 B-B' 断面図 S=1/100

**Fu08b 佐藤一郎家住宅（再調査）**

建築年代：不明

住所：山梨市牧丘町牧平

梁行（間）：9.00

桁行（間）：4.50

屋根材料：茅葺、トタン

屋根形式：切妻

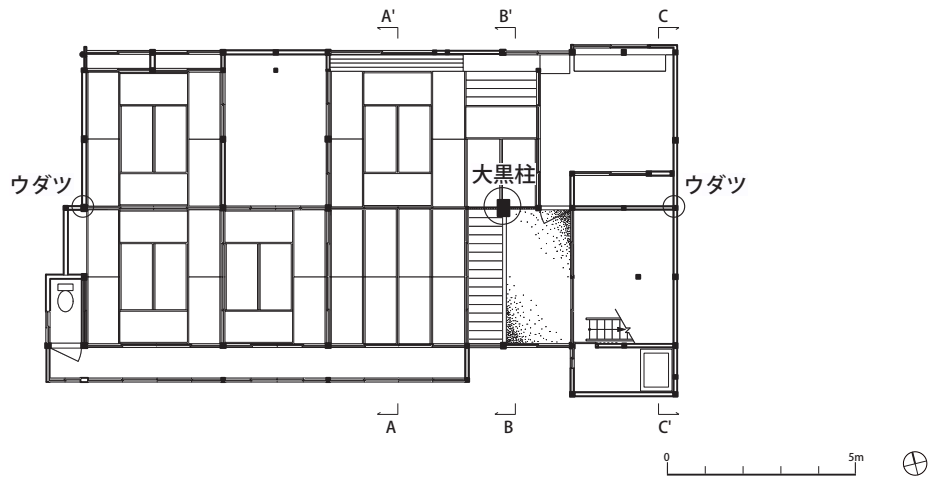
棟持柱配置：西●○○○■○○○●東

資料：不明

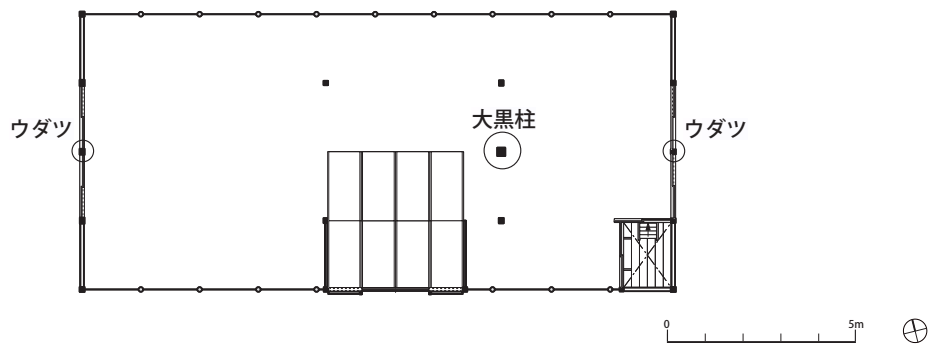
調査年月日：2010年10月2日



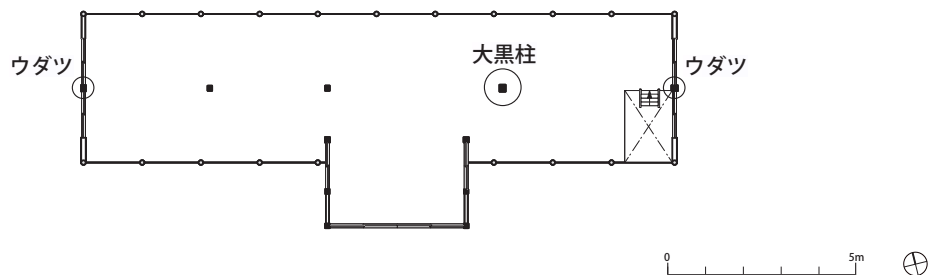
外観写真



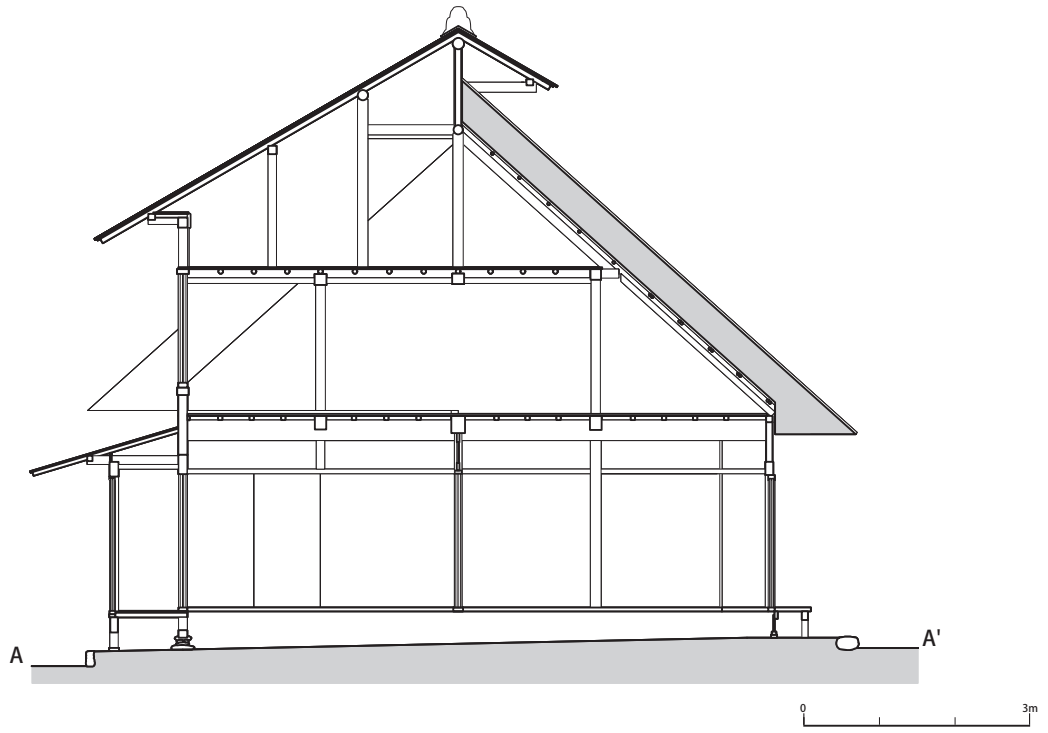
佐藤一郎家住宅 1階平面図 S=1/200



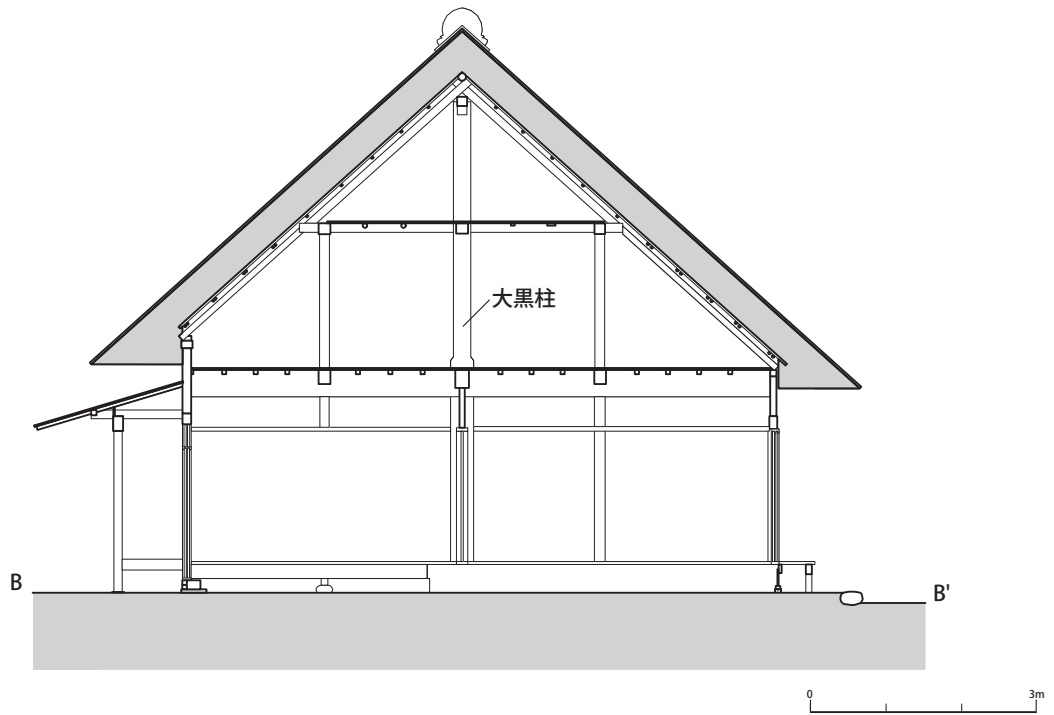
佐藤一郎家住宅 2階平面図 S=1/200



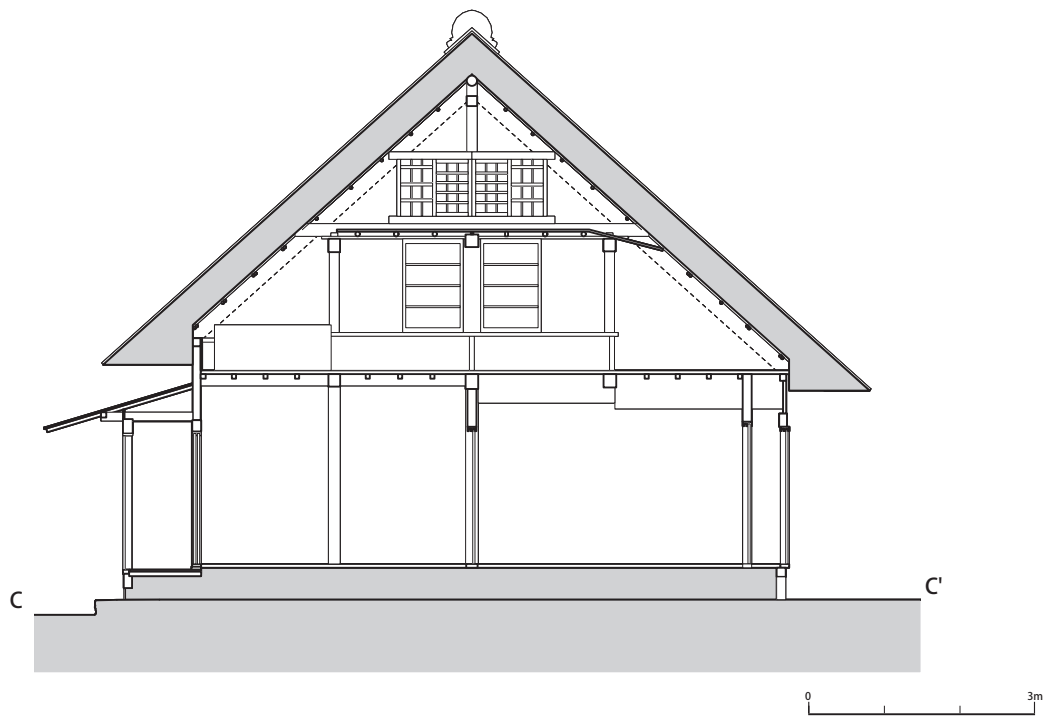
佐藤一郎家住宅 屋根裏平面図 S=1/200



佐藤一郎家住宅 A-A' 断面図 S=1/100



佐藤一郎家住宅 B-B' 断面図 S=1/100



佐藤一郎家住宅 C-C' 断面図 S=1/200



## Fu26 旧小林笑子家住宅

建築年代：不明

住所：山梨市牧丘町

梁行（間）：3.00

桁行（間）：6.25

屋根材料：茅葺、トタン

屋根形式：切妻

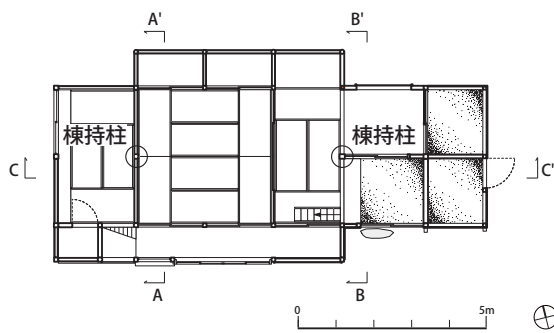
棟持柱配置：西○●■○○東

資料：不明

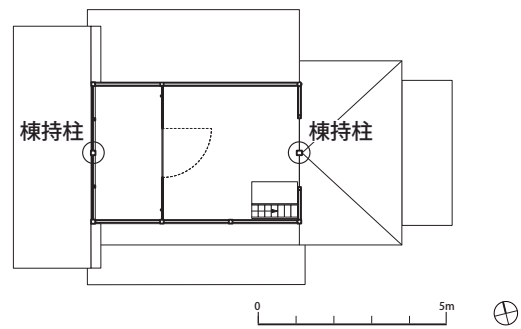
調査年月日：2010年10月3日



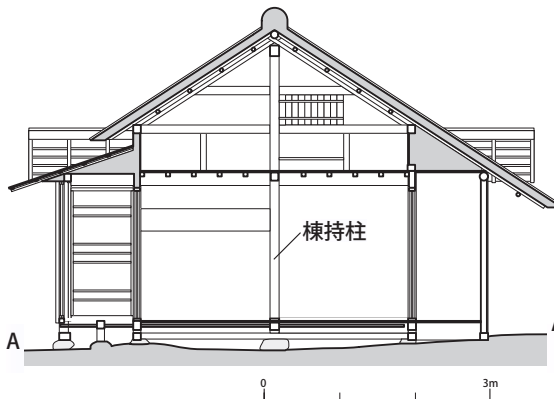
外観写真



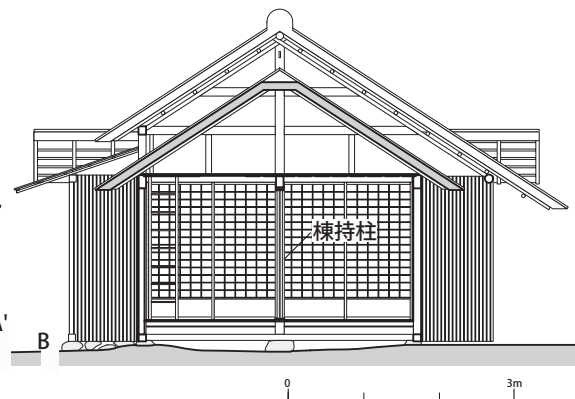
旧小林笑子家住宅 1階平面図 S=1/200



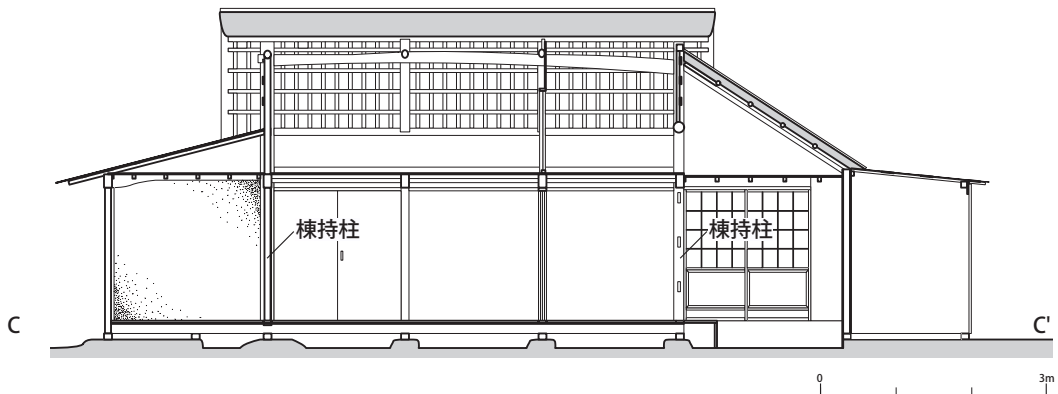
旧小林笑子家住宅 屋根裏平面図 S=1/200



旧小林笑子家住宅 A-A' 断面図 S=1/100



旧小林笑子家住宅 B-B' 断面図 S=1/100



旧小林笑子家住宅 C-C' 断面図 S=1/100

## Fu27 土屋正雄家住宅

建築年代：不明

住所：甲州市塩山藤木

梁行（間）：5.00

桁行（間）：10.00

屋根材料：茅葺、トタン

屋根形式：切妻

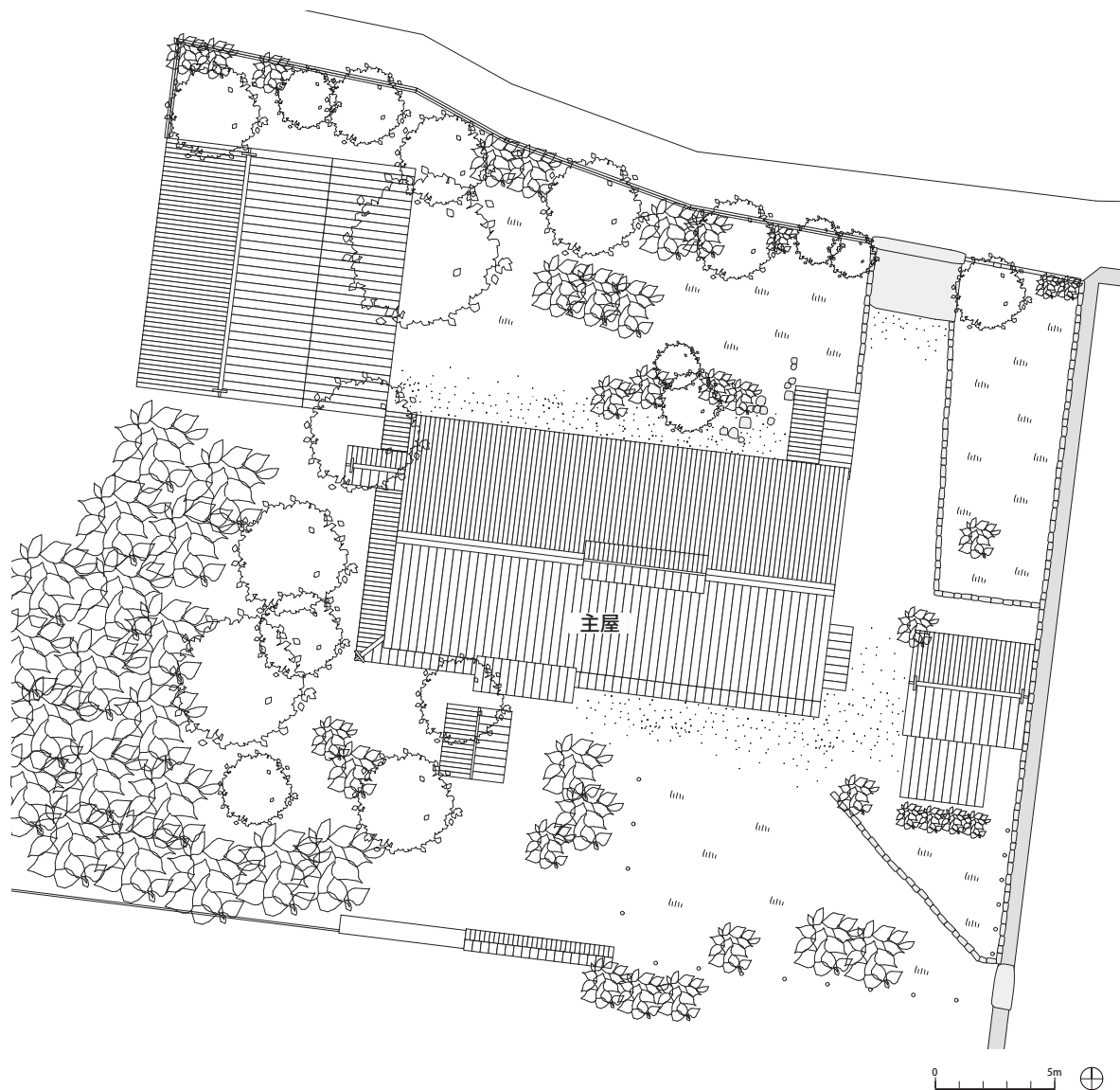
棟持柱配置：西●○○●東

資料：不明

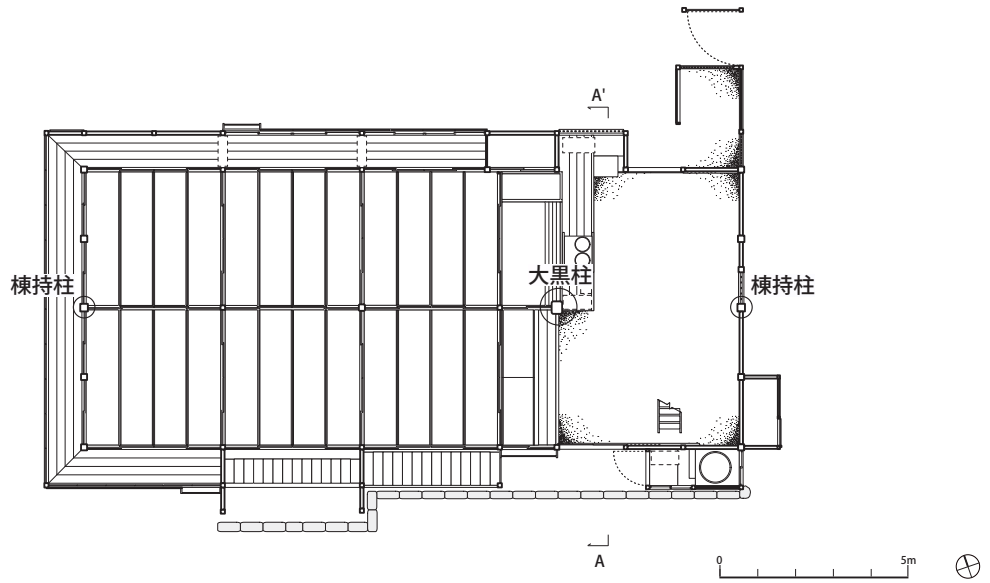
調査年月日：2011年10月25日



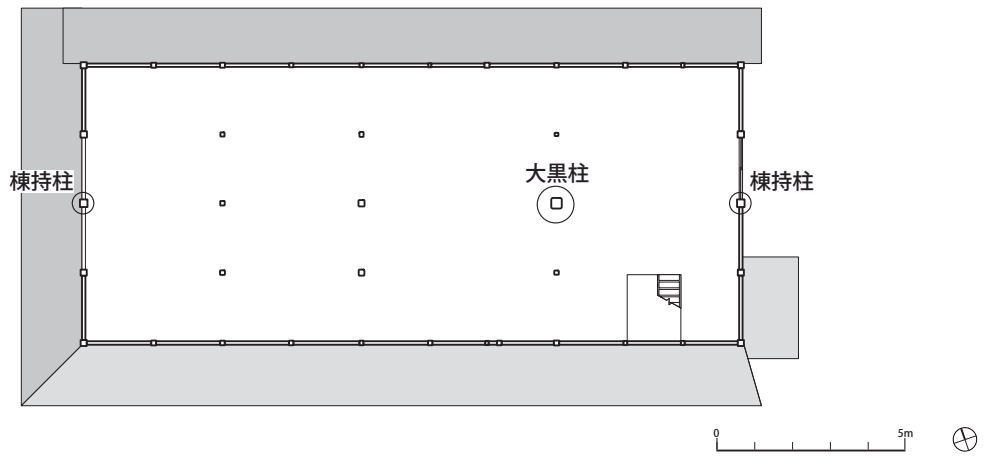
外観写真



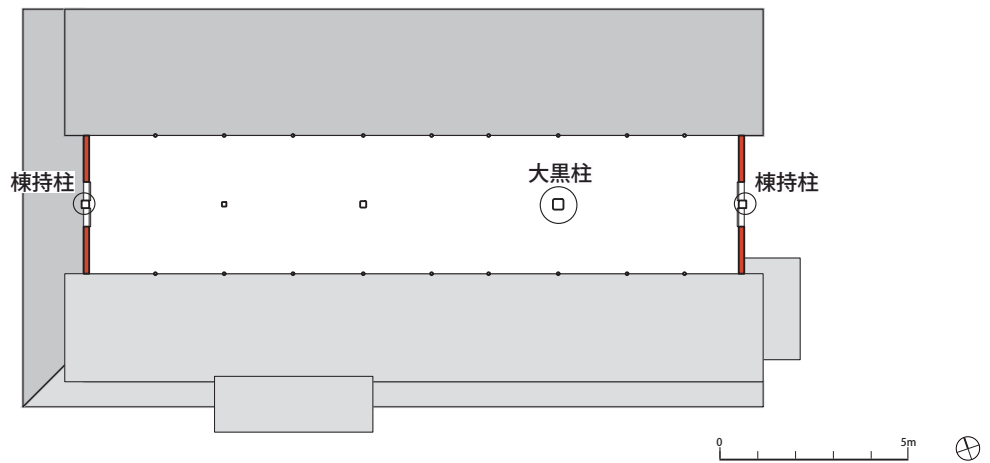
土屋正雄家住宅 配置図 S=1/300



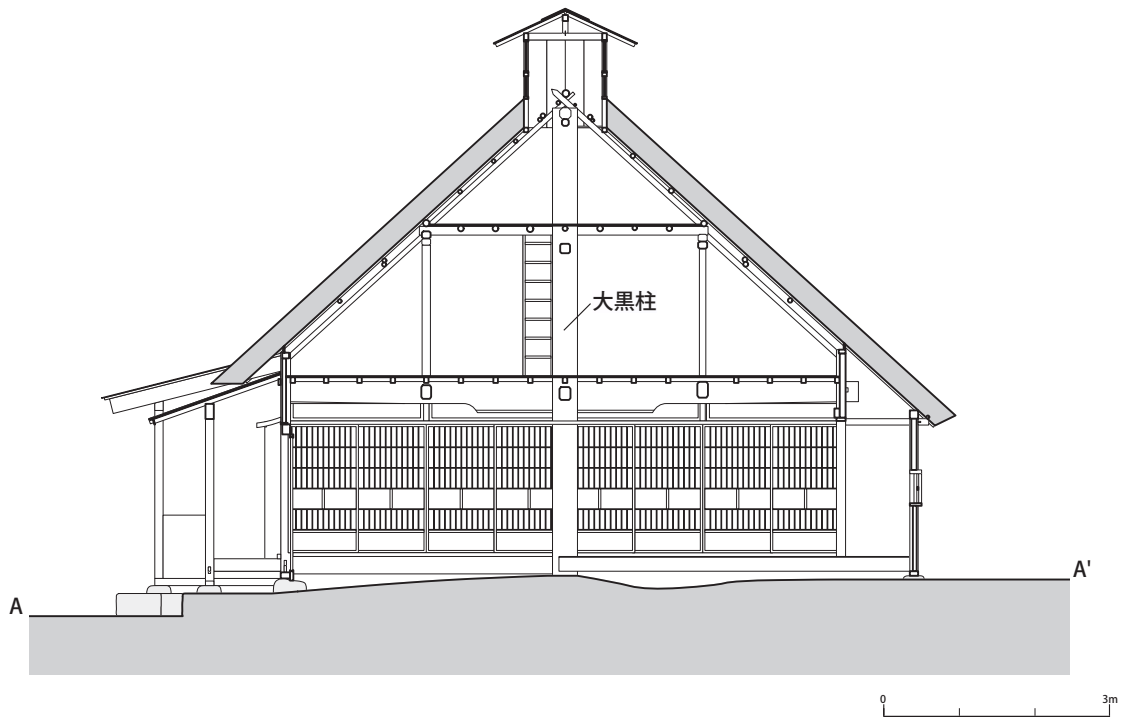
土屋正雄家住宅 1階平面図 S=1/200



土屋正雄家住宅 2階平面図 S=1/200



土屋正雄家住宅 屋根裏平面図 S=1/200



土屋正雄家住宅 A-A' 断面図 S=1/200

## Fu28 中村太丸家住宅

建築年代：17世紀後期

住所：甲州市塩山下小田原

梁行（間）：5.75

桁行（間）：9.25

屋根材料：茅葺、トタン

屋根形式：切妻

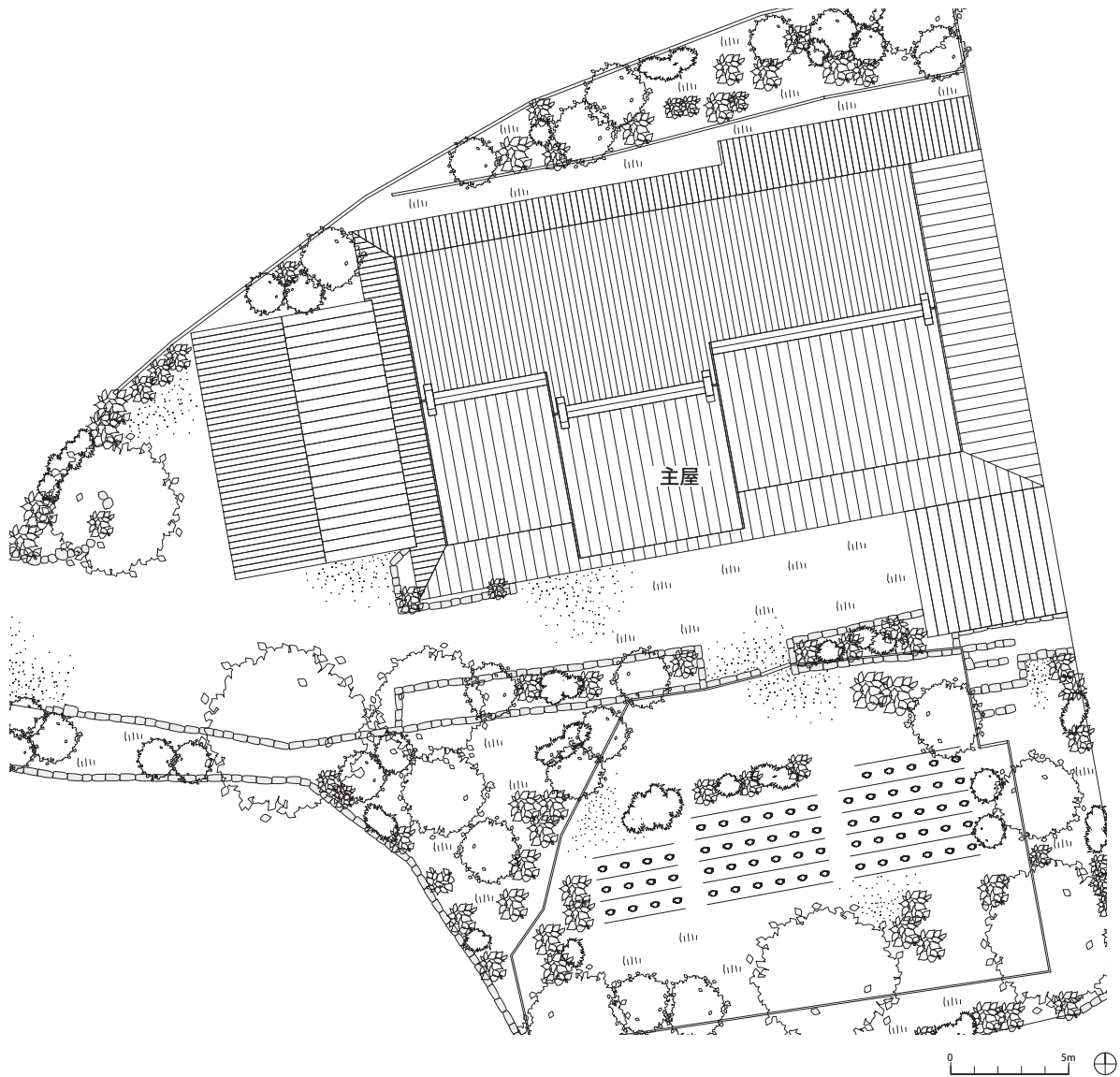
棟持柱配置：西●○○□●東

資料：『上条集落の切妻民家群』掲載

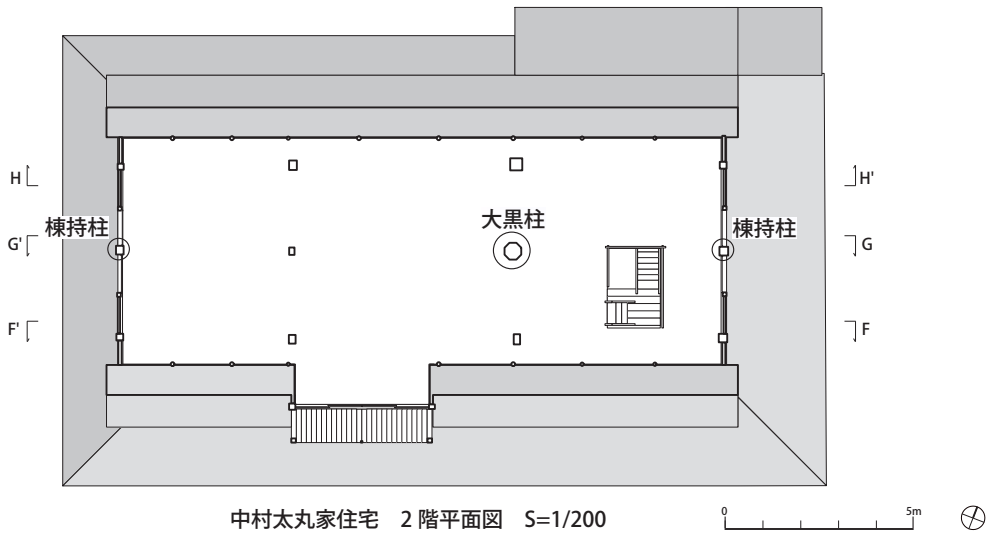
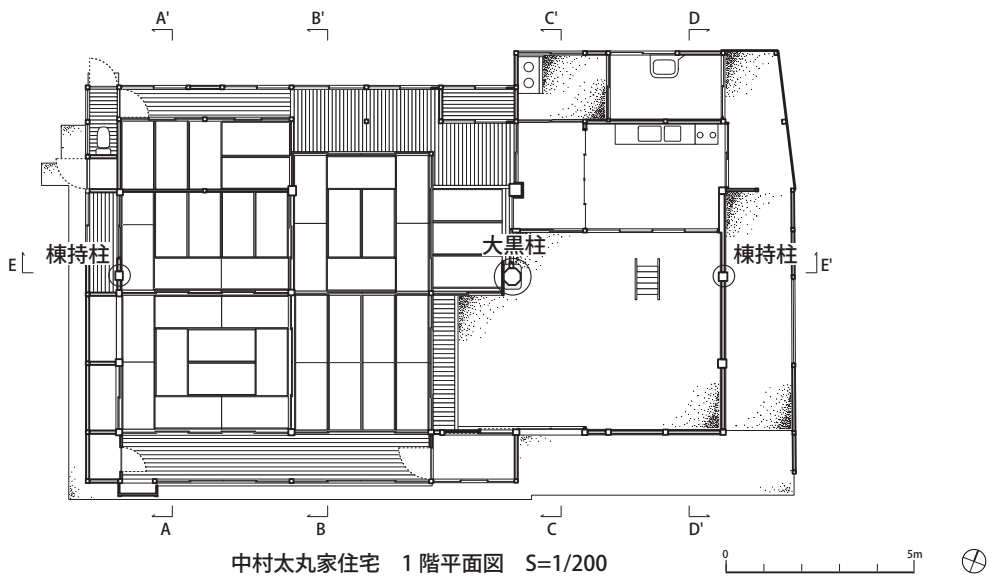
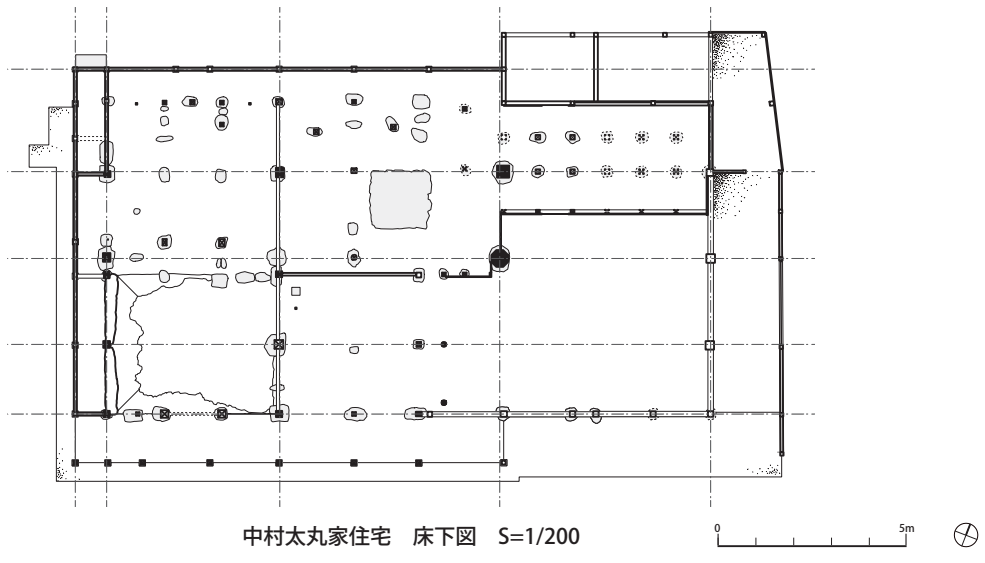
調査年月日：2011年10月25-26日



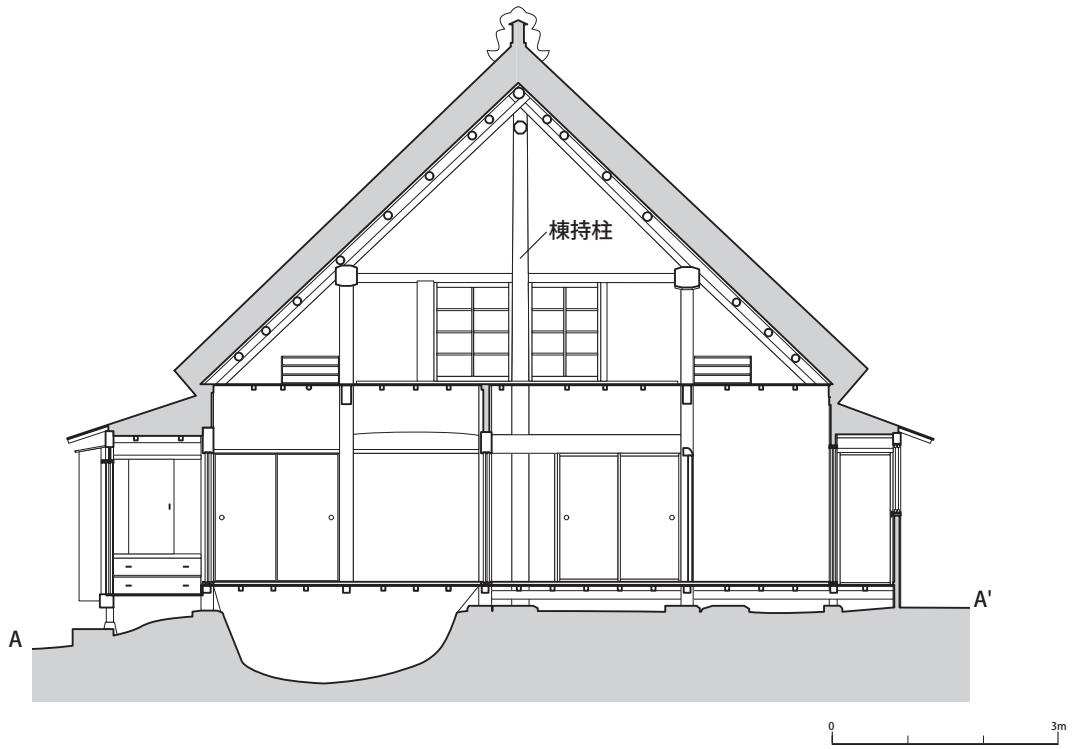
外観写真



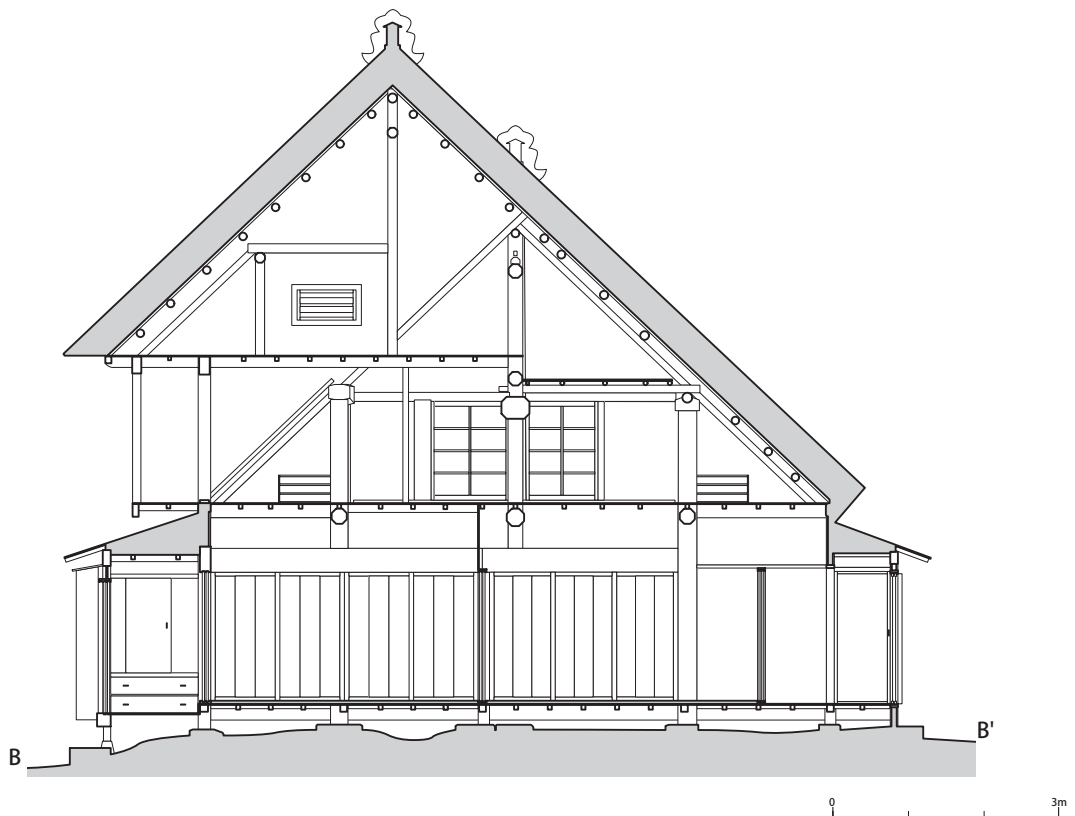
中村太丸家住宅 配置図 S=1/300







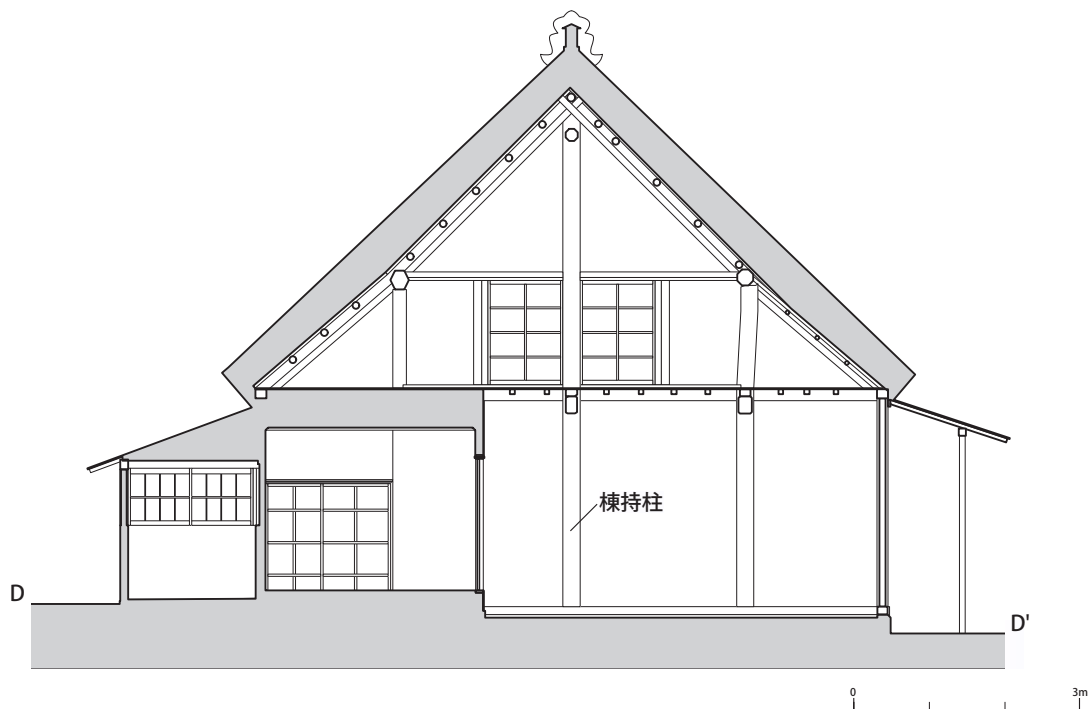
中村太丸家住宅 A-A' 断面図 S=1/100



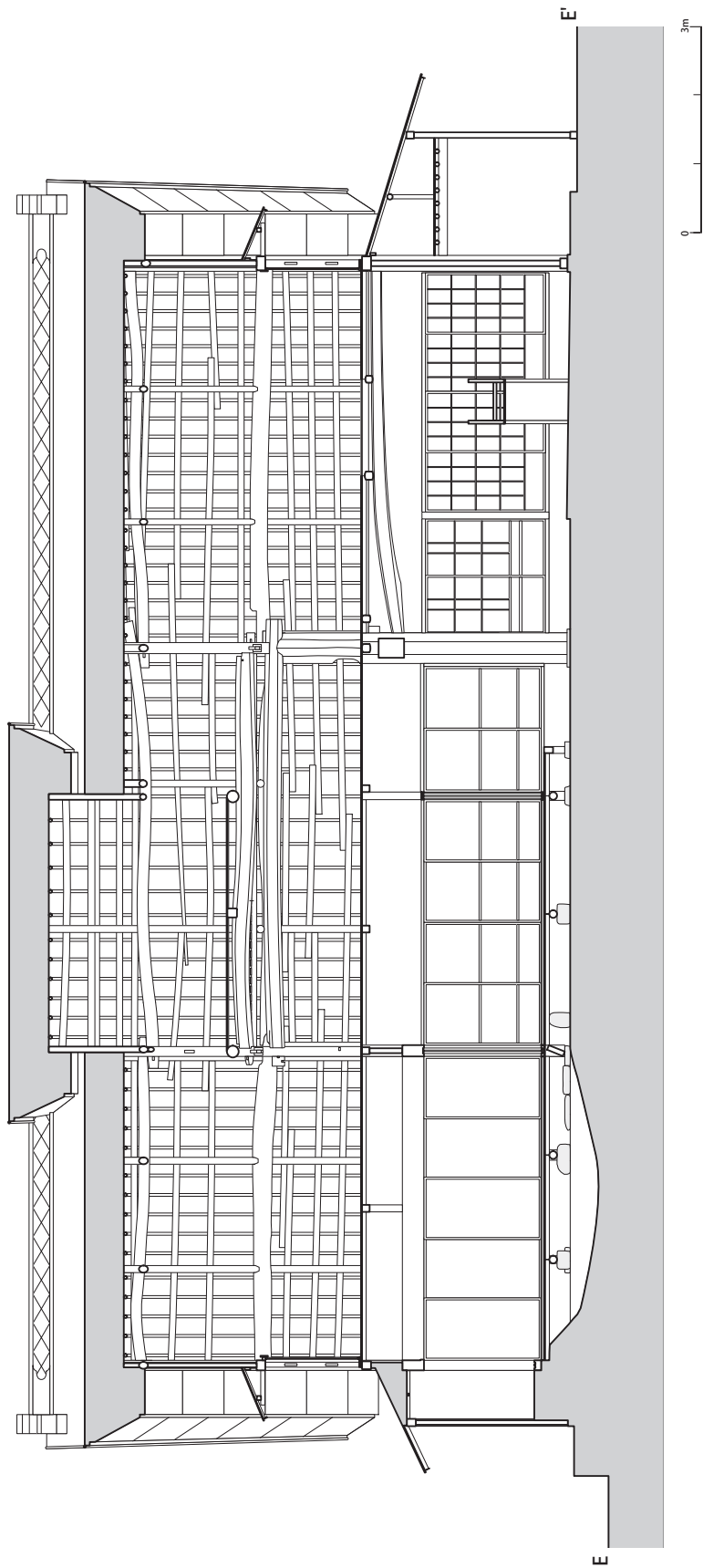
中村太丸家住宅 B-B' 断面図 S=1/100



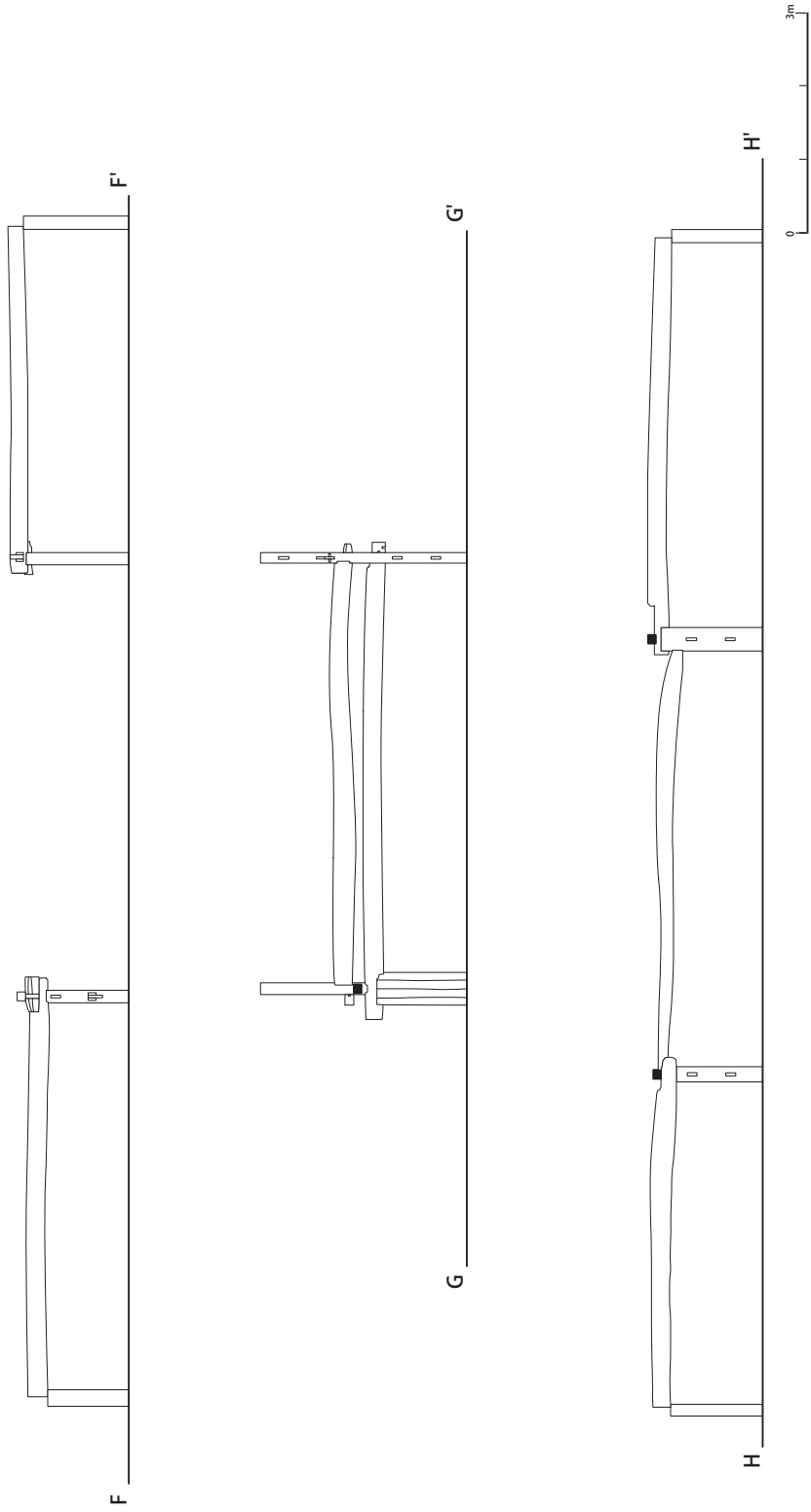
中村太丸家住宅 C-C' 断面図 S=1/100



中村太丸家住宅 D-D' 断面図 S=1/100



中村太丸家住宅 E-E' 断面図 S=1/100



中村太丸家住宅 2階痕跡図 S=1/100

## Fu29 西川家住宅

建築年代：18世紀後期

住所：山梨市牧丘町窪平

梁行（間）：5.00

桁行（間）：11.00

屋根材料：茅草、トタン

屋根形式：切妻

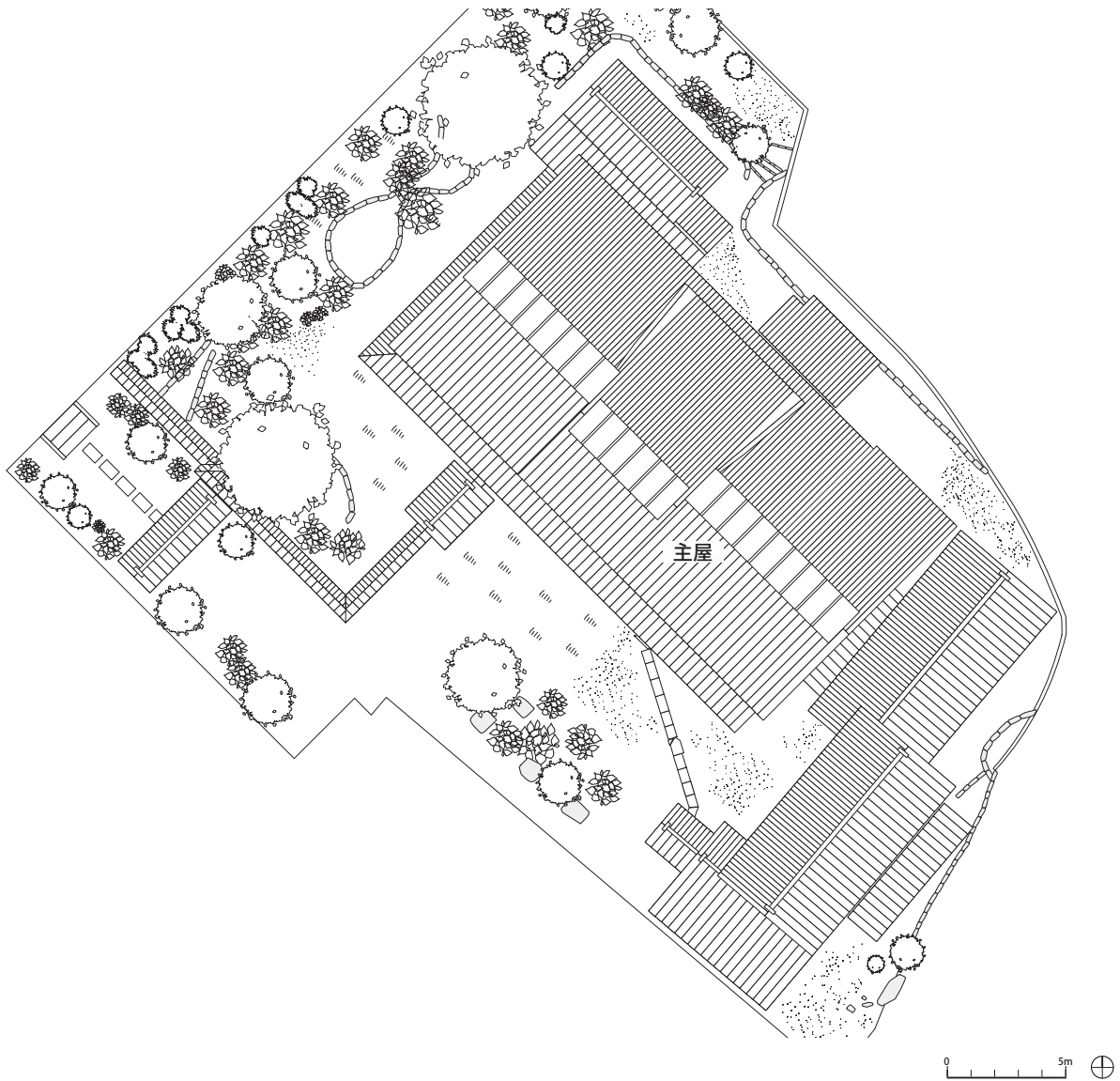
棟持柱配置：西○○○●○●●東

資料：『山梨県の民家』掲載

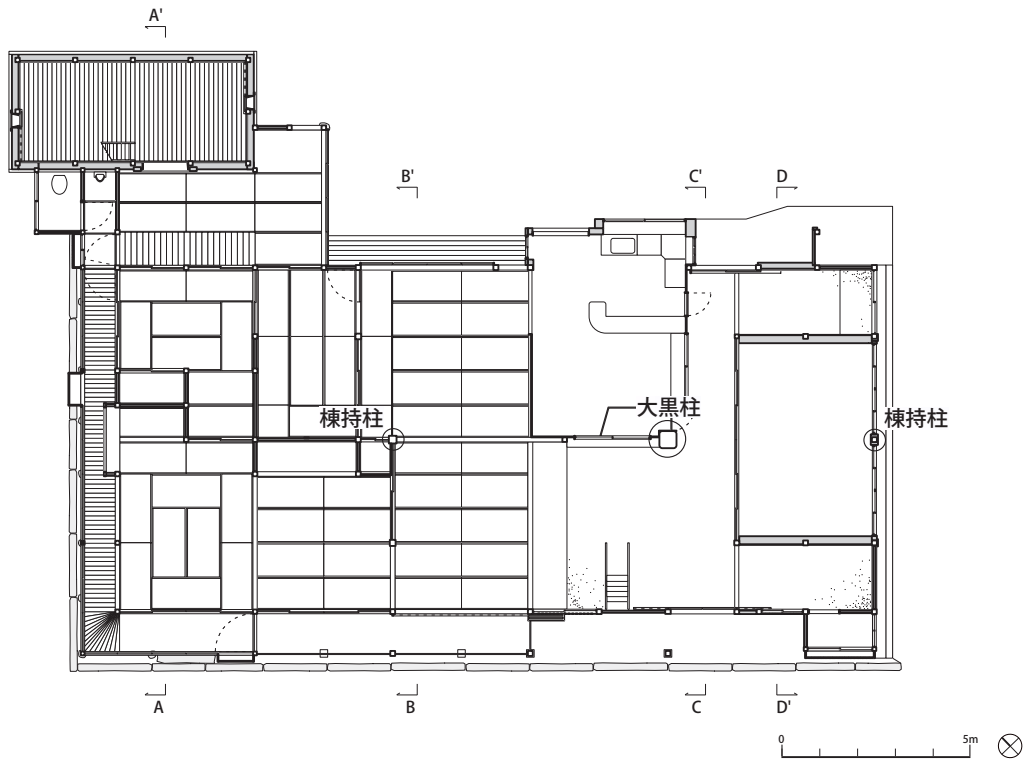
調査年月日：2011年11月29-30日



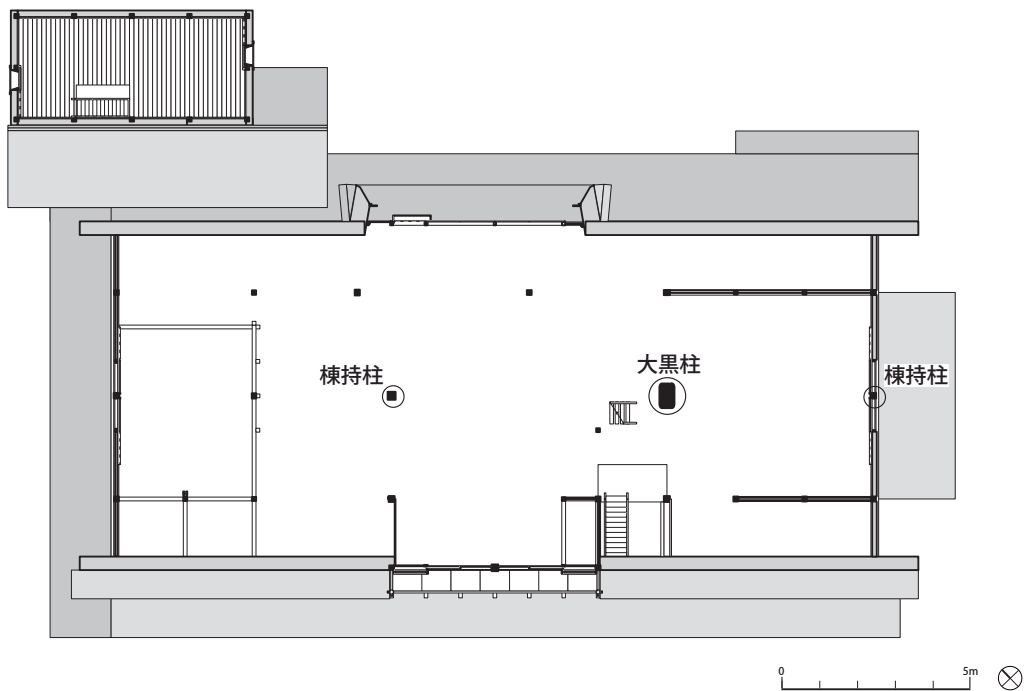
外観写真



西川家住宅 配置図 S=1/300

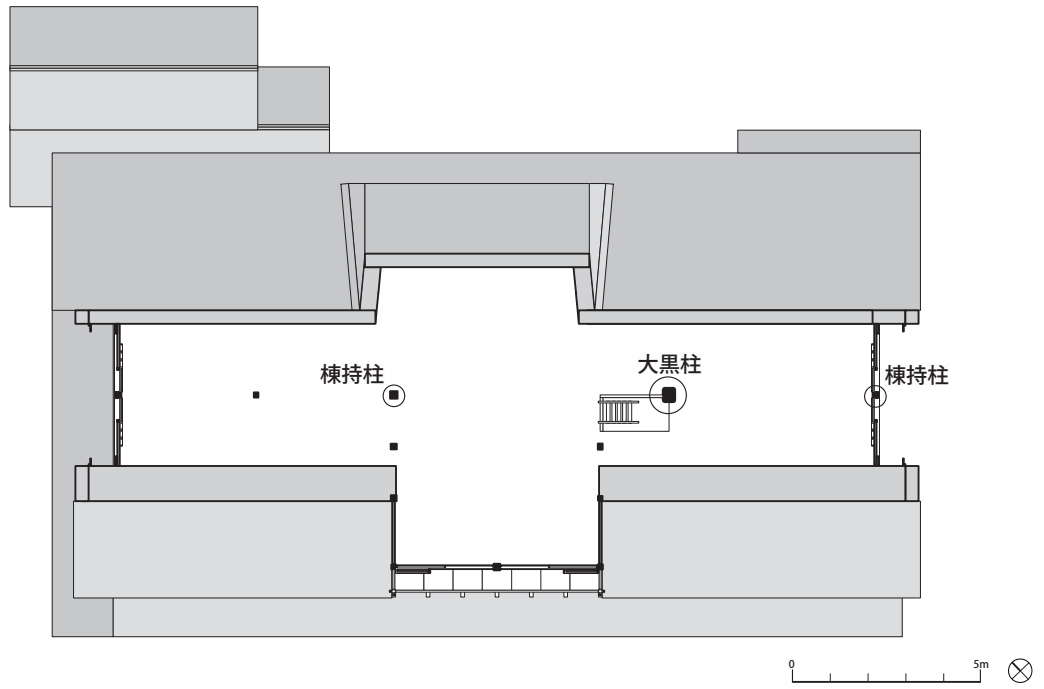


西川家住宅 1階平面図 S=1/200

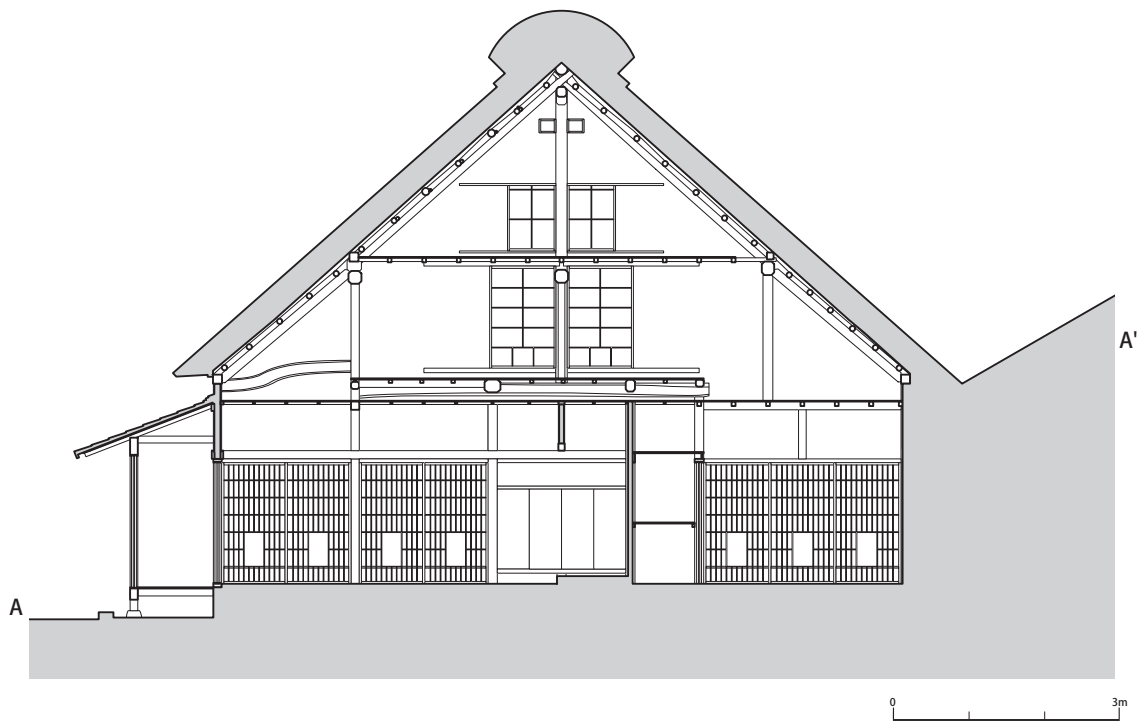


西川家住宅 2階平面図 S=1/200

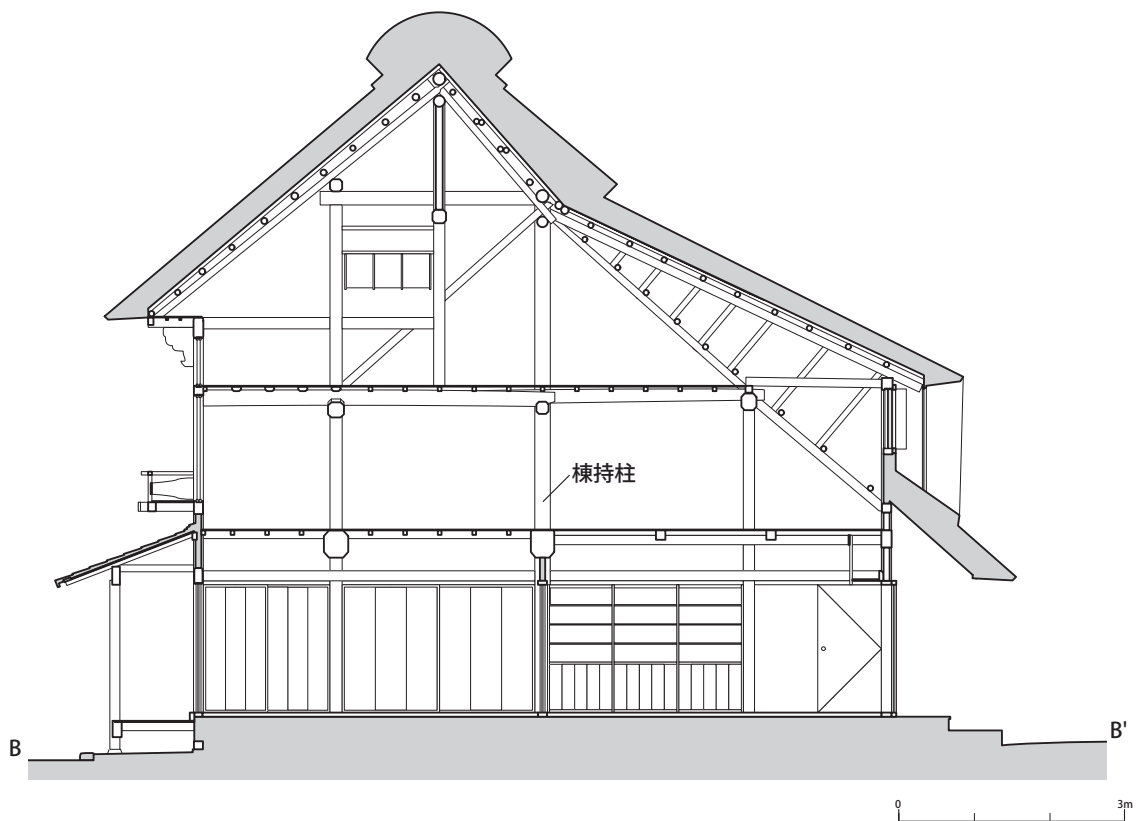




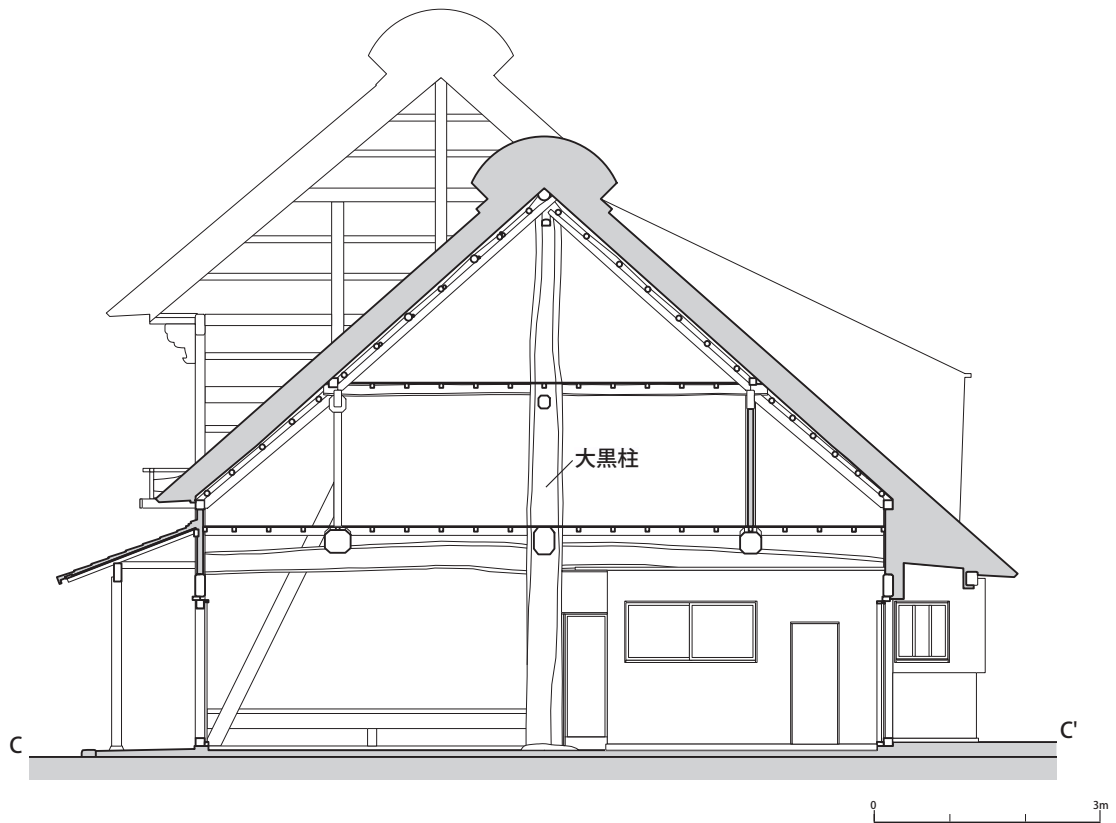
西川家住宅 小屋裏平面図 S=1/200



西川家住宅 A-A' 断面図 S=1/100



西川家住宅 B-B' 断面図 S=1/100



西川家住宅 C-C' 断面図 S=1/100



西川家住宅 D-D' 断面図 S=1/100

## Fu30 旧坂本家住宅

建築年代：18世紀中期

住所：山梨市三富徳和

梁行（間）：4.50

桁行（間）：10.00

屋根材料：茅葺、トタン

屋根形式：切妻

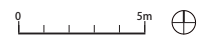
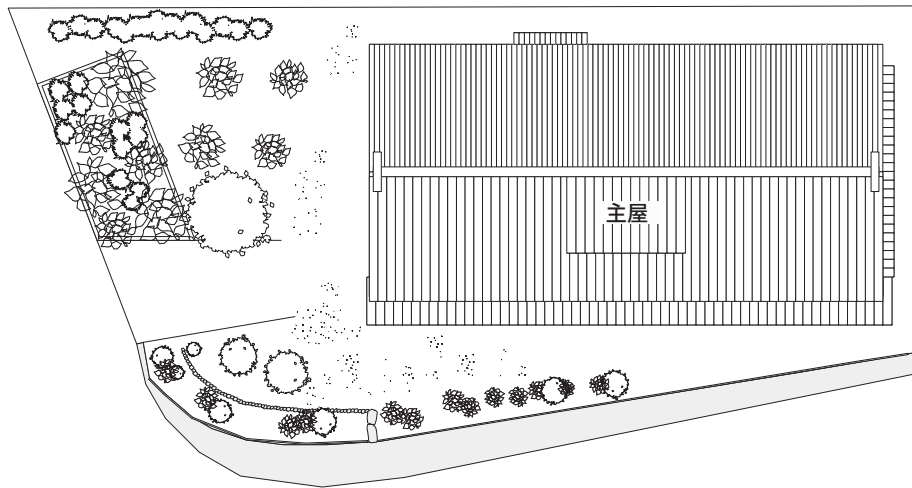
棟持柱配置：西●○○●○○東

資料：『山梨県の民家』他

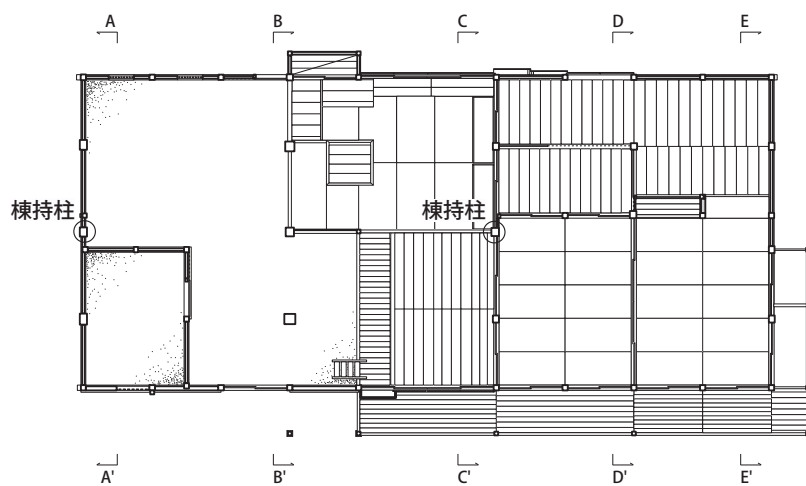
調査年月日：2011年11月29-30日



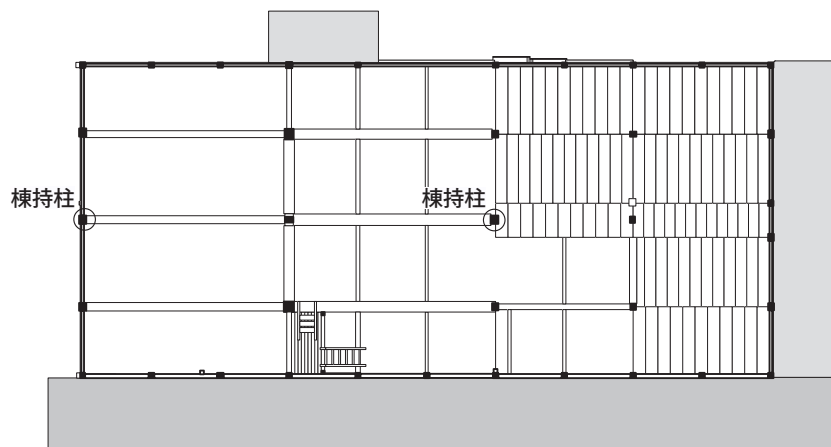
外観写真



旧坂本家住宅 配置図 S=1/300



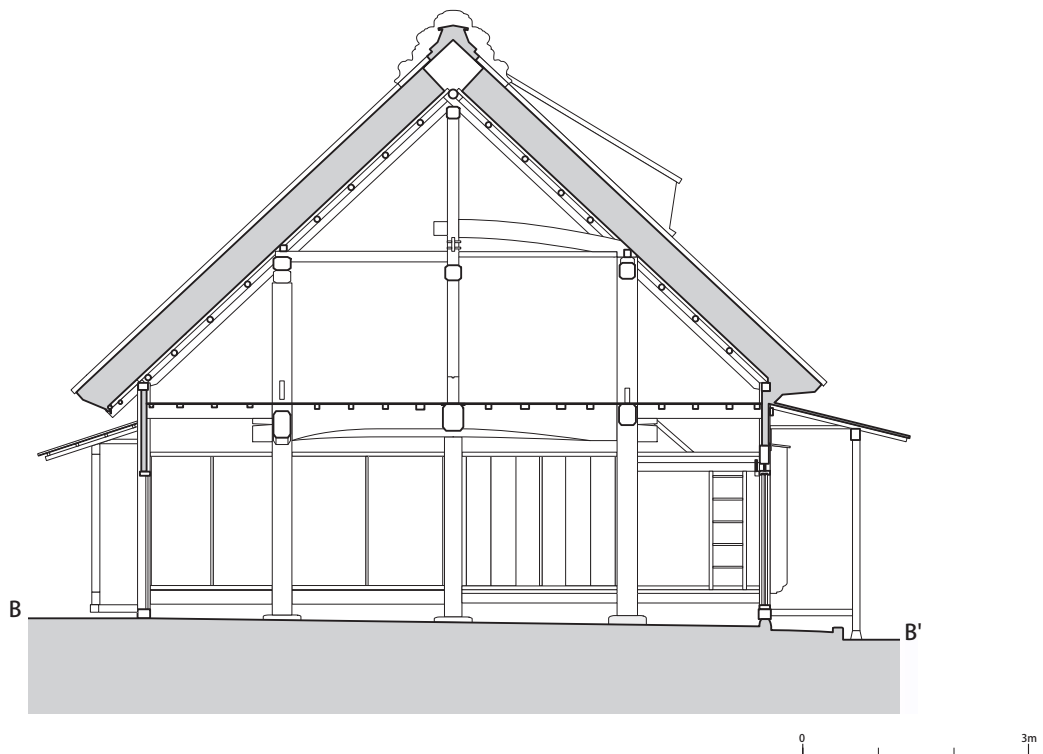
旧坂本家住宅 1階平面図 S=1/200



旧坂本家住宅 2階平面図 S=1/200

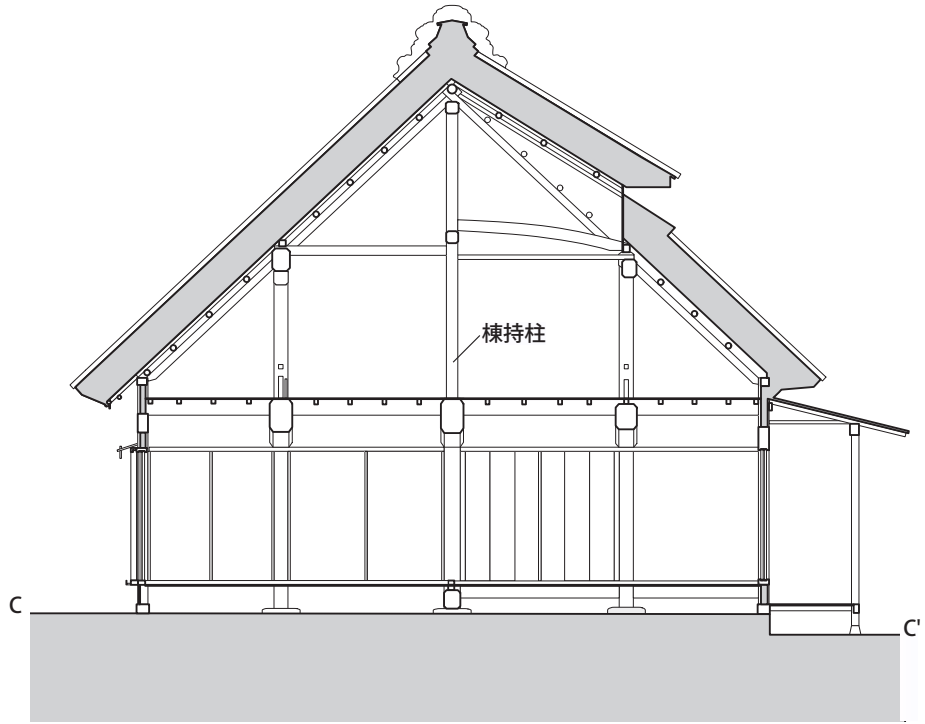


旧坂本家住宅 A-A' 断面図 S=1/100

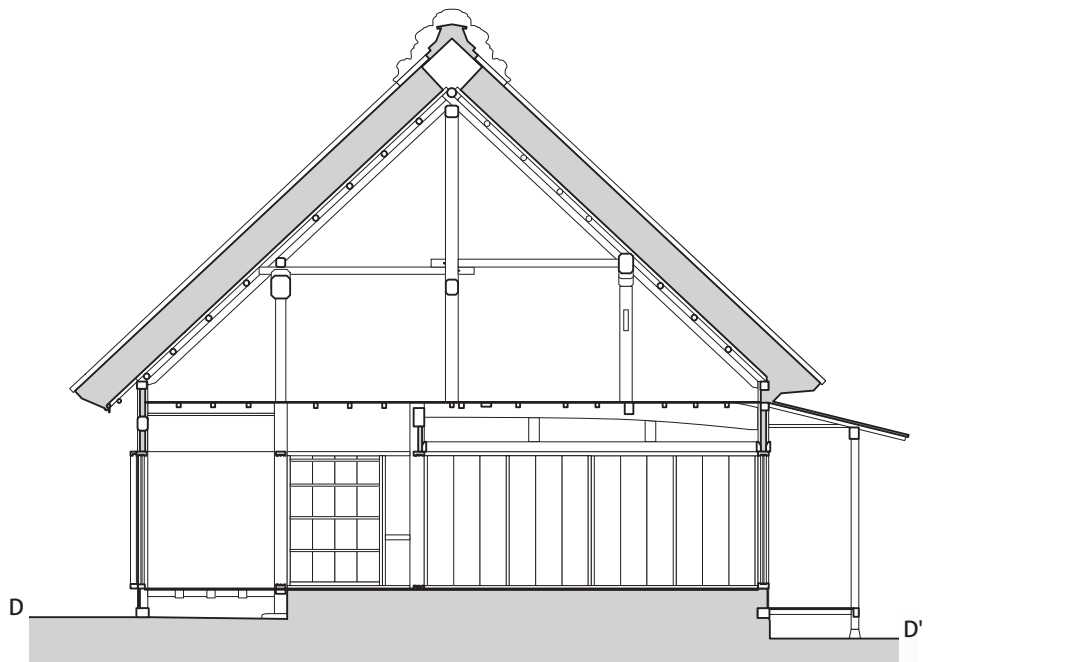


旧坂本家住宅 B-B' 断面図 S=1/100

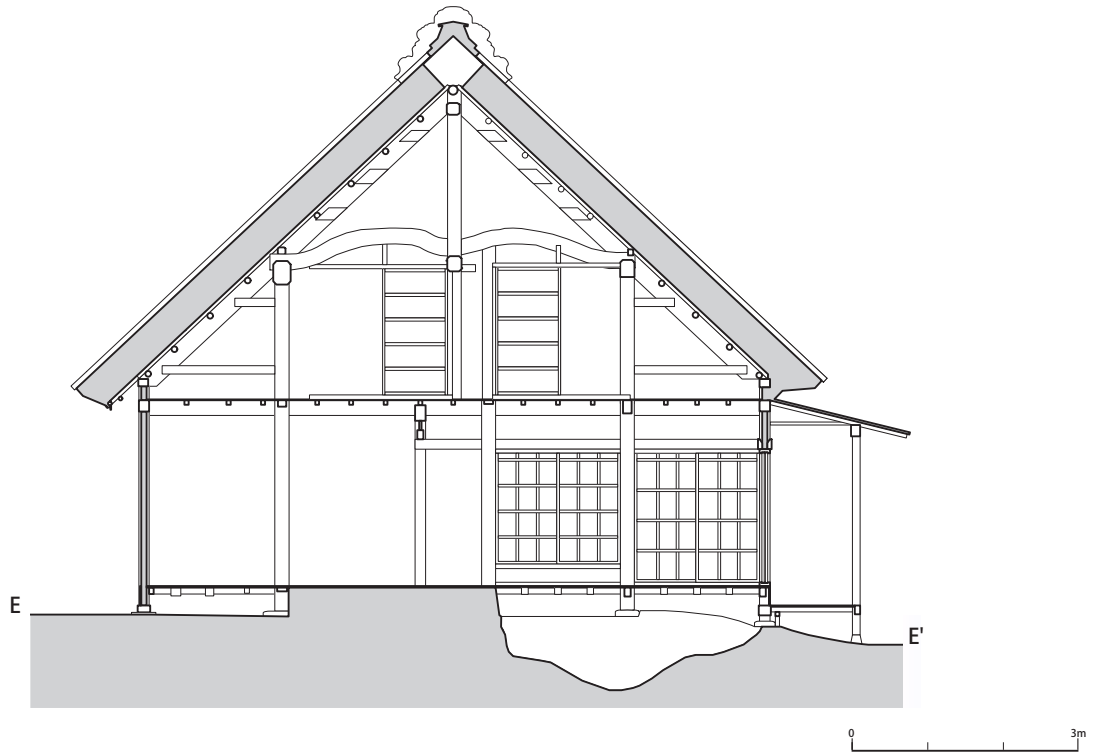




旧坂本家住宅 C-C' 断面図 S=1/100



旧坂本家住宅 D-D' 断面図 S=1/100



旧坂本家住宅 E-E' 断面図 S=1/100



旧坂本家住宅 西側立面图 S=1/100



旧坂本家住宅 東側立面図 S=1/100

### Fu31 金井加里神社 随神門

建築年代：17世紀後期

住所：甲州市塩山下小田原

梁行（間）：1.70

桁行（間）：3.00

屋根材料：板葺、トタン

屋根形式：切妻

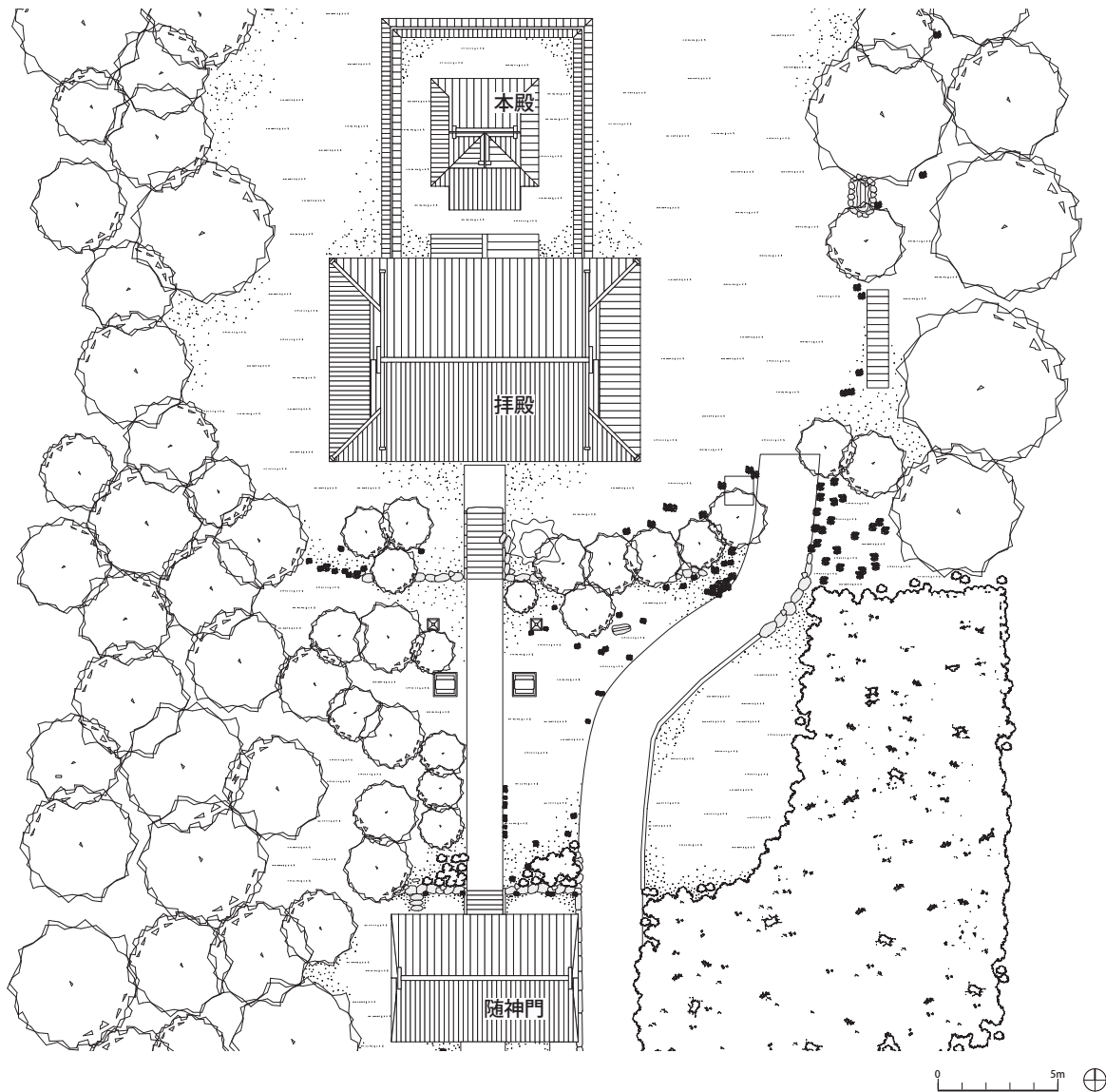
棟持柱配置：北●●●●南

資料：『上条集落の切妻民家群』他

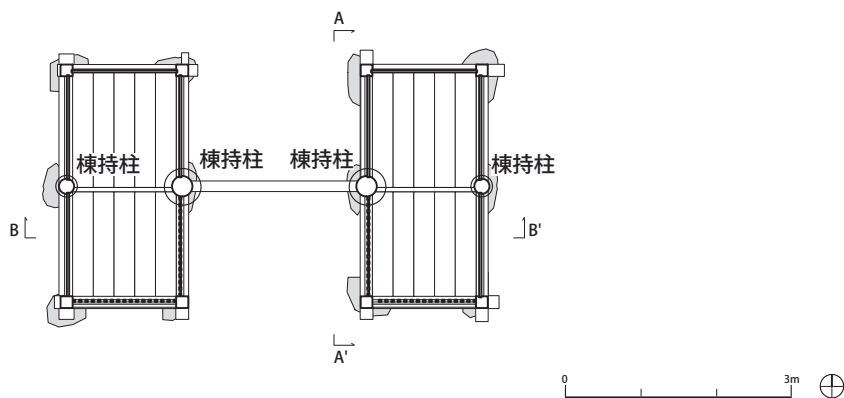
調査年月日：2011年5月20日



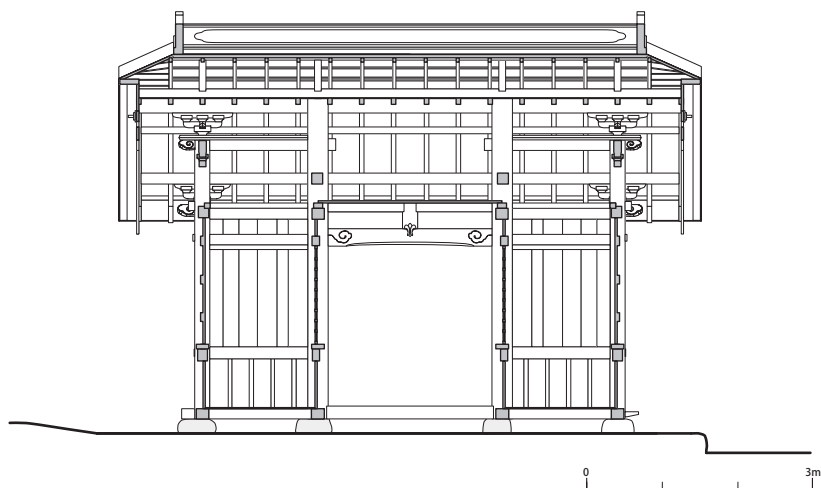
外観写真



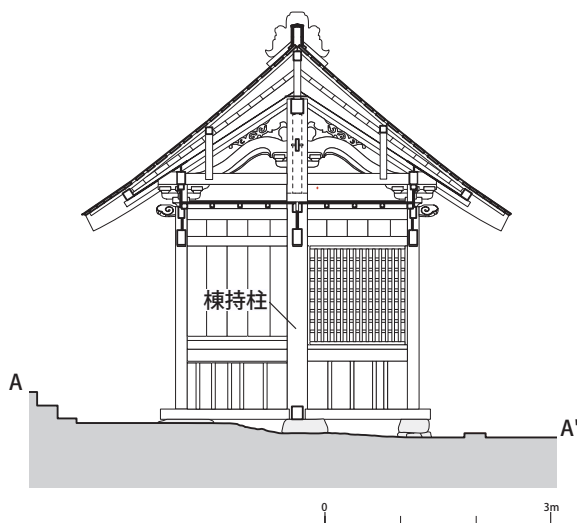
金井加里神社 配置図 S=1/300



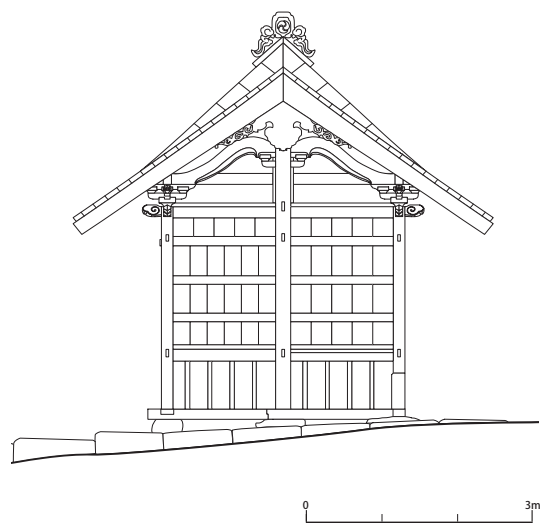
金井加里神社 随神門 平面図 S=1/100



金井加里神社 随神門 桁行断面図 S=1/100



金井加里神社 随神門 A-A' 断面図 S=1/100



金井加里神社 随神門 東側立面図 S=1/100

## Fu32 福蔵院

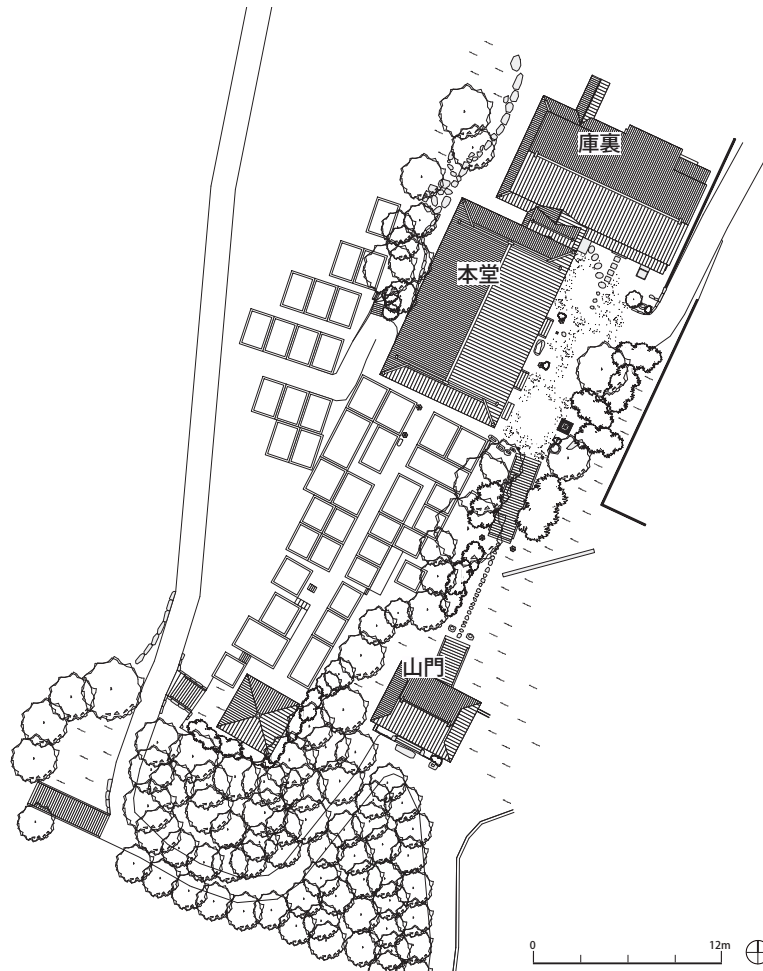
	庫裏	山門
住所	甲州市塩山下小田原	
建築年代	不明	17世紀後期
梁行(間)	6.00	2.00
桁行(間)	10.00	3.35
屋根材料	瓦形トタン葺き	トタン葺き
棟持柱配置	北?○■○○○○○●南	北○●●○南
資料	『上条集落の切妻民家群』他	
調査年月日	2011年10月8日	2011年7月9日



福蔵院庫裏 外観写真

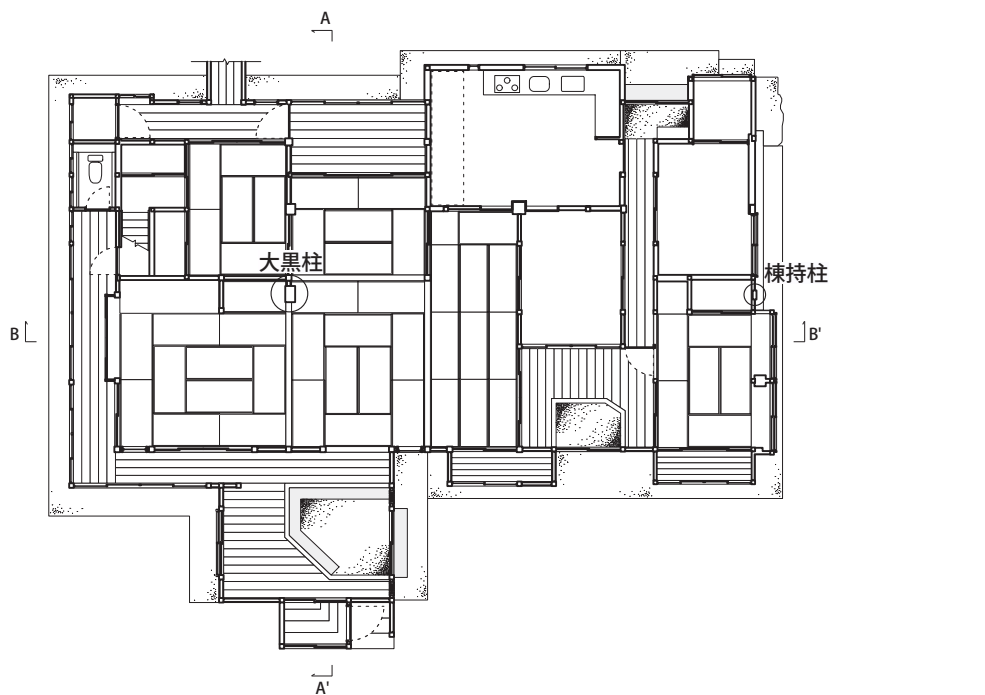


福蔵院山門 外観写真

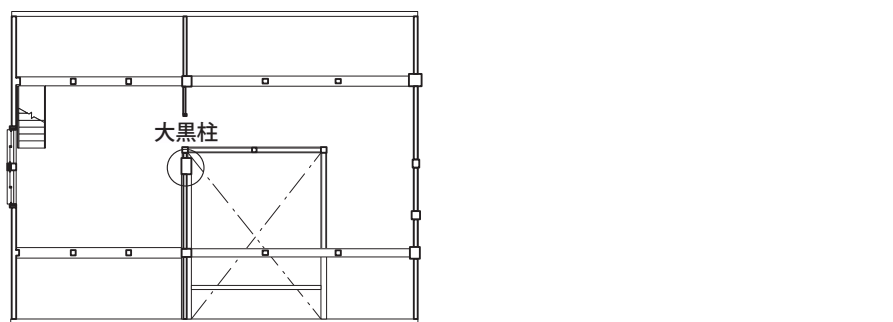


福蔵院 配置図 S=1/800

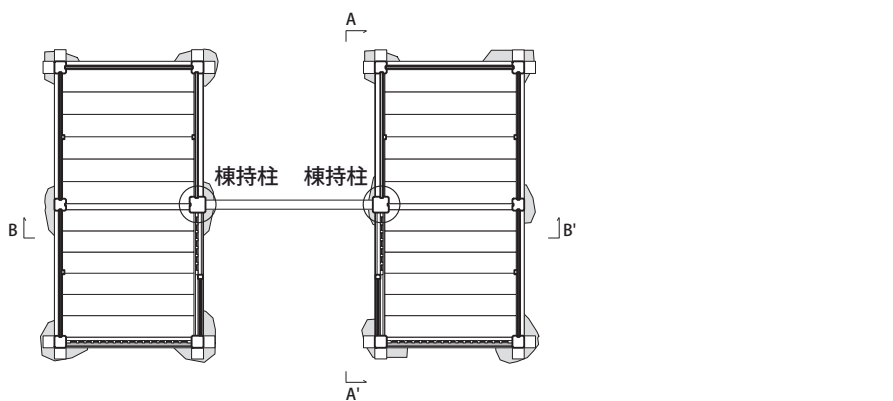




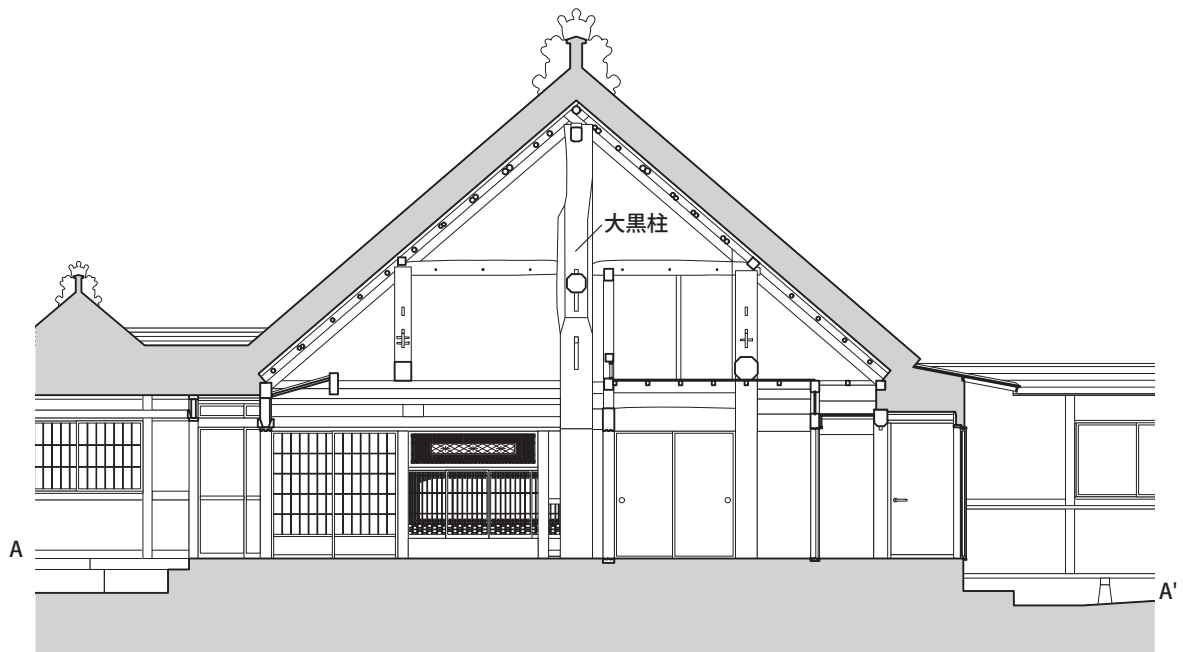
福蔵院 庫裏 1階平面図 S=1/200



福蔵院 庫裏 小屋裏平面図 S=1/200



福蔵院 山門 平面図 S=1/100

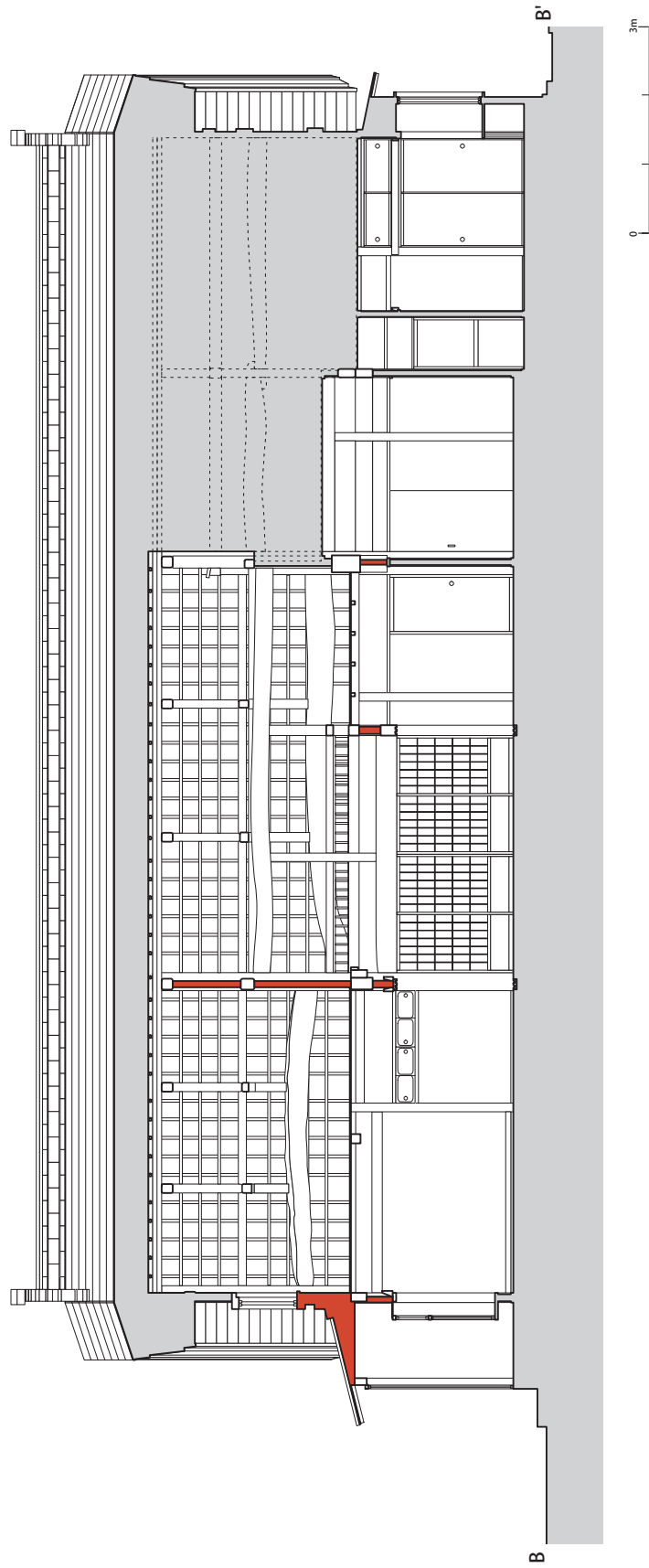


福蔵院 庫裏 A-A' 断面図 S=1/100

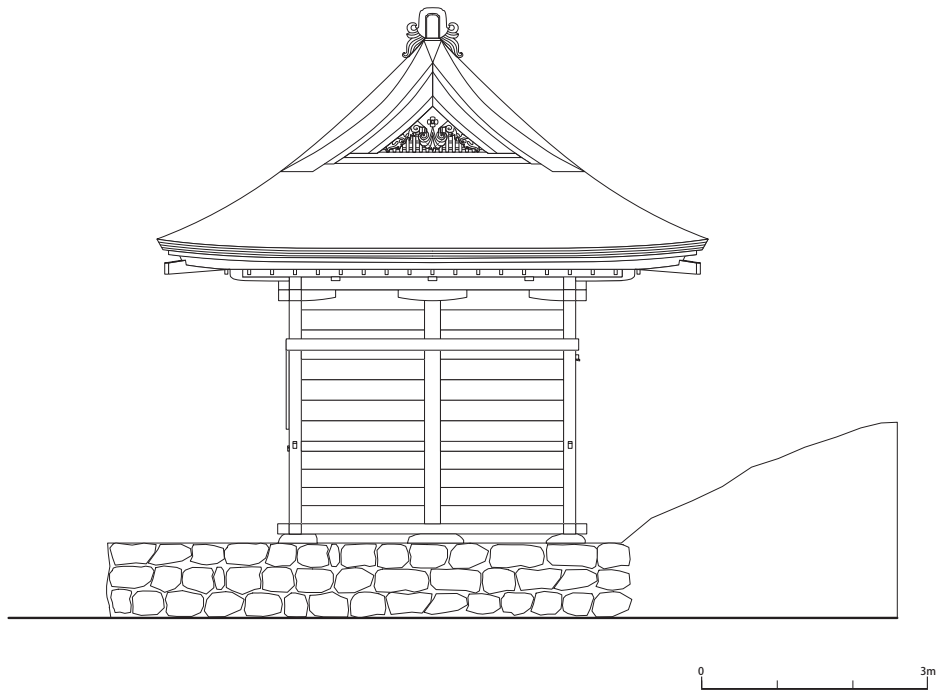


福蔵院 庫裏 東側立面図 S=1/100

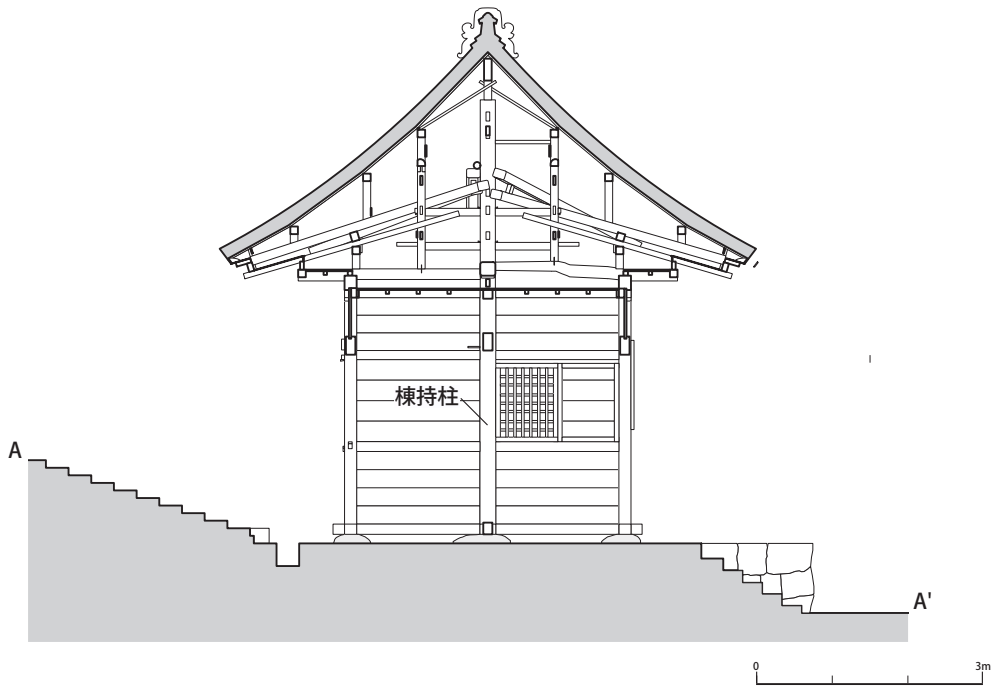




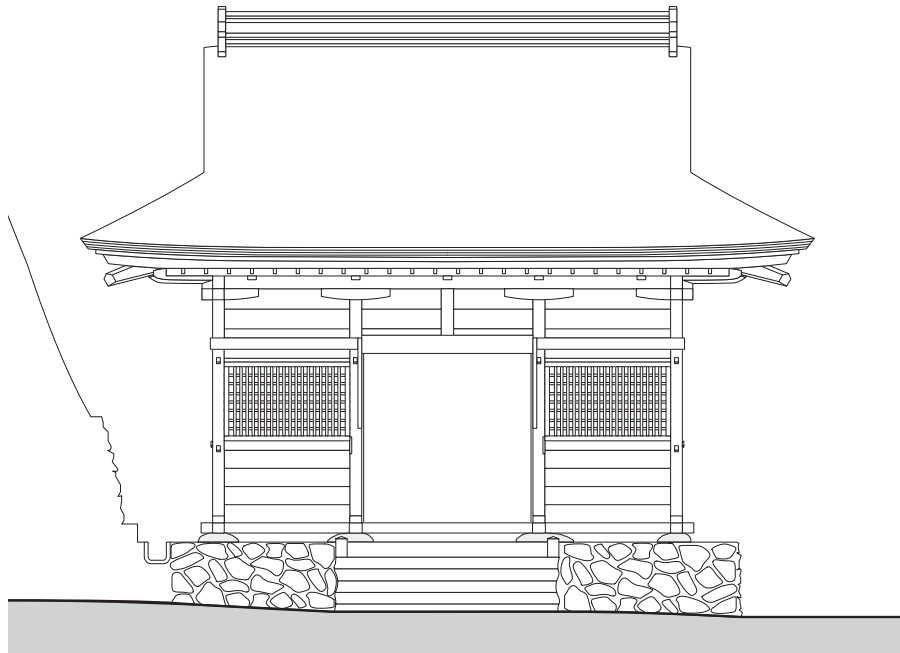
福蔵院 庫裏 B-B' 断面図 S=1/100



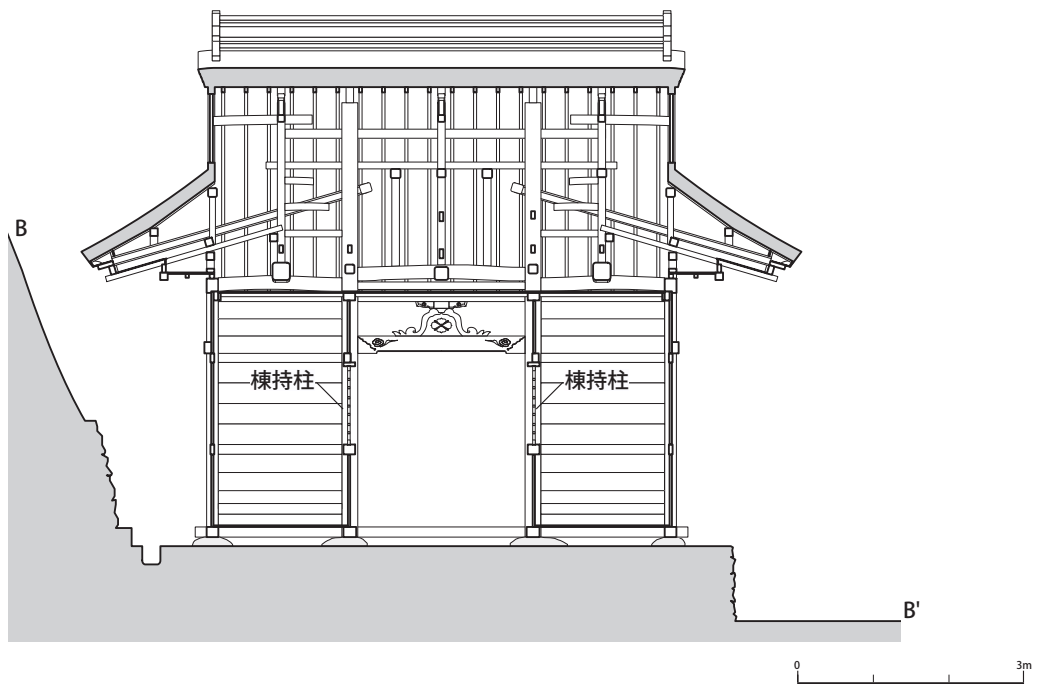
福蔵院 山門 梁行断面図 S=1/100



福蔵院 山門 A-A' 断面図 S=1/100



福蔵院 山門 南側立面図 S=1/100



福蔵院 山門 B-B' 断面図 S=1/100

### Fu33 長谷寺 山門

建築年代：18世紀中期

住所：南アルプス市榎原

梁行（間）：2.00

桁行（間）：4.10

屋根材料：板葺、トタン

屋根形式：切妻

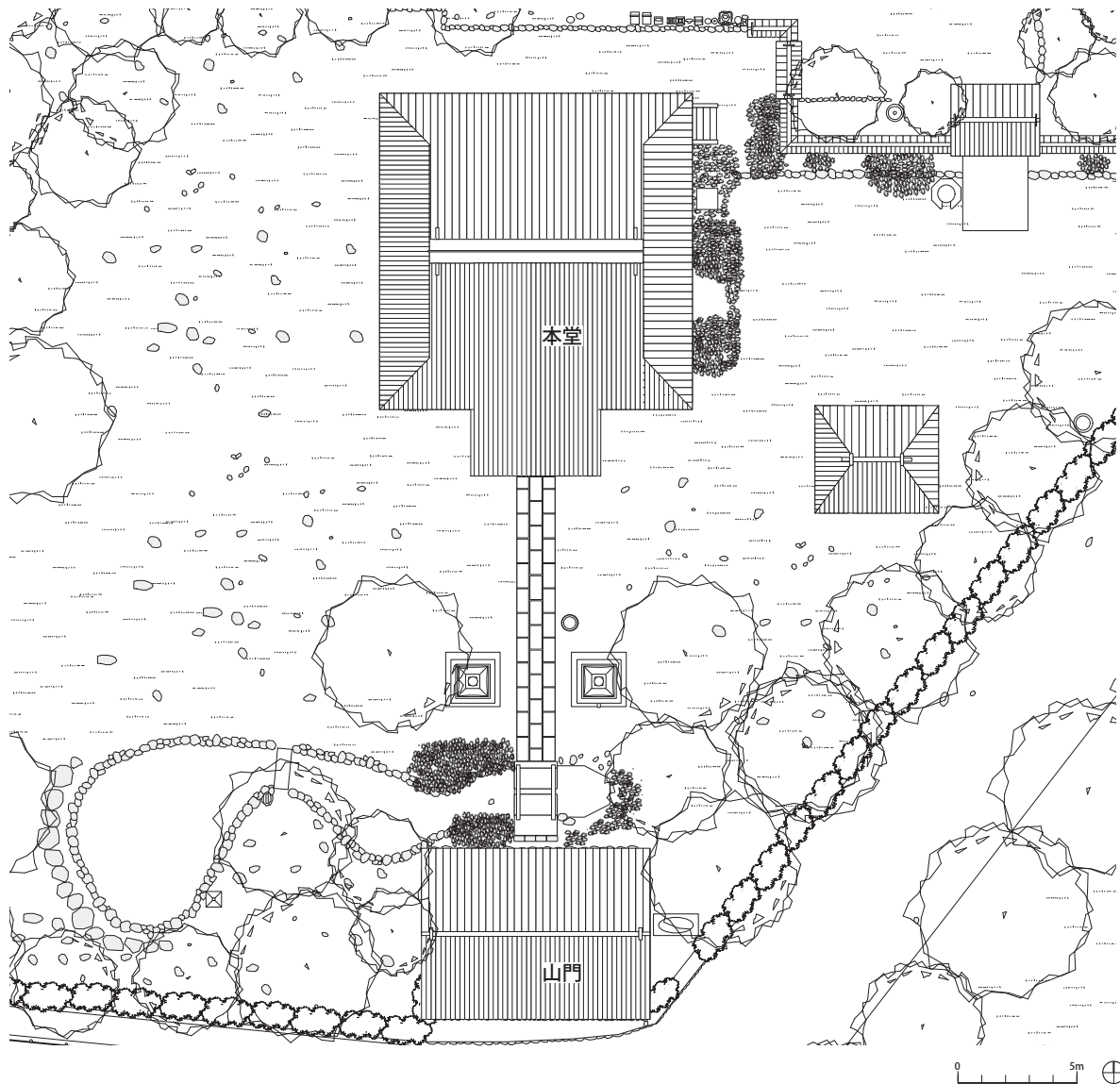
棟持柱配置：西○●●○東

資料：不明

調査年月日：2011年5月20日

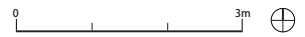
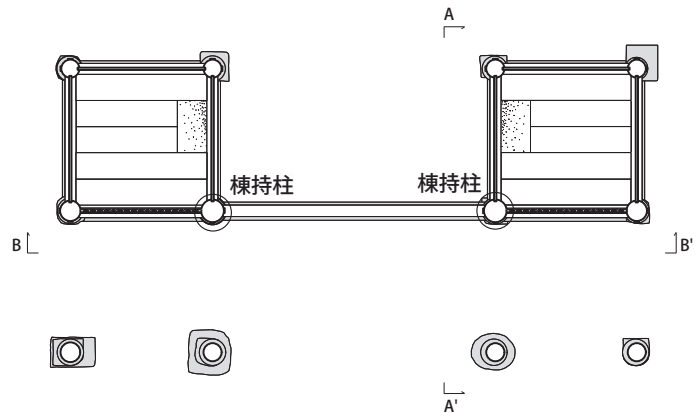


外観写真

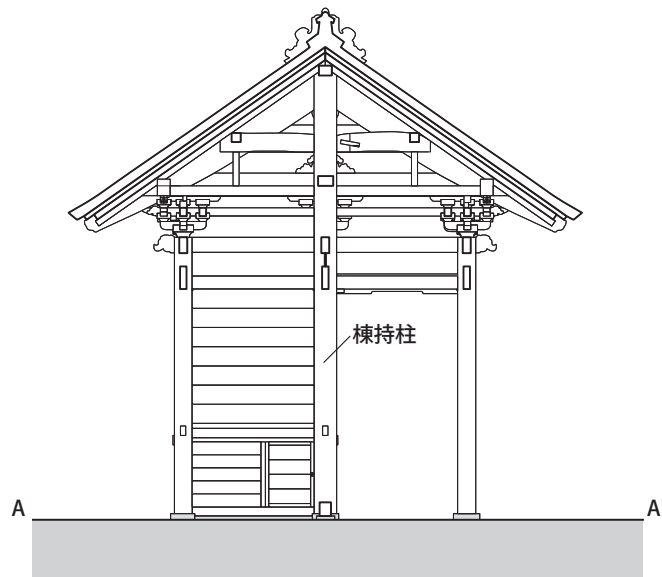


長谷寺 配置図 S=1/300

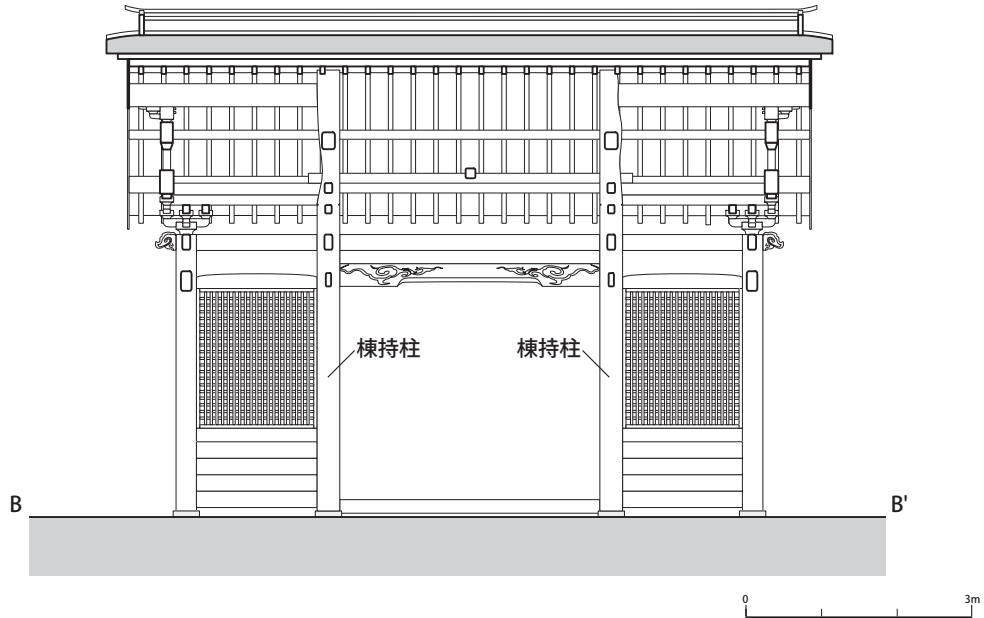




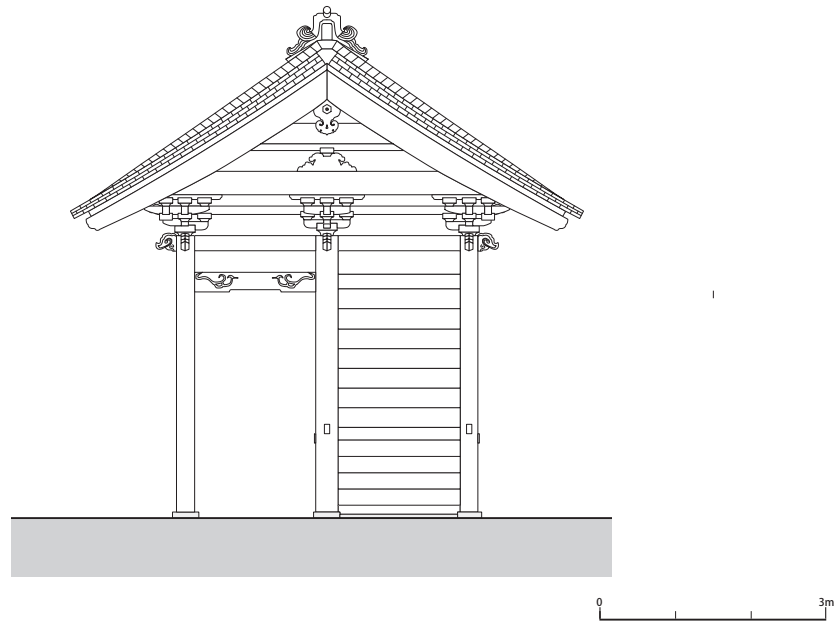
長谷寺 山門 平面図 S=1/100



長谷寺 山門 A-A' 断面図 S=1/100



長谷寺 山門 B-B' 断面図 S=1/100



長谷寺 山門 東側立面図 S=1/100

### Fu34 武田八幡神社 随神門

建築年代：不明

住所：韮崎市神山町北宮地

梁行（間）：2.15

桁行（間）：3.50

屋根材料：瓦葺

屋根形式：入母屋

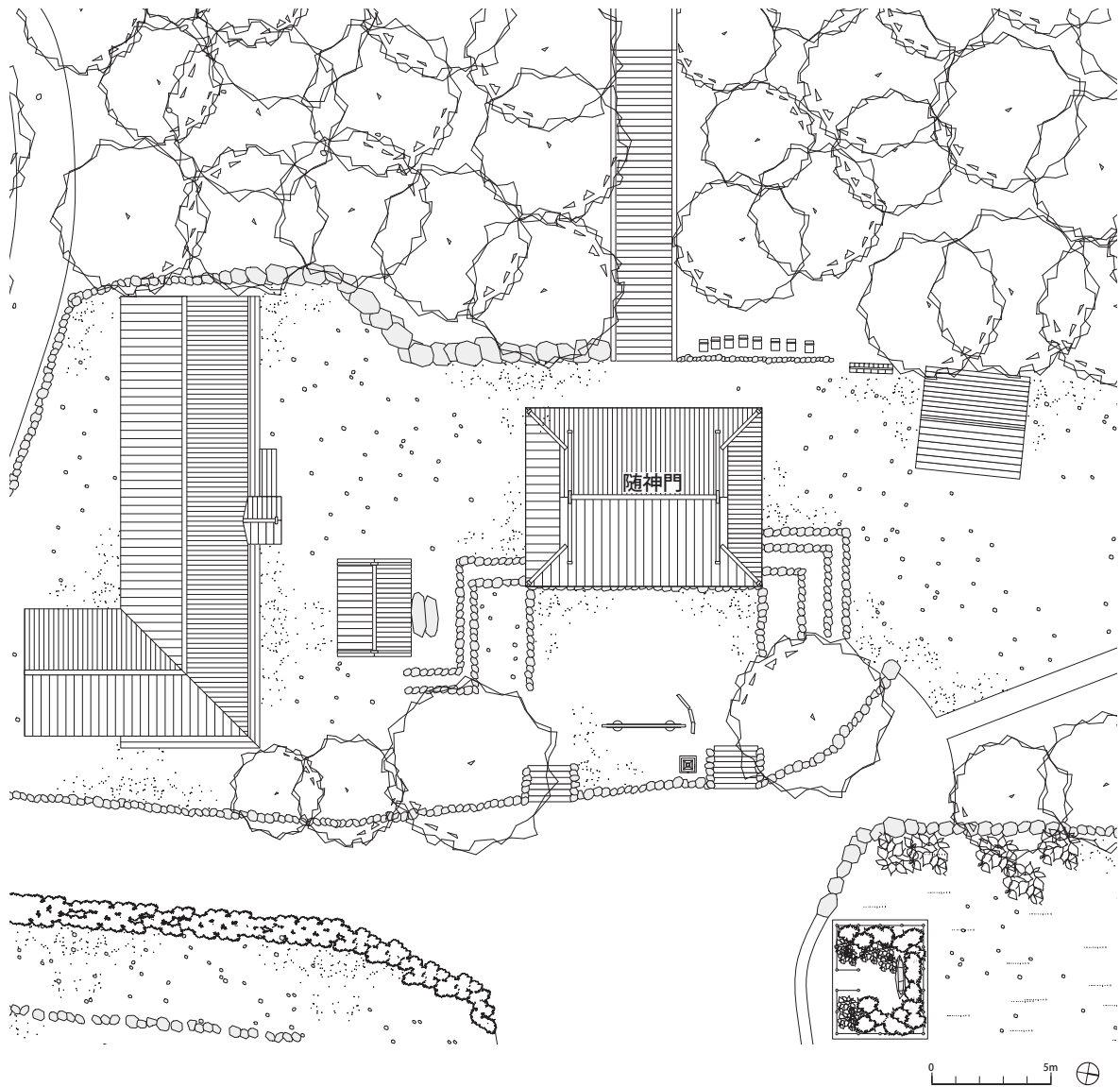
棟持柱配置：北○●●○南

資料：不明

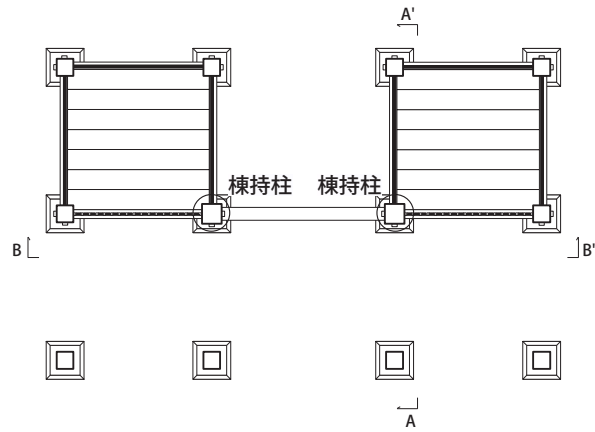
調査年月日：2011年7月8日



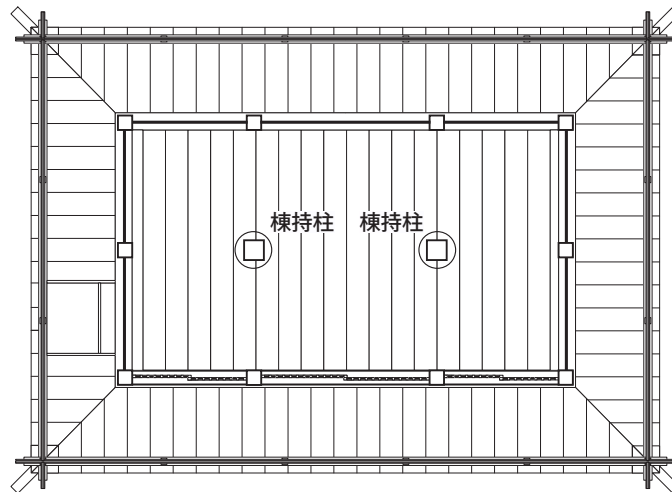
外観写真



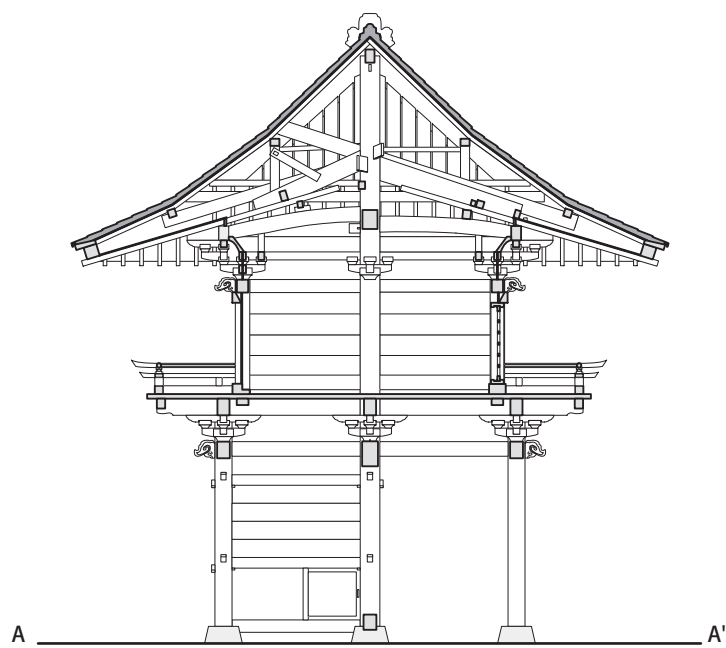
武田八幡神社 配置図 S=1/300



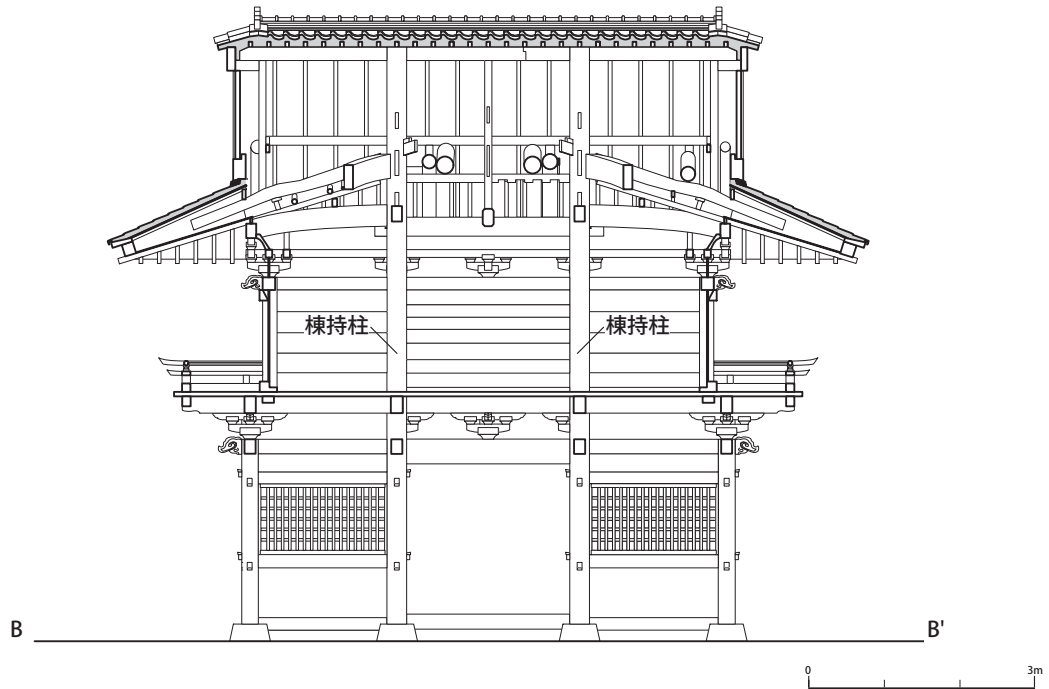
武田八幡神社 随神門 1階平面図 S=1/100



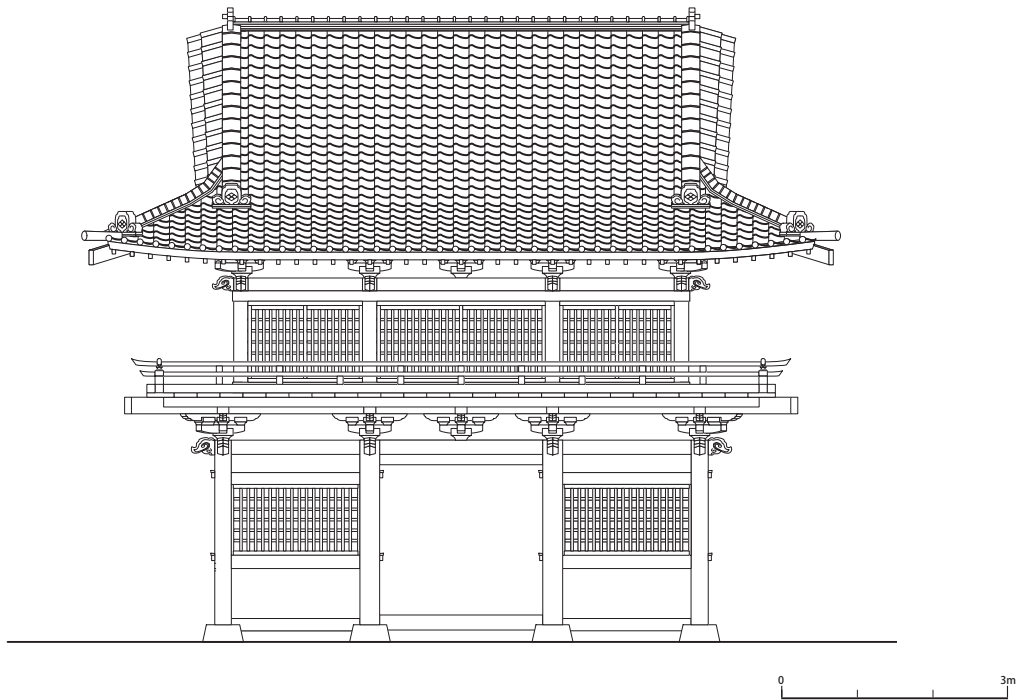
武田八幡神社 随神門 2階平面図 S=1/100



武田八幡神社 随神門 A-A' 断面図 S=1/100



武田八幡神社 随神門 B-B' 断面図 S=1/100



武田八幡神社 随神門 東側立面図 S=1/100



## Fu35 圓照寺 庫裏

建築年代：不明

住所：山梨市牧丘町室伏

梁行（間）：5.00

桁行（間）：7.00

屋根材料：瓦葺

屋根形式：切妻

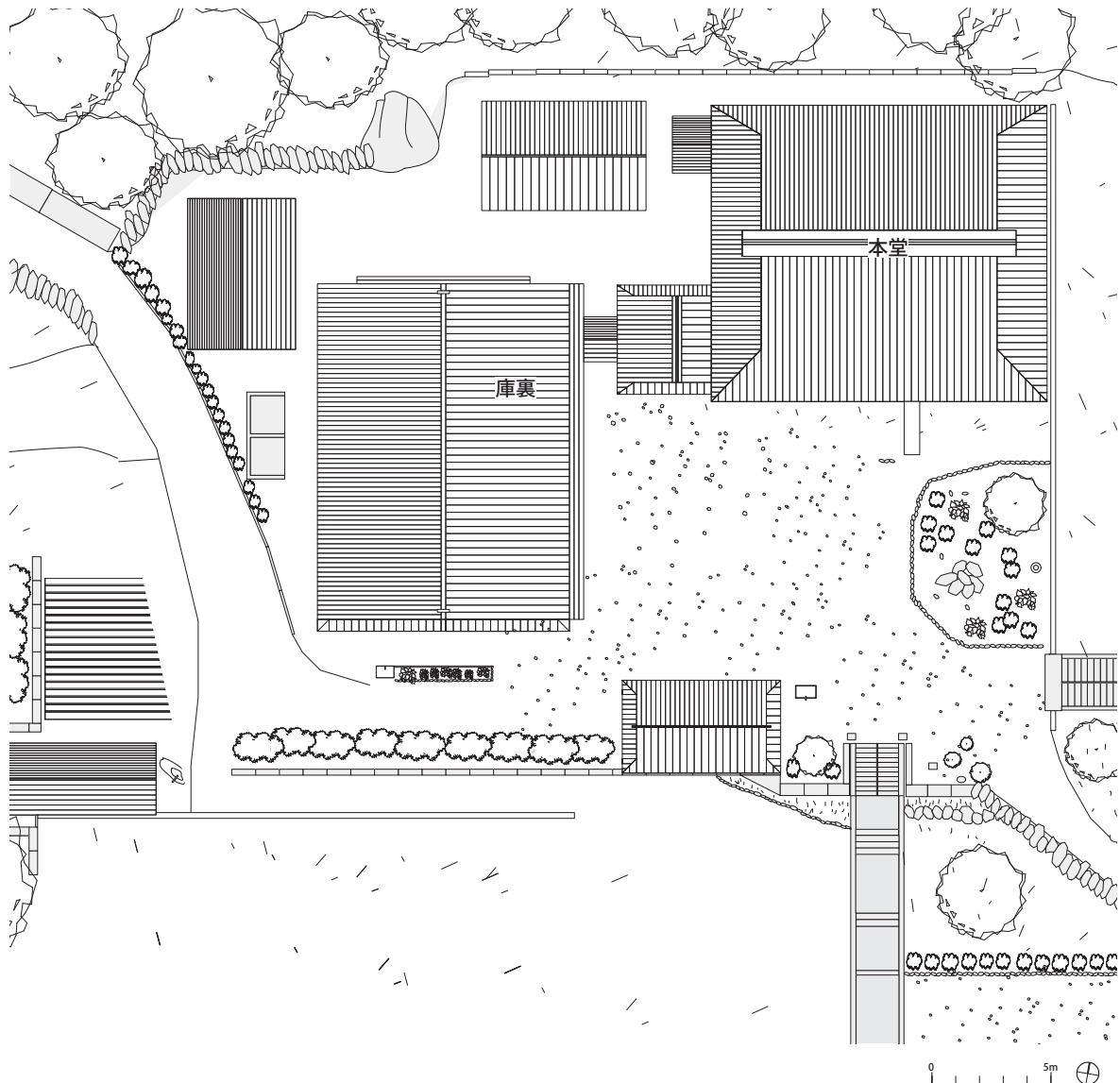
棟持柱配置：北○●○□○南

資料：不明

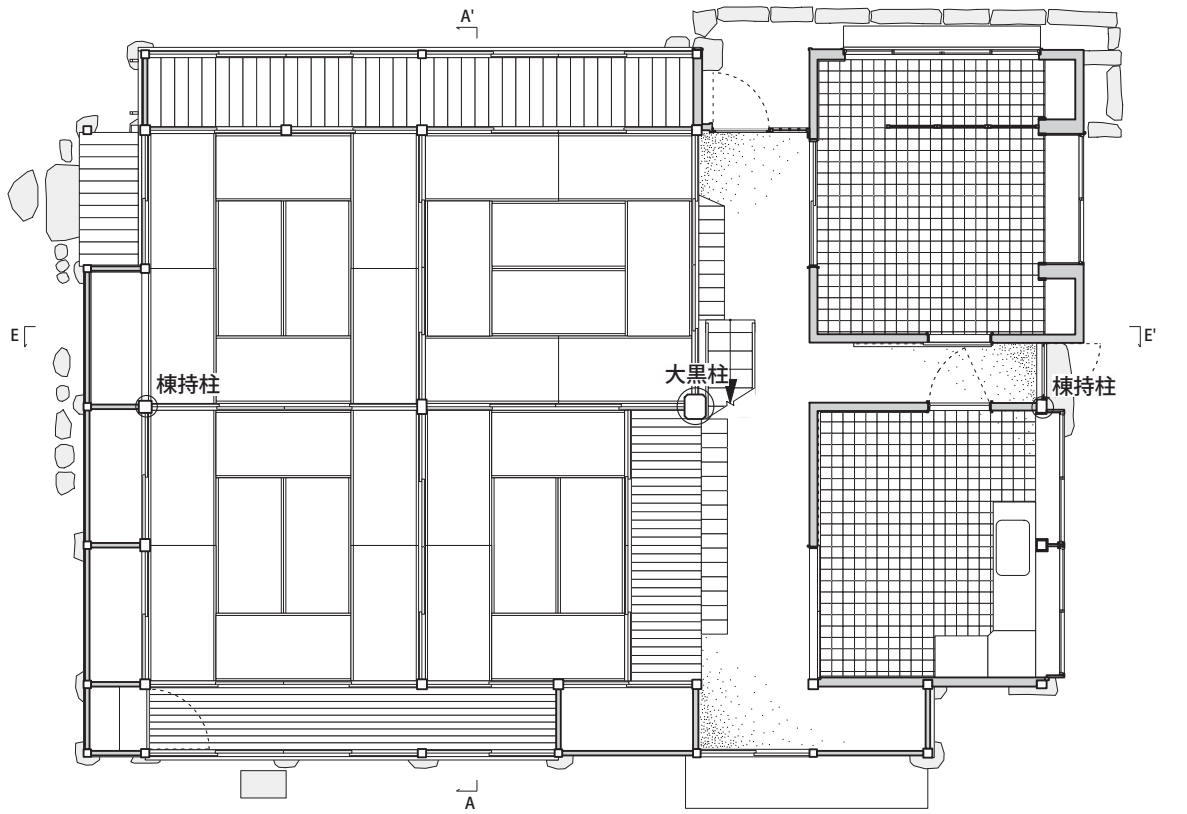
調査年月日：2011年10月14日



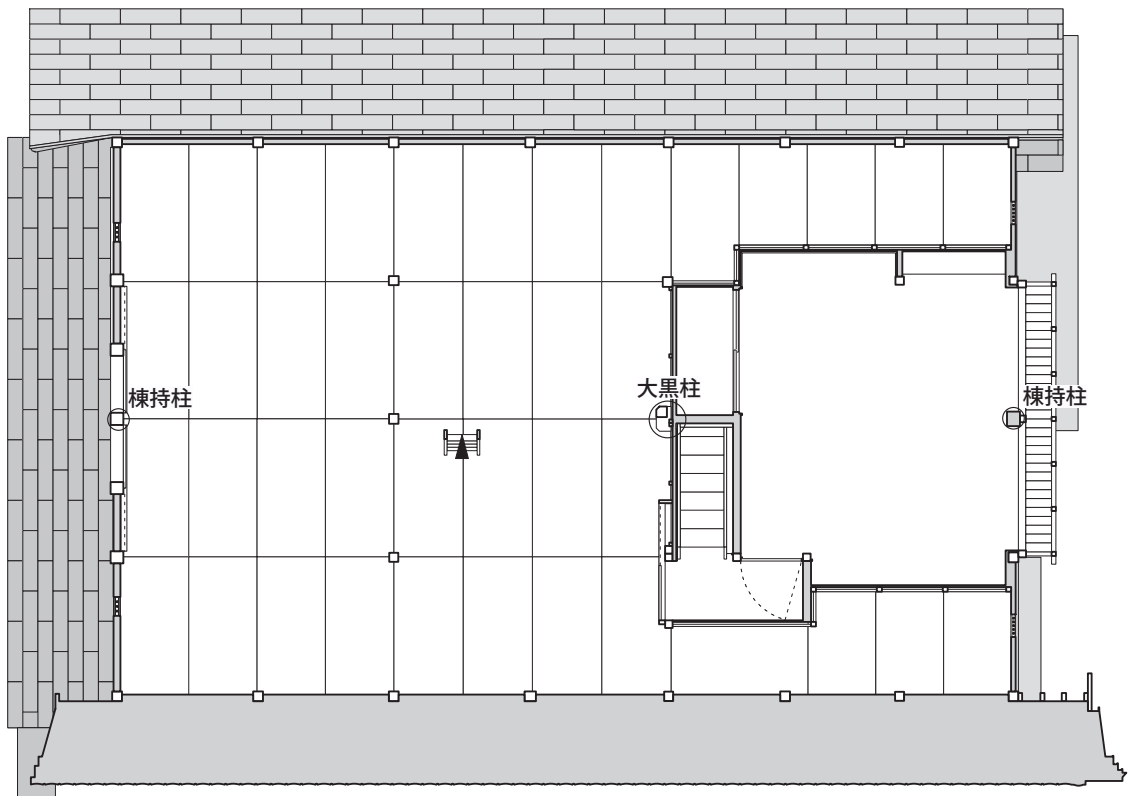
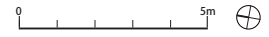
外観写真



圓照寺 配置図 S=1/300

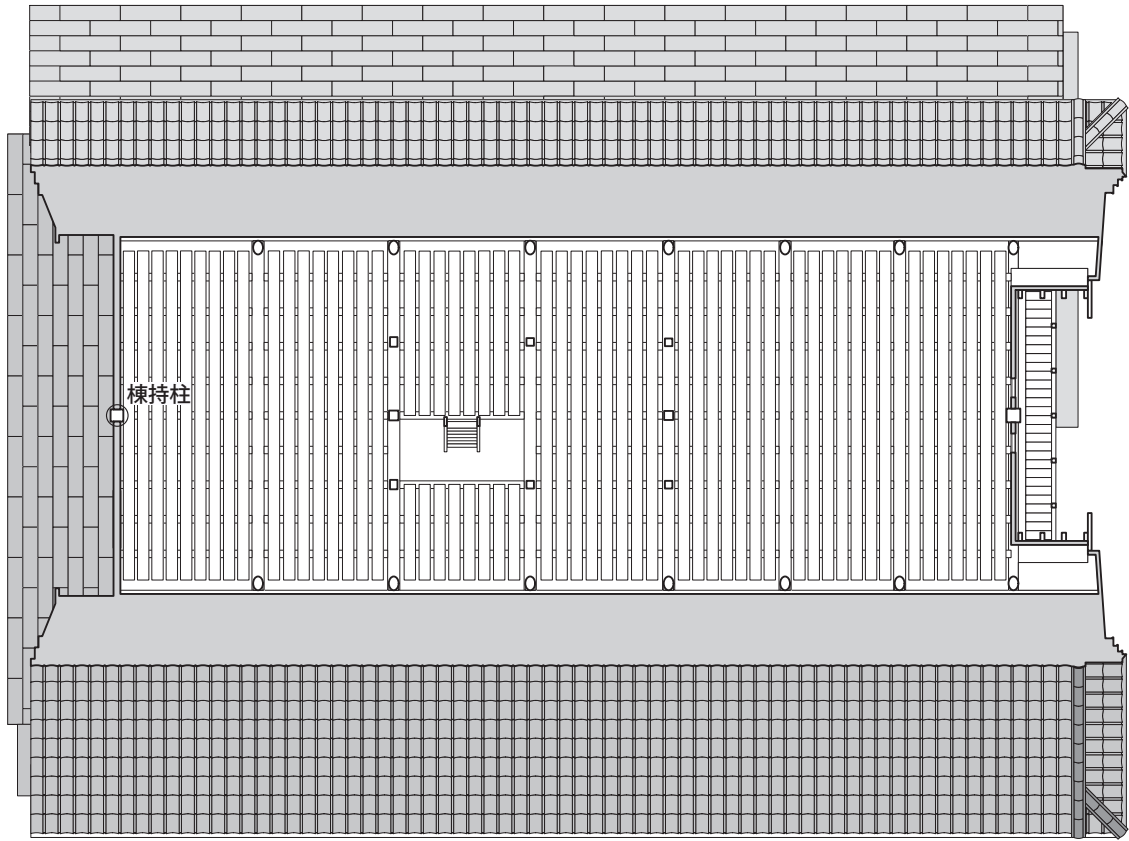


圓照寺 庫裏 1階平面図 S=1/200

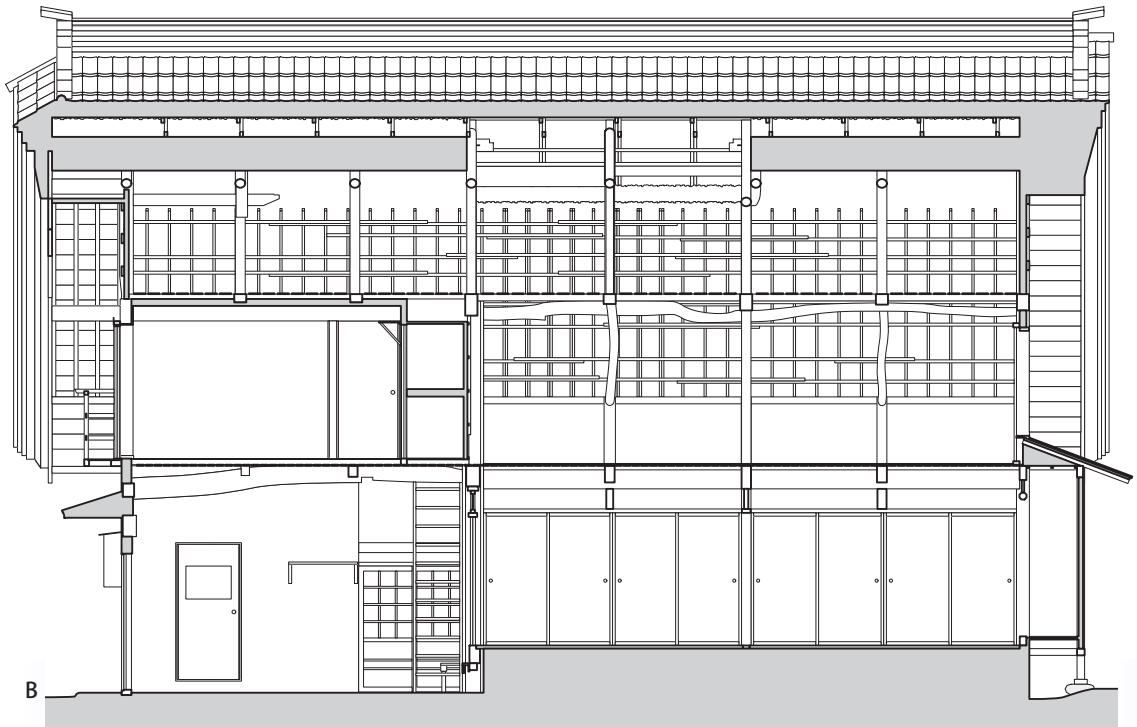
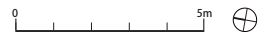


圓照寺 庫裏 2階平面図 S=1/200



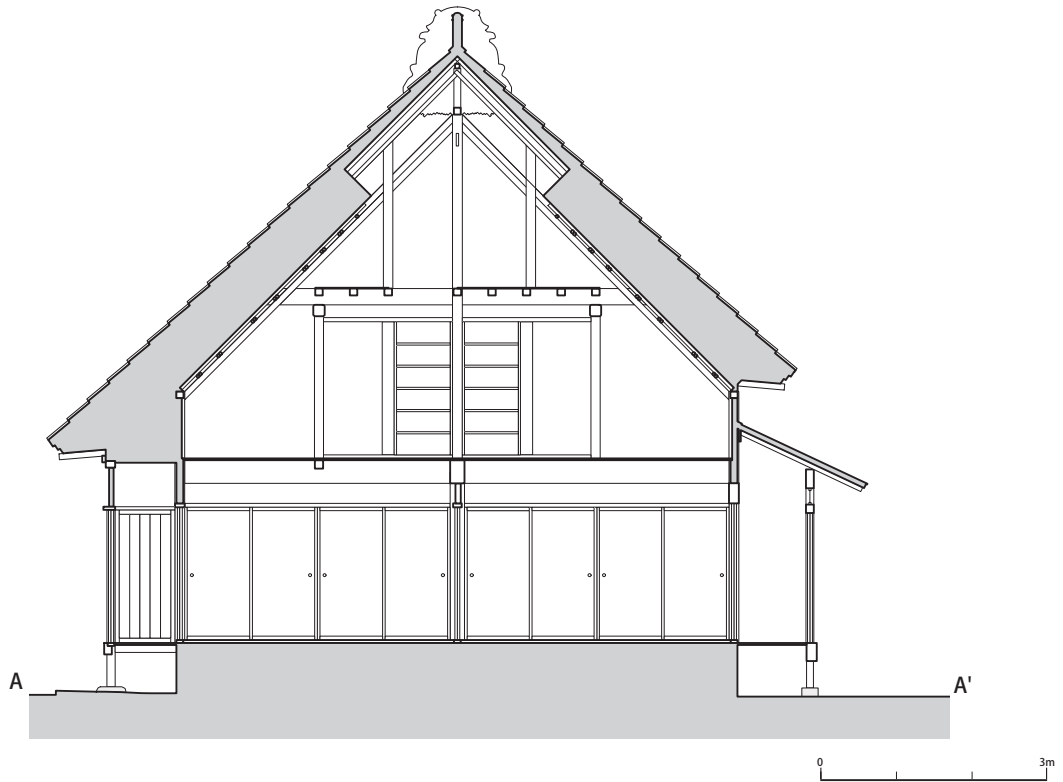


圓照寺 庫裏 小屋裏平面図 S=1/200



圓照寺 庫裏 B-B' 断面図 S=1/100





圓照寺 庫裏 A-A' 断面図 S=1/100



圓照寺 庫裏 立面図 S=1/100

## Fu36 放光寺 総門・仁王門・阿字門

建築年代：不明

住所：甲州市塩山

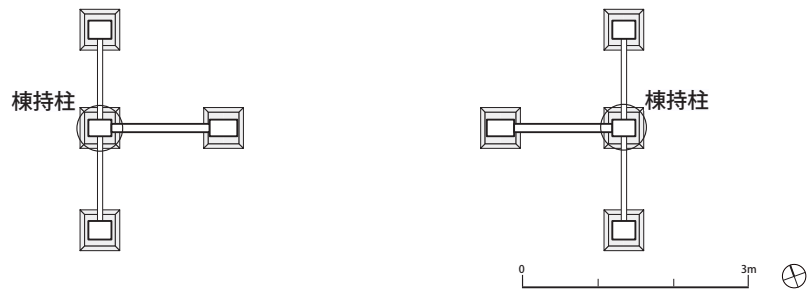
調査年月日：2011年9月30日



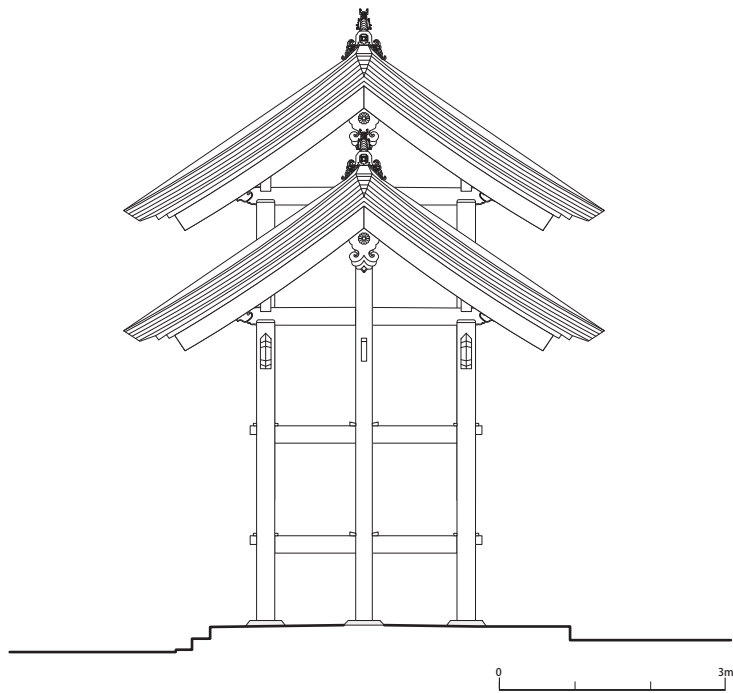
放光寺 総門 外観写真



放光寺 配置図 S=1/1,500



放光寺 総門 平面図 S=1/100



放光寺 総門 立面図 S=1/100

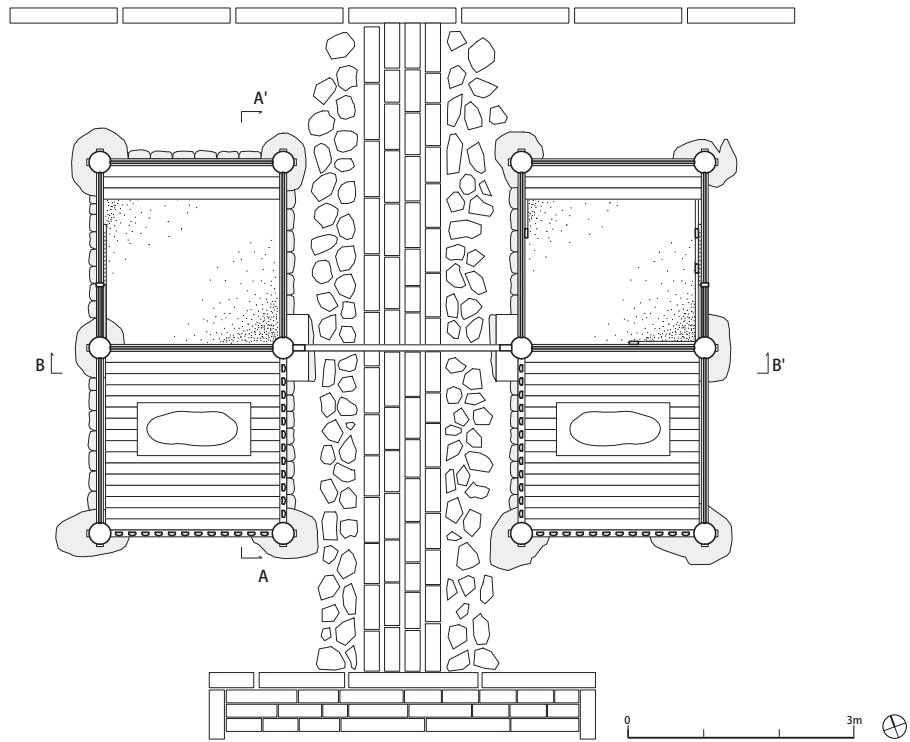




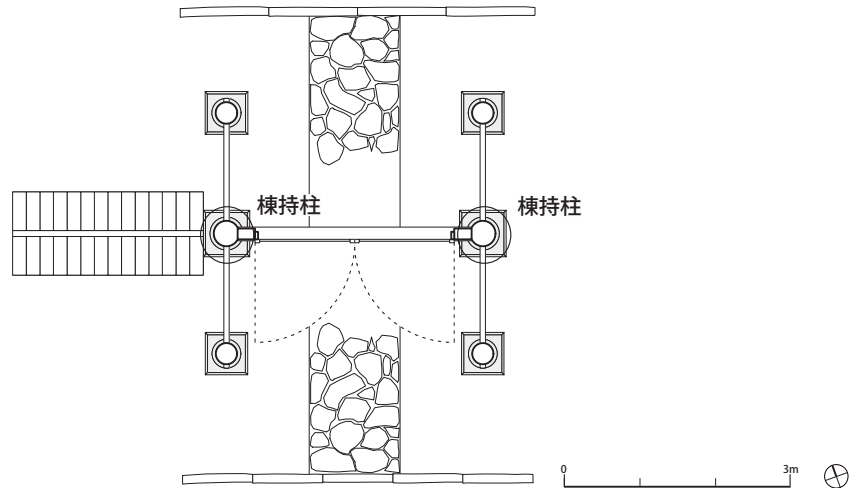
放光寺 仁王門 外観写真



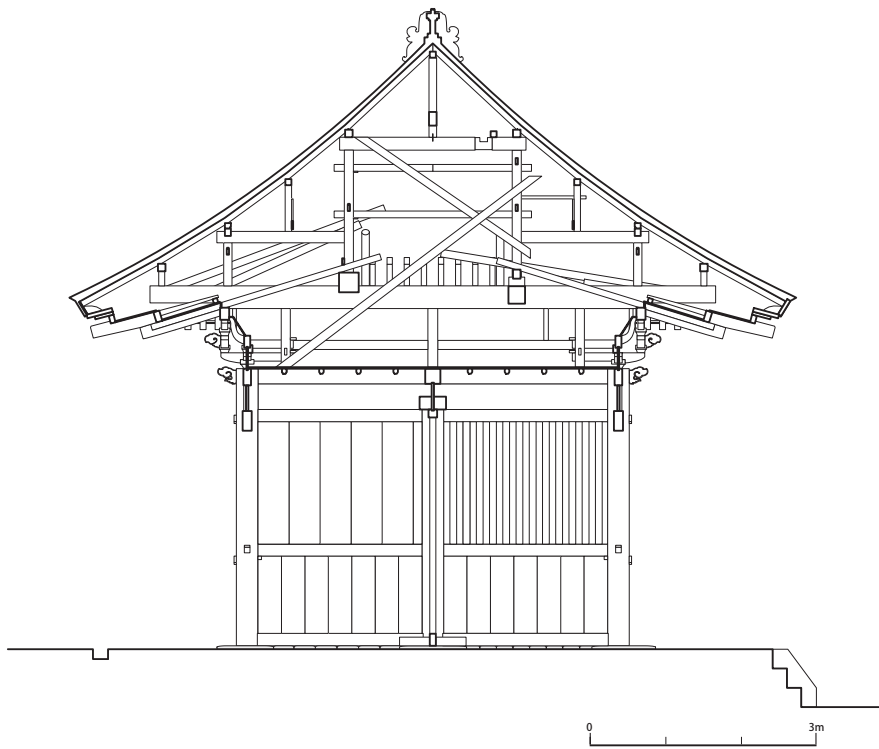
放光寺 阿字門 外観写真



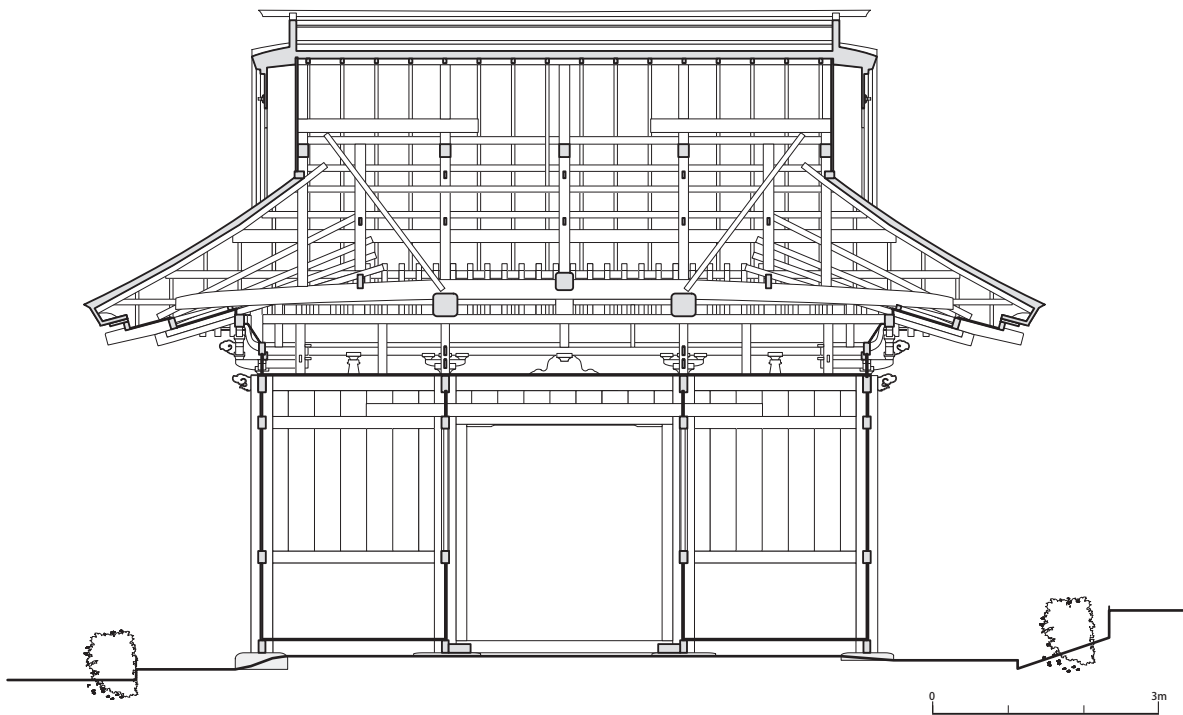
放光寺 仁王門 平面図 S=1/100



放光寺 阿字門 平面図 S=1/100



放光寺 仁王門 A-A' 断面図 S=1/100



放光寺 仁王門 B-B' 断面図 S=1/100

## 2.3.4 ヒアリング

中村太丸氏 ヒアリング調査

日時：2011年11月29日

場所：中村太丸家主屋、イドコにて

太・・・中村太丸氏

奥・・・奥様

土・・・土本俊和

滝・・・滝澤秀人

井・・・井本守佑人

土・・・座敷の下にムロのようなものがあったんですがあれはなんですか？

太・・・あのねー、おれもきいちゃいないんだけど昔ねー、養蚕をやるに、あの一、ちっさい、あの一、コガイチュウをやるに、温度をとらにやならんだだ、あのぬくまらない、さむいから、それで下でねー、火を燃やしただ。

土・・・あー、そうですね

太・・・それで、あの一、この部屋一、ぬくとめただ。

土・・・うん、あー。

太・・・そうだと思う。

土・・・あー、はい。

太・・・あー。

土・・・あー、なるほど。あー、わかりました。ええ。

太・・・そんな、そのうちにほら、かねの火鉢を〇〇なやつがでて、それで、それで炭火なんかいれてね、あの一、今度は床の上から、ぬくとめただけんど。だけんど、もた一（元は）あの下で、こーゆー太いやつをくべて、そいで、温度をとっただ一、この部屋の温度を。

土・・・それと次は、これ間取りですね。今ここにいます。これが2階。

太・・・2階？

土・・・2階ですね。

太・・・あー。

土・・・これ断面図。

太・・・あー。

土・・・こーなってます。

井・・・横の妻面で。はい。こっちからこーみてる絵です。

土・・・むこうの断面図。

太・・・むこうの。ほー。

土・・・んっと。これが？

井・・・これが大黒柱の部分を土間の方からこっちにみえます。

太・・・んー。

土・・・このあたりを、あの一、みてるんですね。断面図、えー。これ土間どこだっけ？これ土間？

井・・・そうです。

土・・・これ土間で、ここが台所ですかね。で、ここどとまっているのね？

井・・・そうです。

（中略）

太・・・こんなところにこんな建物があるなんてゆーことよくわかったじゃん。

滝・・・はは。

土・・・だれが？

滝、井・・・報告書...

土・・・えーっと、報告書があって、えー。

滝・・・あの一、前の上条集落の

太・・・あー

滝・・・報告書、冊子、うすい本があったじゃないですか。あれをみて、報告書のなかに、こちらのお宅が一番古い

太・・・うん

滝・・・お宅とゆー風に書かれていたんで、それから興味を、ええ。

太・・・それじゃあ、あの本をみて？

滝・・・はい。

太・・・ほー、ほーけ。〇〇、わからんだあ。

滝・・・はは。

（中略）

奥・・・甘草屋敷はすごい柿があるじゃないですか。

土・・・あの一、昨日からきてまして、坂本家住宅っていう県宝があるんですね。

奥・・・えー、どこですか、それは？

土・・・えーっと、んー、山梨市...

井・・・牧丘です。

滝・・・三富。

奥・・・三富？

滝・・・ええ、昔の三富村なんです。

奥・・・三富の坂本さん、坂本宅ってゆーところもいつてきたんでって、三富。

太・・・んー？そりゃ、みるだと？

奥・・・いつてきたんだって。もー。

太・・・ほー。そりゃ、うちがあるら。三富。

土・・・ありますね。

太・・・えらい山んなかから。

土・・・山のなかです。

太、滝・・・ははは。

土・・・えらいやまのなかだよ。

滝・・・ほんとに山のなかです。

太・・・ほいで、あれだ一、途中でえらい金でも儲けれ

ば、建物なんかあたらしいうちにつくっちもう  
だけ一ど、金がないから、つくりけーすことが  
できんだわ。

奥・観光地でもないしね。山間部だから、果物もね、  
やっぱりあの牧丘、山梨の方へいけばね、あ  
の、土地もいいし、果物がいいんですけどね、  
このへんではやっぱり日照時間も短だろうし、  
あの一、土地もね、土も肥えてないでしょうから。  
つくるものもかぎられてるからね。

太・あー。

(中略)

土・昔はもー全部歩いて移動でした？車がないとき  
は。

奥・もちろん。塩山まで歩いたんです。昔は塩山まで  
歩いたんでしょ？

太・そうさ。歩いたさー。

奥・塩山の甘草屋敷の駅まで。

太・道が悪いんだけど、いまみたいに舗装になっ  
ればね、いいけど、ほーだなー、土道で、○  
○、河原みたいなどこ。

奥・私が学校へいってるころも、アスファルトじゃな  
いんで、土の道だから雨がふると真ん中を水が  
こー、流れるから、道路がこーなってるん  
ですよ。V字型に。

土・そうですか。へー。

奥・いつもそこに水がながれちゃうから、だから、  
そーゆー感じでしたね。

土・へー、じゃあ、山道だね。

奥・そー、あの集中してそこにみんな。

滝・ふーん。

奥・それでも私たちは、○○バスがでていた。

滝・そうか、バスか。

奥・で、9月からバスが、今度はお堂の  
とこまでバスが、○○デマンドバス  
っていって。

滝・あー、やるんですね。

奥・電話予約で。

滝・どこもそーなんですね。

奥・300円。300円で、予約ですねだから。し  
ょっ  
ちゅう乗る人はいないわけだから。

そのお堂までくるようになったんですよ。

滝・ふーん。

奥・9月から。

滝・へー。

奥・9月だか10月から。10月かな？小田原橋に  
でるだ  
けでも年寄り。

滝・大変ですよー。

奥・大変ですねー。いま、自分で車でくだ  
っても、バ  
スなんかめったあつたことない。

滝・はは。

奥・きっと、朝晩だけ学生がいるから、

土・あー、学生。

奥・ねー。朝昼晩だけ、でてるのかなー、  
わかんない  
けど。

(中略)

土・それで、もうひとつ断面図。

井・そうですね、はい。

土・で、もうひとつ、これがつきあげた  
ところ。屋根  
が高くなっているところ。

滝・ちょうどこの部分

太・ほー。

滝・はい。この部分です。

土・これ一番むこうですか。

井・そうです。はい。

土・それと。今度こっち側、こーゆー風に  
切った図  
面なんですけども。

土・それで、あの、せっかくですから、  
とっとい  
ていただければ。

滝・ははは。

奥・はい。

土・それで、また、あの一、これみなが  
らお話を  
お伺いしたいんですが、ええ、えーと、  
どこ、  
あの一、養蚕で、えーと、ここの床をつ  
くった  
ってゆーよーな話は、聞いたことはあ  
ります  
か？

奥・ここですか？この部分ですか？

土・ええ、これは最初からですかね？2階は。

奥・2階は最初からあつたかってこと  
ですか？

土・ええ。

奥・2階は最初っからあつたもので  
すか。あ  
とからつくれたかどうかってこと？

土・ええ、養蚕のときにね。つくれたか...

奥・養蚕をするために2階をつけた  
のか、それ  
とも最初から、最初からあつたのか。

太・こっちのへーらんとこは、前  
からだ  
けど、ここの一、煙出っというんで  
けん。

奥・3階になつてる部分？

太・ここは、こーゆー風に、な  
つたも  
んずら。

土・ええ。

太・平の、養蚕をするためにそこ  
をあ  
げた。

土・じゃあ、あげたと。

太・養蚕のために。

奥・3階は、じゃああとからつ  
くれた  
の。

太・あー、後から。ありゃー、  
後から  
つくれた。

奥・ふーん。

土・で、この2階は、最初から  
ですか？

太・そこねー、さげたという  
だけ  
けど。

土・さげた？ええ。

太・そんだけけど、この大黒にも  
穴が  
あるじゃん、

でっかい穴が。  
土・うん  
太・あれが、いってる穴がね。  
土・下げた？ええ。それは、あの一。  
太・そんだから、それだけさげったちゅーけんど、  
　　こんだけ〇〇。  
土・うーん。下げたんですね？  
太・下げた。  
土・うーん。ちょっとあんまりかんがえていなかった  
　　ので、ええ。あの、みなきゃならないんで。  
奥・下げたってゆーのは、あの一、2階全体を下げ  
　　たってこと？  
太・うーん。  
奥・低くしたの？  
太・低くしたちゅー...  
奥・すべてがさがってるってこと？  
太・うーん。そうおもうだわ。  
土・うーん。  
滝・それはどなたから聞きました？  
奥・お父さんのときやったんじゃないんでしょ？  
太・そーじゃない。  
奥・もっと前の人が...  
太・あー。前ー。  
奥・先祖がやった...  
太・前の人が一、やったてこと...  
土・そっか。ちょっと、わたしちょっとあと30分く  
　　らいしかいられないので、先にちょっとみさせ  
　　ていただいて...  
奥・ええ、どうぞ、どうぞ。  
土・それで、彼らはまだ、入れるので。すいません。  
　　私ちょっと、すいません。  
滝・先にちょっとみさせてください。

(2階見学)

土・で、そのあとまた学会に論文だしたいと思うん  
　　で。  
奥・ええ。  
土・えっと、あの、図面を、学術的につかいますけ  
　　ど、ええ。  
奥・こちらの方が  
太・うん  
奥・なんだっけ？  
土・修士論文  
奥・大学の修士論文にこれをまとめて提出するんだっ  
　　て。  
太・うん  
奥・この調査した、この資料をね  
太・うん  
奥・そしてその後、こちらの、先生が

土・建築学会  
奥・建築学会で、発表するのかな？  
土・そうですね。  
奥・これをつかいますって。この資料をつかわせてい  
　　ただきますって。  
太・うーん。  
土・よろしくお願ひします。  
滝・この、これ後からの柱なんですよ？  
太・ええ？  
滝・この柱は後からつけたしの柱なん...  
太・後から入れたもんけえ  
滝・後からっていうお話、おじいさんがおっしゃって  
　　いたんじゃないかなって  
奥・どの柱の部分ですか？  
滝・この、太い、一番太い柱...  
奥・大黒柱は後から入れたものですかって。  
太・わからんなあ。  
滝・ええ。  
太・後からこんなもん入れて、梁なんとおすことでき  
　　るんかね。  
土・それもねえ、なかなか、ええ。えっと、さっきみ  
　　てきたんですけどね。いろいろ穴がのこってた  
　　りして。  
奥・ええ。  
土・もしかしたら、あの一、昔は、ここまで通って  
　　て。  
奥・おじいさんが言うには、そうゆう表現だと思っ  
　　てすよね。要するに家自体が上に高かったんじ  
　　ゃないですか。それを養蚕をするために不都合だ  
　　から、このくらい、このくらい低く下げて、下  
　　げたって言ってますよね。  
土・じゃあ、ちょうどこれくらいですね。これ何メー  
　　ターなの？これで2メー...もうちょっとか。  
井・1400...200くらい  
滝・下げたってことね...  
奥・養蚕をするのに高すぎて不都合だから、下げたっ  
　　て意味だと思っただけですけどね...  
奥・でそれは自分の代でやったのではなくて、もっと  
　　先祖がやったので...  
太・こりゃあ、後から養蚕するに、やったもんふあ、  
　　こりゃあ。、こりゃあね、こりゃあ、こりゃ  
　　あ。  
滝・これですね。  
太・もとは、つくったときはこーゆー、ここだけのや  
　　つがのっぺらぼうのこー、屋根だったずら。  
太・こりゃあ、あとからやっただ。  
奥・屋根がもっと、あの一、こっちもそうですけど下  
　　までずっとあったんですね。  
滝・ふーん。  
奥・で、それを切って、この高さにして、要するにガ

ラス一枚、外側で、ね。  
滝・うーん。  
奥・あの一、外、障子より外側の方に。  
太・これが長くてね、  
滝・うんうん。  
太・まっずっと長かったなあ。  
土・そうですか。  
太・そいだけんど、草屋根だから、雨で、すぐに屋根がこわれてもうだ。そいだけん俺んきったからあれだけんどね。  
滝・うんうん  
奥・切った部分に、ちょうど...  
太・こいだけけど切って、ここへ、あれをたしただ。ほいだで、あの一。  
奥・だから、出入りなんてゆうことはできなかつたんですね。あの一、ガラスがはいってなかったわけだから。  
土・うんうん。  
奥・こーゆー風になって、その下がちょっと土壁かなんかになってたわけですから。  
土・屋根の茅はどこから運んできたんでしょうか？  
太・昔はきつと茅だったんだけんどね、自分で茅とるんがえらいから、あの一、小麦のから、  
土・小麦？  
太・うん、小麦のから、あれで葺いただねー。  
土・うーん。  
太・だけんど、あんなもなー、すぐに腐っちもうだよ。茅じゃ、いくぶんももつけんど、あの一、あれなんかじゃ、小麦のからなんかじゃ、やっこいだから、すぐに腐っちもうだよ。ほんだから、うちじゃあね、毎年屋根屋さんをいれてね、そいで屋根を葺いてたんだけんど、毎年降って、雨が。  
滝・うーん。  
太・ほいだから、そのたんびにあーゆー、バケツかなにかもってっちゃあ、2階へ  
奥・相当な量の、あの一、麦わらですよ、要するに。小麦の麦...あの一、こー筒になったストローみたいなそれを、ずーっとあっちのお堂のほうまで、こー、ずーっと干して  
滝・ほー、干して...  
奥・そうしないと湿気があると腐っちやうじゃないですか。干して、保存しといて、その屋根を、屋根屋さんに葺いてもらうんですね。  
土、滝・ふーん。  
奥・で、その一、職人さんもないですよ、今は。  
土・うん、いないですね。  
奥・そう。その当時、50代くらいの職人さんが、昔ね、私がいた頃は、その職人さんが、一年に一回くらいきてたんですから。

土・あー、それは大変...  
奥・半端の量じゃないですよ。この、全部、全部葺くんですから。あの一、ある程度の厚みを葺く、あの一、つかうわけじゃないですか。うすくならべるんじゃないから...  
どのくらいの厚さ新しく葺きかえてたんだっけ？  
太・なにが？屋根の...  
奥・屋根の厚みを。  
太・えー、あー、厚みなん、まああれだわ。こんなにあったよ。  
奥・あったけど、全部葺きかえるんじゃないでしょ？上の方の、例えばこのくらいを新しくするとか。そうゆう感じだったんでしょ。  
太・うーん、あの一。  
奥・屋根自体はほんとにこんなにあったかもしれないけど。  
太・前の、あれに残ってるね一、下の方に、葺いてあるやつは、そのまんまね一、つかっただ。上の方は全部腐ってるから、全部駄目。  
奥・上を全部かきおろしちゃって、そのある程度の、かなりの厚みに葺いていくんだよね。  
太・そーだ一、こんなに葺くだ一。  
奥・そーだよ一。だから、もー半端じゃ...私たちが子供のとき、その一、夕立がしてくるっていうんで、その一、干した藁を...  
滝・なかに？  
奥・そう。集めるのにつかわれましたね。うふふ。お堂の方まで、ずーっと道路。  
土・へー。  
奥・道路、ばーっと干しとくんですよ。こー、通るところへは干せないから、こー、土手みたいなどころにずーっとたてかけて  
滝・ふーん。  
奥・だーっと。  
滝・へー。  
土・すごいな。  
奥・量が半端じゃないから。  
土・近くで麦をつくってたんですか？  
奥・自分の家でもつくってたし。麦わらはうちのだけじゃたりなかつたんでしょ？  
太・たりん。よそのを買っただ。  
土・あー、買う。あー。  
太・よその麦から買って、それを干して、つぶをおすよりね一、そのからを干すほうがさきだ。  
土・へー。  
太・幾軒からもね一、毎年買って、  
奥・今言うには、こんなに新しく葺きかえるわけだから、その一...大変。  
太・ためといて、それを屋根屋さん、あっちの、身延のほうから職人がきて、すごいあっちから。



土・身延。  
太・団体できてただよ。職人が。  
奥・でも、うちに来る人はいつもひとりだったじゃない？  
太・えっ？  
奥・一度に何人もくるわけじゃない、その人たちがほうぼうへ行ってるってことでしょ？  
太・そうそう、うーん。  
奥・みんなそうゆう屋根だったから。  
滝・ふーん。  
太・そんなに、全部、葺きかえるわけじゃねーから、ひとくぎりだけ、今年葺いたら、今度来年はここ。そして、またむこうってゆう。幾年にいかに6年か、なんぼかかってまわるだけんど、もつと前に屋根が腐ともうだよ。  
滝・うーん。  
太・うん、だから、屋根じゃあ、苦労しただー。  
滝・ふーん。  
太・ほいで、まー、終戦後になって、とてもかなわんから、トタンをね、  
滝・うーん。  
太・トタンをかけたんだけんど。  
滝・ふーん。そっかあ。  
滝・これちなみに床下の...  
土・床下、で、いまここ、ここに、この、真ん中の筋ですけどね、ここに柱があるんですけど、昔、ここに柱があったような、石が、そこですかね、ええ、ありましたので。  
奥・あー、そうですか。  
奥・多少はいじってあるってことですね。そこに...  
土・そうだと思います。  
奥・そこに跡があっていまはないってゆうことは、多少は、動かしたとゆうか、そういう形式があるって...  
滝・あると思いますねえ。  
土・それで、あの一、間取りが、畳できまるんですね、これ、これだと8畳とか、ええ。  
8畳とか、そうすると、この畳の大きさに、こう、柱がないといけないので。  
奥・ええ  
土・だから、ちょっとよせてですね、畳にあわせてって理解が一番いいと思うんですけどねえ。  
土・で、ここが昔、石積み、え、今も石積み？  
奥・そこはねえ、あの一、うらはなにだけっていの？こうゆう下の方がこー、太さがこんなもので、したの方がこう、節になっていて、モウソウダケっていうのはなにダケっていの？うらの。  
太・あれは、なんていったんだっけなあ。ハチクとあったか...  
土・ハチク  
太・ハチクってあのねえ、さきの方までこう、うんとしなっておれんだよ。  
奥・釣に...  
滝・釣ですね。  
太・釣の竿になんてって、もらいにきたあ。  
土・ああ、もらいにきた。へー。  
太・釣の竿にするに。うらっぼ一の細いところまん、これが強いだよー。くじけんだー。  
奥・折れない...しなるっていうか。  
太・ほんだからねえ、魚釣る、竿に  
滝・ふーん  
太・毎年ねー、あの一、幾人ももらいに來ただよ。  
土・へー。そうですか。じゃあそこで、ななめのとこに竹がはえてた？  
奥・ずーっとそこが、土手になっていて、ずーっと竹やぶというか、  
土・道はなかった？  
奥・道はあったんですけど、あの、台風がきて、それで、こう土木工事がはいつて今の状態になったんですね。  
滝・昔はじゃあこんなまあ細い道が普通にとおってて？  
奥・そうそうそうそう。  
滝・ふーん。  
土・そうゆう道だったんですか？  
奥・ええ。  
土・はあ。  
奥・もう、要するにコンクリートの道とか、そんなの石垣とかなかったですもん。全部土手だったから...  
土・ああ、そうですか。  
奥・後ろのあっちの畑の方も全部土手。  
土・ふーん。  
奥・で、竹だったから、こう、根がはってたからこう、くずれもしないで、丈夫だから。  
土・丈夫ですねえ。よかった。  
奥・ねえ。だけど台風の災害の工事がはいつて、全部いまのようにアスファルトの道とかねえ、アスファルトにするときに...  
土・台風はいつ頃の台風？  
奥・7号台風。  
土・7号台風っていうと...  
奥・生まれる前かなー、私が小学生のころだから。昭和42年かな？知らない。  
滝・あー。  
奥・7号台風ですよ？7号台風だよ？このへんがすごく荒れたのが。  
太・なんですと？  
奥・台風。

太・・台風？  
奥・・うん。7号台風だよね？  
太・・なんか...しらんわ。  
奥・・私が小学生のころ...  
太・・伊勢湾台風...昭和34年...  
奥・・34年だって。  
土・・34年？ああ。  
太・・昭和34年の台風。  
滝・・ふーん。  
奥・・そのときはすごかったんです。あの小田原橋...  
太・・うん  
奥・・あっちが流れちゃって...  
太・・流れちゃった。  
奥・・流れちゃって...  
滝・・ああ。  
太・・幾軒も流れただあ。かわっばたにうちがあるうちは。  
土・・うちが流れた？  
奥・・家がない死亡者もいっぱいでしたし...  
土・・そうですか。  
太・・それで、いまの、今度は国でやっただあね。  
滝・・ふーん。  
土・・それで、あの、昨日車で走ってて川のまわりにちょっと古い建物がみれないところがあったんで、台風で流されたのかもわかりませんねえ。  
滝・・ああ。  
奥・・すごい、とにかくすごい台風だったんですよ。  
滝・・あれ、なんだっけ、『塩山市史』かなんかに書いてあって、それはいつの災害だったかわかんないですけど、家がずいぶん流されて、2間、3間くらいの小さな家が、流されてたって書いてあったのはみた...それがいつの、その台風...  
奥・・家が2軒、3軒なんてもんじゃないよねえ？もって流された。そんなもんじゃないです。  
滝・・いや、大きさが...ほんとにそんなにおおきくない家が...  
土・・ちっちゃい...  
滝・・2間、3間くらいの規模の...  
奥・・あの川沿い、全部ながされたんだよねえ、むこうの。  
太・・全部っちゅうんでもねえけど、  
奥・・2軒や3軒なんてゆうそんな規模じゃないよね。  
太・・うーん。  
滝・・それはもっと昔のあれかな。  
太・・えらい幾軒も流れて、人間も流されたり、馬も流されたり...  
奥・・橋が流れちゃったんだから...おおきな橋がねえ。  
土・・ああ、そうですか。  
太・・橋が、橋がだいたいながされちゃったんだけんねえ、

奥・・学校へいく橋もみなながされた。  
太・・動くことができんだあ。だから山道を通して、塩山に用事があればねえ、いっただ。  
土・・ああ、そうですか。あらま、大変ですね。  
奥・・このへんも、山の奥の方が、山が土砂でくずれて、土砂崩れになって、あの一、うちの、この一、うちのむこうにもう一軒家があるんですけど、そのむこうに川があるんですね。そこを、もうだーっと全部なぎ倒して、すごかったんですねえ。  
土・・危なかったんですねえ。  
滝・・へー。  
奥・・うーん。それが34年ていま言ってましたね。  
滝・・うーん。  
土・・すいません、どうもありがとうございました。  
滝・・ありがとうございました。

## 謝辞

本論文をまとめるにあたり、多くの方々にご指導、ご協力を賜りました。

まず、学生時代より長年に渡ってご指導を賜りました信州大学工学部教授 土本 俊和 博士に感謝の意を表します。ふりかえると、修士1年のときに土本先生から誘われた山梨県内における棟持柱構造の民家調査が、私の研究のはじまりであるとともに、現在の職業（市役所）を選択するきっかけともなった調査でした。社寺や民家など数多くの貴重な歴史的建造物を調査するなかで、土本先生からは多くのことを学ばせていただきました。また同時に、先生と調査するなかで、急速に失われつつある歴史的建造物の現状を目の当たりにし、その保存や活用について真剣に考える機会ともなりました。ここに重ねて感謝申し上げます。

また、本論文の審査にあたりご指導を賜りました信州大学工学部教授 浅野 良晴 博士、高木 直樹 博士、五十田 博 博士、信州大学工学部准教授 早見 洋平 博士、横浜国立大学准教授 大野 敏 博士に、厚く御礼申し上げます。

山梨県内の調査にあたっては、フィールドの選定をはじめ、研究室の先輩である山梨県職員 遠藤 由樹 氏に多くの助言と協力をいただき、山梨県内の社寺建築の調査にあたっては、甲州市教育委員会生涯学習課 飯島 泉 氏、雨宮 亨 氏、小野 正文 氏、山梨市教育委員会生涯学習課 三澤 達也 氏、南アルプス市教育委員会文化財課 斎藤 秀樹 氏、韮崎市教育委員会教育課 間間 俊明 氏に協力をいただきました。また、建物の実測調査やヒアリング調査では、所有者の方々から、あたたかいご協力をいただきました。ここに深く感謝いたします。

本論文に掲載する山梨県内の社寺および民家の実測図面等は、信州大学工学部土本研究室の研究活動の一環として、多くの後輩らの協力によって作成することができました。とくに、ともに棟持柱構造の研究にはげんだ島崎 広史 君、井本 守佑人 君、奥野 隆史 君には、図面作成等で多くの協力をえました。また、社会人学生である私が、こうして研究を進めていくことができたのも、職場である長野市の理解と協力があったからこそのものでした。とくに、博士課程の3年間は、私の所属する長野市都市整備部まちづくり推進課の方々に、多くの協力をえました。ここに感謝の意を表します。

末筆になりましたが、本論文は、家族の協力がなければ到底成し遂げられるものではありませんでした。とくに、社会人である私が、ふたたび大学で研究する機会をえることができたのも、妻の理解と協力によるところが大きくあります。この場を借りて感謝の意を表します。

滝澤 秀人



棟持柱構造をもつ建築遺構に関する実証的研究

---

信州大学 博士（工学）論文

発行 平成25年（2013）3月

著者 滝澤 秀人

印刷 U-POC

---

